厨川白村全集第四巻

文學評論及印象記

改造社版



小學校時代の著者

第四巻 目次

小泉先生そのほか

序

自己の文集に名づくるに平淡簡明なる適當の語を見出し得なかつた。そこで卷頭の一篇の題をとつて、これに『そのほか』の文字を添へた。かかる書名は日本に於て全く前例なきものではあるが、西人の詩集や論集に"……………and Other Poems" "……and Other Essays" など云ふに同じく、毫も奇を衒ふの意はない。『及び其他』なぞと云ふ感じのわるい言葉だけは、如何なる場合にも私は避けたいと思ふ。

十一月の中旬、本書の印刷成れる時、平和克復の報を聞いて喜びに堪へず、急遽筆を呵して『平和の勝利』一篇を作り、卷末に加へた。世界文明に一新時期を劃すべき此大戰の結末が、人類生活史上の意義の極めて重大なるを思つたからだ。

大正七年十二月上浣　京都にて

著　者　識

『小泉先生そのほか』目次

小泉先生

（近刊の講義集を讀む）

一　ラフカディオ・ヘルン

『贈從四位小泉八雲』

とかう書けば、全く知らない人は日本人かと思ふだらうが、小泉先生の血管には日本人の血は一滴も流れてゐなかつた。美しい神祕と空想との世界に生きるケルト民族の愛蘭人（アイアランド）を父とし、むかし歐洲の花やかな藝術と文明とを生み出した希臘の國人を母としたる純粹の西洋人であつた。愛蘭（アイアランド）に育ち、佛蘭西に學び、米國に人となつて、四海に家なき飄零の孤客であつた先生は、東海のはてにありと傳ふる蓬萊の國にあこがれて、今から三十年ほど前、はじめて我が日本の國土に來られた。それはハアパアス社の一通信員としてであつた。のち出雲松江中學の教師をして居られた間に、そこの舊藩士の女と結婚し、遂に日本に歸化して小泉姓を名乘られた。八雲の名はこれから出たのだ。近代英文學の史上にスティヴンソンやキプリングと肩を比べる散文の巨擘として、歐米の文壇には先生のラフカディオ・ヘルンといふ本名の方が轟き渡つてゐる。多少讀書の趣味を解し、或は苟も日本の存在を知れ

る英米人にして、先生の名を知らぬ者は殆ど無からう。知らぬのは日本人ばかりだ。教育ありと稱する邦人が英米へ行つて、かの國人からヘルン先生、――卽ち『小泉八雲』の事を訊かれてまごついた滑稽を、私は幾たびも見もし聞きもした。

ラフカディオの名は、世界最大の女詩人と呼ばれるサフォオが、望みなき戀に身を投げたと傳へられる希臘のリュウカディアの海に因める名だと聞く。またジプシイに緣あるヘルンの姓は、英語の鷺(ヘロン)と音相通ずるといふので、先生は羽織や、著書の扉に押す紋どころに、二羽の鷺を圖案化して用ゐられた。

日本を今日の如く西洋諸國に名高くしたものは、必ずしも數次の戰勝と國運の隆昌とのみではあるまい。これには先生の光絢婉美の麗筆が與つて力ある事を思はねばならぬ。見たまへ、ただ觀光を目的として來朝する英米人の十中八九までは、先生の著書『こころ』『東方より』『日本、その解釋『怪談』『日本雜錄』『骨董』『日本瞥見錄』『佛陀園拾遺』『影』等の諸作の愛讀者である、或は少くともその一二を必ず行李の底に收めてゐる人たちではないか。

朝廷が國家に對する功績を嘉し給うて故人に贈位の御沙汰のあつた時、たとひ歸化人でありとはいへ、純然たる白人を之に加へさせられた事は、未だ曾て我が國の史上に類例なき聖代の慶事であつた。先生はたとひ長く東京の大學に英文學を講ぜられたにもせよ、その名聲をして眞に世界的ならし

めたものは、矢張り文筆の人としてである。――かの俗物輩が動もすれば三文文士と嘲り、新聞屋と蔑み、遊冶郎と同一視せんとする操觚の人としてであつた。この純然たる白人の文士に向つてかかる恩典を加へさせられた事は、日本の智的文明の進度に關して西人に非常な好印象を與へた。米國の新聞雜誌は、其頃この贈位の御沙汰を特筆大書して、嘆美の辭を以て之を世に傳へた。但しそれはさきの大隅内閣時代の事である。

二　講義の上梓

今更また何を思ひ出して、また何の酔興で、小泉先生の事を書くのかと怪しむ人もあらう。私が今わざわざ禿筆を呵して先生の事を書くのは、日本の一般社會が餘りに先生を知らなさ過ぎるからのみではない。學士とか博士とかいふ一寸偉さうな人たちが、一かど日本で新しい學問をしたやうな顔をしながら、日本の文豪である先生の名をさへ知らないと云つて、外國人の前で赤恥を搔いてゐる珍談が多いからのみではない。私が十四五年前、先生の講筵に侍した頃の大學の講義が、一昨年あたりから・順次米國で出版せられ、それが彼國で非常な好評を博してゐる近來の好著である事を、ただ一言したいからである。殊に日本で贈位の御沙汰のあつたのと偶然にも殆ど時を同じうして、海のかなたで此講義出版の擧があつた事は、尠からず英語國民の注意を惹いた。

東京の文科大學に於ける先生の英文學講義は、前後約十年間にわたつた。勤勉なる先生は毎年新しい講義題目を選ばれた。今日まで既に上梓せられたのが四冊。最初のは(一)『文學の解說』一卷と(二)『詩歌の鑑賞』一卷。そして今度また新しく出たのが(三)『人生と文學』の一卷である。當時聽講の學生の筆記を集めて、今コラムビア大學の英文學教授ジョン・アアスキン君が校訂して、紐育の書肆から出版してゐるのだ。

アアスキン君は私も滯米中に屢會つたが、詩才學殖ならび勝れた少壯有爲の教授である。批評家としても詩人としても米國の文壇には廣く知られた人だけに、かの徒らに考證訓詁に耽つて、藝術としての文學に何等の理解なき死灰枯木の如き腐儒（ペダント）とは全く選を異にした人だ。私共は小泉先生の講義が世に公にせらるるに當つて、先づ最も適當なる校訂者を得た事を、衷心から喜ばねばならぬ。

先生の講義は毎週九時間であつた。英文學概論が三時間、作品講讀が三時間の外に、詩歌小說戲曲などに關する色々の題目に就いて、斷片的の講義がまた三時間あつた。先生の豐かな天分と、斷じて他の模倣を許さないその獨創性（オリヂナリテイ）が遺憾なく發揮せられ、またその特有の趣味鑑識に基づける批判が十分に聽講學生の前に披瀝せられたのは、主として此斷片的講義の三時間であつた。幸ひなるかな、このたび世に公にせられたものは即ち講義の此部分のみである。

校訂者はその緒言の中に、此講義集を嘆賞して隨分思ひ切つた事を言つた。曰く、『英文の文藝批

評としては、コオルリッヂ以後の第一人。否な寧ろコオルリッヂと雖も或點に於て及び易からざるものあり』と。アアスキン君のこの語は彼國の文壇でもだいぶ問題になつた。しかし此言葉に多少の溢美誇張の嫌ひありとはいへ、私は先生の文藝評論が、確かに詩人コオルリッヂの『沙翁講演』と同一系統に屬するものである事だけは、斷言して可いと思ふ。

北歐傳說を說き、英國の古謠を論じ、沙翁以後キプリング、メレディスに至る諸星を品隲し、さらにまた先生平素の愛讀書であつた佛蘭西の作物からは、近代のモオパッサン、ボオドレエル、ロティ等の諸作を紹介し、これらの書が未だ今日の如く日本や英米の讀書界に行はれなかつた頃に早くも之を絕東の青年學生に傳へ、西歐新思潮の歸向する所を示されたのであつた。凡てを容れんとし、凡てを迎へんとするに急なる若き人々の心に、豐麗なる英佛文學の深き興味をそそられたものは、極めて廣汎なる範圍にわたつて題目を擇ばれた先生の此講義であつた。

これらと同じ題目を取扱つた英米の評論は固より汗牛充棟であるが、此書は思想家として、また批評家としての先生獨得の鑑賞眼に映じた純然たる主觀的批評であるだけに、英米諸國に於て他に全く類例なき唯一（ユニイク）の評論である。しかし先生はこれを文藝評論として自ら筆を下されたのでもなく、況やまた之を世に公にする意志は少しも持たれなかつたのである。或人が生前この講義出版の事を慫慂した時、先生は言下に之を斥けて、「あれはまだ十回十五回の改竄を要する。よし改竄を加へても、そ

れだけの勞に値するものでは無い」と答へられたさうだ。文章に非常な苦心をして推敲改竄に細心の用意を怠らないのは、東西古今すべて皆藝術的良心ある名匠の常である。かの紅葉山人の如きは書いては直し、直しては書き、餘白が無くなつて遂には紙を貼り付けてまたその上を直すといふ有樣。其原稿紙は遂に糊のため板の如くなり、書き入れと線と、墨で消した跡とが交錯複雜して、眞に活版屋泣かせに成つてゐるのを見て、私はつくづく感心した事があるが、小泉先生は自著を世に公にせられる時、いつもその苦心は非常なものであつたと聞いてゐる。一度書き上げた原稿は數日間故意とこれを篋底にをさめ、よほど時經てのち、更にそれを取出していくたびか添删補訂し、十分意に滿つるまでは決して之を公にせられなかつたと聞く。世界を驚かしたその一代の名文はかくの如くにして成つたのである。從つて教室で爲た講義をその儘、稿本や筆記によつて上梓する事は如何なる事情のもとに於ても先生としては眞に堪へ難き事であつたらう。だから私は今此書を一個の文藝評論集として見るよりも、單に講義として評する事の正當なるを思ふのである。今もし先生を地下に呼び起して此書を示すならば、文藝批評としては先生自らと雖も意に滿たぬ節々が頗る多からうと思ふからだ。

(一) Interpretations of Literature. By Lafcadio Hearn.

(二) Appreciations of Poetry. By the Same.

(三) Life and Literature. By the Same. (Published by Dodd Meod & Co, New York)

三　その特色

批評論としてでなくただ講義として、私は今その內容に就いて思附いた二三の特徵を擧げよう。多くの點に於て先生の講義は天下一品であつたからだ。

先生はその稀世の名文を以て、我が日本の美を西人に紹介せられた第一人であつたと共に、またその趣味饒かなる講義を以て、日本の學生に正しく西歐の思想と文學とを傳ふるに最も成功した外國教師であつた。東西兩洋の間に立つ紹介者として、先生をしてその天職を全うせしめたものは、獨りその流麗明快なる筆舌と該博なる學殖とのみではなかつた。徹頭徹尾眞の世界人(コスモポリタン)たる先生の特異なる人格が然らしめたのである。小泉先生は英國人でもなくまた米國人でもなく、さればとて純粹の日本人では無論なかつた。國土や國民に執着せんとする何等の偏見なくして、足跡は世界にあまねく、到る所に美を見出して之に同情し同感し、十分に之を享樂し得る人であつた。西洋人以上に西洋を理解すると共に、日本人以上に日本を理解した人であつた。かくの如き浪漫的(ロマンティク)な人格を有つた人は、世界に於て先生ただ一人あるのみと言つても過言ではあるまい。この點に於て先生の如きは空前にしてまた恐らく絕後の人であつたらうと思ふ。

日本人が日本で西洋文學を講ずる事が至難の業であると同じく、西洋人が日本に來て西洋文學を講

する事はなほ更に困難な仕事である。外國の大學に於ける研究法——しかも舊式な研究法を其儘に應用するなぞは固より言語道斷であるが、西洋の文學評論の受賣をして能事畢れと爲す如きに至つては、學生こそ眞によい迷惑である。日本を愛し日本を研究し、日本婦人と結婚せられた先生は、松江中學や熊本五高に教鞭を執られた長い間の經驗に徵して、日本人の物の考へかた、物の觀かたが西人と全く異なれる點を十分に理解せられた。此經驗と此理解とを以て、先生は東京大學の英文學講座を擔任せられた。そして日本人の詩觀、日本人の思考法に適するやうに英文學を說かれたのであつた。試に此講義集中の如何なる一章をでも通讀せられよ。これは日本人の爲に、日本人の美感に訴へようとして說かれた西歐文學の講說だといふ事が、特に際立つて讀者の注意を惹くのである。

たとへば耶蘇教を信じなければ英文學は解らないやうに言ふ人がある。殊にこれは西洋人の口癖の言ひ草だが、先生は決してそんな野暮な事は言はれなかつた。先生は聖書（バイブル）が偉大なる宗教文學であること、殊にジェイムズ王欽定譯の英文聖書（イングリシュバイブル）が沙翁劇に次ぐ文學上の大作である事を、諄々として私どもに說かれた。しかし宗教的に之を見る事は必要でないと斷言せられたのみか、そんな考へ方をする事は、文藝作品の優秀を理解するには邪魔になるだらうとまで極言されたのは面白い。（講義集『文學の解說』第二卷第三章『英文學に於ける聖書』參照）。先生は學校へ通勤するとき、わざわざ迂回してまでも耶蘇教會のそばを通る事を避けられた程に、耶蘇教嫌ひであつた。

十五六年前、大學の講堂で先生の口から聞いて、それ以來不思議に私の頭にこびり附いてゐる批評は、十七世紀の詩人ロバアト・ヘリックが花鳥風月を詠じ、物のあはれを歌つた詩篇を說いて、これは漢詩や和歌俳句に最も近いものだと言つて比較された事だ（同上、第七章參照）。私は今でも先生の此說には十分の贊意を表するものであるが、日本で英文學を說く外國教師でこんな講義振をする人は先づ滅多に無からうと思はれる。

作品や詩人の批判に關する微細なる點にわたつて、一々かういふ例を擧げれば際限は無いが、この東洋趣味の鑑賞眼あるがために、古い作品に新しい味はひを求め、西歐の研究者が未だ曾て言ひ得なかつた所を道破し得た點は甚だ多い。此講義集が出版以來英米の讀書界に好評を博してゐるのは、全くこの新しい東洋風の見かたがあつたからだ。

人に物を教へるといふのは、要するに理知の作用に訴へる事だ。理知にのみ訴ふるが故に殺風景になる、話が理に落ちて了ふ。どんな面白い文學作品でも教場といふ所へ持出せば、大抵は乾燥無味蠟を嚙むが如きものとなつて愛想が盡きる。況やそれを讀んで點數の種にし、やがてはまた飯のたねにもしようといふ了簡を抱くに至つては、試驗前に讀みなほすのさへ眞に苦痛の極である。詩や小說は矢張り書齋に獨坐して明窓淨几のもとに繙くべきもので、黑板（ボオルド）の前に持出すべき性質のものではないかも知れぬ。下手（へた）な教師になると、西洋の批評家の口眞似なんかで、ここが巧（うま）いの、あの句が有名だ

のと獨り感服顔をして、その安賣の感服を生徒にまで强ひるが、聽く者の方では何が有名なんだか巧いんだか薩張り合點が行かぬ。小泉先生は自身ゆたかな、そして偉大な天分を有たれた人だけに、此點では他の學究輩の斷じて企及すべからざる特色ある講義をせられた。

さらばその特色とは何ぞや。情緒本位の文學教授法であつた。先生の尺牘集中の一篇に下の語がある。

『情緒の表現として、人生の描寫として私は文學を教へた。ある詩人を說くに當つて彼が與へる情緒の力と性質とを說明しようと試みた。換言せば學生の想像力と情緒とに訴へる事を私の教授法の土臺とした』。

一通りパラフレイズで本文の說明を終り、難解の詞句を釋して後（出版せられた講義集には說明解釋の部分は大抵省略されてゐる）、先生は自分の美しい言葉で美しい詩の句を批評し、その藝術的意義を說かれた。ごてごてと理窟や事實を列べ立てるのではなく、端的に聽者胸奧の琴線に響くやうな解釋を下された。理知を以て解すべからざる詩を情緒に訴へて解せしめんと心掛けられた所に、先生の講義の大なる特色があつた。かの徒らに西人の筆に成れる註疏の書を辿つて、一語源の說明に二時間三時間を棒に振り、遂には藝術の眞意にだも觸れ得ざる學究先生の爲すところとは眞に霄壤の差であつた。講じ終つて後、先生がいつも獨り言のやうによく言はれた Wonderfully beautiful! といふ

言葉も、其時は既う能く私どもの鈍感な胸にさへ響いて、成程と思はせられた。

既に理知本位の講義でないだけに瑣事(デテイルズ)にわたつては往々にして誤謬もあつた。年代などの思ひ違ひもあつたらしい。またその講義が組織的系統的でないといふ難も無いではなかつた。しかしそれは私ども學生が自分で調べれば出來る事であつた。自分で出來ない事を先生は爲て下すつた。それが嬉しいのである。私は外遊中屢西洋人から小泉先生のことを訊かれた。その時私がいつも答へた What he gave us was not so much knowledge as inspiration の言葉のかげには、先生に對する心からなる感謝の外に、外國大學にうぢやうぢやしてゐる腐儒(ペダント)へのあてつけがあつたのだ。講壇に立つて理を說き事實を傳ふるに巧みなる人は多からうが、詩文を說いて貴き靈感(インスピレイション)を與へ、之によつて青年學徒を指導し得る教授は、天下果して幾人あるだらう。

圖書館に籠城する者の事を惡く言つて「カン詰め」といふが、罐詰でも罐詰でも好いから私は、圖書館で一寸調べれば直ぐ解るやうな事を教室でわざわざ筆記させて貰ひたくはないと思ふ。飽くまで自己を發揮して、先人の道を踏まないだけの獨創性(オリヂナリテイ)を有して居られた小泉先生は、先生の口からでなければ聞かれない多くの事を語られた。重箱の隅を楊子でほじくるアルバイト先生や、屋上屋を架して喜んでゐる獨逸の學者は何と言はうとも、先生の講義には先生の人格の煌きがあつた。その個性が名匠の手に成る浮彫(うきぼり)を見るやうに鮮やかに現はれてゐた。西歐文學の大作が先生の極めて清新強烈な

る主觀を透過して說かれた所に、庸劣の迂儒をして悶死せしむるに足るものがあつた。

すぐれた獨創性(オリヂナリティ)に富んだ人だけに先生の趣味には偏したところがあつた。江戶趣味の通人が頻りにおつな食べ物を漁るやうに、先生も亦おつな作物に舌鼓を打たれることが多かつた。それがどうも私たち義仲、信長そちのけの野武士の味覺に合はない事も往々にしてあつた。面白いから是非通讀せよと先生が薦められた本を讀んで見ても、一向野武士どもには面白くなかつた事も隨分あつた。さういふところが今度出版された講義集にもよく見えてゐる。たとへば、先生は多くの怪談の類や、或は少年文學として英國に名高い『アリスの冒險』(リユヰス・キヤロル作)などを非常に面白いと言はれたが、私どもには餘り有難くない物であつた。殊にリツトンの怪談に至つては、先生が最も嗜讀せられた物らしいが、これも今以て左程に思はぬ。先生がまた妖異險奇なる頹廢(デカダンス)の趣味に深き同情を持たれたことも、矢張りこの一例だ。ポオを愛しボオドレエルを好まれたのがその何よりの證據である。

從つてまた尋常一樣(かいなで)の英國批評家の言說以上に秀でたる卓見は甚だ多かつた。十八世紀のブレイクがまだ今日のやうに持囃されなかつた當時に於て、先生は此詩人を激賞して、『その頃の藝苑の荒れたるなかに、色も見知らず、匂は何も奇(く)しき不思議のあだ花よ』と言はれたのは、實に快心の事であつだ。ワアズワスを喜ばずして、シエリイを褒められたのは殊に痛快を叫ばしめた。此講義集の中に先生がディッケンズを褒められなかつたと言つて、『ヘルンにはユウモアが解らないんだ』と不平さ

うに言つてゐた英吉利の或老人に出くはして、私は苦笑した事がある。

さて以上の如く述べると、先生の學風を、かの天才肌の創作家に有り勝ちな、淺薄な讀書趣味のやうに思ひ誤る人もあらうが、事實は決して左様ではなかつた。否な左様はならないやうにと、先生は特に學生を戒めて居られた。現に此講義集のなかにも、正確細心の學風あつて始めて詩文の鑑賞を爲し得べき事を、切言せられた一節があるのだ。

先生は所謂學究の徒ではなかつた。從つてさまで藝術的價値なきベイオウルフやキャドモンの古詩の研究に沒頭して、動もすれば文藝の眞諦を逸し去らんとする英米大學の英文學教授とは、全く趣を異にした人であつた事は言ふまでもない。その代り十六世紀頃以後の所謂近世英文學の全般にわたつて先生のやうに博洽の識と鋭敏なる理解とを有つてゐる人は、英米第一流の大學に於てすら餘り多くは無いと思ふ。これは既刊四冊の講義集の目次を見ただけで首かれる事で、年々歳々題目を新にして、沙翁以後幾百幾十の作家と作品に就いて、毫も受賣でない自己の鑑賞（アプリイシエイション）を語り得る者が、多士濟々たる英米の學界に於てすら果して何十人あるだらうか。先生の講義の中には純文學のみでなく、バアクレイやスペンサアの哲學（先生のやうな頭の人が何故あんなにスペンサアの綜合哲學を尊崇せられたのか、今でも私は何だか矛盾のやうに思はれてならない）の講義もあつた。また英文學以外に於ては、さすがに佛蘭西で教育を受けた人だけに、近世佛蘭西文學にも十分に精通して居られた。か

のゴオティエの短篇集や、アナトオル。フランスの『シルヹストル・ボナアルの罪』の英譯本は、先生の筆に成れる巧妙なる飜譯が今日既に標準譯となつてゐるのを見ても、佛文に於けるその素養の程を窺ふに足るではないか。殊に先生の創作の方面では、先づその纖麗なる筆致からして、既に佛蘭西文學の感化に負ふ所大なるは私どもの毫も疑はない點である。

言ふまでもなく英米大學では、英文學は卽ち國文學の事であるから之にはうんと力を入れてゐる。多い所では此一講座に十二三人の教師が掛つて仕事をしてゐる。從つて銘々が分擔する時代とか題目とかは極めて狹小な範圍であるから、勢ひその學者たちは自分の狹苦しい領分内に籠城して閊くなつて了ふ。沙翁時代專門の人にアングロ・サクソンの古文學の話をすると、物理の先生が法律の事でも訊かれた時のやうな間抜面をしてゐるから可笑しい。日本では外國文學に對してこんな設備をする必要もなく、また周圍の事情も無論許さない。勢ひ或程度までは八百屋店を張つて貰ふ必要があるが、八百屋式文學講座の擔任者としては、恐らく小泉先生ほどの適任者はまたとあるまいと思ふ。

何等學府の階歷を有しない新聞記者であつた先生の著述を讀んだばかりで、その學殖と天分の凡ならざるを觀破し、直ちに之を東京の大學に招聘したる人は、時の大學總長外山正一氏であつた。今から十二年前、卽ち小泉先生の歿後間もなく出版されたイリザベス・ビズランド編纂『ヘルン傳及び尺牘集』のなかには、先生が友人に寄せられた手紙の二つ三つに、當時の東京文科大學の事を書かれた

のがある。なかには讀んでゐて隨分破顏微笑を禁じ得ない節々も多いが、その一節に自分の同僚の外國人には獨逸文學で萊府(ライプチヒ)大學のドクトル何とか、哲學では獨逸何とか大學の誰々、そして何處の者とも素性の知れない者は吾輩一人である、といふ文句があつたのを私は今でもよく記憶してゐる。如何にもそれには相違なかつた。學歷だの稱號だのといふ看板をブラ下げてゐないのは先生一人だけであつた。それは兎に角、この四冊の講義集を今評壇の驚異として歡迎してゐる英米の讀書界は、かかる天才を草廬に見出して此講義を爲すに至らしめたる故外山正一氏に對して、先づ大に感謝しなければならぬ。

この講義集に用ゐられたる英語は、中學卒業程度の語學力を以て何等の苦痛なしに理解し得る極めて平易明快なるものである。單に詩文のみならず、晦澁なる哲學思想の解說に於てすらも、先生は殆ど難解の語を用ゐずに說かれてゐた。評隲論議の書にしてかくも平明なる文辭を用ゐたるものは他に多く類例は無いが、これは學殖文才共にすぐれた小泉先生の如き人にして始めて出來る藝當だと思ふ。横文字の物を縱文字に直した奴を、我が物顏に喋舌つてゐるやうな事では迚もかうは行かない。教師自分にも解つてゐないやうな外國語の術語なぞを矢鱈に振り廻はして、言ふ方にも聽く方にも珍紛漢な講義を、決して先生は爲られなかつた。私は平易なる英文を讀み得る凡ての日本の讀者に向つて、この珍らしい講義の書を最良の文學入門書として、或は手引草として推薦するに躊躇しない。

四　おもひで

また新しい年を一つ迎へた。既うかれこれ十五六年の昔にもならうか、教室で師なる此天才の脣を洩れる美しい發音の英語に耳を澄ましながら、ノオトの上にペンを走らして、その片言隻句をも逃さじと書き留めたのは。

私にとつてはさういふ懷かしい思出の附纏ふ講義が、今海のかなたで上梓せられ新しく輯載せられた。ペイパア・ナイフで書物の緣(エッヂ)を切る手さへもどかしう、先づ扉から序文目次へと目を通すうち、いつも新着の書を繙く折には嬉しいものの一つである紙の匂が私の胸には何時に無い不思議の心持をそそつた。久しう別れてゐた友と昔を語る時のやうな、また故郷で聞き慣れた古い歌の節面白きに心を奪はれるやうな、我ながら怪しと思ふさまざまの興味に促されて、ただ一息に全卷を通讀する。通讀し終つて瞑目一番すれば、先師のおもかげは今髣髴として眼底に在る。

先生は如何にも風采の揚らない人であつた。瘦身矮軀、實に白人には珍らしいほど小柄な人であつた。いつも前屈みに脊を圓うして、ひよこひよこと歩いて居られた。私たちがその講筵に侍してゐた時代には、既に鬢髮霜をおいた半白の老人(?)で、かの洋袴(ズボン)の折目にさへ氣を配る英米人と異(ちが)つて、衣帽の末にはまた極端に無頓着な人であつた。殊に糊(スタアチ)でしやつちこばつたシャツだの、燕尾服だ

の高帽だのといふ類の物をひどく毛嫌ひされたらしい。先生の美しい花やかな文章を讀んで、一たびはその謦咳にも接したいと騒ぎ廻はり、はては講演のための渡米を求めて止まなかつた金髪碧眼の美人たちにして、若し先生のあの風采を見たならば果して何と言つたらうか、と思へば可笑しくもある。いつか『朝日』の文展漫畫に例の一平さんが、鏑木清方畫伯のむくつけき顔かたちと、その優艶なる作畫との對照(コントラスト)を描いて居られた時、私はこの小泉先生の文章と風采との更になほ著しき對照(コントラスト)に想ひ及ばざるを得なかつた。

先生の鼻は希臘風の立派な恰好であつたが、南歐の血統の外にまた西印度(エストインディズ)地方に長く居られたためか、顔の色は何だか赭顔とでも言ひたいやうな色であつた。兩眼殆ど視力なく、左は盲目、右は眼球が大きく飛び出して、それがまた強度の近視であつた。時々極めて稀に衣嚢から片眼鏡(モノクル)を出して、一寸右の目に當てられる。その稀世の名文に寫された日本の文物人情社會等の精透なる觀察は、すべてこの弱い視力に片眼鏡を當てられる共僅か十秒二十秒間の凝視の結果であつたのだ。大きな眼玉をぎよろつかせながら、心眼盲(めし)ひたる凡物には見えない或ものを、先生はかうして常に鋭くもまた敏く觀破せられたのであつた。

西洋婦人と先生の此眼鏡(モノクル)のこととを思ふ時、私の腦裏に深くも印象せられた一つの事件がある。狷介なる先生は客に會ふ事を非常にいやがられたが、わけて西洋人が嫌ひであつた。先生歿後の文(リテ)

稿管理者(フロ・エグゼキュタア)のやうになつてゐる米國海軍の主計官マクドナルド氏の斡旋によつて、今度この講義集も世に出たのであるが、先生は平素この無二の親友の外、滅多に他の西洋人とは交際せられなかつた。何しろ先生は西洋の物質文明を厭はれて、早くからこの東方の樂土に來られたのだから、かなたの文壇には殆どその實在をさへ疑はれる神祕的人物のやうに見做され、それがまた甚だしく西人の好奇心をそそつて居た。先生の崇拜者、その著書の多くの愛讀者は、はるばる此國に來朝して先生の大久保の邸を訪ねるが、みな素氣なく門前拂を喰はされたものだ。殊に西洋の女と云へばそれこそ毛蟲よりも嫌ひであつたらしい。ところが或日午後の講義の時間に、英國の女子教育家として可なり有名なH(エッチ)ーーと云ふ女が二人の同行婦人と共に私共の背後に在る闥を排して教室に這入つて來た。そしてその儘空(あ)いてゐる机のところに坐つた。忘れもしない、それは先生が私どもに小說家シャロット・ブロンティの事を說いて居られた時間であつた。その英國婦人の一人はまた御苦勞にも手帳を引張り出して、私たちと一緒に筆記を始めた。先生が講義のうちに、ブロンティは愛蘭(アイアランド)血統の人だと述べられた時、此一行の英國婦人がにいツと顏見合はせて笑つてゐた其顏附を、私は今でも明らかに記憶してゐる。

　殆ど視力の利かなかつた小泉先生でも、この思ひ掛けない闖入者(イントルウダア)のあるのには氣附かれたものか、滅多に用ゐられない例のあの片眼鏡(モノクル)を出された。それを右の目に當てがつて女どもの方を凝視することと三四秒。また直ちにそれを衣嚢に收めて講義を續けられた。

其瞬間、思ひなしか、先生の面には不快の色が現はれた。

のち先生が東京の文科大學を去られるやうになつたのは、此H――といふ女の參觀が、鋭敏なる感性を有たれる先生に色々の疑心暗鬼を起させたのが源(もと)だとも傳へられてゐる。私も學校を卒業してから長い間教師をして飯を喰つてゐるから、屢次此種の經驗はあるが、一體あの參觀人だの視學員だのといふ者が、教室の一隅に恰も蠟燭の如くに突立つて、碌に解りもしない授業を見てゐるのは、教師にとつて頗る快からぬものである。殊に其男が鼻眼鏡越しか何かで小生意氣な面でもして居ると、何か御用ですか位は是非とも言つて遣りたくなる。苟もおのれの學殖と經驗とに自信ある教師ならば、それを快しとする者は斷じて無いのである。或地方の高等學校の外國教師が、日本の學校は何故(なぜ)かう參觀者が多いのかと私に訊いた事もあつた。滿天下の教師諸君、私の此言には恐らく同感の士も多からうではないか。

H――と云ふ女の來觀は、先生の崇拜者としてであつたか何であつたか、そんな事はここに記すべき限りではない。ただそれが先生には毛蟲よりも嫌ひな外國婦人であつた事を思ひたまへ。私は心から先生に同情する。鋭感な、利害打算一天張りの俗輩には、到底この心持は解りもしまいが。

五　教室にて

教師は蒲鉾であると或人が言つた。黒板と云ふ板にしがみ附く肉の意だらうが、それならば當り前である。下手なのになると、黒板も生徒もそちのけにして、自分が一夜漬に拵へて來たノオトに恰も岩に於ける牡蠣の如くにかじり附く。そしてもう斷末魔の迫つたやうな聲を出して絶叫してゐる。憐れむべきかな、私なぞもこの仲間であらう。

そこへ行くと、さすが天才の小泉先生は偉かつた。引用すべき詩文の書のほか、紙ぎれ一枚と雖も教室には持つて來ず、そらで話された。それも十年一日の如く、坊主がお經を讀むやうに同じ事を繰返すならば、私等にでも眞似は出來ようが、前にも述べた如く先生は年々歳々新しい題目で新しい講義をせられた。固より準備にも相當に骨を折られたことであらうが、いま次々に上梓せられてゐる此講義集の美しい、そしてよく整つた明快な文章は、あれが皆即座に即興的に先生の口から出たものである。學生に書取らせるやうに考へながらゆつくりと、しかし少しの淀みもなく語られた。時々は即興の散文詩ともいひたい美しい文句や、奇抜な警句が口を突いて出るのであつた。咳唾珠を成すといへば古からう。錦心繍腸、これを織り成せる五彩絢爛の緜をほごして、繰れども繰れども縷々として盡きざる趣は鮮やかであつた。銀鈴を振る如きその聲は、またその文の美しきが如くに美しく、抑揚高低にさへ何の不自然も無かつた。斷續しつつ一言また一句、みな能く聽者の胸底に詩の靈興を傳ふるに足るものがあつた。ふと目を擧げて先生を見ると、窓外を眺めながら講壇のあたりを、あちこち

と靜かに歩いて居られた。

英文學史の講義の時だけは極めて稀に、名刺などの小さい紙ぎれに年代か何かの覺書をして持つて居られた。しかしこれは寧ろ例外であつた。

天才と云へば不規則な怠け者のやうに心得てゐる人もあらうが、勤勉努力の人であつた先生は非常に几帳面で、缺勤なぞは滅多にせられなかつた。講義の時間なぞもきつしりと守つて、鐘(ベル)が鳴ると間もなく、重さうな風呂敷包に美しい裝釘の詩集や文集を幾冊も入れたのを提げて、あたふたと教室に遣つて來られる。講壇に上つて先づ一揖し、ごく低い澄みわたつた聲で Good morning, gentlemen と言ひながら、風呂敷包を解かれるのが常であつた。書物のうち本文(テクスト)として引用すべき箇所には、各しるしの紙が挿んであつた。時間の終に近くなつて其日講義すべき部分が終りかける事はあつても、先生は必ず鐘(ベル)の鳴るまで何か知ら話された。時間ふさぎには隨分詰らない解り切つた事を、お祖父さんが孫にでも言つて聞かすやうに語られたが、それが皆の筆記帳(ノオトブック)に殘つてゐたものと見えて、此講義集の中にもその儘に出てゐる箇處がある。これなぞも先生が今若し見られたならば不快な思を爲られるだらうが、その講義の模樣をありの儘に世に傳へると云ふ上から見て、私は校訂者アアスキン君が之を刪除しなかつた事を如何ばかりか嬉しく思ふのである。

先生はいつも俥から下りると直ぐその儘教室に來られた。偉い學者たちの同僚に顏を合はせるのが

所であつたのだらう、滅多に教官室といふ所には這入られなかつた。講義の間の休憩時間には獨りで校庭をぶらぶらと逍遙して居られた。東京の大學には、あの地所がもと前田侯の舊邸であつた時代から古い古い大きな池がある。この池の歴史には、先生が如何にも好まれさうな舊幕時代の妖艶な物語があつたか無いかは別問題として、とにかく何か由來の有つて欲しいやうな池である。幾百年の齢を重ねた鬱蒼たる喬木に取卷かれて、よどめる水は溷濁の色をなして、何時も黒かつた。池のかなたの小山の上には、俗に「御殿」と稱する集會所の古風な建物がある。先生が最も好まれたのは即ち此池畔の逍遙で、例の前屈みにそのあたりを歩みながら、なた豆の日本煙管や葉卷を燻らして居られるのが常であつた。近づいて教を乞ひたい事はあつても、私たちは先生の靜思を妨げることを恐れて、滅多に側へは行かなかつた。落ち葉を踏みながら徘徊して居られるその姿を遠くから望んで、先生の腦裏を往來してゐる美しい幻想の何ものであるかを、想像して見ることもあつた。

雨の降る日でも、休憩時間に教官室へは決して行かれなかつた。その儘教室に殘つて好きな煙草も喫まず、ただ默々として窓外の景色を眺めて居られた。さういふ時はお氣の毒だと私は思つた。これを見て天才は孤獨を喜ぶなぞと言つて澄ましてゐるのは、先生の胸底を察し得ざる迂儒の妄語だらう。

景色を見られても、先生には殆ど視力がなかつたから常に煙靄糢糊たる、さながら淡彩一抹の風景

畫に對するやうに見えたのであらう。目には見ずして心に見られたその印象は、遂に全き藝術的表現を得て、色彩ゆたかなる文字に寫されたのだ。鋭敏なるその感性（センシビリテイ）は却つてこの極めて烈しき近視眼のために幸ひせられ、部分的なる細微（ミニユシイ）の點を拂拭し去つて、一幅の全景を心裡に活躍するの效果を收め得た。先生自らもその新聞記者時代には米國で書かれた論文のうちに、ハマトンの『風景論』に關聯して此事を述べて居られる（グウルド著『ヘルン傳』一〇九頁參照）。先生の文名を嫉み、或は日本の美を理解し得ざる西人は、ヘルンの描いたやうな美しい日本は何處にも無いと言ふ。いささか癪に障る批評ではあるが、一面から言へば如何にもそれには相違なかつた。

六　教師と文筆

教師と文筆とは仲の惡いものである。少くとも日本の學校に於ては確かに左樣（さう）だ。これは我が國の教育界が噂に聞く頑冥固陋の徒の巢窟であるためか、或は西洋のよりも遙かに進んでゐるためか、その邊は知らない。誰か閑人が考へて見たら可からう。

夏目さんが第一高等學校の教師であつた時、その處女作『吾輩は猫である』を公にされた。文名一時に天下に高きを見て或男が、あんな文は教育家の書くべきものでないと陰口を叩いたさうだ。或人は、飲まず書かず吹かざるを約して遠く都を落ちのび、田舍の學校に教師たるを得たといふ奇談もあ

る。こんな珍らしくもない例を、今更擧げるだけが野暮な位のものだらう。教師をして居ながら詰らん事を書き立てるなよ、ともう誰か言つて來さうな時分と十年このかた心待ちにしてゐると、笑つてゐた私の或友人もあつた。

小泉先生が異常の天才であり、また世界の文豪であつたといふ事は、教師としての先生に何等の光彩を添へなかつたのみか、色々の意味に於て日本の學校では都合が惡かつたらしい。

文章は人格である、筆の尖の藝當ではない。苟も一枝の筆を以て天下人心を動かす程の人には、その人格に何處か必ず强烈なる特異の色彩があつて、凡俗とは到底妥協調和の道なきものである事は言ふまでもない。

これを呼んで偏人となし、嘲つて偏屈者と言ひ、半狂人を以て遇し、一本調子として之を蔑視するのほか、眞に天才を尊重して縱横にその驥足をのばさしむるの道を解せざるものは、即ち窮屈な今の日本の社會である。東西古今、單に文筆を以て衣食する事が至難の業でありとすれば、小泉先生ほどの人でさへも矢張り教師の職を忠實にやつて居られた。しかしまた先生程に思ひ切つて潔癖な非妥協的態度を以てしては、窮極に於て遂に何等かの迫害は免れなかつたらう。

實用的人物と老人との外は一切何者をも容るるの餘地なき日本の國は、先生がながく足を留めて墳墓の地とせらるべき所では無かつたのである。さりとて米國も駄目だ、三十年前のギクトオリア朝な

らば、英國も矢張り駄目であつた。ここに至つて私は先生が米國から再び佛蘭西に戻られなかつた事を深く惜しむものである。少くとも數年日本を觀察してのち、嘗て教育を受けられた巴里の地に歸られ、若しそこで生涯を送られたならば、先生の生活と作品とは更に偉大に、更に光輝あるものであつたらうと思ふ。先生は東京の文科大學を去られ、また米國コオネル大學應聘の事も果されず、早稻田大學に僅かに數時間の講義を擔任せられたのみで、その浪漫的にして數奇なる生涯の最後の二年を送られた。この二箇年の先生の生活は決して快きものでは無かつたらうと思ふとき、私は先生のために暗然として涙を呑まざるを得ない。

政客、俗吏、成金、坊主の輩は文士といふ言葉に非常な輕蔑の意味を寓してゐるが、教育界となれば尙更に烈しい。文學を以て翆書に等しき遊戲なりと罵つた者もあれば、不健全不道德の本家本元だと心得てゐる者も甚だ多い。生徒に向つて雜誌や小說類の閱讀を禁止し、殊に演劇に對しては殆ど之を蛇蝎視せるが如き學校は、かの開化したる野蠻國たる獨逸の事情はいざ知らず、日本を措いて他の文明國では絕對に見られないことである。また私は外遊中、屢日本に於ける英語教育の盛んなる事を彼國人に話して聞かせたが、斷然口を緘して言ふを恥ぢたる一事がある。それは日本の中學に於ける英語教科書から、ゴオルドスミスの『ヰカア・オヴ・ヱイクフイイルド』の全部や、アアヸングの『スケッチ・ブック』中の數章が、二十年來全く教室に於ける使用を禁止せられてゐる事である。かくの

如き事例を耳にせば、わが國情に通ぜざる外人が直ちに日本の精神文明の進度に疑を挿むを恐れたからだ。

文學書を讀むさへ惡いとすれば、自ら筆を執つて之を書くに至つては罪まさに百倍するわけである。試に思へ、今或中學の教師が自己の周圍を描いて漱石先生の『坊ッちやん』ほどの作品を書き、之を發表したりと假定せよ。翌日早速校長室に呼び付けられるは愚か、その首は忽ち飛んで教育行政官の案頭に轉がるを免れまい。作者の運命は即ち主人公坊ッちやんの運命である事は、火を睹るよりも明らかだ。

小泉先生にして若し私どもに生きた文學のなにものなりやを教へて下さらず、イディオムか文法語源の講釋ばかりするか、當局者の鼻息を窺ふ片手間に外國文でつぎはぎの日本文學史編纂をでもして居られたならば、天下は頗る太平であつたらう。そしてあの世界的名聲を博した十數卷の著述を爲し給はずに。

日本を愛し日本を信じ、その美を世界に紹介せられた先生も、晩年には此國を餘り快くは思はれなかつたとか聞く。若し果して然りとせば、ここに至らしめたるもの嗚呼これ果して誰の罪ぞや。

七　專門家

日本人はヸクトオリア朝の英人の口眞似をして、頻りに『コンモン・センス』とかを貴ぶやうだが、また同時に驚くべきほど『專門センス』を有難がる。專門とは外の事は何一つ知らず、出來もしないといふ意味であらう。必ずしも一事一藝に秀でたといふ意味にはならぬらしい。その證據には時時法律を知らない法律家があつたり、土木の事を知らない土木技師さへあるさうだ。外の事は何もせず出來もしなければ、それで立派に專門家として天下を横行濶歩し得るとは芽出度い。

それのみではない、外の事が出來るといふ事その事が、眞の專門家としての素養力量の程を疑はれる基にもなるのだ。往年高山樗牛氏が此事を憤慨して、森鷗外氏が小説家であるために軍醫としての手腕を疑はれ、外山正一氏が教育家として政界に出太したため、社會學に於ける造詣を輕んずる者ありといふ例を擧げたやうに記憶するが、教師學者の社會にも無論この類の事がある。暇つぶしの娛樂を部下に奬勵する校長はあつても、新刊書を讀めと勸める校長は滅多に無からう。基礎醫學の學者に脈が取れるのは、餘り手柄にもならぬらしい。學者にとつて口と筆とは大切なものだと聞き及んでゐるが、餘りに演説をしたり文章を書いたりすると、日本では學者としての信用が墜ちる場合があるさうだ。

專門學科と云ふものは、大きい基礎の上に建てて欲しい。普通人に普通教育が必要ならば、學者にも專門學者としての普通教育があらう。兎の睾丸の研究に五年十年の歳月を費しながら、學會に出て

演說一つ出來ない人も貰いものには相違なからうが、演說が上手だからとて學者の値打を疑ふ理由にはなるまい。文章が巧いからと云つて、淺薄な知識を筆の尖で胡魔化してゐると譏るのは馬鹿げてゐる。話は違ふが、或所に擊劍と俳句と眼科醫術とで有名な人があつた。世間では其人を目して、あの男は三つのうち一番下手な醫者をして飯を喰つてゐると言つた。これは如何にも日本人が最も喜んで傾聽し信用しさうな評語である。

此點に於て英佛米の學者には趣味能力の甚だ多方面な人の多いのは、學風の然らしむるところとして毫も怪しむに足らないが、我が國で崇拜せられる獨逸の學徒でも、必ずしも所謂專門式の人ばかりでは無いらしい。特に著しい一例を言へば、ヘルムホルツの如きケエニヒスベルヒ、ボン、ハイデルベルヒの諸大學に歷任した生理學の泰斗として世界に誰知らぬ者もなかつたが、伯林大學に就任しては物理學の教授としてその方の無數の論文を公にした。それのみか一方政治界に現はれては、道の鐵血宰相を手古摺らした程の豪の者であつた。『專門センス』のみの貴ばれる日本の學界からは、こんな物騷な人物は當分先づ出さうも無いから安心して好い。但し日本にも、德川時代には新井白石のやうに文章も達者で、史論にも考證にもすぐれ、また政治上には經世家として立派な論策を立てた人も尠くなかつたのである。

談は岐路に入つたが、文學の方面に於てすら、文筆に秀づれば學者としての造詣を疑はれるのだか

ら面白い。漱石先生は小說家として餘りに偉かつたために、英文學に於ける素養に就いて兎角の評をする者があることを私は聞いた。そしてまたかと思つた。さういふ人は、試に遺著のうち『十八世紀文學評論』の第五編ポオプを論じた一章を通讀せられよ。外國文學に對してあれだけ手際好く獨創的の論斷を下し得た人を、寡聞なる私は日本に於て未だ一人だも見たことは無いのである。

同じく文豪小泉八雲氏が、學者としてまた敎師として如何にすぐれた素養と技倆とを持たれたかは、この數卷の講義集を讀む者の普く首肯するところであらう。敎室の人としての先生の努力と、文藝批評家としてのその鑑識の凡ならざるとを語るに、無言の雄辯を以てせる此講義集の出版を、私はまたかかる意味に於ても賀すべしと爲す者である。

聽講學生の筆記を借り集めて、校訂し上梓した此數卷の書を得て、いま太平洋彼岸の讀書界は頻りに之を嘆賞し讚美してゐる。優婉の筆を揮うて異邦の風物說話を叙するに秀でた散文家の半面に、今はじめて思ひ掛けなくも、文藝批評家としての勝れた先生の力量を認めたからである。先生が半生の心血を注がれた勞作のかげに、かくも貴き遺業の今まで世に知られずして潛めるを發見したる西人の喜びは、思ふに古器の愛玩者が珍らしい掘出し物をしたよりも以上に、遙かに深く大なる意義あるものでは無からうか。

憶ふ、明治三十六年某月某日、先生は遂に東京の文科大學を去られた。これほど立派な講義を爲ら

れた先生、教師としても精勵恪勤の人であつた先生、學生の尊崇敬慕を一身に集めて居られた先生、此人あるがために當時私たちの母校が世界に知られてゐた程の此の先生をして、遂に去らざるを得ざるに至らしめた者は、……噫、私は之を言ふに忍びない。

文豪としての先生は世界が之を知つてゐる。先生の文を論じその人を傳したものは、英米はもとより獨露佛伊の諸邦に甚だ多い。英文の評價としてはジョオヂ・グウルド、イリザベス・ビズランド、エドワアド・トマス等の數種の書がある。ただ英文學教授としての先生の一面が未だ多く世に知られざる事を憾とし、講義集の上梓を機として敢へて此拙劣なる一文を草した。歳末歳始の忙中に閑を偷み筆を走らして成れる、かかる粗莽蕪雜の文字は、いま東京雜司ケ谷の天台宗寺院自證院の墓所に、安らかに眠らせ給ふ先師に對しても洵に申譯なき事だと思ふ。

（大正七年一月）

果して虚榮の罪か

一　賄　賂

またしても九州の收賄問題が世を騷がせた。今なほ私どもの記憶に新な、往年の教科書事件以來僅かに十數年の間に、かの日糖事件、海軍事件の如きを筆頭として、此種の問題は幾たびか天下の視聽を欹てしめた。特に法廷の問題とまではならず、また新聞紙上には現はれずして長へに祕密裡に葬り去られ、從つてまた平素閑窓に閑居して閑文字にのみ親しめる吾等讀書生の耳に達しない此種の事件は、たとひ大小輕重の差こそあれ、之を數ふれば實に幾千件幾萬件の多きに上ることであらう。西人にして若しわが日本を目して賄賂公行の國なりと罵る者あらば、吾等果して何と答ふべきか。

西洋にも賄賂は行はれると人は言ふだらう。行はれるどころか、車夫馬丁の徒を始めとして稅關吏、警吏、郵便配達に至るまで、比較的下層の階級にある者が不正の收入を貪る事は、日本に於けるよりも西洋の方が遙かに甚だしいのが事實だ。然しながら苟も政治上社會上に相當重要の地位に立てる公人たる者がその公職を利用して私腹を肥さんとし、かくも屢次苞苴の問題に關聯して赤恥を天下

に曝す事は、現代に於ける世界の文明國に於て斷じて他の類例を見ざる現象である。殊に奇なりとすべきは、上の爲すところ下之に倣ふの語が、日本に於て賄賂のことに關しては適切ならざるやの感さへある。卽ち日本の警吏、郵便配達など微力な階級の人たちは、西洋の同階級の者に比しては稍廉潔であるにも拘はらず、かの大官と稱し有力者と號する者が、動もすれば此種の罪惡を犯すこと多きがため、社會を蠹毒することも更に一層甚だしい。思へば西洋の下級者の收賄癖と日本の上流者のそれと、此點では西洋と日本とが殆ど正反對である事は、民族生活に於ける一個の注目すべき現象ではないか。見よ、彼國では多く警吏門番の徒の犯し易き罪を以て、日本に於ては堂々たる一國の宰相が嫌疑を受けたのである、役所の長官までが首を縊つたのである。所謂名譽の軍人と稱する者も、一國の選良なりといふ代議士も、これがためには縲絏の辱めを蒙つた。否な子弟の前には聖人君子を粧ふに巧みなる敎育家までが、袴地一反で法廷に罪を問はれたではないか。倘更に驚くべきは、法官の痛快なる剔抉を見て、此類の事を一々荒立てて罪を糺すは、事業の進運を妨ぐなぞと公言して憚らざる有力なる實業家さへありと聞く。如何に黃金熱にうかされたる病者の囈語なりとはいへ、今の時節にこれはまた隨分途方も無い事を言ふ男があつたものかな。敢へて問はん、爾は果して文明國の民なりや。

私はさきに現代の文明國に於てと言つた。何となれば過去に於ては、西洋に於ても賄賂公行は、希

臘羅馬の時代から近世に至るまで、殆ど日本の現狀と大差なき有様であつたからだ。かの立憲政治の模範國たる英國に於てさへも、或時代には議員買收が毫も珍らしくなかつた腐敗墮落の時代もあつた。然しそれは英國の政界が眞に民本政治の實を擧げ憲政の完美を致すより、ずつと以前の話である。即ち千八百三十二年の議院改善案通過以前の時代に屬する事實である。哲人ベイコン廟堂の樞機に參して收賄し、罪を得て汚名を千載に傳ふるに至つたのは、イリザベス女王朝の事ではないか。宰相ロバト・ヲオルポオルが自己の政策を行はんため、盛んに黄白を散じて議院政治を腐敗せしめたのは、遠い遠い十八世紀の昔物語となつた。二十世紀の今日に於ては、宰相ロイド・ジョオヂが自己の財產の出所に疑を挿まれた時、直ちにその資產の內容を天下に公表して憚らなかつた程に、英國の公人は今日、金錢問題、廉潔を貴ぶのである。日本は德川時代の老中と言ふものから明治大正の高官議員に至るまで、今も昔も種々の美名のもとに行はれる賄賂を以て、殆ど公然の祕密なりと心得てゐる國である。此有様ではまた武士道も絲瓜(へちま)もあつたものかは。赤穗義士の美談にすら、收賄漢吉良上野介の行動がその動機を爲してゐるではないか。

東海君子國の民、由來金錢に潔癖なりと稱せらる。勞力に對する正當の報酬を求むる場合に於てすら、士人は猥りに黄白の事を口にせざらんと欲する程のわが日本が、かくも賄賂公行の國たるは一見、大なる矛盾であり撞着であるかの如き觀がある。而もかくの如き、或はこれ大慾は無慾に似、大

奸は忠に似たるの類であらうか。はたまた石部金吉を粧へる道學先生に、狒々の如き好色漢多きの類か。ああ、君子國の民よ、爾はまた竟に僞善の民か。

二　時代錯誤の喜劇

收賄事件の續發は確かに聖代の恨事また國民の恥辱であるが、その原因を尋ぬればこれには色々の事があらう。曰く黄金崇拜の餘弊、曰く法律萬能の謬想、曰く官吏の薄給、曰くサイシの跋扈（「才子」ではない。世に敏腕家などと云はれてゐる或種の俗漢、學名をホモ・サピエンスと呼び、和名をサイシと名づける類人猿のやうな一種の動物だ）、曰く祕密主義の弊、曰く職業教育の結果、曰く寵商の弊害、曰く女子虚榮の罪、曰く何、曰く何。かういふ色々の事が、今まで原因として世の論者の口に上つた。如何にも皆尤もであらう。

しかし今此種の事件を文明批評の問題或は思想上の問題として見たとき、果して如何なる事が考へられるだらうか。日本現代の文明の根柢に潜める一大缺陷とも云ふべきものが、ここにも亦極めて露骨にその醜惡なる、而もまた猿芝居のやうに滑稽な半面をさらけ出してゐるのではなからうか。

私は此缺陷を假に名づけて、形式に對する內容實質の時代錯誤（アナクロニズム）と呼んでおく。元來時代錯誤（アナクロニズム）とは、時と處を得ない二つのものが一緒に置かれたために生ずる不調和を意味するのである。文學上で言へ

ば、沙翁が古代希臘の雅典の事を書くのに、平氣でイリザベス時代の町人を使つてゐるやうな滑稽を指すのである。

今の日本人の生活或は文明は、その形式的方面即ち制度法律なぞの上に於ては、西洋の非常に進んだ文明國のそれを燒き直して出來たものである。又その形而下的方面或は物質生活の方を見ても、商工業の發達といひ、經濟組織といひ、總べてが皆先進諸國のそれに一歩も後れざらんとする健氣な努力によつて、中外の耳目を聳動した程の進歩改善を見た。換言すれば外形上には總てが皆最新式のハイカラに出來上つてゐる。ところが更に目を轉じて文明の他の半面、即ち國民の內的生活、形而上の方面、また思想道德など、文明の實質の側を見ると、茲にはまた驚くべきかな、依然として二三世紀以前に旣う疾くに黴の生えて了つたやうな古臭いものが、非常な執着力を以て今も猶頑張つてゐる。頑冥固陋と言はうか保守退嬰と言はうか、眞にお話にもならない天保錢か一文錢見たやうなものが、牢乎たる權威を以て思想界を支配せんとしてゐる。多少新しがつてゐるやうな人ですら、其人の腹の底の奧の奧の方を見ると、矢張りこの天保錢を大切に仕舞ひ込んで尊重する氣味がある。首は飛んでもこればかりは放さぬといはねばかりに、傳家の寶物とでも心得てゐるらしい。殊に怪しむべきは、大正の御代になつて封建時代の骨董人物は大抵凋落し去つたにも拘はらず、後から後からまた同じやうな種類の頑冥黨がどこから出て來るものか、いくらでもいくらで飛び出して來るのは不思議と思は

れる程だ。かくて現代の日本は、その內的生活に於ては確かに佛蘭西革命以前の西歐諸國、卽ち先づ精々十八世紀位のところにのそのそして動かずにゐるのである。卽ち十七八世紀の內的生活や思想狀態の上に、二十世紀最近の物質的形式文明を借用して來て、そこに多くの喜劇を演じてゐるのが今日の有樣だ。これが時代錯誤でなくて果して何であらうぞ。醜態褻狀見るに堪へず、眞に識者をして面を背けしむるものあるは、卽ちこの一大缺陷があるからだ。

ベルグソンは滑稽を說明して、生命の絕えざる進化流動に逆らふ所に生ずるものだと言つた。動いて止まない生命の流に背馳して、固定し硬化せんとするものある時、社會現象のうちには喜劇が生れる。內容よりも形式を重んじ、精神よりも物質を先きにせんとする如き場合もその一つで、假面をかぶる者の滑稽に見える所以は卽ちこれだと說いた。また昔から他の多くの學者も、滑稽の意味を說明するに不調和なる二物の倂置を以てした。沐猴にして冠するも此類だらうが、若し田吾作、李兵衞をして最新式のハイカラ仕立の燕尾服を着用せしめたらば、恐らく今日日本文明の好個　カリカチュアをなすであらう。そして此種の喜劇滑稽は、その半面に於てまた往々にして深刻なる悲劇であることも、人生の一つの反語（アイロニイ）ではないか。日本に多い收賄事件と云ふやうな事も、考へ方によつては、そこにショオの戲曲を讀むより以上の皮肉が味はれると思ふ。

私は先づ具體的な一二の例を擧げよう。日本の憲法政治といふものは元來、西洋の最も進んだハイ

カラな政體を繞き直して出來たものだ。形式だけは既に備はつて、立派な議會が出來てから既に幾十年に及んでゐる。ところが國民の內的生活にある政治思想に至つては、依然として二三世紀前の妙なところに固定沈滯して少しも動かうとしない。今頃になつて歐洲戰爭で何を思出したものか、急に民本主義（デモクラシイ）の言葉爭をする必要を生ずる程に、時代から後れたものである。徒らに形式上物質上にハイカラがる眞似は、猿にでも出來よう。しかし形式に伴ふ內容がいつまでも骨董的古物だから、日本の立憲政治は十年經つても二十年經つても物にならない。國民の政治的生活の眞の精神（スピリット）とまでは成り得ないのである。時代の合はない二つの物を一緒に並べた錯誤の喜劇とは先づこの通りのものだ。かの遠からず日比谷原頭の偉觀たらんと傳へられる最新式の議院建築の如きも、かくてまた遂に時代錯誤の新しき一大象徵たるに終らずんば幸ひである。

更に敎育界に就いて見ても一方には西洋の最近の科學的物質的知識を授ける一般の學校制度そのものも、昔の德川時代とは似ても似つかぬ新式に出來上つたのはまことに結構だ。ところが生徒の內的生活を指導する段になると、十年否な百年一日の如く舊思想の一點張りで、昔の頑固老爺（おやぢ）の說法見たやうな事ばかりを言つて聞かせる。そして新しい文學や新しい思想は不健全だの怪（け）しからぬのと言つて、靑年が燃ゆるが如き必然の內的要求に迫られて、切に之を求めても決して與へようとはしない。從つて敎育は極めて內容の空疎な形式一方の束縛敎育に走つて、人物養成の實効は少しも擧つてゐな

い。一時喧しく言はれた普通教育に於ける立憲思想の養成なぞも、その後どうなつて了つたのか一向聞かないではないか。

かかる意味の時代錯誤の實例は、我が國現代のあらゆる社會に於て見出されるが、收賄事件なども亦同じ立場から考へることが出來ると思ふ。

今の日本の事業界がその形式や組織に於て、西洋の最新式のものと異なるところなきは言ふまでもない。それにも拘はらず之を運轉してゐる當事者の頭は、今も猶昔ながらの古い所に停滯して容易に進まうとはしない。

日本には昔から特別の意味で有力者や官人に接近する寵商と言ふものがある、御用達と云ふのがある。これらの人たちの周圍に纏綿紛糾せる內情に至つては固より神祕の帳の蔭ふかくも隱れて、私ごとき門外漢の知るところでもなければまた言ふべき限りでもない。しかしかかる舊弊な者の存在を許せる內的原因、平たく言へばさういふ人たちを暗々裡に動かしてゐる因襲觀念の如何なるものなるかに想ひ到る時、聰明なる讀者は早くも私の言はんと欲する時代錯誤の意味を察せられるであらう。

今日日本の一切の社會組織經濟組織は、外形上全く新しいものに變化してゐるに拘はらず、金錢道德の上には不思議にも封建時代からの因襲が、恰も頑强なる黴菌の如くにこびり附いて離れない。言ふまでもなく今日の經濟組織から言へば、社會のために自己が盡くした正當な報酬としての外は金錢

は受けられない譯である。しかし日本の昔からの因襲觀念から言へば、主君より賜はる拜領と名の附く物は無論のこと、或は他より受くる役得、附け屆と稱するものの如き、實はえたいの知れないものであるにも拘はらず、之を受ける事が、たとひ或場合には是認せられなかつたにもせよ、さまで大なる社會的罪惡なりとは見做されてゐなかつたのである。私情を以て謂れなき黃金を收受する事が、社會の一員として犯せる罪惡たる點に於て泥棒と異なるところなきものなる事を、決して痛切には感じてゐなかつたのだ。たとひ暮夜ひそかに門を叩いて近づかんとせる寵商佞人の手より阿賭物は受けようとも、形式上、君に忠、親に孝ならばそれで立派な男一匹だ、と人も許し我も信じてゐるのである。ちつとは彼奴もやり居るわい位な所で先づ無事に濟んだのである。一方に於ては正當な報酬を要求する場合にすら、猶金錢の事を口にするを憚る程潔癖でありながら、他方に於ては平氣で不正の阿賭物を收めるといふ事は、昔風の舊弊な日本人でなければ斷じて出來ない矛盾の藝當である。出所の知れない金で衣食は愚か、贅澤三昧をしてゐる怪しげなサイシの多きことと日本の如き國は、他の文明國に一寸例が無いのは、全くこの矛盾の藝當を何等良心の呵責なしに演じ得る者が多いからである。察する所、世に多き收賄者も贈賄者も、若し全然法律の示すところが無かつたならば、賄賂を以てさまで罪惡とは考へて居ないのではないかと思ふ。袖の下や附け屆とはそんなにまで惡い事かなあ、と今更のやうに呆れて驚いてゐる人も、廣い日本には百萬人や二百萬人ではあるまいと思ふ。

忠孝の問題とでもいへば口角泡を飛ばして激論し憤慨する程の人でさへ、平素收賄者流を目して、あれは融通の利く人、少しは話の解る人、腕のある人、さういふ言葉で批評して平氣でゐるのが多い。

日本人の金錢道德と云ふものは、かくの如く時勢後れの舊弊なものである、鎖國攘夷の時代を距る事未だ遠からざる程度のものである。ところが一方に於て今日の法律は西洋文明國の比較的新しいところを學んで出來たものである。それが恰も時計の機械のやうに遠慮會釋なく動いて行く。因襲的な舊思想の人たちの上へ寸毫の假借もなくこの最新式の法律を適用して、所謂秋官獄を斷ずるの態度を以て臨めば、醜態百出するのは當然の次第である。法廷に持出さるる收賄事件の如き、寧ろその數の少きをこそ怪しむべきだ。

今の日本では一切萬事がすべて此流儀だから、日常の卑近な事にも時代錯誤の喜劇は到る所に見られる。それがまた形式的物質的方面を新しくすればする程、益々際立つて目につくのである。花見時の汽車電車の旅の不愉快な事はどうであらう。個人同志の間では無闇に丁寧な日本人が、車中或は停車場(ステイション)での不行儀はお話にもならないものだ。醉漢の暴狀と云ひ、押合ひへし合ひの亂雜といひ、まるで無政府狀態だ。汽車電車或は鐵道規則そのものは、いくら新式のハイカラに出來あがつても、乘客の頭が少しも文明的でないのだから、日本の花時の旅行には西洋の汽車電車の旅で決して見られない

多くの不愉快を覺悟せねばならぬ。

私はまた日本で自動車に乘る毎に、これも時代錯誤の好標本だと思ふことがある。日本では自動車は何だか一種の贅澤物のやうに見做されてゐるだけに、米國に最も多いフォオドの廢物のやうなのは少い。ピアスの最新式にも劣らない程の立派な車さへ尠からず輸入されてゐる。而も日本ではその乘心地の惡いこと甚だしいもので、それもその筈、自動車だけはいくら新式の上等でも、肝腎の道路の方が封建時代その儘ので、こぼこぼ式である、市街に車道の區別も無ければ、況や郊外にドライヴの設備はない。だから埃が立つ、がたびしする、タイアは損む、はては行人をして顰蹙せしめるやうなことになるのは當然の結果である。

日本今日の文明は總べてが此自動車式だ。封建時代の野蠻な物の上へ二十世紀の最新式の物を無理無體に運轉させようとしては、到る所に色々の喜劇を演じてゐる。これで萬事が圓滿に健全に進捗して行く理が無いではないか。於是乎、形式上物質上の新式を全然撤廢し去つて、鎖國攘夷のチョン髷時代に逆戻りするか、若しそれが出來ずとあらば内的にも外的にも、また形式にも内容にも、物質にも精神にも、兩方とも思切つて新しくなるか、二者孰れか一を選ぶより道は無い筈だ。

然るにまた怪しむべきかな驚くべきかな、現代の日本人は物質上形式上の進歩改善にその全力を傾注しつつ、滿身の精力を傾け盡くして惜しまざる觀はあるが、それにも拘はらず精神上内容上に

は、殆ど何等の眞面目な努力をも拂つてゐない。物の考へかた見かたは依然として大名行列の時代その儘であるのみか、甚だしきに至つては思想や道德に於ては、無理やりにでも昔の時代に逆戻りさせようと苦心焦慮してゐる人さへ稀ではない。二十世紀東海のはてには、シルク・ハットの下にチョン髷を据ゑて見たらば、さぞ日本に固有な、特有の結構な物が出來上らうと日夜苦心してゐる頑愚固陋の徒がある事は、實に文明史上の奇觀だ。世界共通の新思潮に對してあらゆる反抗を試み、はては罪も咎も無い文藝上の新思想に對してまで盲滅法な排撃を試みる者さへ多いのが、何よりの證據ではないか。かの時勢後れの侵略的武斷主義を謳歌せんとする者の如き、また此徒の亞流たらんずんば幸ひだ。

今の日本では、政治でも教育でも宗教でも實業でも、何でもかでも皆此種の時代錯誤に惱まされてゐない者は無い。從つて凡ての事がのんびりと發達しないで畸形となり、不具となり、そこにまた衝突も起れば破綻も出る。まるで刄の缺けた出刄庖丁で鰹節をかくやうなものだ。かくては遂に開化したる野蠻國とも言ふべき滑稽なものが出來上るだらう。

三　女の虛榮

筆が滑つて、思はず前置きばかりが長くなつた。さらば本題に入らう。收賄問題に聯關して日本婦

人の現狀を考へたとき、私はここにも同じ時代錯誤の病弊を見たのである。

今回事件の衝に當つた某法官の語れるところとして傳へられるところによれば、かかる事は婦人の虚榮が原だとある。世間一般、殊に男子には左樣信じてゐる人が頗る多いらしい。折も折とて春さきは細君が花見衣裳の一つも新調しようと云ふ矢先、これが亭主にとつて究竟の反對理由に利用せられた場合も多からうと思ふと、ちよと破顔微笑したくなる。

暴君のやうに我儘な主人が、座敷に在つた花瓶を落して破ると、早速下女が細君かを呼び附けて、お前たちの置きやうが悪いからだと怒鳴る。自分の不注意と失策とは棚に上げて顧みず、先づ弱い者に罪をぬすり附けようとする。今度の女子虚榮問題にも多少この趣が無いではない。

ある不祥の事が起ると必ず何者かに罪を歸しようとする。その何者かは抽象的或は非人稱的（インパアスナル）なものでは承知が出來ないから、必ずある人（パアスン）にぬすくる。そして其人（パアスン）は弱い者である事が最も好都合なのである。平生無事の日には殆ど無能力者同樣に蔑視して、その言にすら耳を傾けずに置きながら、一朝かかる不祥事の起るに當つては、眞先きに女と云ふ弱者を捉へ來つて槍玉に擧げようとする。日本の男子の婦人に對する橫暴なる態度は遺憾なく此際にも現はれてゐる。さきに教科書事件の時にも、海軍事件の時にも、同じ事が世人の口に上つた。

私は妻君の虚榮が、收賄事件の背後に伏在してゐる一小原因であつた事を認める。また極めて特殊

な場合に於ては、それが主要な原因であつた事をも否定する者ではない。しかし世上多くの論者が言へる如く、これを以て重大原因なりと見做し、甚だしきに至つては妻君が虚榮のために犯したる罪を、亭主が背負つてると言はぬばかりに誇張する者あるを聞いて、その餘りな出鱈目に驚かざるを得ない。かくの如き暴論は、婦人の地位の確立されてゐる米國は勿論、英佛等の先進國に於て恐らく耳にする事の出來ない性質のものであらう。

前段既に述べた如く、かかる事件には虚榮などといふ事よりも、遙かに重大なる多くの原因が他にある事は勿論だが、單に虚榮と云ふ點のみに就いて言つても、男子の虚榮心はその馬鹿々々しさ加減に於て、女子のそれと毫も異る所なきのみか、遙かに惡むべき惡性のものであるため、社會に流す害毒も從つてまた女子の虚榮心よりも更に甚だしいのである。襟飾(ネクタイ)の模樣を氣にして見たり、鍍金(めつき)の金時計をブラ下げて見たりする點は婦女子と何の選ぶところなきのみか、勳爵にあこがれ、肩書を珍重し、徒らに門戸を張らんとする者の如き、政界に於て學界に於てまた事業界に於て、その一世を蠱毒せる事の如何に甚だしきかを見よ。之に比すれば女子の虚榮の如き、その淺薄なる點に於て無邪氣なる點に於ては、殆ど問題にならないと言つて可い。

似たもの夫婦といふ俗諺には眞理がある。犬も喰はぬといふ喧嘩をしながらも、一緒に暮して行けるのは兩方がどこか似てゐるからである。また一緒に暮せば兩方から接近し同化し合つておのづか

ら似て來るのである。若し虛榮といふ事が今回の如き事件の場合に問題となるとすれば、主人の虛榮も細君のそれと似たもので、男子だけに却つて女のよりも更に惡性のものであつたに相違ない。極端に女尊男卑である米國の如き國ならばいざ知らず、男子の劍幕の恐ろしく烈しい此日本に於て、亭主は二宮宗で細君ばかりが虛榮の權化だなどと云ふ場合は千人中恐らく一人と雖も無からうと思ふ。單に此點から見ても、女子の虛榮をのみ咎めるのは我儘勝手な男子の言ひ事に過ぎない。

裝飾美は女の女たる生命の一半である。またその社會的義務の一端だと言つても差支ない。徒らにおさんどんの如く、また乳母の如く、なりふり構はずに眞黑になつて働くばかりが女の能でもあるまい。出來るならば身に綾羅を纏ひ珠玉をちりばめ、阿彌陀如來のやうに光らせる事も、決して咎むべきでないのである。世には道學先生と云ふ者がある。王宮の庭に、さながら己が天成の美を誇るものの如く舞へる孔雀の絢爛たる羽毛を剪り去つて、色彩ゆたかに美しかるべき人生を灰色に塗り潰さうとしてゐる惡魔がある。呪ふべきかな、彼等。

勿論ただ女子の虛榮心を滿足させるといふ事ならば、それは親孝行のやうに結構な事ではあるまい。しかし今日の實業界なぞには、親孝行をせんがために泥棒同然の金儲をしてゐる人間は、必ずしも珍らしくないのである。否な貧民間には親に孝を盡くさんがために、隣家の米俵を盜んで法に問はれた者さへある。かかる場合、その罪の源をなしたからとて親孝行そのものをも惡いと言つて咎むべ

きたらうか。若し女房孝行のために罪を犯した人間がありとすれば、罪は固より大に惡むべしと雖もその志や寧ろ憐むべきものがある。收賄の一つも爲ようと云ふ横着な『サイシ』に、そんな優しい、殊勝な心掛けの男が果して一人でも居るだらうか。尠くとも左樣いふ男が日本には多いと言へるであらうか。

若し收賄事件の起れるに際して、婦人に關する事が問題になるとすれば、論ずべき點は他に幾らもあらうと思ふ。卽ち今日日本の男女關係には、文明の進度と全く不調和な時代錯誤があるからだ。

四　不思議な賄賂

不思議な一種の賄賂、と言つたつて日本では別に不思議なものでも何でもない。今更そんな話を不思議さうに書く者こそ餘程不思議に見える位は、私と雖も承知だ。承知で之を書くのは順序として書かざるを得ないからだ。

日本には黃金の外に一つ不思議な賄賂がある。之を賄賂として用ゐることは、近代の文明國に於て多く例を見ざる日本特有のものである。それは卽ち男子の獸性に附け込んで、賣笑婦の腐れた肉を與へる事だ。我が國固有のものの一つとあらば、これも亦誇るべきであらうか。

一夫一婦で滿足し得ないと云ふ男子の獸性の存在する限り、東西古今いづれの國にも避け難き社會(ソオシ)

的害惡（アル・イイヴル）として、私娼もあれば公娼もあらう。しかし日本には一種特別の藝者と云ふものがある。この特種な賣笑婦は、すべての社交的會合には言ふまでもなく、公人が公事を議するとき、何人の出入をも許さない場合にすらその席に侍する程の大なる特權を有する者である。西洋人が富士山（フジヤマ）と共に、之を日本の名物として數へるのも無理はない。

西洋にも古代希臘には『ヘタイライ』と云ふものがあつた。源平時代の白拍子、舊幕時代の傾城遊女、現代の藝者と同じ性質の賣女で、歌舞と色とのほかにまた學問技藝をさへ賣物にした。女子教育の全然度外視された古代希臘に於て、彼等の間には才色兼備の女も多かつた。プラトオンやエピキュラスのお弟子になつて氣焔をあげた者もあれば、ソクラテエスと交はつて世界に於ける女權論の第一聲を放ち、千載のもと青史に名を留めてゐる豪の者もあつた。しかしかういふ不思議な一種の賣笑婦は、近代の文明國に於て全くその影を潛めた。二十世紀の社會に於てかくの如き者に存在の餘地を與へてゐる文明國は、恐らく日本だけであらう。西洋の女優や舞姫とは甚だしく趣を異にしてゐる。

武士を骨拔泥鰌（ほねぬきどぢやう）に拵へ上げて國内の平和を保たうとした徳川氏の政策は、賣笑婦に直接の保護と特權とを與へてゐた。遊里を自由戀愛（フリイ・ラヴ）の行はれる地上樂園に拵へ上げてゐた。從つて之を封建時代の社會と云ふ環境の中に見ればこそ、そこに詩美もあればまた一種の道德もあつたのだ。今日一切の社會狀態をハイカラに仕上げて置きながら、依然としてかくの如きものの存在を許すのは、言ふまでも

なく因襲に執着せる時代錯誤である。封建時代は去つて資本主義立憲政治の世となつても、男子の婦人に對する根本思想は少しも進轉して居ない。兩性關係に現はれた時代錯誤の現象と云へば、これなどもその一つであらう。

罪惡のかげに女があると云ふのは、山嶽と共に古い話だ。しかし今度の收賄事件に限らず、かかる場合若し罪が男女關係に基因するところありとすれば、それは細君の虚榮などを問題とするよりも、この日本特有の藝者と云ふものの存在の方が、色々の意味からして遙かに有力な原因であることは、事新しく言ふまでもなからう。而も此を咎めずして彼をのみ咎めるといふのは、明らかに男子の得手勝手な議論だ。弱者に罪をぬすくらうとする卑怯な態度でなくして何であらうぞ。

英語の「賄賂」と云ふ字の語源は、『乞食に與ふる一片の麵包（パン）』の意である。日本では獸慾に餓ゑたる乞食に與ふる一片の腐肉の意ともなるだらう。讀者はまた沙翁の『ジュウリアス・シイザア』の中に、賄賂を欲しがる者のことを『痒い掌』an itching palm と云つて、これが日常の俗語にも轉用せられて居ることを記憶せられるだらう。封建時代や希臘時代の兩性關係を平氣で今の世に持續しつつ、藝者に關係する事を今も猶『粹』だの『通』だの『いき』だのと心得てゐる時代錯誤の人たちには、痒いのは掌でなくて、……一寸これは言葉に窮した。

ピエエル・ロティの『お菊さん』を讀んだ西洋人は、日本を賣女の國だと思つてゐる。また私は讀

んだ事はないからよく知らないが、支那人が日本人の性慾生活を描いて『留東外史』とか云ふ本を書き、日本を賣淫國だと罵つてゐるさうだ。罵られても仕方のない缺點の存する以上、反省すべき餘地はあるだらう。

賣淫國である事と賄賂國である事と、二つの間には關係がある。否定すべからざるこの原因結果の關係、……そんな事までもくだくだしく私は書きたくない。

五　夫婦生活

かかる事件あるに際して若し妻たる人を咎むべしとすれば、それは眞に妻たるの責務を果し得なかつた點にある。然しそれといふのも、日本人の夫婦生活には今も猶主人と奴隷との如く、依然として封建時代の因襲を脱し得ない色々の時代錯誤があるためだ。

默々として亭主の亂行を傍觀しつつ、之を男の『かいしよ』として許してゐた者は誰であるか。夫が賣女に溺れてゐるのを忠告もせず諫爭もしないのが、新時代の妻として立派な淑德だと考へられるだらうか。

七去三從の奴隷の道德が婦人に向つて說かれた舊時代の因襲が、今日なほ破壞せられない結果として、亭主の亂行を默視する事を女の『たしなみ』の一つとさへ心得てゐる人も尠くはない。たとひま

たそれ程でなくとも、亭主が外で道樂をする代りに着物の一枚も造つて吳れれば、それで滿足してゐるやうな婦人も珍らしくないのが事實である。——亭主といふ者は、よく色々の賄賂を妻に贈るものだ。

更に他の方面から言ふと、罪惡の結晶とも云ふ可き不淨の財が神聖なるべき家庭に這入るのも知らず、或は知りつつも之を默視してゐたといふ點に、また確かに妻たる人の罪がある。

言ふまでもなく男子が外にあつて爲てゐる仕事を、或程度まで理解してゐる事は妻たる人の義務である。賢母良妻の眞意義は單に家庭の中の問題として始終するのではなく、夫と云ふ者を通して女の力が外部の社會に及ぶところに價値があるのだ。夫が收賄の罪を犯し、或は米の買占と云ふやうな殘忍な行爲を敢へてする場合に、敢然として之を制止する事は女としての義務である。生存競爭の烈しい時、男子は動もすれば功名利慾の念に驅られて、不知不識の間に罪を犯し易い。殊に日本のやうに社會制裁の嚴格でない國では、男子は何を爲でかすか分らない。さういふ場合、女の敏感なる情性を以て之を矯め之を制する事は、妻たる人の當然の責務ではないか。『お前なぞに世間の事が解るか』と言ふ亭主の一喝に葬られて止む如き人は、新時代の賢母良妻ではないと云ふ非難を免れまい。これでは雙妾下婢と何等選ぶ所がないからだ。

私は今夫婦生活に現はれた時代錯誤に就いて、一々これらの事を指摘するの煩を避けよう。ただ婦

人の眞の覺醒とは先づかくの如き點に起るべきもので、それが軈て女としての存在をして意義あらしめる第一歩である事を言へば足るのだ。現代に於ける日本婦人の地位が餘りに低く、其勢力が餘りに弱い事は、時代文明の形式的方面と全く調和を得てゐないからである。あの變挺な『新しき女』なぞと云ふ者が世を騷がしたのも、畢竟するに時代錯誤が生み出した畸形兒であつたのだ。

極端なる壓迫を加へた結果は、其者をして萎縮せしめ自屈せしめ、遂に本來の能力を失ふに至らしめるか、然らずんば殆ど自暴自棄に近い反噬的態度を執るに至らしめる。日本の馬は多年の動物虐待の結果、猛獸に近いものになつたと評した人があるが、日本婦人の中にも稀には悍馬御し難き類がある。街頭で少女を蹴殺す荷馬車の馬のやうなのも無いではない。しかし多くは幾百年の自屈の結果、女としての本來の能力をさへ失つて了つた婦人が、妻として正當なる責務を盡くし得なくなつてゐる事が、今回の如き事件に際しても特に痛切に感じられる。

之を救ふものは女子教育の任であらねばならぬ。然るに今日の女子教育は男子の職業教育と同じく、徒らに目先の事にのみ役立つ實用品を造るに忙しく、思想方面の教養を與へる上には何程の事をも盡くしてゐない。飯炊きや按摩の稽古も結構な事ではあらうが、そんなことで賢母良妻は出來るだらうか。また『ベカラズ十條』式の消極的教訓もさる事ながら、更に女子の眼を開いて眞の向上と覺醒とを促すに足るべき積極方針を執るに、何故(なぜ)躊躇するのであらうか。私は先頃新聞紙上に掲げられ

たる、將來の希望に對する女學生の答案と云ふものを讀んだ時も、矢張り同じ事を考へさせられた。米國に於ける婦人の地位が餘りに高いため、多くの弊害があると同時に一方にまた、あの極端な功利主義の文明の餘毒を除きつつあるものも亦婦人の勢力である事を、わたくしは嚢に『北米印象記』（本卷に收む）の中に說いた。日本の黄金文明の進步の急速なると共に、思想や宗教や道德や藝術や、凡て文明の內容の方面に於て婦人の責務が益々重きを加へつつある事を眞面目に考へて貰ひたいのである。意思にのみ生きんとする男性を中和する事は、感情に生きんとする女性の天職であるからだ。

六　虛榮の半面を見ずや

此稿を起す初から、書かうと思つて私の腦裏を往來してゐた二つ三つ主要な點には、まだ少しも觸れてゐなかつた事に氣附いた時、早くも豫定の紙數は盡きんとしてゐる。かくて龍頭蛇尾に終らんとするを自らも苦笑しつつ、今大急ぎで簡單にその二三の點を書いて此の稿を了らう。

日本では罪惡のかげに賣女あり娼婦ありとは言へよう。しかし同じ筆法を以て罪惡のかげに妻ありとなし、之を妖孽に比するが如きは誣ふるの甚だしきと言はんよりは、寧ろ殘酷である。女には感じ易き淚脆き情性がある。おのが愛する夫をして罪を犯さしめ、囹圄の人たらしめてま

で、自己の虚榮心を滿足せしめようとする程に、女は――否な少くとも日本の婦人は、冷酷無情な者だとは考へられない。しかしながら今假に女の虚榮心が犯罪の素因であつたと見るにしても、それは女が虚榮心に煽られて不知不識に犯した罪であることは言ふまでもない。ところが、かかる場合その半面を見ると、そこには確かに女子をしてここに到らしめた男子の方にも、咎むべき點がある。

男子の淫蕩は單に金錢や肉體の上ばかりでなく、色々の意味に於て精神的にも亦恐るべき惡影響を妻に與へてゐる。その中の一つは棄てられたる者、孤獨なる者の悲哀である。愛に生きんとする女性としては、最も堪へがたき痛ましき悲哀である。たとひ夫婦關係は持續されつつも、夫が他の女に溺るる時、妻として深刻痛烈なる哀愁に心を惱まさない者があるだらうか。そして其刹那、女は殆ど病的に自暴自棄に近い行爲を敢へてしてまで、此悲愁から逃れようとし、自ら慰めようとする。女の方外なる虚榮、女の亂行は多く此危機に生ずる。私は此事實を、今回の事件の中心にあつて虚榮の化身のやうに攻擊せられてゐる某氏夫人の場合に就いて考へて見たい。

某氏の夫人には子がなかつた。某氏は他の女に關係して遂に、子を設けた。其子を養子とはしたが、夫人は如何(とう)しても其子を愛する事が出來なかつた。かかる場合、敏感なる女性にとつて極度の悲哀は、彼女をして遂に鬱憂病者たらしめた。此悲愁を免れる唯一の果敢なき手段として、彼女はこれを虚榮心の滿足に求めた。社交界の女王となつて、しばしたりとも此悲を免れようとした時、隼の如

き眼を有てる惡魔は機に乘じた。姦商の手は彼女に捧ぐるに黄金を以てした。

自己の生命ともいふべき情性に培ふべき愛の對象を見出し得ない時、女は必ず他の何ものかを求める。何ものかを求めて得られざる時、遂に分別と思慮とを土芥の如くに棄てて自暴自棄となる。夫は他の婦人に溺れ、また自己が母性を滿足せしめんにも子がないと云ふ場合、孤獨寂寞の悲愁に鎖された憐むべき彼女にとつては、虛榮の毒盃を一息に飲み干すことが唯一の慰めであつた、毒酒の醉に自己を忘れるのであつた。

右に述べた某氏夫人の如きは、固より非常に極端なる場合である。然しこれほどまでには至らざる他の類似の例は、私共が單に戲曲小說ばかりでなく、社會の實際に於て屢次目睹するところではないか。かくてもなほ男子に罪がないと言へるであらうか。虛榮の裏面を見よ、多くの場合そこには必ず愛せられず愛し得ざる者の悲愁が潜む。他の正當なる方法によつて己が生活を充實せしめ得なかつた女の暗愁が見出される。かくてもなほ忍べと求むるは、ボッカチオが書いたグリセルダのやうな女でない以上、出來ない仕事である。

愛は男子にとつてはその生活の一部に過ぎないが、女子にとつてはその總べてであると或英國の詩人は言つた。ところが女が生命よりも大切な此愛を、子にも夫にも見出し得ない場合、換言すれば自己が總べてを捧げて愛し得る何ものをも見出し得ない場合、それが必ずしも常に皆男子の罪だとばか

り私は言ふのではない。卽ち周圍の事情に制せられて誤れる結婚をした場合とか、又は稀に見る或種の女の如く、性情の然らしむるところ何ものに對しても自己の全部を捧げて愛し得ざる人とか、これら種々の異なつた場合は甚だ多からう。然しかかる場合に於ても、虛榮は彼女にとつて感情生活の空虛を滿たすに最も手近な最も容易な手段である事だけは、否定するを得ないと思ふ。論じてここに到れば更に根源に溯つて、結婚問題に言及し個人主義の思潮にも觸れねばならぬ。しかしそれは此文の主題ではないから、他日に讓ることとしよう。

日本の形式文明黃金文明の發達が急激なるとともに、時代錯誤の病弊は從つて益々甚だしく暴露されるのであらう。簡單に言へば古い頭を以て新しい社會に臨み、新しい仕事をしようとするからだ。官吏であつたからこそ法廷の問題とはなつたものの、私營事業の場合には收賄と云ふ罪惡は、今日殆ど白晝公行の有樣で問題にはならないのである。新社會の新道德に人の心が目醒めざる限り、かくの如き醜事件は將來なほ幾たびか識者をして顰蹙せしめることであらう。女子虛榮問題の如きは末の末であつて、原因は全く他に存する。

平生は女に向つて唯もう引込んで居ろと言ふ。しかも勝手な時には眞先に女を鎗玉に擧げて罪を塗り附けて了ふ。專制主義武斷主義の舊思想は、また婦人に對する壓迫思想となつて現はれたのだ。個人の自由を尊重するデモクラシイの發達は、必ずや先づ兩性關係の改善より始まらねばならぬ。――

たとひそれが米國のやうに突飛に極端にはならなくても。

疾風雷撃、迅雷の耳を蔽ふに暇あらざらしめた法官の行動は、一國風教のため眞に社會が感謝すべきところである。しかし法律が遂に萬能のものでない以上、文明の内容實質の上から見て、民族の内的生活に存する時代錯誤の大なる缺陷には、世人が更に十分の考慮を要すべきものがあるだらう。單に婦人の虚榮といふが如き、男子にのみ都合の好い議論をして自ら安んずべきではないと思ふ。固よりこれらの點に就いて警告し論斷するには、私の如き門外漢ではなしに、世おのづから別に其人あるべき筈だ。ただ今回の事件に際して、いまだ兩性關係に就いて多く此事を言ふ人なきを見て、後れ馳せながら私は柄にもない此一篇を草した。『われ豈辯を好まんや』。

擱筆しようとする時、さる婦人雜誌に矢張り同じく此問題に關し婦人のために辯じた或人の文があつたといふ事を聞いた。私はそれを讀む機會の無かつた事を遺憾とする。おもへば深更燭を剪つて肝積と神經とで脱線しつつ書き上げた私のこんな文は、恐らく思想の進運のため何の效果も無からう。もつと複雜な、一本調子でなく三本調子にも五本調子にも出來た、そして表から裏から、上げたり下げたり、宥めたり賺したりした、上品で穩健で老巧な、また世俗の珍重する形式論理から見て筋の通つた文によつて、女子虚榮論の非を説いたものでもありとすれば、私は其方をお薦めしよう。

（大正七年五月）

病的性慾と文學

上

人類が原始時代からその儘に傳へてゐる男女兩性の關係、少し廣く言へば性慾の問題は現代人の生活の上に樣々の禮い暗黑の影を投げて、文明の爛熟と共に今までに無い重大な意義を有するに至つた。從つて現今に於て英吉利のハヴロック・エリス氏や、瑞西のアウグスト・フォレル氏などの碩學を始として、獨、佛、伊、諸邦の多くの學者が此方面に向つて眞實なる研鑽の勞を吝まないのは、決して謂なき好事の業ではない。特にまた此性慾問題は人間生活の記錄たる文藝とは、直接に淺からざる關係を有するに至つて、前世紀の中頃自然主義の勃興以來、詩文界に於て殆どその中心問題たるの觀を呈するに至つた。

すべての英雄豪傑も、また思想上藝術上の天才も一切皆これ精神病者に他ならぬと喝破して、一世を驚かした有名な伊太利の犯罪學者が世を去つてから、早くも既に數年を經た。が、その名著『天才と狂氣』はこの頃遂に日本譯も出來た。かれの所說に對してはたとひ多くの辯難攻擊はあるにせよ、

その極めて大膽なる論斷の半面に、牢乎として動かすべからざる眞理のあることは疑はれまい。それは兎に角、精神病理學（サイコパソロジイ）の見地からして詩人の閲歴を研究し或は作品を解剖しようとした學徒の試みは、決して徒勞には終らなかつた。その最も極端なる一例としては、かのマクス・ノルダウ氏がその著「頽廢（ディゲネレーション）」に於て一切の近代文藝を以て精神病者の囈語に過ぎずと斷定し去つた如き、私共はその燥急なる結論と無鐵砲なる僻說とに對して全然不同意を表しながらも、なほ且彼が根氣よくも調べ上げた研究の價値に對して、相當の敬意を表せざるを得ない。

病的心理現象のうち特に性慾に關係したものは、單に文藝の上に現れたものだけに就いて言つても、その種類は甚だ多い。學者は病的性慾心理を分類してその一々にむつかしい言葉で拵へた何々イズムの名稱を附けてゐるが、私は今それを片端から皆受賣しようといふのではない。唯最近に於て新聞雜誌の上に屢その事實を傳へられ、或は文壇の新作家たとへば谷崎潤一郎氏の作品などに描かれた二三の病的性慾の現象に就いて、文藝史上の著しき事實の一斑を語らうとするまでである。

近頃同性の戀といふ事、即ち斯道の學者の所謂性慾倒錯（コントレーレ、セクシュアール、エンピンドウング）の現象が屢世人の注意を惹いた。殊に女子の間の同性性慾（ホモセクシュアリテエト）に就いては、一部の敎育家なぞをして今更のやうに目を聳てしめたが、これは遠い希臘の昔、女詩人サフォオの、今僅かに斷章として殘されたる熱情の歌の背後にあつたと傳へられる女同志の戀、即ちサフィズムである。此女詩人はその頃美しい酒と女の產地として知られ

たレスボスの島の生れだと云ふのでその地名を取つて、英語ならば『レスビアン・ラヴ』と云ふ言葉が、女子同性間のある極めて不自然な病的現象を意味することになつてゐる。

女子の同性性慾は最も多く貴女の間に見られると云ふのが凡ての學者の說だが、中には有名な女傑や女王の中にもその例が甚だ多い。歷史上の人物で二三の例を擧ぐれば、瑞典の女王クリスティイナは君主として非常に英邁な人であつたのみならず、十七世紀の詩文學藝の上からも忘れられない人であるが、この女王は飽くまで結婚を嫌つた。そして性慾倒錯の人だとして傳へらてゐる。また露西亞の女王イリザベスは彼得大帝の子で、七年戰爭などに英名を轟かした美人であつたが、これも性慾倒錯の人であつたさうだ。おなじく露西亞のカザリン二世、英國の顯理八世の五度目の皇后カザリン・ハワアドなど、皆この病的性慾の人に數へられてゐる。

純文藝の方で女同志の戀を書いた最も著しい作は、十八世紀のディイドロオの『修道女』で、これは尼寺の內部を寫して、性慾倒錯の尼院長が若い一人の尼を苛責する隨分細い所まで突込んだ描寫である。また性慾硏究では殆どそのあらゆる種類を網羅してゐるバルザックの小說には『こがねの目の娘』があり、ゴオティイエエの傑作『マドモアゼル・ドゥ・モオパン』や、ゾラの『ナナ』にもこれが寫されてゐる。そのほかモオパッサン、ブウルゼエ、ドオデェの作にあらはれ、詩ではラマルティイヌ、スヰンバアン、ヹルレイヌの集中に女同志の相思が美しく歌はれてゐる。

しかしこの性慾倒錯の人は、古今東西ともに男性には甚だ多い。德川時代の小說たとへば西鶴の作『男色大鑑』に描かれたやうな話は、更に戰國時代の昔に於て武士や僧侶の間に少しも珍らしくなかつた。試みに平出氏の『近古小說解題』によつて調べて見ても、秋夜長物語、鳥部山物語、松帆浦物語、嵯峨物語等の小說は皆この性慾倒錯の物語である。これらより後の時代の作品に就いて調べたらば、もとより枚擧に遑なき程であらう。

天才或は英雄と云はれた人物の性行には、動もすれば常軌を逸した傾向の多いところから、例のロムブロオソー流の論では之を病的なりと見做す。そこで性慾倒錯の人であつたと速斷されてゐる偉人も甚だ多いが、中には明らかに後人の牽强附會だと思はれる者さへ尠からずある。希臘の大哲ソクラテエスやプラトオンは普通に同性性慾の人であつたと認められてゐるが、眞僞は果して如何であらうか。ただ希臘時代に於ては、性慾倒錯といふことが公然世間から認容されてゐて、近代の英米に於ける如くそれが罪惡視されたり法律の制裁を蒙つたりするやうなことは全く無かつた。否な公然とかかる不自然な愛に惑溺しながら、例へばエバミノンダスのやうに一世の尊敬を得てゐた人すら決して珍らしくなかつたのである。希臘藝術に於て特に男性の肉體美が尊ばれたといふやうなことも、此現象と淺からざる關係があつたらしい。

この病的現象は北歐よりも南歐に多い。中にも希臘などでは、流行に促されて自ら此風習に惑溺す

る者も多かつたが、既に先天的にさういふ性癖を有つてゐる者の方が遙かに普通であつた、殊にそれはドオリアン人種の中に多かつた。また南歐のうちでも伊太利はその最たるもので、羅馬時代には殆どそれが社會の常習であり風俗であつたかの如き觀があつた。殊にその頽廢期であつた帝政の末年に於て烈しかつたことは、多くの史家の考證が示す事實である。羅馬歷代の皇帝にはその例甚だ多く、ジュウリアス・シイザァを始としてオオガスタス、ティベリアス、カリギュラ、ニイロ、トゥレイジャン、ヘイドリアン以下殆ど枚擧に遑なき程である。いつも自分の肉體美を誇とした該撒(シイザ)が陣中の逸話は多く此事實を傳へ、またヘイドリアン皇帝が美男の奴隷アンティノアスとの相思はさまざまの傳奇的色彩に飾られて有名な史實となつてゐる。恐らくはこれは後世のフレドリック大王とともに最も著しき例であらう。羅馬帝政が頽廢の極にあつた頃、在位三年に及んだ皇帝ヘリオガバラスの如きは自ら女裝して自分の愛してゐる男子に身を捧げたといふ。かういふわけだから、羅馬の文學には勿論深い關係があるので、大詩人ヴアジルにも此性癖があつた事を學者は傳へてゐる。そのほかカタラスやオヸッドの作品にある美しい牧童の讃美をも、皆この性慾倒錯によつて解釋する人が多い。

　中世から文藝復興期へかけては、この風習がまた甚だ盛であつたらしい。ダンテの『神曲』地獄界十五章の終の方に、

『この人々みな學高く譽も高かりしが、地上にて同じ一つの罪に身を穢したり。』といふ句があるが、

此『一つの罪』といふのは即ち西鶴の好色本などにある『衆道』を言つたのだ。當時才學一世にすぐれた學者が、弟子たちの美男に想を懸けた者の多かつたことがこれで知られる。

いふまでもなく文藝復興期(ルネッサンス)は、中世禁慾時代の後を承けて肉の解放された時代である。從つて人々の性慾生活(ボイタ・セクシュアリス)の上にも、色々の意味に於て注目せらるべき事柄が多かつた。即ち當時の古典學者(ヒュウマニスト)の中には同性性慾に溺れた人が尠からずあつたので、その著しき例としては佛蘭西のミュレエ(又ムレトウス一五二六—八五)の如きがある。彼ははじめ巴里で多くの青年の爲に哲學と法理を講じた頃、名聲一時に高かつたのだが、例の不自然な愛に耽つて遂に獄裏の人となつた。後ゆるされて今度はトウルウズに行つて、そこで羅馬法を講じたが、またもやある青年と關係が出來たため罪を宣告されて、二人共に火刑に處せられようとした。ミュレエ身を以て漸く逃れて伊太利に奔り、そこでもまた同じく不自然な亂行を續けて遂に世を終つたのである。なほ當時の藝術家でいへばレオナルド・ダ・ボンチも、ミケランゼロも皆この性癖があつたと傳へられてゐる。殊に後者に至つてはすべての傳記者が皆この事實を立證し、かれが男性美に對する感性の特に鋭かつた所以を語つてゐる。

英文學でいへばイリザベス朝、なかでもかの豪放の生活と熱烈の詩才とを以て後世に聞えたる大學才人(ユニヴァシティ・ウィッツ)の第一人マアロオこそ、最も著しき例であらう。その作では悲劇『エドワアド二世』に王と嬖臣との關係を描いてゐるが、これは作者もまた描かれた王エドソアド二世も、共に史實の上に於て

性慾倒錯の人であつたのだ。また哲人ベイコンに至つては、毫も疑ふ餘地も無い『ペデラスト』であつた。沙翁にもこの嫌疑がある、といふのはあの名高い小曲集の中に詩聖が熱烈な愛の言葉を捧げてゐる相手の美男が、疑問の中心になつてゐるからである。しかし沙翁が女性との關係の甚だ深かつたことを思ふと、この性慾倒錯といふ點はどうも私共には受取れないやうに思はれる。ただ僅かに此小曲に現はれた位のことを以て嫌疑の材料とするならば、處女王朝の抒情詩人の作にはそれかと思はれるやうな詞句は毫も珍とするに足らない程多いのである。

感情生活の豐かな詩人の常として、友愛の情も殆ど常軌を逸して濃かな場合が多い。それを例の枯淡な學究的觀察から、性慾的關係でもあつたやうに誤認する例は決して尠くない。たとへばバイロンの學生時代の友情や、或は彼が二十二歳の時に親交のあつた一年青年のために遺産の一部を分たうと考へた事實を捉へて、直ちにバイロンにも此性癖があつたと斷定する人がある。又もつと極端な例をいふと、テニソンが大作『イン・メモオリアム』にその死を哭した親友ハラムとの關係にも、性慾分子が這入つてゐたかのやうに速斷するに至つては、寧ろ滑稽の感がある。

近代の所謂頽廢文學の徒に至つては、此病的性癖の顯著な例が最も多い。先づ『惡の華』の詩人ボオドレエルを始として、ヹルレイヌが美少年詩人アルテュウル・ランボオとの戀に落ちて、妻を棄て家を去り、二人相携へて放浪の生活に入つた話は特に名高い。ヹルレイヌは後にこのランボオとの間

に不和を生じて、遂に拳銃騒ぎとまでなつて獄に投ぜられた。詩集『靈智』は實にこの時の製作である。また英吉利のオスカア・ワイルドの有名な男色事件に至つては、既によく邦人の間に知られてゐる事で今更言ふまでもなからう。ただ最後に一言したいのはホヰットマンである、熱烈なる肉體の讃美者として彼の詩篇には男性美を歌つたものが甚だ多い。殊に詩集『草葉』のなかに出る『男の愛』といふ言葉の意味は、熱烈な友情が肉體の接近によつて情緒の快感を伴ふの意を含めて言つてゐる。然しこの詩人は他の場合に於て、明らかに同性性慾を自然に背ける罪惡なりと明言してゐるので見ると、それとこれとは或は別問題として考へたのかも知れない。此點は確かに疑問として殘るべきだ。

昔からよく、一切の色慾を斷つた道心堅固の人、或は高德の士と云はれる人々に、自分では全く無意識にこの同性性慾の性癖を有し、これが變化して慈悲博愛の美德となつてゐるやうな場合も尠くないことを、エリスなぞは說いてゐる。また多くの天才の中には、女色と共にこの同性性慾にも溺れた人たちが尠くない。專門學者は之を名づけて『兩　性　慾　心　理』と呼んでゐるが、先に擧げたマアロオやヹルレイヌは卽ち此適例である。又ドストイエフスキイが描いた西伯利亞囚人の生活にも、兩性慾兼備の例が澤山出てゐる。

下

だいぶ以前に雜誌『スバル』の紙上で、ある若い作家――誰であつたか今名は忘れたが――の小說に、女を傷け血を流してそれを見て男が快感をおぼえるといふ『サディズム』の事が書いてあつたのを初めて見たとき、私は日本にもかういふ類の作物が出來るやうになつたことを珍らしいと思つた。それから後、谷崎潤一郎氏の作などを見てゐると、屢この性慾の變態現象が材料になつてゐることを見、最近に於ては同氏の作『饒太郎』(中央公論大正三年九月號所載)に、作者自ら銘打つて『マゾッヒズム』を樂しむ主人公を描いたのを讀んだ。今多くの病的性慾のうちで、ことさらに『マゾッヒズム』と『サディズム』との二つが西洋文藝に現はれた例を私が說くのは、我が國文壇の近頃の作品に、多少の關係があるからである。先づ『マゾッヒズム』の方から言はう。

『マゾッヒズム』といふ言葉は獨逸の性慾學者クラフト・エビングの命名であるが、彼はその著『病的性慾心理(プシーパティア・セクシユーリス)』に於てこの病的現象に下の定義を與へてゐる、『心理的性慾生活(ボイタ・セクシユアリス)の一變態にして、これに罹れる者は已を威壓し屈辱し虐待する異性の人の意志に、全然無條件に服從すといふ觀念によつて、その性的思想感情を支配せらるゝ者なり』とかう言つてゐる。元來このマゾッヒズムといふ名は、墺多利の小說家ザッヘル・マゾッホ(一八三六――一八九五)の作品に此病的性慾を描いたものが多いから、その名を取つたのである。しかしこれはマゾッホのみならず、ゾラにもあればルソオの『懺悔錄』にも出てゐる。バルザックが巴里生活の暗黑面を描いて、あらゆる醜穢な寫實の極致

を盡くした『貧しき親』の第一卷『從妹のベツト』の中にも描かれてゐる。

異性の者から苦痛を受けて、それを甘受するのみか却つて肉的快感を得るといふ此病的狀態は、女子よりも男子の方に多い。元來病的と云ふのも要するに程度の問題であつて、戀愛といふ事には多少みな異性から受ける苦痛を喜ぶといふやうな心持が伴ふものである。これは古くから文學の書物にはよく出てゐることで、中世の浪漫的な戀物語などに屢ある話だ。後世のものでも、たとへば十七世紀の英文學に忘れられない名著になつてゐるロバト・バアトンの『鬱憂の解剖』は、當時の書物としては人の心理をなかなか巧く解剖し透察した面白い本であるが、その中に戀する者の心理を說いた條に、「かれらは大抵は奴隸であり捕虜であり進んで奴僕となる者で、カスティロが言つた如く戀人は女の奴隸に外ならぬ。女のために囚人となり勞役者となるものだ」（同書第三卷、第二部第三章）とあるが、これが常軌を逸して烈しくなれば約りマゾッヒズムだ。

古い昔の事をいふと希臘のアリストテレエスなども有名なマゾッヒストで、この大哲が四つ這ひになつて、鞭を持つた一人の女がその上に馬乘りになつてゐる繪がある。羅馬の方では詩人オヰッドに最もよく出てゐる。近代ではゲエテにもあれば、ハイネやプラアテンの詩篇にも明らかにマゾッヒズムの痕跡があると評家は言つてゐる。もう一つ新しいところで振つた例を言へば、鐵血宰相比公が戀人に送つた手紙にも、確かにこの病的な文句がいくらも出てゐる、とこれは私は讀んだことがないが專

門家がさう言つてゐる。しかしビスマアクなぞは例外として、かういふ病的傾向は概して神經質で多情多恨で謂はば詩人肌の人に多く、また野蠻時代には少くして文明の進歩と共に増加することも今更言ふまでも無い。また女が頻りに暴威を揮ふ西洋では、今もなほ男尊女卑の風の烈しい日本などよりもかういふ病的傾向が多からうとは、誰が考へてもさう思はれる。實際私は自分の狹い讀書範圍の中から、日本文學に於けるマゾッヒズムの例を見出さうと思つても、一つも思ひ出せないのである。

次にこの名の源をなしてゐるザッヘル・マゾッホその人に就いて言ふと、彼は今度歐洲戰亂で有名になつたガリシアの人で、レムベルグ市の生れである。その作中、英譯になつてゐる『猶太人物語』に收められた二十餘種の短篇は、東歐の此地方に住む猶太人特有の風俗を描いて、隨分醜穢な描寫を試みた物であるが、之によつて見てもガリシア地方の女は極端に男子を抑壓して之を虐待するか、或は男子に向つて全く奴隸的服從の狀態に滿足するか、この兩極端の何れか一方である事がわかる。マゾッホは元來幼少の頃からして、所刑の圖を見たり悲慘な殉教者の話などを讀んで、殘忍な血なまぐさい事柄には無上の快感を覺えたさうであるが、その十歲の頃に既に下のやうな話が傳へられてゐる。卽ち彼の父かたの方の親類に淫奔な美人の或伯爵夫人があつたが、幼いマゾッホは頻りにこの夫人を敬慕した。夫人の方でもそれを憎からず思つて、左右に侍らせて色々の用事をさしてゐた。或時のことである、マゾッホは夫人の前に跪いて貂の皮の上靴を穿かせようとしてその足に接吻した。夫

人は微笑してマゾッホを蹴つたので、少年はひどく快感を覺えたさうだ。この類の話はマゾッホの傳記にいくつも出てゐる。貂の皮に限らずすべて毛皮を愛するのはかういふ病的天才によくあることださうだが、マゾッホは毛皮を着て鞭を持つた女が何よりの好物であつた。

マゾッホが結婚して間もない頃、ある時細君に鞭韃して呉れよと求めた。細君が聽かなかつたのでそれならば女中にやらせようとした。細君にはどうしてもそれが眞面目だとは受取れず、遂に女中が猛烈に笞打をやつたのでマゾッホも滿足したさうだ。しまひには釘の附いた鞭を特別に拵へて、いやといふ細君に無理にそれを持たせ、自分を鞭打たせた。殊に創作に從事してゐる時などは、毎日のやうに女性から此鞭韃を受けてその興奮で筆を走らせ、彼の作中にお定まりの男子虐待の女を描くのを快心の事としたさうである。ある批評家は、イブセンが例のノラ式の女を出して一方にはまた甚だ意氣地の無い男子を描くのを見て、この近代の大戲曲家をもマゾッヒストの仲間として論ずる人があるが、それは勿論あまりに極端な僻說である。

性（セックス）といふ點から見ると粹純な男性もなければ女性もない、大抵の人間は皆兩性混合であるといふことを曾てワイニンゲルの本で讀んだが、マゾッヒズムの性癖の男子などは頻りに女裝を喜び、之に對する女子の方は煙草を喫んだり乘馬鞭を振つたりして、昔の女兵（アマゾン）のやうな勢になるといふ話だ。日本でも近頃、若い生白い面をした男だか女だか分らない奴が長襦袢を着て喜んで見たり、女の癖に男

子類似の服装をして都大路を横行濶歩する風が流行(はや)るが、これは追々にマゾッヒズムの方に發展して行くことであらう。

可愛さと憎さと、愛情と苦痛と、極端に相反したこれら二つのものの間には不思議の關係があるらしい。時々は無理を言つて手荒いことの一つもするやうな亭主をこそ、此上もなく嬉しと思ふ女房もあらう。ボッカチオの『十日物語(デカメロン)』や、チョオサアの『キャンタベリ物語』の中の『學者の話』に出て名高いグリゼルダ堪忍物語と云ふのがある。良人からあらゆる虐待を受けて、少しも不平な顔をせずにそれを忍んでゐる女の話であるが、あれなども一種の病的狀態だと見れば見られるであらう。

さて苦痛を受けて、喜ぶマゾッヒズムとは正反對に、苦痛を異性の者に與へて、喜ぶ心理狀態をサディズムと呼ぶのである。詳しく言へば自分の戀人を打擲し虐待し負傷せしめ、殊にその血を流すを見て肉慾の快感を得る者である。普通は引搔いたり噛附いたりするか或は鞭撻(フラゼレイション)の法によるのが精々だが、少し病勢の昂進したのになると必ず血に渇して來る、そして遂には相手を殺して仕舞ふのが所謂性慾殺人(ルストモルド)である。また死屍を弄んで快感を貪らうとするのみか、これを寸斷してはじめて性慾の滿足を得る者を、學者は名づけて『ネクロフアイル』と云ふ。これらは犯罪者に往々見られる病的心理である。

東洋でこのサディズムの例を、寡聞なる私は今直ぐに思ひ出さないが、かの紂王の寵妃妲己の話な

どは確かにこの一例とすべきだと思ふ。紂王が炮烙の刑を設け、銅柱に膏し之を炭火に加へ罪人をしてその上を行かしめ、炭中に墮つれば妲己は乃ち快げに笑つたといふ類の話がそれだ。西洋史の方では羅馬の皇帝ニイロ、ティベリアス、カリギュラなどが、確かにかういふ性癖を有してゐたと考へられる。女性では十六世紀のカザリン・デ・メディチだ、聖バアソロミュウ祭日の夜の新教徒大虐殺を見て快感を貪つた話を、此病的性慾心理に歸する學者もある。古くは羅馬の皇帝クロオディアスの皇后で、淫蕩と悖徳とを以て古今の史上に名高いメッサリナも、矢張りサディストであつたと見做されてゐる。

文藝の方では、十八世紀の佛蘭西のドウ・サッドの作品に此病的性慾が描かれてゐるといふので、『サディズム』といふ名稱は出來たのである。オスカア・ワイルドの『サロメ』が、銀盤の上に置かれたる血汐したたる戀人の生首に接吻するなどもこの方の傾向がある。また獨逸のハインリッヒ・フオン・クライストの傑作である『ペンテジレエア』のうち、狂亂の女主人公が、自分の手で殺した戀人アヒレスのまだ體溫ある屍體に、犬と一緒に咬みつく深刻痛烈の場面をも、或批評家は此サディズムだと解してゐる。さてはまたニイチェの『ツアラトゥストラ』のなかに、『婦女に行かんとするや、さらば鞭を忘るな』といふやうな、どうもそれらしい文句が澤山あるといふので、ニイチェもこの病的性慾の人だと斷定されてゐる。現代の詩人ではヱデキンドが屢その詩篇のうちに性慾のかうい

ふ病的興奮を歌つてゐる。又ずつと古いところで言へば、十七世紀の末に出來た「青髯」の物語の主人公ラウウルといふ武士も、矢張りこのサディストであらう。彼は若い妻に城内のすべての鍵を渡したが、或特別の一室だけは開けることを嚴重に禁じて置いた。しかしかういふ時に禁制の木の實を食べたいのは女の常である。そこで主人の不在中を見計らつて其一室を開けた。見ると驚くまいことか、今までの幾人かの先妻が皆慘殺されて、死屍は此の一室に累々たる有樣であつたといふ。これらは或は上に述べた「ネクロフアイル」の仲間であるかも知れない。なほ日本の德川文學の中をよく調べたならば、此種の性慾描寫があるだらうかと思ふ。

（大正四年一月）

ルウヱイルの漫畫

日本ででも人氣役者の似顔繪なぞは、江戸時代から隨分行はれたものであるが、しかし西洋ほどの流行は明治になつてからも見られない。元來西洋人といへば何故(なぜ)またあんなに似顔(カリカテユクル)を喜ぶのだらう。私どもには不思議と思はれる程だが、それだけまた此方面で繪も十分發達してゐる。眞面目くさつた英吉利人までが、評判の Max Beerbohm(マックス ビアボオム)（本卷「若き藝術家のむれ」の條參照）のかいた戲畫を、それやと言つて面白がる。人氣を一身に集めてゐるやうな政治家や俳優は勿論のこと、詩人でも小說家でも、ひとたびマックスの戲筆に描かれるとさんざんな目に遇ふ。それをまた皆が面白がつて喝采するのである。

佛蘭西の方では今 Andra(アンドレ) Rouveyre(ルウヴヱイル) の似顔繪が最近の評判物であるが、奇拔な、人の意表に出でるといふ點では眞に痛快を極めた、またと類の無い面白いものである。批評界では Brandes(ブランデス) をはじめ、André(アンドレ) Gide(ジイド) や、Remy(レミ) de(ドウ) Gourmont(グウルモン) のやうな名家が盛んにその提灯を持つし、詩人の故 Jean(ジャン) Moréas(モレアス) なども美しい散文で、この一派の漫畫を世に紹介した。一時畫壇を風靡してゐたあの奇矯な後期印象派はいふまでもなく、立體派 Cubism、それからまだ進んで後期立體派 Post-cu-

bism の破壊的な奇抜の畫風までが、追々はこの漫畫の方面へも這入つて來るものらしい。

どんな美人でも名優でも、ひとたびこのルウヱイルの毒筆にかかつたが最後、さんざんな目に遇はされる。中にも一番ルウヱイルからひどい目に遇はされるのは婦人である。評判の女優やオペラの歌ひ女をわざわざ選び好んで、猛烈な毒々しい得意の畫筆で翻弄するのは眞に痛快で、かかれた當人さへ苦笑を禁じ得ないだらう。數年前物故した彼の名高い詩人 Catulle Mendès の夫人を、ルウヱイルが描いたのを見ると、むやみに肥つた、まるで豚のあたまのやうな物にして描いてあるが、嘲弄もかうまでになつては餘りに烈しいといふので、ルウヱイルは遂に法廷に訴へられようとしたといふ名高い話がある。かういふとルウヱイルも何だか、あの北歐の有名な女嫌ひの文豪 Strindberg のやうにも聞えるが、よく調べて見ると必ずしもさうではないので、づまり彼は平凡を忌む結果、女の顏の異樣な特徴をつかまへて、極度にそれを誇張して描くため、ああも思ひ切つて殘酷に醜化することになるのだらうと思はれる。勿論この畫家の頭にアイロニカルな、厭世的な、强ひて物の暗黑面を臭のやうな目で見ようといふ傾向のある事は、否定する事の出來ない事實である。ブランデスは彼の畫筆を評して、野獸がその獲物を弄ぶやうに、さんざんに鋭い爪牙で引裂く殘忍な描きかたをするのだ、と言つたのは面白い評語である。

ルウヱイルの畫は、雜誌などに出てゐた物のほか、纏まつた一冊の畫集として私どもがはじめて見

たのは、千九百〇七年に出た『聖（きよ）き骸（むくろ）』"Carcasses Divines" といふので、これは現代名士の似顏を集めたものだ。そのボオドレエル式の表題の附け方からして既に面白い。全卷を三部に分けて、第一部は Portraits で、今の佛蘭西の詩人、小說家、女優、批評家などの似顏が五十四枚、第二部は或女優（名はわざと內證にして）の monographie で、六枚のデッサン、第三部はまた或別の女優の似顏（カリカテュール）、同じ女優を色々の姿勢や位置に置いて、それを三十五枚のデッサンに描き分けたものである。同一人の顏ではあるが、種々さまざまな表情といひ氣分といひ、それを一々巧みにかき分けて、一枚ごとに全くちがつた感じの畵に仕上げたその伎倆に至つては眞に驚歎の外はない。日本の毛筆で畧くろぐろと一刷毛なすつたやうな、馬鹿に粗い太い線を使つたのも多い。これこそ奔放と言はうか、殘酷と言はうか、眞に評しようのない奇拔な畵風である。（本卷第一圖乃至第五圖の挿畵は、此『聖き骸』の畵風を示さんがために揭げた。）

それから數年のちに出たのが『女部屋』"Le Gynécée" といふ一卷で、これは女の裸體の習作八十枚を集めたもの、その官能的な畵風が先づ著しく世の注意を惹いた。ジャン・モレアスは此畵集を、戀愛の Danse Macabre（扮鬼舞踏）だと評し、その序文を書いてゐるレミ・ドゥ・グウルモンも、『これは生の書である、夢の書ではない』と言つた。またブランデスに言はせると、この畵集には戀愛に於ける婦人の肉的方面を赤裸々に描いたもので、遺憾なくその獸性を表はしてゐる。婦人のあらゆる動作を仔細に觀察して、行儀よくしてゐるところからはしやいだところ、何でも常人の目に附きさ

うもない一擧一動の末まで、その特徴を誇大して寫したものださうだ。勿論これは日本の公刊物などに紹介する事を許されないものだらうが、私みづからまだ見る機會を得ないのである。或人が折角佛蘭西から持つて歸つたのを、横濱で沒收されたといふ事を聞いたが、殘念でたまらない。

　最近にまたルウヴェイルの新畫集が、巴里の Mercure de France 社から出た。今度のは題して『現代の肖像』"Visages des Contemporains" といふので、歐洲現代の名士八十六人の畫像である。例によつてレミ・ドゥ・グウルモンの熱心な推讃の序文が附いてゐるが、それには下のやうな事が書いてある。

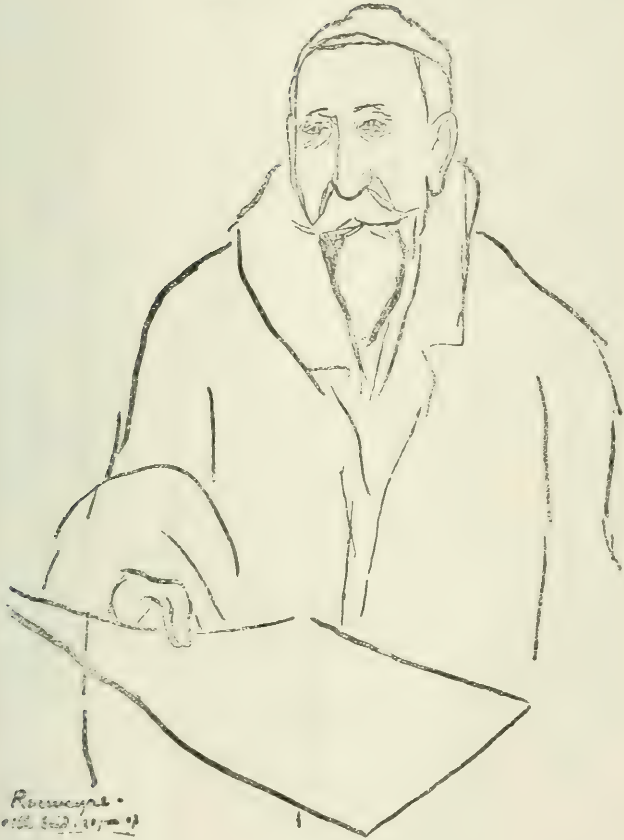
　ルウヴェイルの繪には寫眞といふやうな分子は微塵もない。さりとて普通のカリテュウルのやうに單に人を笑はせるのでもない。かれ獨得の伎倆といふべき解剖と構造との力で、つまり吾々をして考へさせるやうな繪をかくのである。ちよつと見ると、壁に映つた影の輪郭だけを、木炭か何かでさらさらとなぞつたやうなごく簡單なものだが、その一線一劃ことごとくルウヴェイルその人に特有のものである、斷じて他人の模倣を許さない生き生きしたところがある。グウルモンの言葉その儘を引用して言ふと、『かれが見る顏は獨り彼によつてのみ見られたもの、それを描くに先だつて彼は先づそれを理解しようと求める。線でも陰影でも目鼻だちでも凹んだ所でも、また色でもみな全くルウヴェイル獨得の我流で描いてあるが、それがまた此畫家のよく合點してゐる言葉で語られてゐる。考へてゐる頭

のなかで、すべてのものが考へてゐるのである。實際ルウヹイルのかいた顏で、一つの心狀の象徵になつてゐないものは一つも無い。その生命や言葉が、皮膚の皺一つづつの中からも出てゐるやうに見える。』

ルウヹイルの繪をよく見てゐると、あの無造作にかきなぐつたやうな線のなかに、一つ一つ生命（いのち）の流が溢れてゐて、それがみな張り切れるやうな力で躍動してゐる。時にはあまり心理を透察する力が鋭いために、殘忍だとも言ひたいやうな繪も出來るが、それがまたなかなか痛快だから面白い。いやに澄ました Anatole France.（アナトオル・フランス） 燒鳥のあたま見たやうな Bergson（ベルグソン） の顏、紙屑を丸めたやうなブランデス、目ばかり大きくかいた D.Annunzio.（ダヌンチオ） 痩せつぽちの露西亞の舞踊女優 Rubinstein（ルウビンスタイン） の姿ただ、皆曾て雜誌『メルキュウル・ドゥ・フランス』に出てゐた面白いものであるが、今茲に複寫する事の出來ないのを私は遺憾に思ふのである。

此の一篇は數年前、東都の或新劇團の機關雜誌のために草したものであるが、當時私の手許に在つたルウヹイルの繪が今見當らないので、更に文藝雜誌『メルキュウル・ドゥ・フランス』に在る數葉を採つて茲に揭げた。Natalie Clifford Barney（第七圖）と Marquise de Mac-Mahon（第八圖）の二枚は、此畫家が婦人を描く殘忍な毒筆の一斑を示してゐる。その次の Docteur Doyen（第九圖）は佛蘭西現代の外科學、婦人科學の泰斗。また Francis

第一圖



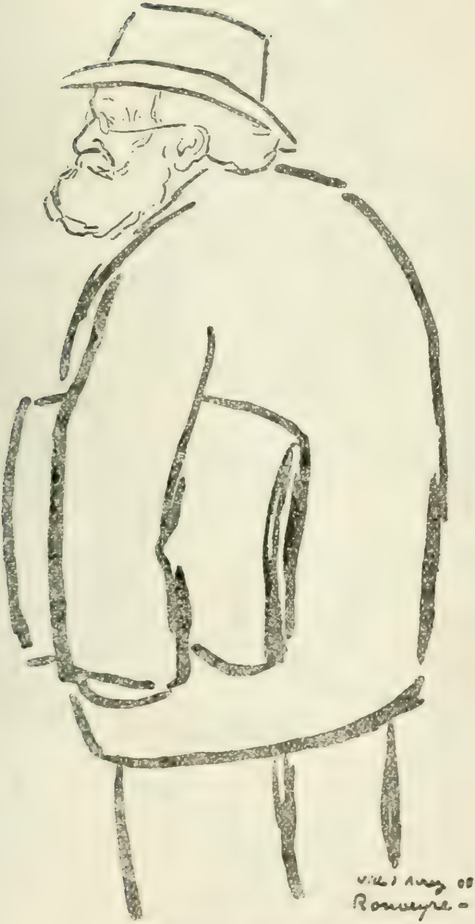
Anatol France

第二図



Anatol France

第三圖



Docteur Metchnikoff

第四圖



Paul Bourget



Une Comédienne Tragique et Comique

第六圖



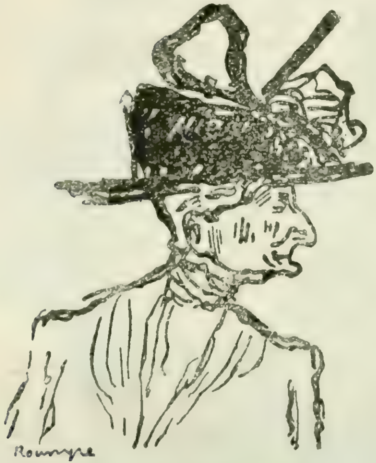
Rene Doumic (en bas), á une comference de

圖七第



Natalie clifford Barney

圖八第



Marquise de Mac-Mahon

第九圖



Docteur Doyen

第十圖



Francis Jammes

第十一圖



Comtesse de Noailles

お伽噺の話

一　鉢かづき

物語に對する興味は人間の本能性である。個人としては子供の時から、また民族としては原始時代から、色々な荒唐無稽の談に耳を傾けに興がつてゐる。小むつかしい近代の文學も、遠く源へ遡れば矢張り昔の武勇譚や童話や怪談の類から進化したものに過ぎない。わが室町時代に出來た『お伽草子』は多くの古傳說を集めた童話集であるが、それがまた後の德川盛期の戲曲小說の起源をも爲してゐる。

此『お伽草子』の中に收められた『鉢かづき』の話は、爾後幾世紀の間、『桃太郎』や『文福茶釜』と共に日本の子供の心を樂しませた名高いお伽噺である。私は今比較說話學に於ける此話の意義を語るに當り、先づ原本の『お伽草子』によつてその荒筋を述べよう。

河內の國、片野の邊（ほとり）に備中の守さねたかと云ふ人があつた。何一つ足らぬ事なき富裕の身であつたが、長らく子供の無いのを嘆いてゐた。ところが如何（どう）した拍子でか一人の姬君が生れた。姬は肩の隱

れるほどの大きい鉢を冠つてゐた。母親が詠んだ歌に、

　　さしもぐさ深くぞ頼む觀世音、
　　　　誓のままにいただかせぬる。

姫が十三の年に母は死んだ。あとに來た繼母が姫を虐待し父に讒誣したため、姫は遂に家を逃げ出した。河に身を投じたが、鉢を冠つてゐるために顏ばかりは沈まず、遂に漁船に救はれる。それから人里へさまよひ出た時、ふと國守の山蔭の三位中將の目にとまり、鉢を脫いで顏を見せようとしても鉢は如何しても取れない。そのまま國守の館に風呂たき女として置かれた。

この中將殿には四人の子があつた。三人には旣う嫁があつた。四番目の子の大將御曹子と云ふのはまだ獨身で、『優にやさしき御姿、むかしを申せば源氏の大將、在原業平かとぞ申す ばかり』であつたが、ふとこの風呂たき女の鉢かづきに想をかけて、深くも契つた。

御曹子の父君は、かかる見苦しい風呂場女の不具者を息子の嫁にする事には無論反對であつた。母君もまた、鉢かづきは變化の者で必定若君の身に禍するだらうと邪推をして恐れた。しかし御曹子の熱愛は變らなかつた。

父母は二人のなかを割くべく一計を案じた、御曹子ら四人の兄弟の嫁競べをすれば、鉢かづきは見苦しき我が身の姿を恥ぢて自ら逃げ出すだらうと。御曹子は鉢かづきと共に此話を聞いてから苦悶し

た揚句、さらば二人で家出をしようといふので、曉近く急いで家を出ようとする時、『いただき給ふ鉢はかつぱと前に落ち』て割れた。

驚いて鉢かづき姫の顔を見ると『十五夜の月の雲間を出づる』に異ならぬ美しさ、そして落ちた鉢のなかからは金銀珠玉のほか、『十二ひとへの御小袖、紅のちしほの袴』まで出たのである。これは姫の母が初瀬の觀世音を信心した御利生であつた。そこで姫は御曹子に伴はれて嫁競べの席へ出ると、そのあでやかさ、美しさは滿座の人を驚かしたのみか、三人の嫂をして顏色なからしめた。そして父なる中將は喜びの餘り、家産の大部分を御曹子夫婦に與へた。これにひきかへ、嘗て鉢かづきを虐待した繼母は、人々から見棄てられて悲慘なる一生を送つた。

二　世界的傳說

日本民族が昔から語り傳へた此「鉢かづき」の話は、世界各國民の有する說話の比較研究者にとつては、たしかに我が國寶の一つである。此話は種々に形を變へて、遠い古代から世界中到る處に傳播してゐる。歐洲の文明國は言ふに及ばず、阿弗利加のホッテントットの野蠻人も、印度の山奥のサンタル人も、芬蘭人も、セルビア人も皆これと同じ昔噺を有つてゐる。かの深遠の學殖に加ふるに能文健筆を以て名高かつた、英國のアンドルウ・ラングが主宰した傳說學會の研究によると、之と同型の

說話は世界に三百四十五種傳へられてゐる。專門學者がリップ・ヴン・キンクル式と呼ぶ浦島太郎の話や、白鳥處女說話として分類した羽衣傳說と同じく、『鉢かづき』も亦吾々が五大洲の諸民族と共に、遠い祖先から語り傳へた物語である事を思へば、一篇の此童話には重大な世界的意義が見出される。

『鉢かづき』の話の起源は、他の多くの童話と同じく固より有史以前にあるのだが、西洋の文獻に現はれたところで言へば、紀元後第三世紀、羅馬の史家イイリアンの書いたロドオピスの話がそれだ。しかし尚これよりも二世紀遡つて、地理學の方で有名な、かのストレイボオの『地誌』の中にも見えてゐるが、此方は埃及の話になつてゐる。降つて歐洲の中世となると、獨逸あたりでは最も流行したもので、今日グリムの童話集に出てゐる『アッセンパッテル』は即ちこれだ。

英米のは、佛蘭西十七世紀のシャルル・ペロオの有名な『仙女物語』から取つたもので、英語國民の子供でお伽噺に之を聞かない者は殆ど無い、と言つて可いほど名高い『シンデレラ』の話は、即ちわが國の『鉢かづき』の一變形である。

『シンデレラ』の字義は『灰掻きの女』といふ意味で、『お伽草子』の『鉢かづき』の中に、『湯殿におけとありければ、未だ習はぬ事なれど、時に從ふ世の中なれば、湯殿の火をこそ焚かれけれ』とあるに一致してゐるのも面白い。ただ西洋の方のは風呂焚きではなく、いつも爐の隅にしよんぼり坐つ

てゐるエラと云ふ女の義である。

いま英國の劇壇にバアナド・ショオと並び稱せられる人氣作者はジェイムズ・バリイであるが、小說や普通の劇の外に、此人の名を最も重からしめてゐるものはお伽芝居だ。バリイの作『ピイタア・パン』と聞けば、英國の子供は直ぐにやつと笑ふ程に喜ばれるものであるが、最近に此作者は、ここにいふシンデレラの話を戰爭の際物に作り變へて喝采を博してゐる。此人の脚本はいつも女優のモォド・アダムズが演るに定つてゐるが、私はそれを一度滞米中に紐育の大劇場で見た。相變らずの大評判であつた。お伽芝居とは云ふものの、觀客は子供よりも大供の方が多數で、バリイ物を演ずる此女優の收入は、一興行幾十萬弗に上るとささへ聞いた。

三　シンデレラ

西洋のお伽噺の流行する此頃、シンデレラの話も『黃金の靴』と題して既に我が國に傳へられてゐるさうだから、私は玆に唯その梗概を述べて我が國の『鉢かづき』との比較に便しよう。

娘の母が死んだので父は後妻を迎へた。父の存命中は、意地惡の繼母も此娘を可愛がつたが、程なく父も死んだ。繼母の腹に生れた二人の娘よりも、先妻の子のシンデレラの方が遥かに美しく遥かに愛らしきを憎んで、繼母はこの可憐の少女を虐待し酷使した。いつも襤褸の衣物を着せて屋根裏に押

し込めて置いた。

或時、王の宮殿に舞踏會があつて他の二人の娘はそれへ行つたが、シンデレラだけは固より行く事を許されなかつた。爐邊に獨り淋しく取殘されて留守をしながら、しくしく泣いてゐた。すると不意に此少女の教母である仙女がやつて來たので、自分も舞踏會に行きたいと言つて訴へる。仙女はそれを慰めて、

『よろしい、それでは庭へ行つて舞踏靴を一足取つてらつしやい』と言つた。

むすめは舞踏靴の一番大きいのを持つて來ると、仙女は直ちに魔法の杖を使つて之を立派な馬車に變へた。また鼠を六匹取つて六頭の馬に變じ、別に一匹の大鼠を立派な馭者に仕立てた。杖を少女の體に觸れると、見苦しい着物は忽ちにしてまばゆきばかりの舞踏服となり、また特に美しい上靴を一足與へた。

シンデレラが出掛けて行く時に、仙女が與へた大切な注意があつた。十二時までに王宮を出て來ないと、美しい衣裳はまたもとの通りの襤褸になり、馬車も馬も皆初の鼠に還つて了ふと言ひ聞かせて置いた。

舞踏の場では此少女の美しさが滿堂の目をそばだてた。王樣の一人しきやない王子は、忽ちこの少女の手を取つて踊つた。片時もその側を離れなかつた。

十二時近くになると、シンデレラは王子と他のお客にも別れを告げてかへつた。そして仙女に深く感謝した。

二人の異母妹は遲く歸つて來たので、シンデレラは眠い目をこすつて戶を開けに行つた。今晩の舞踏に一人すぐれて美しいお姬樣が來て居られた、と云ふ話を聞いてシンデレラは何喰はぬ顏をして、

『それはどなたでした？』と訊いた。

誰であるか全く見當が附かないので、王子は殊にそれを悲しまれたと云ふ話であつた。少女は異母妹らに、明晩は自分も行つて其美しいお姬樣を見たいから、あなたの古着を貸して下さいと言ふと、意地の惡い妹らは怒つて言下に之を斥けた。

次の晩も亦、シンデレラは王宮の舞踏會に出る事が出來た。王子は夢かとばかりに喜んだ。時の過ぎるのも忘れて二人が手に手を取つて踊つてゐると、まもなく十二時の刻限は來た。お姬樣のシンデレラは慌てて王子の側を去つて一目散に驅け出した。王子はそれを追ひ掛けて行つたが、遂に及ばずして影を見失つた。

シンデレラが慌てて驅け出す拍子に、上靴が片足脫げた。王子は後からそれを拾ひ、自分は此靴の主を見附けて妃にしようと皆の人々に告げた。シンデレラは美しい上靴を片足だけ穿いた儘歸つて了つたのである。

翌日王子は使者を遣つて戸毎に此靴の持主を捜させた。王族や貴族の姫君はもとよりの事、ありとあらゆる女に穿かせて見たが、誰の足にも合はなかつた。使者は終にシンデレラの家に來て、先づ二人の妹娘に穿かせて見たが、とてもうまく適合らなかつた。

最後にシンデレラが進み出て、手に持つ箒を棄てて其片足の上靴を穿いて見せると、不思議や、しつくりと足に適つた。ふたりの妹娘の驚きは之に止まらないかつた。シンデレラは衣嚢から更にもう片足の方の靴を出してそれを穿いて見せた。

その場へ再び姿を現はしたのは仙女である。はにかむシンデレラを忽ちにしてまた美しい服裝の氣高いお姫樣に變へた。使者は此吉報を齎して王子に傳へる。いつもシンデレラを苛めてゐた二人の娘も、今はその膝下に跪いて許しを乞ひ、いつまでも實の妹と思つて呉れよと賴んだ。

シンデレラはめでたく王子の妃となり、後には女王となり異母妹たちは女官としてかしづいたのである。

四　比較研究

五大洲に擴がつてゐる三百四十五種の『鉢かづき』の説話は、傳説學者が分類の根本としてゐるその趣向に於ては無論同一であるが、形には種々の變化がある。ラングの說によると、野蠻人の國では

このフェアリ、即ち日本のには初瀨の觀音になつてゐるところが、山羊だの牛だの羊だの或は犬などであつて、それが可憐の少女を助ける事になつてゐる。少女が男子になつてゐるのもある。

例へばカファア土人の傳へてゐる『黃金の角』と云ふ話では、或男の兒が母に死別れる。固より一夫多妻の事だから、父の他の女房たちが此子供を苛めて、終に牛の子に遣つて了ふ。此子は牛に乘つて家を出て行くと、長い旅の間、牛の右の角から食物や衣物が出て何の不自由もない。或時、敵に出くはして牛は身を以て子供のために戰ひ、遂に殺されたが、その角からは依然として衣食が得られた。かうして得た美しい衣物を着て、此子は遂に美しい女と結婚するに至つたと云ふ。

かういふ動物說話になつてゐるものの外に、また植物說話の形を取つて、死んだ母の墓から生えた樹木が子供を養ふとなつてゐるのもある。露西亞のカレリア土人の如きがこの一例だ。セルビヤや獨逸のは、此樹木が鳩になつてゐる。

此說話に、之を傳へはじめた時代に於ける各の民族の文化の程度や或は氣風の相異などによつて、剛壯なのもあれば詩的なのもあり、趣向も簡單なのと複雜なのとの違ひはある。しかし母に死別れた子供の可憐な境遇、觀音とか仙女とか、また何等かの超自然力の救濟、最後に王子或は美女との幸福なる結婚、この三つの要點に於てすべて一致してゐる。學者は之を天然神話の一つなりと見做し、少女を黎明、繼母を暗雲と解し、雲を拂うて現はるる太陽を王子と釋した。そはともあれ、原始時代に於

てすべての人類が思想發達の同じ階段に在つたとき、同じやうな事を同じ様式で考へたところに、ラング一派の比較神話學の興味が在るのだ。

遠い祖先の代から親から子へ、子から孫へと語り傳へた傳說神話は、彫琢を加へず修飾を用ゐなかつた古代民族の自然の儘の詩歌である。その自然觀人生觀が、文字に現はされた文學のやうに定形を取らずして、流動の形の儘に傳へられた貴き遺物である。考古の學者が太古の石器や土器を研究すると同じく、荒誕無稽の民族傳說、鄕土傳說も亦學者の摯實なる研究に値する事は言ふまでもないが、わが國では斯學の進步が今日なほ萎靡して振はないのは遺憾である。往年高木敏雄君が『比較神話學』の好著を公にして、日本に於ける斯學の建設に最初の貢獻をせられてから、『山島民譚集』の著者柳田國男氏等の『鄕土硏究』となり、近くはまた日本傳說學會の出版物となつたのは眞にわが學界の慶事である。しかし日本の現在では、斯學は未だ研究材料の蒐集時代に在るのだが、更に進んで人類學、比較宗教學、民族心理の研究と相俟つて、眞の組織的比較研究の時代に入るの日は果して何時であらうか。

わかき藝術家のむれ

（大正二年一月『三田文學』所載）

一

數年このかた我が文壇の異彩であつた『スバル』『白樺』『朱欒』などに續いて、近頃はまた新しくからいふ類の雜誌の數が殖えた。『創作』『峽灣』『奇蹟』など、廣告に見える文藝に關する新雜誌の名だけでも決して二三に止まらない。そしてどれを見ても全く商賣氣を離れた、いかにも詩文藝術そのものを愛する人の手に成つたものだといふ事が一見してわかる。私はかういふ雜誌を手にするとき、たとひそこに出てゐる作品の價値如何は問はずとも、先づ若い人々が藝術に對する熱烈な愛慕、新思潮に對して少しも躊躇し逡巡することの無い雄々しい態度、また製作の上にあらはれたわかわかしい努力のあとを見て、尠からず心を動かされると共に、またこれに對する十分な敬意を表せずにはゐられないやうに思ふ。

私は日本の文壇にからいふ現象を見るとき、今から十四五年も前、英吉利の藝苑に生れ出でた同じやうないくつかの雜誌のことを想はずにはゐられない。The Savoy, The Dome, The Pageant,

The Yellow Book といふやうな澤山の雜誌の名は、今ではもう此道の人の外には餘り記憶されてもゐない。どれもみな長くは續かずに廢刊して、今日では既に珍本として値の出たのさへある。そしてちやうど日本で文藝の雜誌が海外新思潮の輸入者であり鼓吹者であるやうに、英吉利でこれらの雜誌はまた大陸文學の紹介者であつて、最近英國文壇の一面をなしてゐる新傾向を産み出すためには、みな與つて大に力あるものであつた。なかでも最も人の注意を惹くに至つたものは、例の John Lane 社から出てゐた年四回發行の The Yellow Book であつた。

　近代の文藝史の上に重要な意義をもつた雜誌では、これらよりもずつと以前に、ロゼッティ等ラファエル前派の The Germ や The Oxford and Cambridge Magazine などがあつた。また大陸文學の方でかういふ青年文士の機關雜誌が續出して、新氣運を鼓吹した最も著しい例といへば、先づ千八百八十年代に出た白耳義のヹルハアレン一派の La Jeune Belgique をはじめとして、なほ La Semaine, Le Type などの類がいくつも出た。佛蘭西のレニエがやつてゐた La Wallonie, マラルメやヹルレエヌの關係してゐた La Basoche などもみな同じ類であつたが、中にはわづか三四號で廢めたのもあつた。が、それが皆各新文藝に貢獻したところは決して尠くなかつた。しかしこれらは皆多くは一黨一派の機關であつて、或主義を標榜した新運動の代表であつた、從つて隨分こちたい Propaganda 的のものも無いではなかつた。が、今私がここに說かうとする英吉利の諸雜誌、ことに

The Yellow Book などは全くさういふ一派の主張や傾向を代表したものではなかつた。ただ世の俗衆を離れて詩文藝術を愛する人々が集まり、自分たちの製作を公にし意見を發表するための艸紙に過ぎなかつたのである。だから同人のなかには小說家もあれば詩人もある。畫家もあれば批評家もある。傾向から言つても、寫實主義の人も浪漫的な人も耽美派の人も色々あつたといふ風で、唯皆が藝術に對する熱烈な愛慕といふ一點に於て相合し、例の常識と道德とのほか何ものをも顧みない俗衆に反抗しよう、といふ態度に於て一致してゐたといふだけである。どこまでも作家の個性と作品の獨立とを重しとする文藝の本質から言つても、全く主義流派の如何を問はずに、各みな自己の特色を發揮した作を寄せてゐたのは面白いとおもふ。

『黃表紙』——假にかう譯しておく。表紙が每號黃いろのクロス綴であつたから此名がある——がはじめて出たのは一八九四年、それから十三號まで出て廢刊したのだから、わが國の文壇ではちやうどこれとよく似た雜誌の『文學界』に透谷、天知、柳村、藤村、禿木、秋骨、孤蝶の諸家が、盛んに筆を揮つて淸新の趣味を鼓吹された頃に相當するだらう。先づ繪畫意匠などの方は Aubrey Beardsley、詩文の方は Henry Harland が主になつてやつてゐた。これに筆を執つてゐたものは眞に十人十色で、A. C. Benson のやうな人もあれば、Saintsbury や Gosse の名も見える。皮肉屋の Max Beerbohm、いつも氣の利いた評論を書く Waugh、詩人では Davidson, Dowson, Symons,

Yeats, 小説の方では Gissing のほかに Crackanthorpe, それから詩でも批評でも小説でも何でも達者な Richard le Gallienne など、數へて見ると英吉利の新文學に關係のある大抵の名は出てゐた。これらをいま一々批評することは、とても紙幅が許さないから、私は唯ここにその中の著しい數人に就いて、紹介ともつかず感想ともつかぬ事を書いて見ようとおもふ。主としてケネディ氏の新著に據つたので、色々しらべて書き上げた elaborate な評論の類ではない。ただ當時まだ歳わかく意氣甚だ盛んであつた此一群の詩人や畫家の名をだけでも我が文壇に傳へて、動もすれば輕浮な俗論に動かされようとする一部の人々に、眞に熱意ある藝術家のおもかげを偲ばせたいのが私の願である。

二

この『黄表紙』の聲價を貴からしめたものは先づ第一にビアヅレイの挿畫であつて、かれが退いてから他の畫家が代つてやつたが、どうも以前ほどにうまくは行かなかつた。七つの歳から既に肺患に侵されて、僅かに二十六歳で死んで了つたこの薄倖の天才が、世に遺した作品の數は隨分に澤山あるが、それは皆前後わづかに六年間の努力に成つたものである。子供のときから音樂と畫とが好きで、中學生の頃によく教師の似顔をかいて、あまりの巧さに人を驚かしたさうだ。また病身なのにも拘はらず隨分本を澤山讀んで、文學の方の素養も實にたいしたものであつた。もし健康が許したならば、

確かに文筆の上でも不朽の作を残す人であつたらう。詩文の遺稿は後になつて出版されたが、それには雑句の古詩の譯や小説の斷片などの非常にうまいのが出てゐて、たしかに此方面にも奇才世を驚かすに足るものがあつた事を示してゐる。十八の頃から斷然畫ばかりを專門にして、マアロオ、コングリイヴの戯曲の挿繪をかいたが、先づ出世作といへば一番名高いアアサア王物語の挿繪であつたらう。これは既にいくたびか丸善の店頭にも飾られたから見た人も多からうと思ふ。また彼が一生の傑作は、かつて雜誌『白樺』に載せられ、その版畫の展覽會にも出てゐた『サロメ』の挿畫で、近代藝術史に於けるビアヅレイの地位は全くあの十六枚の作にあると言つても差支あるまい。ジョン・レイン社から出た『サロメ』の英譯本（ワイルドはあの戯曲を佛蘭西文で書いた）は一八九四年の出版だから、これはまさにビアヅレイ二十二歳のときの作であつたのだ。

ビアヅレイの畫は陰森の氣全幅を蔽ひ、神經の微動を筆端に逆らせた實に奇拔な、人の意表に出でたものである。どう見ても全く獨創的な天才の作物だといふことが一見してわかる。だから『サロメ』のは勿論、ポオの短篇小説の挿畫でも、皆決して唯本文を說明するといふ類のものではなくて、畫家その人の鋭い感性を表現し、飽くまで自分の强い個性を發揮したところに特色がある。なかには餘り大膽で私どもには何だか亂暴だと見えるやうな意匠もあるが、あの細かい力の這入つた筆法で、筆數を少くして而も能くあれだけの强い effect を出した技倆に至つては、たしかに藝苑の驚異であ

ると言つてよい。たとへばかの『舞姫の得たるかづけもの』の如き、一度見た者にどうしても忘れることの出來ない強い印象を與へる畵であるが、よく見るとジョカナアンの口とサロメの髪のあたりに點々がある。あれがどれ位あの畵の感じを強くしてゐるか知れない。その代りまた才にまかせて隨分亂暴をやつた點もあるので、例へば『サロメの化粧』の如き、舞臺は勿論東洋の昔でなければならぬのを、今の化粧道具や香水瓶がかいてあつたり、下の方の棚に佛蘭西小説が二三冊載つてゐるし、着物も十七世紀頃の風になつてゐると云つたやうな類のところがある。しかし畵の與へる感じがあまりに強烈なために、かういふ缺點が殆ど吾々の目につかないのは、さすがビアヅレイの偉いところであつたらう。

肺病がひどくなつて『黄表紙』の方をやめてから後、かれはなほアアサア・シモンズ等が出してゐた『サヴイ』に寄稿してゐたが、それもわづか二三年で死んで了つた。今から十四五年前のことだから、其頃の英吉利では耽美派運動に關係したものはみな不徳漢のやうに思はれてゐた。詩文の方ではオスカア・ワイルド、繪畵ではビアヅレイをその代表者のやうに言つて、隨分いろいろな點から攻撃を加へたが、とにかく線畵に一新機軸を開き、他の模倣を許さない獨得の畵風だけは、確かに近代藝苑の異彩であつて、此點に於て彼はホヰスラアと並び稱せられるだけの天才であつた。

三

詩文と繪畫との兩方にわたつてすぐれた才を持つた人は昔から随分多い。日本の蕪村は言ふまでもなく、ブレイクやサッカレイやデュ・モリエや、或はまたかの詩をゑがき畫を歌つたと言はれたロゼッティのやうな例は別としても、現に手近なところで、石井柏亭氏が以前『明星』に時々出された詩や、さきごろの本誌に出た佛蘭西西班牙あたりの紀行、また近頃よく『白樺』で見る南薫造氏が田園生活を寫された文などは、其人の畫の方と見くらべて、私はこれらを讀むとき、えも言はれぬ興味を感ずるのである。それで今言つたビアヅレイもさうだが、同じこの一群のわかい藝術家のなかに、筆も達者なら畫も巧いといふ才人がも一人ゐた。その人はよく『剃刀のやうだ』とまで言はれたほどの鋭い諷刺家――また、ああいふ輕快な才人は佛蘭西でなくては見られない、英吉利人には先づ珍らしいと言はれたマックス・ビアボオムである。何しろ英國劇壇舊派の大立物であつた名優ビアボオム・トリイの弟だから、それだけでも優に人の視聽を欹てるに足るのだ。今漸く四十になるかならずの年輩、『黄表紙』の一二號ありに奇抜な文を寄せて、辛辣な皮肉を世間の俗物や評家に浴せかけた頃は、まだ二十(はたち)あまりの若ざかりであつた。縦横の奇才忽ちにして一世を驚かし、それからといふもの、かの“More”や“Yet Again”などの數卷に收められた奇警な漫筆(エッセイ)やすけつちの類もかけば、

また時々の批評もかいた。芝居の方はもとより一かどの通であるが、畫の批評などは、ホヰスラアを論じた文など名高いものである。別に"The Happy Hypocrite"のやうなお伽噺もかく、そしてまた諷刺畫でもつていつも盛んに喝采を博してゐる。眞に才人往くところとして可ならざるなしの觀があるから偉い。いつであつたか彼は今の男子の服裝は野暮だと言つて、別に同好の士を語らひ、緋の上衣に眞白の長靴下、それに派手な靴を穿いて都大路を練つて行つたことがある。ちやうどかの佛蘭西のゴオティエが淡紅色の胴衣を着て自作の詩を歌ひながら街を歩いたり、オスカア・ワイルドが中世風の派手な着物に向日葵や百合の花をつけて倫敦のペルメルあたりを歩いた話と同じで、これだけでも風流才子マックス・ビアボオムその人のおもかげが目に見えるやうである。

これは寧ろ餘技であらうが、彼の筆に成つた漫畫といふものがまた天下一品、誰彼なしに古今の人物をつかまへて來てその似顏をかいて、そこに鋭い皮肉な寓意を寄せる。たとへば昔からの詩人の顏をかいた畫集には、バイロンが靴で英吉利を蹴つてゐるところをかいたり、帝國主義の詩人キプリングが玩具の笛を吹いて女神ブリタニアと手に手をとつて得意で踊つてゐる圖なども面白い。殊にかういふ調子で、現代の名士を誰彼の容赦なく諷刺畫でやつつけるところは眞に痛快である。ヰリアム・アアチアアが跪いてイブセンの靴の尖に接吻してゐる圖なぞは、日本の文壇にも苦笑を禁じ得ない人が多いことであらう。また今の政界の大立物が、みな諷刺畫にお定りの題目であるなどは言ふまでも

ない。

以前倫敦で青年才子の三人男と云はれたのがあつた。警句と皮肉でいつも論壇を賑はすチェスタトンを筆頭に、次はかの健筆縦横のエッセイイスト、評家としてはまた一かどの佛蘭西通である政界の名士ヒレア・ベロックがあつたが、それにこのマックス・ビアボオムを加へて名物男の三幅對に數へた。三人ともに十年後の今日、健筆益々その力を加へるのは眞に英國文壇の慶事である。

（ビアボオムが最近の著は"A Christmas Garland"と云つてハイネマン社から出た。例によつて現代文壇の名流を諷罵した十七篇の文を集めたもので面白さうだが、僕はまだ見ない。）

四

ビアボオムの文集には、都會生活の美しい方面を面白をかしう、ヒュウマアに富んだ筆ですけつち風に書いたのが多いが、それとまつたく正反對なのは小説家のクラッカンソオプであらう。彼は社會の裏面に潜む醜惡な毒々しい暗黑界を赤裸々に描き出して、少しも憚るところがなかつた。文體といひ敍事の法といひ、全く佛蘭西流の書き方である。或評家が之を評してモオパッサンを英語で行つたものだと言つたのは、單にその冷靜な寫實の風に於てのみならず、巧みに省筆法を用ゐた敍事の體までも一番相似た所があつたからだ。この人ほどに大膽な自然派の描寫を試みた人は、英吉利の小説に在來その例はなかつたので、彼は遂に世のみとむるところとならず、僅かに "Wreckage," "Last Stu-

dies," など二三の小論集を世に遺しただけで、遂に自殺によつてその短い一生を終へたのである。

五

當時『黄表紙』に關係してゐた若い人たちのなかで、詩人といへば先づアアサア・シモンズの名が一番ひろく知られてゐる。此人の筆に成つた評論の方は、日本でも既に多くの讀者を有してゐるから詳しく說くまでもなからうが、人の言ふ通りいかにもペイタアの衣鉢をついだ、含蓄の深い詩趣に富んだ文章である。こちたい論理をのみ辿つて行く議論の類ではなくて、かういふのは批評そのものが既に詩的な創作に近いもので、ちやうどペイタアの『文藝復興(ルネツサンス)』や『鑑賞論(アプリイシエイシヨンス)』などの文集を讀むのと同じ趣がある。またこれは評論ではないが、かの威尼斯、羅馬、莫斯科など歐羅巴の主な都會のことを紀行文の體にかいた『都市(シテイイス)』の一卷の如き、恐らくはシモンズが散文の作中での白眉であらうと私は思つてゐる。

さて詩歌の方でいふと、シモンズの作には夢のやうな情調や氣分を、巧みに單純な言葉で歌つたのが多い。讀んでゐると、何だかかう春の朧夜を獨りさまよつて行くと云つたやうな柔かな感じが胸に迫つてくる。『春のたそがれ(スプリング トワイライト)』と題した詩のなかに、『たそがれは日をさへぎりぬ。壁の上なるかの君の繪姿、色あせて、ほのかなる闇のうちに消ゆ』といふ句があつたが、ちやうどさう云ふおぼろげ

な、溶けて行くやうな心持がいつも此詩人の作に味はれる。『私の詩は事實の記錄ではない、謂はば海のさざ波のやうな束の間の情調（moods）、これが藝術の領分であつてまた私の詩の題目である』と自分でもさう言つてゐる。

シモンズが最も多く歌つた題目は戀愛と女性とであつて、それがいつも此詩人の鋭い感性（センシビリテ）に觸れて、極めて官能的な肉感的な詩句となるのである。實際肉の歡樂と放醉とを大膽に歌つた點に於て、かれは英國古今の詩人に多く類例が無いと言つてもよい。かつてキイツをさへ官能的なりと難じ、ロゼッティ、スキンアバンを肉感詩派なりとまで罵つた評家のゐる英吉利のことだから、シモンズの詩篇は勿論諸方から手ひどい攻擊をうけた。之に對してかれは詩集『London Nights』の再版の序に於て、下のやうな斷乎たる態度を以て答へてゐるが、そこによく彼の藝術觀とも云ふべきものが現はれてゐて、殊に道學先生に一喝を喰はしたところが甚だ痛快だから、ここに引用する。

> 私は今まで道德といふ論據から攻擊をうけた。世には、わたくしの作が藝術上つまらないからといふわけではなくて、道德上いけないと思ふと言つて攻擊した人が多い。さういふ人は道德上と藝術上との批判を混同し、藝術を助けずに却つて藝術を狹くしてゐる事に氣が附かないのだ。どこまでも私は藝術の自由のために爭ふ。そして道德が藝術の上に審判權をもつといふやうな說には反對するのである。藝術が道德によつて仕へられる事はあつても、それの奴僕となることは斷じて無い。何となれば藝術の根柢は永遠のものであるが、道德の根柢は時代の變化に伴つて動搖す

るを免れないからだ。試に諸君がいま服從してゐられる因襲的道德の誠の一箇條をでも取つて示されよ。私は諸君の祖先が服從してゐた或別な道德の箇條の中に、必ずそれと正反對のもののある事を何時でもお目にかけよう。尙お望とあらば、その道德を破つた方を正しとしても諸君も不本意ながらに推賞せざるを得ないやうな例を、早速お目にかけよう。こんな昨是今非の定めなき指導者のために、私どもは果して藝術の確固不變な指導を見すてるべきものだらうか。人間界にある如何なるものでも――情熱でも願望でも、精神または官能でも、また人の心の天國にせよ地獄にせよ――それは皆永久的な藝術の一部分であつて、自然がざつと織つておいたのを、藝術がうまく美しい型にそれを結合させて行くべきものだといふ事を示してゐる。

六

近代人の胸奥から洩れるかすかな憂愁の聲を、美しい音樂のやうな詩のなかに聞かうといふ人には、詩人アアネスト・ダウソンの名こそ忘れがたきものの一つである。かれはよくシモンズと並び稱せられる人であるが、旣にはやく世を去つた人だけに、ダウソンの方を一層なつかしう思ふのは私ばかりではなからう。戀にやつれ詩に痩せたこの薄倖の詩人、肺患とハッシッシュと藝術と、そして女性との外には何ものもなかつた此人の短い生涯には、その世に遺した幾篇の詩文に見られると同じ深い悲哀の影が漂うてゐる。僅か三十三年間の生涯そのものが、旣に一篇の哀歌であり悲劇であつた觀

がある。

かれは今から十二年前に死んだが、性行にも閲歴にも、世紀末の天才に免れがたい頽廢的傾向が著しかつた。牛津大學（オクスフオド）を中途でやめてから後しばらくは倫敦に居たが、英吉利の氣風はどうしても此詩人におもしろくなかつたのか、大抵は佛蘭西の方で暮らした。オスカア・ワイルドのやうに巴里の都を好んだのは勿論だが、それからなほブリタニイ、ノルマンディのあたりを放浪して一生を送つた。いつも沈鬱なろくに他人（ひと）とは話しもしないやうな人で、窮乏を救うてやらうといふ親類にさへ全く交際（つきあひ）をしなかつたさうだ。肺患が重つて命は旦夕に迫つてゐるのに、醫者に會ふことをすら厭うたといふのも、必ずしも死を願つたからだとは思はれない。

かれの詩のうしろに、いつも見えがくれの一人の女性があつた。さる亡命の客の娘、もとは相當な身分の女であつたが、倫敦の外國人街で母親と一緒に小さい料理屋（レストラン）をしてゐた。そこへダウソンはいつも毎日のやうにやつて來た。自分の作つた詩を歌つて聞かしながら、その間に纏綿の情を洩らしたことも屢次であつた。が、この女は遂に給仕（エイタア）の女房になつたので詩人の美しい戀の夢は果敢なく破れてしまつた。それからといふもの、強いハッシッシュの酒に憂愁を忘れようとして、かれが生活は益益荒むのみであつた。倫敦の居酒屋にも飽いて後は、佛蘭西、白耳義をさまようて益々不羈放縦の生を送つた。その間、酒と女と詩と病とが彼のすべてであつた事はいふまでもない。

此天才が世にのこした作品はまことに少い。一八九六年に出た詩集と死後に出た "Decorations" の二卷のほか、短篇小說が五つ六つと韻文劇の一幕物が一つあるだけだ。勿論英語で書かれてゐるものの、全體の色調はすべて佛蘭西風であつて、どう見ても全く羅甸趣味の詩文である。これはダウソン一代ばかりでなく、かれの父が既に佛蘭西にながく住んで、その國の文學に造詣が深かつたといふやうな事がよほど影響してゐるらしい。

かれの名をながく後世に傳ふるものは、散文の作ではなくて詩歌であることは勿論だが、その方でかれは多くのデカダン詩人のやうに、ポオの影響をうけること最も甚だしき一人であつた。シモンズのいふ所によると、

"The viol, the violet and vine"

といふポオの一句を目してダウソンは、詩美の極致をつくしたものだ、Vぐらゐ美しい文字はほかに無いから、詩にはいくら澤山これを用ゐても足らないと言つたさうだ。かういふ言葉から推しても直ぐわかるが、かれは明らかに近代の象徵派詩人と同じく全く詩を歌ふものとして、その音樂的方面にのみ重きを置いた人である。詩は決して思想とか哲理とかを內容とするのみではなく、音の感覺を通じて或情調を暗示する純粹な藝術だと彼は見做した。最も名高い次の一首の如きはよくかういふ主義を實際に示したものだ。

"Exceeding sorrow
Consumeth my sad heart!
Because to-morrow
We must depart,
Now is exceeding sorrow
All my part!

Give over playing,
Cast thy viol away:
Merely laying
Thine head my way:
Prithee, give over playing,
Grave or gay.

Be no word spoken

（大意）ただならぬ悲しみに
ほろび行くわが心。
あすこそは
ふたりがわかれ、
ただならぬ悲しみぞ
いまわがつとめ。

弾(ひ)くをやめよ、
君が琴おかせたまへ。
ただこなたに
君がかうべを横たへて、
願はくば君、弾くをやめよ、
悲しきもまた樂しきも。

語りたまふな一ことだにも、

Weep nothing: let a pale
Silence, unbroken
Silence prevail!
Prithee, be no word spoken,
Lest I fail!

Forget to-morrow!
Weep nothing: only lay
In silent sorrow
Thine head my way:
Let us forget to-morrow,
This one day!"

泣かせたまふな。
色あせたる「沈黙」の、絶間なく
ここを領ずるにまかせよ。
願はくば語るをやめよ、
われは堪へざらん。

翌日を忘れよ、
泣かせたまふな。
ただ沈黙の悲しみに、おかせ給へ
こなたに君がかうべを。
翌日をわすれて、
ただけふの日をこそ。

シモンズは此歌を評するに『沈黙の音楽』といふ言葉を用ゐたが、かういふ捕捉しがたい何とも言へぬ沈んだ情調を、かくも巧みに音律の美にうつし得たものは現代の英詩に稀だ、と言つても必ずし

も過褒ではないとおもふ。

彼が詩を作つたのは全く自己のためであつて、他人(ひと)に認めて貰はうなどいふ氣は更に無かつた。自分の苦心の作で自分さへ滿足すればよかつた。だから生前は殆ど世の認むるところとならなかつたが、近代の英吉利の詩人のことを想うて、スヰンバアンからイエイツ、シモンズと數へてくると、私なぞはどうしも此ダウソンの詩才を同じ列のうちに入れずには濟まないやうな氣がする。

七

なほこの『黄表紙』に關係してゐた詩人で私どもの忘れることの出來ない名は、ライオネル・ジョンソンとジョン・デイギッドソンとであるが、ふたりとも既に故人となつた。ジョンソンが酒のために健康を損つて、これもまたわづか三十歳あまりで世を去つたのは、今からちやうど十年ほど以前だ。その詩集には、哀音ひとの胸に迫るといつたやうな作什か、比較的短い作に多い。散文の方でいふと、トマス・ハアディを論じた一卷か特に觀察の精緻と文章の流暢明快なのによつて著しい。恐らくこの一冊かジョンソンの名を不朽ならしむるものだらうと思はれるが、私はそれよりも此人の輕妙な漫筆物(エッセイ)の方を一層おもしろく思ふ。たとへば『黄表紙』の第三號に『煙草の雲』と題して、

煙草の雲、雲また雲、その渦卷く青い煙草のなかに人生のおもかげが在るとおもへば、さうおもつた人生こそ面白

からう。空中での美しい變化、ゆたかな動搖、遂には靜かに消えて行くそのありさま、さういふところに申分のないのどかさ以上のあるものが表象れてゐる。雲また雲、どうも今言つたやうに私はおもふ。さう思ふのがまた愉快である。

かういふ調子の文で人生を觀じた此一篇などは、たしかに彼の傑作の一に數へらるべきだらう。

またディギッドソンに就いてはその詩に著しくあらはれた自然科學の影響、またニイチェにうけた感化、それから基督教に對する熱烈な反抗的態度や、一九〇九年に自殺するまでの一生の波瀾曲折など書くべき事は甚だ多いが、餘り長くなるからこれは他日に讓ることにした。

『黄表紙』に詩文を寄せた人々には以上のほか、なほ Austin Dobson, Vernon Lee, Arnold Bennett のやうな第一流の名家をはじめとして、種々さまざまな人が澤山あつた。從つてまた出てゐる作品にも隨分玉石同架の氣味はあつたが、それはかういふ艸紙の常として致方もない事だらう。殊に最初六七號までは一番佳作が多くて賑かであつたが、それからあとはひどく見劣りする感があつた。

短いそして花やかな生涯は天才の常だ。『黄表紙』の壽命が短かかつたやうに、之に關係してゐた同人も不思議に三十歳前後で此世を去つた人が多かつた。その頃から今に至つてはなほ藝苑に花を咲かしてゐる人といへば、五指を屈するほども無い。とはいふもののかの保守的にしてとかく偏狹固陋な道學先生風を免れなかつたヰクトオリア朝の終ごろ、恰も世紀末の英國文壇に、自由清新な大陸

の思潮を導き入れ、來らんとする新傾向の基をひらいた點に於ては、これら多くの若い藝術家の努力は決して徒爾ではなかつたのである。

詩人ヴン・レルベルグ

日本に廣く知られてゐるヹルハアレンやマアテルリンクと共に、白耳義文學の將星として歐洲の諸邦に認められた詩人は、ヴン・レルベルグ Charles van Lerberghe（一八六一年生―一九〇七年歿）である。殊にその歿後は英佛各國で彼の作品を研究する人益々多く、

Albert Mockel, Charles van Lerberghe. Paris: Mercure de France. 1904.
Albert Heumann, Le Mouvement Littéraire Belge d'expression française depuis 1880.
Paris: Mercure de France. 1913.
La Parnasse de la Jeune Belgique. Paris: Vannier. 1887.
Jethro Bithell, Contemporay Belgian Literature. London: Fisher Unwin. 1915.
Jethro Bithell, Contemporary Belgian Poetry. London: Walter Scott. 1911.
G Turquet-Milnes, Some Modern Belgian Writers: London: Horace Muirhead. 1916.

等の諸書を見れば、近世文學に於ける此詩人の地位が明らかに知られる。試に白耳義の文人に向つてその國最大の詩人の誰なるかを問へ。答へてヴン・レルベルグなりと言はんは確かなるべし』と書

いた批評家もある。

詩人の作品を鑑賞するために、その背後に在る閲歴の研究を怠る事の出來ないのは言ふまでもないが、私は讀者の倦厭を恐れてこれを前提の諸書に譲り、唯二三の注目すべき事項をしるすに止める。

ヴン・レルベルグは千八百六十一年ゲントに生れて、そこの耶蘇會(ジェスイット)の學校で教育された。その以前ゴルハアレンやロオデンバッハも同じ學校に學んでゐた。マアテルリンクとは固より竹馬の友で、マアテルリンクの伯父がヴン・レルベルグの後見人であつたさうだ。

藝術的良心に富んだ人は決して濫作をするものではないが、ヴン・レルベルグも決して多作の人ではなかつた。劇二種、詩集二卷と短篇雑文數種とがその全集をなしてゐる。僅かの收入に甘んじて専心一意その生涯を詩文に捧げ、何の職業にも從事しなかつた。暫く首府の博物館員をしてゐた事はあつたが、詩人として思想や行動の自由を束縛される事を恐れ、僅かに二ケ月にして職を棄て、友人を驚かしたと云ふ話がある。苟もおのが意に滿たなければ自作を公にすることを肯んじなかつた彼は、その彫心刻骨の餘に成れる貴き二三の作品に不朽の名を留めたのであつた。

彼が最初の詩作は千八百八十六年、雑誌『スバル』“La Pléiade”の誌上に發表されたが、後三年にして短い三幕物の劇『嗅ぐ者』“Les Flaireurs”と題した物が公にされた。これは『死』の近づくのを象徴したもので、或老婆が臨終の床に就いて、そこには娘が附添うてゐる。『死』の使であ

る『水の人』、『屍衣の人』、『棺の人』の三人が室外に來て、代る代る戸を叩く。堅く鎖した戸を隔てて內と外とで對話がある。外から迫る三人は室內に這入らうとし、娘はそれを拒まうとする。老婆は漸く死に瀕して、其戸を開けよと求める。外の『死』の使と內なる娘との問答、

戸外の聲

さあ時が來た、時が來た。　（烈しく敲く、戸の破れる音）

娘　（臥牀から起き上らずに）

這入つちやならんの、あなたも他の人も。

戸外の聲

這入つて見るんだ。　（前にも增して烈しく敲く音）

娘

お母さん、お母さん。まああなたは戰慄へて、手は氷みたいだ。恐がつちや不可いのよ。守り神の私が附いてゐる。恐がらないでね、あの人たちに酷い事はさせないから。もうよく私が見えないの?、あら、そんなに目を据ゑて私を見ないで下さい。ね、お母さん、私は何だかあなたまでが恐くなるから。　（馬の嘶く聲す）

母親　微笑みながら娘を抱き寄せる、そして右手で戸の方を指す。

馬車（くるま）が來た。重い馬車の止る音。戸の割れ目から光が射す。喧噪の聲。

夜半の鐘がゆるやかに響くと共に、戸は破られて死の使の者どもが恐ろしい聲を立てて室内に闖入する所で幕。

此荒筋だけを見ても、讀者は此劇がマアテルリンクの『闖入者』と極めてよく似てゐる事に氣附かれるだらうが、果して千八百九十二年それが巴里に上場せられたとき、作者はマアテルリンクを模倣したと云ふ非難を受けた。マアテルリンクは直ちに一篇の公開狀を作つて、ヴン・レルベルグの作品が剽竊に非ざる事を辯じた。寧ろ實際はマアテルリンク自らの作の方が後に出來たのであるから、剽竊の罪は自分こそ之を負はねばならぬとまで辯じた。これは固より親友のために寃を雪がうとして、マアテルリンクが極端な事を言つたのであらうが、とにかく親交ある此二詩人は當時屢次相會して象徵劇の事を語り、また『死』と云ふものを如何に舞臺上に取扱ふべきかに就いても論じ合つたのであらう。その結果、作品の上にも二人は殆ど前後して相似たこの二つの作を公にし、新劇のために新しき道を開いたのであつた。

しかしヴン・レルベルグの本領は劇よりも詩歌にあつた。飽くまで美にあこがれる理想主義者（アイディアリスト）として、その詩は形と色との讃美であつた。音樂よりも、また他の何れの感覺よりも、先づ視覺に訴へる

事が彼の特色であつた。『天使(アァンジュ)の靈と雖も、若し美を以て蔽はるるに非ざれば我をして首(からべ)を回(めぐ)らさしむるに足らじ。我に在つては天使は純なる形象に過ぎず、また之を以てわが思想を蔽へる美しき女人なり』と言つた位で、英國でいへばキイツとか、或はまたその流れを汲んだロゼッティ一派の藝術に近いものであつた。さながらラファエル前派の繪を見るやうな彼の詩篇の一例を擧ぐれば、

Elle dort dans l'ombre des branches,
Parmi les fleurs du bel été.
Une fleur au soleil se penche......
N'est ce pas un cygne enchanté?

Elle dort doucement et songe.
Son sein respire lentement,
Vers son sein nu la fleur allonge.
Son long col frêle et vacillant.

Et sans qu'elle s'en effarouche,
La longue, pâle fleur a mis,

Silencieusement, sa bouche
Autour du beau sein endormi.

女は青葉のかげに眠れり、
美しき夏の花かげ。
日ぐるまの花、枝を垂れたり…………
こはそも不可思議の白鳥か。

甘睡(うまい)して女は夢む。
その胸はしづかにも呼吸(いき)す。
裸形(らぎやう)の胸のうへ、垂れたる花の
なよなよと長きうなじの揺(ゆら)ぎかな。

女はおびゆることもなかりき。
眠りたるうつくしき胸のあたりを、
長きうなじの白き花は、

音もなくて口づけしたれど。

――詩集『エヴの歌』より

かれの生涯は理想に對する不斷の憧憬であつた。然しさういふ人にはいつも免れ難い、現實に對する絶望と僧惡とが、遂に彼が晩年の生を痛ましき慘憺たるものにした。千九百〇七年かれが世を去る前數年間は、烈しく憎人的（ミザンスロアプ）となり厭世的となつて、日ごろの親友とさへも全く交遊を絶つた程であつた。

かれは天外漂遊の孤客、四海に家なき人であつた。ブリュセルから倫敦、伯林、民顯、羅馬、フロレンス、それから巴里へと、國から國、市（まち）から市へと、さすらつた。その名作の大部分を收めてゐる詩集『エヴの歌』"La Chanson d'Ève" は時々故國のアルダンヌに歸つて筆を執つたものの外、南歐の花の都（フロレンス）に旅杖をとどめて、朝は博物館や寺院を訪ね、午後は宿に歸つてアルノオの流を見渡す丘の上で書き上げたものであつた。夢幻の理想郷に生きる此詩人にとつては、伊太利の自然と藝術とがいつも新しい靈興をそそつたのであつた。

同じ白耳義の詩人セヴランは、かれの作に英國的の色彩の著しい事を指摘した（雜誌『メルキュウル・ド・フランス』一九〇八年八月號所載「ヴァン・レルベルグ論」參照）。しかし果して英文學の奈何（どう）いふ作家から感化を受けたかは、一寸斷言し難い。キイツやロゼッティの影響は誰にも氣附かれるが、恐らくまたコオルリッヂの夢幻境をも窺つた事で

あらう、沙翁を讀んでは特に『あらし』(テムペスト)と『眞夏の夜の夢』(エ・ミドサマア・ナイツ・ドリイム)を好んだ、と言はれるのも成程と肯かれる。そして佛蘭西の詩歌は餘り喜ばず、ボオドレエルなど近代の作品の外は多く讀まなかつたさうだ。

しかし佛蘭西の國語で歌ふ詩人である以上、佛蘭西古詩の影響が無いとは思はれない。彼の作中最も名高く、いづれの詞華集(アントロジイ)にも載せられ、また苟も彼を論ずる者の必ず引用する『黄金舟』“Barques d'Or” の美しさは、確かにその一例として見られる。

Dans une barque d'Orient
S'en revenaient trois jeunes filles,
Trois jeunes filles d'Orient
S'en revenaient en barque d'or.

Une qui était noire,
Et qui tenait le gouvernail,
Sur ses lèvres aux roses essences
Nous rapportait d'étranges histoires
Dans le silence......

Une qui était brune,
Et qui tenait la voile en main,
Et dont les pieds étaient ailés,
Nous rapportait des gestes d'ange.
    En son immobilité.

Mais une qui était blonde,
Qui dormait à l'avant,
Dont les cheveux tombaient dans l'onde
Comme du soleil lavant,
Nous rapportait, sous ses paupières,
    La lumière.

東邦の小舟に乘りて、
三人のわかきをとめは歸り來ぬ。
東邦の三人のをとめは、

黄金の小舟にのりて歸り來ぬ。
　黒なる一人
　舵をとれり。
薔薇のにほへる唇に、
奇しき物語をつたへぬ、
　語はなくて。
　褐色の一人
　帆を待てり。
その足につばさをそなへ、
かれは天人の手振を傳へぬ、
　身動きはせで
　また金髪の一人あり、

船首(へさき)に眠れり。
波のうへ丈(たけ)なす髪の垂れたるは
あけがたの空にも似たりや。
眼瞼(まぶた)のしたにかれは持て來ぬ、
光明を。

――詩集『瞥見(アントルヸジョン)』より

幽韻微趣を傳へんがためにヴン・レルベルグは、人並すぐれて用語の選擇に細心の用意を怠らなかつた。殊に、つばさ、かげ、ばら、黄金、花、おぼろ、ひかり、そら色、さう云つた言葉はいくたびか彼の詩篇に繰返されて、少しも單調でないばかりか、或ものは纖麗、或ものは燦爛、巧みに人を夢幻の鄕に誘ふものであつた。

用語選擇のことに就いて彼が筆に成れる一短篇『超自然の選擇』"Sélection surnaturelle" と題したのがある。人間の靈が自己表現のための言葉を見出し得ず、遂に沈默の中に死なうとしてゐる。その時サテュルヌの神の忠告に從つて、人々は一切の言葉を船に積み込み、船中で王子は暇に任せて言葉を選ばうとする。色々のわけで氣に入らない言葉はみな海へ投げ棄てる。第一には醜惡な言葉、第二には運動を現はす言葉、第三には具象的の言葉、その次には抽象的の言葉、それから感覺を現は

す言葉、と順々に次から次へと海中へ投げ込む。最後に神と云ふ言葉も棄てて了ふ。もうおほかた船中は空（から）つぽになつた。殘れるものはただ一語、それを深くも船底（ふなぞこ）に隱して置いた。『あこがる』J'aspire と云ふのがそれであつた。『さても王子は跪きて合掌し、靜かに唱ふるやう、われあこがる、光明のうちに Dans la lumière: J'aspire と』。此一篇の物語はよく作者自身が詩作の風を語るものであつた。

美は眞なり、眞は美なりとはキイツの言葉だが、同じく美の宗教の使徒としては、ヴン・レルベルグも亦この唯美主義を歌つた。詩集『エヴの歌』の中に下の一篇がある。

Le Seigneur a dit à son enfant:
Va, per le clair jardin innocent
Des anges, où brillent les pommes
Et les roses. Il est à toi. C'est ton royaume.

Mais on n'éveille des choses
Que la fleur;
Laisse le fruit aux branches,
N'approfondis pas le bonheur.

Ne cherche pas à connaître
Le secret de la terre
Et l'énigme des êtres.
N'écoute pas la voix qui attire
Au fond de l'ombre, la voix qui tente,
La voix du serpent, ou la voix des sirènes.

Ou celle des colombes ardentes
Aux bosquets sombres de l'Amour
Reste ignorante.
Ne pense pas; chante.
Tout science est vaine,
N'aime que la beauté.
Et qu'elle soit pour toi toute la vérité.

神その子に告げたまはく、
行け、天人の淸らなる園生に。

木の實うつくしく、花ざかりの園生、
そは爾（なんぢ）が有なり、爾が國なり。
されどまこと心うきたつものは、
唯花あるのみ。
木の實は枝に殘せよ、
幸福（さいはひ）を深くも求むる勿れ。
また知らんとて求むる勿れ、
世界の神祕を、
人生の謎を。
聞くことなかれ、幽暗の深みに
爾を誘ふ聲を。
蛇の誘ひ、sirènes（シレエヌ）が歌をも聞くこと勿れ。

ほの暗き『戀』の森にて、
情熱の鳩の聲をば聞く勿れ。

無知にてあれよ、
また物思はざれ。ただ歌へよ、歌へ。
知識はすべて空ならずや。
ただ『美』を愛せよ、
爾がため、すべての『眞』は何かあらん。

——詩集『エヴの歌』より

彼がキイツを學んだか否かは問ふところではない。唯この最後の句の如きは、二詩人の思想が極めて相近きものであつた事を示すに足るものだらう。

『エヴの歌』に現はれたエヴは基督教思想のそれではなく、誘惑の聲に耳を傾け、肉に醉ひ美にあこがれる異教思想のエヴであつた。此詩人にニイチェの影響ありといふ評家は、恐らくこれらの點を重く見たのであらう。裸形の女——不思議の聲に耳傾けつつ、目は懷疑と驚異の色に輝き、百花繚亂の庭に立てるエヴ。若し英吉利のピアヅレイをして此女を描かしめたならば、無聲の詩と有聲の畫とは相俟つて、幽峭險奇の新意は更に一段の精彩を加へたことであらう。ピアヅレイの畫筆こそ最も此詩人の集にふさはしきものであつたからだ。

筆の序に私は、夏の雨を歌つたエヴの歌一章を譯して此稿を終らう。

Ma sœur la Pluie
La belle et tiède pluie d'été,
Doucement vole, doucement fuit,
A travers les airs mouillés.

Tout son collier de blanches perles
Dous le ciel bleu s'est délié.
Chantez les merles,
Dansez les pies!
Parmi les branches qu'elle plie,
Dansez les fleurs, chantez les nids;
Tout ce qui vient du ciel est béni.

De ma bouche, elle approche
Ses lèvres humides de fraises des bois;
Rit, et me touche,
Partout à la fois,
De ses milliers de petits doigts.

Sur des tapis de fleurs sonores,
De l'aurore jusqu'au soir,
Et du soir jusqu'a l'aurore,
Elle pleut et pleut encore,
Autant qu'elle peut pleuvoir.

Puis, vient le soleil qui essuie,
De ses cheveux d'or,
Les pieds de la Pluie.

わたしの妹、夏の雨、
あたたかい美しい夏の雨、
しめやかな空氣のなかを
そつと靜かに驅(か)けにゆく。

白い眞珠の頸かざり、

ぱつとほどけた、青空で。
歌へや、つぐみ、
舞へよ、かささぎ。
しだれた枝の葉がくれに、
舞へよ花ぶさ、歌へや鳥の巣も。
うれしさは、空から來(く)るもの何もかも。

妹がわたしの口へ持つてきた
濕つた唇、いちごのやうに。
莞爾(にこ)と笑うて一時(いちどき)に
わたしに觸(さは)る小さい指は、
幾千といふえらい數(かず)。

花ばたけの上へ音(おと)たてて、
朝から晩まで、

晩から朝まで、
降つて降つて降りつづく、
力のかぎり降りつづく。

今度は出て來るお日さま。
黄金の髮でさらりつと、
雨の素足を乾すお日さま。

——詩集『エヴの歌』より

現代英國文壇の奇才

（チェスタトン氏の散文）

近頃の新聞雜誌によく『無駄話』といふ事が流行る。固より深遠の談理でも無ければ精緻の論述でもない。多くは文藝の時事或は尋常一様平凡の事を叙して、肩の凝らぬところに一種の妙味があるのみか、その輕快と皮肉と或はその奇警は、却つてこちたき評論の類や下手な實驗小說よりも遙かに多く讀者を動かす。僕の如きも好んで此種の文字を讀む一人である。ところが西洋でこれと類似のものを求むれば、先づ causerie であらうか。而もかの佛蘭西近代の一大評家が每週の評論を集めた、『コオズリイ・デュ・ランディ』の諸篇とは勿論趣を異にしてゐる。さらば gossip と云はうか。これはかなたの雜誌では寧ろわが『近事片々』と云つたやうなものに近からう。寧ろ新聞の feuilleton に見える雜文の類か。これにも特殊の名が無いとすれば、眞の意味に於ていふ essay こそ最もこの無駄話に近いものであらう。エッセイは既にその語源が示す通り、本來の性質に於て決して四角張つた treatise では無い。日本の學生が思ふ如き、こちたき獨逸の書をあさつて書き集めた『論文』のみとは限らぬ。或題目をとつて、作者がその刹那に得た感想を書きしるした手短な即興の文だ。精論細敍するのでは無くして單に暗示したものである。だから作者は飽くまで自己を中心として、讀者をさな

がら心おきなき親友のやうに思つて書く。愚にもつかね身の上ばなしも出れば、宇宙人生の大問題にも觸れる。一度讀めば忘れられないやうな皮肉や警句で人を釣り込んで、そこにヒユウモアもあればペイソスもある。嘗て無駄話の巨擘ラムが言つたやうに、所謂 a sort of unlicked, incondite things で、勝手な出鱈目を列べたと見えて而も實は一個の藝術品としての統一もあり中心もある。昔のモンテエニュやベイコンのはいふまでもない、サア・トマス・ブラウンが稀世の名文も、今日から見れば　くは此類のものである。早い話が、此間漱石さんの『三四郎』に名が出てゐた『ハイドリオタフィア』などでも、生眞面目に埋葬した死人の講釋などをしてあるが、畢竟これ作者ブラウンが骨董癖から出た一種の無駄話である。それをあの音樂的な花々しい散文で書いて、三世紀後の僕等をまでも感服さるのである。誰でも持囃すスティイル、アディソン、前世紀に入　はハズリット、ラム、ハント等の無駄話こそは、とこしへに讀書人の心を動かすものであらう。またスティヴンソンが此種の文をのみ集め、わざわざホレスが古歌の文字を借り來つて、特に『少年少女に』(キルジニブス、プエリスクエ)と題したのにも、おのづから作者の意が覺られるではないか。すべて此種の文は日常平淡の座談と見せかけて、そこに奇警の觀察を寄せ、縱橫の才藻をほのめかした所に妙趣がある。謂はば一種のつや消しの文章だ。從つて背後に淵博の學殖と、群を拔くの識見とを有し、眞に咳唾成珠といつたやうな人の作でなければ到底物に成らない。

これでは下手な無駄話になりさうだから本題に入る。玆に言はうとするチェスタトン氏 Gilbert Keith Chesterton は、卽ちこの無駄話流の筆法を以ていま英國文壇の耳目を聳動しつつある新進氣銳の士である。相手かまはず銳い皮肉と警句とを浴せ掛けて、まるで他人(ひと)と喧嘩をするために此世に生れ出たやうな人だ。評論は言ふまでもなく、詩も作れば小說も書く（舞臺にのせる戲曲だけは、バアナド・ショオの熱心な勸告あるにも拘はらず、今日まではまだ書いて居ない）。そして皆之を烈しい論戰の武器に使つて、政治宗教文藝等のあらゆる方面にわたつて常に辯難攻擊の筆を絕たない。その G. K. C. といふ署名は、さながら文壇の怪異であるかの如くに思はれてゐる。

僕がはじめて氏の文に接したのは、まだ角帽を冠つてゐた學生のころに恩師某先生より、氏が當時の新著『ブラウニング傳』を借りて讀んだ時である。今にして思へば此一卷の評傳こそは、氏をして今日の英國文壇に於ける地位を得しめた最初の名著であつた。これより以前單に新聞記者とし知られてゐた氏は、此時より初めて文藝批評家として一方の霸を稱するに至つた。はじめジョン・モオレイ氏は此青年記者の凡ならざる才筆を認め、自分の主宰せる『英國文豪叢書』のために、特に此ブラウニング傳一卷の著を囑した。稿成つて世に出づるや忽ちにして文壇を驚かしたのは、この近世の大詩人の剛健にして熱烈なる樂天觀がチェスタトン氏の主張に近似し、從つてよく著者の手に入つたものであつた事も確かに一原因であらう。同書第八章ブラウニングの哲學を論じた章などを見ると特に此

感がある。しかし尚この外に別に大なる理由があつた。人の知る如く、ブラウニングは近代の最も難解といはるる詩人である。之を解剖し批判するに多くの學徒が頭を惱ます難物である。汗牛充棟といふ程ある此詩人の研究書は、多くはやかましい議論をして、そのため左程でもないものまで益々難解にして仕舞つた。それを今突如として現はれたチェスタトン氏は、徹頭徹尾無駄話の論調でやつて退けたのである。他人が裃を着けて講釋するところを、浴衣がけの座談で說いた。愚にもつかぬ逸話を書いたり、突飛な論斷を下したりして、而もブラウニング其人がよく紙上に活躍してゐる。評論の嚴正な形を打破して、氏が從來鍛へ上げた新聞記者の筆法その儘を用ゐたのは、窮屈な批評家をして一驚を喫せしめた所以である。毀譽褒貶忽ちにして此一書に集まると共に、氏が名聲は英國文壇を動かした。如何なる人の作でも、其人でなければ書かぬと思はれるやうな文句が、頁ごとに必ず一つや二つは出るものだ、とブランデス言つたが、チェスタトンの此書物などは最もさうである。文豪評傳中、どの卷にだつて無いやうな突飛な文章が到る所に見える。例へばメレディスの難解とブラウニングのそれとを比較した一節がある（同書一五七頁）。前者のは常人の觀察し得ないやうな深いところを書くのだから、從つて內容の複雜なために晦澁となり、後者の方は餘りに性急で、意餘りあつて語足らぬに因るものだと論じ、さてその說明が頗る振つたものである。卽ち一人の男が嘘をついたと言つて、も一人の男を二階から叩き落す、こんな事を書くにも、メレディスならば雙方の複雜な心理狀

態などを書いてむつかしくするだらうし、ブラウニングの方ならば一刻も早く階下に落ちるやうにさも性急らしい文句でわからないものにして了ふだらう、と言つてわざわざブラウニング口調を眞似た文句まで書いてゐる。これらは極端な例であるが、終始すべて皆この筆法で出來てゐる。恐らく此類の評傳の書としては最も奇抜なものであらう。氏が後に出した『ディッケンズ論』の方も傑作の一つであるが、全然これと同一な無駄話流の敍述である。嘗てマコオレイ卿は史論といふ固苦しい形を打破して、歴史を碎けた面白い讀物に變じたと同じく、慣習を破棄して評論の文にこの新機軸を出したのは、何事にも保守的な英國に於て殊更注目すべき事であつた。

今より十年前、卽ち千九百年の春チェタストン氏がはじめて世に公にしたのは、『野武士』"The Wild Knight" と題した一卷の詩集であつた。英國の讀書界では此時、『G. K. C. とは果して誰だらう?』といふ疑問が口から口へと傳へられた。そして同じ年のうちに此署名は早くも文界に喧傳せられて、老大家をさへ凌ぐに至つた。日本の文壇ならばいざ知らず、英國でかくも速かに名聲を擧げたためしは、バイロンの昔はさておき、最近五十年殆ど絶無と言つてよい。現にさる名高い評家の如きは極めて熱心に此一卷を批評した後、G. K. C. こそはディギッドソンが世を忍ぶ假の名であらう、と言つたといふ話がある。いかにもディギッドソンが豪放不羈な詩風とは、互に似通つた所があつたからだらうが、いかに此時までチェスタトン氏の名が世に知られなかつたかが此一事でもわかる。僕は

まだチェスタトン氏の詩集を手にせず、外の書物や雜誌で唯二三を讀んだに過ぎないから、此方面に就いては多くを語り得ない。唯ホヰットマンの影響が既に此處女作にも著しかつた事だけは、何人の意見も一致してゐる。『草葉（リイヴス、オヴ、グラス）』の詩人が、信仰に安んじて眞に實人生を樂しんだ剛壯な樂天主義の感化は、氏が後の散文の諸稿にも確かに現はれてゐると思ふ。とにかく此詩集は氏が文壇に認められた最初の作で、具眼者の注目を惹いたのだ。現にメレディスなども之を激賞した一人である。但し部數は餘り多く出なかつたさうだ。

併し氏が批評家としての手腕を見るべき最初の作は、『十二種』"Twelve Types" と題して一卷であらう。勿論これより以前にも、『防禦者』"The Defendant" といふ論集が出てはゐるが、それは文藝に關するものの外、主として帝國主義などを論じた文を集めたので、僕はまだ見てゐない。さて此『十二種』といふ本は、文學史上最も興味ある人物、卽ちポオプ、バイロン、カアライル、スコット、シャロット・ブロンテイ、トルストイ、スティヴンソン、モリスなどを論じた文を集めたのである。しかしこれも例の無駄話であるから、ただこれら各作家に關係ある題目をとつて、氏が自分勝手の說ばかりを書いたものだ。之を讀んで各作家の特色を知らうなぞと思へば、それこそ大間違である。表題に出てゐる名は單に道具に使つた位のもので、著者は例によつて盛んに喧嘩腰の奇論を吐く、その元氣は實に凄まじい。そして人の言はないやうな突飛な論旨に、奇拔な警句と相俟つて常に讀者の感

興を惹く。例へばバイロン論十四頁、何が書いてあるかと思へばかうだ。彼は厭世家ではなくて樂天家である、何となれば彼は自分の詩歌を樂んでゐた人であるからと。勿論ブロンテイとスコットとの論だけは眞の批評ではあるが、これとても此二大作家のただ一面だけを書いたのに過ぎない。

どうも氏の態度には前後の二期あつて、その間に尠からぬ變化があつたやうだ。たとへば帝國主義に關しても、初の詩集『野武士』のなかには

That all our seed be gathered,
　That all our race take lands,
And the sea be a Saxon River,
　That flows through Saxon lands.

すべて吾等が人種は相集まり、總べて吾等が民族は相提携し、かくて海はサクソンの國を流るるサクソンの河とならん

帝國主義の代表詩人キプリングにでもありさうなこんな文句がある事を見れば、氏は嘗て明らかに此主義の味方だつたのだ。それが今日では正反對に、國民主義の方の側の代表者になつてゐる。また信仰の方でも、初期の詩人時代には烈しい正教（オオソドックス）の攻撃者であつたが、今日では全く然うではなくて、寧ろ固い舊信仰の人である。凡てかういふ風に、今日の氏は政治文藝宗教等あらゆる方面に於

て、猛烈に進歩主義近代主義に反抗してゐる。おもふに烈しい喧嘩好きの人は常に他人の反對ばかりを考へる。つむじの曲つた人間に限つて、人が左といへば必ず右と言ふ。そのうちには不知不識の間に、自分の說までが前後反對になつたりする事は、日常吾々のよく見るところである。チェスタトン氏なども矢張りこの方で、人が然りと言へば否なと言ふ、人が信ずれば疑ふ、人が疑へば信じて見せると云つた風だ。だから初期には慣習に反抗し、舊弊な頭の固い連中に戟を向け、後には無政府黨、無神論者、非愛國者と戰ふ。卽ち喧嘩の相手次第で自說にも自ら著しい變化を來したのだらう、と僕は勝手に解釋してゐる。併し英國の論者はこれには別に外部の事情があるといふ。卽ち一は氏の細君の感化である。今から九年前、氏はフランセス・ブロッグといふ婦人と結婚した。此女は慣習を非とする方の側にある一種の慣習といふものに對する保守的な反抗者で（これは英語で言つた方がよくわかる、— the conservative rebel aginst the conventions of the unconventional）これは今日新教育を受けた英吉利の婦人によくある型だ。そこでチェスタトン氏もその感化をうけてあの通り變つたのだ、といふ尤もらしい話である。他の一原因はかのヒレア・ベロック氏との交淸である。此人も矢張り氏と相並んで今の英國文壇に新進の天才と仰がれる名家で、中世藝術の崇拜者として知られ、佛蘭西革命を論じたり『羅馬の旅』といふ本を書いたりして、盛んに近代的傾向に反對する人である。冷罵を逞しうする點に於ても、まさにチェスタトン氏とは伯仲の間にある。この二人が落ち合つたのだから忽ちにして兩方から意氣投合してしまつた。どちらかとい

へばベロック氏の方が先輩で、その思想もさきに固定してゐたのだから、チェスタトン氏は早くもその感化を受けたのである。

チェスタトン氏が近代思想を攻擊する要點は、懷疑思潮を難ずるに在る。或少數の思想家が懷疑說を出すと、誰も彼も之に雷同して、その結果は疑ふべからざる事をまで皆が疑ふ。一代の民心は遂に全く歸趨する所を失つて渾沌の狀態に陷り、甚だしく破壞的に虛無的になつた。イェイツの戲曲に『物なき所にこそ神はあれ』といひ、ショオが道德に永久的分子の存在を疑つて、『法則とは即ち法則無きをいふ』と喝破したる類は皆さうである。ところが、不思議にも世間の人は皆異口同音に進步と唱へてゐる。進步といふ以上は、何處に行くといふ事を十分心得ての上でなければならぬ。民心その歸する所を失つて而も進步を唱へる、これこそ眞に無意義の極である。かくてこの懷疑の暗潮は遂に人々をして益々理想と信仰とに遠ざからしめ、眼前の物質的現實方面にのみ急がせる。かくて今日の如き墮落に導いたのだと氏は說いた。

抑も前世紀ダアヰンが出てからといふものは、世はその進化論を誤解した。世界は必然よい方にばかり進んで行つて、『善』は『惡』の上に終極の勝利を占めるとい風に、詩人も歌へば論客も說く。之に對して氏は前に述べたやうな見地からして烈しく反對するのである。人皆現在の狀態を持續して行く以上、世界は將來に於て必ずや退步する。進步が人生の原則にはならずして、却つて墮落が原則

となる。遂に此世界を支配する者は大魔王（セイタン）であらう、と言つて攻撃する。もとより氏は明確の論理を推すやうな思索家ではない、寧ろ一種の神秘論者で直覺の人である。マアテルリンクなどのやうに眞理の標準を主觀に置く方の人だ。氏の説は勿論その方面から觀るべきだと思ふ。

僕はまだ見ないが、昨年氏は『正教信仰（オオソドクシイ）』といふ書を公にした。是は以上述べた氏の信仰の變遷を自傳的に告白したものらしい。ニイチェだのショオだの、凡て近代思想家の説ではとても滿足が出來ないから、自分は矢張り結局舊信仰に逐ひ込まれて了つたといふ意を洩らしたのだ。次に引用する譬喩談を參照したならば、這般内部の消息がほぼ會得せられる。

現今、氏が近代的傾向のあらゆる方面を攻撃する態度を最も明瞭に示したものでは、『異端（Heretics）』と題した論集がある。是はショオ、キプリング、ホキッスラア、イブセンなどを捉へ來つて例の無駄話流の評論を試み、これによつて近代文藝と、その背景たる近世生活とを非難したものである。卷頭第一、先づ此書が所謂文藝批評に非ざる所以を述べて

余は茲に現代の最も顯著なる人物を論じたいが、それは個人に就いてでもなく或は文學的のやり方によるのでも無い、唯其人々の唱ふる説の實體に關して論ずるのである。自分は活氣ある藝術家或は剛壯な人物としてのキプリング氏に用事はない。余は單に氏を一個の異端として——即ち其人の見解が余の見解と相容れざるだけの勇氣ある人物として論ずる。自分はまた現存の最も異彩ある正直な人物としてのバアナド・ショオ氏に用事は無い。

余は單に氏を一個の異端として――即ち其人の議論は全く堅固で全く實着で、そして全く誤つてゐる、さういふ人物として論ずるのだ。

とある。これが即ち飽くまで無駄話的筆法で行かうといふ著者の意である。また序論の最後に、次のやうな面白い譬喩談が出てゐる。これによつて、著者が保守の見地に立つて近代の思想家に反抗する態度が、極めて明らかに分るだらうと思ふ。

何かの事で街に一騒動もちあがる。まあ假に有力家が寄つて街燈を一つ引き倒すんだと想像する。そこへ鼠色の衣を着た僧――これは中世の靈であるが、ひとり出て來て、中世哲學その儘の切口上で說き出す。「諸君、先づ第一に光といふものの値打を考へて御覽なさい。若し光がそれ自らに於て良いものであるならば……」ここまで喋舌ると早速僧は皆から打倒されて仕舞つた。そして皆の者は忽ち街燈に飛びかかつて、僅かに十分間にして之を倒す。中世的でなく實際的だから此方がいい、と言つてお互に祝ひ合ふ。しかし物はさう容易く解決は出來ない。第一、街燈を倒すのも、或者は電燈が欲しさに、或者は古鐵が欲しさに、或者は自分が惡事を働らいてゐるから暗闇が欲しさにやつたわけだ。ひとりが街燈で不足だといへば、ひとりはそれで餘るといふ、市の道具を壞したさにやつた者も居れば、何でもいいから破壞しろといふ男も居る。そこに夜中喧嘩が始まると、闇の事だから盲滅法に相手かまはず打擲する。さあかうなると必ずや今日明日明後日と漸々、下のやうな事を思出す、どうも結局あの僧の言つた事が正しかつた、何事も皆光明の教に倚るものだ。瓦斯燈の下で論じられたものを、今ではこんな闇のなかで論じなければならぬ、とかう遂に皆が思ふ。

中世信仰の光をかき消し、わざわざ渾沌たる思想界を造り出した近代人こそは卽ちこの瓦斯燈を壞した『異端』の徒である。此書に論じられた人々のうちで、キプリングを最もひどく喧嘩腰で攻撃してゐるが、一つ困つたものは書中のイブセン論である。氏がこの近世の大戲曲家を論ずるや、あたまから "The Negative Spirit" と呼んで散々に非難してゐるが、これには隨分誤解もあるらしい。なかには、あのいやな猶太人の老漢マクス・ノルダウの言ひさうな、淺薄な論も出て來る。蓋し氏はイブセンそのものを精讀せずして、寧ろショオの書いた『イブセン眞髓』などを讀んで、ただ一概に毛嫌ひしたものではなからうか。

以上述べた如く、氏の態度には前後二期の變化はあるが、依然として變化しないものはその論調である、その喧嘩腰である。氏は人に喰つて掛らなければ自說を吐けない人である。靜思冥想、獨り高遠の思索に耽るが如きは斷じてその長所ではない。敵が居ない時には、わざわざ敵を假想してまでやる。前述の『防禦者』『異端』などいふ書名が旣によく之を示してゐるではないか。だから今少しく此點を解剖して見よう。

第一、氏は決して一本調子で無闇に吠えつくやうな無能漢ではない。それには究竟な武器を持つてゐる、卽ちパラドクスといふ飛び道具を使ふ。或人が氏を冷評してから言つた。

He gravely argues No means Yes,

He shows that joy is deep distress,
He tells you soap is made from cheese.

『否な』といふは『然り』の意だと氏は眞面目に論ずる。喜びとは深き苦しみであると說く。・・・・石鹼は乾酪で造るものだと言つて聞かせる。

氏の說は實際から云つたパラドックスで滿ちてゐる。英國では氏のことを『今ジョンソン』といふさうだが、それは堂々たる風采がこの十八世紀文壇の覇王に似てゐるといふだけの話だらう。昔のジョンソは物を考へるのに眞直に考へた人だ。誰にも解るやうに正面から說いた人で、『否な』を『然り』などとは決して言はなかつた。所謂 spade を spade だと露骨に言ふ人であつた。併しチェスタトン氏は何でも裏から物を考へ、逆に物を言ふ人である。すべて眞理といふものには忘れられた一面がある。この隱れた一面を知らさうと思へば、勢ひ裏返して見なければならぬと氏は信じてゐるらしい。例へば『單純は複雜よりもなほ更に神祕的なり』だの、『青年作家が文章外面の晦澁は內部の明晰なるを示す』などの文句を見れば、確かに此感がある。

近代の英國で此點に於て氏と似てゐる者は、蓋しオスカア・ワイルドであらう。併しワイルドのパラドックスは單に人の意表に出でるばかりでなく、その縱橫の文才をこれ見よがしに振り廻はして、辭句などは實に洗鍊し上げた完璧である。だからそれ以上說明の文句などを入れる餘地は無いが、チ

ェスタトン氏のは、謂はば荒削りで、甚だしく鬱的なところがある。從つてまた滔々數萬言を費して更にそれを敷衍すると云つた風だ。そして更に著しい相異は、氏のやうな喧嘩腰がワイルドには殆ど見えない。かの通俗な諺を轉倒して一種のパラドックスを作る事は、警句家のよくやる慣用手段である。例へばワイルドの『セバスティアン・メルモス』のなかに "Punctuality is the thief of time" といふ警句があつた。これはいふまでもなく、俗諺の "Procrastination is the thief of time" (遲延は時間の賊) のもぢりだとは、誰にでも氣が附く。一寸奇拔で面白いが、唯それだけの事である。ところがチェスタトン氏は "A good bush needs no wine" などといふ。これも無論古諺の『良い酒には廣告の看板は要らぬ』といふのを逆に、『廣告が良ければ酒なぞは要らぬ』とやつたのだ。一寸氣の利いた、皮肉な冷罵に一種の妙味がある。とにかく二人の差はこんなところにもあらはれてゐると思ふ。

次に氏の喧嘩腰で僕が面白いと思ふ點は、飽くまでも面憎く、相手を怒らせずんばやまないといふ風がある事だ。手加減なぞは固より藥にしたくとも無い。初から人好きのしないやうな說を大袈裟に、而もまた極端に言ひ張る。アナトオル・フランス氏のやうに柔和な顏をして上品な皮肉をやるでも無ければ、誰かのやうに滿面朱を濺いで稚氣滿幅の罵詈をするでも無い。自分は澄まし込んでゐて、突飛な極端な事を尤もらしくいふ、そして相手が十分腹を立てるやうに仕向ける。從つて隨分思

ひ切つた事をいふ。例へば論集『異端』の中に、キプリングには愛國心は微塵も無いのが特徴だなぞと言つてゐる。バアナド・ショオは此點を見て、氏は佛蘭西的であるといつたさうだが、それは何とも僕には判斷が出來ない。

藝術家として氏は最も奇拔なるヒュウモリストである。讀者の思ひもかけないやうな所に、突如として變挺な飛び離れた事物を持出して人を驚かせる。眞面目な議論をしてゐるかと思へば、その眞最中に奇想天外から落ちるやうな事をいふ。さうかと思へば下らぬ話の途中へ仰々しい聖書や、或は天下國家の大事を擔ぎ出して巧みに人の意表に出る。此點に於て氏は蓋し端倪すべからざる絕倫の天才と云つて可い。或人は、氏が眞面目になればなるほど、文は滑稽的になると言つたのも、よく穿つてゐると思ふ。

氏はその眞髓に於てつまり論客である、ジャアナリストである、眞の藝術家ではない。詩人としても小說家としても乃至批評家としても、終始一貫してその論客たるの態度を改めない。かの藝術のための藝術主義に對する氏の攻擊論は甚だ有名なものであるが、氏自らも其說の通りに出來てゐる。例の『異端』のうちに

> 最上の短篇小說は帝國主義を宣傳しようとする人によつて書かれた。最上の戲曲は社會主義を唱へようとした人によつて書かれた。凡ての藝術家の凡ての藝術は、主義宣傳の副產物たるこれらの藝術に比して、いかにも小

さく、つまらなく見えるではないか。

これは暗にキプリングとショオとを引合に出しての氣焔で、僕は全く首肯し難いと思ふが、それはとにかく實際上、氏自身も此說の通りを實行してゐる。誰の言であつたか、人は直接間接みな自己の辯解をしてゐるものだといふ事があるが、氏の藝術觀などは全くそれだ。だから氏の作品は自分の主義宣傳の副産物たるに過ぎない。畢竟、文藝を論戰の武器だと見做してゐるのだ。

だから、氏にして若し藝術のために藝術をやつたならば、尙更に一段の光彩を增す事であらうと或人は評したが、僕は必ずしもさうは思はぬ。氏が神來の興に任せて一氣呵成に書き上げた文章には、實に非常に立派なものがあると共に隨分また缺點も多い。だから藝術品として完璧では無いかも知れぬが、その短所はやがてまた長所である。生氣潑剌たる點に至つては、斷じて他人の模倣を許さない特色がある。氏の如きは是非とも一瀉千里の勢でなければ文章の書けない人だらうと思ふ。強ひて之に洗錬を加へしめたらば、却つて根本を打ち壞すのみならず、氏が無駄話の妙味は殆ど失はれるだらう。僕なぞも自分一個の趣味から言へば、藝術家としての氏には餘り感服しない方であるが、氏がこの獨得の才筆だけは確かに現代英文學の異彩だと思ふ。

氏の文の缺點をいへば、小さい點はさておき、誰にも氣附くのは議論でも敍述でも、平氣で問題外の岐路に入ることである。これは健筆の人によくある缺點だが、氏のはこれが最も甚だしい。興に乘

じ筆に任せて書き立てると、本題とは全然沒交渉の方角へさつさと行つて了ふ。而も書く當人だけは獨り大に得意でゐるらしい、從つて光彩陸離たる名文も却つてさういふところに現はれる。一例をいへば、人物を描くのにその背景の方に身が入ると、本尊に無關係の事を長々と書き立てる。氏の『ブラウニング』傳のなかに、此詩人が伊太利を愛し、夫妻共にここに住んだといふ事を書く。そこで千八百四十年代の伊太利の國情を敍するに當つて、當時此國の自由獨立運動の事を想ひ出した。固よりこれは女詩人ブラウニング夫人の方には大に關係はあるが、ブラウニングにはさまで必要の無い事だ。然るにひとたび此問題に觸れるや、著者の頭は忽ちにして熱し來つて滔々數萬言、先づ佛國革命に溯り、那翁、神聖同盟の勝利より伊太利の自由を論じ、いつの間にか肝腎のブラウニングはお留守になつた氣味がある。而もこの數頁は、卷中の白眉とも言ふべき壯快暢達の文であるから面白い。その他、ブラウニング夫人の父の事を長々しく書いたなぞも、同じ例である。つまり氏は自分にさへ興味があれば、前後の關係だの釣合だのいふ事を無視して了つて、思ふ存分書きたいだけ書くといふ流儀だ。

その外、氏の文中に前後の重複などは勿論、また烈しい矛盾撞着があつたり、論理に合はない斷案なども決して珍らしくない。煩はしいから今一々例證は省く。實際或評家が言つた通り、氏の文を讀むのはさながら道路講釋を聞くやうだ。盛んに長廣舌を弄して奇拔な言を吐くから、行人は誰でも歩を

とどめる。そして聞いてゐるうちには面白くなつて、辯者の言ふが儘に引きずられてゐるが、後になつて考へれば何だか少々馬鹿にされたやうな氣がする。氏は此點に於ても確かに天成の無駄話家であらう。

おもふに、世間で皮肉屋といはれる人の多くは理想家である。畢竟自分の理想が高いから、世のなかの缺點ばかりが目につく、從つて反撥的になつて、動もすれば喧嘩もしたくなるのだ。氏も恐らくは此種の人であらうと思はれる。それはとにかく、氏は非常に浪漫的な性質の人で、この醜穢な物質萬能の近世生活の中に在りながら、自分のみは獨りそこにロマンスの境地を求めて、絶えず憧憬してやまない風の見えるのがゆかしい。

氏は實に精力絶倫の人、詩文に演説に、最近數年間に於て世に公にしたものの分量は實に驚くべきものである。それさへ氏の手に成つたものの一部に過ぎないので、筐底に藏せられた原稿は尚これ以上に多いと聞いては、殆ど嘘のやうである。氏は蓋し口に筆にその潑剌たる生氣を外に發し、自己を表白する事を以て無上の愉快と感ずるらしい。必ずしも名利を求むるでもなく、或一派の主義のためにするでもない。唯おのれ一個の胸裡鬱勃の氣を吐いて、狷介自ら高うすれば足るの人であらう。それもその筈、氏はなほ少壯氣鋭の士で、今まさに三十五歳、千八百七十四年五月十八日の生れである。

十年以前、私が此文を草してチェスタトン氏の奇才を紹介した頃から後に、氏は更に幾多の著作を公にした。

詩に小說に或はまた劇にも、そのエッセイに現はれたと同じ天分を發揮してゐる事は、今では平素英書に親しむ日本の讀書子の間にも知られてゐる。評傳の書としては、倫敦の Mortin Secker's Series of Critical Studies のうち "G. K. Chesterton" By Julius West を參考として薦める。

奇文一篇 （英、チェスタトン作）

チェスタトンの筆致を紹介したいと思つて、その文集を繰返したが程よいのが見當らぬので、假に此一篇のエッセイを選んで譯した。原文は『帽子を追ふ事』と題し、私の編纂した『英文論集』"English Essays"（寶文館發行）に採錄して置いた。

元來氏の文章はジャアナリズムの產物だ。從つて政界や文壇などの時事問題を捉へて、奇拔な觀察を下したのが大部分を占めてゐる。だから今日私どもがポオプの諷詩などを讀む場合と同じく、時處を隔ててその特殊の題目たる事實に興味を持たなくなつた者の目から見ては、さまで面白く感じないのが隨分ある。從つて氏の文名をしてながく後代に傳はらしむる物あらば、そはあまり時事に關係の無い題目に就いて感想を書いた文であらうかと思ふ。ここに譯したのなどは寧ろ此類のもので、氏の短いエッセイを集めた『感想錄』（オォル・シングス・コンシダアド）のなかの一篇だ。洪水を詩的だといふ奇論は、ディ・クインシィの論文『美術として見たる殺人』にでもありさうな說だが、同じやうな事でも、これは飽くまでパラドクシカルに出來てゐる所に氏の特色が見られる。そしてこんな下らない話をさも眞面目らしく滔々と述べ立てて、巧みに人の意表に出るところにまた一種の面白味がある。

かつて氏が口を極めて、詩人ポオプを激賞した論文がある。一寸考へると氏のやうな浪漫的な人が、此十

八世紀の冷やかな古典詩人を讃するといふのは甚だ奇妙である。しかしそれは外でもない、ポオプが最も巧みに駢儷（パラレル）の句や對偶（アンティセシス）の法を用ゐた點を讃賞したものである。昔から鋭い警句家といはれる人は、東西古今を通じて皆好んでこの語法を用ゐてゐるが、特にチェスタトン氏などはその最も甚だしいものである。氏の文の妙所に至つては、皮肉やパラドックスが殆ど皆對句駢儷ばかりで出來てゐるのがある。玆に譯した文などは寧ろこれの稀な方であるが、末段に近き "An adventure is only an inconvenience rightly considered. An inconvenience is only an adventure wrongly considered" の文句などは、よく氏が筆法の特色を示したものだと思ふ。

　左に譯した一節はその奇警な逆說（パラドクス）に富める點に於て、また氏が樂天的な浪漫的な觀察の一端をも示してゐる。殊に子供が停車場で汽車を待つ一節などは、氏自らが近代の事物に對する態度を飾なく現はしたものだらう。風に吹き飛ばされた帽子を追掛けると云ふ話は、氏が崇拜するディッケンズの名作『ピクキック』から思ひ付いたものかと思ふ。

　日本の文壇にはかういふ眞のエッセイを書く人も少いが、讀んで味はふ人は尙更少いやうだ。眞理を背後から見て出來た逆說（パラドクス）の面白味や、極端な誇張や皮肉の妙味を解せずに、唯事實と理窟をのみ求めようとするからであらう。試に東京か大阪が大洪水の最中に、チェスタトンのやうなこんな文を書いて公にする人があつたとすれば、世人はこれを馬鹿だと言つて罵らなければ、恐らくこれを不謹愼だとでも言つて咎め立てすることだらう。倫敦が水害で大騷ぎの最中に、平氣で此文を公にするチェスタトンと云ふ男も面白いに相

違ないが、これを讀んで破顔微笑してゐる英吉利の讀者は尙更に面白いではないか。嘗てラムの名文中にある「書物といへば詩文小説など創作の類をいふので、他の書物は單に書物の形をしたもの、書物にして書物にあらず、biblia a biblia だ」と云ふ奇拔な言葉が日本に紹介せられた時、むきになつてこれを正面から御苦勞にも辯駁した一文が出た事をいまだに私は記憶してゐる。さういふ人は、いつになつたら眞のエッセイの妙味が解ることであらうか。

自分が下らない田舍に來てゐる不在中に、倫敦では洪水だと聞いてひどく羨ましい感じがする。聞けば吾輩のバタアシイの邊では特に諸方から出水が落ち合ふといふ、世にもありがたい話だ。いふまでもなくバタアシイは既に人間の住居として最も美しい場所である。その上にいま一面の大洪水で更に壯觀を加へたのだ。從つてあの風變りな都の景色——否な水の景色——には、必ずや他に類なきものがあるだらう。恰度それがヱニスの光景で、屠牛場から肉を運ぶ小舟が銀波瀲灔たる小徑を苦もなくすらすらと走るのは不思議なぐらゐ、全くゴンドラを見るやうだ。ラッチミア街の角まできやべつを持てくる青物屋が櫂を操つる樣にも、さぞゴンドラの舟夫の脫俗な趣があらう。元來島といふものが既に申分なき詩的なものである。そこへ洪水が出ると一地方忽ちにして群島になるんだから尙更面白い。

火事だの洪水だのをつかまへてこんな太平樂をならべると、それは實際に遠いと思ふ人もあらう。

しかしかういふ災害に對する此觀察は、その實際的な點に於てこれと反對な觀察と少しも變りは無い。かういふ災害を見て樂しまうといふ眞の樂天家は、これを苦情の種にしようといふ慷慨家に比して、論理的な點に於て少しも讓らないのみか、更に數倍物の分つたところがある。眞の苦痛、たとへばスミスフィイルドで火刑になるとか、齒痛で惱むといふやうなのは退引ならぬ場合で、これは辛抱は出來ても樂しむといふわけには行かぬ。然し齒痛などは實際除外例であるし、スミスフィイルドの火などは滅多にある話ぢやない。男が文句を言つたり、女が泣き出したりするやうな災難といふのは大抵みな感情的乃至想像的のもので、全く氣の所爲である。いま一例をいふと、大人が若し停車場でぶらついて汽車を待たされると、頻りに苦情を並べる。しかしこんな場合に子供が苦情を言つた例は未だ曾て聞かないではないか。それもその筈、子供にとつては停車場の構内にゐるのは、お伽噺にある不思議の洞や、歡樂の宮殿にゐると同樣、信號標の赤い光や青い光が皆新しいお日さま、お月さまに見える。信號標の木の腕がかたんと落ちると、それは王樣が笏を振り下げる合圖で、ぴいと汽車の試合が始まるんだ位に思つてゐる。僕自らも矢張り此子供と同じやうにいつも考へる。ぼんやり立つて二時十五分發の列車を待合はしてゐても、それでまた何かの役に立つものだ。かういふ時に得られる冥想こそは豐かで、そして實もある。現に僕が一生のうちで一番樂しい時間は、大抵クラパム驛で過したものだ。――さうだ、此驛も今ぢや洪水に浸かつてゐるだらう。自分は彼處でいつも一心

不亂に不思議な心持でゐたから、こんな時でも腰の邊まで水が來るまで、とてもそれと氣が附かなかつたかも知れぬ。然し實際前にも言つた通り、凡てから云つた災難の場合は全く感情的の觀察次第である。日常生活上最も迷惑な事だと言つて世人の騷いでゐる、大抵どの事柄に適用めて見ても、大丈夫これは間違ないと思ふ。

　例へば吹き飛ばされた帽子を、ひた走りに追掛けて行くなども不愉快だと人は皆思つてゐる。亂れず騷がぬ敬虔な心を持つた人に、それが何故不愉快であらう。必ずしも走るから、――そして走ると疲れ切るからといふ故であるまい。現に同じ人が競技とか勝負事とかいへば、まだまだ迅く走るではないか。綺麗な絹帽を追掛けて行くよりも、くだらない小つぽけな皮の球を追掛ける方に遙か熱心に走つてるではないか。どうも帽子を追掛けるなぞは、甚だ以て器量を下げると思つてる。一體、器量を下げると人がいふのは滑稽だといふ意味だ。それはいかにも滑稽だらう、然し人間そのものが既に滑稽な代物に出來てるから仕方がない。まあ人間のやつてることは十中八九みな滑稽だ。――例へは物を食ふ、これなども滑稽の一つだ。そして一番滑稽な事が恰度また一番仕甲斐のある事なのだ。例へば求婚なぞがそれだ。帽子を追掛けるのは、妻女を手に入れようと追掛けてゐるその半分も可笑しくは無いと思ふ。

　だから若し正しく物を感ずるならば、帽子を追掛けるなぞは最も男らしく熱中して、また神聖な愉

快を以てやれるものだ。吾輩は荒れまはる獸を追ふ壯快な獵人だ、とかう自分で思つてゐればいい。實際またどんな動物でも、吹き飛ばされた帽子ぐらゐ奔放な奴は無いのである。風のひどい日の帽子獵、これは他日必ず上流社會の遊戲になるだらうと僕は思ふ。風のひどい朝には、どこか小高い處に紳士淑女が集まる。すると此道の專門家の者ども、斯々の叢に帽を放ち候とか何とか、まあ術語は何だか知らないが觸れまはる。見たまへ、これは確かに最も完全に慈悲人道の精神にかなつた競技であらう。此遊戲こそ苦痛を他に負はせる事の斷じて無いものだ、と獵人も感じてゐる。否な見物人に愉快——殆ど躍りたくなるやうな愉快を與へてゐると感じるだらう。先日もハイド・パアクで或老人が帽子を飛ばして、しきりにそれを追掛けてゐるのを見た事がある。そこで僕はかう言つてやつた。君の其時の一擧一動といふものは、どれ位群衆に無邪氣な愉快を與へたらう。それを思つて見たまへ、仁慈の心ある君たるもの須らく意を安んじ、感謝して可なりだと。

家のなかででも氣のいらいらするやうな事はよくあるが、どれにでも皆同じ理窟が適用まる。牛乳のなかに蠅が一匹陷つたのや、酒の盃に木栓の切片の落ちたのを摘み出すのに、よく人はじれつたがるものだ。然しさういふ時には、薄暗い淵のそばに腰をおろして釣をやる人の辛抱を一寸考へて見るがいい。すると直ぐに氣が鎭まつて、ゆつたりする。僕の知人に宗教上極めて近代的な考を抱いてゐる人がある。その癖、抽斗に物が緊とつまつて引き出せなくなると、じれつたさに神の名なぞを唱へ

る。勿論此男の事だから、宗教上の辭なぞに何の意味もあるんぢや無い。殊に或友人ときたら、並はづれてかういふ事に氣短だ。每日抽斗がつまる、すると每日それに拍子を合はせて何か畜生呼ばはりする。それで僕は言ふんだ。かういふ立腹は全く主觀的相對的のものである。抽斗は容易に拔き得るもの、また拔かるべきもの、乃至拔けるだらう位に自分で假定て掛かるからいけない。試に君が或强大な勁敵を相手に引つぱつてるんだと想つて見たまへ。益々奮勵はしても、腹の立つ事はあるまい。例へば海中から救助船を一艘引き上げるとか、アルプス山中の絶壁に仲間の者を網で釣り上げるとか考へて見たまへ。又自分が子供だと思つて、英佛競爭の綱引をやつてゐると想像したら奈何だ。とかう言つてから僕は直ぐに此男と別れたが、此言は確かに後になつて十分の效果があつたに定つてゐる。思ふにそれからといふもの、此男は每日々々抽斗の把手にしがみつき、必死になつて顏を赤くし目を瞋らして、えいやえいやの掛聲で自分を勵ましながら、まるで衆人環視のなかに喝采の聲でも聞くやうな風にやつてゐる事、更々疑なしである。

　かういふわけだから倫敦の洪水でも、これを詩趣あるものとして喜ぶ事が出來ると想像するのは馬鹿げた話だとか、信じられない事だなぞとは、僕は決して思はぬ。洪水のため生ずるのは不便といふ事以上には出ない。して見れば前にも言つ通り『不便』とは物の一面だけを見た話で、それすら或浪漫的な狀態の最も平凡な偶然的な一面に過ぎない。畢竟『冒險』といふのは『不便』を正しく考へた

もの、『不便』といふのは『冒険』を誤つて考へたものだ。倫敦の家や店に更に一層の奇觀を添へ。妙趣を加へただけの事だ。かの物語のなかにある舊教の坊さんは、『酒は水のほか何物とあるもよし』と言つたが、『水は酒のほか何物とあるもよし』と言つてもつまりは同じ道理である。

ヴロットンの版畫

此篇は大正二年の春、京都に『詩と散文』といふ雜誌が出來た時、その創刊號に寄せたものである。

一

近頃の佛蘭西の藝苑に、Félix Vallotton（フエリオス ワロツトン）の版畫は一種特異な地位を占めてゐる。ながく勢を失つてゐた木版畫といふものに新しい力と生命とを與へ、その歴史に一新時期を劃したからである。

いつも FV といふ落款のあるかれの繪を見ると、私は人を魅するやうな一種の強い力が畫面に動いてゐるのを感ずると共に、そこにまたこの畫家獨得の表現によつて、人生の姿が深刻に寫し出されてゐるのを何よりもうれしく思ふのである。もし單に自己の好惡を以て批判の標準として差支ないものならば、私は現代藝術の最もすぐれた天才の一人としてこのヴロットンの名を擧げるに躊躇しない。

ヴロットンのことは、さきに雜誌『白樺』の第一卷第二號（明治四十三年五月發行）に里見氏の忠實な紹介があつて、それには九個の木版畫が添へられてあつた。その九個のなかには特にかれの傑作

として名高いゴルレエヌ、ポオ、ドストイエフスキイの肖像なども出てゐた。この畫家の閲歴等に關しても既に『白樺』の方に要を得た記述があつたから、私は單に茲に載せた版畫數枚の解說を兼ねて、かれの作の著しい特色に就いて一言するだけに止めようと思ふ。普通の畫とちがつて色の面倒のない black and white のだから、摸寫によつて比較的十分に畫の眞味を知ることが出來る。ただ大きさが、原圖は縱六七吋から横九吋乃至十一吋あるのを、ずつと小さく縮寫するのだから、細かい點はどうも旨く行かない。

二

はじめ彼はエッチングや油畫をやつて見た。もとよりその方でも出色の技倆はあつたが、どうも思はしくなかつた。自分の見た人生の美と悲痛とを、何とかしてもつと直截明白に表現する法が別にありさうなものだと思つて、かれは遂にこの木版畫をはじめた。黑と白とだけで、ごく僅かな線を使つたこの上もない簡單な版畫に、彼は遂に自己獨創の領域を見出し得たのである。

かうして出來た彼の版畫は、その發達の階段に從つて色々の group にわけて見ることが出來る。先づ第一には茲に揭げた『愛國歌』Le Couplet Patriotique（第十二圖參照）のやうな類のもの。あの繪を見るとヴロットンが如何に群集をゑがくのに巧く、またその中の人物の個々の性格から態度まで

を、いかに分明と描きわけるかに感服せざるを得ない。奏樂堂でさる評判の高い歌ひ手が footlight のところに進み出て、片手に旗でも持つて、情をこめた美しい愛國の歌を今しも聲を絞つて歌ひ出したところだらう。高棧敷の方では、群集が口を開き顔を歪め手を拍つて熱心にそれに唱和してゐる。群集の顔といひ表情といひ、一つとして同じのは無い。この畫家獨得の正確な手法で、いかにも活き活きと各人の銘々の性格や表情があらはれてゐる。ことに左の端から二番目に頬杖をついた男が拳を欄干にもたせて、獨りつんと澄まして默つてゐるところなぞは、すつかり僕の氣に入つた。

沙翁劇のなかには、どんなつまらぬ人物の性格でも、それが巧みに描きわけられてゐる。群集のなかの甲乙の對話のはしばしにさへ、よく其者の個性が出てゐて、同じやうな人間は決してふたりと居ないといふことを評家はよく言ふが、ヴロットンの描く群集に就いても同じことが言はれるだらうと思ふ。この點になると昔からの日本畫なぞは實に拙いもので、群集をかくと、どの人間も大抵みな同じやうな間の抜けた面をしてゐるのが多い。私は何故だか、いつも群集の顔といふものに興味を覺えるので、たとへば講演會の夜などに、電燈の光に照らされた聽衆の顔を見ると實におもしろいと思ふ。或英國の詩人の作に、火事場で大勢の人の顔が火に照らされて見えるところを非常にうまく寫したのがあつた。文學の方でも日本にはあゝいふ巧いのが甚だ尠いやうである。

かうしてヴロットンは好んで群集をゑがいた。人道を大勢の人が通るのを巡査が見てゐる圖や、醉

漢だ交番に引張られて行くのに後からぞろぞろ、、、澤山の子供が跟いて行く繪なども面白い。また『買ひもの』Le Bon Marché と題したのは、大きなディパアトメント・ストアで澤山の奥樣や令孃が押しあひへし合ひして、番頭を相手に熱心に買物をしてゐるところが實にうまく描かれてゐる。また『驟雨』L'Averse（第十三圖參照）の繪は、やや趣はちがふが矢張り同じ類のもので、特に正確な彫塑的なところが此一枚の特徴であらう。なほここには『大通り』Boulevard（第十四圖參照）をも此類に屬するものとして掲げた。

三

第二には、さきのと稍畫風を異にした『お出かけ』La Sortie,『骨牌戲』Le Poker のやうなたぐひの繪がある。畫面全體に眞黑な背景をおいて、それに少しばかりの白を非常に強く利かして、巧みに畫面の統一を作つたところが面白い。『お出かけ』（第十五圖參照）の方は、婦人が夜の裝束で馬車に急いで乘らうとするところ。馬車の輪にはかすかな光が反射してゐて、戸のところには暗中に馭者がぢつと立つて待つてゐる。ほかに何も見えないが、胸の金釦だけが目につくのである。『骨牌戲』（第十六圖參照）の方も同じ描きかたであるが、頰鬚のある老紳士の顏が特に面白く出來てゐる。隣のわかい男はこの老紳士から睨まれて、どの札を行つたものかとよほど當惑してゐる思案顏が、わづ

か單眼鏡(モノクル)一つかいただけで明らかに寫し出されてゐる。これら二枚の作を見ただけでも、ヴロットンがいかに省筆法(シムプリフイケーション)にすぐれてゐるかがわかる。即ち十分に筆數を少くし、ただ事象の中心になる要點だけを捉へ、他の細かい處は一切略してしまふといふ描寫法で、これは日本の文人畫によくある淡彩一抹の粗畫に見るやうな、また文學でいへばモオパッサンの多くの短篇小說に試みられたのと同じやうな描きかたである。一目してその刹那に事物の中心となる部分を看取して了ふだけの鋭い觀察眼と、その上によほど手法(テクニク)の熟したところとが無くては、とても出來ないわざである。

四

次に第三の部類には、詩人音樂家政治家なぞの肖像畫が澤山ある。どれを見てもその巧みな省筆法の妙に驚かされる事は同じだが、單に目鼻だちがよく似てゐるといふばかりでなく、その人物の性格がこのわづかな筆數のうちに鋭く暗示されてゐる。ポオやドストイエフスキイの肖像なぞは、ヴロットンがこれらの詩人小說家の作を深く味はうて、それから得た自分の印象を畫面にゑがいたものである。目の落ちくぼんだ、額の廣いポオの肖像(第十七圖參照)を見ると、誰しも此詩人の悲慘な一生を思はずには居られないではないか。何だか犬養木堂氏の寫眞に似て居るあのドストイエフスキイの畫像(第十八圖參照)を見ると、その異樣に光る眼と寂しい口もととに、私は『罪と罰』や『死者の

家』のやうな作を蔽うてゐる近代的憂愁の暗影を、そこに認めないわけには行かない。また本書に載せたマアテルリンク（第十九圖參照）、ヱルハアレン（第二十圖參照）、エロオル（第二十一圖參照）、レニエ（第二十二圖參照）、レッテ（第二十三圖參照）、マラルメ（第二十四圖參照）、サマン（第二十五圖參照）等佛蘭西詩人の肖像は、みな"Le Livre des Masques"（『假面集』上下二卷）の中に出てゐる。これは近代の象徵派詩人殆ど五十餘人の評論で、本文の方は、現代佛蘭西文壇第一流の作家であり、評家であり、また詩人でもあるレミ・ドゥ・グウルモンの筆に成り、それに此ヴァロットンのかいた各詩人の肖像一枚づつを挿んだものだ。

五

最後に私は、かれが現代人の生活と心理とを巧みに解剖して、その苦悶悲痛の一面を活寫した一例として、『信ずる人』Le Confiant（第二十六圖參照）と題した一枚を紹介しよう。女が長椅子（ソオファ）に腰をかけてゐると、男は跪かないばかりにして女の兩手を自分の顏に押し當てて、啜り泣きしながら意中を語り、身の上を打ち明けてゐる。男は女を信じ切つて滿腔の赤誠を致してゐるのに、女の方の顏にはそれとはなく、蔽ふべからざる輕侮と嘲笑の色が明らかに見える。かういふ女に意中を語りあかすのは敵に武器を貸すの類である、とは男みづから氣づかないのである。こんな皮肉な觀かたは、たし

かにヴロットンが人生に對する厭世的な一面のあることを證するもので、やはりモオパッサンなどの自然主義的な態度である。かのストリンドベルヒにはあらずとも、かういふ書を見ると誰しも女嫌ひ(メソジニスト)になりさうではないか。

六

『藝術は性格の追求である』とテエヌは言つた。人の顏一つでも景色一つでも、その特徴のあるところをしつかり捕捉(つかま)へて、力強くそれを描き出すことが藝術家の任務であるとすれば、ヴロットンの如きはあの簡單な black and white によつて最もよくこの任務を果し得た一人である。かれの成功がめざましかつただけに、獨佛諸國には今やかれの模倣者は甚だ多いが、ヴロットンの作にあらはれた鋭い強い個性の力に至つては、遂に何人も之を學ぶことを得ないものであらう。

私は終にブリントン氏の評語をその儘引用して、讀者の參考に供しよう。

"A few incisive lines and the savant apposition of black and white tell his story One does not need, after all, to be modiste or upholsterer in order to probe the souls of men. Though there is nothing here which suggests the golden yellow of Rembrandt or the silver gray of Van Dyck, there is something in each of these heads which

recalls the greatest of masters, one who, in the dim chambers of the Alcazar, posed his figures against a neutral ground and painted them witn matchless unity of effect. It is only the immature who crave externals; the disdainful Velasquez was content with essentials."

これはまた随分思ひ切つて褒めたものである。

第十二圖



Le Couplet Patriotique

第十三圖



L'Averse

第十四圖



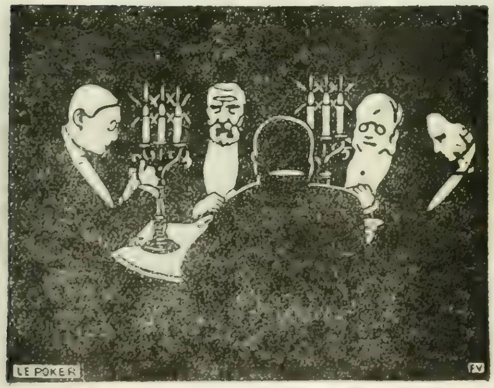
Boulevard

第十五圖



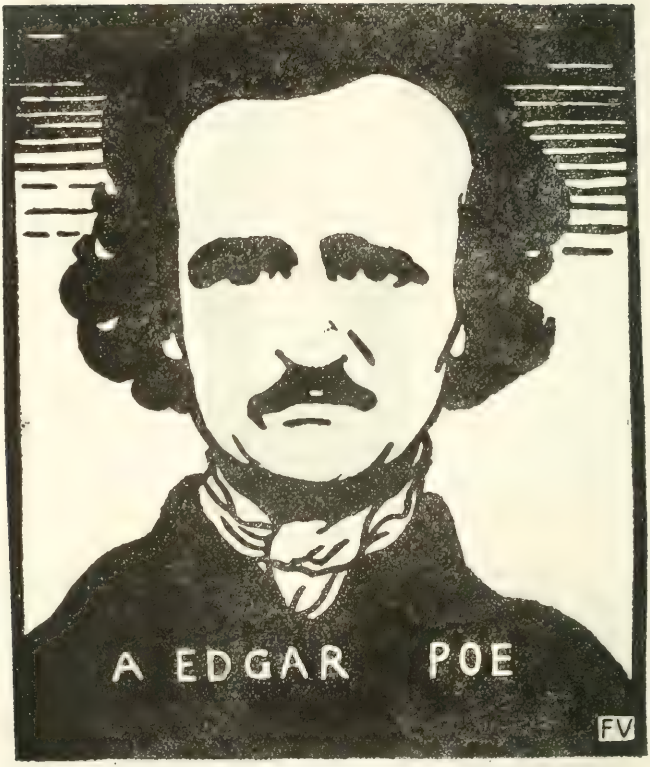
La Sortei

第十六圖



Le Poker

第十七圖



Edgar A. Poe

第二十圖



Verhæren

第十九圖



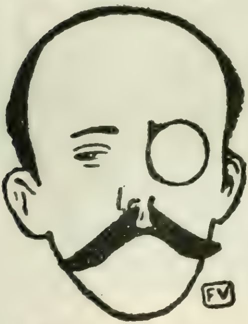
Mæterlinck

第十八圖



Dostoiewski

第二十二圖



Henri de Régnier

第二十一圖



A Ferdinand Herold

第二十三圖



Adolph Retté

第二十四圖



Stéphane Mallarm'é

第二十五圖



Albert Samain

第二十六圖



Le Confiant

神秘思想家

（フランシス・グリアソン）

――新しい普遍な神秘的精神が全世界に行き渡るまでは、詩文藝術の偉大なる復活はとても望み難い。さういふ精神が勃興する時は、信仰とか國土とか制度とかいふものを超越して殆どすべてを風靡するが、それは決して如何なる物質的勢力によるのでもなく、教養あり學問ある人の知的想像の上に活氣を與へる感化によつてである。――

これは『唯物論と罪惡』と題した論文の一項。また

――神秘的なる靈感は、詩歌美術音樂或は哲學のいづれを問はず、すべての作品をして不朽不滅のものたらしむる要素である。

靈感的の思想が取り得る形式中、最も生氣あり且美しきものは、藝術の形式と軌を同じうするものである。その故はこれが一番神秘的だからだ。最高の靈感は藝術と叡智との結合を要求する。また近代の神秘思想は、かの中世に現はれたものよりも更に廣く更に深い。何となれば過去の時代には、叡智が屢次教義（ドグマ）によつて弱められ、實行し難き理想のために力を失つてゐたからだ。――

これは論集『近世神秘思想』巻頭の一節。その筆者は懐疑を斥け唯物論を棄てて、直感（インチュイション）を重んず

る新神秘主義の鼓吹者として、確かに最近思想界の一面を代表してゐるフランシス・グリアソン Francis Grierson である。かれが思想の一端はこの數行のうちにも窺はれる。

珍らしい天才としてかれが名聲はいま歐洲の騷壇に高い。マアテルリンクはかれを現代に於ける最大のえつせいいすとなりと稱し、故シュリ・プリュドンムは嘗て彼の論集を讀んで、思想の力強い獨創性に深くも感服したと言つた。なほ故ヰリアム・ジェイムズ教授や詩人のマラルメをはじめ、エドヰン・マ、カム、アアノルド・ベネット、リチャアド・ル・ガリエンなども皆かれの文章の熱心な賞讃者である。近頃佛蘭西譯も西班牙譯も出來た。露西亞譯はいま着手してゐるさうだ。殊に伊太利では、さる批評家の筆に成つた彼の評傳が既に一小冊子となつて出來てゐるとさへ聞いた。

米國の藝術的天才は、不思議にも歐羅巴の藝苑に移されてそこで花を咲かした例が甚だ多い。繪畫のホヰッスラア、小說のヘンリ・ジェイムズは言ふまでもないが、佛蘭西の象徵詩派のうちにヸエレ・グリフィンやステュアト・メリルのやうな純粹の米人が重きをなしてゐるのも、奇異な現象ではないか。茲にいふグリアソンも、今でこそ英吉利の片田舍に住まつて自然の風物を樂しんでゐる英人のやうだが、元來は亞米利加人で、殊に周圍の感化を蒙ること最も多く、何事にも印象を受けやすい青春の年頃を米國のイリノイ州で過しただけに、後年のかれの思想と趣味とにも、おのづから英佛のそれならぬ特異の色が著しいやうに思はれる。

かれが生れたのは千八百四十八年、英國に於てであつたが、すぐその翌年から兩親に連れられて米國に行つた。ちやうど南北戰爭の騷ぎの頃をそこに過して、二十歳のとき再び歐洲に渡つた。それから今日にいたるまで殆ど四十年の彼が閱歷こそ、まことに數奇をつくした浪漫的なもので、謂はば天外漂浪の孤客がコズモポリタン・ライフであつた。先づ杖をとどめたのが巴里の都、そこにはじめて彼を世に紹介したのはアレクサンドル・デュマであつた。しかしそれは決して文筆の人としてではなくて、ピアノの名手として又歌ひ手として、その奇才をみとめられたのであつた。別にこの方面に特殊の修業をしたわけでも無いのに、かれはよく各國近世の音樂に通じ、また巧みに昔の希臘や埃及の古樂の精神をさへ傳へ得たと言はれた。現に詩人シュリ・プリュドンムの如きは、かれが歌ふのを聞くと懷疑思想などは消えて了つて、どうしても靈魂の不滅を信ぜずには居られなくなる。畢竟かういふ音樂は、之を心靈的に說明するほか途が無いからだらうとまで評した。それからといふもの、この若い美しい樂人は歐洲の國々を遍歷し、羅馬から伯林、民顯、ドレスデンへ、それから遠く北の露京までもさすらひ、そこに暫らく旅杖をとどめた。到るところ彼が天才は樂壇の驚異として迎へられたが、名聲の最もあがつた頃、ふと彼はピアノを棄てて文筆の人となつた。そして暫らくの間に五六册の著述に文名を成してから、今日ではまた英吉利で、もとのピアノを彈きながら、時々は昔なつかしい巴里へ出掛けて、そこに滿ち滿ちた藝術的空氣の新味を飽かず樂しんでゐるさうである。

ここに五六冊の著述と言つたのは、おほかた皆短い論文を集めたもので、折に觸れての彼が感想を錄したもの、ちよつとマアテルリンクの『貧者寶』や『花の教』などに似た類の本である。最初出たのが『近世神祕思想』"Modern Mysticism"（一八九九年）、次のが『ケルト氣質』"The Celtic Temperament"（一九〇一年）、それから一番新しいのは昨年出來た"The Humour of the Underman"（此「アンダマン」と云ふのは、ニイチェの超人卽ち「シュウパマン」に對して言つた言葉で、譯しやうが無いからここではその儘にしておく）といふので、三冊ともみな卷頭の文の表題をとつて書名としたのである。それから、これも昨年の秋ごろに出來た『巴里のおもかげ』"Parisian Portraits" といふ一冊には、前世紀後半の佛蘭西の名家に著者が親しく會つた折の思出を美しく書いたもので、象徴詩人のことを書いたものなどがよほど參考になるやうだ。以上は勿論英語で書かれたもので、なほ別に佛蘭西文で書いた『生と人々』"La Vie et les Hommes" といふ一卷があるが、これはまだ私は見てゐないから知らない。

かれの神祕說は、矢張りマアテルリンクのそれとほぼ相似た行き方ではあるが、さりとて心靈の境を奥深く訪ねて、ひたすら高遠幽玄の理をのみさぐると云つた風の人ではない。よし轗軻不遇とまでは言はずとも、とにかく漂浪の四十年を、或時は王侯の宮殿に出入し、或時は陋巷に窮居する藝術家の群にも交つて過した人である。さすがに變化極まりなき世態人情の曲折を味はひ盡くした人だけあ

つて、その說くところは飽くまでも現在當面の事實問題を離れない。いつもその神秘觀を提げて眼前俗界の事象に解決を試みようとする風がある。世にかれを呼んで『實際的神秘主義の豫言者』といふのは即ちこれがためである。之をマアテルリンクなどに比して淺薄なりと見る人もあるだらうが、その代り說くところは遙かに明快で解り易い。一例を言へば、かれは國際の外交關係などをさへ論じて、之に對しても矢張り獨得の神秘說で行かうとする。かれが嘗て英米の親和を說き、一方には英獨の關係があり、他方には米國の極東に對する問題があるとき、英米の兩國を、その間にある自然な心靈の引力 Psychic attraction によつて相結ばなければ、文明世界の平和は保たれない、と論じた文などは名高いものになつてゐる。

　グリアソンはかく神秘的信仰を持する人だけに、懷疑否定の態度に對しては隨分ひどく攻擊を加へる。かつて或論文のうちにかう言つた、――『不可知』の態度は、千八百六十年から九十五年あたりまでの間はそれでよかつたらうが、今では物質上にも精神上にも世界の大勢が一變してゐる。ティンダルやヘッケルやハクスレイなどの功績は、化學や生物學の證明に限られてゐる。さういふ科學は今ではもう古い科學となつて了つた、と言つてさて下のやうに論じた。懷疑は精神界物質界に於けるすべての事業を破壞するものである。苟も何か偉いと言はれる程の事を仕遂げた思想家ならば、その人には必ず信がなくてはならぬ。第一先づ自己を信ずる、第二には他人を信ずる、第三には永遠の神秘

のうちに一定の法則があり力があつて、それは卽ち直覺によつて知ることが出來ると信じてゐる。第四にその人は世界が靜止してゐないことを知る人である。常に新しい發見と發明とに向つて希望し努力する人こそ勝利を得る人である。そして將來の大競爭場裡に於ては、物質上の黄金萬能の勢力は、やがて智力上心靈上の目に見えない勢力に壓倒されて了ふに相違ない。さういふ日の來るのも決して遠い未來のことではなからう、と彼は斷言した。

かれの英文は調子の好いすらすらした、そして割合に飾り氣のない文である。のみならずエッセイの常として、甚だしく氣の利いた言ひまはしの警句に富んでゐるから、毫も讀者を飽かしめないといふ妙味がある。その代り如何にも思想の連絡が悪いといふ缺點もあるが、これは昔のベイコンからしてさうであるから、かういふ類の文章には免れないことかと思はれる。

以上は主としてグリアソンの論集に就いて述べたのであるが、外になほ一種の自叙傳ともいふべき、幻影の國 "The Valley of Shadows" と題した作が一九〇九年に出て、これが歐米に跨つて非常な評判になつた。一卷二十六章の文は皆ミズアリ州、イリノイ州で彼が幼時を送つた追想録に外ならない。それを非常に面白い傳奇めいた筆で書いたものである。その中には作者の親兄弟から周圍の人物は勿論、黑奴やリンカンの話も出る。當時まだよくは開拓けてゐない、荒蕪の地であつたミシシッピ河の沿岸を背景にして、そこに log-house の小屋住居をした頃の生活が、いかにも自然をな

つかしむやうな筆で精細に描かれてゐる。

私ははじめグリアソンの論集の卷頭に、彼が露西亞の畫家にゑがかせたといふ若い時の肖像を見た。いつも詩人や文豪を先づその容貌で判斷して見ようといふ癖のある私は、彼の眉目清秀なそして品のいい、どこか貴公子のやうな、——何だかかうバイロンをやさしくしたやうな顏を見たとき、この人が文筆と音樂との兩方にすぐれた神祕思想家だなと思つて、言はうやうなきなつかしさをさへ覺えた。まことに彼は米人だといつても米人ではなく、無論英國人でもなければ佛蘭西人でもない、謂はば本當の世界人(コズモポリタン)であつて、ただ眞に『藝術』の國を以て自己の鄕土とする一個の天才である。かの parochial patriotism の人たちには、かういふ人の偉いところも或は合點の行かぬことであらう。私は此點に就いて、グリアソンが天才の反地方的、非民族的のものである事を喝破した一文を引用して、此篇の跋としよう。

——『自分だけで納まつてゐるやうな人は地方的の名士に過ぎない。通りすがりの人をして微笑(ほゝゑ)ましむるだけだ』、とマアテルリンクは言つた。これ天才は地方的感情と相反する者で、決して一民族或は國民の典型ではない所以である。ハムレットを書いた沙翁は英國詩人中、最も英人らしくない者である。彼の靈感の根本的要素は廣濶と云ふ點に在つて、これは、若し沙翁にして地方的な感情や熱意理性の動かすところとなつて居たなら、決して存在し得ないものであつた。同じく、また二三の名

を擧げるならば、ダンテ、ミケランゼロ、ベエトホオゼン、ゲエテはその國々に於ける代表的の典型（タイプ）では無かつたのだ。彼等の思想は神祕的であつて方法的（メソデイカル）では無いから、世界的（ユニヴアサル）である。英吉利人の感情に反したものといへば、沙翁の神祕思想ぐらゐ甚だしいものは、ちよと考へ及ばない程だらう。而も未だ嘗て詩人が英國の思想家によつてかくも深く鑑賞せられ、大陸の批評家によつてかくも充分に理解された時は無かつた。眞の人とは內部生命に生きる人である、淺薄な人とは地方的の心を有（も）つて、外部の影響に屈した人をいふのである。さういふ人は、その中で自分は發展し進步してゐると自ら信ずるその一國內に在つて、轉轉してゐるに過ぎない。だから自分の天地では有力ではあるが、その力は因習的であり、その感化力は一時的である（グリアソン論集『近世神祕思想』一五——一六頁參照）。

グリアソンの前揭の諸著は、倫敦の John Lane 社及び Stephen Swift 社の出版。また此思想家の評傳として、特に彼の人生觀に就いて說けるものにては、

Voices of To-morrow; Critical Studies of the New Spirit in Literature. By Edwin Bjorkman. New York, Mitchell Kennerley. 1913.

の中にある、簡にして要を得たる一文を薦める。

老女優サラ・ベルナアル

一

それは降誕祭の翌日であつた。鬱陶しい午後の半日をピイボディ・インスティテュウトの讀書室に送つてから、手控（ノオト）を衣囊（ポケット）に仕舞つて、たそがれ時に私はふらふらとその門を出た。

ボオルティモアのまちは、詩人ポオが終焉の地として年來わたくしの記憶を去らなかつた土地である。この地へ杖をとどめてから既う三月、船つきの都會に似合はず落ちついた、そしてどこか古風なところのあるのが私には氣に入つた。かねて覺悟はしてゐたものの、米國には隨分と凄まじい都會がある。私は大陸を西から東へと横斷するとき市俄古といふ所を覗いて見て、俗惡の二字は之を形容すべく餘りに陳腐であるのに驚かされた。そして其時はミシガン湖畔の宿に一晩とまつたきりで早速引き上げた。紐育へ來て見ても、ここはまたビズネスと利害の打算のほか何ものもないやうな土地だ。落着いた氣分になつて、ゆつたりと物を考へたりする事の出來さうもないのに閉口して、半年の後にはここをも去つた。華盛頓に來て見て、これはさすが大國の首府だけに美しい立派な都であると思つ

て、初めて感心した。そして遂にはそこから程ちかいボオルティモアの地に、縁あつて杖をとどめることになつたのである。

ここはイリザベス女王の頃から開けたのであるから、北米の都會としては古いものの一つである。土着の人が家庭生活（ホオム・ライフ）のまちだと言つて自ら誇るだけに、紐育のアパアトメントに住みなれてゐる人たちとちがつて、人情の温かみもあれば風俗の淳朴なところもある。殊に郊外、上流の住宅地たるロオランド・パアクなどは、京の嵯峨や御室あたりを西洋式にした趣もないでは無い。市中にお寺の尖塔が殊に澤山見えることも、此まちのゆかしさを增すものだ。マルベリイ街の大伽藍（カシイドラル）は亞米利加で一番古いお寺だと聞いたので、私は降誕祭の朝に參詣をした。

時々私が調べ物に行くピイボディ・インスティテュウトには、音樂堂と美術館と圖書館とが一つになつてゐる。よく演奏會などのある處で、その階上には繪畫の展覽會がいつもある。ここの圖書館は通俗向きのものでは無いだけに、入館者が少くて靜かなのが何よりうれしい。館員の親切なのも氣に入つた。

（餘計な話だが、米國の圖書館は公私いづれを問はず、館員は實に親切で行屆いたものである。私は此國の多くの圖書館へ這入つて見て、未だ曾て一たびも不快な思をした事がない。華盛頓の國立大圖書館の如き、中にも最も叮嚀親切を極めたものである）。

圖書館の門を出た私は寒い夕風に外套の襟を立てて首をすくめながら、鼻さきに突立つてゐる高いモニュメントを見あげた。天空に聳ゆることまさに何百尺かは知らないが、その頂上に華盛頓の巨像がある。これだけ高い所に置けば、日本に澤山ある大抵のまづい銅像でも、少しは立派に見えるだらうと獨り感服する。ここの廣場(スクエア)を南北に貫く大通がチャアルズ街(ストリイト)で、此邊一帶がボオルティモアの目抜きのところである。塔(モニュメント)のそばのマウント・ヴノン會堂(チャアチ)は美以教(メソディスト)のお寺だが、此建築がまた此場所には言ふに言はれぬほど好い。朧月夜の晩などに人通りの少い折、このあたりをうろつくと、私は未だ曾て紐育などで味ははなかつたしんみりした氣分になつて、はじめて心の落着きを見出し得たやうに思つた。

チャアルズ街(ストリイト)で本屋へ一二軒立寄つてから、その邊で夕飯を濟まさうと思つてあちこち見まはすと、ふと『和蘭茶屋(ダッチ・ティ・ルウム)』といふ小綺麗な一風變つた家が目についた。私はこの和蘭といふ名前が何となう好きなのである。むかし日本の長崎へ傳へられた和蘭風は、異邦趣味の古雅なところを先づ我が國に傳へた唯一のものであつた。ヲシントン・アアヸングの『ニッカアボッカアの紐育史』に現はれた和蘭は、亞米利加人の心が今のやうに險しく尖つてはゐなかつた素朴な、そしてヒュウモアに富んだ、遠い植民時代ののどかさを想はせるものである。

ドアを開(あ)けて内に這入ると、室の有様が想つた通り極めて上品で、装飾も何もない清楚なのがうれ

しかつた。ぴかぴかした飾をこれ見よがしに澤山列べ立てた近代式に見飽いて了つた私は、かうした simplicity を一しほまた懷かしく思ふのである。ちよつと澁い好みの俱樂部や料理屋によくあるやうに、煖爐には瓦斯や電氣を使ふ代りに態と無雜作に薪をくべてあるのも好い。坐るべき空席がなく、さりとて婦人のゐる卓子(テイブル)へ割り込むこともならず、ちよつと躊躇(ためら)つて立つてゐる。日本人が這入つて來たからとて、じろじろ人の顏を見るやうな行儀の惡い人たちもゐないが、男三分に女七分の客でぎつしりつまつてゐる。給仕の女に、坐る所は無いかと聞くと、二階があいてゐますと云ふので階上へ行く。食卓は蔽ひも何もかけず、ただ doilies をいくつか敷いてその上に食器を置く此風も私は好きだ。羊の肉を一皿食つてから『和蘭茶(ダツチ・テイ)』といふのを飲んで食事を濟ます。

佛蘭西の老女優サラ・ベルナアルが、亞米利加にはこれでお別れの巡業とあつて、今晩一晩だけこの市の抒情詩(リリツク)座で演るのである。かねて切符を買つておいたので、八時二十分の開幕といふのに時はまだ少し早いが、電車に乘つて此茶屋(テイ・ルウム)を出かけて行く。

二

近世歐洲劇壇の花形と謳はれたこの名優も、今は七十一歳の婆さんである。一昨年手術を受けて一脚を切斷し、まだ舞臺の人として活動をやめないところは、明治初年の名優田之助が鉛毒のため兩脚

を失つて、なほ劇界を去らなかつた壯烈(ヘロオイズム)を想はせる。
『……であらうとも』'Quand même!' といふのが、勝ち氣な此女優の金言(モットオ)である。片脚は失はうとも、年は寄らうとも、戰爭の危險はあらうとも、恐れもせず屈しもしない。爲さんと欲するところをなし、行かんと欲するところに行く。病院を出てからまた戰地へ出かけて出征軍人のためにその技を演じては愛國の熱誠を示し、巴里倫敦の飛行機の恐ろしさを物ともせず、更に潜航艇の危險を冒して大西洋のこなた、加奈陀米國に渡つて最後の興行をしようといふ。これが子もあれば孫もあり曾孫(ひまご)まであつて、齡すでに古稀を越え、立派な樂隱居の出來る老婦人のわざとは信じられない程の壯烈である、剛勇である。生の力の底までを汲み盡くして、自己の偉大をこれ見よがしに誇れる此女を、世は目して超女(シュルファム)なりと云ふのは至當の言であらう。暇さへあれば、酒色か圍碁謠曲に安逸を貪らうとする如き有髯の男子、これを見て若し愧死せずんば、吾はその厚顏に驚くと言ひたくなる。

　これが他の仕事ならばとにかく、身體の動作を主にする俳優として、老齡と不具とを物ともせず、昔その名聲の全歐を動かした頃『豹の動くがやうに』と謳はれたその美しい身のこなしは出來ずとも、おのが絕代の天才の殘りの面影を今一度世に示して、われながらに自分の妙技を惜しむものの如く、また誇るものの如く、かれがいま舞臺に現れること、それ自らが既に大なる悲壯美であり、また悲劇である。人生そのものを一つの藝術として見るとき、名優が別れの興行は行く春を惜しむより

も、ゆふべの空に殘紅を望むよりも、なほ更に哀切なる『詩』ではないか。

死を恐れずに無鐵砲をやる此女には、色々と面白い逸話がある。佛蘭西のブリタニイのベル・イイルに彼女の別莊があるが、そこでの生活の事を書いた物を讀むと、だいぶ以前のことだが、海岸から隨分思ひ切つて遠くまで沖の方へ泳いで行つておほかた溺死しようとした。その時この女優の命を救つたのが、あの『シラノ・ドウ・ベルジユラク』の作者であつたさうだ。かういふ事だけを聞くと、彼女は何だか男まさりの極めて殺風景の女のやうに聞えるが、それでも矢張り世間なみのお婆さんのやうに、子や孫や曾孫に圍まれて子供のやうになつて樂しんだり、また信心が深くてお寺詣を缺かした事もないさうだ。この別莊から荒野原を十五哩もへだてた、小さい加特力教のお寺まで怠らず參詣をして、そこの住持に歸依し、わざわざ名工に賴んで造らせた窓の繪硝子(スティンド・グラス)を二枚寄進して獨り喜んでゐるといふ事などを書いてある。

今度のかれの巡業のレペルトワアルに出てゐる物は、どれも皆その不自由なからだで動き廻はらなくても濟むやうな場面のものだけを選んである。當夜私の觀たのは、『クレオパトラの臨終』"La Mort de Cléopâtre,"『まことならぬモデル』"Le Faux Modèle,"『劇場より名譽の戰場へ』"Du Théâtre au Champ d'Honneur," といふ三つの一幕物であつた。英語國民の觀客を相手にして全部佛蘭西語で演るのだから、開幕の前には若い女優が出て來て、その度每に英語で筋を說明するのであ

る。序の話だが、こちらでは時々奇怪至極な日本の芝居を演られるので頗る恐縮するが、若しこんな風に通譯説明の方法を執るならば、本當の日本の一座が西洋へ出掛けてそして日本の臺詞で演つても、物によつては或程度までは成功するだらうなどとも思つた。但し私の坐つてゐた後の方の席では、或男がぐうぐう鼾をかいてゐたなどといふ滑稽もある。おほかた細君にせがまれて無理にお伴をして來た男ででもあらう。(此女優の名を英語流に平氣でバァンハアトなどと發音して、誰の事をいふのかと、ちよつと私を面喰はした亞米利加人なども此仲間であらう。)

三

最初の『クレオパトラの臨終』は、この女優の長子モリス・ベルナアルの筆に成る脚本であつた。幕があくと、ふたりの侍女(こしもと)にかしづかれ、虎や獅子の毛皮に包まれた派手やかな褥に眠れるは、埃及の女王クレオパトラである。ふと目をさまして、マルク・アントアヌからの消息は如何にと訊く。『まだ』'Non pas encore, maîtresse' といふ返事を聞いて、待ちに待つてゐる女王は煩悶する。ひそかに奸計をめぐらし女王を欺いて、二人の戀なかを割かうとするファロスは、實はおのれが女王に戀して我がものにしようといふのである。ここは危ければ早くわれと共にリビイへ來らせ給へと言へば、女王は赫と怒つて、'Qu' oses tu dire? Chien! tu t'es trahi!......' と一喝する。そこへ負傷し

た使の者が來てマルク・アントアヌの敗報を齎す。やがて女王は侍女の手から短劍を受取つて、おのが足下に跪けるファロスの肩を打つて殺して了ふ凄まじさ。

マルク・アントアヌが來るといふので、女王は侍女や奴隷に命じて花を撒き散らさせ樂を奏し、自分は急いで手に鏡を取つて身づくろひをする。そこへ這入つて來るのがマルク・アントアヌで、二人は相抱く。『われは君を戀ふ。されどわれは埃及の女王、如何なりとも己れの治むる此國を去るには忍びず』と言ふ。マルク・アントアヌは遂に最後の接吻を殘して去る。

派手な服裝をした隊長(センテュリヨン)が這入つて來て、いよいよオクタアヴの勝利を傳へると、女王も今はこれまでと毒蛇に自分の胸をかませて鋭く叫ぶ。この前後は長い長い獨白(せりふ)である。おのが領土たりし美しき埃及の國をあとにして此世を去るを嘆き、マルク・アントアヌの戀を言ひ、花のなかに埋めてある毒蛇を取つて自分の胸にあてがふ間も最後の運命を嘆く。死にかけてゐるところへ、羅馬の兵を率ゐたオクタアヴが這入つて來る。女王は『戰車(シャアル)のうしろに曳かれ行くわが姿を羅馬の人には見せず』といひ、'Incline toi romain, devant celle qui meurt...... encore, et toujours Reine!...... Salut! Impérator!......と叫んで死ぬところで幕。

女王のベルナアルは全く歩行といふ事をしないで、褥の上に坐つてゐるほかはアントアヌと相抱く時に身を起すだけで、あとの二幕ともに皆かういふ場面ばかりに出來てゐる。そして全くベルナアル

一人の藝を見るだけの芝居で、それも胴から上と兩手を動かすだけ、つまり此女優の獨誦(デクラメション)を聞くだけである。しかし驚くべきは昔ながらになまめかしいその聲である。これが七十一歳の老女優の聲とは何としても受取れないやうな美しい、よく通る聲が棧敷の隅々までもとどくところはさすが偉いものだと思つた。流動物と野菜と水との外は何も食べないと、あんな聲が出るものかと獨りで感服する。此聲と上體の運動とだけに、舞臺面を少しもだらけさせないだけの力がこもつてゐるのである。

次の『劇場より戰場へ』は戰爭の際物であるが、藝としては此方が面白いと思つた。舞臺面は激戰のあと森のこかげ、負傷した一人の佛蘭西兵（女優ベルナアル）が足腰もたたずに樹下に蹲踞(うづくま)つてゐる。ふとわれに歸つて、自分は旗を放さなかつた、仆れるときには確かに持つてゐた。……自分は旗手の直ぐうしろにゐたのだ。……獨逸兵が來て旗を裂いたから銃劍でその男の喉を突いてやつた筈だ。旗はたしかに取り戻した。……が、それからあとの事はもう記憶がない。から獨語つてゐるところへ、これも負傷して頭に繃帶をしたわかい英吉利の士官が出て來て、自分の水筒から水を飲ませる、そして病院(アンビユラアンス)車の來るのを待つのである。

此兵士はもと俳優で、名をマルク・ベルトランと云ふ。無理に志願して父と共に出征し、父は既に戰死して了つた。旗の行方を氣にしてひどく煩悶するのを英吉利の士官が慰める。

『君は塹壕で佛蘭西の詩人の歌を聲高らかに吟じて、大に士氣を鼓舞したといふではないか』と士官

が言ふと、それは『敵のために捧ぐる祈』La priére pour nos ennemis と云ふのであつたと言つて、瀕死の兵士はそれで長い長い朗吟をやる。敵を呪ふ歌で

Vous qui voyez, Seigneur, leur âme jusqu'au fond,
Ne leur pardonnez pas, ils savent ce qu'ils font.

主よ、人の心の底をまで見たまふ神は、
自らおのが爲せる事を知れる彼等を許し給ふなかれ。

といふ言葉が幾たびも繰返される。旗の行方を氣にして兵士がなほも煩悶してゐると、そこへ看護婦になつてゐる公爵婦人が來て、『舞臺で屢勇士を演じたお前は、今まことの勇士となつて此戰場で手柄をした』と言ふ。兵士は益々煩悶し激して旗を失つた事を嘆き、再びそれを取りかへすまでは死すとも死せずと言つて、公爵夫人の慰めるのも聽かない。出血は益々甚だしくなる。再び『わが戰友なりし旗手よ』Portedrapeau mon comrade! といふ長い歌を歌ふ。その終の邊はもう死に迫つて息も絶え絶えに苦しんでゐるところへ、英吉利の士官が樹の後にあつた佛蘭西の三色旗をさがし出して渡すと、瀕死の兵はそれをひろげて兩國の萬歳 'Vive l'Angleterre, vive la France' を叫ぶ。滿場の喝采を得て、兵士はそのまま三色旗に包まれて死ぬのである。

芝居としては固より簡單な戰爭物で、言ふに足るほどのものではないが、女優みづから戰場へ出掛

けて行つた剛勇を諷し、時節がら此三色旗がよく利いてゐるところも面白かつた。老體に似合はぬ身振と聲とには、十分人を引きつけるだけの力がこもつてゐた。脚本は戰地で或士官が作つた事になつてゐて、はじめて倫敦で正月の三日に演つた物ださうだ。

次の幕は輕い滑稽物で、『話す通りの英語』"L'Anglais Tel qu'on le Parle" と題したもの、佛蘭西の或ホテルで英語の通じないために起る一場の喜劇。この幕には女優ベルナアルは出ない。兵士の絕叫に疲れた老體を休ませるためであらう。

最後のは『まことならぬモデル』。舞臺はシイモア・ベルといふ英吉利の畫家のステユウディオで、細君のマデレイン(ベルナアル)が手にライアを持つてサフォオの姿でモデルになつてゐる。これが嫉妬深い女で、モデルの女を夫が使ふのさへ好まない。そして子供がない。そばでサフォオの曲をピアノで彈いてゐる弟のレイモンと、三人の間に滑稽な問答が一しきりはずむ。戰後には男子の數が足らなくなるから、五十歲未滿の男子には一人に四人の妻を持たせる法律が出來るといふ。それならシイモアはいくつかといふと、五十三だといふ。それでも構はない、もう外に三人女房を持たせたらば十人や十二人の英人を生む事が出來ようと言ふ。はじめ此說を出したマデレインは『私は佛蘭西人の事を言つてゐるんですよ』といふ。畫家は英吉利だつて佛蘭西だつて同じだといふと、細君は『英吉利には海があるからそんなに澤山人間は要らない』と答へる。魚では兵隊に成らないからねと亭主が

茶化すと、あなたは眞面目に物の言へない人ねといふ。こんな對話をしてゐるところへ、和蘭の金持の男爵ヴン・ハアド夫妻が畫を買ひに來る。その男爵夫人といふのがまた突飛な女で、自分がモデルになると言ひ出して肌ぬぎになるといふ騷ぎ、かういつた滑稽が殆ど動作といふ程のものなくして進行し、最後にマデレインがシェリイの詩『戀の哲理（ラヴフィロソフィ）』を英語の儘で吟ずる。

The fountains mingle with the river
And the rivers with the ocean,
The winds of Heaven mix for ever
With a sweet emotion;
Nothing in the world is single;
All things by a law divine
In one spirit meet and migle,
Wey not I, with thine?
See the mountains kiss hjgh Heaven
And the waves clasp one another;
No sister-flower would be forgiven
If it disdained its brother;
And the sunlight clasps the earth
And the moonbeams kiss the sea;

What is all this sweet work worth
If thou kiss not me?

といふのを朗吟して幕。これは唯ベルナアルの聲を聞くだけの芝居であつた。

幕のあとで觀客の喝采に應へる時には、ベルナアルは立つてはゐるが左手を輕く他の役者の肩において、それに凭りかかつてゐた。四たび五つたびと幕をあげさせる滿場の喝采は、光榮ある彼女の過去の歴史に對する敬意を示すもので、辛うじて名優が殘りの面影をしのばせるに過ぎない當夜の演伎に對してではなかつたであらう。唯多年練へにきたへ上げて、そのテクニイクの上に少しの危げもない老練は驚くばかりである。

こちらの新聞記事で見ると、ベルナアルは素顏を見ても（舞臺顏は勿論だが）四十歳位にしきや見えないさうだ。一行のうちには固より抱への醫者がゐて、養生の事などは一々その指圖に從つて非常な注意を拂ふといふ話。英語は餘り達者でないので、記者に面會の時は通譯を外に立たせて、自分は幕のかげに不自由な身をかくして話すのださうだ。記事の一節にこんな事が書いてあつた。戰爭のあとで佛蘭西に男子が少くなつては、美しい佛蘭西の女に獨身の人が多くなるでせうと記者が言ふと、『なに其時は立派な亞米利加のかたを澤山にお迎へして、御亭主にすればいいぢやありませんか』と、此婆さんなかなか如才ないことを言ふ。記者が强ひて幕の間から姿を見ようとすると、『あら(オオ・)、いや(ベッド・)

なかたね』……、そして醫者が旣う寢よといふからこれで御免を被ると言つて這入つて了ふさうだ。歩行に不自由な身は、ホテルの出はひりにも乘物に乘るのだと聞いた。

古稀の老軀を以てなほその技を萬里の異域に誇らんとする隻脚の老女優 'the devine Sarah,' 彼女が晩年衰殘の日のこの雄々しき努力を見て、誰かまた意義なしと言ふものがあらうぞ。

（大正六年四月『太陽』所載）

女の表情美

表情美といふ點から言へば、日本人は遠く西洋人に及ばない。これは人々の談話(はな)してゐるところを傍(わき)で見てゐても直ぐ氣の附く事である。西洋人の場合は顔面は勿論のこと、動作身振などのすべてに感情の極めて自然の儘な――或は多少誇張された表現(エクスプレッション)があるから、談話が如何にも賑やかで生き生きしてゐる。内容を聞かなくても、嬉しい事か悲しい事か、或は樂しいのか苦しいのか、傍觀者にも大抵の判斷はつく位である。ところが日本人となると追從や愛嬌のために、可笑しくないのににやにや笑ふやうな不自然な眞似はするが、眞の表情といふものが甚だ乏しい。僞りなき眞情が顔面や動作などのすべてに現はれてゐない。意識的にもまた無意識的にも、それが蔽ひかくされてゐるため、同じ談話も殺風景になり無味乾燥になり、淋しくなり冷淡になつて了ふ。これを一言にして言へば、表情の乏しいといふ事はそこに全く美しい『詩』といふものの失はれたことを意味するのである。

日本では美人といへば、先づ目鼻だちの整つた、所謂『道具』の揃つた美しいのを第一條件にするやうだが、この點はよほど西洋とは違ふやうだ。こなひだも米國の桑港大博覽會に招待するため、各州から一人づつ美人を選出したとき、その採點の標準なるものが面白い。即ち第一に表情二〇で、こ

れに最も重きを置いてゐる。次が容姿一五、齒一〇、髮一〇、口一〇、鼻一〇、性質知識一五、からいふ標準であつたと聞いてゐる。

おもふに日本人に表情美の缺けてゐるのは、むかし佛教ことに禪宗の影響をうけて出來た武士道といふものが、喜怒哀樂を色に現はさずといふ事を手柄のやうに敎へたその餘弊である。いかに嬉しい事があつても平氣でゐろとか、或は胸に堪へられない程の苦痛があつても顏には笑みを湛へてゐろとか、愚にもつかぬ不自然な虛僞を貴んだために、現代の日本人は遂にこの美しい『詩』を失つた一種の不具者のやうになつて了つたので、吾輩は此點に於ても、祖先が傳へて吳れた武士道とかいふ頗る結構な敎に對して、大に感謝すべきわけである。西洋人の目に日本人が兎角陰險なるかのやうに見えるのは、全くこの Demonstration の足らないのも確かにその一原因であらう。

しかし男子の場合はとにかく、婦人にあつては表情こそ實にその美の生命である、全部である。如何に目鼻だちが美しくても衣服が立派でも、この表情の乏しい女には肝腎の生命といふものが無いのだから、その美しさは全く人形のそれと選ぶところはない。日本の女は西洋人にくらべると實に此點に於てひどく劣つてゐるので、これは忽ち繪畫の上に最も明らかな證據を殘してゐる。日本の人物畫、ことに美人畫には、とてもとても西洋畫にあるやうな微妙な美しい表情は見られない。現にこのあひだの文展の所謂『美人畫室』の出品を見ても、矢張り此感はあるだらう。大抵が皆女の表情とい

ふ點に於て、實に甚だしく物足らない心地のする作が多かつたやうに思ふ。日本では在來、風景畫のやうに人物畫の方が發達して來なかつたといふやうな他の原因は別にあるにもせよ、とにかくこれは確かに、寫さるべき日本の女そのものに表情の美が缺けてゐる事が、主なる原因だと私には考へられるのである。

日本では昔から普通の婦人よりは、遊里の女の方がこの點に於て遙かにすぐれてゐた事は、德川時代の戲曲小說や浮世繪なぞがよく證明するところである。因襲道德の束縛をはなれた自由な美しい感情生活は、德川時代に於ては殆ど之を遊里といふ一區域に求める外はないのであつた。また現代に就いて地方的な見かたで言へば、東京の婦人にくらぶれば京大阪の女は表情に乏しい人形のやうなのが多く、また概して言へば田舍の女が都會の女よりも表情に乏しい事は今更言ふまでもない事實である。表情美に乏しいといふことは、つまり表情筋の發達してゐないことを意味するのである。獨り顏ばかりでなく、身體各部の筋肉に感情の波動は現はれるのだから、これが在來長い歷史の結果として日本の女には殆ど遺傳的に缺如し不足してゐた一面である。一朝一夕に今それをどうしようと云つたつて、とても無理な話ではあるが、私はこの點に於ても、かの女優の問題などのまだまだ前途遼遠なことを思はずにはゐられない。遺傳的にさういふ缺陷を有つてゐる日本の女に、何よりも表情の大切な俳優といふこと、――殊に隨分極度に誇張された表情を必要とする西洋の芝居なぞをやらせるの

が、そもそも無理な注文ではなからうかとさへ思つてゐる。

しかしこれは單に外觀のみの問題ではなく、實は婦人の內部生活の問題である。內に豐富な自由な熱烈な感情生活の美がなくて、どうして外に花やかな表情の美があらうぞ。賢母良妻主義の敎育家なぞが夢想だも及ばない派手やかな豐かな內部生活の『詩』があつてこそ、そこに初めて女のこの生き生きした表情美が生ずるのではあるまいか。(大正四年一月)

戯曲『亡靈』に序す

叙事詩よりも抒情詩よりも、また散文小說よりも、藝術としては遥かに進步したる形式と複雜なる內容とをそなへたる劇に於て、世界の文藝史がながく人類の光榮として誇り得べき偉大なる作品が、その發達の主要なる三つの時期を劃して現はれた。先づ古代に於て希臘ペリクリイズ時代の古典劇を擧げ、中ごろ古典法則の繫縛を離れて更に奔放の新意を創めたる英國處女王朝の沙翁劇を數へるならば、近代に及んで人は誰しも皆北歐劇壇の將星イブセンの諸作を以てこの新時代の代表なりと認めるに躊躇しない。かれの問題劇社會劇は藝術上最も大膽なる峻烈の態度を以て、前人の未だ曾て踏まなかつた新しい道を行つたものである。

戯曲『亡靈』は、此イブセン劇を代表する大作の一つである。之を思想上より見れば、近代文明の裏面に潜み思潮の根柢にわだかまる暗黑の影を捉へ來つて、虛僞の生活に安んずる樂天家の夢を破らんとしたものである。また文藝史上、悲劇としての地位より言へば、これを古典劇『イイディパス王(レックス)』や、或は沙翁劇『マクベス』『リア』の如き大作とならべて、必ずしも甚だしく倫を失するものでは無からうと思はれる。

西歐諸國の新劇壇はその創立の初に當つて、殆ど皆申し合はせたやうに劈頭第一此『亡靈』を上場した。即ち獨逸の自由劇場（フライエ・ビウネ）は千八百八十九年九月二十九日に、佛蘭西の自由劇場（テアトル・リイヴル）は翌九十年五月二十九日に、英吉利の獨立劇場（インデペンデント・シアタア）は翌九十一年三月十三日に、みな最初の公演或は私演に此劇を用ゐて一世の人心を聳動し、これによつて劇壇革新運動の第一步となした。この事實は一個の近代劇として『亡靈』の眞價のある所を最も明瞭に、また剴切に吾々に向つて語るものではなからうか。

元來イブセン一代の作品はその初期の浪漫的傾向から、中ごろ徹底的破壞的の自然主義に移り、更に晩期に及んで漸く圓熟の境に入つて神祕象徵の風格を帶ぶるに至るまで、その間の發達變遷の徑路に極めて自然なる連絡があつた。各篇皆悉くその前後の作との間に緊密な關係を有する點に於ては、彼の全集は實に終始を一貫せる一大連鎖たるの觀がある。或時は人物の性格に於て、或時は作全體の基調に於て、或時はまたその中心思想に於て、一作は一作ごとに序を逐うて、そこに何等かの連絡を保ちつつ開展して行く、その推移のあとが如何にも鮮やかに吾々研究者の目に映ずるところが、尠からぬ興味をそそるのである。そこで今『亡靈』に就いて言ふと、これはイブセンの破壞的否定的態度が激烈の頂點に達した折の作である。だから此作に對するとき、吾々は先づ孤軍奮鬪の勢すさまじく、因襲と權威に反抗して一世を痛罵しつつ獨往邁進せんとする戰士（ファイタア）としてのイブセン其人を想はねばならぬ。

いまこの頃の作物で、『亡靈』を中間に挿んでその前後との關係を考へると、千八百七十九年作『人形の家』

千八百八十一年作『亡靈』

千八百八十二年作『人民の敵』

といふ順序で出來てゐる。先づ『人形の家』に於て、イブセンは例の隨分思ひ切つた態度で婦人解放問題のために絕叫した。慣習道德が命ずるところの『義務』の束縛を脫して、眞の自我中心の生活に入らうとする女主人公ノラの氣焰には、世の道學先生は勿論のこと、いくらか新しい氣運を理解し得るものさへ尠からず驚かされた。一般の社會はイブセンの此作を目して世道人心を毒するものなりとして、猛烈な攻擊を加へた。そこでイブセンは翌年の夏を南歐ソレントオの海岸に送つて、更に新曲の稿を起した。あくまでも世と戰はんとする彼はかう考へた。ノラが一朝自己といふものに覺醒して家庭生活を放棄するのを、世人は異口同音に不道德だと言つて非難するが、若しそれならばノラがあのままで全く覺醒せずに、虛僞の生活を續けて行つたらばどうなるだらうか。この結末は或は頗る慘憺たるものがあるでは無からうか。ここに於て唯かの漫然舊道德の立場に在つて攻擊を逞しうしながら、この明白なる疑問にさへ逢着し得ざる衆愚の蒙を啓くべく、イブセンが彼等の面前に今これを見よとばかりに投げ出した作が、即ち悲劇『亡靈』であつた。ああ道學先生の講釋にはとくに旣う聞き

飽いた。理窟や說敎は何とでも言へようが、唯此恐るべき冷やかなる赤裸々の事實に面して卿等は如何せんとはするぞ。かく問はんとするのがイブセンの眞意であつた。

『亡靈』のアルヸング夫人は、不品行と放蕩の生活に身を持ち崩した男の妻として、虛僞の家庭生活をつづけた女だ。因襲道德の權化とも言ふべき牧師マンデルスの言に從つて、彼女は心ならずも母たり妻たるの『義務』を果して世を送つた、その最後の悲慘なる運命こそは、要するに彼女が多年覺醒し得ずに續けて來た生活の當然の歸結に他ならなかつた。そしてこの戰慄すべき悲劇を構成するに至る根本の力を何かと言へば、それは近代の自然科學が吾々に提示したる恐るべき遺傳の現象であつた。わが文壇の或新作家が所謂『歡樂の鬼』であつた。父の亂行は生理的に、その子オスワルドをして救ふべからざる病弱の青年たらしめ、彼は遂に絕望の極『われに太陽を與へよ』と叫びつつ、悽愴暗澹たる此曲の大團圓をなすに至つたのである。（醫家の說によるとオスワルドの症狀は Syphilis hereditaria tarda『慢性遺傳梅毒』か、然らざれば Dementia parylytica『痲痺性痴呆』でなくてはならぬが、いづれにしても、これにはなほ疑ふべき點があると言ふことだ。）

英國現存の評家ハヴロック・エリス氏は、嘗て此劇を評するに當つて Robust naturalism の語を用ゐた。かの浪漫主義の美しい、されど果敢ない夢を根本から一掃し去つて、醜惡な人生の暗黑面をかくまでも遠慮なく暴露した作物は、さしも豐富な近代の文藝に於ても類は甚だ少い。さきに『人

形の家』を攻撃した世人は、ここに至つてまた更に聲を大にして『亡靈』を非難した。亂倫なり、悖逆なり、汚穢なりと罵つて、遂にこは藝術の圏外に逸し去れる醜劣の文字なりとさへ嘲つた。そこでまたイブセンは更に奮激して、社會に向つて次の矢を放つた。それが卽ちその翌年に出た『人民の敵』であつた。今は衆愚の世だ。思想家或は先覺者が眞實を語つてかれら俗衆の蒙を啓かうとすれば、世は却つて此先覺者を敵視し、遂には之を責めて死地に陷れようとする。敢へて身を挺して民衆の敵たらんとせる共人こそ、眞に一代を警醒すべき貴き豫言者である事に彼等は氣附かないのだ。イブセンはこの意味に於て自己の立場を明らかにすべく、『人民の敵』の主人公ストックマンを描いた。溫泉場の缺點を暴露して、果ては大に市人の攻擊を受けた此侃諤の士ストックマンが、『世界に於ける最强者は最も孤獨なる一人である』と叫んだのは、作者自ら自己を描いて世の嘲罵に報いたものであつた。

以上述べたやうなわけで、悲劇『亡靈』は問題劇社會劇として、實にイブセン作中の最大なるものである。かれが現實の問題に觸接して最も激越な、非妥協的の態度を持したる頃の代表的作物である。從つて藝術品としては、なほ完璧を以て許すべからざる缺點のある事は認めねばならぬ。卽ち彼の作物は此頃よりして以後漸くその色調を變じ、次いで出た『野鴨』や『ロスメルスホルム』に至つて益々圓熟の境に入つたのである。だから私共は純藝術家としてのイブセンの傑作を以て、むしろこ

れらよりも後の晩年の作にありと見做しつつも、なほ同時にこの『亡靈』を以て眞に讀み苦しきまで苦味の勝つたる、また痛ましきまで深く現實味の底に徹したる稀世の大作である事を、信ぜざるを得ないのである。戯曲『亡靈』を讀んで唯そこに『詩』の乏しい事や、或は極端な誇張のあとを見、露骨な一本調子の作風に慊らずとのみ思ふやうな人は、いまだ共に問題劇を語るべからざる人であらう。かつて丁抹の評家ブランデスが此作を評して、これイブセンの最大作にはあらざれども確かに彼が最高の功業なり、と言つた言葉の眞意は讀者が深く思を致すべき所であらう。(大正四年二月)

英國思想界の今昔

（ヸクトオリア朝と現代と）

一

外交關係と思想問題と、このかけ離れた二つのものを强ひて私は結び附けて考へようと云ふのではない。二者の間には何の關係もなく交渉もない、とただ一概に否定して了へばそれまでである。しかし私は最近十數年の英國の國情を考へる時、その最も著しき特徴が、外交の上にも思想の上にも益々大陸に接近して來た、といふ顯著な事實にある事を思はざるを得ない。そしてまた、たとひ偶然にせよ、また必然にもせよ、此同一現象が外交上と思想上との兩方に現はれた事に特に興味を感ずるのである。かの能文達識を以て知られたフランシス・グリアソンが昨年世に公にした論集『無敵同盟』（インヸンシブル・アライアンス）などには、現に國際關係を說くに氏一流の神秘思想を以てした如き極端な例さへある。また前世紀の後半、自然主義の勃興時代から、世紀末の象徴派文藝の盛んであつた頃にかけて、思想上藝術上に於ける露佛二國の間の密接な關係を以て、その外交上の親善な間柄と對比して考へる時は、外交史と思想史との間に不思議な一致のあつた事に誰しも注意を促されるであらう。かういふ現象を思ひ

返せば、今私がここに英國の外交關係を最近思想史の上から見て、二つの間に一致を見出さうとするのをも、あながち牽强附會とのみは言はれないだらうと思ふ。

前世紀のヴィクトオリア朝の末つかた、英國國運の隆昌はまことに前古に比なきものがあつた、その頃歐洲大陸には、獨墺伊の三國同盟に對し露佛同盟が出來て、勢力の均衡（バランス）が保たれた。唯英國のみは獨り自ら高うして、所謂『名譽の孤立（グロオリアス・アイソレイション）』『花々しき孤立（スプレンデイド・アイソレイション）』といふやうな地位に在つて、國威を誇つてゐた。それが二十世紀になつて先帝エドワアド七世の御宇に入り、英國の外交は從來の孤立の態度を棄てて頻りに大陸に接近しはじめた。千九百〇二年に成立した日英同盟は、相手が東洋だから姑く別問題として、次いで千九百〇四年の英佛協商となり、千九百〇七年の英露協商となつたのは讀者の知らるるところである。おもへばかの歐洲の『平和建設者（ピイスメイカア）』と呼ばれ、或は「平和の國王（ル・ロア・パシフイカテユウル）」と稱せられた先帝エドワアド七世は、少壯の頃より下情に通じ給ひ、人心の機微を察し世相の曲折を倂せられたる、謂はば苦勞人とも云ふべき英明の君であつた。登祚の後は殆ど年ごとに大陸に行幸せられて、大陸諸國との親善の度を增し給ひ、在位十年の間に世界の國際關係はために著しき變化を生じた。英佛露の三國協商に日本その他を加へて聯合國とし、以前の三國同盟より伊太利を脫したる獨墺同盟と對戰するに至つた今次の大戰亂は、要するに近時英國の外交政策が孤立を棄てて、大陸接近の態度に出でた事に基因するのである。

さて之を思想史の上から見ても、ギクトオリア女王時代の英國は、大陸諸國の近代思潮と殆ど沒交涉の觀があつた。特に先づ著しく露佛二國に現はれた自然主義の文藝も、またかの現實暴露、因襲打破、偶像破壞等の言葉で言ひ現はされたる澎湃たる新思潮の勢力も、皆遂に英國海峽を超ゆるには至らなかつた。前世紀の後半、大陸諸國の民が社會主義の運動に狂奔した時にも、英國の下層民は依然として貴族や富豪に對する、一種の傳說（トラディショナル）的な服從に甘んじてゐた。佛蘭西あたりの矯激な社會主義の宣傳者さへ、英國のみは遂に全く侵し難き別天地なりとして絕望した程であつた。かくてギクトオリア朝盛期の英國は、極めて穩健着實なる常識萬能の俗衆に滿たされた。妥協と中庸との外、何事をも知らない道學先生の國であつた。一代の民衆はゾラやフロオベエルやイブセンの文藝には目も吳れず、平穩無事の詩人テニソンの諸作に隨喜の淚をこぼし、天下太平を謳歌した。氣早な日本文壇の批評家などが一概に、英國を以て時流に後れたる保守頑冥の國なりと誤解し速斷したのも、要するにギクトオリア朝の思想界が、大陸に對して『名譽ある孤立』の狀態にあつたからだ。

妥協調和を重んずる思想の流は、やがて必ず凝滯し沈衰して何等かの變化を要するの時機に到達する。これが卽ち過渡時代の危機（クライシス）であり、大變換期（グランド・クライマクテリク）である。殊にその中庸平凡思想の流が長ければ長きほど、また強ければ強きほど、その後に現はれる破壞的革新の新思想新氣運は一層急激であり猛烈である。殊に英人は昔から、保守的な一面と共に急進的の一面を具へ、實際的なると共にまた夢想

的である特色を有してゐる。これは全く、保守的実際的なる英国民族の気風に加ふるに、南方諸国文明の感化をうけ、またチュートン人種特有の純情な感覚のなすがまゝに委ねてゐる結果である。佛蘭西革命よりも約二世紀前にクロムエルの如き民治家を出し、自然主義の浪漫思想よりも幾十年も先じてシェリイやバイロンの絶叫を生じた英国を目して、誰か保守一偏の国だと言ひ得ようぞ。

浪漫思潮に於ても、十七世紀末に確立せる英国は、十八世紀の終、仏蘭西革命の大事に近く、先づ早く、自ら率先して漸く浪漫主義化の心情を湧しはじめた。かくて色めき渡つた思想界は、十九世紀末より今世紀に至つて益々著しく感傷的の特色を現はした。それは実際なる大陸の自由主義思想の流れ、一時に大河を決するが如くにこの島帝国に流入し来つたからである。

二

思想史に於て最近英国の大陸交通の事実は、先づ著しくその根本的傾向の上に現はれた。

遠い昔からノルマン・コンクェストは、もと自由なる海上生活に、羈絆の束縛を知らなかつた島人の放たれたる民であつた。それが十一世紀の『ノオマン・コンクェスト』以来、貴族といふ一階級に圧迫せられて、近代に至るまでも特権階級には遂にそれが強大なる団体の勢力と化し、常に社会の覇権とまでなつた。無論その宇宙にも英国民族に固有なる自由独立思想の絶えざる反抗の発作はあつたには相違ない

が、とにかくギクトオリア朝の中頃こそは、一般民衆が貴族富豪地主などに對する一種の保守的崇拜熱の最も熾であつた時だ。當時の文豪サッカレイが、名著『スノッブスの書』を公にして此病弊を罵つたのは實に千八百四十八年であつた。然るに大陸殊に佛蘭西、露西亞では、人の知る如く前世紀の中葉以後が、破壞革新の思想や個人主義自然主義の文藝の極盛期であつたが故に、英國の思想界は獨り時潮を離れたる孤立の狀態を呈してゐたのであつた。

　鎖國主義や孤立主義は民族生活としては到底不自然の態度たるを免れない。外交上にも思想上にも、『花々しき孤立』は果して長くは續かなかつた。先づギクトオリア女王朝の終、所謂世紀末（ファン・ドウ・シエクル）の頃に動搖しはじめた英國の思想界は、二十世紀に入つて急轉直下の勢を以て大陸の思潮と同一方向を指して、更に一層の勢を加へて驀進しつつある。すべての方面に於て因襲や傳說の勢力を破碎し、『ノオマン・コンクュスト』以來養はれ來つた貴族の勢力も、最近數年間、いまの自由黨內閣の急進的社會主義的政策に壓せられて、果敢なくも漸く衰頽の色を呈してゐるではないか。

　千九百〇五年バルフォア內閣が一たび關稅改革（タリフ・リフオオム）の問題に蹉跌してより、今日に至る約十年間は實に全く自由黨內閣の天下で、さきにキャンブル・バナマンに次いで、アスキスが首相となつてからは、更にその働き振が一層目ざましい。言ふまでもなく統一黨は保守的な貴族や地主や富豪や銀行家や資本家の利益を代表し、自由黨の方が勞働者や平民の味方である。此統一黨が最近に於て黨勢甚だ振は

ず、全く政權に遠ざかつて在野黨たる事殆ど十年、愛蘭自治案に關聯したアルスタア問題などを利用して、しきりにあらゆる辛辣なる手段を用ゐ、如何にかして自由黨内閣を顚覆しようと焦慮つても、遂にそれが效を奏しないで、益々苦悶し懊惱してゐるといふ現象は、果して何を意味するのであらう。勿論いまの黨首ボオナア・ロオのその器に非ざるを始めとして、人材の缺乏も一原因であらうが、時代思潮の大勢が既に統一黨の帝國主義を離れて、全く現内閣自由黨の社會主義的政策に一致して來た事が、その大原因であるのは言ふまでもなからう。

現内閣の花形役者たる藏相ロイド・ジョオヂは、文壇に於けるバアナド・ショオと共に、私は之を最近英國の民主的社會主義的因襲打破の大勢が生み出した時運の寵兒だと見なすのである。彼が苦心慘憺の餘に成つた有名なる千九百〇九年の豫算案は、最も露骨に、また最も突飛にその急進政策を現はしたるもの。勞働者や平民が歡呼萬歲のうちに之を迎へたと共に、貴族や富豪に加へられたるその大打擊は彼等の心膽を寒からしめた。その餘りに極端なる急進的態度には、さすがの大陸諸國と雖も一驚を喫せざるを得なかつた。而もこの豫算案が遂に議會を通過するや、彼はなほ勢に乘じて更に懸軍長驅、敵の本壘を奪はんとするものの如く、上院の否認權廢止案を以て更にその牙營に肉薄した。この突擊はまたもや見ごと效を奏して、今では英國の貴族院は驚くべきほどその權力を失墜するに至つた事は、讀者の既に知らるる通りである。

ギクトオリア朝の中頃には、資本家に對する勞働者、貴族に對する平民の關係は、多年因襲の力によつて殆ど動きなきものであつた。それが近年漸く大陸思潮との接近と共に、先づ職工組合主義(トレイド・ユニオニズム)となり、また同盟罷工の運動となり、今日では遂にかの佛蘭西のソオレル等によつて創められたサンディカリズムの色彩をさへ帶ぶるに至つた事は、注目すべき現象ではないか。實際近年の英國ほど同盟罷工の頻繁なのは全く他に例の無いところで、印刷職工、鐵道就業員、炭坑々夫、海員等一としてこの同盟罷工をやらざるなしである。一例を言ふと、千九百十二年の一月から九月までの間に、同盟罷工の回數實に五百一回、罷工勞働者の數百三十四萬人の算するに及んだと傳へられてゐる。文藝の方ではゴルスワアジイが千九百〇九年の作『爭闘(ストライフ)』は、坑夫の同盟罷工を背景にしてその巨魁と會社の重役との衝突を描いたもので、全く英國現代社會の此大問題を取扱つた劇である。

三

世紀末以後の英國が思想上に於て露佛と接近するに至つた現象は、わが日本が日露戰爭以後歐洲の自然主義を輸入してよりこのかた、思想界に大動搖を生じ、それが遂に大正の初に至つて外部の實行的方面にあらはれ、かの憲政擁護の騷ぎなどを始めとして、種々の政治上社會上の動搖となつたその間の徑路に酷似した點が多い。

新思潮が最初なほ未だ具體的活動の形をとらず、茫漠として捕捉すべからざる隱れたる力であり、人心の内部に兆した氣分であり情調である間に、早くも之を感じ之を表現するものは文藝に他ならぬ。從つて政治上社會上の現象は、多くはそれに先だつこと十年二十年、時に或は半世紀一世紀以前に於て、既に文藝上の新運動として現はれてゐた如く、英國現代の民本主義社會主義的傾向は、今より約二十年前、ギクトオリア朝の末期に近く、詩文藝術の上にあらはれたる大陸思潮との接近が實にその先驅をなしてゐたのである。

テニソン、ブラウニングの詩歌、ディッケンズ、サッカレイの小説によつて代表せられたギクトオリア女王盛期の文藝は、かのラファエル前派の藝術が勃興した頃から漸く變化の色を呈して、大陸のデカダンスの傾向に接近し始めた。ロゼッティ一派の詩歌や繪畫には、既に一種病的の色 morbidezza が現はれてゐた。かれらは文藝上一切の法則や因襲を棄てて、放たれたる自由の藝術を起さうとした。例の道學先生一輩の徒からは、早くも亂倫なり肉感的なりとの攻撃をさへ浴せられた。更にこの一派と密接の關係あるペイタアは、その「文藝復興論」中の諸篇に希臘系統の異教思潮の美を讃嘆し、更にその有名なる「結論」の一篇に刹那々々の官能生活の意義を説き、一種の美的享樂主義を以て當時文壇の耳目を聳動した。かくて既に動きはじめたる新氣運に促されて起つたのが、即ち詩文

に於てはオスカア・ワイルド、繪畫に於てはオオブレイ・ビアヅレイを以て代表者とする純然たる頽廢的世紀末風の耽美主義であつた（本卷『わかき藝術家のむれ』の條參照）。此一派の運動はその後、かのワイルド入獄事件（一八九五年）によつて一頓挫を來したとはいへ、英國思想界の根柢に與へた激動は決して輕少なるものではなかつた。

遠く源に溯れば、キイツやシエリイの昔から流れてゐた英國本來の抒情詩的傾向に養はれ、また南歐伊太利の脈を承けたるラファエル前派の熱烈奔放の藝術に肥やされた沃土に、今新しく此頽唐の傾向の種を播いたものは、即ち佛蘭西のボオドレエルからヱルレエヌに至つて成熟した象徴派の詩文であつた。言ふまでもなく佛蘭西は近代のあらゆる新思潮の發祥地で、露西亞藝術の豪放痛烈なる態度と相呼應し相俟つて、常に全歐文藝思潮の根柢となる絶大の力を生んでゐる。英吉利のワイルド等が新文藝の運動も、要するにまたこの大陸思潮の輸入と影響とに他ならないので、ヸクトリア朝の因襲傳統が根柢から破壞せらるるに至つたのは、全く此佛蘭西新思潮の勢力があつたからだ。だから耽美派の系統に屬する人々は、皆悉く英吉利に生れたる佛蘭西人ともふべき風があつた。ワイルドは固より、ビアヅレイも、アアネスト・ダウソンも、アアサア・シモンズも、リチャアド・ル・ガリエンも皆おほかた大陸の藝術の都、巴里を以て精神上の故郷とした人々であつた。從つて英國の頽唐派の藝術には、強く異邦趣味が含まれてゐたのは當然の結果だ。

近頃の英國政界に愛蘭國民黨（アイリシェ、ナショナリスツ）の勢力めざましく、首領レドモンドの鼻息の荒いと同じく、かのイエイツを旗頭とした愛蘭詩派（アイアランド）は、現今英國の劇壇や詩界の一方に侮り難き一大勢力をなしてゐる。が、これなども大陸殊に佛蘭西から來た象徴主義や神秘思想の感化が、たまたまケルト人たる愛蘭人固有の神秘的傾向と相合して出來た結果であつて、大陸思潮との接近は此點に於ても見られるのである。

頽廢（デカダンス）の時代はその半面に於てまた再生（ルネツサンス）の時代である。老いたる者の若きに返らんとする時代、古き力の廢れて新しき力の興らんとする時代である。人心の動搖、思潮の混亂は、人々が如何にかして新生活に入らんとして、how to live の問題に何等かの解決を與ふべく努力しつつある現象である。其國固有の思想が外來思潮の刺戟感化を受くる事最も大なる時は、常にかかる時代に於てである。かういふ時期に於て英國に大陸の自然派文學が輸入せられた事は、我が日本に於ける同じ思想の影響と對比して極めて興味ある事であつた。即ちゴッスの批評が始めてイブセンを英國に紹介したのは千八百七十九年であつて、アアチャアの筆に成る英譯も之に次いで續々上梓せられた。ギゼテリイがゾラの自然主義の作品を英譯出版して遂に獄裏の人となり、ジョオヂ・ムウアが盛んにゾラ張りの小說を書いて、當時まだ因襲の夢から覺めなかつた樂天的の英人を驚かしたのも、皆この前後の事であつた。かかる風潮に促されて英國の文壇には、モオパッサンに似たるクラッカンソオプやフランク・ハリス

等の短篇が出で、アアサア・モリソンは貧民窟（スラム）描寫で成功し、近頃は劇壇で名を成してゐるサマアセット・モオムが『ラムベスのリザ』といふ工女の生活を描き、リチャアド・ホワイティングが『ジョン街五番地』の名作に自然主義の代表的作品を出したのも、皆此女王治世の末頃であつた。

此自然主義輸入に關聯し、はやく大陸から侵入して英國の思想界に潜流浸潤してゐた社會主義が、遽然として勢を得るに至つた。殊にそれが著しく文藝界にあらはれ、G. B. S.（即ち George Bernard Shaw）はフェイビアン協會の中心人物として活動し、自然主義の新作家また多く之に加盟し、當時の智的少壯階級（インテレクチュエル）の大半はその會員であつた。今日に於て G. B. S. は言ふまでもなく、アアノルド・ベネット、グランヸル・バアカア、ゴルスワアジイ、エチ・ジイ・ヱルズ等新時代の諸作家が、皆等しく社會改良家（ソオシアル・リフオオマア）であるのも怪しむに足らない。

四

二十世紀の英國が女王朝中期（ミド・ヴィクトオリアン）の樂天觀（オプティミズム）を棄て、保守的道學先生の態度を一變したのは、おのづからなる時勢の推移なりとはいへ、以上述べた外來の大陸思潮を輸入した事がその最も有力な原因である事は疑を容れない。從つて此事實は著しく文藝界に現はれて、近頃の英國文壇に於ける外國文學の流行、殊に露西亞佛蘭西の戲曲小說の流行となつた。久しくアルマ・タデマの月並な繪畫を賞翫してゐ

た英吉利人が、近年グラフトンの展覽會に後期印象派の作を賞し、或はニジンスキイ等の露西亞舞踊を喜んだりするのを見ると、誰しも此國に於ける時潮の推移に驚かされるだらう。ディッケンズやサッカレイに隨喜渇仰の涙をこぼしてゐた小說讀者は、今ドストイエフスキイの深刻沈痛なる作品に、近代思想の暗影を迎つてゐるではないか。『罪と罰』や『死人の家』の作者は、既に約三十年以前から英國に紹介されてゐて、而も永く顧みられなかつたのが、此頃になつて急にすさまじき流行となつたのである。英國近時の出版界に、大陸殊に佛蘭西近代の名著の飜譯が如何に頻繁に出るかを見た人は、此頃の日本に於ける飜譯流行の現象と對比して、思想界の要求が那邊に在るかを知り得べきであらう。

この風潮は直ちに、劇に於て G. B. S. やゴルスワアジイの作物に反映されてゐるのは勿論のこと、小說に於てはエチ・ジイ・ヱルズとアアノルド・ベネットの二家の作物に最もよく現はれてゐる。このヱルズとベネットが果して眞の藝術家として第一流の人であるかどうかは別問題として、とにかく英國近代の社會を活寫してゐる點に於ては、今から五六十年前のディッケンズと當時の英國社會との關係に髣髴たるものがある。ヱルズ氏の健筆は殆ど每年の新作に世間の注意を集めてゐるが、近年の物では『新マキアヹリ』(一九一一年)に最もよく現代の世相を寫してゐる。これは主人公リチャアド・レミトンといふ政治家の生涯を自叙傳風に書いたもの、劍橋大學を出てから後代議士となり、最

初は極端な社會主義の意見を抱持したのが、後には統一黨の方の關稅改革論者になつて了ふまでの筋道を書いたものだ。その變遷の徑路は作者ヱルズ其人の思想とは正反對の徑路を取つてゐるが、實はこれによつて英國現代の政界を活寫し、作者が周圍の人物を諷罵したものである事は、一讀の後誰しも氣の附く點である。

またベネットの作では、『一里塚』(マイルストオンズ)といふ劇が一昨年頃から英米兩國に演じられて、未曾有の大喝采を博した。これは『三代にわたれる芝居』と銘打つた通り、或一家の人々が三つの時勢に對する關係を寫して、近代英國の時潮の遷移を描いたものである。即ち

第一には千八百六十年より……ヸクトオリア朝中期

第二には千八百八十五年より……ヸクトオリア朝後期

第三には千九百十二年より……現代

この三つの時代に於て、人々の結婚問題、貴族平民の社會階級問題、親子の關係などに對する思想が如何に轉化して來たかを示したものだ。この第三幕卽ち現代のところに、ムリエルといふ二十四歳のお轉婆娘が、結婚問題に就いて母親に反抗し、戀人のリチャアドと一緒に加奈陀へ飛び出さうとする。母親がどうしても許さぬと言へば、舊弊なことをおつしやい、そりや時代が違ひますよといふ調子で、

「覺えてゐらつしやい、今は千九百十二年といふ時代に居るんですよ。リチャアドさんには既う結婚の約束もしたんだから、わたしは結婚しますよ。「許される」も何もあつたものですか。』

なぞと氣焔を吐く。今度は、も少し物柔かに、やはり母親に向つて、

『……私はあなたを snob（貴族崇拜病者）だとは言やしませんよ、そりやもう、どのみち幾何かスノップで無い人は無いんだから。しかしあなたは新思想といふものが全然お解りなさらないのよ、お氣の毒ね。貴族なんて厄介な話は既うとつくに濟んで了つた事よ。』（以上『一里塚』第三幕、刊本九九頁）

ヸクトオリア朝の因襲が打破せられてそこに現代の英國が新しく出來た事を、此の生意氣な一少女の口をかりて言ひ現はされたのである。

なほ文學の外に、繪畫などに於ても、大陸ことに佛蘭西印象派の影響を受けて、所謂アカデミイ風の官僚藝術に反抗せんとするグラスゴオ派の諸家、たとへばガスリイ、ペプロオ、ブライドなどの輩出するあり、また『新英國藝術俱樂部』一派の新畫風が俄に勢を得て、かのポインタアやアルマ・タデマ等の舊派に反抗したのも、要するに大陸との接近に基づく時潮の推移を示すものに他ならぬであらう。

外交上にも思想上にも孤立の態度は、たとひそれがグロリアスであらうともスプレンディドであらうとも、到底永續きのしない不自然の態度である。殊に近代思潮の大勢は、世界文明國の一部に斷

じて思想上の鎖國主義を許さない事を注意しなければならぬ。かの世上動もすれば保守頑冥の論に左袒せんとする人人の如きは、かつて世界最大の保守國だと見做されてゐた英國のかくの如き近狀に、深く鑑みるところあるべきだらうと思ふ。（大正四年二月『太陽』所載）

ケルト文藝復興概觀

一　民族の覺醒

前世紀後半のヸクトオリア女王朝の英國のみを知つて、あの常識的な道學先生風の、妥協調和を重んじた中庸（ヸア・メディア）をのみ行かうとする思想傾向を見て、あれが英國の眞相だらうと勘違ひをした人、或は日本文壇の一部にありがちなる氣早な又頗る聰明な批評家のやうに、英國は大陸近代の思潮に獨り起（た）ち遅れて、今もなほディッケンズの小說か、さもなくばテニソンの詩歌をのみ有難がる保守頑冥の國だらうと早合點をした人たちは、世紀末から現代へかけて殆ど目まぐるしいやうな變化をつづけて、大陸近代の思想と同一方面に向つてさらに勢を加へて驀進しつつ、思想上にも實行上にも殆ど面目を一新した今日の英國の眞相を見るならば、今更のやうに驚駭の眼を瞠ることであらう。

自然主義や社會主義の思想、次いでは神祕象徵主義の文藝を輸入し、或は今、後期印象派や未來派の議論をさへ盛んに歡迎しつつある現代英國のこの急激にして突飛なる變化は、如何にもかのヸクトオリア朝以來の因襲傳統が崩壞したる必然の結果には相違ない。また不思議に保守的一面と共に急進

的の他の半面を有し、實際的なると共に極めて夢想的なる英國民の特質が、ここ思潮の轉換期（クライマクテリク）に際會して、ひとときは色鮮やかに現はれたものであるとも言はれ得るだらう。

しかしこの急激な變化の裏面には、政治上、思想上或はまた藝術の上に於て、かの愛蘭やヱイルズを根據としたケルト人種が、民族として覺醒したといふ一大事實の存する事に、特に注意を拂はねばならぬ。

在來の因襲や權威に反抗することによつて新しき生活に入らんと努力しつつある今代の英國に於て、この新しき時代思潮を代表せるふたりの人物が、際（きは）だつて吾々の注意を惹いてゐる。それは政治界に於て、貴族富豪の勢力を壓迫せる中心人物たるロイド・ジョオヂと、文壇に於ては、先づイブセン一流の思想と藝術を高調して英人の僞善的態度を罵倒し、社會主義的革新策を絶叫したるバアナド・ショオ其人である。前者は生れはマンチエスタアであるが、ヱイルズのカナアヴン選出の代議士だから、ケルトには特に緣が深い。後者は言ふまでもなく愛蘭の人、二十歳までダブリンで育つた男である。から考へて來ると、あの佛蘭西の頽廢的傾向を英國に移植して耽美派運動（イイスセテイク・ムウヴメント）の中心となつたオスカア・ワイルドも、やはり愛蘭生れのケルト系統の人であつた。少しく誇張した言ひかたをすれば、英國で近頃の新思潮に關係ある人物は、大抵みなケルト人の國、愛蘭の出身者だと言つても差支はない。

元來愛蘭人と云ふのは、昔英人のために放逐されたブリトン人の子孫で、ケルト民族に屬する舊教徒である。ところが十七世紀の中頃に新教徒たる英人に反抗し、クロムヱルのために征服されて了つた。それ以來、英人は愛蘭人を見ること奴隷の如く、愛蘭人は小作人として英吉利の貴族たる大地主の利益を謀るために生存するが如き有樣であつた。それが近代になつてから、佛蘭西革命以來の自由民權の思想に動かされ、政治上に於ける自由解放を要求してやまないやうになつた。近頃の政治史上の大問題である愛蘭自治案（アイリシユ・ホームルウル）もこれから來たので、虞翁（グラドストン）以來、今の歐洲戰亂爆發の前まで、これが英國政界の難問題の一つであつた。實際いまの英國內政の上に於て、首領レドモンドを中心とした愛蘭國民黨（アイリシユ・ナシヨナリスツ）の勢力は非常なもので、政府黨たる自由黨と、在野黨たる統一黨（ユニオニスト）との間に介在して英國政界を左右するに足る勢力を有つてゐる事も、畢竟これケルト民族が覺醒の結果に他ならない。文壇に於てショオは詩人イエイツの需に應じて、千九百〇四年愛蘭文藝座に於て演ずべく『ジョン・ブルの別の島』（卽ち愛蘭を云ふ）といふ一篇の戲曲を草して、愛蘭自治問題のために萬丈の氣を吐いた。

一民族の覺醒は、それが政治上に現はれると共に、必ずやまた文學藝術の上にも現はれて居なければならぬ。

二 詩的なる民族性

ケルト人種はアングロ・サクソンなどの實際的なのとは反對に、極めて詩的な空想的な、或は多情多感とも云ふべき性質を有つてゐる。殊にその思想の一面には本來甚だしく神秘的な傾向のある事も著しい特色である。それは、この民族に固有な傳說民謠の類が、如何に歐洲一般の文藝のために豐富なる詩的材料を供給したか、といふことによつて明らかに證明されると思ふ。たとへば前世紀の浪漫派文藝の上に絕大の影響を與へた『オシアン』の歌も、またワグネルその他近代の歐洲文藝の題材となつたアアサア王の傳說も、それらは皆このケルト民族の富贍な想像力と纖細微妙（デリケイト）な感情性とが、世界文學の上に致した貢献に他ならないのである。

近世に於てケルト思想の美を說いた第一の人は、佛蘭西近代の名文家『基督傳』の著者ルナンであつた。次いでは英吉利のマシュウ・アアノルドの『ケルト文學の研究』(千八百六十七年出版)が、最も多く世人の注意を此方面に促した。アアノルドは、英國の詩歌がケルト思想に負ふところいかに大なるかを說いて三つの點を擧げた。卽ち第一には、スタイル、第二には哀愁（メランコリイ）、第三には "natural magic"。これらの三點に於てケルト思想の流れは英國の文藝に絕大の感化を與へてゐる事を說いた。

私はいま便宜上、アアノルドが列擧したこの三つの特徴を土臺にして、ケルト思想の美に關する自

分の所見を簡單に述べよう。

第一の『スタイル』とは詩文の風格である、韻致である、また風韻である。すべてのすぐれたる藝術には、内容と外形との渾然たる一致調和がなければならぬ。ケルトの文學には、その優婉の思想を盛るべく、又纖細の情趣を傳へるべく、それに相應した外形があつた。それが卽ちアアノルドの所謂『スタイル』である。希臘羅馬の詩文は言ふまでもなく、ダンテや沙翁やミルトンにも皆この『スタイル』が具はつてゐた。獨り獨逸文學は之を缺いて、大詩人ゲエテと雖も此點に於ては少しも誇るべきものを有たなかつた、とアアノルドは言つてゐる。とにかく英文學に『スタイル』といふものの出來たのは、ケルト思想の混入に負ふところ尠からざるものあるは事實だ。

第二には哀愁または靜寂、これがケルト民族性の大なる特徴である。讀者がよく知らるる、かのワイルドの『獄中記(デ・プロフンディス)』の中にも、ケルトの傳說では人生が『涙の霧を通して』見られ、また人の一生が『散る花の一生のやうに觀じられる』といふ句があつたやうに思ふが、確かにこの沈欝な情調、悲哀靜寂の分子は、ケルト文學の重要なる一面である。しかしこの悲哀といふ中にも自ら二種あつて、スカンディナヴィアとか露西亞あたりの人のはむしろ態度の上の悲哀で、鬱憂といふ中にも哲學的(フイロソフイカル)な或は理知的な分子が強いが、ケルト人のは寧ろ情調の悲哀である、空想的詩歌的の、茫漠として捕捉すべからざる哀愁である。これは日本の或時代の文學が『物のあはれ』と云つた、あの心持と稍相似

たところがあるので、人生を果敢ない夢や或は朝露のやうに觀じた人の胸の中を絶えず去來する一種の暗愁である。わが英文學の師ラフカディオ・ヘルン先生の或書物に、嘗てこの『物のあはれ』といふ言葉を英語に移すべき適當の語が無いといふので、ahness of things と譯されたのを見たが、ケルト人の鬱憂もやはりかういふ種類のものかと私には思はれる。さきに言つたルナンの論文には下のやうに書いてある。『彼等は勝利を歌ふよりは多く敗殘を嘆く。その歴史は唯一つの長い慟哭の聲である。いつも流謫を想はせ、海のあなたへの逃亡を想はせる。時としては愉快に見えることはあつても、微笑のかげには間もなく涙の露が閃く。かの不思議にも人生のすがたをわすれ、運命を忘却したる快樂といふ事を、かれらは全く知らないのである。その歡樂の歌はやがてまた悲歌となつて終つてゐる。』

第三に、ケルト人の自然觀には一種の神祕的な靈趣とも云ふべきものが見られる。アアノルドが所謂 natural magic の意も亦この點にあるので、ケルト人は森羅萬象すべてを觀じてそこに神を見出すところの汎神論(パンシイズム)の傾向を有つてゐる。行く雲、流るる水、また一草一木の末に至るまで、自然の風物に皆悉く不可思議な生命と個性とを具へてゐるといふやうに考へる。つまり古代人そのままの自然(ネイチユア)崇(ワア)拜(シツプ)のこころを今もなほ失つてゐないのである。愛蘭は紀元五世紀の頃に、聖(セント)パトリックによつて基督教化されたのであるが、その以前はかのドルウイッド教といふ、一種の魔法のやうな事をやつた

り、神木を拜んだりする原始宗教の國であつた。靈魂の輪廻轉生を信じ、日月星辰を崇拜したその古代宗教の遺風を、かれらは今もなほどこか胸の奥の奥に祕めてゐる。天地萬物すべての上に美しい不思議な影を附けて觀ること、英語でいふ“glamour”が即ちケルト思想の美をなしてゐるのである。たとへば櫻草(プリムロオズ)の花を見ても『可愛い黄金(こがね)の人たち』‘dear golden folk’と言ひ、山川草木すべてを『不思議な同胞』‘the mystical brotherhood’と呼ぶやうな類である。だからケルト人の物語には、『エルフィン』とか『ゴブリン』とか『フェアリイ』とかいふ、變化(へんげ)や妖精の類の非常に多いのは勿論、そのほか、例へば死人があるとき戸の所に來て哭く Banshee といふ魔物だの、首無しの騎馬武者 Dullahan といふ化物だの、いろんなものが數へ切れないほど澤山に出てくる。また大きい湖水を見ても、その底には市街(まち)が沈んでゐるといふやうな事を考へたり、山にも谿にも皆化生の者が住まつてゐると實際信じたりしてゐる。前世紀の愛蘭の詩人ヰリアム・アリンガムの『フェアリイズ』と云ふ詩に、

'Up the airy mountain,
  Down the rushy glen,
We daren't go a-hunting

For fear of little men,"

(山越えて、谷越えて、獵には行くまい、小鬼がこはい。)

といふ句があるが、これなぞも實際さう信じてゐるのである。そのほかイエイツの詩なぞによくある飛行自在の天魔シイ Sidhe だの、不老不死の國或は常若の國 Tir-nan-ge などの實在を、かれらは信じてゐるのである。

ケルト思想の中心には、だから一種の神秘説がある。ケルト人には夢の世界と現實の世界が全く一緒にごつちやになつてゐる。目に見えるすべての物は、目に見えざる或物の象徴に過ぎないと考へて、絶えずその見えざる何物かにあこがれる。ルナンの言葉で言へば「知られざる或物を求め、とこしへに願望を離れて逃れ行く或物を求めてやまざる心、これがケルトの詩的生命の根源である。……この民族は無窮にあこがれ、それを渇望し、あらゆる犠牲を拂つて、墓のかなたにも、地獄のかなたにさへも、それを求めてゐる。」また現代の詩人イエイツが『詩は夢である』と言つた言葉も、やがてこのケルト文學の特徴を言ひ現はしてゐるのであらう。

ケルト思想のこの傾向は、前世紀の末ごろ大陸、殊に佛蘭西に於て自然主義の唯物思想に反抗して起つた神秘象徵の文學と相結ばれた。マラルメやゴルレエヌ等の詩歌、或はマアテルリンクの神秘哲

學や戯曲と相合して、そこに英國文壇の一方には愛蘭文學の新聲が起つた。A.E.（本名はジョオヂ・ラッセル）の汎神論的（パンシイスティク）とでも云ふべき風の詩や、イエイツの神祕的な戯曲や詩篇が急に文壇の視聽を聳つるに至つた事も、畢竟このケルト固有の思想が、世紀末の歐洲思想界に著しくなつた「靈の覺醒」といふ大勢に、うまく投合した結果に他ならないのである。

三　民族藝術また郷土藝術

國民に自覺を生ずるとき、また民族に覺醒があるとき、そこに溌剌たる生命の力に滿ちた新興藝術があらはれる。政治上に於て盛んに地方的運動が起ると共に、國民の熱情は更に、際立つた地方色（ロオカルカラア）の鮮明なる郷土藝術となつて外に發するのも、かかる時機に於てである。

元來この郷土藝術（ハイマアトクンスト）といふ言葉は獨逸の文學に用ゐられる名稱であるが、近代の千篇一律な物質文明に支配される都會生活を離れて、田園自然の儘なる郷土の特色ある生活をなつかしむ藝術といふ意味に於ては、これはいづれの國の新文藝にも見出ださるべき性質のもので輓近に於けるケルト人種の覺醒が産み出した文藝復興（ルネッサンス）の現象の如き、最も著しくこの郷土藝術の本質を發揮したものであらうと思ふ。人工的な近代の都會生活には、民族の個性といふものが全く現はれてゐない。地方的特色といふものの少しも出てゐない、或意味に於て單調な生活である。さういふ生活に飽き果てた人は自然の

結果として、まだ野性を脱しない自然生活を慕うて、所謂『土のにほひ』Erdgeruch をなつかしみ、佛蘭西人の言ふ『泥土を懷かしむ望郷の心』la nostalgie de la bone を生ずるのである。唯それは昔から言ふやうな簡單な田園趣味の文藝ではなくして、强く鮮やかな地方色（ロオカル・カラア）を發揮し、民族固有の特色を重んじた藝術をいふのである。この意味に於て、近頃英文學の一隅にあらはれたケルト一派の新興文藝は、鄕土藝術たると共にまた民族藝術（シュタンメス・クンスト）たるの名に最もよく相當するものだらうと私は信じてゐる。

このケルト民族の新藝術は先づ第一に愛蘭に現はれた。かの千八百九十一年といふ年に、愛蘭自治問題の驍將であり『無冠の王』と呼ばれたパアネルが死んだ。そこで今まで政治問題に集注されてゐた國民の自覺と元氣とは、この頃から民心の更に奧深く潜める內生活の要求に向けられた。情緒生活、心靈生活の方面に彼等の注意は促された。英國風（イングリッシュ）の趣味を排斥すること、即ち de-anglicisation によつて、愛蘭固有の文學や傳說を貴び、昔のゲイリック語を復活しようとする企てが起された。愛蘭の英雄時代（ヒロオイク・エイヂ）、即ちクフウリン Cuchulain が國を治め、勇將フィン Finn（或は Fingal, Find）が武功を樹てた民族傳說の時代を回想し研究することによつて、鄕土の特色を明らかにしようとする努力も始められた。

文藝に於けるこの新運動の旗頭は、詩人ヰリアム・バトラア・イエイツである。かれが最初に世に

認められた詩集で、愛蘭の古傳說を材とした神祕な作『アシインの漂遊』"The Wanderings of Oisin and Other Poems"（Oisin は「アシイン」と發音する。昔の「オシアン」と同じものである。）が出たのは、千九百八十九年であるから、文藝史上先づこの年を以て愛蘭新派文學復興の時と見なして可からうと思ふ。次いで千八百九十一年にイェイツは首府ダブリンに國民文學會を設け、後二年更に愛蘭文學會が倫敦に於て發會式を擧げた。

イエイツによつて導かれたこの新氣運に乘じて、今や愛蘭には文人が雲の如くに起つた。或英吉利の評家は近頃の愛蘭を目して鳥の巢だと言つたが、神來の靈興に觸れて歌ふ人の俄に多く集まつたといふ意である。文筆の士は單に男子ばかりでなく、女詩人にもすぐれた人が甚だ多い。これら新派文士の名は、今私が記憶してゐるだけを列擧しても殆ど三十人に餘るほどである。ただ徒らに片假名の固有名詞を多く陳列するの煩を避けて、今は省略することにした。

ケルト人の第二の根據地はヱイルズである。しかし此方では民族の覺醒は寧ろ主として政治運動の方面に現はれ、文藝の上には何等これといつて名指す程の運動を見なかつた。ただ先づアアネスト・リイズの『ヱイルズ歌集』を以て最も注目すべきものと言ふべきであらう。日本によく知られてゐるアアサア・シモンズもヱイルズ系統の人であり、また小說家のメレディスも父母が此地方のケルトの血を承けてゐるといふので、ヱイルズ文學に緣があるやうに說く人もあるが、シモンズやメレディスの藝術は決してかういふ民族的地方的の特異な色を帶びたものではなく、寧ろひろく英文學といふ全

體の上から見られるべき性質のものだと思ふ。

第三には蘇格蘭(スコットランド)に起つた新文學がある。それはエディンバラから出た『常磐』"The Evergreen" といふ機關雜誌を中心としたもので、この草紙は今から十八年ほど前に既に廢刊した。この雜誌は圖案挿畫等すべてに奇拔なケルト一流の意匠を凝らしたもの、この雜誌の寄書家のうちでケルト文藝復興の新運動のため忘れられない大切な人は、ファイオナ・マクラウドといふ女の名を用ゐた文士である。本當はヰリアム・シャアプといふ男子の小說家批評家であるが、詩には（時には小說の方にも）いつも此女名前を署して、文壇では全く男女別人であると思はれてゐた。今から十年ほど前に死んだ時、初めて同一人であつた事がわかつて人を驚かした。この人の作品は純粹なケルトの神祕思想を書いたもので、殊にその劇や短篇小說の類を見ると、全くマアテルリンクなどと同じ脈のものであることがよくわかる。若い時からロゼッティと親交があつて、その方のヲフアアル前派からの感化も加はつてゐる。

しかしこの蘇格蘭(スコットランド)の方で、特にケルトの鄉土藝術の特色を發揮してゐるのは、小說界に於て Kail Yard School と呼ばれてゐる一派の作品である。ケイル・ヤアドといふのは菜園のことで、ケイルといふ言葉は獨逸語の Kohl と同じくきやべつのやうな野菜をいふのだ。特に蘇格蘭(スコトランド)田園の農民生活を描き、地方色(ロオカル・カラア)の特に鮮明な小說であるから此名がある。先づ死んだ人では『イアン・マクラレン』

の作物を第一として、現存の大家ではバリイのものがこの一派の最も代表的なものである。かの佛蘭西のモオパッサンがノオマンディ地方の俗語を寫し、獨逸のハウプトマンがシュレエジエンの方言を用ゐ、ハアディがエセックス地方の方言を用ゐて、よく其地方特有の空氣と色調を出したのと同じく、この蘇格蘭(スコットランド)一派の小說家は極端にあの邊の田舍言葉を使つて小說を書くのだから、私どもが字引を繰つて見ても解らないやうな言葉がいくらもある。

以上三つのうちで、最も重要なのは、いふまでもなく愛蘭にあらはれたケルトの新文學であるから、それに就いて極めて簡單に述べよう。

四　愛蘭の新文學

愛蘭新派の文學で、先づ第一に批評論文などの方は割合に振はない。才人行く處として可ならざる無きイエイツのほかには、小說家のジョオヂ・ムウアや『ジョン・エグリントン』(本名はマギイ)などが草する評論の類に、時々文壇の視聽を聳てるものがあるばかりだ。情緒と空想とに、すぐれて美しい長所を有つてゐるケルトの人には、評論といふやうな事は餘り得意ではないのであらう。

第二に小說では、愛蘭は昔からふざけた滑稽趣味のものが可なりに多かつた。古いところでチャアルズ・リイヴァとかサミュエル・ラヴァの作に就いては、大抵の文學史の類に評說があるから、私が

今更玆に言ふ必要もなからう。ただ近頃の覺醒してからの愛蘭人の氣分はひどく緊張し興奮してゐるから、不眞面目な道化た種類の文學を喜ばない。その趣味はむしろ嚴肅な眞劍な悲劇的內觀の方面に向つてゐると言つて可からう。さてかういふ風に銳い自覺が起つて情熱が興奮狀態に在るとき、新しい美感と靈的向上の精神が目ざめたとき、この全生活の表現は、色々の文學の中で先づ抒情詩といふ形をとるのが最も自然である。散文でならば短篇小說か或は一幕物の類で、所謂そつがなくて無駄のない、引締つた形の文學でなければならぬ。だらだらと長たらしい、動もすればだれ氣味になりがちな長篇小說などは、到底この緊張した氣分にそぐはないからである。愛蘭の新文學が詩歌、殊に抒情詩の類に豐富なと共に、グレゴリイ夫人やイエイツなどの一幕物に秀拔の作品の多いのも、短篇小說に於てはゼイン・バアロオ女史やジョオヂ・ムウアを始めとして名家の甚だ多い事も、全く以上言ふやうな原因に基づくのであらう。

然し最近に至つてはこの緊張した氣分、引締つた內生活にも多少のゆとりが出來たのか、近頃は徐徐に筋(プロット)を展開して行くやうなのんびりした種類の文藝も續々と現はれるらしい。たとへばこのごろ愛蘭の代表作家として英國文壇の注目を集めてゐる、ジョオヂ・バアミンガム(本名はハネイといふ牧師)の長篇小說などはその一例で、此人の書く物は大抵愛蘭西海岸の寒村の風俗人情を書いたもので、やはりシングの劇などと同じ題材を用ゐたものだ。ただ此作者の『ハイアシンス』とか『不幸(バット)なる

時代』とか云ふ作は傑作には相違なからうが、あまりに宗教上政治上の問題が主になつてゐるため、愛蘭や英吉利の人に興味あるだけそれだけ、私ども日本人などには面白くない感じがある。

第三には飜譯事業、これはわかりにくい愛蘭の古語で書かれた物語の類を近代英語に移し、或は口碑傳說を蒐集して郷土の特色を明らかにしようとするものである。此事業はダグラス・ハイドが主になつて、自分で the Gaelic League といふ團體を組織し、愛蘭固有の言語文學を保存しようとしてゐる。

ハイドは詩人としても勿論不朽の名ある人ではあるが、別にその著『愛蘭文學史』にあらはれたやうな研究で偉大な功績を遺してゐる。なほ此方面の事業で特筆大書さるべきものには、グレゴリイ夫人が極めて詩的な幽婉な散文を以て、昔の愛蘭說話を書いた二卷の物語集がある。これはアアサア王傳說に於けるマロリイの如く、英文學のあらんかぎり不朽の名著である。即ち『ムウルテ國のクフウリン王物語』"Cuchulain of Muirthemne"（一九〇二年）と『神々と戰士』"Gods and Fighting Men" といふ二卷である。

第四は最も大切な詩歌、即ち愛蘭思想の特色たる神祕象徵風の抒情詩や、古い物語を材料にした敍事詩の類があるが、之を詳說するためには別に長論文を要するから今は全く省略することにした。殆ど二十人に近い新詩人の各に就いてその作品を評隲する事は、到底この雜誌の紙幅が許さない。そこ

で最後に第五として、劇に就いて一言してこの簡單な概説を終らう。

五　愛蘭文藝座

いろいろの文藝のうちでも劇は、他の抒情詩などのやうにただ少數の高級趣味の人々の鑑賞をのみ待つといふ譯には行かない。勢ひ多數の觀客といふ平俗階級を相手にする民衆藝術（デモクラティク・アアト）となるのは、劇そのものの性質上自然の結果だ。そのため動もすれば凡俗趣味に媚び、藝術の圏外に逸して、ひたすら入りの多きをのみ望む商賣本位（コマアシャリムズ）に墮して了ふ。殊に十九世紀の英國の演劇に至つては、全く藝術としては無價値なる、殆ど寄席藝人の遊戯に過ぎなかつたものだ。當時の英國は劇に於ては、何といふも獨逸や佛蘭西の大陸諸國に比して遙かに遜色があつた。これを革新して、よく世紀末の英國に近代藝術としての演劇を興したものは、愛蘭人としてはショオやワイルドがある。しかし劇壇のこの二大天才が盡くした所は、愛蘭といふ一地方、一郷土の藝術のためではなくて、寧ろ英國――否な歐洲全體の劇道のためであつた。純粹の郷土藝術としての愛蘭劇を起して、近代劇の史上に特筆大書すべき功績を遺したものは、詩人イエイツによつて創められたる愛蘭文藝座（アイーシユ・リテラリ・シアタア）である。

この新劇團の目的は、言ふまでもなく思想上藝術上に意味ある演劇を起し、特に愛蘭特有の氣分空氣（アトモスフィア）を出し、地方色（ロオカル・カラア）を鮮明ならしめんがために、愛蘭農民の純朴簡素の生活を寫し、口碑傳説の類を

材料として用ゐると共に、また特殊なる演出法を用ゐた。最初イエイツと共に此愛蘭文藝座を創立したものは、グレゴリイ夫人とエドワアド・マアティンであつたが、後にジョオヂ・ムウアも之に加はつて、千八百九十九年八日ダブリンに於て最初の興行をやつた。

一代の新氣運に促され、これに乘じて起つたこの劇團は、藝術上にもまた物質上にも忽ちにして偉大なる成功を收めた。この劇團は後二年にして一先づ解散し、改めて千九百〇三年に愛蘭國民劇協會(アイリシユ・ナシヨナル・シアタア・ソサイエテイ)として文藝座の事業を繼いだ。最初創立の際には資金わづかに四十磅で始めたこの劇團は、漸次發達して經濟上にも餘裕を生じ、倫敦は勿論、遠く米國にも興行して非常の喝采を博した。それといふのも一座の俳優、殊に女優としてサラ・オルグット、男優ではアアサア・シンクレアなどの眞の藝術に對する熱誠な努力がこの效果を致したのであつた。

愛蘭劇の特色は、要するにその自然な、沒技巧的な點にあるので、藝術上に『自然にかへれ』といふ言葉の通りを行かうとしたものだ。在來の劇があまりに洗錬された技巧に滿ちて、全く自然を逸してゐるのに反抗しようとしたのである。昔からの舞臺上の因襲や、或は筋や場面の變化によつてつくられた興味を一掃してしまつて、唯もうありの儘に『人生の斷片』を觀客の前に出さうとした。そして此自然を重んずると云ふ點に於ては、殆んど現代文明の風に觸れて居ない愛蘭の寒村僻地の所謂「鄕土」生活や、或はまた古來のケルト傳說の類を題材として用ゐた事が非常な成功であつた。そし

てこれらに交ふるに、マアテルリンクやストリンドベルヒなどの大陸劇を以てし、或は愛蘭作者エドワアド・マアティンやジョオヂ・ムウアやパアドリク・コラムなどの近代劇を上場して、ほぼ獨佛の自由劇場と同一の方法を以て演出したのであつた、（大正四年一月『文章世界』所載）

アナトオル・フランス

この一篇は、ブランデスの著『アナトオル・フランス傳』を紹介せんとて、數年前讀賣新聞に連載したものである。

一

近代の文學には徒らに眞率を名として、實は蕪雜醜陋の文字を聯ぬるもの多きに堪へぬ。が、獨り羅甸民族の詩文は確かに獨露の趣味と反して、今もなほ昔ながらに都人が高雅華麗の風を失つてゐない。現に英文學の如きは、その古今を通じてこれが感化に補育せられたる事最も著しきものである。同じ羅甸民族のなかでも常に西歐思想の急先鋒たる佛人には、すぐれた特性が多い。うちにも著しいのはその滑稽諷刺の機才である。今のアナトオル・フランス氏の如き、卽ち最もよく此一面を代表し得た人であらう。淵博の學殖に加ふるに縱橫の才を以てし、輕快にして而も精緻なる筆のあとには、一語一句の末にも無限の味がある、奧行がある。破顏微笑の裏には骨をも刺す銳い諷戒が潛んでゐる。その作に見えたる『アテイカの鹽』こそは眞に近代文藝の異彩だ。氏が一時歐洲の文壇に於て、大膽なる人生の批評家としてトルストイ伯と盛名を競うた所以は、必ずしも識見群を拔くが故のみで

はあるまい。

　此頃、氏の盛名は遥かにわが絶東の文壇にも喧傳せられ、又その著書四五種の英譯本が尠からず讀書界に歡迎せられると聞くのはまことに嬉しい。若し眞に此人の作品が味はれ、萬一わが文壇にも移植せらるるの日あらば、日本文學のため眞に賀すべきである。

　茲にハイネマン社の『現代文豪叢書』中の一卷として、フランス氏の評傳が出た。著者は評壇に名高きかのブランデス氏、沙翁もイブセンも十九世紀文學も、ひとたび此評家の筆に上されては、めざましい光彩を添へた觀があつたが、今度新に得た此一卷も、勿論こちたき主義論や空漠たる人生論の類では無く、巧みにフランス其人のおもかげを髣髴し來つて、作物の品隲にも深い用意が見られる。決して枯淡無味の俗文字ではない。自分が此頃讀んだ評論書のなかでは最も會心の書の一であつた。近頃盛んにフランス氏を持囃せる英國文壇も亦、新に丁抹の評家がこの明快暢達なる論述を得て之を歡迎する事であらう。今此一冊より何人にも興味ありと思はれる數節を採つて次に抄錄しよう。

『此女は四人の夫の寡婦であつた。恐ろしい女だ。戀といふ事の外は、何事にでも嫌疑をうけてゐる。――それなればこそ尊敬せられてもゐるのだ』。

　こんな事を書きさうな人は今の世にひとりしきや居ない。社會は婦人に向つて、愛情以外の事ならば何でも容赦するといふ事實を、冷評半分に言つたのだ。眞綿で首をしめる筆法だ。概して誰の作を

見ても、毎頁必ず其人でなければこんな事は書くまいと思はれるやうな文句が少くとも一つ位は出て來る。

フランス氏のやうに鋭い反語（アイロニイ）を使ふ人は稀だ。氏はいふ、

『シセロは政治上に於て、最も激烈な種類の温和派だ。』

富者が貧人のために作り、男子が女子のために作つた法律よりは、先づ平等といふ事の方がさきだ、などといふやかましい論が出る。すると下のやうな事を言ひさうな人は唯の一人しきや居まい。『橋の下で眠つたり、街で食を乞うたり、麺麭を盗む事などは、貧者にも富者にも併せて之を禁ずる。これが法律の立派な平等である。』

この唯の一人こそはアナトオル・フランス氏である。その文章で目ざましい特色は反語（アイロニイ）だが、どう見てもこれはルナンの衣鉢をついだものだ。併し同じ反語（アイロニイ）でも兩者の種類は非常に異なつてゐる。ルナンの方は歴史家としても批評家としても、常におのれ自ら語つてゐる。たとひ彼が哲學的戯曲のうちに假作の人物の口をかりても、ルナン其人が直接に讀者の目につく。ところがフランス氏の反語（アイロニイ）に至つては、全くナイイヴな性質の裏に隠れて見えない。ルナンのはほんの假裝だが、フランス氏に至つては全く自己といふ者を變じて仕舞ふ。時には自己と正反對の見地からすらも書く、そしてよく思ふところを吾人に傳へるのだ。此點は全く他に類例を見ない。

氏が作中の性格で最も生氣躍動せるものでも、或はまた氏の文章でも、みんなこのナイイヴだといふ點に著しい特色がある。素朴で無邪氣で、皮肉なところに非常な面白味がある。そしてその裏面には極めて鋭い諷刺が藏めてある。たとへばその作『ベルジュレエ』のなかに出て來るリケエといふ飼犬などは最も巧く描き出されたものだが、その一節にこの犬が自分の『思想』を述べたところがある。いかにも巧く犬の無邪氣さと簡潔な反語（アイロニイ）とを結合したものだ。いまその中二三を引用する。

『人でも動物でも石でも、近寄るに從つて大きくなる。そして全く接するに及んで非常に巨大なものになる。が吾輩はさうではない。どこに居ても同じ大きさだ。』

『吾輩は喋舌りたい時に喋舌る。吾輩の主人の口からも意味のあるらしい音が出る。併しその意味は吾輩の聲で言ひあらはすのよりは不明瞭だ。吾輩の聲で發するものは皆何かの意味があるが、主人の口からは多くわけの分らぬ音響が出る。』

『街には馬が曳いて行く車がある。恐るべき奴だ。又ぽツぽとえらい音をさせて獨りで動く車がある。這奴はまた惡性極まる奴だ。』

『それを爲（し）たから或者が打たれると云ふやうな行爲は惡い行爲だ。そのために可愛がられ食物でも貰へるやうな行爲ならば、善良な行爲だ。』

こんな調子でフランス氏の反語（アイロニイ）は、常に他の何ものかに蔽はれてその裏面に潛んでゐる。

作家としてフランス氏は、人を動かす二大要素を具へてゐる。第一は實直な事である。ために作中の性格が操人形(あやつり)風の造り物にならず、人物が皆作者を離れ、作者に煩はされずに勝手次第に躍動してゐる。そしてナイイヴなところがあるため、それが極めて自然に出來るのだ。第二の要素はそのアアトに在る。フランス氏が呼んで佛國作家の三大性質だと言つてゐる點は、氏自らが之を具へてゐる。即ち先づ第一に明亮、第二に明亮、第三に、そして最後にまた明亮。然しこれは氏のアアトに於ける一の根本的性質に過ぎない。また氏の筆致には常に控へ目なところがある。小說家としてのゾラを氏が厭うたのも、畢竟この適度といふ事を全く缺いた點にあつた。

　フランス氏は寧ろ情熱を缺いた人だ。作中には隨分肉感的なところはあつても、それは寧ろ知的な分子に壓せられてゐる氣味がある。大體から見て哲學的傾向の人だ。感情よりは觀念の方が勝つてゐるのだから、あらゆる事物、――單に人事のみならず、自然そのものに對しても批評を下すのだ。その一例として、氏が自然を攻擊した面白い例がある。それはかうだ。自然は『青春』といふものを餘り早く人間に與へて仕舞ふ。だからそれから以後の生は、此『青春』といふもの無くして送らねばならぬ。これが甚だ不都合な次第で、『青春』はまさに人生の最高極致として最後に來るべき筈のものだ。恰も蟲が幼蟲や蛹の時代を經て後、はじめて胡蝶の美しい時代に入ると同じだ。そしてこれが發達の最高最終のところだから、それから直ぐに死といふものの來るのが當然な筈だ。實際かくいふフ

ランス氏其人の生涯がまた此通りで、年老いて後、勇猛の戰士として現はれるに及んで機鋒益々鋭く、光彩更に燦たるの觀があるのも面白い。

二

フランス氏が生れたのは一八四四年だから、今では隨分老人の方だが、その名高くなつたのは比較的新しい事だ。翰林院（アカデミ）に列せられたのも、今から漸く十三年以前だ。

若い時から文學、歴史を論じ、詩作もやつた。かの『黄金詩集（レ・ポエム・ドレ）』（一八七三）などは、明らかに高蹈派（パルナシアン）の詩風を帶びたものである。併し此方はあまり得意でもなかつたので、以後は全く散文の方に赴いた。今日まで小説だけでも約三十卷の作がある。しかしかの『シルヹストル・ボナアル』の物語で、初めて世人の注目を惹いたのが三十七歳の折だ。

氏が名を成す事の晩かつたのは、第一その完全な個性の發展が遲かつたからだ。併し他にも理由がある。今はすでに歿したモオパッサン、ドオデエ、ゾラなどの小説家が、當時なほ文壇に覇たるの地位を占めてゐたのも原因だ。のみならず、またブルゼエやヒュイスマンスが宗教の方に、ジュウル・ルメイトルが國家主義に、エルヸュが劇界に未だ赴いてゐない頃であつた。殊にまた最も大切な原因は、文章に於て實に氏の先進者ともいふべき懷疑家エルネスト・ルナンが、其頃まだ存生中であつた

からだ。
ドオデエ、ゾラ、モオパッサン、ルナン、エルヸュ、ブルゼエ、ヒュイスマンス、皆揃ひも揃つた田舎者だ。プロヴンスだの、ノルマンディだの、アミアンだのの生れだが、フランス氏に至つては實に生粋（きつすい）の巴里ッ子だ。プロヴンス、ノルマンディ生れの人などに比して蠻的な硬いところの無いのは、さすがに巴里生れだけである。

巴里で生れ巴里で育つた人だ。羅甸（カルテイエ、ラタン）街の家ごとに配達（くば）つてあるく牛乳屋も石炭屋も子供心に見てゐたのだ。巴里の職人や小さい店番をよく知つてゐた。繪草紙屋の店さきで我を忘れて立つてゐた事もある。殊にかのセイス河畔の古本屋で書物をいぢくつて、ここに氏は最初の教育を受けたのだ。否な氏自らも本屋の息子である。書物のなかに生れ書物のなかで育つた人だからゆかしい。僕等が、氏の作中に屢見える愛書家の事を讀んで、さて作者の幼時を想ふと、興趣更に一段の深さを覺える。

今日の佛人中、恐らくフランス氏位に佛人的な人は他にあるまい。中世以後傳統ある佛國の文化は眞に此文豪の一身に體現せられてゐる。大膽にもその名に『フランス』の國名を取つたのは無理も無い。話は違ふが、ロゼッティの名に冠した『ダンテ』の文字と同じく、想へば共に深い意味がある（氏の本名はアナトオル・ティボオである）。

セイヌ河畔の街こそは凡ての知の人、趣味の人が第二の故郷である、と氏は言つた。また

『自分は此河畔に育つた。ここには古い書物が景色の一部をなして居る。げにわれを喜ばすものはセイヌであつた。……その河景色、晝は流に空を映じ舟を運び、夜には寶玉を飾り燦たる花もて粧ふ。』

氏は昔も今も愛書家である。佛國の他の作家とは、文藝の素養に於て全く趣を異にしてゐるのが第一の特徴だ。獨逸民族を除いての歐洲の文化に博大深遠の造詣がある。英語も知らねば獨逸語も知らない。これがルナンなどとよほど異なつた點で、ルナンは東邦の文献學に精しく、希伯來の語に通じ、獨逸の科學で頭を養つた人だが、フランス氏は羅甸希臘の古文に造詣深く、また能く中世の羅甸伊太利文學に通じてゐる。徹頭徹尾これ純粹の羅甸趣味の人だ。

『若し此方面の研究なくんば佛國天才の美に失はれるであらう。吾等は羅甸人種である。牝の狼の乳こそは吾等が血統の要部である。』

と氏は喝破した（羅馬の祖先ロミュラスが、パラティンの丘の麓で狼の乳で育つた故事を言つたのだ）。

作家としてまた人物として、氏は近代といふものに重きを置いてゐない。或日のこと、氏は客に自分の書物を見せてゐた。意外にもその書物の數が少く、中に近刊の書がまるで無いのを客は不思議に思つた。そこで氏は

『私は新しい本は持ちません。寄贈をうけたのも手許には無いんです。皆田舍に居る友人に送つて

仕舞ふんです。』

この田舍の友人とは恐らく例の佛人一流の婉曲語法で、實はお馴染のセイヌ河畔の古本屋へ遣つたのだらう。

『しかし貴下(あなた)は新刊書を知らうとはなさらんのですか。』

と客が訊く。

『現今(いま)の人のですか。なに今の人の謂ふ位の事なら、私もちやんと知つてゐますよ。マンデスを讀むよりも、ペトロオニアスからの方が得るところは多いのです。』

だから、フランス氏が『ルタン』新聞の文藝欄に數年の間、新刊批評の筆を執つてゐたのも、半ば氣が進まなかつたのだ。然し此評論を集めて今は四卷の書物になつてゐるのを繙くと、非常に面白い。この書中には、終始一貫して下のやうな主張が見られる。卽ち純粹な非個人的(インペーソナル)な批評は到底不可能の事だ、評家がつまり自己を語るに過ぎない。　　従つてホレスや沙翁の事を語るとすれば、これはホレス、沙翁に關して評家が自己を語つてゐるに過ぎないといふ。だから評家としてのフランス氏は常におのが個人的印象を書いてゐる。但し自分の作がよくうれるやうになつて以來、氏は全く批評の筆を棄てて仕舞つた。

『私の家には新刊書はありません。』

とフランス氏が答へたその友人は、微笑を湛へて更に訊いた。
『では、あなた御自身の作もお手許には無いのですか。』
『はい、自分で建てたものは――たとひそれが宮殿だと想像しても――自分にはよく分つてゐますから、見る氣がしないいんです。自分の作を手許に置くのは大嫌ひで、どうしてそれを見るもんですか。』
『重複を避けるためにですか。』
『いや私はいつも自己を繰返してゐるんです。』
いかにもこれは實際だ。フランス氏は自分の作中に、同じ思想を殆ど同じ言葉で何度でも書く。時としては一冊の書中にすら、前と後とに同じ事を平氣で繰返してゐる。
『赤き百合(レ・リイス・ルウジュ)』のなかに出て來る彫刻家は、あきらかに作者フランス其人を描いたのだ。
右の話と下に掲げる一節とを比較すれば、すぐそれがわかる。
『あなたの作は、彫刻でも凸彫(うきぼり)でも、まだ一つも拜見しません。』
とマダム・マルタン・ベレエムがいふ。
『自作を並べ立ててその中で暮らすのを愉快だ、とあなたは思ひますかね。自作は餘りよく知つてゐるんで、……見るのも五月蠅(うるさ)い位ですよ。』

ドゥ・シャルトルがフランス氏の假面に過ぎない事は、下の文句でも知られる。

『私は悪い像を幾個か造つて見たが、自分は決して彫刻家では無い——寧ろ哲學者風だ。』

三

氏の作には前後二期ある。その間には非常の相異があるため、殆ど別人たる二人のフランス氏があるかと思はれる位だ。

第一期に於ける氏は氣品の高い諷刺家だ、白眼にして世を睥睨すると云つた風だ。自己を群衆よりは一段高い地位に置いてその努力葛藤を觀、靜かに微笑を洩らしてゐたものだ。それが第二期に入つては直ちに戰鬪者として現はれた。單に自ら一個の黨派に與するに至つたばかりでなく、今までは嘲つてゐた事物そのものに對して自信を確說する。民衆の健全な本性、多數者の意義、進歩の增して行く實相、また以前には思想家として斥けてゐた民主說、社會主義、これらに對して氏は自己の確信を發表するに至つた。

氏はその前半生に於て常に多數民衆を輕侮嘲笑するの態度であつた。自己が既に民主々義者たるを公にして後すらも、なほ下のやうな事を書いた。ペルジュレエ——假に氏が此人物の口を藉りて言ふのだ——がその犬に向つて、

『お前は明日巴里へ行くだらう。そこは實に立派な高尙い都會だ。が、眞實その高尙いといふのも住民が悉く然うだといふのでは無い。單に市民の少數者にのみ限られた事だ。併し一つの市府とか全國民とかいふのは、畢竟他の人々よりも有力な正當な考へ方をする少數の個人に存するのだ。』

それからまた、

『國民を高くするものは、街上に大聲疾呼する愚かな叫びではなくして、屋根裏の室で出來た沈默の思想である。それがいつかには世界を動かす。』

とも言つてゐる。たとひ三千六百萬の聲が擧つて之に唱和しようとも、愚かなる叫びは依然として愚かである。眞理には不可抗力がある。たとひただ一人によつて觀破せられ唱道せられようとも、またたとひ幾百萬人が聯合し協和しようとも、眞理は遂に終局に於て世界の支配者であると氏は信じてゐた。

氏は決して樂天觀の人ではない。佛蘭西に於ても、また歐羅巴全體に於ても、まのあたり墮落し沈淪して主義を棄て去る者多きを見、不斷の進歩といふやうな事は信じ難くなつたのだ。一般の人が無頓着無感覺になつて、いかに鋭い刺衝を與へても、彼等を考察に導き、況やまた活動に導くに足らないやうな時代を、氏に通つて來たのである。人々の精神が不正を求めて飢ゑてゐる時には、敎化の淸

新な飲料を之に與へても何の效も無い。これを氏が作中の語もて言へば、『渴してゐない驢馬をして飲ましめんと欲する、また難いかな。』である。

さりとてまたフランス氏は悲觀の人でも無いのだ。世界は必ずしも武裝したる蠻勇者流の獨壇ではない。孤立し、身に寸鐵を帶びずして起つ眞理は何ものよりも力强い。暴力が之に反抗しようとも、それは甲斐なきわざだ。强き道理と貴き思想と、この二者の相合するところ天下また恐るべき無しである。例の作中人物に言はすれば、

『どの時代に於ても哲人の見は、活動の人を喚起し來つて遂に之を實現せしめる。吾人の思想が未來を造り出すのだ。爲政者たる者は吾人の遺した方策に從つて仕事をするのだ。』

いかにも未來といふものは隱れたものだが、吾人はフランス氏の言ふ如く、ゴブラン織を造る機織が、その織り出さうとする模樣を全く見ずして織つてゐると同じやうにやらねばならぬ。況やまた未來と云ふものは全く隱れてゐるものだとは限らないでは無いか。

以上二つの方面から述べたやうな見解を抱く人は、急進派としてもまた保守派としても立派に立ち得る筈だ。恰も北歐のイブセンが或時期に於ける立場と同樣だ。現にフランス氏は保守黨に加盟してゐた。そして後には同志となつた人人をも、以前は酷く攻擊してゐたものだ。ゾラなどもその一人

で、初は趣味の點から大に排斥してゐたが後には共に提携するに至つた。現にドレイフュス大尉事件の折などは、氏はゾラの味方であつた。

果然、氏は突如としてその態度を改め、遂に戰士として現はれた。今や道德の危機に際して、佛蘭西全體の文化及び正義の保護者たる佛蘭西在來の地位が危きに瀕した、と氏の眼中に映じた事が確かにその一原因だ。しかし若しも外部から之を慫慂する者が無かつたらば、氏は竟に動かなかつたかも知れぬ。それは多年氏と無二の親交あつた一婦人の感化によるのだ。

氏の作には歴史的の物語が多いが、さすがは古典に造詣深き人だけあつて、その寫してゐる時代の精神を能く呑み込んで書いたものだ。恰も其時代の人が話したり、考へたりすると同じやうに描いてゐる。これは特に『クリオ』と題した物語集などに著しい。この中にはホオマア、ダンテ、シイザア、那破翁(ナポレオン)といつたやうな史上の大人物が澤山出てゐるが、明らかにそれと分るやうに書いたのはホオマアと那破翁とだけだ。外のは大抵かすかな影繪(シルエット)のやうに出來てゐる。いづれも作者が素直(すなほ)に其時代や國の信仰思想などをよく味はつた上で、それらと現代精神との對照を強く現はしたところに特色がある。

例へば『ファリナタ』と題した對話の物語などにも、古代と今人との物の考へ方を比較して、その見解の全く正反對なところを見た點に趣がある。言ふまでもなくファリナタはダンテの『神曲』地獄

界にある、かの興味深き人物を取つたのだが、戰爭に關するその說が最も面白い。即ち今日ならば或國の人が外國の軍隊と戰ふのは甚だ立派な事で、內亂なぞは決して褒めた話では無い。ところがフアリナタの說は正反對で、かう言つてゐる。

『吾等フロレンス人にとつては、爭を終まで仲間同志の間でやつて仕舞つた方が善かつたらう。內亂こそは實に立派なことで、外人をこの中へ卷き込むやうな事は、出來得べくんば避くべき筈なのだが、……他國との戰爭に至つては決してさうでは無い。或は國境の防禦擴張とか或は商業發展のためとかで、外戰も時として有用でもあり又必要でもあらう。併し先づ概して言へば、こんな卑しい外戰などをやつては餘り利益も得られず、さりとて名譽でも無い。聰明な人ならば外戰には雇兵を使ひ、率ゐるに經驗に富んだ將帥を以てする。そこでよく小勢を以て偉い事がやれるのだ。』

今と昔との此對照は、無論ダンテの作などで全く見られない興味ある點だ。

巴里人の近代生活を寫した短篇集『クランクビイユ』(一九〇三年)は、確かに氏が傑作の一つだ。此書の表題となつてゐる卷頭の一篇は、單純で而もよく人の肺肝を突くやうな銳い筆法で行つたものだ。

街を賣りあるく靑物屋の老人、これは元來謹直な男だが、非常に繁華な通の或店先で、荷車をとどめてゐた。いま賣つた葱の代價を貰ふのを待つてゐるのである。そこへ巡査が來て早く行けといふ。

老人は小聲で『お錢を受取らうと思つて』といふが、巡査はそれにお構ひなく、矢も楯もたまらぬやうに嚴命を繰返す。そしてクランクビイユを『法權抗拒』だと言つて捕縛した揚句には、官吏侮辱といふ譯で法官の前に引きずり出した。勿論老人には更に覺えの無い事だ。法官は可憐な此老人の言よりも寧ろ巡査の斷言に信をおいた。青物屋の老爺はかくて遂に拘留二週間、罰金五十フランといふ宣告を受けた。

さて老人が監獄から出て見ると、得意先は皆他(ほか)の商人(もの)に取られてしまひ、それにまた前科者といふので誰も相手にしなくなつた。益々貧窮に陷つたその揚句の果、遂に一策を案じた。卽ち前に不當にも處罰を受けたあの通りの文句を今一度巡査に吹きかけて、雨露を凌ぐ場所を得ようとする。ところが巡査は降りしきる雨のなかに街燈の柱に凭れながら、今度はいくら侮辱を受けても平然として全然相手にして吳れない。可憐の老人もかくて竟に百計盡くるに至つたといふ筋だ。話は簡單だが、現代社會の缺陷を諷して痛ましく人の心を動かすところに妙味がある。

氏に科學としての歷史に信を措かない人で、その說はかうだ。歷史は過去の事件を書き表はしたものである。併し事件とは何だ。著しい事實をいふのだ。さらば或事實が著しきと然らざるとは果して誰が決める。それは歷史家が勝手次第に自分の考で決めたんだ。それからまた一の事實は非常に複雜なる集合性(コムポジット)のものだ。歷史家は果してその集合的なものを洩れなくかくかといふに、それは無論出來

ない相談だ。從つてそれを摘み剪り手入れした上で吾々に示すのである。更にまた歷史的事實は、全く世に知られない種々の事實から出た最後の結果である。その連鎖を歷史家が何うして表はす事が出來よう。

說の當否は暫く措き、氏は此論法で同じ懷疑說を三度までその著書に述べた。過去を知らうとするのは到底不可能だ。讀む必要ある物を悉く讀まうとしても駄目だ。氏が此論を次の寓話に託したのが二度までも出てゐる。

若き王子ゼミイルが父王の後を繼いで波斯の王位に卽いた。さて國中の學者を集めていふ。

『王者たる者もし過去の歷史に通ぜば過つ事少からん、とはわが師の敎だ。卿等わがために世界史を作り、その完備を期せよ。』

と。それから二十年を經て學者は再び王の前にあらはれ、十二頭の駱駝の一隊を率ゐて一頭に五百卷宛を積み、すべて六千卷の書を王に獻じた。國政に忙殺せられてゐる王は、深く學者の勞を謝して後いふには、

『朕は旣に中年である。たとひ老ゆるまで生きようともこの浩瀚な歷史は讀めぬ。之を短縮せよ。』

と命じた。それからまたもや精勵二十年、學者は之を千五百卷に約めて王に捧げ、要點は毫も省いて無いといふ。王は

『さうであらうが朕今は既に老いた。更に之を縮め、出來得るだけ早く仕上げよ。』
と命じた。今度は十年を經てから、學者は一頭の若き象に僅か五百卷を積んで持つて來た。王は
『まだ不十分だ。朕の餘命は幾何も無い。更に縮めよ。』
といふ。また五年經つた。今度は學者が杖にすがつて、一匹の驢馬に大きな書物一冊を載せて持つて來た。王は此時既に臨終の床に在す、と或官人が告げる。王の言はるるに
『朕はいま逝く、遂に人間の歴史を知らずして。』
と。老いたる學者の答、
『陛下よ、否な、臣これを約めて三語となさん。曰く、生と苦と滅と。』
フランス氏が研究家としての偉大なる天賦を有しながら、歴史家たらずして小説家となつた所以は即ちここに在る。

四

以上いふ歴史に對する疑は、よく氏の懷疑的性質を代表したものだ。科學宗教政治道德等あらゆる方面に於て、氏は懷疑の人である。これは『エピキュラスの園』『わが友の書』などに於て、明らかに自分の口からも告白してゐるのみならず、他に作中人物の背後に隱れて此懷疑說を吐いたのは甚だ多い。

今から殆ど四年前即ち一九〇四年十一月の或夜、巴里のトロカデロで氏は朗讀演説をやつた。此時ブランデス氏も聽衆の一人で、當夜の印象を趣ある筆で書いてゐる。フランス氏演説の一節に極東問題を論じたところがある。例の皮肉な諷刺で黃禍論を說いたあたりは、我が國の讀者に最も興味あらうと思ふから、そこだけを抄錄する。氏は歐洲と東亞との關係を論じて下のやうに言つた。

『支那に何か騷動が起るごとに歐洲列國は軍隊を派遣する。一國が獨立でやる事もあれば、數ヶ國聯合の場合もある。そしてその軍隊は竊盜暴行殺戮放火などの手段を用ゐて秩序を恢復し、砲火を以て國を鎭めるのだ。

『武力なき支那人は防禦はしない、また爲たところで駄目だ、易々と殺されて仕舞ふだけだ。彼等は丁寧で禮に厚い、併し吾々は彼等が歐洲人に對する好意を缺くと言つて非難する。即ち彼等に對する吾々の苦情は、恰もデュセイリュ氏が大猿に對する苦情も同樣である。

『デュセイリュ氏が牝の大猿を擊つた。擊たれた猿は胸にしかと子猿を抱きしめて死んで仕舞つた。そこで子猿だけを無理に母の腕から離して、それを歐洲で賣るため亞弗利加を通つて遙々と引つぱつて來たが、これが即ち正當な苦情の出るもとであつた。猿は毫も押付かない。押付いて生きんよりは寧ろ餓死した方がよいのである。餌も喰はないのだ。そこで彼はかういつた。性質の惡い奴だから何うも手に合はぬ。

『此人が若し猿に對してかかる苦情が言へるものなら、吾々も支那人に對して苦情を言つてよからう。』

フランス氏は進んで歐洲に對する黄禍を論じ、これは亞細亞にとつての白禍とは比較にならぬと喝破した。黄色人は巴里、倫敦、聖彼得堡などへ未だ曾て佛教の宣教師は送らない。黄人の軍隊が佛國に上陸して治外法權の地を要求したこともない。また東郷大將が艦隊を率ゐて我が國に來り、日佛貿易を改善せんためブレスト軍港を砲撃したことも無いんだ。優れたる文明と道德とを名としてヹルサイユに火を放ち、或はルウヴルより繪畫を奪ひ、磁器をエリゼイ王宮に取つて、之を東京に運び去つたことも更に無いのだ。

フランス氏はこの分りやすくて而も反語的な論調で、頻りに聽衆の心を奪つた。演說を聞いてゐるのも勿論面白いが、聽衆が之を耳にして心大に動き、熱心なる贊同を以て傾聽するところを見るのも亦甚だ興味があつた。

氏の言がかくまでも深く聽衆を動かすのは、その辭句のいかにも巧妙なためのみでは無い、フランス其人の人格の力である。作家の背後には『人』がある。大なる作家の背後には勇猛な『人』がある。氏の講演も文章も、すべて最もよく此事實を示したものである。

蘆笛（散文詩）

—マルセル・シュヲブ作—

Sicilia（シシリア）の沃野、海より程遠からぬところ、美しき巴旦杏（はだんきやう）の林ありて、そこに年經たる黑き石の床あり。むかし牧人はいつもここに座を占めたり。

こまかき燈心草にて造れる蟬の籠と、魚を入るるが常なる籐の籠とは、眞近なる樹の枝に懸りぬ。

石の床に眠れる女、足を紐にて纏ひ、頭は尖りたる赤き藻の帽に隱したるが、歸り來らざる牧人を獨り待ちぬわびぬ。

牧人はかつて手に白蠟を塗りて、しめりがちなる叢（くさむら）に、蘆を摘まんとて出で行きしなり。かれは蘆もて七つの笛を造らんと欲しぬ、パァンの神が敎へし如くに。

時七つを過ぎて、先づ第一の調は、いま眠れる女の眺めゐたりし、黑き石の床に近く震ひ起れり。その響は近く淸く、銀（しろがね）のごとくなりき。

更にまた七つの時を經ぬ。日影うららかなる野を過ぎて、第二の調はひびきぬ。樂しき黃金のひびき。

時七つを經るごとに、けふ眠れる女は、新しき笛の調、一つづつを聞くことを得たり。

さて第三の調は遠く、また鏘然たる鐵の響のごとくに荒々しかりき。

第四のは、更になほ遠く深くひびきて、青銅の音にも似たりき。

第五のは切れぎれの斷音にして、錫の器の音。

されど第六のは、鈍りたる、忍びねの冴えざるひびき、さながら網につけたる鉛の錘の打ち合ふがごとし。

第七の調をこそ、けふ眠れる女は待てるなれ。されどそは遂に響かず。

日は白き霧もて、夕闇は薄墨いろの霧もて、また夜は紫紺の霧もて、巴旦杏の林をつつみぬ。

恐らく牧人は、光明の海の濱邊、暮れ行く夜と歳とのかげに、第七の調を待てるならん。

牧人を待てる女は、また黑き石の床に坐して、眠にしづみぬ。

——Marcel Schwob の散文詩集 'Mimes' のうち XI Les six notes de la flûte の譯

平和の勝利

一

俗衆が『流行』と名づける一切のものに超然たらんとする私も、人なみ今度の流行感冒には襲られた。襲られたどころか四十度の高熱に悩まされて、十日餘りを床上に呻いたのは我ながら心外に思ふ。そのあひだ記けなかつた日記帳を見ると、幾頁かが餘白として殘つてゐる。床を上げた日に平和の報を聞いて餘りの嬉しさに、感想の二三をその餘白に書きつけようとて筆を執る。まだ腰が痛くて机に凭ることもならず、苦しい腹這ひの儘で。

久しく暗澹たる戰雲に鎖された歐洲の一角に、突如として一道の光明が認められてから間もなく、そこには世界の人々が待ちに待つた女神『平和』の美しき姿が現はれた。倫敦はダウニングの街頭に喜び狂へる群集ありと聞けば、我も提燈行列とやらに狂奔して見たくなる。光明が暗黑を、正義が私慾を、秩序が擾亂を、自由が專制を、心地よくも拂ひのけて現はれた此『平和』の勝利を見て、誰か狂喜しない者があらうか。

株式相場を人生の最大事と心得、領土擴張、利權獲得を民族生活の至上の幸福と心得てゐる者がある。彼等は世界戰亂といふ文明の破壞、人間屠殺の慘劇をよそごとに見るは愚か、これはまた『何んて間(ま)が好いんでしよ』、機に乘じて私腹を肥すはまさに此時ぞと勇み立つた。そのくせ正當に先進國の商工業と競爭する實力もなければ勇氣もなく、戰前には氣息奄々たる連中であつた。平和は成るべく遲いが好い、もう二三年も戰爭が長びけば配當もうんと殖えよう、この上日本はまだまだ金が儲かるものを。さういふ事を言つて、此平和の吉報に眉を顰めてゐる火事場泥棒が、どこか其邊に居やしないだらうか。血を見て微笑(ほゝゑ)むは惡魔のこころ。彼等は人類共同の敵である。

今は何事にも速力第一(スピイド・ファアスト)の世の中だ。戰爭もさうだ。昔の鐵砲で十發打つ間に、今の機關銃では百發千發を打つ。從つて同じだけの時間に與へる戰爭の慘害は昔のそれに十倍百倍してゐる。僅か四年間や五年間の戰といへば、昔から歷史上に前例はざらにある。然し現代の戰爭の破壞力が敏速であり猛烈であるだけに、今の四年五年の戰は昔の五十年百年の戰よりも更に恐るべき慘害を人類に與へる。殊にその規模が大きくて、世界のあらゆる强國を災禍の渦中に捲き込んだ點から言つても、この長い戰亂は人間の歷史あつて以來の最も悲慘な、最も不吉な、そしてまた最も馬鹿げた現象であつた。

さういふ戰が今終つた。否な少くとも終結に近い所まで漕ぎ着けた。あれだけの大きな犧牲を拂ひ

ながら、今もなほ永久の平和による人間生活の根本改造に氣附かないほど、人類は愚かな動物ではない筈である。若し愚かな者がありとすれば、私利私慾に目が眩んでゐるからである。此戰によつて內生活、思想生活に與へられた貴き教訓に氣附かずにゐるからだ。

獨帝の蒙塵は一篇の悲劇の大團圓（カタストロフィ）を見るやうで面白い。自己の滿々たる野心に驅られて中歐大帝國の建設を夢想して、事遂に成らず。最初先づ自分が牢屋に叩き込んだ社會黨首領リイプクネヒトを、やがて四圍の狀況に迫られて釋放し、今度は逆に其リイプクネヒトから退位を要求せられたあの前後の經緯（いきさつ）なぞは、派手やかなスコットの筆にでも寫されたならば、さぞ面白い歷史小說にならう。同じやうな事でも、露西亞のロマノフ王家の末路はよほど趣を異にしてゐた。皇帝ニコラスの境遇（シチユエイション）や態度が全然受動的であり、その性格が詩人的であつたために、陰森凄慘の氣全幅を蔽うて、主人公が沒落まで行く間の事件の進行（ムウヴメント）にも戲曲的のやまが少しもなかつた。之を描くには、どうしても矢張り露西亞近代作家の寫實的な筆に待たねばならぬやうな氣がする。

二

獨帝最後の悲運は決して彼の力量が足らなかつたからではない。また必ずしも獨逸の國力が世界を敵とするに不十分であつたからとのみは言へない。如何なる英傑の力を以てしても如何ともし難き時

代精神の力が然らしめたのだ。いつも政治外交經濟などの表面的事實の背後に動いてゐる澎湃たる思潮の大勢が然らしめたのだ。

一將功成つて萬骨枯る。戰場に花やかな功名を樹てんとする一人の英雄の前に、千人萬人が跪いて我が身を捧げたのは昔の浪漫的(ロマンティク)時代の事であつた。前世紀の偶像破壞、幻影消滅の自然主義時代以後には、英雄といふものの存在の眞意義が根本から無くなつてゐる。個人銘々の自我の覺醒に伴うて、昔の人の心にあつた英雄崇拜の殘夢は拭ふが如くにかき消された。今は一人の英雄の事業を千人萬人の凡人が爲てゐる時代である。民本主義の優勢は他の一面から言へば、十萬百萬の群小衆愚の方が、一人の英雄よりも遙かに力强くなつた事を意味するものである。たとひ成吉思汗(ジンギスカン)やシイザアやシャルレマンや那翁(ナポレオン)ほどの男でも、若し現代の如き時代思潮の前に立たしめたならば、恐らくあの半分の仕事さへも出來なかつただらう。之に反して若し獨帝をして、たとひ中世封建の世ではなくとも、せめては前世紀浪漫主義(ロマンティシズム)の勃興時代たる那翁(ナポレオン)の頃に出でしめたならば、一度は歐洲大陸だけを席卷するか、或はその宿望であつたバグダッド伯林連結鐵道の半分位は實現し得たであらうに。『嗚呼もし世が世ならば』、これが恐らく英雄王維廉(ヰルヘルム)二世の最後の嘆きの聲ではなからうか。

獨帝はその祖父維廉(ヰルヘルム)一世が帝業を拓いた頃の、まだ浪漫主義(ロマンティシズム)全盛期を距る遠からざる時代を歩みてゐたのが、彼のためには千慮の一失であつた。主戰派の頭目たる皇太子も亦極端なる那翁崇拜者で

あつたといふではないか。その腦裏にこびり附いてゐた唯この一つの時代錯誤（アナクロニズム）のために、彼等は遂に今日の悲境に陷つた。聰明なりと云ふ英雄王も、案外に目の見えない氣の毒なものである。

歩（ふ）が金に化けたのを成金と云ふならば、獨帝のホオエンツォレルン王家の如きは、大名が成り上がつた『成王』と言ふべきものだ。もとは高が知れたブランデンブルクの一選擧侯ではないか。そして此度の悲運も身から出た錆だと思へばそれまでだ。そんなものが亡びたとて覆（ひつくりかへ）つたとて別に驚くにも足らないが、墺多利のハアプスブルク王家の末路に至つては、あれは何としたことだ。苟も神聖（ホオリ）羅馬帝國（ロマン・エムパイア）の正系を傳へて、歐洲の君主のうち一番系圖の立派であつた王家のあの憐な最後には、さすがに人の涙を誘ふに足るものがある。

ロマノフ王家といひ、ハアプスブルク王家といひ、またホオエンツォレルン王家といひ、それらの悲慘な末路を見るにつけても、わが同盟國たる英國のヰンザア王家が依然として民本主義の上に立つて、歐洲に於ける最も光輝ある王統であらせられる事はアングロ・サクソン民族の、今もなほ昔の如くなる隆運と光榮とを象徴するもののやうで、如何にも貴い。

平和は嬉しい。しかしこれが若し萬が一にも中歐側の勝利に歸したか、或は五分五分の引分けにでもなつて出來た平和であつたならば奈何だらう。その結果が思想上に與ふる惡影響から見て、人類の不幸は戰爭そのものよりもなほ一層甚だしかつたかも知れぬ。今更事新しく言ふまでもなく、今度の

戰亂は思想上から見れば、人類進歩の前に横たはれる危險思想と目すべき專制主義、利己的國家主義、武力萬能思想に對して、民本主義、四海同胞主義、平和思想を旗幟とするものの戰であつた。若しこれが獨逸側の勝利に歸して居たならば、世界の人心は猶暫らくはかの保守頑冥の舊思想危險思想に執着して、武力を信じ侵略主義を謳歌する者が多かつたであらう。現に日本なぞには獨軍の戰場に於ける優勢を讃嘆して、獨逸は偉い、どうしても國として立つにはあの態度に限る、敵ながらも感心だなぞと馬鹿な事を言つてゐた普魯西文明心醉の徒があつたではないか。そして英米系統の健全なる思想を目して、あべこべに之を危險思想視してゐた者さへ多かつたのは事實ではないか。

然しまあ好かつた。聯合側の勝利によつて世界は文明の逆轉退歩から免れ得たのだ。かくてこそ世界の人類はまさにその進むべき正しき方向に向つて進み得られる。思うてここに及べば、この芽出度き平和には平和以上の大なる喜びがある。

三

わたくしは支那の思想史に何等の造詣ある者ではない。しかし讀者にして若しわたくしの一知半解の言を許さるるならば、かの戰國時代の思想家墨子が非攻篇に述べた所說の如きは、立派な近代的の平和思想ではないかと思ふ。それには現代のソオシヤリズムの色彩すらもある、と西人は評してゐる。

しかし固より東洋の事だから、墨子の兼愛交利の說は禽獸に等しなぞと途方もない事を言つて、誰も相手にしなかつた。孔孟の說に對してこれは外道扱ひされたものだ。西洋でも大哲韓圖（カント）の永久平和論が出た時代には、政治上に何等の實際的影響を及ぼさなかつた。あれは哲學者の寢言か空想ぐらゐに多數の俗衆は思つてゐたのだらう。それが前世紀の末からは歐米に於ける平和運動となり、微力ながらも海牙（ヘエグ）の仲裁裁判の形を取るに至つた。日本も勿論贊成して、あの裁判所の建物に壁掛の織物か何かを寄贈したやうだが、サアベル萬能の迷信を脫し得ない國民全體は、實は甚だしく此平和思想に對して冷淡極まるものであつた。日清日露の大役にだいぶ純益があつたといふので、まだ武力萬能の迷夢から醒め得ないのであつた。戰爭をすれば國が榮えるもののやうに思ひ込んだのだ。稀に平和論を唱へる人でもあれば、意氣地なしの腰拔か何かのやうに皆が嘲つてゐた。私の友人に某博士と稱する男があつた。其男は帽子の下にチョン髷を隱してゐるかと思はれる程、頭腦（あたま）の古い男であつた。わたくしが外遊中に永久平和論の事を彼に話した時、彼は罵つて言つた。馬鹿な、そんな事が出來るものか、空想だ。ぢつとかうして息だけ爲（し）してゐりや空氣中から食物が吸取される時代が來るだらうと言ふのも同じだ。第一日本のやうに小さい國は奈何する。さう言つて彼は永久平和說を一噱に附した。こんな男なぞはどうでも好いが、世界平和に對する日本人多數の理解は、先づざつと此程度のもののかと思ふと心細い。

否な日本ばかりではない、歐洲人も矢張り左樣（さう）であつたればこそ、今度の大戰は突發したのだ。開戰以前から此平和思想に最も熱心なのは米國であつた。極端なる絕對平和（ピイス・アト・エニ・ライス）の空想說をすら信ずる人の多かつた米國が、最後に舊思想打破のために劍を拔いて漸（やつ）と今次の大戰亂も終を告げたのである。

かうなつて見ると平和運動は既に單なる思想問題の域を脫して、實際上の政治問題になつて了つた。英米が熱心に提唱してゐた國際聯盟（リイグ・オヴ・ネイションズ）や平和强制同盟（リイグ・エンフオオス・ピイス）など、世界永遠の平和策が講和談判の最も重要な部分を占める事になつた。つい此間まで人切庖丁を二本腰にさしてゐた日本人、そして今まで此系統の思想に最も冷淡に、殆ど全然無理解無頓着であつた日本人が、今や後れ馳せながら時運の大勢に强ひられ、此四海同胞主義に基づける永久平和の問題を眞面目に硏究しなければならぬ時が來た。支那（或は露西亞も）と云ふ、何だか將來の巴爾幹（バルカン）半島のやうな列國競爭の地に接壤してゐるだけ、日本にとつて此問題は一層困難な重大問題である。英米の政治家とちがつて少しも思想家としての色彩なく、駈引と巧智とのほか何ものをも知らない我が國の政治家に、百有餘年前韓圖が提唱した此思想上の大問題が、果して理解し解決し得られるだらうか。米國には、學者にして理想主義の政治家たるキルソンがある。佛蘭西には偉大なる愛國的理想家クレマンソオが一國の宰相である。そして英國には、文筆の士として優に一家をなし、かのベルグソンの說に批評を加へる程の哲學者バ

ルフォアが現在の外務大臣である。日本の政界には誰があるか。

四

西洋人は、平和思想が史上に現はれた例として色々のものを擔ぎ出す。うんと古い所では約二千五百年前の希臘時代に、十二の國民がデルファイの神殿に奉仕する宗教的意義を有つてゐたアンフィノティオン會議を擧げたり、また希臘羅馬の文獻に見える片言隻句を拾ひ出しなどしてゐる。が、古くして而も立派な思想體系を有つてゐた點から言へば、憚りながら東洋の墨子の說の方が紅毛碧眼の人たちよりは、ずつと先輩である。具體的の事實としては、遙かに後れて十六世紀末に於ける顯理四世の平和同盟案や、或はユウトレクト條約當時に出た同盟案などを擧げるが、何れも皆言ふに足る程のものではなかつた。これが眞に西洋で大思想家の考察に入つたのは矢張り韓圖以後の事だらう。

近世哲學の開祖韓圖が、十八世紀末戰亂の慘狀を目擊して書いた『永久平和論』が、約一世紀を隔てて大西洋のかなたにキルソンの政策になつて現はれてゐるところに、思想界と實際界との極めて興味ある交渉が見られる。理想主義の濃厚な色彩を帶びてゐる米國の政治家は、此哲人の思想を遂に世界政策の上に持ち來した。はじめ衆愚によつて空論なり迂遠なりと嘲られた大思想は、十年の後、百年の後、時に或は千年の後に於て、或大なる外的事件と自然が促す氣運とに觸れて、それが遂に現實

界の大運動となる。これは藝術家レオナルド・ダ・ギンチが四百年以前に既に考へてゐた飛行機が、二十世紀の今日、實戰上の最大武器となつて立派に實現せられてゐる事よりも、更に驚くべき文明史上の事實ではないか。英國の詩人テニソンがその名作『ロックスリ館』のうちに明らかに飛行機を豫言し、同時にまた

Till the war-drum throbb'd no longer, and the battle-flags were furl'd
In the Parliament of man, the Federation of the world.

軍鼓は鳴りを靜め、軍旗は捲かれぬ、
人類の議會、世界の聯合遂に成る。

と歌つたのは、今より八十年前早くも既に彼が燃犀の詩眼に映じた國際聯盟の豫言ではなかつたか。新聞雜誌のほかは平素文學書哲學書の一冊も繙かず、ただ眼前、送迎遑なき軍事、政治、外交、經濟の上つつらな事實だけを見て、根柢に深くも潛める思潮の進轉に思を致さない淺薄な實用的人物の如き、今日に於ては既に新代時の新生活を語る資格なきものである。

爭議決せずして將に開戰しようとする兩國民が、共に興奮し切つて眞赤になつてゐる。一寸した事件からそれが爆發して一たび火蓋を切つたが最後、引くに引かれぬ破目になつて遂に屍山血河の慘劇を演ずる。これが戰爭の常態だ。だからその眞赤になつて今火蓋を切らうとする矢先、横合ひから國

際裁判か、仲裁か、或は之を制する他の方法を以てして一時その氣勢を抜きさへすれば、武力に訴へずとも濟む場合は實際甚だ多い。現に數年前、一時某々二國の關係か急迫した折などにも之に類した事があつたと聞くが、危機一髪と云ふ其機を逸せしむべく、多くの第三者が共同して何等かの方法を施しさへすれば、それで雙方とも劍を鞘に納めて、事は意外に落着する場合がある。平和强制同盟や國際聯盟なども、要するにこの熱し易く冷め易き群衆心理の作用を利用しようとするものに外ならない。今度の大戰爭も、その動機となつたものは巴爾幹半島に突發した一小事變に過ぎなかつたが、あれが遂に幾千億萬の財帑を費消し、千有餘萬の人命を損ふ世界的悲劇にならうとは、開戰の當時歐洲の政治家は誰一人と雖も考へてゐなかつたのが事實だ。

　群衆心理の研究で廣く日本に知られてゐる佛蘭西のギュスタアヴ・ル・ボンは、今度の大戰に就いて新著『戰爭の心理』を公にした。その中に大戰爭の根本には三つの内的素因がある事を論じてゐる。第一は生物學的素因、即ち飢餓欲望に促されて起り、第二には感情的素因、即ち憎惡貪婪など。第三には神秘的素因、即ち如何に知性の發達した人にでも免れ難い推理以外の力があつて、今度の戰爭の如きも實はこの最後のものが最も重きをなしてゐると言つた（同書第一篇第一章、第五節參照）。此神秘的素因を同盟内の第三者が共同の武力または經濟的壓迫によつて取除からうとするのが、心理狀態から見た國際聯盟の目の着けどころだらうかと思ふ。それでも構はず火蓋を切るものがあらば、同盟内の第三者が巡査の役

目を勸めて之に共同の制裁を加へようと言ふ。聯盟の主唱者たる英國の前外相虔禮(グレイ)子爵の言葉を借りて言へば『此點に於て各の國家は自ら主權を制限して聯盟の義務に服從す』る必要が出來るわけだ。人としても國としても利己主義ばかりが盛んな今の世界文明の進度では、實際甚だ姑息なこれ位の事より以上は出來ないのであらう。

世界の大戰を終へた今にして始めて、ひしひしと人々の胸に思當る一事がある。それは外でもない。前世紀末から今世紀の初にかけて歐洲の視聽を聳てた名著ブロッホの『未來の戰爭』や、ノオマン・エンゼルの『大なる錯覺(グレイト・イリユウジョン)』に現はれた戰爭不可能論である。即ち今日の如く交通機關の發達した時代、外交經濟關係の複雜な時代に於ては、對等國の間の戰はただ雙方の自滅を招くに過ぎない。一國の利益となるべき昔のやうな戰爭は不可能であるといふ論であつた。所が間もなく今度の戰爭が突發したので、それ見たことか、エンゼルやブロッホの說は空論であつたと言つて多くの人は冷笑した。しかし今となつて世界大戰の結果を見よ、講和會議がたとひ如何なる結末を見るにもせよ、また非併合非賠償と民族自決主義が奈何なるにもせよ、あれだけの生命財産を蕩盡しては、差引勘定の上に交戰國が何等得るところのないのは、十分事實の上に證明されたではないか。あんな慘劇を演じ損害を負うてまで、ブロッホやエンゼルの所說を確かめる實驗を、御丁寧にも演つて見たことかと思へば、利巧さうな西洋人にも似合はない愚な事をしたものだ。が、そこが即ちル・ボンの所謂神祕的素

因のあつたところで、今となつては彼等と雖も後悔する外はないのである。

この幻滅時代に、己れの英雄的功名心に驅られて開戰しようといふ程まで時代後れな誇大妄狂も、さうさうは出もしまい。また開戰を大なる罪惡なりとする觀念も、日一日と深く世界の人心に沁み込んで行く。これはかの獨帝のやうな男でさへ、如何に苦心して開戰の責を英國に塗り附けようとしたかを見ても明らかではないか。かくの如くにして戰爭の原因が漸次少くなつて行く以上、永久平和の大理想を地上に實現する事は、必ずしも空中樓閣の類では無いと思ふ。

一口に愛國心と言つても、その發達には色々の段階がある。最初は先づ他國に對して無闇に好戰的態度を執り、從つて尙武思想を中心にした極めて幼稚な野蠻時代があり、次いでは利己的國家主義即ち自ら富み自ら榮え、自らのみ威張らんとする時代。自國あつて眼中他の國家なきは二者共に同じい。最後に最も進歩したものは自國を愛すると共に他國の利益をも尊重せんとする愛國心、換言すれば他國を重んずる事によつて自國を大にし、自國を益せんとする愛國の精神だ。即ちコラムビア大學のバトラア總長が所謂『國際的精神（インタナショナル・マインド）』の上に確立せられた愛國心であらねばならぬ。かの幼稚なショオギニズムやジンゴオイズムの如き、既に遠い遠い過去の時代に屬すべきもので、こんなものを現代に高唱するなどは、十字街頭に出刄庖丁を振り廻はすよりも危險な藝當である。自ら大ならんとして却つて自國の衰滅を招く外なき事は、獨逸が既にこれを事實の上に證明した。愛國の眞精神は慾

張親爺の妄想でもなければ、田舍者のお國自慢でもない。

嘗て丁抹の文藝批評家ブランデスの平和論を讀んで、その一節を今も猶記憶してゐる。それは、個人と個人との間の爭議解決のために遠い昔から行はれてゐた決鬪と云ふ蠻行が、近代の文明國に於ては全然廢止されて了つたではないか、人に正義の思想が發達すれば國と國との間の決鬪も、個人間に於けると同じく之を除去し得る日がいつかには來るだらう、といふ意味の語であつた。決鬪は無くても暴漢を取押へる巡査に武器の必要があると同じ意味で、永久に陸海軍の必要は勿論あるだらう。唯それが、今までの陸海軍とは甚だしく存在の理由を異にしたものであらねばならぬ。また各國の軍備制限が當然必要條件となる事も豫測し得られる。

しかしかういふ計畫の完全な實現に至つては前途なほ遼遠だ。これには多大の困難がある事は固より言ふまでもない。我利々々亡者の多い今の世界では、或はなほ一片の空想に終るかとさへ疑はれた。しかし空想と思はれた事が、文化の進歩人心の開發によつて今日までいくらも立派に事實の上に實現せられてゐるではないか。不可能と見ゆるまで困難な仕事であればこそ、萬人が萬難を排して努力する甲斐があるのだ。人間殺戮といふ慘劇を再び演じないやうに、また此世界戰亂を以て、歴史の頁を彩る恥づべき最後の血痕となすべく、各國各人が專心一意に努力する事、此努力によつて後代に誇るべき二十世紀文明の特色を造り上げる事は、現代人の最大任務であらねばならぬ。これがまたこ

の度の戰亂が吾人に與へた最大の教訓であつた。所謂『戰爭を終る戰爭』の代價としては三千五百七十二億の戰費、千數百萬の人命は寧ろ廉なるに過ぎたかも知れない。

五

日本では國際聯盟の困難や不可能を言ふ人の聲のみが甚だ高い。特に日本の立場としての利害關係から打算した說を最も多く聞く。白人が人種的偏見を以て黃人に臨み、寧ろ之を壓迫するの策なるかのやうにさへ言ふ人もあるが、かくの如きは偏見を以て偏見に報ゆるもので此流儀の態度では、未來永劫いつまで經つても相互の間に完全なる理解を生ずる日はあるまい。他の有色人種の事はいざ知らず、日本人に對する西人の偏見は、吾々自らの精神上道德上の進步によつて他日必ず之を根絕し得るの日があると私は信じてゐる。此點に於ては遺憾ながら吾々自らの方にもなほ十分反省の餘地があろ。また實際の手段としては、今度の講和會議の好機會に於て何故平等の待遇を要求しようと努めないのであるか。更にまたかの米國が口に平和を唱へつつ海軍擴張の企畫あることを指摘する人も多いが、あれなどはもともと勢力ある一部の造船業者が、尤もらしい理窟をくつ附けて私腹を肥やさんとする企てで、あれを目して直ちに米國の軍國主義化なりと斷ずるが如きは、稍速斷に失する嫌ひは無からうか。私利を營まんとして邦家百年の計を誤らしむる者は何處の國にもゐる。

更にかの一般的不可能論、例へば同盟の監督者が無いとか、原料や食物の關係から植民地の爭奪戰は免れないとかいふ種々雜多の反對論は、西洋人、殊に軍國主義者であつた獨逸人などが、開戰の前にも、後にも、日本の論者よりはずつと巧い議論を澤山聞かせて呉れてゐる。それらは英米の新聞雜誌を讀んでゐる間に、專門家ならぬ私の目にさへ屢とまつた。讀んで見ると如何にも皆尤もらしい說である。

去年の秋、雜誌『四囘評論(クオオタ・リヴウ)』の紙上に『眞の大戰』と題した面白い議論が出てゐた。それは日本の論者が今まで餘り受賣してゐない、人口問題から永久平和の不可能を說いたものであつた。地球の表面は一億九千六百六十萬平方哩、そのうち五千五百五十萬平方哩が陸で、あとは水ださうだ。そして地球に生息し得べき人口總數を六十億萬人だと見積ると、現在の增殖率から考へて先づ紀元二千一百年には此數に達する。卽ち今から二百年ばかりも經つと、地球上にはそれ以上の數の人間が生きて行かれなくなる。勢ひ强い奴が他の同胞人類を殺戮してその地を奪はなければ立ち行かぬ。だから戰爭は避くべからずといふ論旨であつた。

わたくしは之を讀んで、なるほど數字といふものは馬鹿々々しいものだと思つた。俗物を脅かす道具としては便利だらうが、數字はいつも半面の眞だけしきや語つてゐない。ちやうど或國の政府が自分に都合の好い時だけ統計表を發表するやうに、時々眞赤な嘘を吐くには至極重寶なものである。何

でも天文學者が數字で計算すると、ハレイ彗星と地球とが數年前に衝突してゐて、人類は今頃もう疾くに絶滅してゐた筈であつた。たとひまた此人口論を眞だとしても、これから百八十二年さきの戰爭に、今から何も刀を研ぎ澄まして置く必要も無からうではないか。今度の大戰に拂つた程の犧牲を惜しまずに、また今から百八十二年かかつて世界の全人類が懸命に智慧を絞り出して工夫さへすれば、さういふ恐ろしい世界の『末日』に、野獸の噬み合ひだけは爲なくても濟みさうなものではないか。ちやうど全世界の石炭を消費し盡くした揚句、これが代用物に心配した人が多かつたやうに、數字ばかりを土臺にして心配し始めたならば、物價騰貴の昨今、貧乏人の節季なぞは到底越せるわけのものではあるまい。窮すれば通ずで、双物三昧だけはまたとしないといふ殊勝な心掛さへあれば、數字の威嚇なぞ必ずしも驚くに足らないのである。

まるで不勉強な生徒を試驗場に引張り出したやうに『出來ない、出來ない』の一點張りで、この世界文明の大理想の實現のために勇往邁進しない者は、惰に非ずんば則ち怯である。

しかし軍國主義の滅亡を象徴せる普魯西の末路を見て、直ちに地上に永遠の『羅馬の平和(パクス・ロマナ)』が出來ると思ふのは餘りに單純だ。また國際聯盟によつてたとひ武力による蠻人の蠻劇は無くならうとも、それで世界が平和になるとは思はれない。まだ吾々には大きな敵がある。個人としても或は國家としても益々勢を逞しうせんとする、かの淺薄なる利己的唯物思想こそ、更に恐るべき人類共同の敵では

ないか。吾々が行住坐臥、一日一刻も忘るべからざる最大の勁敵はこれだ。

武力の爭鬪なからしむれば、これに代るべきものは即ち陰險狡猾なる猾智の徒であらう。理想主義者たるキルソンが祕密外交をやめたいと言ふのも、これあるがためだ。また平和や人道を唱ふる外國政治家を疑つて、單に利己心を蔽はんとする者の虛構の言だと嘲笑し、自己を以て猥りに他を忖度せんとするが如き猜疑心も、亦大なる障害である事は言ふまでも無い。

人生は永久の戰である。生れ落ちた其瞬時から、吾々は幾千幾萬の黴菌と戰つてゐる。吾々は兵器や猾智以外の新しい力を以て國際的にもまた個人的にも、なほ多くの新しい戰を戰はねばならぬ。そして生活改造と新文明建設とのために努力せねばならぬ。

六

口は重寶なもの、泥棒にも三分の言分はある。獨逸は神の國、超人の國、吾等は世界の選民だ。獨逸が世界を統一するは天意に出づるが故に、吾等が戰場に流す血汐は神に捧ぐる血だ、と途方もない事を言つてゐた獨逸人も、今度はいよいよ目を醒ましたらう。むかしエナの戰に奈翁の鐵蹄に蹂躪せられて辛い目を見せられた其あとから、あの軍國普魯西が生れたのだから、今度の失敗だつて當てにはならない、第二のカイゼルがまた出ないにも限らぬと心配する人もあらうが、時勢の全く異なれる

今日、私はそれを一片の杞憂に過ぎないと思つてゐる。未來の獨逸政體が何であるにもせよ、獨逸人が民本化して普魯西主義の再び起つ能はざる事だけは疑はれまい。かくして成れる獨逸文明の將來は如何なるものであらうか。

獨逸人には露西亞人ほどに激烈な感情性が無い。たとひ變轉期に會しても露西亞人のやうに歷史の階段も踏まず、國家をも超越して一足飛びに、一本調子に熱中狂奔するものとは思はれない。理知に秀で秩序に慣らされ、科學的組織性に富む獨逸國民が、一朝にして今の露西亞のやうに收拾すべからざる無政府狀態まで急轉直下しようとは、先づ考へられない。

わたくしは普魯西の專制を離れた獨逸の聯邦が、これからまだうんと內輪揉めをした揚句に、各自由獨立を享有して今日の米國四十八州のやうになるのではないかと思ふ。これは單に外面的な政治組織などに就いて言ふのではない、その將來の文明の性質に於て、特にその形而下的文明に於て米國と極めて近似したものとなり、歐洲の中原に新しき合衆國文明の出現を見るの日の、必ずしも遠からざるを信じてゐる。

一口に獨逸文明と云つて、北獨逸も南獨逸もごつちやに言ふ事は出來ない。普魯西思想を代表してゐた伯林（ベルリン）文明と共に、巴威（バイエルン）の首府『藝術の都（クンストシュタット）』と云はれるミュンヘン文明のある事をも考へて見ねばならぬ。獨逸が惡いのではない、普魯西によつて統一せられてゐた獨逸が惡かつたのである。ヴイマ

アの詩聖ゲエテが、兇暴の民なりと罵つた普魯西人が怪しからぬものであつたのだ。伯林大學の講堂から歷史家トライチケュが宣傳した普魯西主義が、世界文明の敵であつたのだ。その普魯西主權の憐むべき末路によつて、獨逸は今や新しき民族生活を營むべく再生したのである。新生に入つたのだ、救はれたのだ、また放たれたのだ。その未來には必ずや大なる光輝があらねばならぬ。普魯西統一の以前にかへつて、再び韓圖やゲエテの大天才を生むの日が無いと誰か言はうぞ。

獨逸人の堅剛な意志と組織的な頭腦によつて將來、自由な民主制の下に建設せらるべきその新文明は、米國のそれと殆ど同一方向を取つて而も尙更に一段の光彩を加へたものとなるだらう。殊にその勤勉性を以て國力恢復に注ぐ努力は眞に中外を驚動するに足るものがあらう、物質的方面に於ても、また精神的方面に於ても。

將來米化する獨逸は果してどんなものに成るだらうか。その見本が現在一つ既に立派に出來上つてゐるのがある。それは米國の市俄古である。あの邊一帶には米國中で最も獨逸人の多い所で、開戰後殆ど獨探の巢窟だと言はれたものだ。あの市俄古と云ふ市の猛烈な急速な進步の現狀を考へると、わたくしは未來の獨逸も遂にあのやうな風になるのではないかと思つてゐる。市俄古の空氣がボストン紐育と全く異なり、また南部諸州の都會とも著しき相異あるところに、將來の獨逸文明が聯想される。

米國が今日の國力を養ひ國際上の地位を得て、世界史上に類例なき急速偉大な進步をしたのは、そ

の特有の民主政治のもとに完全の自由を享樂し、各州各個人が縱橫に驥足をのばし得た結果である。そして全く專制的劃一主義によらず、複雜のうちに歸一あり、變化のうちに調和ある眞の國民的統一を全うし得たからだ。換言すれば米國は民主政治を以て專制政治の爲し得たことを完全に行つたからだ。殊に開戰以來の米國の狀態は、その國民生活が何等の束縛制壓なしに各人をして自發的に能動的に結束せしめ、軍國主義的態度を執るに極めて便なるを證して餘あるものであつた。

獨逸人には昔から驚くべき蠻勇がある、意力がある。またその國民的結束力が如何に强大であるかは、五年に亙れる大戰によつて疲弊困憊の極に達してゐながら、最後の一瞬まで結束を固うし步調を亂さなかつた事で知られる。此蠻勇を揮ひ、此意力を用ゐ、此國民的團結力を提げて、民本主義平和思想の文明を建設しようとする時、彼等の民族活動は眞に文明史上に一新時期を劃する事だらう。普魯西主義の滅亡によつて新しく獨逸人に與へらるべき新生活は、これこそ洵に鬼に金棒である。蠻勇を以て平和文明の活動に從事し、民主政治によつて軍國主義の實を擧げたこと、これが米國發達の素因であつたと同じく、將來の獨逸國民も亦これとほぼ同一の徑路を取つて進む事は、今日に於て既にト知し得られる。

七

列國文化の發達と國力の現狀とを譬ふれば、英吉利はまさに大學卒業後三四十年も經つた老先輩、金もあれば勢力もあるが、滿つれば虧くるが習ひの世の樣を見ては、さすがに老境を喞つ一片の憂心はあらう。光榮ある羅馬文明の正統を傳へ、中世の『ロオラン の歌』以來の勇猛心を失はず、今もなほ明敏の智性と典雅優麗の文化を世界に誇れる佛蘭西も、既に老熟の境に入つた。已れの青年學生時代の花やかさを回顧しては、何となう物足らぬ心地もするだらう。また伊太利はその國民生活が既に頽唐の色を帶びて、氣焰揚らざる五十男の類か。このたび墺匈國を破つて少しは元氣づいたらう。露西亞は高等學校か大學の學生時代に、うつかり革命騷亂の放蕩に身を持崩して、これから果して改心するものか廢物になるものか、友人どもが心痛の種である。獨り米國に至つてはまさにこれ優秀なる新卒業生、親ゆづりの自然が與へて呉れた國富もあれば、自己の天分も豐かだ。年は三十歲前後の新進氣鋭の士、殊にかれ自らの民主政治と人種寄合世帶の組織によつて、世界將來の新氣運と四海同胞主義との好標本を自ら示しつつ、はては世界全體を一纏めにして各州獨立の合衆國組織にしようなどといふ途轍もない大望を抱いてゐる。後世最も恐るべきは此男だらう。現に此度も先づ主として自分の力で獨逸の軍國を破碎して置いて、直ぐそのあとから窮乏を救はんがため今度はまた二千萬噸の食料品供給を聲言し、フウヴァを歐洲に遣はしたあの遣口などは、正々堂々博愛人道を標榜して而も寸分の拔け目なき此男の特色を遺憾なく發揮したもの、支那や露西亞にも此手で行かうといふのだ。彼

は先づ他を斃して己れを利せんとする者、耶蘇坊主の法衣を纏うて前垂掛の機敏な商ひをするところは偉い。昔マホメットは片手に劍、片手に經典で行つたが、二十世紀のアンクル・サムは右手に聖書、左手に算盤で世界を壓しようとしてゐる。ちよつと他人には眞似の出來ない藝だ。さてまた獨逸は之を譬ふれば大學の優等生、彼の頭腦が好くて仕事も見事なのには久しく教師も學友も舌を捲いてゐた。が、偕いよいよ卒業論文と云ふ段になつて、一つ根本となる重要な判斷を誤つてゐたため、論文全體が出來損つて了つて通過しない。もう一年原級に留めて論文は遣り直し、併しこの次にはさぞ見事な製作が出來よう。そしていよいよ卒業の曉には彼の働き振は、さぞや先輩師友の耳目を聳動するに足るものがあらうと豫期せられる。

若しそれ年若き新進國わが日本に至つては、こはこれ大學生かはた中學生か、優等的か劣等生か、勉強もするし、品行も正しく、亂暴もしない代り、平和文明の戰後に神經衰弱の青瓢箪たらずんば幸ひである。

筆の序に書き添へたいのは、今度の騷ぎで著しく男振を上げた米國大統領である。成程ヰルソンは偉い。偉いには偉いが、決して東洋人の東洋流の目に映ずるやうな拔山蓋世式の英雄でもなければ豪傑でもない。前にも言つた通り、近代は一人の英雄や天才の仕事を千人の凡器凡才が演る時節だ。米國の如き特にその極端なるもので、斷じて英雄の存在を許さない國柄である。すべてを群小衆愚の判

斷と黄金力と機械力とで運轉してゐる國柄である。現に米人自身がヰルソンを以て當代第一の人物と考へてゐない事は、二度目のヰルソン選擧の時、私は米國に滯在して當時の事情を見て感じた事である。米國式民主政の國では、何といつても群衆が總べての力の根柢で、之を左右する者は少數の親分（ボッス）である。此ボッスの力が更に一人の代辯者を動かしてゐるのだ。ヰルソンの背後には、餘り世間の目に附かない此偉大な親分的勢力がいつも後押をしてゐる、それにまた例の米國一流の囃子鳴物入りで宇内に呼號するのだ。つまりヰルソンは賢明なる代辯者に他ならぬので、學者として頭腦が明敏な上に、口が達者でおまけに文章が巧いと來てゐるから、代辯者として眞に申分がない。だから若しあの男だけを一人離して、例へば日本のやうな國に置くならば、矢張りジョンス・ホプキンス大學の研究室で演習をしたり、プリンストン大學で憲法財政の講義をやり、文學歷史に關する著述をしてゐる一學究で終つたのである。さういふ學者をいつも最も巧妙に手際よく、あらゆる方面に利用してゐるものは米國だ。ヰルソンばかりではない、前大統領のタフトだつて、今はもとのエイル大學に歸つて、村夫子をしてゐるではないか。

米國はずつと昔から自由民主正義人道と云ふ立派な旗印を持つてゐる。殊に現代の世界の大勢に乘ずるに最も適合した、そして今世界中どこへ出しても一番幅の利く此旗印を、建國の初から幸ひ持合はせてゐた、卽ちヰルソンは此旗印を掲げる旗竿となり、また旗手となるには最も適當した人であ

る。それ以上の人でもなく、またそれ以下の人でもない。政治家としては、英國を除いた歐洲の舊國や或は日本などに、多く例を見ない新型である。

勃國の降服に始まつた中歐側の土崩瓦解は、思つたよりも急速であつた。また此冬をも越すことかと思はれた戰爭が意外に早く濟んだのは、いくたび思ひ返しても喜ばしい。殊に此戰爭の結末が勝利の平和でなくして、『平和』の勝利であつた事に大なる文明史的意義の存することをも喜ばずにはゐられない。

歴史の軸は急速に廻轉する。平和同盟の聲を聞き、眼前に獨逸ユンカア一味の凋落を見るにつけても嗚呼世事日に非なり。澆季の世に、げにすまじきものは長生きよ。昔祈りし武運の長久も今はあだなれ、と腰なる長劍うち眺めつつ喞ち給ふらん翁たちよ、幸ひに健在なれ。(大正七年十一月中旬)

小泉先生そのほか　終

印象記

巻頭に

書を讀む時は必ず先づ序文や緒言を讀まねばなりません。前口上を開いて置かないことが、内容の正當な批判と理解とを妨げる場合が多いからです。ごたごたと十數頁の文字を卷頭に羅列して、なほそれでも足らず、往往にして他人の筆を煩はしてまで序と云ふものを附する所以はここに在るのでせう。序文に目を通さず本を讀むことは、一面識なき人の家を訪うて、案内も乞はず座敷へ通るよりも更に亂暴だ、と思はれる場合が無いではありません。

しかしながら、最初から讀者に親しまうとする causerie の積りで書かれた此『印象記』は、全く序文を要しない本です。取次や案内の面倒なしに座敷へ飛び込むは無論のこと、臺所でも書齋でも便所でも、どこでも勝手次第に覗いて貰つて少しも差支の無い書物です。そして主人公たる著者が極めて無邪氣な好人物で、世の俗衆が平氣でゐる事に獨り感服して見たり、憤慨したりしてゐる正直者である事を見屆けて貰へば可いのです。

序文らしき序文を書かない事が卽ち此書の序文であると考へましたから、これだけ餘計な事を書き添へました。

一九一八年四月

京都に於て

著　　者

『印象記』目次

北米印象記

一　自繩自縛の民

人間は自由を求める。求めた自由が得られると、今度はまた好んで餘計な壓迫や束縛をわれとわが手で拵へ、自ら求めて苦しんでゐる奇怪な動物だ。自由の民といふのを唯一の誇とし、看板にしてゐる米人もまた自繩自縛の民である。歴史や因襲で出來あがつた歐洲舊國の窮屈な生活に堪へられず、食ふにも困るといふ人たちが、ぞろぞろと襤褸を曳きずつて大西洋のかなた自由の鄕を求めて押し寄せる。紐育港頭高く燈をかかげ一雲表に聳えたる自由の神像を船の甲板から仰ぎ見たとき、そこの新しい世界にはまた歐洲の舊國に見られない恐ろしい不可思議な暴虐と抑壓との力が潛める事を、憐むべき彼等は夢にだも氣附かないのである。

政體や制度の上からのみ見れば、米國は如何にも自由の天地だらう、また眞に民本主義の樂土だとも言へよう。しかし私なぞの目から見ると、たとひ官僚政治の治下にあらうが、固陋頑迷の舊思想に支配せれようが、また國家社會の因襲に壓迫せられようが、矢張り日本人の生活の方が遙かに氣樂で

遙かに自由だと思はれる點がある。
自由を誇とせる米國には、そこに絶對無限の權威を以て君臨せる二つの暴君と一つの女王とがある。米國人はこの三者の壓迫のもとに、或者は人權を奪はれ、或者は思想言論の自由を妨げられ、時に或は生命財產の安全をすらも脅かされつつ、而も自分たちだけは平氣の平左衛門でゐる。まことに不思議な民だ。
英人も米人も同じくアングロ・サクソンだと言つてゐる、そして同じ國語を話してゐる。しかし英吉利人が米國へ移住すると、一代か二代のうちにはその鈍重の特色が失はれて、機敏となり巧慧となり怜悧となつて、身體は細り聲は癇高になる。悠揚迫らざる如き態度は失はれて、ただ齷齪とこせこせする。そり返つて步いてゐた英人が、いつの間にか米國では前屈みにあるく。故國のリヴプウルでは二本飲んだ酒が、紐育へ來ると一本しきや飲めなくなると言つた老船長がある。かうしてジョン・ブルがアンクル・サムに變つて了ふまでには、尠からず骨が折れるのだ。之を氣候風土など、ただ環境の外的相異にのみ歸するのは妥當ではない。これは英吉利人の故國では左程暴威を逞しうしない新しい力が、米國に於ける彼等の生活を內外から壓迫してゐるからではなからうか。
この壓迫力を代表せる二つの暴君とは『群衆』と『黃金』とで、一人の女王とは『女』の威力をいふのである。

二　『群衆』の暴威

米國は群衆の國である、衆愚の國である、彌次馬の國である。多數者の輿論が獨り暴威を逞しうせるが故に、群衆の心理を眼中に置かずしては、一代の英傑といへども手も足も出せない國である。唯もう群衆の爲すところにさへ盲從し雷同すれば、如何なる言行と雖も許され正當視せられ喝采せられる國である。賢なるも愚なるも、富めるも貧しきも、等しく皆この暴君『群衆』の前には跪坐し平伏して、その鼻息を窺ふに汲々たる有様は、わきから見れば、あれでも自由の民かと怪しまれるほどである。孤高狷介などと云ふ觀念は米人の夢想だも及ばざるところ、之を說いて聞かせれば、恐らくは狂人の囈語だと思ふだらう。

理窟よりも先づ事實を見よ。かの對獨宣戰の前に輿論が急激に主戰論に傾いたとき、米國の群衆が唯もう、わいわいと騷ぎ立てて、平素は尊崇し敬慕してゐた平和論者に對する輿論の橫暴なる壓迫は實に烈しいものであつた。上院の外交委員長ストオン氏に對する國民の言動は、あれは何事ぞや。私はその頃、首都華盛頓に近いボオルティモアに居たが、ある日かの平和論者として名高いジョルダン博士が、この地で第一の劇場を借りて演說しようとすると、雲霞の如き彌次馬が押し寄せて會場を包圍し、形勢頗る不穩なるのみか、はては負傷者をさへ出すといふ騷ぎとなつた。ジョルダン氏一行は

遂に一言一句の演說をだに爲す事を得ずして、僅かに警察力の保護のもとに命からがら逃げ延びた。自由を誇れる米人が言論の自由の發達しない日本を野蠻視するのは可いが、自國のあの輿論の壓迫を何と見るのだらう。ある露西人が私にかう言つた。舊ロマノフ王家の壓迫時代に在つてすら、公の表向きな言論をだけ愼んで居れば、お互の間の言論には思想の發表に自由の餘地はあつた。米國に於ける輿論の壓迫ほどに烈しいものではなかつたと。私はあのボオルティモアの騷ぎを見て、眞に民主國の國辱となし、米國のためにこれを悲しまざるを得なかつた。

　米人は獨逸を目して民本主義の敵だといふ。しかし今でこそ幽閉の身ではあれ、開戰の當時には獨逸社會黨の首領リイプクネヒトの非戰論はまだ盛んであつた。その後も、かの獨逸のバアナド・ショオだと云はれる『未來』(ツウクンフト)の主筆マクシミリアン・ハアデンの戰爭悲觀論は唱へられ、ミュンヘン大學の教授フェスタアが普魯西の利己的國家主義を痛擊したる侃々諤々の議論も開かれた。かくしてカイゼルの治下にはなほ多少の言論の自由もあらうが、自由を誇れる米國の『群衆』王のもとには、一人のジョルダン博士をさへ容るるの餘地がなかつたのである。

　人間は群衆となれば感情にのみ走つて、善惡正邪の問題に冷靜な獨立の批判を下す能力を失つて了ふのだから、米國一流の所謂『成功』をしようといふ者は、先づ群衆を動かす事を工夫せねばならぬ。それには最良の手段の一たる廣告の巧妙を競ふは言ふまでもない。世人の知る通り廣告の激烈なるこ

と、またその效力の偉大なること、世界中で米國に及ぶもののないのは、全く群衆の暴威の前にすべてのものが屈服するからである。如何にくだらない品物でもそれが一つ人氣に投じて『當る』となると、猫も杓子もそれでなくてはならぬといふ事になる。それを用ゐない者は人間並に扱はれないといふ事になる。これは他の國の場合のやうに、人間自然の模倣性から生ずる單なる『流行』とは少しく趣を異にしてゐる。（米國で廣告が偉力を有するのはこの外に、人々が古きを棄てて新しきに就く事の速かなのも確かに原因の一つであらう。專賣特許で巨利を博する者の他國よりも多いのは即ち此理によるので、日本などは新奇な物をひろめるのに最も骨の折れる國であらう。）

廣告も、賣藥や化粧品ならば不思議にないが、私が著しく奇異にまた不快に感じたのは文學者、著述家、講演者――米國では講演業といへば、講談か浪花節のやうに一種の職業である――は皆、ちやんと自分の引札のやうなものを拵へてゐる。二三枚の紙に其人の經歷から著述目錄から寫眞まで印刷し、機會あるごとにそれを配布するのである。自家廣告もこれ位露骨に行けば、却つて罪が無くて好いと言ふ人もあるだらう。

米國の新聞廣告の盛んな事は誰も知る通りだ。日曜日などは大新聞は二三十頁が廣告で、あとはポンチ繪か寫眞畫報の類、讀むところはほんの少しばかりである。また通俗雜誌の如きは廣告を以て頁數の大部分を占めるはまだ可しとして、肝腎讀むべき部分は過半、廣告欄の片隅にぶつぶつ切れに少

しばかりづゝ組み込んである。廣告料のおかげで雜誌を廉く買はして貰ふのだと思つて、讀者は我慢する外はないのである。その他風致も何も一切お構ひなしに、繪看板のペンキ塗を所せきまで列べ立てる具合は、近頃の俗惡なる日本といへども、まだまだ米國の足もとにも寄りつけない。

世界中で最も多く熱心に新聞を讀むものは米人である。元來が世界中の人間が寄り集まつて、唯もうがやがやと騷いで毫も中心といふものの無い國であるから、自然と新聞が社會の嚮導者となり輿論の指導者ともなる。上品な新聞紙ばかりなら可いが、例の黄色紙が勢力を逞しうする。少數の日本贔負が何と言はうが、黄色紙が少し排日熱を煽れば、群衆といふ暴君は忽ちにして其方に傾くのは世人の知らるゝ通りである。新聞の方でもまたこの衆愚を喜ばせんがために、センセイショナルな殺人事件などは、三面記事どころか一面記事に祭り上げて、爭うて我勝ちにと書き立てるのは世界で有名な話だ。私が歸朝する少し前ごろ、コツキイといふ伊太利人の色魔が妙齢の處女を殺害して、數年間その死體を地下室の下に深く埋めて隱匿して居つたのが發見された。ところが紐育警察の不行屆で、以前既に犯人は故國へ歸つて了つたので、ながく其女は行方不明といふ事になつてゐたのを、漸く或私營の女探偵の苦心で、事の眞相が分つたのである。すると全國幾百の新聞は此事件を書くは書くは、一寸四角もあらう大活字の見出しで、合衆國全體の新聞が、まるで世界史上の大事件が突發したかのやうに書き立てた。驚いた事には堂々たる紐育時事(ニユウヨオクタイムス)の如き、品格もあれば名聲もある第一流の新聞紙ま

でが、一面の左端上部に麗々と此三面記事を掲げた事であつた（固よりこれには紐育警察攻撃の意味もあつたであらうが）。

その他俗悪なる低級趣味の跋扈も、禮節を重んじないことも、大集會（マス・ミイテイング）やお祭騒ぎの流行も、國全體としては少しも落着きの無いことも、皆たとひ他に種々の原因はありとしても、主として群衆の暴威暴虐が全社會を壓してゐる結果である。個人一人づつに就いて見れば、米人は日本人などよりも教育もあり知識もあり、殊に政治思想などは遙かに發達してゐる。それにも拘はらず以上のやうな現象を見るのは、全く群衆の心理に支配せられてゐるからと考へる外はない。むかし佛蘭西のルナンは米國を評してから言つた『嚴肅な高級の教養なくして、ただ著しく通俗教育をのみ振興させた合衆國のやうな國は、その智性の庸劣、風俗の野卑、淺薄なる氣風、一般的才智の缺乏によつて、此缺陥を補ふには長日月を要すべし』と。今から半世紀以前はやくも既に此言をなしたる大思想家の達觀には、確かに人をして敬服せしむるに足るものがある。

三　暴君『黄金』

米國が黄金萬能の國であり、その文明が成金文明、黄色銅臭の文明であることは今さら事新しく言ふまでも無いが、實際行つて見ると、思つたよりも甚だしい。どこの寄席（ヰオドヰル）でも米國特有の下品な茶番

狂言のなかには、必ず一度は弗(ドル)の紙幣(さつ)びらを出して見せる幕がある。またたとへば旅人が第一に見る案内記の類には、此建築は幾十萬弗、幾百萬弗で出來たといふ事が一々劈頭に麗々と書いてある。建築物は實用品であると同時に藝術品であるから、それが若し俗惡なる成金式金ピカ式の物か、或は無意味に高く聳えた摩天樓(スカイ・スクレイパア)の類であるならば、たとひ巨萬の財を費したとて三文の値打もない筈だ。大火事があるとその新聞記事の見出しには、先づ『何十萬弗損失の火事』と出てゐて、人命の損傷の如きは下の方に小さい活字で書いてある。人の命より金の方が大事だと見える。富豪の死んだ記事にも、財産幾百萬弗の人が死んだと書いてないのが、寧ろ不思議に思はれる位のものだ。彼等が黄金王の奴隷となつて忠勤を擢んでるとき、命は鴻毛よりも輕いのである。道德を重んじ信義を貴ぶのも、その方が結局金錢(かね)が儲かるからである。平和と人道とを唱へるのも、その方が米國では國富を增すの良策であるからだ。米人が賭博の好きなのも半ばは黄金のため、その他兵隊に行くのも學問をするのも人と喧嘩をするのもみな、少しでも黄金王の恩寵を辱うせんがために他ならない。私なぞのやうに年が年中、黄金王の御覺えめでたからぬのみか、實に犬猿も啻ならざる間柄のものには、とても生存の餘地を見出せない國である。古人が、駟馬高蓋は憂甚だし、貧賤の志を肆にするに若かずと傲語した、あののびのびした自由な心持は、我から求めて拵へたる黄金の桎梏のもとに藻掻いてゐる米人が、未來永劫理解する能はざるところである。

私の或友人が公園に遊んでゐる子供の寫眞を撮つてやつた。寫したのを後から送つてやらうと言ふと、可愛い子供が「いくらで（ハウ・マッチ）」と訊いたので興がさめた。又貧家の子供とも思へない五六歳のが街上で私どもの後から隨いて來て、白銅（ニッケル）を與れとせがむのは決して珍らしい事ではなかつた。黄金王への忠義心はその父母から遺傳されて、可憐なるこれら幼兒の腦細胞に早くもえびり附いてゐるのである。

かく言へば米人の或者は言ふだらう、黄金王の奴隷たる者は猶太人にして吾人は然らずと。しかし一たび米國といふ世界人種混淆の一大熔爐のうちに投ぜらるれば、その猶太種たると獨逸種たると日本種たると英吉利種たるを問はず、また色の白きと黒きと黄なるとを論ぜず、すべて皆一切平等にこの暴君の足下に平伏しなければ、人間並には取扱はれないのである。猶太人、ことに獨逸系猶太人のごときは、甚だしく蔑視せられてゐるにも拘はらず、實際上その勢威は歐洲に於けるよりも、この金權萬能の米國に於て更に偉大なるものがあるのは何よりの證據ではないか。

さて以上述べた「群衆」と「黄金」といふ二つの暴君の力は、つひに相合してまた一つの不思議な現象を生ずるに至つた。卽ち米國は中心のない寄合ひ世帶の國であるに似あはず、驚くべき劃一主義の國である。卽ち群衆力の背後には横暴なる資本家といふ黄金力が控へてゐて之を左右するのだから、あの尨大なる國土の東のはてから西のはてまで、どこへ行つて見ても旅館（ホテル）も藥屋も八百屋も菓子

屋も洋服屋も、何もかも皆同一の營業法で、同一の商品を商つてゐる。米國は人の言ふ通り機械文明の國である。いくら勞働資金が高いと云つても、手でした方が巧く出來ることにでも、機械を用ゐなければ承知の出來ない國である。だから大資本家が大規模の機械力を用ゐて造り出したる製品が、どこも同じやうに津々浦々にまで行き渡るのである。煙草屋と言へば東はボストンから西はシアトルまで、皆同じ赤看板の聯合煙草店（ユナイテッド・シガアストア）である。新聞といへばどれを見ても同じやうな內容、同じやうな體裁のものばかり。大資本主が經營してゐる同種の澤山の新聞紙が筆を揃へて、各地で同じやうな事を書き立てて群衆を煽れば、それが何時のまにか國の輿論となつて了ふ。此點は例のハアスト系の新聞紙で日本によく知られてゐる事實だが、いま軍需品の製造に力を專らにしてゐる大資本家が、戰後に需要が無くなれば困るといふので、も一つ次の戰爭熱を今から煽り立てて置く。日米開戰論の如きは半ば、かかる資本家が新聞紙を利用した結果であることは人の知る通りだ。『群衆』王の他の好物たる活動寫眞なども、また全く黃色紙と同樣の性質のものである。その他洋服でも靴でも、幾十萬といふ數を一つの工場で造り上げた既製品を、どこの店にも列べて置くといふ有樣。たとへばカラアでも、東部の米國ではこの頃單襟（シングル）や折襟をかけてゐる人は殆ど見られない、皆が二重襟（ダブル・カラア）だ。これでなければ罰金を課するぞと言つても、かくまで統一されはしまいと思はれる位だ。英吉利人なぞは、此頃は二重襟が普通だとしても、十人のうち二人や三人は單襟のがある。また靴でも古風な深ゴムなぞ

といふものは、絶對に今は米國の靴屋には見られないが、これも佛蘭西あたりだと今になほ、日本人に便利なあの深ゴムも無いではないのである。すべてがかういふ風だから、少し自分一個の趣味にかなふ物をと特に求めるならば、二倍三倍以上の高價を吹き掛けられる。

私は今カラアと靴とを例に擧げたが、帽子に就いても珍談がある。或佛蘭西人が米國の田舎市(ゐなかまち)で講演をした。ところが翌日の新聞記事を見ると、講演の事は僅か十數行程書いてあつて、其人の帽子の記事が約一欄の半ばを埋めてゐる。といふのは、此人は茶色の中折れを冠つてゐたが、其頃米人は皆悉く黒の帽子を冠るのであつた。苟も群衆の爲すところと異なつた事をすれば、米國では衣帽の瑣事と雖もこれ程の制裁(?)を甘受せねばならぬ。これが倫敦でならば、たとひ赤洋袴(ヅボン)を穿(は)いてピカデイリやリイゼントの目抜きの街(まち)を歩(ある)いたつて、決して行人の歩を止めるには至らぬ。英國は飽くまで個人の個性を尊重し、劃一統一を忌む國であるが、米國は全くその反對だ。又何の職業でも製造業でも大きな組合組織(オーガニゼーション)がつくられて、そこへ仲間入りしなければ仕事が出來ない。仲間入りすれば例の『群衆』と『黄金』との壓迫で、勞働者の如きは全く個性も人格もない一種の生きた肉塊に過ぎない機械となつて、盲動するほかはないのである。

獨逸では政府が設けた規則や法律の力で、萬般の設備が皆よく統一されてゐると言つて感服する人があるが、米國も亦以上の有樣で、不思議に一切の事物に劃一主義統一主義の行はれてゐる國であ

る。しかし獨逸には意外にも個人の自由があつて、施設の巧妙なために不平も不滿も起らないのだといふ。だから若し獨逸が帝王政治を以て民主政の爲すところを行つてゐるとすれば、米國は民主主義を以て帝王政治の爲すところを一層烈しく行つてゐるものだとも言はれるだらう。殊に近頃の米國は、群衆の威力が政府を動かして凡てのやりかたが專制的になり、中央集權的になりつつある事に著しき現象である。

四　女の天國

世界人種の雜居地である米國は現在に於ても、新世界に於ける新文明の建設者である。地上のあらゆる民族の血統を集めて、ここに過去の歷史上未だ類例なき特殊なる文明の新現象を生み出しつつあるのだ。善きものも惡しきものも、世界のあらゆるものを集めるといふ包容の博大なる點に於ては、古への羅馬(ロオマ)大帝國と雖も遠く及ばざるの觀がある。

將來は言ふに及ばず、現在すでにこの新文明の勢力は驚くべき偉大なるものである。二十世紀文明の一大現象は、世界が急激に米國化(アメリカナイズ)せられつつあるの事實だ。嘗て米國文明の祖師であつた歐洲の先進國でさへ、今ではそれが逆に米國化されつつあるのだ。頑丈な爪尖の圓い米國製の靴が、伯林(ベルリン)の靴屋の陳列棚に舶來品として威張つてゐる時節ではないか。物堅い英吉利の新聞紙までが盛んに黃色(イエロオ・ペイ)

紙となり、米國の資本主義が生み出したディパアトメント・ストオア（米國のは流石その元祖だけに頗る大規模で、日本のよりも遙かに商品の種類が多い。賣つてゐない品物は先づ棺桶位のもの）が世界中の到る所に繁昌してゐる時代である。英佛獨の諸國ですら、その歷史や傳說を破壞しては何事にも實利實益一點張りの、群衆本位黃金本位の米國式を學ぶのが今の時勢である。日本人の如きは色々と米國のことを惡く言ひながら、近頃その米國化して行く勢は實に凄じいものがある。他の點はさておき、上來述べた『群衆』と『黃金』との二つの暴君に、漸く後れ馳せながら我劣らじと忠勤を擢んでようとするところなど、日本人としてまことに殊勝な心掛である。誰かが音頭を取れば忽ちに附和雷同して、左程でもない人物を神樣呼ばはりするやら、何かといへばわいわいとお祭騷ぎや燒打騷ぎをするところなど、最も『群衆』王の御覺えめでたき所業であらう。若しそれ『黃金』王に對する熱烈なる忠誠に至つては、今まで日本があまりその御覺えめでたく無かつただけに、このたびこそはと勇み立つたる近頃の忠義振り、まことに見上げたものである。

しかし日本人がその社會的發達のために少しは米國を見習つて然るべき點で、而も斷乎として學ぶことを欲しないのは、他の一つの『女王』に對する忠勤である。西洋はみな女尊男卑だと人は思ふだらうが、近代の歐洲では米國ほど極端に此風は烈しくない。

私は先づ米人の日常生活に就いて、此『女王』の威勢を例證すべき二三の見聞を語らう。

着かざつた女が夜になつてから外から歸つて來る。今まで子供を相手に神妙に留守番を勤めてゐた亭主が笑顏で迎へる。その鼻さきへ女は靴ばきの儘の足を突きつけると、

『イエス、ディア、』

謹み畏まつて跪きながら、女の靴の紐を解く者は米國の亭主である。

旅館(ホテル)やアパアトメントの昇降機(エレヴイタア)のなかに婦人が居れば、識る識らぬに論なく男子は先づ之に對して脫帽しなければならぬ。出る時も隅の方に小さくなつて女の尻から隨いて行く。之をしなければ禮節を心得ざる野人ジャップだと見下げられる。貴賤上下の分ちなく、乞凧も百萬長者も大統領もみな一切平等である國に、男は女にだけは絕對の尊敬を拂ふ事を餘儀なくされる。大統領には脫帽しなくても、かかる場合婦人に對しては必ず脫帽の禮を拂はねばならぬ。

細君が來客と話してゐる。その間主人はぢつと傍でそれを眺めて靜肅に控へてゐる。横から嘴を入れるとき、主人は先づ細君に向つて『エクスキュウズ・ミ』とことわる。細君の前で煙草をのむときにも、此『エクスキュウズ・ミ』をやつてゐる或大學敎授を私は知つてゐる。

郵便局に行つて色々の揭示板を讀んでゐると、ふと郵便貯金の廣告が目についた。その劈頭の一行に曰く『旣婚婦人は夫の干涉をも監督をも受けずに、自由に貯金する事を得。』細君の衣服を典してさへ遊里に足を入れることの平氣な日本の男子は、之を見たらば何んな顏をするだらう。

昨年の秋ごろ、私はしばしば市街電車のなかに『婦人に告ぐ』といふ廣告を見た。それは大統領選擧運動の酣なる頃であつた。其廣告の文句には『爾の夫や兄弟や愛兒をして砲口の餌食たらしめなかつた人がヰルソン氏なることを思へば、再び此人を選擧せよ』と云ふのである。一國の統治者を選擧するにも、先づ婦人の心を動かして掛からうとするのは米國の面白いところだ。

電車のなかで男が女に席を讓る。つんと澄ました女が當前（あたりまへ）だといふ顔をして其席に就く。なかにはサン・キュウとも言はないのがある。それでも女が席に就いて呉れれば、男はそれを身に餘る光榮とでも心得たものか、席を讓つたが上にまだ脫帽する。これが紳士（ゼントルマン）たる者の禮だとある。

夫婦で戶外を步くとき男は必ず女の腕を取るか、さもなくば後から行くのは歐洲でも米國でも當り前の事で珍らしくはないが、途中で女の靴の紐が解ければ、それは必ず男が結んでやる。これは婦人が腰に擊劍の胴のやうなコオセットを嵌めてゐるから、前に屈むことの困難なためでもあらうが、日本にこの眞似の出來る男子が幾人あるだらうか。赤ん坊を連れてゐる時之を抱く者は必ず男子、乳母車を押すのも十中八九までは必ず父親の役目だ。買物を持されるのが男であるのはまだ可（い）いとして、女の脫いでゐる淡紅色（とき）の毛上衣（スヱツタア）や外套（コオト）の派手なのを、停主が持たされて步いてゐるのは聊か見ものだ。日曜日などには公園で、男親一人（ひとり）で赤ん坊のお守（も）りをさされてゐるのは甚だ多い。

ある佛蘭西人の書いた物にかうある。私も屢かういふ目に遇つた。

紐育の大通でひどく込み合つた電車に乘る。やむを得ないから入口の所に立つてゐる。男子の客ならば降りようとするとき、必然『どうぞ（プリイズ）』とか『御免なさい（エクスキユウス・ミ）』とか斷つて行く。ところが婦人は滅多にそんな事は言はない。指端（ゆびさき）でちよいと私を押して、何んだこんな所に邪魔氣な奴めがと言はぬばかり、まるで道にごろた石でも轉がつてゐるといふ扱ひかた。さうしておまけに恐ろしい一睨み。

英佛米三國で男女の地位の相異は、夫婦ものがホテルの食堂へ這入つて來る所を見ればわかる。二人が相並んで互に睦まじげに微笑（ほほゑ）みながら、食卓で定めの席に就く者は佛蘭西人である。また亭主が先に立つて衣嚢（ポケット）に手を入れ右左を尻目にかけつつ傲然として胸を突き出して入り來れば、細君は後から之に隨ふ、これは英國式だ。ところが見たまへ、米國では令夫人が先づ威容堂々としての御入來、左右の臣下に一瞥を與れながら女王の玉座に就かせ給ふ。亭主はその後から……これが米國流だとある。

外から歸つて來たまま脱ぎ棄ててある亭主の衣物（きもの）の衣嚢（ポケット）を調べることは、米國では細君の最も好んでする仕事の一つである。若し外の女とでも關係してゐる證據品を抑へて、それを法廷に持ち出せば離婚訴訟に勝を制し、敗訴となつたる亭主は、終身その收入の幾部分を別れたる妻に捧げねばならぬ。妻はあとから此訴訟の時の辯護士と再婚するなども往々にして聞く話だ。かうして夫婦關係の事にも金錢の問題が附纏ふので、米國の男子は『黄金』と「女王」との二つの暴君の挾撃ちを喰ふのであ

る。すると一方には例の『群衆』が控へてゐて、よくも事情を聞かずに先づさきに女の方に同情して了ふ。勢ひ一たびかういふ事件を出來した男は、一般社會に對して面目をつぶして了ふ事になる。これは私が新聞で讀んだ話であるが、或男が商用か何かで旅行をした。その旅先から細君へと隱し女へと二通の手紙を書いた。よほど有頂天になつてゐたものと見えて、此の二つの封筒の宛名を取違へて封じ込み、そのまま郵便に出した。そこで內證の方の手紙が細君の手許へ舞ひ込んだのだから堪らない、忽ち右に言ふやうな大事件が持上つたさうだ。

私は理窟だの數字だの法律だのと云ふものに何の趣味をも有たないから調べては見ないが、獨逸や佛蘭西に比して、米國の女は法律上遙かに有利なる地位に在る事だけは事實だらう。また日本は世界に珍らしいほど離婚の多い國であるにも拘はらず、これが法廷の問題となる事は極めて稀であるが、米國では離婚訴訟は每日のやうに聞く、そして多くはそれが女の方の勝訴になるさうだ。

西洋人は皆さうだが、殊に米國の女は日本の女のやうに子供の世話を燒かない。子供の方でも小さい時から、成るべく自分の事は自分でする習慣になつてゐるから、從つて獨立獨行の精神は自然に養はれる。日本では細君は夫に對して奴隸であると共に、子供に對して乳母女中同樣である事が世間並になつてゐる。女としては何より大切ななりふりさへ構はずに、唯もう懸命に子供の世話を燒く。子供はいつまでもいつまでも母親に甘えつく。或西洋人は日本は子供の天國だと言つたが、米國こそは

女の天國である。何はさて措いても先づ『婦人第一(レディズ・ファアスト)』の國である。紐育(ニュウヨオク)の大きなディパアトメント・ストオアの門前には、寒中の吹き曝しに赤ん坊を入れたままの子供車が列をなして、十臺も十五臺も打捨ててあつて、間違はないやうに一々それに番號札がつけてある。まるで日本の芝居の下足扱ひである。早く初孫の顔が覗(のぞ)きたいと言つて、子供製造機また育兒用哺乳器として息子(むすこ)の嫁を貰ふ、日本の舊弊な家庭の舅姑が之を見たらば、果して何と言ふだらうと思ふと可笑しくもある。俗に獨逸の女は下婢によく、佛蘭西の女は妾のやうに、英吉利(イギリス)の女は主婦に適すと言ふが、日本の女は恐らく乳母に適すとでもいふのだらうが、さて米國の女は何に適すると言つたら可からうか。私が下に述べるところを見て、讀者は何か巧い言葉を見出されるだらう。

米國の男子は皆女房孝行を少くとも看板にする。家の中で人の見ない處ではたとひ夫婦喧嘩をやり打擲するやうな事は有つても、人前だけは愼むのである。お客への御馳走に細君に小言を言つて見せる日本の亭主とは千里の差だ。然し親孝行を自家廣告の看板に使ふ日本の實業家よりは、此方が罪が無くて好い。

米國の男子は外にあつては『黄金』といふ暴君に苦しめられ、内に入つては『女王』に事へる。これだから婦人問題も割合に面倒が少く、またかの女子參政權問題なども歐洲に於けるほど解決が困難ではない。現に昨年モンタナ州からは有名なる婦人代議士ランキン女史が出て、下院に於ける萬緑叢

中の紅一點ある事は世人の知らるる通りだ。女史はこの次は更に上院議員として議席に列するだらうといふ事も聞いた。去年の選擧戰の時も、ランキン孃は共和黨（リパブリカン）の候補者として民主黨（デモクラッツ）の政敵を敗つた勢は凄じいものであつた。

米國に於ける『女王』の權威は餘りに極端だ、從つてその弊も無いではない。しかし私は日本の女がまたあまりにその反對の極端にあるがために、社會文化の發達を阻害しつつある事の甚だ大なるを見て、此機會に於て日本婦人の無勢力と米國婦人の勢力とを對照して觀察して見たい。少しく餘談にわたるの罪は偏に讀者諸君の寬容を願ふのである。

日本は幾百年間婦人の人格をみとめなかつた國である。男子がそり返つて歩いてゐると、女子はいつも俯いて歩く國である。亭主が威張り散らして女房を下女か乳母のやうに扱ひながら、それで意外にも賢母良妻を說いてゐる國である。婦人の人格をさへ認めず、之を玩弄視し奴隷視しておきながら、女の偉大なる天職たる賢母良妻の任務を果せよと求めるのは、兩足を縛り上げて、歩けといふよりも無理な注文だ。かういふ無理な注文をする世の中なればこそ、遂にはあの突飛な『新しき女』なぞといふ時勢の畸形兒を產み出して、一種の不健全なる惡風潮を一時、世に彌漫せしめたのである。

私は賢母良妻主義に少しも異存はない。ただ婦人をして眞によく賢母良妻たらしめんがためには、日本婦人の地位を今日よりも遙かに高める必要ありと信ずるのである。

私の知つてゐる或實業家に氣の毒な男がある。その人は世に所謂しつかりした人物とか、手腕家とか、やりてとかいふ類のものだらう。なるほど見るからに俗物らしい顏附をしてゐる。事業の經營には今まで隨分、目的のためには手段を選ばない行り方もしたのだらう、世間にはとかくの批評もあるやうだ。然し今日ではとにかく巨萬の財を抱いて、社會上にも相當の地位を有してゐる人だ。此男が近頃だいぶ老境に入つて何不自由のない身となつてから、朝に夕に苦にしてゐる、と私は語つた一事がある。それは二人の息子の出來が惡いといふ事だ。中學だけは、どうかかうか曲りなりに卒業はしたものの、高等學校の入學試驗は二人とも幾度やらしても駄目なので斷念し、外の學校にも這入れないから、今度は一つ長男だけを米國へやつて學問させようと思ふが奈何であらうと言ふ。その憮然として大息してゐるところはまことに氣の毒だが、今更何とも致し方はない。

この長男といふのは學問こそは出來ないが、決して馬鹿ではない。親の子だけになかなか機敏な男で、うまく親類を口車に乘せては金を引き出し、放蕩の修業は無論してゐる。之を知つてゐる者は不良少年だと云つて惡く言ふが、親爺が既に不良老年で成功したのだから仕方がない。不良老年が不良少年を生んだのに何の不思議がある。梅の木に梅の實が生る、といふよりも更に平凡な事實ではないか。出でては惡辣手段を用ゐて財を積み、入つては酒色に沈湎して遂に今日あるを致した其親の子である。腐り果てたる淫蕩の血は遺傳して、いまその子の血管を流れてゐるだけの事だ。

そこで私は此實業家の細君のことを考へて見た。其人は普通の日本流の婦人で、溫良貞淑といふ言葉を以て形容して先づ差支のなささうな人である。社交の事などには相當に如才ない所を見れば、固より馬鹿ではない。しかし普通の日本人として夫の亂行に對して敢然として之を制止する事も出來ず、從つて淫蕩の血が、神聖なるべき家庭に流れ入るのを默視するほかは無いやうな境遇にあつた事は言ふまでもない。されぱとて夫を感化しまた子を導くだけの力もなく、奧樣といふ頗る體裁のよい美名の下に、一種の乳母と下婢とを兼業して今日に至つたのである。西洋の事は暫らく別として、日本に於ても古來賢母と言はれた女は多くは所謂『男まさり』で、その夫をして已れに對する相當の敬意を拂はしめた婦人であつた。子を立派に教育するだけの頭のある婦人は、夫に對してもまた十分なる感化力を持つてゐたのである。一夫一婦では滿足し得ないといふ男子の野獸性、また旣に習ひ性となつて矢鱈に威張りたがる男子の虛榮心――それは女子の虛榮心のやうに單純でないだけに一層惡むべきものだが――に制動機(ブレイク)をかけるだけの力が、是非とも婦人の手に存在しなければならぬと思ふ。また殊に生存競爭の烈しくなるに從つて、男子が物質的活動に忙殺せられて殆ど餘力を剩さざるとき、文學敎育宗敎藝術或は思想問題等の不生產的な精神的方面の事に關しては、少くとも家庭の內部では婦人の努力に俟つところ甚だ大なるものがあらねばならぬ。これなくしては遂に一國の文化の發達は多大の障害を受けるので、今日日本の多くの實業家やその他或一部社會の有樣を見て、私は特に

痛切に日本婦人の勢力の足らない事を感ぜざるを得ない。婦人の眞の自覺と覺醒とによつてその地位の向上をはかり、やがて遂に男子をして婦人に對するその暴慢の態度を改めしむるの域に達しなければ、いくら道學先生や宗教家や文學者などが論じ立てたとて、又論語を振り廻はして見たとて、到底今の日本に於ける物質文明の餘弊を矯める事は出來ないのである。西洋は言ふまでもないが、この日本に於てすらも男子の亂行、放埒、沒趣味、無理想、無信仰が、異性の力によつて制止せられ感化せられ匡正せられた事例は決して尠くないのである。

米國は卽ち最も著しいこの異性の力によつて、その黃金文明、群衆文明の餘毒を免れつつある國だ。米國にして若しこの『女王』の勢威なくんば、國を擧げて騷擾の巷となり、野卑粗硬なる亂民の寄合ひと化することであらう。

談は少しく岐路に入つた。いやに女の肩を持つと言つて笑ふ人もあらが（現に私の親友の某教授は、わたくしがかういふ議論をしたとき、『どうもこれは男だけに聞かして置くのは惜しいよ』と皮肉つた。其人は細君に白粉を用ゐる事を嚴禁したといつて得意顏である人だ）、私は更に以上述べたる立場から見て、米國の『女王』が其國一般文化の發達のために貢献するとこの如何に大なるかに就いて一言したい。

春洋丸に乘つて私が太平洋の航海をする時であつた。長い船旅の退屈しのぎに、讀書や無駄話にも

飽き果てたといふ連中が集まつて、どの船でもよく演る甲板遊戯に、老人連までがきやつきやつ言つて騒いでゐる。米國特有の國戯で既に日本の運動界を風靡してゐる野球の眞似をするのには、バットと大きな柔かなボオルとを持出して來て無闇にたたきつけてゐる。長さ五六尺もある杓子のやうな棒で木の平圓板を突つつく甲板球突(デッキビリヤアド)は、例によつて一番よい腹ごなしである。かういふ遊には少數の日本人船客も大勢の米人の中に交つて、いつも盛んに演るのだ。喫煙室の無駄話に身が入つて出て行かないでゐると、西洋人の方からわざわざ呼びに來るなどは、頗る日米親善の實を擧げてゐる。ところが、ここに一つ西洋人のみでなければ決してない、そして日本人船客の滅多に加はらない遊戯(ゲイム)が一つあつた。それは空瓶競爭(ボットル・レイス)である。

足の不自由なために、いつも側の籐椅子に腰をかけて見物してゐる私は、特に此遊戯を興ある事に思つた。鐵道(レイル)のやうに二條の平行した曲線を地圖狀に白墨で書いて、其線上には一尺位づつの間隔をおいて空瓶がいくつも列べてある、それが通路だ。布片(ぬのぎれ)で目隠しをされてこの通路を歩むものは必ず男子である。そして男の肩先から長く後へ、右と左に垂れてゐる布片の端を背後から婦人が兩手に持つて之を操りながら進むのである。男子の方は目隠しをされてゐるから何も見えない。唯無闇に當てすつぽうに前進すると、壜を蹴飛ばして脱線する。脱線させないやうにと背後の女は適宜に右や左に布片を引つぱつて方向を誤らせないやうにして進む。男女が同一體になつて男子の一本調子の前進

が、後にある繊弱き女性の手によつて巧く操られ、壘を蹴倒さず脫線もせずに進み終へた者が、この競技に最後の勝を制するのだ。如何にもこれは西洋人のしさうな事で、又日本人の多くが爲すを好まざる遊戲だらうと思つた。

私はこのつまらない一つの遊戲を見て、女子に相當の勢力ある歐洲先進國の文明の或一面を見せられたやうな氣がした。米國の女の勢は更に之を極端にやつたやうなもので、背後に立つ女が單に布片を引くだけではなく、恰も男に軛をはめてぴしぴしとそれを鞭つが如き行りかたである。それ位にしなければ、米國の如き植民地時代を距ること未だ遠からざる黃金萬能の國に於ては、物質文明の弊竇を防ぐの道はないのである。若しそれ婦人が男子に對する勢の絕無なる日本の狀態を此遊戲に譬ふれば、背後にある異性の手に布片もなければ鞭も無いのと同然、男子の亂行、惡辣、不人情が盛んに空瓶を蹴飛ばして盲目的突進をしてゐるその後から、妻たる女はただ無意味に、唯おとなしく手を拱いてくつついて行くに過ぎない。異性として男子に對して爲すべき任務は、その半ばをも盡くしてゐないのだ。米國式も極端だが日本流も亦餘りにひどい。男の方はと言へば人生五十年の間、朝から晚まで齷齪として得たるところのものは唯黃金と虛名とあるのみ。老境に入つて行きつく所まで行つてから、はじめて氣が附いたやうに息子の出來が惡いなぞと言つてゐる氣が知れない。息子どころか、自分そのものからして既に物になつてゐない不良老年ではないか。甚だしいのになると、自分の腐れ果

てた血がその子に遺傳してゐる事は棚にほり上げて、『子供はお前の育てかたが惡いから』と細君を責めてるのがある。女こそ氣の毒なものだ。日本といふ國は女のためには牢獄であり、地獄である。

閑話休題(それはさておき)、米國の男子は生れてから死ぬまで一生涯の大部分は、殆ど婦人の手によつて教育せられ指導せられ監督せられてゐる。襁褓の時代や幼稚園時代は勿論の話だが、先づ學校に行くやうになると女の先生に教へられるのである。日本では小學校教育は殆ど男子の手によつて行はれ、教師總數の僅かに四分の一が婦人であるさうだが、米國の小學教師は十人中九人までが婦人である。過去幾世紀間にわたれる男子横暴の歴史のかげに隱れて、人としての力を半ば失つて了つた日本の婦人には、かういふ仕事が適しないためであるか、或は他にもつと重大な原因があるか、それは今ここに問ふところではない。とにかく事實はさうだ。

それから上の中學時代以後は、學校の先生は男子であつても家庭では矢張り父親よりも母親に多く世話されるのは、日本でも同じ事だ。さてそれからいよいよ一人前になり結婚をすると、今度はまた細君によつて教育監督せられることになる。

五　婦人と文化

米國のやうに物質上の發達の急速な國では、男子はその日その日の劇務に忙殺されて殆ど讀書など

をする暇のないのは、日本の近頃の實業界の人たちと同じである。宗教や藝術や文學やその他一般の思想問題などに就いても、自分でそれに注意してゐるだけの餘力が無いのは、まことに無理からぬ事である。しかし若しかういふ狀態で行けば國としても民族としてもその文化の發達には大なる缺陷が出來てくる。そこでこの缺陷を補ふ任務は、米國の如き國に於ては勢ひ婦人の雙肩にかかるのだ。私の狹い見聞の範圍から考へても、文藝上若しくは思想上の最近の問題などに就いては、專門の人は固より別問題だが一般から言へば、男子よりも遙かに其細君の方が書物も多く讀んでゐれば研究もしてゐる。藝術上の趣味の事などに至つては、亭主は全く細君の指導を仰いでゐると言つても可い有樣である。私は自分の商賣から矢張り文學の話をするものだから、さういふ時は細君やお孃さんの方が盛んに喋舌り立てて、御亭主の方は唯默つてそれを聞いてゐるといふ有樣だ。男子でも相當の階級の人は昔學校で沙翁やチョオサアは讀んでゐるから、うろ覺えでもこれらの古い文學に關する知識だけはあるが、ブリッヂスやイエイツやメイスフィイルドの物を讀んでゐるのは、專門家の特別の人でない以上は先づ婦人である。だから英米の新作家や新詩人で米國の讀書界に認めらるるには、先づ新聞の次ぎ藝術の批評家――新聞はかかる場合に於ても大なる勢力である――に認められて、それが次いで婦人の人氣に投じなければならぬ。例へば先師ヘルン先生が日本の事を書かれた文章の米國に於ける聲價は實に非常なもので、今は既にスティイヴンソンやキプリングと同等に扱はれてゐるが、これは先生

の纖麗巧緻な文體が英米ともに、特に婦人の心を動かすこと大なるものがあるからだ。先生の文章を左程に思はないと言つた男子を幾人も知つてゐるが、婦人が先生の文章を喜ばない人を私は未だ曾て一人も聞かない。また曩にわたくしが或日本の雜誌に『愛蘭文學の新星』（本集本卷に收む）として紹介した、一幕物の新作家ダンセイニ卿の作物の如きは、英國の方でまだその眞價を認められない昨年中、早くも米國の文壇と劇壇とを風靡して實に素晴らしい勢で持囃された。あれなども固より藝術品としての價値の大なるものには相違ないが、此人の作物の性質上、かの粗硬な趣味を持つ人たちの心をも動かすといふ男性的の文學――若しこんな變挺な言葉が許されるとすれば――ではなく、寧ろ幽趣微韻を解し得る鋭い神經を持つた女性の心を動かしさうなものであつた。實際あの一幕物が昨年紐育(ニユウヨオク)のポオトマントオ座で上演せられた時は、知識階級の婦人間の評判は實に非常なものであつた。どの芝居でも晝興行(マテイネイ)は固より九分まで婦人の觀客であるが、夜の部にしても矢張り細君が行くと言へば亭主(ホスト)もいやとは言へぬ國だから、男子も解る解らぬに論なく後から隨いて行く。婦人が夜の外出の護衛か、或は娘さんならば先づ附添(シャペロン)の代りにでもなつて、男子もいやいやながら芝居見物に行く。見てゐるうちには面白味も解らうし、細君や孃さんの講釋も聞からうといふもの、その中には株式相場の方とは少し異(ちが)つた趣味もおのづから養はれる事になる。『黄金』王の奴隷となつて終日働き盡くした人には讀書などよりも却つてかういふ事の方が趣味涵養の法として適するのであらう。（勿論これは低級な活

動寫眞のチャアリ・チャプリンとか、米國一流のメロドラマや滑稽歌劇(オペラ・コミック)などの、藝術の範圍以外の物に就いて言ふのではない。踊子が例の肉襦袢(タイツ)一枚の裸體になつて躍り狂ふバアレスクの如きに至つては、滿場殆ど皆男子の觀客のみである)。何を言ふにも細君の睨みが利いてゐるのだから、さういつてもいつもバアへ行つて醉拂つたり、カバレェに行つて歌女(コオラス・ガアル)の踊を見てゐる譯には行かないのである。如何な道樂者でも時には夜は家にゐて新聞の夕刊でも讀むとか、乃至は己れよりも學問もあり趣味も高い細君の講釋や說法を聞いて、おとなしくして居なければならぬ次第となる。

私はいま芝居と讀書とに就いて言つたが、美術展覽會(未來派(フユウテユリスト)や立體派(キユウビスト)のが米國では隨分流行るが)でも博物館でも、入場者の多くはまた婦人である。これなぞも著しく日本とは異なる點だらうと思ふ。文展や院展は別問題として、博物館の陳列品などに對して眞に興味を有つ日本の婦人はまださう澤山はないやうだ。

昨年佛蘭西の女優サラ・ベルナアルが、その隻脚を曳ずつて米國の各地を巡業した時であつた、私はそれをボオルティモアの抒情詩座(リリック)で觀たとき、すぐ後の席にゐた或男の鼾聲雷の如きを耳にして驚かされた事がある。佛蘭西文化の美を貴んで努めて自國文明の短を補はうする米國では、教育ある婦人の佛蘭西語に通じてゐる人が多いのは當り前である。ところがサラ・ベルナアルは全く自分の國語で演ずるのだから、細君の方には解るだらうが、御亭主には足の一本しきやない女優の藝を見ただけ

では何の面白味もない。起されても起されても、またぐらぐらやり出すのである。これなどは亭主にお供を命じたまではよかつたが、まだその上、一段のお仕込みが足らなかつたものと見える。かかる場合、日本ならば亭主が觀に行かないのは無論のこと、細君の觀劇さへ『馬鹿め』の一喝に葬られて、おじやんになるところだらう。

英吉利の新しい詩人や文學者は、殆ど皆誰でも一度は米國へ來て自作の朗讀講演をやる。私の居る間にもバアナド・ショオが米國へ講演に來るといふ噂が新聞に出たので、私なども期待してゐた方だが、例の皮肉を以て自國の惡口を米國で演られては堪らぬとでも思つたものか、英國が彼の渡米を禁じたとか禁ぜねとかの噂だけでその儘になつた。しかしアルフレッド・ノイズはプリンストン大學で英文學講義の傍ら紐育その他で講演し、メイスフィイルドやギブソンも私の滯米中に議演朗讀の巡業(?)を演つてゐた。さういふ時にも入場者の七八分までは矢張り婦人である。日本ならば先づ男子の學生が多數を占めるといふところだらう。

私は屢詩人倶樂部の會合などに行つて見たが、これなども婦人の出席者が大多數を占めてゐる。殊に自作を朗讀したり講演をしたりする詩人にも婦人が多い。實際現代各國の文壇で、女詩人の數の多いこと恐らく米國が第一であらう。いま米國詩壇の中心問題のやうになつてゐる自由詩の運動の旗頭エイミ・ロオヱル女史はハアヴアアド大學總長の令妹で、この人が近代の佛蘭西詩人を論じた昨年の新

著は既に日本の讀書子の間にも行はれてゐる。その他ゼッシ・ビ・リッテンハウス、エディス・トマス、ジョセフィン・ブレストン　ピイボデイ、アナ・ブランチ、エラ・ホヰイラ・ヰルコックスなど米國詩壇に覇を稱してゐる人は、現代に於ては女詩人の方が遙かに多いのである。これはわが國史に於ける婦人解放時代とも云ふべき平安朝の文學に紫式部、淸少納言、和泉式部、赤染衛門等巾幗の才人が輩出したのと思ひ合はせれば興味ある現象だとおもふ。

之に就いて思出すのは昨年日本に來遊し、次いで米國にも講演に來たタゴオアである。氏の作物は早くから英米の讀書界に持囃され、私もはじめて『ヒッパアト・ジャアナル』の誌上でその紹介を讀んだ頃、その思想は吾々東洋人にはさまでらしくないものだと思つた。のち詩集『チトラ』や『ギタンヂャリ』を讀み、その他散文の諸作に接するに及んで流麗なる文辭の美には打たれたが、思想傾向の上に於ては吾々にはさう新しいものでは無いといふ感を益々深くした。それから後、丸善へタゴオアの本が澤山に來ると日本でも非常な評判になつたが、私は依然として何故あの作物が左程までに東洋思想の日本人を感服させるのかを不審に思つた。タゴオアが日本來遊の時の熱烈な歡迎振りは、私が外遊中の事であるからよくは知らないが、何でも『詩人とはどんな商賣をする人です』といふ奇問を發した實業家までが、氏を歡迎したさうである。それから氏は米人へ來て桑港に上陸した。そこでは一二回講演をした切りで、何故だか直ぐに引上げて東部に來た。平素タゴオアの著作を愛讀して

ゐる米國の讀書子は固よりのこと、知る知らぬに論なく氏の來遊を待ち、紐育あたりの各書店にも其頃は澤山に氏の著作を陳列棚に出した。しかしいよいよ講演をしてから後は、評判はさほどでもなかつた。婦人連からして思つた程には騷がない位だから、男子の方は寧ろ冷やかに迎へたのであつた。印度古代の吠陀哲學の思想傾向の人が現代文明を呪ふの聲が、米國の人には喜ばれなかつたのか、或はタゴオアの講演が寧ろ氣持のよいほど單純な說で、小理窟などを少しも言はないのが却つて一部の人には幼稚とか淺薄とかいふ風に思はれたためか、また大聲俚耳に入らざるがためか、その邊の理由は知らないが、とにかく期待したほどには歡迎せられなかつた。詩は好いが講演は面白いと思はぬと言つた人もあつた。とにかくタゴオアは早く米國を切り上げて歸途に就き、船に乘つてから米國の事を賞めてゐない談話をしたその筆記を、私は或新聞で讀んだ。タゴオアのこれらの講演は既に一卷の書に集められて最近に出版されたが、果してその詩集ほどに人々が愛讀するかどうかを私は知らない。

私が歸朝する少し前ごろ、佛蘭西から哲學者のベルグソンも來たやうだが、これは全く最初から微行であるらしい。講演をしたらば、さぞまた澤山に婦人が聽きに行つたことだらう。

六　婦人の敎育と活動

話がまたしても横道に外（そ）れたが、米國の婦人はさすがに男子を抑制（コントロル）してゐるだけあつて確かに偉（えら）いところがある。第一體育が發達してゐる爲に體格の立派な事は言ふまでもないが、これは風にも堪へぬひよろひよろした者を美人と考へた日本とは[illegible]し異ふ。歐洲の方でも今度の戰亂以來男子不足の結果、今までは男子でなければ出來ないとせられた種々の勞働が女子の手にうつり、それが立派に女の手によつて爲し遂げられてゐる。かく婦人の實力が事實の上に證明せられた事が、戰後歐洲に於ける女子の地位を高めるに與つて力あるだらうとは、すでに多くの識者の信ずるところである（たとへば目下英國文壇の流行兒であるエルズ氏が昨年の新著『將來は如何（ホワット・イズ・カミング）、歐洲の豫想（ユウロピイアン・フオアカアスト）』中、婦人問題を論じた一章にも此事を說いてゐた）。かういふ點から言へば、在來すでに米國婦人の地位の高かつた事は當然の結果であらう。それからまた知識や教養（カルチュア）の方面から言つても、米國の婦人は男子に比して決して劣るものではない。米國の第一流の大學の或ものには、本科の方に女子は居ないが（それは別に女子大學があるから）、專攻科或は大學院と稱すべき課程（コオス）では男女混合で、これは皆ドクトル試驗を受くべき人たちである。多くは既に大學卒業後、教師その他の職業に從事してゐた人だ。これが文學の方などでは十中の八九まで女子であつて、その學業の成績も全體から言へば確かに男子を凌駕してゐるのは事實である。學才や腦力の點に於ても婦人が本來必ずしも男子に劣る者でない事は、最高の教育を受けて居る此種の米國婦人が充分に證明してゐる。

また米國で婦人の地位の高いのは女子教育の盛んなことが重要なる一原因である事は今更ふまでもないが、各地の州立大學は多くは男女共學で、男も女も全く同じ講義を聞くのである。ハアヴアド、コラムビヤ等の大きい私立大學には女子を入學させない代りに、別に同じ教師がその附屬女子大學とも云ふべきラドクリッフ・カレッヂやバアナド・カレッヂに教鞭を執つてゐる。だから結局、男子とほぼ同じ大學講義を女子にも聽かせるわけである。また別に純粹の獨立した女子大學にはブリン・モア、スミス、ヴッサア、ヱルスレイ、ガウチヤ等の如き、かなり程度の高い大規模のものが多い。そしてこれらは最も多く文學藝術の方面の教育に力を注いでゐる事も注意すべき點であらう。

米國の女子が知識の程度の高いことは、日本人たる私が感心するばかりでなく多くの歐羅巴人が舌を捲いて驚嘆してゐる。私は玆に佛蘭西の文人マクス・オレルの米國紀行から、次の興味ある一節を引用しよう。

私は紐育の或會合の席で遇つた二十前後の美しい米國婦人を常も思出す。はじめて紹介された時、その女は隣席の或婦人と巴里で流行の帽子の話をしてゐた。そして今度私の方を向くと、だし抜けに、

あなたルナンの『イスラエル民族史』をお讀みになつて?

と來た。私は暇が無いのでまだ讀まないと正直な所を白狀すると、其女は自分が讀んだ此名著の內

容を話して聞かせた。それが少しも氣取つたり學者振つたりする風がなかつた。此事を私の著書の中に書いたのを讀んで、二三の佛蘭西人がかう言つた、

『その米國の美人といふのは金縁眼鏡を掛けてゐたらうね。』

ところがそんな風は少しも無かつた。ちんと整つた、そして意氣な好みの服裝(みなり)をした、極めて女らしい女であつた。

マクス・オレルがここに言ふやうな女は、確かに米國では珍らしくないと思ふ。

罪惡のかげには必ず婦人があるといふが、米國では私どもの敬服して措かない色々の方面の活動には、必ず裏面に女性の働がある。宗教運動、平和論、慈善運動、禁酒運動、公娼廢止、凡てかういふ類の、米國が世界に誇るに足るべき立派な活動には、すべてその背後に有力なる婦人の手があつて之を動かしてゐるのだ。『群衆』と『黄金』との暴威があるにも拘はらず、米國の文明が世界を動かす底力を有つてゐて、物質萬能の半面にまた偉大なる理想主義精神主義の美をも具へてゐるのは、全く『女王』の勢力あるがためである。

亭主が酒飲みである事を女が喜ばないのは、どこの國でも同じだ。ことに西洋人のは日本のやうに唯晩酌なぞといふのではなく、白晝用向きで外出の途中にすら居酒屋(バア)に這入つて飲むのだから、仕事の妨となる事も甚だしい。殊に米國の大都會には共同便所の數が甚だ少いために、この居酒屋(バア)に這入つて

用を便ずるのが一番都合がよい。またその居酒屋(バア)なるものが甚だ手輕なので、街上で知人に逢ふ、すぐに握手したまま其手を執つて手近に在る居酒屋(バア)に引張り込むといふ有樣、これでは細君が苦(にが)い顔をするのも無理はない。そして酒と色とが離るべからざる關係のものである以上は、禁酒運動と公娼廢止とは實は二にして一、一にして二なるものに過ぎない。合衆國四十八州中、禁酒令を布いたものは既にその半に近いが、最近既に上院に於ては全國禁酒の法案を通過したさうだから、米國が國を擧げて禁酒(ドライ)となるのも遠からざる數年の後であらう。殊に今次の戰亂のため、何よりも大切な食料品たる穀類を酒に化して消費するのはよくないと云ふ議論や、或は國家の此一大危機(クライシス)に際してただ徒らに醉を買ふ如きは、人として愼むべきだといふやうな說が益々有力となつて、禁酒運動は米國に於て此機を利用して大なる成功ををさめたのである。

いよいよ禁酒令が出來て、現にこれがたとひ表面だけでも立派に行はれて行くところはさすが米國の偉(えら)いところだ。私が桑港から紐育へ行く大陸横斷の汽車に乘つた時、最初の晩は食堂車の卓上に酒(ワイン)目錄(リスト)が出てゐた。次の晩にはそれが無いから黑人(くろんぼ)の給仕に訊くと首を振つてゐる。なる程同じ汽車でも禁酒州(ドライ・ステイト)のなかを走る間だけは一滴の酒も許されないのだ。次の晩には酒目錄(ワイン・リスト)が再び食卓の上に現はれるといつた風である。酒好き人は車中で辛抱が出來なくなると、こつそり豫め忍ばせたるあのピストルと稱する衣囊(ポケット)用のキスキイ瓶を出して、汽車便所のなかで錠を卸して置いて飲むなどの珍談

も聞いた。また私がボストンから日本へ歸るとき、五六日間の汽車旅行で寢臺車（プルマン）で搖られた疲勞の揚句、沙港（シアトル）へ着いて久し振に日本食を食べに行くと、日本酒（さけ）は一滴もないといふ。日本料理店で酒を飲まさないと云ふのは先づ日本の本國では滅多にない事である。なるほど沙港（シアトル）の在る華盛頓州は、つい近頃から禁酒（ドライ）になつてゐるので、私が三四日間船待ちに滯在中も、街上で酒氣を帶びた二三の米人が、巡査に拘引せられた事を新聞で見た。しかしまた外（そと）ではとにかく、家庭内ではと思ふ人もあらうが、それも或程度までは例の細君の睨みが利（き）いてゐるのだ。酒造業者の猛烈なる反對運動よりも、眞面目な婦人の運動の方が勝を制するところは、さすが米國の面白いところである。

　物質のための劇務に忙殺される男子が、人生問題や宗教信仰の事に心を傾ける餘裕のない間に、婦人は此缺陷を補ふだけの活動をする。日曜日には無理にでも亭主を引立てゝ教會に同行する者は米國婦人である。どんな教會の說教でも、まさか致富の要訣を說く者は無いから、自然に人生や宗教や道德の問題をも考へさせられる。またかの平和運動の如きも、その根柢たる思想に於て基督の教と密接の關係があるのは言ふまでもなく、そのほか赤十字とか慈善運動または教育事業などに、米國の富豪が歐洲人を驚かすほどの巨資を惜し氣もなく出すのは、背後に力強き女性の活動が潛んでゐるからである。

　十九世紀の英國に功利唯物の弊極まれるとき、カアライルはその熱烈矯激の文を以て一世を痛罵

し、ラスキンもしばらくその藝術批評の筆をさめて理想と道德と信念とを說いた。詩人モリスも亦俗惡なるコマアシャリズムに反抗して、自ら裝飾美術の製作に從事せるほか、椽大の筆を揮うて社會改良を叫んだ。むかし那翁（ナポレオン）が店番（ショップ・キイパアズ）と嘲つた英國民の文明が、今日なほ獨逸の如くに俗化して居ないのは、かくの如き大思想家が大なる解毒劑（アンテイドオト）を與へてゐたからである。豫言者としてのカアライルやラスキンやモリスが野に叫ぶ聲に、國民が夙に耳を傾けたからであつた。等しく英語國民たる米國に於ては、またエマソンやソロオがあつた。そして同じ流れの思想が今では婦人の絶大なる勢力によつて實行の方面に現はれ、その物質文明の餘毒を除きつつあるのだ。

私は決して一部の宗教家のやうに、またタゴオアの如き思想家のやうに現代の物質文明を呪ひたくはない。ただ個人の生活が靈と肉と、精神と物質との完全なる調和の上に建てられなければならぬ如くに、一國家一民族の文明もまた靈肉の完全なる融合一致の上に建てらるべきものを信ずるが故に、米國の婦人が精神的にその國文明のために貢獻するところの如何に大なるかを說いたのである。中世の騎士（ナイト）が出陣の折に兜の緒を締める者は女であつた、といふ言葉に私は深遠なる意義ありとなす者である。娘子軍だの婦人參政だのといふ事よりも、新しい意味の賢母良妻といふ事を眞面目に考へて見たいのである。私は近頃日本の富豪が女子の高等教育のために資を投ずる人の多いのを聞いて、心からなる喜びを禁じ得ないと共に、それが單なる家事經濟といふやうな實用的方面よりも更に一步高く

踏み出して、文學や宗教や藝術や教育や道德などの所謂金錢(かね)にならない方面の仕事に十分の素養と理解とのある『人』として新しい婦人が一人でも多く社會に出して貰ひたいのである。今や日本の如く盛んに米國化せんとしつつ、而も『女王』を有せざる『黄金』と『群衆』とみの文明は、眞に戰慄すべきものであるからだ。

米國では婦人が何故さう貴ばれるのか、といふ問を私も屢訊かれた。その原因の一つは言ふまでもなく歐洲中世の騎士時代に於ける女性に對する、宗教的崇拜の遺風ではあらうが、特にこれが米國に於て盛んであるのには、また別の理由があると思ふ。卽ちその植民地時代(コロニアル・エイヂ)に歐洲から米國に移住したものは多くは青年であつた。徒手空拳を以て新しい土地に新しい運命を、自分の努力で開拓しようとする血氣盛りの青年が多數であつた。物質活動の出來ない老人や女子供は成るべく出て來ないといふ風であつた。たださへ青年には浪漫的(ロマンテイク)な熱情がある上に、彼等は中世からの浪漫的(ロマンテイク)な女子崇拜の精神を傳へてゐる。殊に男子に比して婦人の數が甚だ少かつたのであるから、この崇拜と尊重とは益々甚だしくなる。今日でも東部諸州よりは、植民地時代を距ること遠からざる西部諸州に於て、女尊男卑の風は更に甚だしいと聞いてゐる。私は西部の事はよく知らないが、紐育やボストンでは電車の中に婦人が立つてゐる事は少しも珍らしくないのに、中西部(ミツドル・エスト)より西の方では數年前までは、殆ど電車內に立つてゐる婦人は無かつたさうだ。苟も紳士(ゼントルマン)たる者は此地方では皆必ず婦人に席を讓つたものだと

聞いた。

米國に於ける婦人の威勢が餘りに强いために、またその弊害もあるといふ事を私は多くの米國の男子から聞いた。しかし米國も極端だらうが、日本もまた餘りに極端である。そこは矢張り英佛の如き先進國の中庸を得たる男女の地位を考へて見なければならぬと思ふ。日本の女は、世界の文明國のうちで男の我儘に最も都合よく出來た女である。今の日本の社會の病疾が此原因に基づくものの甚だ尠くない事を思ふと、私は米國に於ける『女王』の威力の決して無意味でない事を切言したいのである。

私は嘗て閑を偷んで、或米人が日米關係を論じた新刊書を讀んだ。これはよほど排日的な議論を書いた本で、日本人に歸化權を與へる事の不可なるを言ふ理由の一として、女に對する日本人の思想が根本的に異なれるため、之を米國の社會に入れる事は困難だと說いてゐる。併し米國の東部に於ける日本人などは、婦人に對して立派に米國式に行つてゐる人の多いところを見ると、こんな事は少しも反對理由にはならないのだ。ただ之を日本文明の一問題として見るならば、他山の石として聞いておく値打はあると思ふ。

米國へ行つた日本の男子は、日本も大に米國に學ぶべき點があるが女の事だけは學びたくない、と殆ど皆異口同音に言ふ。私は平素からそれとは全く反對の意見であるために、特に此『女王』の一項を長たらしく書いた。冗漫にわたつた點は讀者諸君に對してまことに濟まないと思ふ。

七　日本と米國

日本はいま海を隔てて、世界に於ける最も大なる三つの謎の國に取卷かれてゐる。希臘神話にある女頭獅身の怪物スフィンクスが與へた謎は、之を解き得なかつた總べての者の運命を危からしめたやうに、わが國運の將來もこの三つの謎の解決如何によつて決せられる。ところが此三國は何れも人口多く、領土の餘りに尨大なるがために統一が困難なばかりでなく、また人種の複雜なるがため、何人も能くその國民性を理解して將來をトし得る者がない。三つの國とは言ふまでもなく露西亞と支那と米國とであるが、前二者の事はしばらく措き、米國のことは米人自身すらもよくは解らないのであらう。これは日本のやうに小さくてよく纏まりのついた國とは、到底同日に談るべからざるものがあるからだ。その證據には米國を政體の上から觀察した本には、昔からトックヴイユの『米國民主政』や、前駐米英國大使ブライス子爵の『米國共和政治』の如き、今日では殆ど不朽の世界的名著になつたものがあるには拘はらず、米國人の生活、その國民の心理などを書いた本には、眞の名著として信賴すべきものが甚だ少い。殊に國民性とか或は國民の內的生活とかいふものは、其時々の周圍の情況に支配されて多かれ少かれ變化流動を免れない。單に自己の觀察を基礎として確信ある斷案をこれに下さうとするが如きは、特に米國の如き國を對象とする場合、殆ど無謀の擧だと言つて可い。

米人の國民性やその生活を書いた本のうち、比較的新しいもので而もその著者が第一流の文人や學者であるものを通覽して見ても、眞に感服するほどの本は甚だ少い。スティイヴンスの『弗（ドル）の國』、マルクス・オレルの『ジョナサンとその國』『米國での一佛人』などは、著者が著者であるから別問題としても、近代の小說家で最も心理解剖にたくみだと言はれてゐる故ヘンリイ・ジェイムズの『米國情景』や、エチ・ジイ・ヱルズの『米國の將來』などは、これらの著者の筆としては決して傑作とは目すべからざるものだ。また學者の書いたものでは故ミュンスタベルヒ教授の『米人の特性』、おなじくハアヴアド大學の英文學教授ブリス・ペリイ氏の『米人の心』、コラムビア大學の劇文學教授ブランダア・マシュウズ氏の『未來の米人』なども、決して著者の名を重からしむるに足る傑著だとは考へられないのである。唯ミュアヘツドの『對照の國、米國』、ヴン・ダイク教授の『米國の精神』は、私はまだ讀んで見ないから何とも言へない。

　既にかういふ人たちでさへ成功しなかつた仕事に私のやうな者が飛び出して、一つ演（や）つて除けようなどと云ふ野心（アンビシアス）深い企（アテムト）てをするのでは決して無い。殊に私は自分の仕事である文學の研究のために合衆國東部の二三の大學を歷訪したに過ぎないのだから、眞に米人の生活を批評し說明し得るといふほどの自信を有たないのである。ただ自分の狹い見聞を基として、以下少しく米人と日本人とを比較して考へて見たい。

人種の色こそ異なれ、ひとしく横目竪鼻の人間が集まつて國を樹てながら、米國と日本とほど甚だしく違つた國が世界にまたとあらうか。

假に今日人類文化の中心地が歐洲に在りとする。想像の便宜上、一脚を失つた私が巨人となつてこの中心地に立ち世界を跨いだとすれば、切り棄てたる短い方の左脚の一端は米國であり、長い右脚の一端は日本に達する。日米の兩國は**世界文明の兩極端**に位して、漫々たる太平洋の水を隔てゝ相對峙してゐるのである。米國は西洋の最も西洋的なものであり、日本は東洋の最も東洋的なものだ。この二國の間の理解を進めんがためには、政治上經濟上の利害關係を外にしても、なほ十分これらの點に就いて考へて見ねばならぬ。

女性に對する男性の態度が根本的に異なることは既に述べた。しかしその他の點に於ても日米兩國は不思議なほど、事ごとに對照（コントラスト）の觀を呈してゐる。先づ地理上から言つても日本は島國で米國は大陸だ。尺寸の地をも惜しんで餘さじと耕せる小さき國と、茫々漠々たる大平原に犁鋤を加へずして顧みざる大國とは、全く趣を異にしてゐる。すべてが小規模に能く纏まつた國と、無闇にだだ廣くて纏まりの附かぬ國とは大きな差だ。日本は今日現存せる世界の文明國のうち最も古き歴史を有てるものの一つだが、米國は全く宮殿と古城とを有せざる最新の文明國である。從つて日本には歴史が遺したる多くの因襲や習俗（コンヴェンション）があるが、米國は全くさういふものに囚はれてゐない國である。敎權　義保守

主義と自由主義急進主義との差だ。日本にはいくら船成金、紙成金、骨董成金、襤褸(ぼろ)成金は出來ても、國として矢張り『成らん金』の貧乏國であるが、米國はいつも『黄金』王の君臨せる富國である。日本を米國と較べると、此點が恐らく一番心細からうと思ふ。

日本は東洋風の立派な君主國であるが、米國は西洋風の立派な民主國である。日本は家族主義、米國は個人主義。階級の區別の嚴格な國と一切平等無差別の國と。官僚の勢力ある國とボスの勢力ある國と。基督教國と佛教國と。これらの差は、男の天國と女の天國との差よりも更に大きい。

日本人は古來農業國民 して古くから一定の土地に居住し、動く事を好まない固定の民族である。可愛い子には旅をさせよと言ふほど、旅を憂いもの、つらいものと考へる民だ。米人はむかし水草を逐うて移住せる遊牧民族の子孫、ことに故國を厭うて、はるばると大西洋のかなたまで出掛けて來たほどの移動の民だ。今でも一年中、女房が儉約をして置いて夏には遠いアラスカあたりまでも旅する事を、人生無上の快樂と心得てゐる民である。

かうして一々反對の點を擧げれば殆ど際限はないので、寧ろ類似共通の點を見出す事の方が困難なのかも知れない。歐洲はちやうど日米兩極端の中間にあるがために、まだ日本とはいくらか一致の點を見出し易いので、殊に西班牙、伊太利等の羅甸民族の國とは、よほど類似した點が多いやうに思はれる。現にまた米人の或者の如きは、日本が獨逸に似てゐると言つて頻りに氣にしてゐる位ではないか。

八　公開と祕密

日本と米國との著しく異なつた點のうちには、確かに日本人の短所にしてまた米人の長所なるものが甚だ尠くない。日本文明將來の大なる發達のためには、私どもが在來の偏見や執着を棄てて、太平洋彼岸のこの新進國に學ばなければならぬ點が甚だ多いのである。

私は先づ日本人の東洋式祕密主義、獨占主義、墻壁主義の氣風と、米人の西洋式公開主義、共同主義との著しき對照あることを指摘したい。

日本人は何と言つても、しめやかなる四疊半裡の淺酌低唱を好む國民であるが、西洋人殊に米國人は、電燈の光もまばゆき大廣間に、男女が幾十組幾百組となく集まつて相抱いて踊り狂ひ、笑ひ興ずることをこの上もなき快樂とする民である。鴛鴦の契睦まじき夫婦も、一步戶外へ出づれば一間も二間も、否な三間も四間も離れて步くのが日本流であるが、西洋のは街上に腕をとつて步くは勿論のこと、公園の芝生には若い相思の二人が寢轉んで、行人を羨殺せずんば止まざる國民である。旅の門出に多勢の見送人があれば、戀しと思ふ妻子には顏をそむけても、あかの他人とは虛僞と虛飾とに滿ちたる辭令を交換するのが日本人だ。汽車汽船の乘場などで夫婦親子が相抱いて接吻し、傍人がちよと傍(そば)にも寄りつけないほど盛んに情愛の示威運動(デモンストレイシヨン)を行るのは西洋人で、米人はかかる場合殊に無

遠慮に且大膽に公開的である。
私たちが妻子を家に殘して二年も三年も海外萬里の地に平氣でゐる事を、既によほど不思議のやうに思つてゐる米人に右のやうな話をすると、妻子に別れて出立する時でもキスは爲ないのかと訊く。無論しないと答へると、目を圓くして驚いてゐるから可笑しい。
口は禍の門なりとして、寡言沈默を人間の大なる美德の如くに言ふは日本人である。喜怒哀樂これを色に現はさず、胸に一物ありと雖もおくびにもそれを出さぬのを誇とするは、米人が屢次誤つて之を東洋人特有の陰險性となし、滅多に油斷のならぬ奴と思ふ所以ではないか。米人は人前も憚らず、遠慮會釋もなく自分の思ふ事を言つて了ふ。勢ひ他人と說が合はなくなる。合はなくなれば今度は口角泡を飛ばし卓を叩いて激論する。滿面朱を濺いでぐんぐん相手をやつつけるかと思へば、翌日はけろりとしてまた睦まじく相語り相交はるといふ風だ。倶樂部や公開の席上での議論をわきで聞いて居ても、はらはらするやうな事を兩方から無頓着に言ひ合つてゐる。まるで餘計に喋舌つた方が勝つとでも云つたやうな風だ。かういふ風だから自然腹の中には蟠りが少くなる。巧言令色の必要も減じ、口と腹とは別の事を言ふ面倒も比較的少くなる譯だ『互に胸襟を披く』とか『腹藏なく』とかいふ事を、何か珍らしい特別仕立のやうに言ふ必要もない筈だ。日本人と比較して見れば米人は遙かに正直で單純で、まるで子供のやうに美しいところがある。そこにつけ込んで日本人が詐欺同樣の狡猾い事

をやる者が多かつたために、米人も懲り懲りして今ではジャップとさへ云へば、皆必ず口と心とに表裏のある老猾なる狸爺の類だとのみ思ひ込んでゐる人も決して尠くない。まことに迷惑な話だ。

これだから日本は何事をも裏面でコソコソやる祕密の待合政治の國となり、英國も米國も公開の議院政治、言論政治の模範國となるのだ。從つて又日本語は四疊半裡の喃々喋々には適するだらうが、英語のやうに強勢（アクセント）が明瞭で齒切れがよく、公開演説に適するやうには發達して來なかつたのである。實際米人ほど集會と演説とを好むものはないが、大政治家なぞが皆必ず雄辯家である事は今さら事新しく言ふまでもない。ヰルソンは演説文章共に優に一家をなしてゐる人だが、ルウズヱルトは文章は相當に巧いが演説ではとてもヰルソンの敵ではない。これが近頃人氣の集まらなくなつた原因の一つだとも言はれる位だ。また全く別の話だが、英國の新宰相ロイド・ジョォヂが、むかし南阿戰爭の時チェインバレインの選擧區バアミンガムに出かけて、猛烈なる反抗をする聽衆に向つて舌端火を吐くが如き熱辯を揮ひ、その非戰論を叫んだ時、これが若し日本ならば、フンあれは口舌の雄だと嘲けられただけだらう。後二十年を出でずして宰相の印綬を帶び、今の危急存亡の時に當つて大英帝國の運命を一手に支配する身とは恐らく成れなかつただらう。待合の奧まつた離れの一室で、祕密裡に國政を料理するに巧みなる日本の政治家は、米國（或は英國）の如き公開議院政治の國では、恐らく陣笠すらも覺束ないのではなからうか。

口の達者な政治家の行(や)る仕事だから、米國政府も矢張り他國のに比してよほど公開的なやうに思はれる。日々の新聞を讀んでゐても、他國ではちよと發表しまいと思ふやうな事まで、米國の政府が公表して憚らないところは面白いと思つた。殊に外交はとにかく、内政に關する事柄に於て私は屢次さういふ事を感じた。

公開演説のとき米人は、日本で決して見られない『オオプン・フォオラム』といふ事をやる。卽ち演説の終つた後、特に二十分三十分の時間を設けて聽衆が思ひ思ひの質問を出す。辯士は演壇に立つた儘で一々之に答辯しなければならぬ。言質を取られないやう義理一遍の朗讀演説で胡魔化すが習ひの日本の政治家に、此眞似の出來るものが果して幾人あらうか。（本集第三卷參照）

むかしマコオレイ卿が、陰謀(イントリイゲ)といふ事をまるで東洋の特産物なるかのやうに書いたのは少し酷評だが、とにかく祕密主義が不正邪惡を行ふに便利で、多くの奸譎陰險の徒を生むことは言ふまでもなからう。

ことし六月、私は紐育の電車内に『一仙(セント)の値上げ、これは正當ではないか』といふ意味の掲示を見た。うつかり早合點して私が白銅(ニッケル)に銅貨を一枚加へて出すと、車掌は直ぐその一仙(セント)を返す。よく見ると電車はまだ實際値上げをしてゐるのではなく、唯その意向だけを會社が豫め市民に公表して、實施以前先づ輿論に問ふものであつたらしい。これも祕密主義の日本では一寸見られない事だと思つた。

九　共同と獨占

獨身の生活をしてゐたチャアルズ・ラムは、その『イリア論集』のなかに面白い事を書いた。世のなかに何が癪に障ると云つたつて、新婚の夫婦がお互の愛を獨占して甘い所を人に見せびらかして居る位、癪に障るものはない。世にはおのが知識を鼻にかける衒學者(ペダント)といふ奴があるが、これは一緒に談話(はなし)でもすれば此方(こちら)にも多少の得るところはある。また金持で庭園を自慢にする男があるが、これも眺めにさへ居れば他人(ひと)の物でも矢張り樂しい。夫婦の奴どもが互の愛情の獨占をこれ見よがしにするに至つては、最も不都合極まるものであると。しかし牆壁を設ける事の好きな日本人の社會では、すべてのものが皆獨占的であつて共同公益のためではない。ラムの目に映じた新婚の夫婦以上に癪に障るものが、日本には到る所に累々としてゐる。

ラムが言つてゐる庭園も、日本では貧乏人には滅多に拜見は出來ぬ。外には高利貸の家のやうな、また監獄署のやうな、見上げるばかりに高い用心堅固な土塀を繞らして、奥座敷から主人だけが宜しく眺めようといふ風だ。識る識らぬを問はず、他人と共に樂しまうなどといふ殊勝な心掛は毛頭ない。米國の庭園にはあのやうな突拍子もない高い牆壁なるものを、見聞の足らない私は不幸にして未だ曾て一つも見なかつた。富豪の住宅地は米國でも歐洲でも多くは市の郊外にあるが、それがみな殆

ど墻壁といふ程の物もなければ、なかには區劃さへして無いのがある。たとひ形ばかりの垣はあつても、行人がしばしの歩をとどめて目を樂しますを妨げるほどの物では決してないのである。殊に庭園は多く家の前面にあるのだから、春の花どきに青い芝生のあちこちに咲きこぼれたる百花繚亂のながめ、綠樹青草の美しさが家ごとに道の兩側に連なつて、戸外を通るすべての人には庭園そのものの中を逍遙するよりも以上の快感を與へる。斯く言へば例の墻壁主義獨占主義の日本人は言ふだらう。日本でそんな眞似でも爲ようものなら花卉と云はず木石と云はず片端から盗まれて了ふ。一日だつて堪まるものではないと。しかしながら見よ、英國では稀だといふが、米國の公園には今もなほ『樹木の枝折取るべからず』の立札があるところを見ると、米人は未だ公德心に缺くるところあつて隨分枝も花も折り兼ねないのだらう。此點は日本も同じだ、而もなほ私人の庭には墻壁を繞らさずして、立派に公開的精神を發揮してゐるではないか。そこは人情の不思議なところで、矢鱈に高い塀なぞを設けるから、たとひ癪には障らなくても花の一つも物數奇にちぎつて遣らうといふ氣になるので、そこいらにざらに投り出してさへあれば誰も取る氣はしないのである。先方が、お前たちには見せては遣らぬぞと言はぬばかりの遣り方をするから、こちらはまた無理にでも、見るどころか、ちぎつて折つてむしり取つても吳れようといふのが人情の自然である。相當な人までが他人の所有物をちよろまかさうなどとする不心得は、もともと幾千年來の日本人の墻壁主義と獨占主義とが生み出したる惡弊だ。

泥棒があるから塀を造る、塀があるから泥棒でない者までも泥棒式にやるのだ。殊に無邪氣な子供などは、米國のやうに到る所、家ごとに花でも何でも外にほり出してあれば、少しも珍らしくないから却つて悪戯もする氣にならないのかと思ふ。また街も庭園の一つも持つてゐる程の者が、樹の五本や十本盗られたとて、あの高い墻壁を造るとは何たるケチ臭い根性ぞやとも言ひたくなる。

また日本の家は構造が違ふから、米國のやうに墻壁なしでは専門家の本式の泥棒に困ると言ふ人もあらう。然らば大阪の濱寺公園のなかはどうだ。なるほどあすこは少々不用心だらうだが、とにかく公の命令で風致のために、どの家にも高い垣を設ける事を許さないと聞くが、それで實際また立派に行はれてゐるではないか。況や本式の泥棒にとつては一丈や二丈の高塀の如き、一本足の私が小さい溝一つを跨ぐよりは遙かに易々たるものであらう。

獨逸のやうな國でさへ、カイゼルの王宮は日を定めて公衆の拜觀を許すさうだから、無論米國の首府華盛頓の公共建築の如きは、日曜日には何處もかも開け放しの公開主義で、見物でも通り抜けでも何でも自由自在とある。金儲にかけては世界第一のペンシルヱイニア鐵道會社は、日を選んで紐育からの割引列車を出す。普通は往復十二三弗ほどの處を、僅かに三弗で一日限りの往復ができるのだから、其日の華盛頓はお上りさんの見物で大繁昌。實は斯く申す小生も一度は此汽車で行つた。大統領官舎の白館は言ふに及ばず、國會議事堂も議院圖書館も何もかも、なかは有象無象の見

物人でうようようよしてゐる。日本でならば、うかうかそんな所へ踏み込まうものなら忽ちにして門衛の一喝を喰ふ。

大學などでは、見ず知らずの私のやうな外國人が行つても、教授も事務員も甚だ懇切なものである。講義も傍聽させれば書庫も自由に使はせる。一片の名刺か紹介狀さへあれば、外に面倒な手續は何も要らない。これもその公開的な自由な空氣が甚だ嬉しかつた。また製造工場や會社銀行の如きでも、數年以前までは外國人だらうが自國人だらうが構はずに、どしどし内部を見せたさうだ。そして少しも營利的の意味のない場合にでも、自由に觀覽させた上に辨當まで御馳走したものださうだが、今は日本人に對してはさうも行かない所もあるとか、これは私には用のない方面の事だから友人から聞いたのである。ちよと外から見ても、日本の工場のやうに門前に麗々と『縱覽謝絶』などといふ例の墻壁主義の看板は餘り出してゐないやうに私は見受けた。

米國では、百萬長者（ミリオネア）といふ言葉がもう古くなつて、此頃では億萬長者（ビリオネア）でなければ威張れなくなつた。その數多いく長者のなかで、故ジョン・ピアポント・モオガン氏の名が、妙な事から日本では最も廣く知られてゐるから、ここに澤山のなかの一例として擧げるのであるが、紐育首都博物館（ニユウヨオク・メトロペリタン・ミユジアム・オヴ・アアト）館の宏壯な石造大建築の正門を這入ると、突當りの大理石の階段の上に『モオガン蒐集品』といふ文字が先づ目につく。この富豪が巨資を擲つて遠く海のかなたから集め得たる支那の磁器幾百箇と、ま

た陛下の別室に在る歐洲の彫刻品とは、さながら一個人の黄金力が如何なる事を爲し得るかを誇るものの如くに、衆人の眼を欹てしめてゐる。

僅かに二三の例外を限いては私は日本の富豪や貴族が、その所藏の古器珍什の全部若しくは一部を擧げて之を博物館に寄託し、或は公衆の觀賞に供したる事を聞かない。幾百年暗い暗い藏の隅くだに埋もれてゐた古美術品が、何かの事情のために入札に出る。この時はじめて僅かに一度公衆の目に觸れたる美術品が、忽ちにして成金の黄金力に購はれれば、今度はまた再び藏の隅の奧深い闇の中へと葬られるのである。持主が沒落するか或は身代限りでもしない以上、日本の多くの美術品は闇から闇へと傳はつてゐるのである。まるで世間への顏出しも出來ない日蔭ものの扱ひだ、固よりなかには顏出しのならぬ贋物も多からうが……。

日本人の獨占根性をよく現はしたる言葉に『祕藏』といふのがある、『門外不出の書』などといふのもある。くだらぬ物でも藏ひ込んでおけば値打が附くと思ふのは日本人で、なるべく多くの人に見せれば値打が上ると思ふのは西洋人、殊に米國人である。

日本人は何でも藏へしまひ込む。藏だけでは濟まないから凾に入れる。凾も一つでは承知が出來ないで二重三重の凾に入れる、まだその上から風呂敷までかぶせるといふのがある。西洋人のは、額と云へば一室に十も十五も掛ける、彫刻でも花瓶でも同じ部屋に四つも五つもならべる。ある限りのも

のを何でもかでもさらけ出すのだ。裝飾法として床しい床しくないはしばらく別問題として、人と共に樂しまうといふ心と、墻壁式獨占流との違ひは各室の裝飾にも現はれてゐる。米國では富豪の家や或は舊家を訪問したとき、その應接室に五分や十分待たされる事は少しも苦痛でないのみか、寧ろ愉快だと思つた事さへ屢であつた。

また美術品ばかりでなく、日本にはこの祕藏獨占主義あるがために、私人の有たる古書珍籍の類にして全く世に知られない物が如何に多からうかと思ふ。たとへば數年前物故した某醫學士の文庫の如きは、俳書の蒐集（コレクション）としては日本に於ける有數のもので、中には眞に稀覯書と目すべき物も尠くないと聞いたが、それが某富豪の手に入つたのち、どこにどうなつたものか杳としてその消息を聞かない。まさか散逸したわけでもなからうが、公衆の目に觸れる圖書館や博物館には出てゐないやうである。日本で近頃頻りに故人の文庫を買入れる事が流行（はや）るのは、一國文運の進歩のためまことに慶賀すべき次第だが、これらの書籍をして眞に價値あらしむべき、公開圖書館の設備が遲々として進まないのはどうしたものだらう。

米國の富豪はたとひ成金でも成り上り者でも、そこは感心だ。その所藏品は見ず識らずの者が行つても喜んで快く見せて與れる。博物館に寄託しなければ、毎年或時期を限つて自分私有の陳列所を無料で公開する。たとへば米國で日本美術品の蒐集（コレクション）として最も有名な物の一つである、ポオルテイ

モア市のヲォタアス美術館の如き即ちその一例である。

近頃は英國の貴族の疲弊が甚だしいために、その所藏の美術品が米國富豪の手に入る事は夥しいものである。米國ではそれが來る毎に早速博物館に寄託せられ、世間の呼び物となつて、新聞が書き立てれば解つても解らなくても公衆がみな博物館へ押掛けるといふ有樣。いつかも『サロメ』の一幅がかうして紐育首都博物館（ニユウヨオク・メトロポリタン・ミユウヂアム・オヴ・アアト）に出た時などは偉（えら）い評判であつた。

日本のやうに極端なる獨占主義が無いために、米國では圖書館、博物館、學校、慈善團等の設備が發達するほかに、市街の美觀壯觀も全く共同公益の精神あるが故に出來るのである。たとへば沙港（シアトル）の如きは西部の新開地に勃興したる、米國で言へば一つの田舍市（まち）に過ぎない、謂はばフランティア・タウンである。しかもその公園道路の壯麗に至つては日本の帝都や、商工業の中心地たる大阪を遙かに凌駕してゐるのみならず、歐洲の新開地などの遠く及ばざるところで、公共的設備の發達の速かなのは驚歎に値するものがある。人はよく米國は金錢（かね）があるからと言ふが、いくら米國にだつて黄金の塊が路傍（みちばた）に轉がつてゐるわけでもないから、これは全く公共的精神の結果だと見る外はない。たとひ金錢はあつても、日本の祕藏獨占主義ではとてもかうは行くまいと思ふ。現に大都會の市區改正の所など、相當の價格を以て土地を公共のために提供させる場合でさへ、日本では例の獨占主義の人たちが言を左右に託して、ひどく手數が掛かるといふことではないか。

米國の小都會に於ける公共設備の完全は、歐洲人の驚嘆するところである。たとへばヴァモント州の聖ジョンスベリイ市の如きは、人口僅かに六萬の町だ。しかもここには十二の教會があり、また博物館も一つある。基督教青年會には讀書室、大講堂等の設備が行屆いてゐる。殊に公立圖書館に至つては一萬五千卷の書を藏して、閱覽室は殊に見事なものである。佛蘭西人マクス・オレルは此事を書いて、自國ならば知識欲求に對するこれだけの設備は、先づ巴里でなければ見られないと言つて感心してゐる。

一〇 中央公園

何でも調子外れに馬鹿々々しく大きな事の好きな米國で、また最も大きな都會は、五百萬の人間が一塊になつて大きな事ばかりを考へてゐる紐育である。小さい日本のなかでも最も可愛らしい京都といふ都からここへ來ると、あの小波さんのお伽噺でよく日本に知られてゐる『ガリヴァ漂流記』の、小人國リリパットから大人國のブロブディングナッグへ上陸つて、大に度膽を拔かれたる如き恰好である。そこで、大きい物に出喰はしたら何でもせせら笑つて呉れよう、と私は豫てから十分覺悟をして行つた。幸いにして何を見てもせせら笑つてやる事が出來た、決して驚いては遣らなかつた。が、爰に一つ私をして、驚くどころか頗る閉口せしめたる上、これでもかと言つてとうとう私を降參させて

了つたものがある。

去年の二月の初、紐育へ着いてから三日目か四日目の午前であつた。一つ博物館を見に行かうと思つて、まだ土地の勝手も全く分らないのに大吹雪のなかを一人で宿を飛び出した。博物館は、公園の東通第五街（フイフス・アエニュ）にある。ところが私がひとかど心得顔に乗つた電車は、其方へは行かずに途中から曲つて公園の西通へ出た。しかたが無いから博物館の見當にあたる八十丁目あたりで私は下りた。なあに公園の事だから此邊を眞直に通り抜けて東の方へ三四丁も歩けば、博物館に到着疑なしと獨合點したのが抑もの誤。大雪の降りしきる中に人通りはおろか、犬ころ一匹ゐない所を痛い足を引きずつて行けども行けども博物館らしいものは見當らぬ。やがて小山のやうな所へ上つて見ると、そこには馬鹿々々しく大きな池がある、何でも紐育全市に水を供給する貯水池はこれであるらしい。寒さと疲勞で弱り果てた私は今更あとへ引返すこともならず、さりとて肝腎の博物館はどこにあるのやら影も形も見えない。尋ねようにも人はゐない。まるで西伯利亞の大荒原の眞中で行き暮れたやうな心細さであつた。痛む足をぢつと摩つて漫々たる池の水を獨り茫然として眺めた時ばかりは、この途徹もない大きな公園に對して心から私は兜を脱いだ。仕方がないから十丁あまりも足を引きずつて、やつとのこと博物館へ辿り着いた時は既う氣息奄々として病める野良犬の如く、とても陳列品などを見る勇氣も何も無かつた。これは私が如何なる場合にでも、地圖や數字に不注意である天罰だと言つて友人が

笑つた。

此大公園はその名の示す如く市の中央目抜きの地にあつて、假に之を私有地だとすれば確かに土一升金一升の地面、ちやうど東京の日本橋あたりか、大阪の船場のやうな位置に在る。それを惜し氣もなく南北二哩半、東西約一哩を區劃（しき）つて公園とし、百萬の財を之に投じて園藝術の極致を盡くし、ちやうど上野公園と日比谷公園を合はせたやうな設備をしたものである。その餘りに廣大なるために、紐育土着の人ですら屢この中で道に迷ふといふのは有名な話である。紐育の市中にはハドソン河畔のリヴアサイドか、さもなくば餘程場末ででもなければ、私人が獨占の庭園と目すべきものは尺寸の地だもない。そこで大小無數の公園は、倫敦人が所謂市の『肺臟（ラングス）』ともなり、黄塵萬丈の地にオアシスともなつて、五百萬の市民に貴賤貧富の別ちなき共同の恩惠を與へるのである。獨占主義の國に生れた私は、土一升金一升の町のまんなかに、こんなただ廣い大きい公園があらうとは夢にも知らぬばかりに、驚かされたるのみか閉口し降參させられたのであつた。

英京倫敦へ行つた人は、誰でもハイド・パアクの大きいのに呆れる。併しその面積は三百六十一英反（エイカア）で、之と隣したケンシントン・ガアドンを合はせても六百三十一英反（エイカア）、即ち七十七萬八千五百坪、ちやうど東京日比谷公園の約十八倍である。ところが紐育の中央公園（セントラル・パアク）に至つては八百七十九英反の地を占めて、英京の此二大公園を合はせたるよりも更に遙かに大きい。たしかに日本人の度膽を拔くに

足るだけに大きい。

日本では海水浴場などへ行つて見ると、形勝の地は多くは貴族富豪の別莊に占領せられて、ちよと寄りつけさうもない。少數者が盛んに獨占主義墻壁主義を發揮するために、一方に於ては共同の便宜となるべき旅館が少しも發達しないで、いつまでも設備の不完全な土地が甚だ多い。私は米國で最も有名な海水浴場たる費府(フイラデルフイア)附近のアトランティク・シティに行つて見て、公共の設備の行屆いてゐる半面には別莊といふものの頗る振はないのを見て、ここにも日本流と米國流との著しき對照(コントラスト)を見た。ここの旅館(ホテル)トレイモアの如き幾千人の客を容るるに足る宏莊なる設備は、歐洲に於ける海水浴旅館で之に匹敵するものは一も無いと言はれてゐる。かういふ大規模の旅館(ホテル)が相並んで海に面し雲表に聳えてゐる處は、八哩(マイル)の海岸が悉く幅七八間の板敷步道(ボオルド・ヲオク)になつてゐる。波打ち際からはいくつかの『百萬弗棧橋(ミリオン・ダラー・ピイア)』が遠く海に突出して、日光浴や音樂遊戲の便にも供へられてゐる。矛盾した注文ではあるが、これで若し例の『群衆』本位の俗惡趣味さへ無ければ、と惜しまれるほどのものである。金錢があつて獨占主義がなく、人と共に樂しまうとする心があれば公共設備の發達するのは當然の事だ。

米國の社會で富豪が尊敬せられるのは必ずしも黃金崇拜のためのみではない、彼等が金を儲けると共にそれを使ふ道を知つてゐるからである。慈善事業、平和運動、教育、學術の進步に貢獻し、文學

藝術の保護者(パトロン)であるがためだ。子孫のために美田を購はないと言つて、幾千萬弗の金錢を公共事業に捧げる多くのアンドルウ・カアネギイがあるからだ。

單にかういふ事ばかりでなく、金錢を儲ける場合にでも日本人には此獨占主義が累をなして、大きい儲が出來ないのだと言ふ人も多い。若し重役が獨占根性を出さず、共同の利益をさへ謀るならば立派に經營の出來るべき會社までが、このために瓦解して了つた例も決して尠くないのだらう。して見ると、日本の金持といふ者は金錢を儲ける事も知らず、本當に使ふ道は尚更知らない、よほど變挺な者らしい。思ふに日本にはアスタアやヴンダビルトやロックフェラアのやうな儲け方をする人も無い代り、あのやうな使ひ方をする人も少いのだらう。私は經濟上の事を言ふ資格の無い人間だ。しかし蓄積せられたる個人の富が公益に用ゐられない場合に、それが世の中に及ぼす害毒の大きい事は門外漢にでも氣が附く。極端なコンミュニズムの不可なる如くに、また極端なる獨占主義も困つたものだと思ふ。米國富豪が公共のために金を惜しまないのは、民主國として當り前だと言つて了へばそれまでだが、これがまた現代文明の餘弊を救ふ道ともなつてゐる事は注目すべき點ではないか。

ディッケンズの小說『マアティン・チャヅルヰット』の中のマアティンと云ふ男は、眼中私利私慾のほか何者もない人間であつたが、米國へ行つて貧乏した揚句、熱病に罹つて死にかける。或親切な米人から金錢(かね)を出して貰つて漸く歸國し、これが動機となつて遂に飜然大悟し、私利私慾をのみ謀るの

非を悔いるといふ話があるが、かういふ辛い修業をする事も或種の人には必要なのであらう。

またこれは少しく餘談にわたるが、英國には『良心の金』といふものがある。每年英國の大藏大臣のもとには意外の歳入があらはれる。それは誤つて脫稅したものが自己の良心に顧みてあとから納稅するので、その額は邦貨に換算すればかなりに大きい。數年前には一人で十四萬圓を此『良心の金』として納めたものがあつた。最少額は唯の一片を納めた者さへある。これは政府ばかりではない、鐵道會社、瓦斯會社、その他の商店などでもこの不意の收入を得る事は少しも珍らしくないのである。日本では酒造高や營業稅を胡魔化したり、成金が所得稅納入に虛僞の申告をするといふ話を聞くが、これでは眞に神樣と畜生と程の差ではないか。大英帝國が世界一の富强國となり、日本が貧乏國である根本の原因は此點にある。獨占と私慾と、支那人は現にこれがために國勢を失墜して了つたのである。よそごとでは無い。

二　情　實

日本人の內部生活を最もよく描いた巢林子の世話物は、多くは義理と人情との衝突を悲劇の骨子にしてゐる。これは西洋での昔の運命劇や性格劇、或は近代の社會劇とはその根柢に於て甚だしく趣を異にした點である。

日本人のする事には如何なる場合にでも人情が絡み附く。吾々の生活を美しくしてゐるものはこの人情主義である。しかしこれが餘りに極端であるがために私情の纏綿、情實の紛糾が動もすれば自由な活動を制肘し、ひいては國家社會の發達を阻害してゐる事も大きいものだ。

西洋人は私生活（プライヱト・ライフ）の上には人情を重んじても、公生涯の上にはこの人情主義の力が甚だ少い。だから随分思ひ切つた事も出來る。西洋の最も西洋的なる米人に至つては、凡てが能率本位（エフイシエンシ）、内容本位、敏速主義、實利實益主義であるがために、仕事をする時には殆ど人情とか私情とかいふ事を全然度外視して掛かる。『人情どうも左様（さう）は行かない』といふ日本人の口癖にする言葉を、米人は滅多に言はない。私なぞから見ると、これは甚だしく殺風景で不快にさへ思はれる事があるが、米人が大きい事業を着々として進捗させて行くのは、實はこの殺風景があるからである。截然として公私の關係を別ち、事業の前には殆ど一點の私情をさへ挿む餘地がないからだ。非人情主義（インヒユウマン）（不人情ではないが）は米人の短所にして、また長所であると思ふ、

日本ではいつも人情に絡まれるために、老朽を馘首するにさへ躊躇するのみか、却つて之に重要の地位を與へて平氣でゐる。姻戚の關係あれば無能の人物をも重く用ゐる事は、米國では日本ほどに烈しくない。裸一貫で國を飛び出して來た三十臺の若造が大會社の重役になつてゐるなどは、ちよと日本では見られない現象だ。政治界でも實業界でも、これあるがために米國は青年の國となり、日本は

老人の國となるのだ。後進の少壯有爲の士を拔擢するに躊躇するとき、情實といふ事の外には何の理由もない場合が多いからである。

米人の發明した言葉で、今は廣く歐洲にも行はれてゐる『科學的經營法(サイエンテイフイク・マネツメント)』といふのがあるが、如何にもこれは能率(エフイシエンシ)本位で實利實益一點張りの米人が考へさうな事である。科學的經營法、一名絕對的非人情主義營業法と呼んで差支ないものだと私は思ふ。

一々人情を喧しく言つて居ては、大きな團體の經營など迚も出來るものでない。世界中に比倫を見ないやうな米國に於ける大規模の電信會社、鐵道會社、通運會社、その他製造工業の會社などが、立派に仕事をして行くのは資本主義(キヤピタリズム)の關係ばかりでなく、全く此非人情主義があるからだと思ふ。共同の利益のためには私情を顧みないからである。

西洋殊に米國では殆ど見られない事で、日本特有の名物である學校騷動などは、全く情實纏綿の產物だ。その他會社や團體の內訌といふものも、墻壁主義獨占のほかに、この惡い方の意味の人情主義が基である場合の甚だ多い事は、事新しく私が述べ立てるまでもなからう。

軍人である私の或友人が、米國で有名な某大學總長を訪問した。勿論相當の紹介狀を持つて行つたのだから、直ぐに自分の室に通した。すると握手してから、立ちながら、二言三言口を利いたままで廊下のかなたを指さして『昇降機(エレヴイタア)はあすこに』と敎へた。私の友人は それを甚だしく不決に思つた

が、用向があつたので更に後日再び訪問すると、今度はゆつくり話をしたのみか、親切に世話をして吳れたので意外であつたといふ話を私は聞いた。

忙しい仕事をする時、大切な時間と云ふ事の前には愛嬌も禮儀も何もないのが米人である。これは日本人たる吾々にはちよと出來さうも無い藝當である。いくら忙しくても、悠々閑々たる來客の長話を謹聽してゐるのは日本人である。初對面の挨拶もそこそこに昇降機を指さす非人情主義を斷行する事は、日本では全く通用しないのである。米人が禮儀を構はないといふのは歐洲でも日本でも定評のやうになつてゐるが、これも一つは非人情主義の當然の結果であらう。

米人は仕事に對する報酬の事をいふのに平氣であるが、金錢の事を口にするを卑しとする日本人にはとてもあの露骨な眞似は出來ない。例の『人情どうも左様（さう）は行かない』からである。商店や會社で使用人を僅かに十分間餘計に店（オフイス）に居殘りをさせても、給料から割出して幾仙（セント）とかいふ金を特別に支拂ふ。拂ふ方も受取る方も、人情を外にした合理主義（ラシヨナリズム）から言へばこれが正當だ。

かかる點に於ても日本と米國とは全く正反對だが、私は此非人情主義の裏には強い個人主義がある事をここに言ひ添へておく。

一二　ビリケン

二十世紀の日本の福の神は、恵比須大黒が流行(はや)らなくなつてビリケンが珍重される世の中になつた。笑つてるやうな顰(しか)めてるやうな、何だかむづ痒いやうな變な顔附の、あの不行儀な形をした人形が店先や茶の間に飾られてるのはまだ可(よ)しとして、はてはこれをやんごとなきなにがしの宰相の異名に用ゐるとは何事ぞ。

ビリケンは今から八九年ばかりも以前に米國で流行した人形である。或貧乏な美術家が喰ふ事に困つて自棄(やけ)氣味になつた揚句、ふとした思ひ附きからあの如何にも人を馬鹿にしたやうな人形を造つて賣出した。そこは例の群衆の國だから何が當るのか分らない。それが忽ち一代の人氣に投じて、世間の擔(かつ)ぎ屋からはお守り(マスコット)として歡迎され、はては海を隔てたる遠きかなた、東海の君子國へまでも渡つて來たのだ。近頃では本家の米國では餘り流行らないやうだが、それでも紐育ブロオドヱイあたりの繪葉書屋や土産店には、今も猶この醜惡なる下司(げす)張つたる人形が澤山列べられてゐる。

ビリケンの『ビリ』は人名ヰリアムの略語、たとへば讀本によくあるボツブがロバト、ディックがリチャアド、ジムがジェイムズ、ベッシイがイリザベスの略名であると同じい。これに英語の縮小表(ディミニュ)愛語(ティヴ)である『キン』といふのを附けて、親しみの意を表はしたのだ。このキンは獨逸語の『ヘン』と語原を同じうし、洋食の時膝に掛けるナプキンの『キン』なども全く同一の語である。だからヰリアムと云ふ男を『ビリケン』と呼ぶのは、例へば私の名の辰夫といふのを『辰公』とか『辰ちやん』とか

いふが如き類である（但し私には誰もこんな表愛語を附けて、略名を呼んで與れる人も無いが）。時は恰も米國二十七代目の大統領、今はエイル大學政治學教授たるヰリアム・タフト氏が在職の時であつたから、此名と此人形とは忽ちにして天下を風靡したのだ。

　米國のこのビリケン人形は、色々の意味に於て能く米人の一面を語つてゐると思ふ。第一あの無作法な恰好が中流以下の米人の不行儀と、荒削りな野性とを遺憾なく示してゐる。米人はよく事務室に居て客に接する時など、椅子に凭れて兩足を揃へて卓上（テイブル）の上に上げてゐる。それを格別無禮だとも思つてゐないやうだ。私はそれを見るとき、いつもビリケンが兩足を投げ出してゐる形を思ひ浮べた。

　次にあの人形に一種不快な下司（げす）な滑稽味があるが、これは最もよく、米人の極めて淺薄なる樂天主義を語るものである。元來アングロ・サクソン人種は、その嚴肅な半面には甚だしく滑稽味を喜ぶところがあるのは、ずつと昔からチョオサアなどの文學によく現はれてゐる。その『キャンタベリ物語』は言ふまでもなく、『空（から）の財布に寄する繰言（くりごと）』等の小篇にもこれがよく見えてゐる。恰も教養（カルチュア）のある氣品の高い人が、打ち解けたる折の破顏微笑を見るやうな、所謂『ドライ・ヒュウモア』である。これはずつと後世になつてもディッケンズの小說の滑稽味など、英文學を外にしては斷じて見出す事の出來ない性質のものだ。ところが同じアングロ・サクソンでも米人の滑稽には少しも此氣品がない、嚴肅味がない。米國新聞の日曜附錄といへば日本の新聞の新年號のやうなものだが、その大切な部分を占め

てゐる四頁のポンチ繪は、之を英國の『パンチ』や、或はマクス・ビアボオムの漫畫などに比較しては到底お話にもならぬ淺薄な下品なものである。滑稽專門の雜誌『パック』や『ライフ』の發行高も非常なものだと聞いてゐる。米人は何でも物を茶化して見る事が好きだが、その背後には少しも嚴肅沈痛の趣がなく、且教養(カルチュア)の足らないために凡てが上(うは)調子だ。同じく世の中を茶化したものでも、漱石先生の『吾輩は猫である』に見る如き、裏面には世を憤る悲壯な心持を藏(かく)して、一切の者を搔きむしらねば已まないといふやうな趣は、米人の滑稽には微塵だも無いのである。さきに擧げたハアヴアド大學の英文學教授ブリス・ベリイ氏の著書の第五章には米人の滑稽味を論じてあるが、あの論には私は餘り感服して居ない。とにかく米人の滑稽趣味にはアングロ・サクソン風は無くて、寧ろ雜駁なる人種混淆から出來た一種の『群衆』式の低級な滑稽味で、それがビリケンに最も能く現はれてゐると思ふ。

アアギングの『紐育史』以來、この滑稽味が米國の文學に著しく現はれて居る事は言ふまでもない。人の知るマアク・トヱインの滑稽小說は、今日では既に廢れて了つたが、最近には到底文學の領土には入れられないやうな下品な滑稽物が行はれてゐる。日本語にも譯されて廣く讀まれたオルドリッチの『いたづら小僧日記』の如きは米人ではずつと古いものだが、茶目式の子供のいたづらを材料にした小說は殊に多い。私も以前よくマクス・アドラア廉價版の小說を暇潰(ひまつぶ)しに讀んだが、あれなどは實は愚な物であると思ふ。近頃の米國滑稽小說で一番讀みごたへのあるのは、先づ人氣作者のリチヤア

ド・ハアディング・デギスの物だらう。殊にその短篇が好い。人生の嚴肅な一面を茶化す所に面白味がある。

英國で一時流行つた『社會詩（ヹル・ドウ・ソシエテ）』といふ滑稽詩の一體があるが、これなども源を尋ぬれば矢張り米國のロオヱルの詩歌がその源をなして居ると思へば、米人の洒落も馬鹿にはならない。

日本には冗談を言はれてむきになつて怒り出す人があるが、さういふ人は決して米國に行かないが好い。米人はどんな眞面目（まじめ）な人でも滑稽趣味があるが、日本人のうちでは全然諧謔の何たるを解し得ない不思議な人があるからだ。

一三　綽名と略語

ビリケンに就いて、も一つ思出すことは、米人の簡略主義と綽名（あだな）の好きな事である。前者は敏速簡捷を貴ぶがためと、後者は卽ち卑俗なる滑稽を愛するに基づく。

タフト大統領を『ビル』とか『ビリ』とか呼ぶ事を好んだ米人は、またシオドオア・ルウスヹルトを『テッディ』と呼ぶ。これはシオドオアを略したる表愛語（エンディアメント）である。ビリケンが流行つたと同じく、『テッデイの熊（ベア）』といふ玩弄品（おもちゃ）も此意味で一時は非常に流行つた。今でも新聞のポンチ繪には、ルウスヹルトは多く熊になつてゐる。今度はウッドロオ・ヰルソンが大統領になると、それを略して此

頃はいつも『ウッディ』として新聞に書かれる。大統領選擧の時などは、日本ならば先づ役者の人氣投票といつた風の騷ぎ方で、その候補者の名は『ビリ』であり、『テッディの熊』であり、『ウッディ』である。まるで熊公八公の呼びかただ。から呼ばれて不快な思をするどころか、帽を擧げて莞爾たる微笑を以て群衆の喝采に應へ得る人でなければ、米國の大統領は一日も勤まらないのである、少くとも人心を收攬する事は出來ないのである。借問す我が宰相尖頭伯、果してビリケンの名を喜び給ふや如何に。

　私がいつか京都四條の南座で芝居を見てゐると、隣の桝に茶屋の女將らしい女が居て、俳優の鴈治郎の事を頻りに鴈やん鴈やんと言つて居るのを聞いて、面白いと思つた。此女をして若し米國に生れしめば恐らくは大統領閣下を目して『宇やん』と言ふの無禮を敢へてすることだらう。

　東洋殊に日本は禮儀三百威儀三千の國である。口では一かど物の解つたやうな事を言ひたがら、今に矢張り『位』とか何とかいふのを無闇に嬉しがる人たちの多い國である。尊大に構へて肩書と形式とをのみ貴ぶ大名式の國である。米國は之と全く正反對に、爵位と勳章を初から造つて居ない國だ。一國の大政を左右する大統領も、職を去つて野に下れば一平民となるのが初代の華頓以來の國風だ。法性寺入道前關白太政大臣は米國では一切通用しない。桓武天皇九代の後胤と呼ばはつて見たところで、誰も驚きやしない。何でも皆すべてを『鴈やん』で行く國だから堪らない。私は又しても此點に

於て、米國も極端たが日本も極端だといふ陳套の句を繰返す事を餘儀なくされる。

事大主義と簡捷主義との差は、必ずしも人名の喝呼に止まるのではない。これが日常生活のすべてを一貫して、日米兩國人の著しき差をなして居る。一例を言へば見送り出迎への大層なのは、恐らく忙しい世界の文明國で日本に及ぶ國は無からうと思ふ。歐洲諸國も此點は簡單なやうだが、西洋の最も西洋的なる米國に至つては、特別なる場合を除いては殆ど見送りといふ事をしないのである。誰かが僅かに目と鼻との間の大阪から東京へ轉住か轉任でもするといへば、梅田停車場のプラトフォームは見送り人で眞黑になる。執務の時間を割(さ)いて無慮幾十幾百の人が虚僞虚飾の辭令を交換すべく玆に集まるかと思へば、見送りも随分高價なものだ。一人がこのために平均二時間を潰すとしても二百人で四百時間。一人の毎日の勞働時間を約十時間として、總計四十日間といふものを此一つの儀式と虚禮とのために全く棒に振るわけである。性來が偏屈者の私は、米國へ行く時も出發時間を示さずに出立すると、あとから君は借金取りに追はれて夜逃げをしたかと冷やかされた。

私が紐育にゐる時であつた、日米人間に頗る令名の高かつた或外交官が歸朝するとき、私共は大(グランド)中央停車場(セントラル・ステイション)に其人を見送つた。大勢の日本人があの大建築の中央に集まつてゐるのだから甚だしく目立つ。あたりの米人の旅客が目を圓うして、見ず識らずの或男が私に向つてそつと『けふは何事があるのか』と訊いた。わけを話すと彼は感心して去つた。これは午後の二時頃、無論執務(オフィス)の時間中

であつた。

既に幾たびも懇な送別會のあつた事だから、西洋人の方は停車場には見送りに來てゐなかつた。この時不思議なるかな、ただ一人長身痩軀の米人が、多數日本人の一團の中に恰も鶏群の孤鶴のやうに交つてゐた。これは法律家で長く日本の學校に教鞭を執り、日本人の習慣を十分よく心得てゐる人であつたからだ。普通の米人は特別の場合を除き、身内(みうち)の者か餘程の親友ででもなければ、大切の執務時間を割いてまで見送りなぞしないのが普通らしい。

日本でも見送りの風は東京が殊に甚だしい。これは參覲交代のあつた江戸時代の遺風だか何だか知らないが、新橋や中央停車場の見送り騷ぎを米人に見せたらば果して何と言ふだらうか、と思ふと可笑しくもある。會社の一重役がちよとお隣の米國まで見物に行くのに、幾百の見送人が東京から横濱まで一等車殆ど買切りで輸送せられるのを見たとき、私はよほど皆閑人だなと思つてつくづく感心した事がある。若し閑人(ひまじん)の暇潰(ひまつぶ)しならば、入場料といふ見送り税をうんと高くしたらどうだ。

またしても餘計な無駄口を叩いたが、米人は凡てが簡捷主義だから人名ばかりでなく、凡ての場合に略字略語を用ゐる事が大好物である。かのたしかルウスヹルトの大統領時代に始められた簡捷(シムプリフアイ)綴字法(スペリング)、即ち though を tho と書き、catalogue を catalog, labour を labor と書く類は、英國では行はれないが米國では之を使つてゐる新聞雜誌及び學校の數は隨分と多數にある。そのほか日刊

新聞紙が略語や簡短な新語を使ふ事は實に甚だしいもので、マレイ博士のオックスフォオド大辭典には迚も見當らないやうな新語が、頗る亂暴に或は洒落半分に使用せられてゐる。日本でも近頃は『帝大』とか『滿鐵』とかいふ類の言葉が無闇に流行るが、實に不快な事だ。二字や三字を滿足に發音する暇のない程までに時間と勞力とが惜しければ、何故あの見迯りの虚禮に貴き四十日間を棒に振るのだ、と惡口も言つて見たくなる。

一四　『ジャップ』

誰でも故國の土を離れて西洋へ行くと、自分は日本人だといふ事を痛切に感じ、その意識のみが非常に強くなる。國外へ出て見て始めて己れの日本人なる事を發見したと言つた人さへあつた。それのみならず故國の同胞を離れて、人種の色から言語風俗まで凡てを異にした本當のあかの他人のみと朝に夕に交はるとなると、如何なる人物でも多少は心の狀態が變つて來て、理性より感情が強くなり、神經質になり、センティメンタルになるのは免れ難い。ちよつとした事にも日本の國際上の地位の低い事を憤慨して見たり、かなりの俗物輩までが柄にもない鄕愁(ノルタルヂイ)の氣分を味はつて見たりするのは、全く此心理狀態の變化に基づくものである。此點から考へると、反對にまた西洋から來て日本に在留し或は旅行してゐる多くの外人に對して、吾々が國土の主人公として十分の禮遇と溫情とを以て之を

迎へねばならぬ所以が、よく理解されると思ふ。

ぢつと米國に滯在してゐると、私共は米人特有の親切(ホスピタリテイ)とそのざつくばらんな開放的の態度とを非常に嬉しく思ふと共に、また彼等の言動に對して時々は不快に思ふこともあつた。或新聞紙が――それはたしか世界で最も賣れ高の多い『市俄古(シカゴ)トリビユウン』であつたと記憶するが――我が國の御大典に關して爲したる批評や、ボストン市長、コオネル大學總長、その他の人々の排日論などは、之を言ふ者が立派な人であるだけに時々は甚だ快からず思つた。日刊新聞紙を見てゐても、日本に關する記事論說は特に自分たちの注意を惹く。寺内内閣の出來た時は隨分色々な事が書かれた。今年の三四月頃の新聞には、日本が金貨を澤山持出して行くといふ事が毎日のやうに書き立てられた。鐵材船腹の問題なども、ボストン市長の如きは夙くから熱心に論じてゐた。それが近頃遂に實際問題となつて現はれたのである。しかしかういふ事は、米國の立場から言へば議論としては立派な根據もある事だから、それを不快に思つたといふよりは、寧ろ唯私どもの尖つてゐた神經が少しく刺戟されたに過ぎなかつた。

ところが爰に一つひどく日本人の不愉快に思ふ事がある。それは米人が日本人を呼んで『ジャップ』と言ふ事だ。これは極めて詰らない一小些事に過ぎないが、僅かに單綴音(モノシラブル)である此一語が米人の唇を洩れて、それが吾々の耳朶を打つ其刹那、之を不快に思はぬ者は在米幾萬の同胞中恐らくは唯の一人

も無からうと思ふ。かの米化日本人中の或種の輕薄兒と雖も『ジャップ』と呼ばれてはさすがに苦(にが)い顏をする事であらう。彼等の腦味噌の隅々だの何處かにこびり着いて辛くも殘つてゐる日本魂が、其時だけはぴくぴくと異樣な振動をするだらうと思ふ、

私は之に就いてまた二つ三つの世間話を附け加へよう。

紐育の或ディパアトメント・ストアに買物に行つた時、階下に降りる昇降機(エレヴェイタア)に乘らうとしてその戶口に行つた。そこには婦人の顧客が澤山集まつて待つてゐたから、私は謹み畏まつて彼等の背後に立つてゐた。やがて昇降機(エレヴェイタア)は上の方から來て女たちは皆その中へ入つたが、私は後の方に居たために一人取殘された。うつかり其儘戶を閉めて了つたボオイが、ふと私の居るのに氣附いて、

『お氣の毒(ソリイ)さまジャップ』

と言つた儘、私を置いてきぼりにして昇降機(エレヴェイタア)は降りた。茲に一言註釋を入れておくが、紐育のディパアトメント・ストアは皆實によく行屆いた營業振りで、決して客の氣を惡くするやうな不注意を店員は爲ないのである。此時の『ジャップ』の一語は、必ずしも嘲弄侮辱の意を含んだのでは無かつたらう、と善意に解釋する事が出來る。

また或大學の或研究室に私が出入してゐた頃、主任の教授(プロフェッサア)や學生が寄り集まる『セミナリ』で、或時その教授が盛んに語源の事か何かを論じてゐた。談ははからずも東洋の事に及んで、教授はうつ

かり『ジャップ』といふ言葉を使つた。ふと私が共席にゐる事に氣附いて、慌てて私の方に向つて、

『エクスキユウズ・ミ』(これは失禮)

と言つた。私は吹き出した、皆も笑つた。この教授は英文學の或方面の研究に於て、今英米の學界に重望を負へる碩儒である。個人としても私が十分の感謝と敬意とを捧げてゐる人だ。此人の口から不用意に洩れ出でたる『ジャップ』の一語は面白かつた、まことに滑稽に聞えた。これは私が在米中この言葉を耳にして少しも不快な思をしなかつた唯一の例として、今も猶想ひ出す毎に微笑を禁じ得ざるものである。

また私が或家に下宿してゐた時、隣家には支那に長く居た宣教師夫婦が居つて、私の下宿の主婦に『あなたの處には何故(なぜ)ジャップを置くのです。ジャップといふ者は實に狡猾(トリツキイ)ですよ。近頃澤山亞米利加に來てゐるのは、ありや皆日探(スパイ)ですぜ』と言つたとかで、日本人贔負の宿の主婦がその語氣をも寫して私に話した。これは餘り愉快でも滑稽でもなかつた。

日本人を『ジャップ』と呼ぶのは英語の一つの鄙語(スラング)であるから、何も憤慨するには當らないのだらう。またこれは米人に限らず英人も勿論よく使ふ。讀者は夏目さんの『色鳥』の卷頭『倫敦消息』の一文中に、自分が街を歩いてゐると、あちらで誰かが A handsome Jap と評したのが耳に入つたといふ一節を想ひ起されるだらう。

しかし米人の作つたセンチュリ大辭典にも『ジャップ』の條には『合衆國、俗語』と註してある通り、之を最も多く使ふ者は疑もなく米人である。これは必ずしも輕蔑嘲弄の意のみではなく、前條すでに述べたる通り米人の滑稽趣味から出た綽名好きと、例の簡捷主義から來る略語癖との結果たるに他ならない。

綽名の好きな米人は、自らを呼ぶにも矢張り『ブラザア・ジョナサン』や『アンクル・サム』を濫用してゐる。然し此二つの言葉の歴史を考へて見ると、そこには少しも輕蔑の意味が無いのは勿論、この兩方とも古く獨立戰爭の頃から出來てゐる綽名である『ジャップ』とは確かに用法も歴史も異なつてゐる事は言ふまでもない。

親愛の意を表し輕蔑の意を寓する時に略名略語を用ゐ、敬意を表する時に省略を避くるのみか、更に餘計な名稱をまでも添へるのは東西古今通有の習慣だ。すべての米人は日本人を『ジャップ』と呼ぶほどまでに親愛の意を表して居るのかは知らないが、それならば此一讀書生を日探(スパイ)呼ばはりは聊か腑に落ちないではないか。少くとも『ジャップ』といふ言葉の裏に敬意の無いだけは確かだらう。これは電話(テレフォン)を略していつも『フォオン』と言ひ、高架鐵道(エレヴェイテッド)を單にL(エル)と言ふ、米人の簡捷主義のみなりと解する事が果して出來るだらうか(『ジャップ』と書いて後に略字點を附し、ジャパニイズを短縮して書くのとは別問題だ)。

米人が使ふ『ジャップ』といふ言葉に、むかし支那人が日本人を呼んで倭奴と言つたと同じ意味があるか無いかは、賢明なる讀者諸君の判斷を待つ事にしよう。

異郷にゐて神經過敏になつてゐる或人たちは、また米人が吾々に『チャアリイ』と呼び掛けるのを、支那人と間違へてゐるのだといつて不平らしく言ふ人がある。しかしこれは思ひ違ひではないかと思ふ。『チャアリイ』は無論チャアルズの表愛語(ディミニュティヴ)として英語には極めて普通なる形である。米人の卑俗な滑稽味をよく示してゐる活動寫眞のチャアリイ・チャップリンの名も矢張りこれである。またチャアルズの名はもとテュウトニック語源の『雄』とか『强』とか云ふ字に當る立派な男性的名稱だから、西洋には一番多い名前である。米人同志の間に在つても、一面識だに無い人に例の開放主義の心易だてから『ジョオ』(ジョオゼフの表愛略語(ディミニュティヴ))だの、『チャアリイ』などと呼び掛けるのは彼等の癖である。今年二月頃の或寒い日に、私が大學の前のひどい雪解け道をびちやびちややつて歩いて行くと、彼方(むかう)から郵便配達の男がやつて來て、

『チャアリイ、ひどい道(ナスティ・ヲォク)だな』

と言つて行き過ぎた。ふと顏を見ると可愛い顏をしてゐた。私は少しも不快な思はしなかつた。ナステイといふ字を濫用するのも米人の口癖で、英人が笑ふ事の一つである。

また米人は時々吾々を『ジャパニイ』と言ふが、これにも侮辱輕侮の意は少しも無いと思ふ。ただ

一種の俗語で、スを略したに過ぎないのだらう。かの詩人ホキットマンが名作の一つに、熱烈な愛國の精神をうたつて『ブロオドヱイの壯觀(パジヤント)』と題したのがある。冒頭に、西の海越えて頬の色黑く兩刀さしたる使節日本より來れり、といふ句があつてその第二節目には the tann'd Japanee とある。此綴(スペリング)字も時々書物の中に見る位だから、不快な思をする程のものでは無からうと思ふ。

しかし『ジャップ』だけは少し困る。米人は如何にも吾々に厚意を盡くして吳れるのだらうが、これだけは白璧の微瑕だと言ひたい。センチュリ辭典から此一語を抹殺はしないまでも、せめては『稀(レイア)』とか『廢語(オブソリイト)』とかいふ字を之に附加する日が早く來ればよいと思ふ。國際感情は動もすれば極めて微細なる事のために害せられ易い。嘗て支那人が魯西亞の魯の字を改めて露としたる如くに、米人も『ジャップ』だけは何とかしたら好からう。又日本人にして今なほ外人に不快の感を與ふる如き或種の語を用ゐつつありとすれば、吾々自らもそれを改めねばなるまいと思ふ。『チャン』などは確かに『ジャップ』と同じやうな言ひ方だらう(米人は日本人を支那人と見誤つて、『チン、チン、チャイナマン』なぞと揶揄(からか)ふ事もある)。

一五　檢閱

活動寫眞は『群衆』王の好物だ。あの方外に物價の高い紐育に、入場料僅かに五仙(セント)などといふのが

ある。私も他人から誘はれて在米中に二三度は行つて見た。歐洲でも米國でも左様だが、辯士といふ者はゐない。あれは恐らく日本の新案かと思ふ。

活動寫眞で驚いたのは當局の干渉の餘りに寛大なる事だ。殺人強盗物などで、之を公衆に示すは百害あつて一利なき物は無論のこと。同盟罷工(ストライキ)騒ぎの顛末までも平氣で演つて見せるのは意外であつた。何がさて、あの通り勞働者の勢力の烈しい國で、昨年鐵道從業員の八時間勞働問題の時などは、危(あぶな)く全國の交通機關が杜絶しようとした程の國でありながら、まるで同盟罷工(ストライキ)の實物教授をするやうな活動寫眞が公然許されてゐるのだ。ここに到つては放任主義もまた餘りに底が拔けてゐるので一寸驚かされる。かういふ有様だから、國際關係に惡影響を及ぼすかの排日寫眞なども、大抵の場合官憲は之を大目に見るのであらう。そこが米國の米國たる所以で、これまた日本とは極端と極端との對照である。

いつかも紐育で百二十五丁目を散歩してゐた時、ふと何心なく其處の寄席(ヴオドギル)に這入つた。番附も何も見ずにうつかり飛び込むと、その出し物の一つに『日探(ジャパニイズ・スパイ)』と云ふ芝居がある。これは失敗(しま)つたと思つたが今更出るにも出られず、終(しまひ)まで辛抱して見物した。ある日本人が米國の兵隊募集に應ずると見せて軍事の祕密を盗み出さうとする、そこを見附けられる。すると大に抵抗して柔術の奥の手を出し、役人の喉を締め上げると云ふ筋。馬鹿々々しいものだ。見物の幾百の西洋人のなかに陣取つてゐ

る私の顔を皆の者がじろじろ見るのは、如何な鐵面皮の小生も聊か閉口した。

國際問題に關する米國黄色紙の評論が隨分と無遠慮なもので、全く當局の干渉を受けない事は讀者の知らるる通りであるが、ここが米國の偉いところで、例へば排日の半面には、また私共の想像も及ばないやうな狂熱的の親日主義者がその反動として出來るのである。所謂大國の襟度で、凡てが清濁併呑主義のやりかたであるから、日本贔負の人の熱心と云へばこれまた驚くべきものがある。坊主が憎けりや袈裟までの反對に、日本の物と云へば鰯の頭まで珍重する人も尠くない。日本にもなかなか米國贔負はあるやうだが、あんな猛烈なのは先づ無からうと思ふ。日本人のは何事も凡てが宙ぶらりで、微温で、利害打算的だから私などは甚だ面白くないと思ふ。

何ごとぞ花見る人の長刀。鏗鏘たる佩劍の音が美しい藝苑のなかにまで聞えるのは日本ばかりではない、米國にも少しはそれがある。治安といふよりは風俗の取締としてである事は言ふまでもない。

固より四十八州各その法を異にし、官憲の態度にも非常な相違のある合衆國の事だから、一概には言へない興行物などもボストンは八釜しいが、紐育は寛大だ。市俄古となれば更に一層放任主義だと聞く。唯肉襦袢一枚だけで全身何一つ蔽はない女の踊、たとへばバアレスクや紐育のキンタア・ガアドゥンの如きは、何處ででも許してあるが、不思議に女の素足は嚴禁されてゐる。日本の浮世繪にあるやうな女の美しい素足は、米國では如何なる場合でも先づ見られないものだ。この唯一の除外例

として今私の記憶に殘つてゐるものは、紐育のメトロポリタン・オペラ・ハウスで見た、かの世界的名聲のあるイサドラ・ダンカンの舞踊であつた。さすがは歐洲藝苑の耳目を聳動したものだけあつて、單色の幕と絨氈のほか何一つ背景を置かず、唯肉體の運動と光線と音樂とだけで、人を醉はす力は實に見事なものであつた。これは衣裳といふ程の物を用ゐずに、上腿の半より下は全く皮膚を露出してゐるのである。

英國の演劇史を繙いた人は、清教徒と演劇とは昔から仲の惡い者である事を記憶せられるであらう。その清教徒氣質の今も猶殘つてゐる頑固なボストンでは、近代藝苑の驚異と言はれる露西亞舞踊が檢閱官のために修正を餘儀なくされた。レオン・バクストの舞臺裝飾で、近世舞踊劇の最大傑作だと言はれてゐる『シエヘラザアド』の一曲に、無殘や修正の斧鉞は下された。これはかの『亞刺比亞物語』の有名な序詞にある後宮の悲劇を材とした物だから、清教徒風の目から見れば如何にもショッキングであるかも知れない。しかし米國でこんな野暮な途方もない長刀を振り廻はす處は、先づボストン近傍だけかと思ふ。

長刀は兎角小說に祟る。かういふ事には最も聰明な理解を有つ佛蘭西の政府でさへ、今から七十年ほど前には、フロオベエルが一代の大作『マダム・ボヴリイ』に對して、作者の罪を法廷に問ふほどの野暮を敢へてした。また英國の檢閱官に至つては以前は隨分沒分曉な事をしたもので、これは小說

ではないが、あのマアテルリンクの『モンナ・ヴンナ』をさへ禁止した事がある。希臘の昔から說かれてゐた『詩の正義（ポエティク・ジャスティス）』といふ黴の生えたやうな舊說を固持したものだらう。之に對してスヰンバアン、ヲッツ・グントン以下三十幾人といふ當代文壇の名家が連署して、抗議書を『アシニイアム』の誌上に掲げたので檢閱官（センサア）が凹垂（へこた）れたといふ珍談もある。然しこれは前世紀末のことだから今では既う古い話である。但しピネロもショオも皆法廷に引張り出された事がある。獨逸は例の國柄とて最も甚だしく、ゴデキントの劇などは幾たび禁止されたか知れない位だ。

さて米國では小說に對して、政府の禁止よりももつともつと不思議な所から長刀（ながかたな）が飛び出すのである。如何にも米國でなくてはと思はれる意外の方面から祟が來るのだ。私は之に就いて最近の一例を語らう。

昨年の事であつた、シオドオア・ドライサアといふ作者の小說『天才（ジニアス）』と題したのが、ジョン・レイン（殆ど文學書出版專門の英米一流の大書肆）から出た。ドライサアは今日の米國で兎に角最も有名な作家の一人で、いつも社會の暗黑面ばかりを描き、人生を無理想無解決なりと見る極端なる否定的厭世觀を抱く人だ。私はまだ此新作を讀む暇が無いのであるが、世評で見ればだいぶ猛烈な物であるらしい。ところが米國の社會ではなかなかに勢力のある惡風禁止協會のジョン・サムナアといふ男が、こんな本は怪しからぬと言ひ立てて、出版書肆に向つて原版の破壞を迫つたので

ある。これは確か成功しなかつたと思ふが、米國では矯風會といふものがこんな所にまで出しやばるのである。

此作者に就いては、も一つ面白い話がある。今から十七八年前ドライサァがその處女作『シスタア・キャリ』を書き上げて、先づ米國第一の出版業者ハアパアス社に原稿を送つたが刎ねつけられた。そこで今度はこれを紐育の大書肆ダブルデイ・ペイヂ社が引受けて出版する事になり、契約は出來た。印刷も大半出來上つた頃にそれを一店員の細君が讀んで見た。『女王』のお目に止まつたのだから、さあ事だ。こんな亂倫の書を夫の店から出版するとは奇怪至極、是非とも中止しなければならぬと言つて、夫と同僚とに迫つた。早速會議は開かれた。出版を見合はさうといふ事に衆議は一決したが、作者の方は契約書を楯に取つて頑として承知しない。そこで書肆の方でもひどく當惑したが、幸ひ印刷製本の體裁に就いては契約書に何等の記載も無かつた。それでは申譯だけの出版をして、成るべく世間に知れぬやうにする他は無いといふので、極小さな本に仕立て、表紙も決して人目を惹かぬやうに碌に表紙も印刷せず、僅かばかりの部數を出して名ばかりの契約履行をした。かかる不思議の歴史を有てる此書の第一版は、今は既に珍本となつて愛書家の貴ぶところである。その後之を摸刻したる第二版(一九〇七年)でさへ、時價數十金に上ると聞いた。

此小説は今では英國のハイネマン社から出版されてゐる。紐育と市俄古との中流以下の社會生活を

極めて寫實的に書いたもので、歡樂を追へる或女が墮落の徑路を、精緻なる自然派の筆を以て描いた作だ。

矯風會が手嚴しい抗議を出したり、『女王』があられもない長刀を振り廻はして發賣禁止をやるところは、さすがに米國だ。

花見る人の長刀。『ながかたな』と言つたのは、警保局長の永田君をもぢつたのではない。思へば二十年の昔、私が三高の嶽水會雜誌の編輯員であつた時、同じ學校の生徒であつた君は、

破産する噂ありしを門の松　　靑嵐

と云ふ句をその文苑欄に寄せたものだ。詩人靑嵐君いま猶健在なりや如何。

一六　大規模

日本では團體の名前に冠するに、先づ東京とか大阪とかいふ地名を以てする。少し大きく出て、關西とか日本とかいふ字をつける。よほど威張つた積りで東洋とでもいへば既う關の山だ。ところが米國のには『世界』と云ふ言葉が附いてゐる、ユニヴアサルとか、インタナショナルと云ふのも珍らしくない。事業を計畫する初に當つて、意氣既に宇內を吞んで掛かるのは豪い。

米人が凡ての仕事に先づ大きい世界といふものを眼中に置くのは、その國が世界人種の寄合ひであ

るのも一原因だらう。また大資本の結果でもあるだらうが、とにかくその氣字の宏大なる點は、日本の島國的小規模と全く正反對だ。極めて小さく愛らしくまた小ざかしきものを呼ぶに、米人はよく cute(キユウト) といふ言葉を使ふが、日本は確かに何もかも一切がキユウトな國だ。

我國ならば日本一でも威張れるが、米人は世界一でなければ承知しない。世界一で大きくさへあれば何にでも感心してゐる。景色としては格別取得の無いナイヤガラの瀧でも、大きければ彼等は世界一の絶景だと心得てゐる。

米國には世界一のものが澤山ある。そこで先づ、一寸考へると甚だ小さかりさうなもので、而も世界第一の大きさを有つてゐるものを、ここに一例として擧げる。極めて俗な話だ。

紐育、ボストンをはじめ、あの廣大な米國の到る所に五仙屋(センや)十仙屋(センや)の店がある。赤看板に『ウウルワアス』と書いて、その廣い店のなかには書籍文房具から臺所道具に至るまで、一切の日用雜貨を商つてゐる。幾百種の商品一として十仙(セン)以上の代價の物の無いのはその名の示す通りだ。降誕祭(クリスマス)とか祭日とかの前などは老若男女貴賤都鄙、すべての人がすべての買物を此處でするために、店内は立錐の地だも無き雜沓である。

閉業する店の廉い品物などを仕入れて來る外に、此ウウルワアスは一種の廣告機關として用ゐられるがために、品物を廉價に供給し得るのだと聞く。即ち新しい製造品や輸入品の俗受けしさうな物

は、此店に托して先づ廣告として十仙の廉價を以て賣り弘める。特に好評を得た商品に對しては、ウウルワアスから製造者や輸入者に賞金を出すのださうだ。私共が見ると慚汗背を潤すやうな粗惡な日本品も、尠からず此處に國威を發揚してゐる。

この十仙屋は千八百七十九年二月二十二日に、紐育州のユティカと云ふ小都會で、貧乏な小商人フランク・ウウルワアスといふ男が創めたものだ。のち彼が紐育に同じ店を開いて、事業の端緒に就いたのは今から約三十年前。この間彼はいくたびか健康を損ひながら、千辛萬苦して遂に全くの運、根、鈍でやり上げた。合衆國内の人口八萬以上の都會はもとより、今では加奈陀にも英國にも此店を開き、行く行くは全世界の大都會到る所に自分の店を開かうと計畫してゐる。彼の顧客は現在合衆國内で一日平均二百二十五萬人、使用店員の數無慮五萬人に及ぶのである。これが今世界に於ける最大の小賣商人だ。

僅かに五仙十仙の品物を賣つて世界第一の名を博し得たる彼は、之によつて得たる巨利を以て更にも一つ世界第一の物の所有者となつた。

紐育の人間は一日中に地上を動く距離よりも、空中を上下に動く距離の方が遙かに長いと言はれてゐる。それほどまでに三十階四十階の摩天樓が多いのだ。先頃英國の特派使節としてバルフォアが紐育へ來た時、新聞の第一面に卿が仰いで天を見上げてゐる寫眞が出てゐた。何かと見れば下に題

して曰ふ、『英國の使節摩天樓（スカイ・スクレーパア）を見て驚くの圖』。

紐育の大通りブロオドヱイはパアク・プレイスの一角、このあたりに櫛比して屹立せる多くの高閣を眼下に睥睨して、聳えたるものはウウルワアス・ビルディング五十五階の大建築。雲を凌げるその尖塔の金ぴかは、まさに米國文明の象徴である。

高さ七百五十呎（フイイト）、昇降機（エレヹイタア）の數三十四。これが今日世界で第一の高樓である。フランク・ウウルワアスといふ一箇の小賣商人が獨力を以て經營せる十仙店（センみせ）の收益から、千四百萬弗の巨資を割（さ）いて出來たるものは卽ちこれだ。途方も無いものである。

今は日本でも東京の神田邊や、京都の四條あたりには小さい十錢店といふのがあるやうだが、世界に於ける此種の店の嚆矢は卽ちウウルワアスである。米國のは單に下級社會の女子供をう**る**ほすのみでなく、中流以上の人々にも多くの顧客がある。現に今ウウルワアスは、紐育の日本橋通とか心齋橋筋とも云ふべき第五街（フイフスアヹニユウ）に、新しく宏壯なる五仙十仙店を建築開業しようとしてゐる。此邊は殆ど下級民などの決して買物に行かない、極めて貴族的なる市の中心地である。

一七　未來

極めて自由粗放なる新詩風の創始者として、燃ゆるが如き生命の讃美者として、またデモクラシイ

の謳歌者として、ヲルト・ホヰットマンは確かに米國が生める最大の詩人である。米國文學史上の天才で歐洲近代の文藝思潮に最も偉大なる影響を與へた者は、エマソンとポオとホヰットマンとの三人の外には無い。就中あらゆる點に於て最もよく米國の文明と精神とを代表してゐるものは、ホヰットマンの詩篇である。その作で最も有名なものの一つに『率先者（パイオニアス）』と題したのがあるが、これなどは米人でなければ決して作られない詩である。海のかなた歐洲の故國を振り棄てて、新しき世界に新しき生活を創始せんとする努力の人を歌つたものだ。今その一節を引く。

『先進の民は既に停止（とま）れるか。
海のかなたに、彼等は既に氣衰へ、業を終へて屈したるか。
吾等は永遠の任務と負擔と大業とに當れり。
　おゝ率先の人よ。
　吾等は一切の過去を放棄して、
更に新しき、更に大なる面目一新の世界に突出す。
吾等が捉ふるは新鮮にして強健なる世界、勞役と進取との世界。
　おゝ率先の人よ。』

神話と宮殿と城廓とを有せざる米國にも、過去三百年の歴史はある。しかしおのれが生れたる舊國

を見すてて、年ごとに新しく入り來る移住の民には、この短い歴史すら何の力も無いのである。これら新來の民によつて絶えず新しき生命の力が齎される限り、米國は老いんとしても老ゆる能はざる國である。老人の眼がいつも過去にのみ向へる間に、潑剌たる生氣に滿てる青年の眼は遠い將來に注がれてゐる。獨往邁進の勇と生活改造の努力と、これが米人の有する總べてである。

長へに若々しい國である米國には、保守退嬰の氣分が少しもない。すべての行り方が積極的の清濁併呑主義である。惡しき事を爲なといふよりは、進んで善い事も惡い事もせよといふ國である。君子は危きに近よらずといふ老人じみた消極的態度は、如何なる場合にも米人が斷じて爲すを欲せざるところのものである。

私は前段に米人の事業の大きい事を言つた。しかし世には大きい仕事を創めても、あとは行りつ放しで行先の事を少しも考へない人があるが、未來に生きんとする米人には常も百年の大計がある。過去を見ずして將來にのみ注がれたる彼等の眼中には、常も驚くべき遠大の計がある。日本人の目の屆かないやうな遠い遠い未來を考へてゐる。これを大にしてはかのモンロオ主義の如き、パンアメリカニズムの如き、平和強制同盟の如き、通俗教育奬勵の如き、富源保存運動の如き、また之を小にしては紐育市の設計の如き、一切の土木建築事業の如き、一として永遠の計ならざるは無い。少しの洪水にも潰れるやうな堤防を米人ならば決して造らない。

日本人が木や竹の箸を使ふ所に、西洋人は鐵製のフォークを使ふ。障子を紙で張る所に硝子を使ふ。木材で家を建てる所に石か煉瓦を使ふ。日本人が布か板を用ゐる所に、西洋人は必ず皮か金屬板を用ゐねば承知が出來ないのである。すべてがこの流儀だ。殊に米人に至つてはその最も極端なるものでで何一つ拵へても馬鹿に頑丈な、驚くべき耐久力を有つ物でなければ滿足しない。日本製品の粗製濫造は、色々の意味に於て日本人の短所を最も露骨に語るものであらう。

また日本では會社や學校を建てるにも、十年二十年の後には明らかに狹隘を告げるべき地所の上に平氣で建ててゐる。困つたらばまた何とか成らう、と姑息な老人風の安心をしてゐる。これは決して米人の爲ない事である。一寸考へると無用なやうな馬鹿々々しい大きな地面を先づ取込んで置いて、少しづつ建增して行くといふ風だ。これだから擴張の時に少しも困らない。勢ひ事業は容易く大きくなる。米人の仕事の大規模なのは最初の大計畫の外に、またこの遠き未來を考へる百年の大計があるからだ。

未來の米國の恐るべき所以は此點にある。何を爲でかすか分らない。

一八　日米の理解

日本は空前の大洪水に惱まされた。平安の都に住んで居るばかりに此災厄を免れた私共は、多くの

罹災の人々に對して心からなる同情を寄せねばならぬ。それにしても、天は今の日本を何と見てこんな酷い事をしたものだらう。

多くの古代民族は洪水傳説を有つてゐる。創世記のノアの洪水に似た話は、印度にもシリアにも巴比倫にも波斯にもある。羅馬の詩人オヸッドの『變體詩集』に出てゐるデュカリオンもこれだ。そしてそれらが皆何れも神が不完全なものを壞し、洗ひ流して世界を革新し改善するのだと云ふ根本思想に於て、殆ど一致してゐるのは面白い。私の『印象記』も先日一たび、洪水に遭つて押流されたる橋と同じく中斷してゐた事がある。西洋では古臭くて役に立たないものの事を洪水以前と云ふが、私が最初書き始めた時の腹案も、どうやら今では洪水以前のもので駄目らしい。

さすが日本人だけあつて、姑息の一時逃れで少しも遠大の計をしない私は、別に手控の用意もせずに漫然と稿を起して、思出す儘を其日暮しに書き連ねて來た。上來十數回に亘つて爲したる如く、米人と日本人との著しき相異の點を對照して書き續けようと云ふ積りではあつたが、とても駄目だ。そんな事を行つてゐてはまだ五十回や百回は續きさうだ。讀者の倦厭を恐れて私は斷然この計畫を變へる事にした。

考へれば考へるほど、凡ての事に日本人と米人とは正反對の兩極端に在る。之を兩方對比して列擧したならば、確かに浩瀚なる一卷の書を爲すだらうと思ふが、私には今左樣いふ事をする餘暇が無い、

日本から米國へ行けば凡ての事物がみな冠履顚倒だ。日本人の善いと思ふ事は米人が惡いと思ふ事だ、米人が善いと思ふ事は日本人が惡いと思ふ事だ。吾々が國民道德の根本として奉じてゐる忠孝の思想をさへ、米人は頭から馬鹿にしてゐる。米人が國民的大理想として、之がためには身命をも捧げようとするデモクラシイの思想は、日本では……旣う言はなくても解つてるだらう。要するに民族生活の根柢が異ふのだ。

たとひ政治上經濟上に利害關係の衝突點は無くても、かかる兩極端の者が互に理解しようとする事は非常な難事だ。之を爲すの唯一の道は、雙方がしばらく先入の見を去り、心を空しうして互に相研究するの外は無い。現にかの英佛の如き、あれ種に密接な歷史的關係があつたにも拘はらず、英吉利が個人主義の國であり佛蘭西が家族主義の國であるために、雙方の間には幾世紀にわたつて殆ど理解を缺いてゐた。それが漸く前世紀末から、かのエドモンド・デモオランの著『アングロ・サクソンの優越』の如き多くの眞摯にして精緻なる研究が出た結果、初めて今日の如き親善の關係を結び得たのである。

相互の精神的理解の最も大なる障碍が、國民の自惚と自負心とお國自慢とである事は勿論だ。ところが此點に於て日本人は斷じて人後に落ちざる者であるのは言ふまでもないが、米人の自惚と來た日には例の世界的の大規模であるだけに、ちよつと手の附けやうも無いのである。全く文明の性質を異

にした兩國民が、自惚と自惚とで兩方から睨み合つて居るのだから、理解の困難なのは當然の事だ。

支那が自ら稱して中國と言ひ、一切の外國を南蠻北狄東夷西戎と稱して巧みに『えびす』といふ字の使ひ分けをしたやうに、また羅馬人が本來『異國』といふ意味の『バアバロス』とふい字を野蠻未開の意に轉用したと同じく、今の亞米利加人には外國の事はよくも知らずに、文明國は自分の處ばかりのやうに心得てゐる者が甚だ尠くない。歐洲列國ですら近頃は米國に使節を送つて物を賴みに來る位だから、自惚心はいやが上にも增長して、日本などは支那比律賓と共に立派な野蠻國だと信じてゐる。さういふ人間に私は在米中いくたびか出喰はして閉口した（勿論口に出してそんな事は言やしないが）。

私は米人の極端なる自惚の一例をその國文學史上の一大傑作の中から取らう。オリヴア・ユンデル・ホルムズの名著『朝餐卓上の覇王』は、生粋のボストン兒たる作者が奇警なる感想を筆に任せて思ふ存分に書き立てた面白い本であるが、その第六章の初の所に『ボストン州廳は太陽系のハッブ（車の轂）なり』と云ふ驚くべき文句がある。今も米國では普通にボストン市の事を轂と云つてゐる。自分の鄕土を世界文明の中心と思ふ位の騷ぎではない、太陽系の中心だと言ふのだ。日月星辰森羅萬象皆すべてボストンを中心として廻轉すと言つたのは、さすがに米國式で自惚も大きい。『ジャップ』なぞは車輪の端くれにくつ附いた馬の糞位に思つてるのだらう。

米人が世間知らずの馬鹿息子のやうに、自分の國ばかりを偉いと思ふ自惚に就いては、大正五年九月の『中央公論』に野口米次郎君が詳しくまた痛快に論じてゐるから、私はここに省略する事にした（同君の論文『米國人の解剖』參照）。元來自尊排他の精神は、個人としても民族としても或は國家としても競爭心の根柢であり、やがてそれがまた發達進步の基礎であるから、地上に國を樹つる者、亡國に非ざる以上は一としてこれなきは無い。唯米人のは少しそれが度を外れてゐて、誇大妄想に近いのである。これは野口君の言つた通り、米人の極めて淺薄なる樂天主義に基づくのだ。

今日世界の文明國のうち、日本の眞價を認むる事最も少き國は米國である。開國の當時だいぶ米國のお世話になつたからと云ふので、何時までも我が國を子供扱ひにする。そして近頃は其子供が成長したので、生意氣になつて惡戲をして困る位に考へてゐる。米人中日本に對して好感を抱いてゐる人ですら、かういふ見方をしてゐる事は確かに事實だと信ずる。

英國はその唯一最大の寶庫たる印度といふ大領土を東洋に有する限り、日本の政治上の地位を認めない譯には行かない。露西亞も日露戰爭と今度の歐洲戰爭とで明らかに日本の實力を認めるに至つた。獨逸は在來最も多く日本から學者の行つた國である、從つて今では少くともその知識階級の間には、日本人の眞價は多少認められてゐる（一例を言へば伯林大學の如きは、米國の小さい大學から行つた留學生に對しては拒絕して與へない研究上の特權さへ、日本の官立大學の卒業生には安んじて與

へてゐるではないか）。殊に日本と獨逸とは、米人が動もすれば危惧の念を抱くほどに、その文明や國民性に多くの類似の點があるのは爭はれない事實だ（これあるがために日本の方にも、多くの獨逸文明心醉の徒を生ずるのである）。佛蘭西は政治經濟上にも、亦學藝の上にも、日本とは在來比較的關係の少かつた國ではあるが、我が國が世界に誇るべきものの一つである日本美術の精神を、眞によく消化し理解してゐるのはあの國であつた。殊に今次の世界戰爭は政治經濟關係の上にも、佛蘭西をして日本の眞價を認めしむるに好箇の機會を造つた事は疑無からうと思ふ（然るに日本には今も猶、佛蘭西の文明や學術の偉大が世界に冠絕せる事に氣附かない人の多いのは困つたものだ）。

ところが獨り米國に至つては、その地理的關係が日本とは對蹠（アンテイポテイイス）の位置に在ると同じく、文明の性質が根本に於て正反對である上に、在來いまだ日本の眞價と實力とを認識すべき一の機會をすらも有たなかつたのだ。

米國が他の列強の如く日本を理解する機會を有たなかつたと共に、今日まで日本を曲解する最も多くの機會を有つた國が米國である事は、更に大に悲しむべき事實であると思ふ。一時は親善なる日米の關係に危機を生ずとまで傳へられた移民問題に就いては、今更これを言ふに忍びない。また支那問題の如きは私の如き門外漢の容喙すべき限りでは無からう。しかしこれらを外にしても、なほ日米間の理解を妨げた重要な點のある事を、私は次に指摘したい。

米人は日本の中流以上の社會の人たちに接觸する場合が甚だ少かつた。物質的にか或は精神的に貧しい、比較的低い日本人をのみ最も多く見てゐたのである。德川時代に士農工商といふ社會階級の最下層に置かれて、素町人として長い間蔑視せられてゐた時代の餘弊が明治以後にもなほ殘つてゐて、殆ど道義心の痲痺してゐた日本商人と、米人は最も多く接觸するの機會を有つた。商業上の掛引よりも更に大切な商業道德を無視して、西洋人とさへ見れば胡魔化して金錢を捲き上げる事に掛かつてゐた、さういふ種類の日本人を最も多く見てゐたものは米人であつた。我が對外貿易の三分の二を占めるものは米國との取引であつたから、日本商人の不德義を今まで最も多く經驗した者も米人である。從つて日本品の粗製濫造に最も甚だしく手古摺つた者も、亦恐らく米人であつたらう。今では日本の商業界も進歩して、以前のやうに野卑な眞似をする人間は居ない事ではあらうが、米人の腦裡には今日なほ先入主となつて、日本人の德性に十分の信を置かない人の甚だ多いのは事實である。

また海外移民はその本來の性質上、知識教養（カルチュア）から見ても富の程度から見ても、決してその國民の中流以上を代表するものでないのは勿論だ。これはあの紐育の波止場に上陸する歐洲諸國、殊に南歐羅巴からの移民の狀態を見ても知られる。獨り日本からの移民をのみかれこれと咎むべきでは無い。ところが例の人種的偏見から、米人は日本移民を南歐のそれよりも更に劣等なりと見てゐる。そしてそれを、以前に日本商人との取引で經驗したる惡印象（バッド・インプレッション）に結び附けて、日本移民を以て日本人の凡

てを代表するものの如くに斷定してかかる。勢ひ日本人は貧乏で知識もなければ德義心も無い、唯こそこそする未開の人種だとのみ早合點して了ふ。これで若し正當なる理解が出來れば不思議な位のものだ。

米大陸の西部に發展せる日本人が今のところ、富の程度に於ても知識教養に於ても遠く白人に及ばないのは遺憾ながら事實だ。昨年であつたか、日本の某侯爵夫人が米國に來た時、或日本人の米國生れの子供が『日本にでも彼麼(あんな)人があるのか』と驚いて父母に語つたといふ話がある。その本國の上流中流の社會を知らなければ、同胞日本人の子供にして尚且この有様である。米人が日本人の眞價を認めないのは寧ろ怪しむるに足りないだらう。

だから米人にして我が國へ來遊してのち、始めて日本文明の眞價を知り、在來の謬見を棄てた人も甚だ多い。しかしこれとても、全く日本語に通ぜず通辯を介して日本人の皮相外面をのみ見て歸り、通り一遍の名所見物をした位では、西洋と全く異なれる二千年の歴史を有てる日本文明を理解することは到底不可能である。

米人の多數が今日なほ日本の事物に關して全く無知であるのは、眞に驚くべきものがある。日本と支那とを混同して考へる位はまだしも、甚だしいのになると比律賓も同様に思つてゐる。日本にも議會があるかと、考へようによつては一寸皮肉にも聞える質問を私にした者があつた。また電車(トロリ・カア)はあ

るかと訊いた女があつたから、私は既うフェアリ・ランドではないと答へた。そして、近頃に日本も俗な物なら何でも米國から擔ぎ込むから御安心あれ、と附け加へた。講演をした後などでは、寄つて群つてからいふ奇問と愚問との包圍攻撃をするので、一方ならず閉口させられたものである。

何か學問の話でもすると、あなたは米國の何處の大學を出たのですと來る。日本にだつて立派な教育機關はありますよと答へると、それは宣教師（ミッション）の學校（スクウル）ですかと出る。頓と始末に行かないものである。殊に私の滯米中いつも不快に思つたのは、米人がよほどお追從の積りで、日本の進歩は驚くべき（ワンダフル）ものですなとか、日本國民は驚く可く進歩的（プログレシヴ）ですとか云ふことだ。何がワンダフルだ、何がプログレシヴだ。當り前ではないか。徳川三百年の燦爛たる文化の後を承けたる今の日本だ。奈良朝平安朝から數へると日本の文明史の長さは、米國の文明史の十倍位ある。羅馬は一日にして成らずだ。浦賀の砲聲を聞いてから野蠻人が急に居直りの文明國になつたやうに思ひ、明治大正時代のみを見るから、こんな愚な事をも言ふのである。維新以後の日本はその全力を擧げて物質上の進歩に捧げたために、その精神的方面に於ては却つて徳川文明の時代よりは退歩し俗化し、遜色ありとさへ見ゆる位ではないか。これは常も過去の歴史を顧みない米人の如何にも言ひたさうな事ではあるが、外國の事に關して此種の誤解をする人は、邦人中にも甚だ尠くない。例へば日本人はよく英國を目して常識の國だなぞと言ふが、それは單に日本の明治時代に相當するヸクトオリア朝だけを見て、その以前の浪漫的（ロマンテイク）時

代や或は最近の英國を見ないからである。常識一點張りの國にバイロンやシェリイのやうな他國に類の無い詩人が如何(どう)して生れるだらうか、ロイド・ジョオヂの如き政治家や、バアナド・ショオの如き思想家が如何して現代に現はれるだらうか。少しは書物なりと讀んで見るが可(よ)い。

米人が日本を曲解する原因のうち、更に知識的方面に關する一二の事實を擧げよう。

日本の政治經濟美術宗教社會等に關する英文書籍のうちで、學術的の研究に屬するものは、讀者が比較的少數であるから後廻はしとして、最も多く一般人士の間に讀まれる通俗書或は小說などの中、『武士道(ブシドオ)』や『肉彈(ヒュウマン・ブレッド)』の如きものは、たとひそれが明らかに日本人の一面を示したものであるにもせよ、米人の最も好まざる、或は最も理解するを困難なりとする日本人の特徵のみを甚だしく誇張して書いたものである。また蘆花氏の『不如歸』の英譯の如きも、米國の婦人で日本に興味を有(も)つ人たちの間には廣く行はれてゐる本であるが、あの小說に出てゐるやうな極端な家族主義の思想は、到底個人主義の米人が理解し得ざるものであるのみならず、あれによつて日本の上流社會の家庭の狀態を想像すると、米人にはそれが甚だしく蒙昧野蠻なもののやうに受取られるのである。全く個人としての自覺のない浪子といふ女主人公を見て、あれは狂(きちがひ)かと評した人もあれば、またあの作を馬鹿な物語(フウリシ・ユストオリイ)だと私に言つた人もあつた。何分にも作品としては極めて低級な物の事でもあるから、私もあれを辯護する程の勇氣は出なかつた。兎に角日本の此類の書物を英譯する場合などは餘程原書の選擇に注

意する必要があらうと思ふ。殊に一たび英語に譯さるれば、それが忽ちにして獨、佛、伊、露等の國語にも重譯されて歐洲全體に傳へられるのである。現に右の三書の如き今では歐洲各國の語に飜譯されて、或場合には世界をして甚だしく日本を誤解せしむる事が無いとも限らぬと思ふ(『武士道』は最初から英文で書かれた本だが)。

かういふ書物を讀み、坊間の案內記を讀んで米人は日本に出掛けて來る。通辯の說明を聞いて名所見物をする。平時には米國では見られない軍人の威勢のよいところを見て歸る。かくて米人の腦裡には、日本が何時までもヨシワラとフジヤマとゲイシャ・ガアルとサミュライと、そして軍人との國であるかのやうに考へられるのは、實際無理からぬ次第ではないか。

歐羅巴見物に、到る處で無闇に金錢(かね)を撒きちらす旅客は先づ米人と定まつてゐる。貧乏な癖に日本人もよくこの旅大盡を行るが、それは固より米人には敵はない。巴里の衣服店(モオディイスト)には、ちやうど日本の成金相場のやうに亞米利加相場と云ふのがある、と或米國富豪の奥さんでよく巴里に行く人が話してゐた。また讀者の知られる通り、日本漫遊の外客もその過半は米人である。米人はかく費用を惜しまず海外へ旅行をするにも拘はらず、外國に關する知識の甚だ乏しい國民であるのは有名な話だ。これは自國が世界一の文明國だといふ自惚に原因してゐる外に、また疑もなくその研究心の缺乏にも因るのである。

英、獨、佛に較べると、米國に於ける日本研究は甚だ貧弱淺薄なものである。これはかのエンクステルン君の編纂した有名な『大日本書史（ビブリオグラフイ・オヴ・ジャパン）』を一閲すれば忽ち氣附く事で、何事にも研究心の旺盛な獨逸人の著書は別問題として、同じ英國で書かれた本の中では、日本研究のものは米人の手に成るものよりも英人の著述の方に遙かに良書が多いのである。今日まで西洋で日本學の權威を以て目せられてゐるアストン、サトオ、チェインバレイン諸氏の書に匹敵すべきものは、文學語學の方では米國には一つとして出來てゐない。また米國には大學程度の學校が二百以上あるにもかかはらず、自國とは國際關係の密接な日本を研究する設備のある所は殆ど無い。僅かにエイル大學とスタンフォド大學とにあるのみで、ハアヴアド大學のは今は中絶の有様だ。その他コランビア、ジョンス・ホプキンス、プリンストン、市俄古等の世界第一流の大學ですら、支那學印度學の講座はあつても日本學の方は全く出來てゐないのだ。

先づかういふ有様だから、米人の筆に成る日本研究の書は、例の移民問題に關する際物（きはもの）のほか、多くは面白半分の旅行記か、茶の湯生花の講釋の類が多數を占めてゐると見て差支ない。此間に在つて我が京都大學のロムバアド君の『明治以前の教育』や、慶應大學のマクラレン氏の『日本最近政治史』の如きは、その眞摯なる研究的態度に於て近刊の書中寧ろ出色の文字だと言つて可い。

米人が日本の美術を愛し、巨資を投じて我が繪畫彫刻の類を購ふ事は讀者の知らるる通りである。

またボストン博物館の蒐集の如きは、さすがに岡倉覺三氏が力を盡くされただけに、世界で最も有名なものであるのみならず、日本の本國に於てすら、あれだけの物を一箇所に集めてゐる所は寡聞なる私は未だ知らないのである。その他市俄古、紐育、ブルックリン等の博物館には、皆立派な日本部が設けられてゐる。しかしながら此方面に於ても、かの倫敦の大英博物館のロオレンス・ビニオン氏の著書程のものが、まだ米國に出來て居ないのは如何したものだらう。

專門家はさておき、一般米人の日本美術癖は眞に藝術鑑賞の態度であるよりは、例の珍らし物ずきの好奇心が手傳つてゐる場合が甚だ多い。また日本で近頃市井の銅臭兒が、何等藝術の趣味もなくして徒らに書畫を漁ると同じく、單に英佛批評家の尻馬に乘つて成金振りを發揮したに過ぎないものも尠からずと思ふ。

私はここまで書いて、ふと面白い事を思出した。

米人の女の帽子の飾と云ふものは頗る奇拔なものだ。何とか云ふ鳥が交尾期にだけ生やす妙な羽を頭上に聳やかして見たり、眞赤な木の實を幾つもぶら下げて見たり、例のウウルワアスの十仙店で買ひ集めた造花をでこでこと盛り上げて見たり、十人十色で皆銘々が勝手な意匠を凝らすのだから、なかには眞に奇想天外から落ちる類のがある。日本の女の髷や髮飾を見慣れた目には、何とも批評の仕方の無いものである。ところがこのなかに近頃妙な物が流行つてゐる。水兵の帽子のやうに縁が無く

て、その鉢卷には幅の廣い派手なリボンが縫付けてある。此リボンには漢字で『帝國軍艦海防』と色も鮮やかに染め出したのは好いが、西洋人に漢字は讀めないから、それが皆倒とんぶりである。『帝國軍艦海防』と云ふ流儀だ。之を冠つて澄まして行くどころか、雙肩風を切つて男子を蹴飛ばさん許りの勢は、眞に街頭の奇觀である。

私は此帽子の女を見る時いつも左樣思つた、米人が日本美術を愛すといふも或は此類であらうかと。

さて日米間の理解と云ふ事には常も出る米人の人種的偏見(レーシアル・プレジュディス)も、實際行つて見ると聞いたよりは烈しいものである。大陸西部に於ける黄色人種に對する白人の態度に就いては毫も知らないが、紐育の如き最もコズモポリタンな土地に在つてすら、黒人に對する白皙人の憎惡輕蔑は否定すべからざる事實だ。此調子では今も猶他の地方で、かの基督教國の國辱とも云ふべき黒人私刑(リンチング)が履行はれ、去ぬる六月の聖路易(セントルイス)に於ける如き慘劇を見るのは毫も怪しむに足らないと思つた。（私刑(リンチング)と云ふ蠻的行爲は、有色人種の者が白人の女を凌辱した場合に行はれたのがもとで、これには人種的憎惡の外に例の米人の極端な女人崇拜が加勢してゐる。）

加奈陀の或旅館(ホテル)で心易くなつたニュウ・ジイランドの銀行の支配人が、私にかういふ話をした。米人が黒人を嫌惡する事は吾々英人の想像以上である。或時自分が黒人と共に晩餐を喫してゐたのを見た或米人が後に、君は黒人と一緒に飯を喰ふのか、とさも不審さうに驚いて言つた事がある。英領植

民地では黑白人相交つて一堂に會し、歡語談笑する事は少しも珍らしくないと。

私は之を聞いて、英國植民政策の成功が故なきに非ざるを思つた。實際ボストンの如き偏狹な氣風の地では勿論のこと、紐育に於てすらも白人が黑人と食卓を共にする事は、如何なる場合と雖も絕對に無いので、チョップ・スェイと稱する支那料理店にすら、黑人は殆ど出入する事を得ないのである。紐育にゐる幾萬の黑人は一たい何處の如何な家で晝飯を食つてゐるのか、と怪しまれる位である。市中に大小幾千軒とある旅館料理屋の食堂に、黑人が白人と共に食事をするのを私は未だ曾て一たびも見た事は無い。

勿論黃色人に對してはこれほどまでに極端なのではないが、桑港で以前には日本人に食事をさせない料理屋の多かつた事を私は屢聞いた。食事は單に一例に過ぎたい、一事が萬事すべてが此流儀である。

單に人種的嫌惡のみならず、宗教的偏見も亦之に加はる場合が甚だ多い。基督教國民の異教徒に對する激烈なる反感は、昔の十字軍時代から今も猶變りは無いので、米國の淸教徒風な人間などは、基督教信者でなければ人で無いと心得てゐる。またそれ程で無くても、基督教國以外に文明國なしと思つてる者は十中八九までがそれだ。私はかういふ人間に出喰はす每に常も左樣言つた、君等は歐洲文明の淵源を爲した古代希臘の花やかな異教文明を何と見てゐるのであるかと。嘗て菊池男爵が英米に

講演を爲られた時、日本の敎育には基督敎の感化は少しも無いと言はれたのが一部人士の批評の的となつたさうだが、そんな事は當り前ではないか、何も今更怪しむにも驚くにも足らないでは無いか。世界到る所に異敎文明が絶滅せられたる今日、基督以外の新文明を東洋に建設せんためにこそ、吾々は努力して居るのである。

一九　智的協商（インテレクチュナル・アンタント）

智的協商（インテレクチュアル・アンタント）の語は私が造つたのではない。英國の現代文壇に能文達識かくれなきエドマンド・ゴッスが、昨年佛蘭西の『兩世界評論』誌上に掲げた論文に用ゐた言葉を借りたのである。

ゴッスの論旨は獨逸のクルトウルを排して、英佛文明の勝利を高調したのである。千九百十四年十月卽ち歐洲戰爭突發後間もなく、獨逸の學者九十三人が連署して公にしたる宣言書を以て、ゴッスは獨逸精神界の暗黑狀態が更にその軍國主義的野蠻よりも烈しきを示せるものなりと言ひ、哲學科學等に於て英佛米の諸國が獨逸學徒の言に耳を傾けた時代は既に過去の事に屬すべきを論じた。ゴッスの言によれば、十九世紀の大部分の間、英佛の思想上の關係は甚だ疎遠であつた。千八百三十七年第一回の英佛同盟の如きも、思想文藝の上には何等の影響を及ぼす事も無く、エルネスト・ルナンやアナトオル・フランスの思想が英國の評壇を動かすに至つたのは、僅かに最近二十年位の事に過ぎない。英

國は佛蘭西を目して不道德、信仰の國なりと言ひ、佛蘭西は英國を嘲つて陰氣な僞善者の國なりとして居た。それが近年に至つて文明の媒介によつて兩國間の理解は增進せられ、殊に國民の內部生活を赤裸々に描いた小說が、英佛人相互の間の默會(アンダント)を造つた事は著しき事實であつて、今や英佛は政治上に於けると同じく精神的にも協商國となつて、現在及び將來の親善なる關係を致したとゴッスは論結した。

　文明の性質を異にせる英佛間に、近年眞摯なる硏究の結果として完全なる理解を生ずるに至つた事は、私も前に之を述べた。これは私共が日米間に眞の理解を造らうとする時にも、大に參考とすべき點だと思ふ。

　政治經濟上の利害關係によつて集散離合常なき列國の間の同盟や協商は、單に一時的のものであつた事が多い。しかし世界の文明と云ふ大きい立場から言へば、列國各異なれるその長を發揮して特有なる文化の美を競ふと共に、相互の間に眞の智的精神的の理解を生じ、恰も音色(ねいろ)も調子も異(ちが)ふ數種の樂器が、完全なる融合調和によつて一の管絃樂(オオケストラ)を造るやうでなければ、民族としても人類としても實に大なる不幸である。かうして出來た智的精神的協商は永久にわたつて力あるのみならず、政治上の親善關係も亦之によつて益々促進せられる事は言ふまでもない。米國と英佛二國との在來の關係の如き、明らかに之を證するものではないか。

國民の內部生活（インナア・ライフ）の僞らざる表現である文藝宗教歴史言語等に、眞實なる誠意ある研究をも積まずして、僅かにその現在の政治行動や外部の生活狀態のみを觀察して、其國を理解しようとするのは殆ど無謀の擧だ。

紐育に行つて見てゐると、近頃は歐羅巴へ行かれない多くの日本人が、用の有る者も無い者もぞろぞろとやつて來て、面白さうに貧乏國の金貨を使ひ散らしてゐる。まことに結構な事ではあらうが、日刊新聞一つ讀めないあの俗吏や實業家に、米國の或方面だけでも果して理解が出來るのだらうか。かく申す小生も米國の宗教歴史その他に關する知識が淺いため、上來色々な事を書き立てはしたが本當の理解は矢張り出來て居ないのだらうか、と自ら顧みて竊かに忸怩たる次第である。

これと同樣に、日本の文學も言語も歴史も何も知らない外人が、通辯を介し案內記を讀んで、通り一遍の見物をした位では何の理解も出來ないのみならず、殊に其人に觀察眼がある場合なぞは、外面を見て速斷するだけに却つて有害である。私はかの一代の文豪キプリングの日本紀行を讀み、また先年我が國に來遊したブライス子爵が歸國後の日本評を讀んで、あれ程の學殖文才ある人ですら、通り一遍の見物では矢張り眞の理解は出來ないものか、と今更のやうに感じた。

人間は極めて皮肉（シニカル）な動物だ。他のものを觀るとき、自分がそれとは餘程の段違ひで一日置いて掛かる者で無い以上、先づ其者の暗黑面や短所ばかりを見ようとする。誠實なる研究の態度を以て臨まさ

る限りは他を理解する事の出來ないのも、全くこの性質あるがためだ。今まで日米間に正當な理解の無かつたのも、畢竟雙方に毫も此研究的態度が無かつたからだ。これは支那問題よりも移民問題よりも、更に大に考へなければならぬ點だらう。

或米國の學者が私に語つた。今から半世紀後の太平洋の地位は今日の太西洋の如くなるだらう。桑港が他日の紐育となるといふのは必ずしも痴人の夢ではないと。それは兎に角、將來の世界文明は歐洲に於て、中歐の獨逸系文明と西歐の英佛系文明との對立となり、太平洋の兩岸に於て、パン・アメリカニズムの米國文明と日本を代表者とせる東洋文明との對立となるだらう。各異なれる民族性と國民思想とまた地理的關係とに根ざせるこの四つの文明が、互に牽引し競爭し進轉し、また協力調和して行く所に將來の世界歴史は出來るのだ。日米間の智的協商は、太平洋文明建設のために必要なのである。獨り兩國のためではなくして、世界文明將來のためである事を思はねばならぬ。

二〇　外交官

辭令の巧妙と、法律や慣例の知識とだけで外交官は勤まるものであらうか。西洋の外交官を見ると如何(どう)も左樣(さう)ではないやうだ。

いま米國華盛頓外交團の首席(ドワイヤン)は、佛蘭西大使ジァン・ジュスラン氏である。駐米大使として勤續既

に十五年に及べる溫雅老熟の一紳士、之をかの米國宣戰前、ハアヴアド大學のミュンスタベルヒ教授と呼應して米國內を搔きまぜた獨逸大使ベルンストルフ伯の如き俗物と對比すると、如何にもそれが獨逸と佛蘭西との文明の比較を二つの人格に現はしたもののやうに見えて面白いと思つた。ジュスラン氏が外交官としての閱歷は四十年の長きに亙つてゐる。その間倫敦の大使館參事官として或は丁抹駐劄公使として、各國に使して重要の任務を果されたる功績は枚擧に遑あらずと聞くが、その方面の事は門外漢たる私には解らない。唯アングロ・サクソン民族の文學を最も誠實に硏究したる世界的學者として、苟も英文學を學べる者にしてジュスラン氏の功業を讃嘆せざる者は無からうと思ふ。氏が『英文學史』三卷のほか『沙翁時代の英國小說』『中世の英國生活』『ピイアス・プラウマン』『佛蘭西に於ける沙翁』(原文は勿論佛文、みな英譯がある)以下の名著は、獨逸大學に於ける英文學の腐儒的硏究に對する無言の嘲笑だと言つて可い。

米人の佛蘭西崇拜は今に始まつた話ではない、ラアフェイエットが米國獨立戰爭のために力を致したる十八世紀以來の事だ。今度の米國參戰に當つても、自由の大義のため米國は昔佛蘭西より受けたる恩義に報いんとて兵火を開いた、とさへ言つてゐる米人がある。しかし人も羨むこの米佛親善の關係が、深くアングロ・サクソン民族の文獻に精通せるジュスラン大使の、十五年間の努力に負ふところ甚だ大なるは言ふまでも無からう。大使が米國駐劄の間、年ごとに紐育自由神像の記念式に臨席し

て述べる演說などは、眞に史實と英文學とに精通せる氏のこととて、尋常一樣の外交的辭令を以て目すべからざるものがある。その筆記が新聞紙上に現はるる時それが米國人心に及ぼす好影響は、國際の親善關係よりも更に偉大なる或ものを米人の心胸に傳ふるに足るのである。昨年氏は更に英文を以て、米佛の國交と歷史的關係を說ける一卷の論集を公にして米國讀書界の注意を惹いた。能文健筆に加ふるに淵博なる學殖と圓滿な人格とを以てせる、かくの如き外交官を有せる佛蘭西は幸ひなるかな。

開戰以來佛蘭西は大使館員をまでも召集したものと見えて、唯さへ忙しいジュスラン大使は部下の人員不足のために非常な多忙であつたらしい。昨年華盛頓で珍田大使が私を氏に紹介して呉れられた後も、時局に妨げられ長くこの碩學に親炙して英文學に關する教を仰ぐ事を得なかつたのは、私が滯米中の最大恨事とするところである。

文人をして遣外使臣の任に當らしむる事は、必ずしも昔文藝復興時代の伊太利の諸共和國がこれを爲したばかりではない。現代に於て米國は最も多く此種の外交官を有つてゐる。元來米國からの遣外大使公使は、他國と任用の法を異にしてゐるため、慣例や禮儀に嫻はぬといふ批評はあるが、實業家か辯護士でなければ學者や文筆の士が多數を占めてゐる。米國では詩人としても批評家としても一流の盛名あるプリンストン大學の英文學教授ヘンリ・ヴン・ダイク氏は、ヰルソン大統領が元プリンスト

ンの總長であつた關係もあらうが、和蘭公使の職を帶びて、昨年私が此大學を訪ねた時はまだ任地から歸つてゐなかつた（氏が任を辭して歸米したのは今年になつてからだ）。また今の駐英米國大使で時時よく氣焰を吐くペイヂ氏は、確か米國の有名な雜誌『世界事業（ワアルツ・ワアク）』の主筆だつたと思ふ。また歷代の倫敦駐剳米國大使中最も勢力のあつた人は、誰あらう、詩人ジェイムズ・ラッセル・ロオヱルである。此人の作は既に米國文學史上不朽の物で、以前は日本でもよく英文學の敎科書として讀まれたものである。ロオヱルが『アトランティク・マンスリ』の主筆や、ハアヴアド大學の近世文學敎授を辭して後、大使となつたのは千八百八十年代であつたらう。その他米西戰爭の時の駐土大使はミシガン大學總長、今の希臘の米國公使はコオネル大學の總長。又以前ハアヴアド大學の總長で、米人が神樣のやうに言つたエリオット氏が、嘗て駐英大使たらん事を勸められて辭したのは公然の祕密として名高い話。これらは今單に私の記憶に浮ぶだけを擧げたのだが、米國の外交家で此種の學者文人の例を擧ぐればまだまだ非常に多からうと思ふ。古い事を言へば、日本の英語敎科書である『スケッチ・ブック』の作者アアギングが、西班牙駐剳公使であつた事は讀者の知らるる通りである。また昔フランクリンは佛蘭西に使し、歷史家バンクロフトは英獨に公使となり、詩人ベイアアド・テイラアも獨逸駐在の米國外交官であつた。

また英國の外交官に就いて言へば、今の駐米大使スプリング・ライス氏の前任者であつたプライス

子爵が、その名著『米國共和政治』を書いて文名を大西洋の兩岸に高からしめた如き例は甚だ多からうが、それよりも英國の外交官と我が日本の文物とは最も深い更に密接な關係がある。英文で書かれた最も完全なる日本文學史は、東京の英國大使館に書記官であつたヰリアム・ジョオヂ・アストン氏の筆に成るものである。氏は本來英國大學で文學を專攻した人であつただけにその歐洲文學に於ける造詣の淺からざる事も、かの『日本文學史』を通讀すれば直ちに肯かれる。また明治の初年から日本駐剳の領事館員として我が國に來て、後には再び公使として來任したサア・アアネスト・サトオ氏の筆に成る、多くの論文と著述とが極東の島帝國の文物を世界に紹介した功勞は永く沒すべからざるものであつた。西洋人で眞によく日本の文物を研究し理解した人々は、先づこれらの人々であつた。また今の倫敦大學の日本學教授ロングフォオド氏が、東京、神戸、長崎、臺南の各地に、三十年以上の長きに亘つて領事の職を奉じ、日本文明の最も熱誠なる研究者であつた事は世人の知る所であらう。又さき頃故人となつたリデズデイル男爵（卽ちフリイマン・ミトフォオド氏）はロゼッティ、スヰンバアン等と親交のあつた有名な文人であるが、これも明治の初年東京の公使館の書記官として來任し、深く日本の文物を研究して、かの名著『昔の日本の物語（テイルズ・オヴ・オオルド・ジャパン）』を書いた。日本に興味を有つ外人でこの名高い本を知らぬ人は無からう。また昨年出版せられた『リデズデイル卿回想錄（レミニッセンス）』の中にも、英國近代の文人を論じた文と共に、維新頃の日本の事を書いた數篇の思出の記が添へられたのを見て、さすが

此人の筆でなくてはと私は殊更それを興ありと思つた。

まだ日本が今日ほどに開けて居なかつた頃に、歴史も人種も言語も何も何もかも一切を異にせるこの絶東の異國へ來て、その文明を理解し、これをおのが祖國に紹介すべく努力したこれらの英國外交官は、區々たる政治經濟上の利害問題よりも以上に、更に高く大なる永久的なる使命を果したのであつた。そしてこれは枯淡なる法律のほか何も知らないやうな、無學無趣味の人にでも出來る仕事だとは思はれない。

佛蘭西現代の詩壇に新詩人の翹楚と仰がれるポオル・クロオデルは、支那から米國へ轉勤した佛蘭西領事である。私は一々こんな事例を文藝界と外交界とに求めて、煩はしい片假名で讀者の倦厭を招く事を好む者では無い。たゞ人文（ヒユウマニズム）に關する學藝の素養ある人にして始めて異國の文化を理解し、國際間の智的協商をつくる能力ある事を指摘すれば足るのである。

私は祕密外交の本家、探偵組織（スパイ・システム）の元祖である獨逸の外交官が果して如何なるものであるかを言ふを憚る。ただ英佛米の外交官には、優に他國の文明を批評し理解研究し咀嚼し得るだけの素養ある人の多い事を言つたまでだ。以前日本にも、外國の思想界や社會狀態や或は教育文藝などの近狀を研究するため、リテラリ・アタシエの如きものを設けて、海陸軍の公使館附武官のやうにすれば好いといふ稍突飛な說を唱へた人もあつたと聞くが、かくの如きは固より事情の許さざる不可能の事である。こ

は寧ろ外交官共人に向つて望むべき事で、國際間の意志の疏通にも重大なる關係あるその任務の一つではないか。殊に外交官は此種の研究と觀察とを爲すに當つて、最も便宜多き境遇に在るものだらう。

人若し政府の留學生に望むにかくの如き任務を以てするならば、これも甚だしき迂論である。現在の留學生は極めて狹隘なる範圍の專攻學科に就いてのみ研究する者であつて、他を顧みるの餘暇も無ければまた待遇も與へられては居ない。殊に歴史文學教育その他人文(ヒユウマニズム)に關する學科とは、全然沒交渉なる方面の研究をする人がその大多數を占めて居るのだ。

近頃『帝國文學』の誌上に、東京文科大學の芳賀教授の法科萬能主義を排すといふ論文を讀んだ、また試驗制度が問題になつてゐる事をも聞いた。私は今法律萬能を思想界の一問題として論究するの餘暇を有たないが、とにかく地方教育監督の衝に當るべき官吏や或は國際間の事情の疏通を計るべき外交官を採用するに當つてもなほ、單に法律知識のみを重しとする試驗をなすが如きは、誰が見ても隨分不穩當な事であらうと思ふ。法治國の官吏といふ者はそんな者であらうか。

二　黄金街の仙寰

利巧な西洋人も時々は馬鹿な事をする。今度の戰爭がそれだ。英吉利の政治家も獨逸の政治家も、

こんな事に成らうとは開戰の當初、夢にも考へてゐなかつた。全く歐洲の自殺行爲である。お蔭で米國の大きい金持は彌が上にも大きくなつて仕末に行かない。日本では百萬圓か二百萬圓の目腐れ金――米國富豪の目から見れば、百萬圓卽ち米貨五十萬弗は確かに目腐れ金、端金に相違ない――を儲けて『何んて間が好いんでしよ』を歌つた人たちが、近頃は既うそれさへ少し怪しいといふ心細い時に、米國は戰爭に參加して少し位金を使つたつて平氣でゐるのだから面白い。

一時は世界金融の中心が米國の紐育へ移るとまで言はれた其紐育の、兜町か北濱かに相當する所はヲオル街である。街上を幾千幾萬の我利々々亡者が一たい何の必要あつて、あゝまた忙しさうに血眼になり、一分一秒を爭ふといふ顏附をして奔走するのだらう。いくら紐育に黃金の津浪が寄せて來たつて、何も彼麼まづい顏附をしなくても濟みさうなものだと思ふ。悲劇は常にその半面に於て喜劇であるが、あの我利々々亡者の顏附に至つては確かに人生の悲喜劇の最も詩的な表現である。これは金儲に關係のない貧乏人の私が低徊趣味か何かで、あの邊をぶらぶらして行人を眺めてゐた時の僞らざる感想だ。

日本の間數に直して僅か三町か四町に滿たない此ヲオル街は、西半球全體の富が集散し運轉してゐる中心地である。紐育にしては比較的町幅の狹いその兩側には、株式取引所だの國立銀行だの信託會社だの、何だの彼だのといふ、私には少しも譯の解らない大建築が軒を列べてゐる。軒ではない、

例の三十階四十階の摩天樓が幾つとなく列んで、上向きに雲上への競爭をしてゐるのだ。

例へばヲオル街（ストリイト）とナッサウ街（ストリイト）との角にある銀行家信託會社（バンカアズ・トラスト・カムパニイ）の建築（ビルディング）は三十九階の高樓、高さ五百三十九呎（フイイト）。ここの地價は數年前に於て一呎（フイイト）平方が千六百五十圓であつたから、一坪約六萬圓。これが世界に於ける最高の地價だといふ。

『全能の弗（オオルマイティ・ダラア）』と云ふ暴君が、人間の物慾に附け込んで絶對の權威を揮へる此ヲオル街（ストリイト）に、一つだけ甚だ面白い物がある。近頃は物慾を賤しとするやうな人間は、人間たるの資格の無い畜生同樣のもので、狹量偏屈寧ろ憐むべき動物だと承はつてゐるが、狹量と偏屈とに於ては斷じて人後に落ちない事を大なる幸福となし光榮と心得てゐる私が、ヲオル街（ストリイト）に近い或大建築の五階の一隅にある日本正金銀行へ旅費を受取りに行くとき、いつも會心の笑（ゑみ）を洩らして眺める物が一つだけある。我利々々亡者の巢窟の眞ん中（なか）に在つて、暴君『黄金王』をして一指をだに染むるを許さない一大仙境がある。それは三位一體寺院（トリニティ・チャアチ）だ。

さすがは寺院だけに少しも金ぴかの無い古色蒼然たる石造のゴシック建築。さながら人間の物質活動の『空の空（ヴァニタス・ヴァニタトウム）』なるを笑ふものの如くに高く聳えた此寺院の尖塔を、例の亡者共は何と見る。街路に面して鐵柵で圍うた墓地（チャアチ・ヤアド）には、グレイが『墓畔の吟』のそれにはあらで、ハミルトンやフルトンの如き名士の墓がある。革命戰爭に、身を以て國難に殉じた烈士の碑もある。無論富豪の墓もあ

るだらう。墓地の前はブロオドヱイの肩摩轂撃の巷、後は高架電車が轟々たる響をなして走つてゐる。

寺院の境内が廣いばかりでなく、此邊一帶の地に寺院所屬の地面も甚だ多いと聞く。

信託會社と寺院と、黄金と天國と、相場と宗教と、肉と靈と、物慾と信仰と、二つのものが甚だしく矛盾せるが如くにして矛盾せざる所に、米國の大なる特色がある、現代文明の面白味もある。ヲオル街頭に聳ゆる三位一體（トリニティ・チャアチ）寺院の高塔は、よく米人の半面を語ると共にその宗教的勢力の偉大なるを示すものである。

二二　米人の半面

大きな人物の性格に矛盾がある如く、大國の國民性にもまた大きな矛盾がある。米國の如きは最も多くの矛盾を有する點に於て、確かに大國たるの資格がある。極端なる物質主義の半面に極端なる精神主義があり、大なる現實主義の蔭に大なる理想主義の起る事を思はなければ、米國文明の特色を理解する事は出來ない。

黄金街の眞中に儼として動かされざる三位一體（トリニティ・チャアチ）寺院の仙宸が在ると同じく、『萬能の弗（オオルマイティ・ダアラ）』が暴威を揮へる米國の社會には、宗教道德の驚くべき勢力がある。唯注意すべき事は、『群衆』王の威力が此點

に於ても著しきために、個人の生活の上には宗教の力は甚だ弱くても、社會的團體的の一大勢力としては宗教は今も猶米國の民衆を動かしてゐる。これは我が國に於ける狀態と全く正反對で、日本には個人としては敬虔なる信者や宗教家はあつても、社會的團體的勢力としては、佛教も基督教も到底米國に於ける如き權威を有するものとは思はれない。私は米國の宗教を以て『群衆』王の宗教なりと斷言して憚らない。

歴史を顧みない米人にも歴史はある。憶へば十七世紀の初、歐洲の迫害を逃れて天外萬里の異域に信仰の自由を求むべく、一葉の小舟メイフラワァに身を託して百二人の清教徒はプリマスに上陸した。北米建國の歴史の第一頁に誌されたるこの百二人が、マサチュウセッツ州に拓いた清教徒植民地の遺風は、今も猶米國社會の根柢に潜んでゐる。その現在の宗教的勢力は一に此歴史的關係に基づくものだと言つて可い。

たとひ個人としては如何に宗教に對して冷淡であり無頓着であつても、群衆と歴史といふ强大なる二つの者を後盾としてゐる社會的勢力としては、何人も宗教を顧みない譯に行かないのが米國の實狀だ。自らは坊主の子に生れながら、基督教攻撃で名高くなつたインガソル（ニッケルの安時計屋インガソルとは關係はない）のやうな男が米國に出たのは、確かに一種の反動だと見て可い。教育感化事業は言ふまでもなく、米國の名物たる矯風會、禁酒運動、平和論、すべて皆基督教思想を標榜せざる

は無いので、物質萬能の風潮とは一見甚だ相容れざるが如き、また甚だ矛盾せるが如き多くの社會改良運動が立派に效を奏するのは、既に述べた婦人の勢力のほかに宗教家の偉大なる社會的勢力があるからだ。

合衆國四十八州の一つ紐育州だけでも日本の面積と同じ程だといふから、その國土の尨大なる事は想像せられよう。廣いだけに各地方の空氣にも非常な相違がある。先づ紐育や市俄古を店だとすれば、首府華盛頓は座敷で、あの宏壯な議事堂や圖書館の建築は、富人が金にあかして拵へ上げた床の間の置物だ。ところが先祖の位牌を祭つた佛間とも言ふべく、また書齋とも言ふべきものは、昔の新英蘭諸州の中心地たるボストンに在る。このあたり一帶の堅苦しい淸教徒氣質も、春風秋雨三百年、今では荒れ果ててよほど怪しいものにはなつたが、如何な慾深の亂暴ものも位牌を黄金に代へる事もならず、神の教だけは鬼の念佛でも貴ばねばならぬ。座敷や佛間に較べれば、まさに臺所や雪隠の隅に相當すべき土地にまでも、宗教の勢力は波及するのである。今でもボストン人には乃公は米人ではない、ボストン人だぜと言つて威張つてる男がある。

神戸の『ジャパン・クロニクル』に出てゐた此拙稿の英譯に關して、或批評家が同紙上に寄せられた文中、その讚辭は敢へて當らないが、群衆論の元祖ギュスタアヴ・ル・ボンを引張り出して米國特有の群衆を冷やかした所に、頗る我が意を得た痛快なる一節があつた。曰く、米國には澤山の宗派の

『道學屋(モラル・マンガアズ)』がある。此連中には婦人も多いし、また僧侶であるのも無いのも居るが、一樣に總べてが皆暴君だ。なかで比較的無害なのは善意の偏屈者(クランクス)とでも言へようが、その他はもう正眞正銘の宗教狂(ファナティクス)で、もとは矢張りアングロ・サクソンから出たものだ。『道學屋』は大きな面(つら)をして、そして干渉好(おせつかい)で最も不愉快な群衆であるが、これに似た者は歐洲大陸では夢にも見られない。尤も英國と濠洲とには此型のが多少居るが、米國ほどに多人數ではなし又勢力もない。特に僧侶である場合、この道學屋が米國の政治教育社會生活に及ぼす勢力は實に非常なもので、ちよつと聞いても信じられない程だ。彼等は國中また別に一國を爲すものの如く、東北及び中西部(ミッドル・ウエスト)の諸州は此暴君の前には全く頭が上らない。若しもかういふ連中が到る處に勢を逞しうするならば、世界はやがて、めそめそ泣いて讃美歌を歌つて、酒も飲まずに茶ばかり啜る男や女の寄合ひになるだらう。個人の趣味といふ事はこれらの道德家や教育家には全く解らないので、人生の歡樂は此種の專制家(ペニポッツ)の眼中には全く罪惡と見えてゐるのだ。色戀の沙汰は怪しからぬ、接吻も不都合だ、といふのはこの連中だ。米國の端から端まで禁酒(ドライ)にするのも此連中、煙草を吸ひ或は嚙み又停車場(ステーション)のプラットフォムに唾を吐く者を禁錮したり、罰金を課するのも矢張りこの連中で、その勢力は米國以外、南洋や東洋にまでも及んでゐる、云々。

外人の言としては隨分思ひ切つて痛快に遣つて除けたものであるが、私は必ずしも此言の全部に同意を表する者ではない。評者の目から見れば私も或は道學屋の一人と思はれるかも知れないが、米國

にはこの群衆式の宗教家があればこそあの特殊な文明が成立してゐるので、婦人と宗教家との勢力なき米國は、眞に想像するだに戰慄すべきものだらう。腹では何と思つてゐても、社會的には『個人』を棄てて宗教狂道學屋（ファナティクス・モノル、マンガァズ）の言に耳を傾けざるを得ざる所に、矛盾に富める米人の半面がある。これは歐洲大陸の人が英人を目して僞善（ヒポクリン）の民なりと嘲る如く、矢張り英蘭、蘇格蘭の淸教徒から傳へて來た、牢乎として動かすべからざる特性だと私は考へてゐる。米國が物質萬能の國でありながら、そこに宗教家の偉大なる群衆的勢力ある事を見るの點に於ては、この奇警なる批評家の言に私も十分の同意を表する。

　小むつかしい例を引くよりも私は先づ、米人が安息日を守る事の嚴重なのを此宗教的勢力の一例として擧げよう。紐育その他の大都會で、平日は肩摩轂擊の巷でさへも、日曜と云へば火の消えたよりも靜かなもの、藥屋か煙草屋か新聞店の外は一切の商店が嚴重に閉鎖してゐる。酒場（バア）なぞは無論のこと皆固く門戸を鎖してゐるから、日曜日は酒は何よりの禁物、神さまの罰が當るとなつてゐる。但しこれは竊かに勝手口（アミリ・エントランス）から這入るといふ便法もあると聞いたが、私は生憎實行する必要が無いので確かな事は知らない。だから勤め人なぞは買物をするにも困るといふ有樣。平日は五時か六時までに店員（セイルズマン）が歸宅して了ふから無論夜は閉店、そして日曜日と云へば此のざまだから、亭主の買物は皆細君がちやんと調へて置く。自然『女王』は自分の物には金錢を惜しまず流行を追うても、亭主には

高い品物は買つて遣らないし、また贅澤をさせない事にも成る。獨身者に至つては、平日晝飯の時間にでも買物をしに行つて置かないと、シャツや襟飾(ネクタイ)さへ、夜と日曜とでは買はれないことになる。だから降誕祭(クリスマス)前とか或は他の特別の場合には、百貨店(デイパアトメント・ストア)なぞは土曜だけ夜にも店を開いて、これらの顧客を迎へるのもある。平日百貨店の顧客は十中八九までが婦人ばかりで、金錢を使ふ者は細君、亭主にはそれを爲せないやうに、其邊はちやんと巧(うま)く出來てゐるから豪い。

日曜日には寄席、芝居小屋は閉鎖するか、或は平生とは出し物を變へて、肉の歡樂とは成るべく縁の遠い物を演る。劇場なぞは例の慈善會や宗教運動の演說會場に使はれるものも多い。有名なビリイ・サンデイの落語式說教もこの仲間。また私が何時か見た排日芝居なども、日曜だけは平日と番附を變へて色氣の無い排日物を演つて居たのである。すべて以上のやうな次第だから、若しこれが日本でならば、他の一切の商店も劇場も營業してゐない時、自分の所一軒だけは平日通りに開店して獨り巨利を博さうなぞと考へる者が必ず出るだらうが、米國の『群衆』王は斷じてそれを許さないのである。

しかしこれらはまだ辛抱が出來る。遠來の旅客にとつて最も困るのは、郵便の配達が日曜には全く無い事である。『家書値萬金』と云ふのは誰しも異郷にゐる時は同感だが、日曜には一切手紙が來ない。これは英國も同様である。(序に言ふが、米國は他の交通機關の發達に似合はず郵便は頗る呑氣千萬なもので、小包郵便なども通運會社(エクスプレス・カムパニイ)の反對があつたため、やつと數年前に出來たばかり。振替

金といふ便法は無論ない。紐育のやうな忙しい處でさへも郵便配達夫ばかりは、のそのそ散歩でもしてゐる如き歩き振だ。家ごとに呼鈴を押して家人の出てくるのを待つて、『グッド・モォニング』か何かを言つてから郵便物を渡す、そして二言三言愛嬌を言つて行くといふ風。配達の回數は一日僅かに三回か四回。あの大都會ですら郵便だけはまるで日本の片田舍のやうだ。）

あの忙しい國でありながら、日曜といへば汽車發着の度數も少く、時間表も平日と違ふ。何故かといへば、これは安息日だから。

英國では今から八十年ほど前に麵麭條例といふのを出して、日曜に麵麭を燒いて賣る者は科料に處すといふ嚴酷な規定をした話を、何かの書で讀んだやうに記憶してゐるが、神の安息日を嚴守する事は、同じ基督教國民でも歐洲大陸の方はアングロ・サクソン程に極端では無いのである。忙しい俗務に追ひ廻はされる時など、私共は日曜日を自分の仕事をする日に定めてゐるが、米國では讀み書きの仕事すら、日曜にこれをするのは一種の罪惡と見做されるだらう。

日曜を一日棒に振つて神樣のための安息日にして、それならばどうして米人はこの一日を暮らすかといふと、午前は先づ細君の後から鞠躬如としてお寺詣のお作をする。女も男も衣物を着換へて日本の正月と同じやうに行る。中流以上の男子には、日曜だけモォニングを着用して絹帽を冠つてゐる人も多い。何をして遊ぶかと言へば、親類や家族友人が集まつて談話やピアノで時を過す外に、男女

睦まじげに公園を散歩するか寄席で日探（ジャパニイズ・スパイ）の芝居でも見るといふ風だ。戀愛の示威運動（デモンストレイション）と排日とだけは、神様もお咎めは無いものと見える。

米國の中流以上の旅館（ホテル）の各室には、必ずみな化粧臺の上などに聖書が一冊備へ附けられてゐる。一旅館に客室の數一千以上のものは尠くないから、一軒だけで一千冊以上、全國幾百幾千の旅館では非常な數に上ることだらうが、此聖書は皆富豪の寄附である。

米人は不行儀だと言はれてゐるが、苟も清教徒傳來の思想に背いた事だけは他人（ひと）前では愼むのである。宗教の事と婦人の問題とに關しては、その何よりも好物な駄洒落をさへ遠慮してゐる。あれだけ廣告の流行る國で、花柳病の廣告は電柱は勿論のこと、新聞にも全く掲げられない。大統領でも裁判官でも上院議員でも、何でもかでもめちやめちやに惡罵し嘲弄するが、坊主の惡口だけは滅多に言はないから不思議だ（公然言はないだけそれだけ多く蔭口を利く事は別問題として）。

つまり米人には日曜日の米人と平日の米人との二つの面があるわけで、神の安息日だけは、彼等が衣服を改めると同じく根性までも入れ換へてゐる。平日は商賣繁昌の福の神を拜んで株券の相場ばかりを氣にしてゐる奴が、日曜だけは聖書（バイブル）を讀み讚美歌を歌つて神の教を守るのである。平日不斷着の儘の米人は行儀が惡く、慾が深く、肉の歡樂を追うて飽くを知らざる俗物であるが、安息日に他所（よそ）行き姿の米人は慇懃で丁寧で親切で、信心が深く、眞にこれ靈の世界に生きる修道の高士だと言つて可

い。どちらが果してその眞面目であるかは今敢へて問ふところではない。ただこの千里の差ある二つの面の間に、何等の不調和なくまた必ずしも窮屈な思をせず、極めて愉快げに樂天的に、のびのびと生活して行く所に米人の特色があると思ふ。ここに至つて紅塵萬丈の黄金街に清淨の別天地を劃せる三位一體寺院も亦、米國文明の他の半面を示せる一小縮圖として見るに足る。

戰國時代の英雄には、『論語』を頭痛の書だと正直なところを言つた者がある。しこたま私財を積み上げてから、よい潮時を見計らつて虚業界を去り、今したり顏に孔孟の教を振り廻はせる老人もありと聞く。米國にもおほかた聖書を頭痛の書なりと言ひ、世を欺く僞善の道具に使ふ輩も多からうが、左様いふ人間には社會が少しも尊敬を拂つて居ない所が、日本と米國との大きな違ひだ。

二三　理想家

藝術と宗教との世界は壁一重の隣同志である。もともと新英州を起源として發展して來た米國の文藝に、その淸教徒氣質の最も著しき反映を見る事は言ふまでもない。日本によく知られたホオソオンの大作『緋文字』、『アンクル・トムの小屋』の作者ストオ夫人の小説の如き類は殆ど枚擧に遑なき程であるが、韻文の方面に於ては、クヱイカア教徒の詩人ジョン・グリインリイフ・ホキッティアを以てその最も大なる代表者とする。

新英州（ニエウ・イングランド）の清教徒の中にも珍らしいほど物堅い百姓の子に生れた天才ホヰッティアは、極めて荒削りな組硬な詩をばかり作つた男だ。從つて嚴正なる藝術批判の前には、到底大詩人たるを要求（クレイム）するに足るものでは無いかも知れぬ。之を彌兒敦（ミルトン）以第の第一人であるかのやうに感服してゐる者は、一部の米人だけだらう。單に宗教詩人として見ても、その名作『神の讃美（ラウス・デオ）』の如き、到底英國十七世紀のジョオヂ・ハアバアトの壘をさへ摩するものではない。少くとも異教徒たる私には左樣（さう）見えるのである。ただ清教徒の根本思想たる友愛、禁慾、自由、信仰などで固め上げた氣風と生活とを通俗なバラッド體の詩風で歌つたところは、確かに後人の追隨を許さぬものがある。恩師ヘルン先生が昔大學の講堂で此詩人を推賞された事を今も記憶してゐるが、先生も彼の『モオド・ミュラア』や『カサンドラ・サウスヰック』のやうな物語風の作ばかりを好まれたらしい。殊に石のやうに頑固な清教徒の勞働者を歌つた『勞働の歌』の詩集の如き、確かに彼が獨得の壇場である。

クエイカアと云へば神學上では固より清教徒の思想に反對して起つたものだが、その堅苦しさは兩方とも似たり寄つたりのもの。此宗旨のものは英語の二人稱に『ユウ』とは言はず『ザウ』や『ジイ』を使ひ、七曜の名などは日月雷神など異教の神の名が附いてゐるは怪しからぬと言つて、第一日第二日と呼ぶ程の頑固さ野暮さ加減の者である。この連中の生活狀態を赤裸々に、簡明素朴な言葉で詩に歌つたのがホヰッティアと云ふ男である。

いや、文學は不良少年を造り、藝術は善良の風俗を紊すものださうだから、餘り長たらしく詩人の事を書いてはいけない。私は更に米國建國以來の此宗教思想が共國文化の他の著しき特徴を爲せることを指摘して、上來幾たびか脫線したこの『印象記』の稿を畢へる事としよう。

米人である事は徹底的である事だと或人が言つた。しかし同じく徹底的だと言つても、露西亞人のは動もすれば消極的破壞的否定的の傾向を有するがために鬱憂厭世の色を帶び、果ては『トスカ』といふ言葉で言ひ表はされる一種の世界苦惱(ヱルト・シュメルツ)となつて行詰る。米人はこれと全く正反對に、その徹底主義は飽くまでも積極的に建設的に肯定的である、從つていつも晴やかな樂天主義奮鬪主義となつて勇往邁進しようとする。彼等が新しき事物を採用するに急なのも、また大規模の百年の計をめぐらすのも、一にこの徹底的樂天觀があるからだ。その民主政治はかくの如くにして成り、その物質文明も亦かくの如くにして興つた。

私は嚢に米人が『未來』に生きる民である事を言つた。徹底的にして且『未來』に生きんとする者は、勢ひ理想家たらざるを得ない。彼等が極めて刹那主義の現實主義者であるにも拘はらず、その半面には極端なる理想主義の傾向を有つてゐるのは、このためである。そして此理想主義は、疑もなく淸敎徒から傳へられた濃厚なる宗敎的色彩に染められてゐる。

歐洲舊國の羈絆を振り棄て、大西洋のかなた未見の新世界に憬憬(あこがれ)て、そこに自己の信仰と努力と

によつて地上樂園を建設せんとして移住した百二人の清教徒は大なる理想家であつた、ロマンティシストであつた。次から次へと移り來つて、絶えず新しい生命(いのち)の力を齎す新來の移住民も亦同じく理想家であつた。そして直接間接この最初の清教徒の影響感化を受けて今日に至つたのである。米人の生活には燃ゆるが如き青春の浪漫主義(ロマンティシズム)がある、宗教的理想主義(レリジアス・アイディアリズム)がある。彼等は今もなほ地上に『神の國(シヴタス・デイ)』を實現せん事を理想としてゐる。先づ之を新英州(ニュウ・イングランド)の諸州に始めて合衆國の全體に及ぼし、更に之を南北兩米に擴めて全米主義(パンアメリカニズム)を提撕し、今やまた平和强制同盟を唱へ、獨逸の軍國主義を打破して、全世界を民本主義の理想的合衆國となさんと努力しつつある。その國民的理想の高遠にしてまた雄大なだけは、確かに買つて遣らねばなるまい。

日本の政治家に高遠の理想があるか無いかは私の言ふべき限りではない。しかし米國の政治家には昔ジェファソンの如き理想主義者が多かつたやうに、今もなほ前の國務卿武雷安(ブライアン)氏の如き純然たる宗教的理想主義(レリジアス・アイディアリズム)を持する政治家がある。現大統領ヰルソン氏の如きも亦、今代の最も大なる理想主義の政治家たるは識者の認むるところだ。ただ或種の淺薄なる現實主義者の中には、今もなほヰルソン氏が宣戰の眞意の那邊に在るやに疑を抱く人も尠くないと聞くが、大統領が歐洲戰爭突發以來の言論と政策と態度とを公平に考へれば、氏の高遠の理想が單に口先だけで無い事が首肯せられる。民本主義と正義と人道と自由とを人類の大理想なりとした清教徒の宗教的精神が、依然として今の民主黨(デモクラット)政府

の半面にも儼存せる事だけは疑ふべきでは無いと思ふ。ただ其時々の施設に批評と非難とを招く多くの點のある事は言ふまでもない。

元來清教徒の宗教は、行爲そのものに重きを置く事を特色としてゐた。即ち信仰は何等かの社會的行爲に現はれて始めて價値ありと見るのが米人傳來の精神で、現代に至つて此傾向は益々盛んであるために、彼等は今日の國際關係社會問題經濟狀態などの上に、基督教道德の理想鄕を樹てようと絶えず焦慮し努力してゐるのである。女子幼者の保護、貧民學校の設立、病院、感化院などの事業、種々の社會改良運動、さう云つたやうな方面の團體に關する記事が二つ三つ新聞に出てゐない日はない。先づ中流以上の米人でこれらの會や團體の八つや九つに關係してゐない人は稀だと言つても可からう。數年前の統計で見ると、教育、宗教、慈善等の事業に個人として米人が寄附した金額は、一箇年の總額六億三千萬圓を超過してゐる。私の滯米中にも白耳義罹災民への寄附金の如き、莫大なる金額に達してゐる事を見た。かくの如きは米國でなければ決して見られない現象だ。

海のかなたに新しい理想鄕を建てようとして新英(ニユウ・イングランド)州に渡つて來た清教徒は、ただ夢幻の國に果敢ない理想の影を追ふやうな浪漫主義者ではなかつた。彼等が浪漫的(ロマンテイク)な半面には、實行の世界、現實の生活に於ける絶えざる努力があつた。彼等は終始一貫して信念と實行とを結び附けなければ已まない奮鬪の人であつた。最初新世界に移住して來た其年の冬、凛烈なる寒氣に悩まされて彼等の多數は

命を殞した。それにも屈せず僅かな生存者は生活のための悪戰苦鬪を續け、その子孫は爾後二三世紀を出でずして先住の民を逐ひ、佛蘭西人、和蘭人を同化し、西班牙人を驅逐し、遂には祖國たる英國の羈絆をさへ脫するの偉業を成就した。そして今も猶世界の各地から蝟集する新來の移住民を同化するか、然らずんばこれを驅逐し根絶せんとしつつある有樣だ。現に此度の米獨開戰の如きも、かの動もすればアングロ・サクソン系と相容れざる獨逸系米人（ジャアマン・アメリカン）の勢力を、國中より排斥し去らんとする一手段だとも云はれてゐる。かくの如きは一民族の活躍の歷史として實に驚くべき奇蹟ではないか。古代、中世、近代を通じて世界史上未だ曾て比倫を見ざる大業であつた、と言つても過言では無からう。そして能く之を爲し遂げたものは、强烈なる宗教的色彩を帶びた理想主義に伴へる、清教徒の物質的努力と現實主義の精神とに外ならなかつた。詩人ロングフェロオが歌つた『村の鍛冶屋』が『何か考へれば何か遂行した』のも『かんかんと叩く鐵砧（かなしき）の上に一つ一つの行爲と思想とが出來た』のも、これは皆今に至つて猶米國文明の特徴を爲すものだ。聖書（バイブル）を讀みながら勞働し金儲をしてゐる者は、昔も今も米人である。

二四　ゆかしきもの

十七世紀の米國清教徒が奮鬪の物語は、今にして憶へばただ一篇の建國神話に過ぎないかも知れ

ぬ。しかし最も雄辯に米人の特色を語るものは卽ち此神話であつて、南方ヴアジニア移住民の歴史ではあるまい。

今から半世紀前、南北戰爭までは新英州(ニユウ・イングランド)の地が米國文明の中心であり、また嚮導者であつた。以後西部と南部との政治經濟上の勢力が急激に增大すると共にこの中心は失はれたが、その古い宗敎的理想主義は今なほ依然として米國全體を支配してゐる。

アングロ・サクソンの移住民が十七世紀の昔に祖國から齎して來た古いものが、星移り物變る三百年の間に、いつか本國の英國では滅びて却つてそれが米國に殘つてゐるのは面白い。彌兒敦(ミルトン)時代の堅苦しい思想が今なほ米國文明の裏面に潜在せる事は上述の通りだが、これに似た事はなほ他にも尠くない。第一言語の上などにも、英國では今日旣に廢れた古い語法が今の米人の日常語のなかに用ゐられてゐる。例へばビフテキなどの生燒けを米人は rare(レア) と言ふが、今日の英人は普通 underdone(アンダダン) といふ。英國の歴史家フリイマンが米國に來て、米人の此語を用ゐるを聞いて驚かされといふ話を、私はヰリアム・アアチャアの『今日の米國』の中で讀んだやうに記憶してゐる。『稀』と云ふ意味の『レア』は羅甸語源の字で、『生燒け』の方は純粹のアングロ・サクソン語源の古語だ。形こそ同じでも、この二つは全く別の言葉である。今日の英人は前者をのみ用ゐて、後者を廢語同樣にして殆ど使はない。しかし英文學のうちで十七世紀のドライデンの詩まで溯れば、この『生燒け』の意味の『レア』

と云ふ字が立派に使はれてゐる。無學な英人が米國の田舎言葉として笑ふ者の中には、往々にしてかかる立派な典據ある英國古語がある。米人の日常俗語の I guess なども、十四世紀のチョオサアにあるのと同じ語法だと見れば、あながち輕蔑する譯にも行かなくなる。また大人はよく A long ways だの、Some-wheres だの、He goes out nights だのと妙な所に s を附けるが、これも遠い遠い六七世紀のアングロ・サクソン語法だと言へば立派な辯解が立つ。かういふ事は何處の國にもあるので、東京人が笑ふ田舎言葉の中には立派な古語が澤山に殘つてゐる。大和地方の人が今日でも『おほしたてる』(育てる)、『うたてい』(難澁)などの雅言を日常會話に使ふ如き例は、他にも決して珍らしくないのである。

かういふ床しい話の一例として特に私の興味をそそつたものは、米國の片田舎の山奥に今もなほ聞かれる樵夫の歌のなかに、蘇格蘭や英蘭の古いバラッド(歌謠)があるといふ話だ。これらの歌も英國の山男は今では歌ふまいと思ふ。

たとへば北カロライナ州から西のかたテネッシイ・ケンタッキイ州に亘る一帶の山岳重疊の地方には、十七世紀頃から近頃まで殆ど二百萬の移住民が、他との交通少く恰も桃源郷のやうに隔離されて孤立の狀態にあつた。此あたりでは特に英國の古謠が最も多く口から口へと語り傳へられて現存し、またチョオサア時代の言葉で今はもとの英國で廢語になつてゐるものが、日常語に用ゐられてゐる例

が多いと聞いてゐる。

殊に十七世紀頃の英國からの移住者には門地高く、教育もあり學問ある人が多かつた。プリマス植民の牛耳を執つたヰリアム・ブルウスタアの如きは英國での名門の出であり、劍橋(ケンブリッチ)大學で教育をうけ後イリザベス女王の宮廷に仕へた人で、米國移住の時にも數百卷の書を携へて來た。今のハアヴアド大學のもとをなしたジョン・ハアヴアドも、自分の文庫(ライブラリ)を遺して置いた。かういふ人たちの文庫には沙翁やスペンサアのやうな文學物が少くて、神學宗教の書物ばかりが多かつたと云ふのにも深い意味がある。

米國黄金文明のかげに十七世紀以前の古い英國が在る事を思はなければ、あの大きな謎の國を理解する事は出來ない。

私がボストン郊外、ハアヴアド大學のある劍橋(ケインブリッチ)に居たとき、或日コンコオドの地に哲人エマソンの舊居を訪うた。友が示す案内記(ヘデゥア)に『コンコオドは獨逸のヴイマア(ゲエテの舊跡)や、英國のストラトフオオド・オン・エイヴン(沙翁の舊跡)程に俗化しては居ない』とあるのを讀んで、さすが見物嫌ひの私も心を動かされたのであつた。青葉の蔭なつかしき五月のなかば、むかし清教徒が耕した麥隴菜圃の間を行くこと數里、コンコオドの何とかの旗亭(タヴァン)に憩ひ、所謂『新英州の質素(フルガリテイ)』を想はせるやうな田舍料理を味はつて後、綠したたる美しい森の木の間を流れる小川のほとりに古風な馬車を走らせ

た丈ばかりは、俗惡な米國にもこんな所があるのかと思つた。超絶哲學（トランセンデンタリズム）を以て世界を動かしたる思想家エマソンの家を見、森林生活の讃美者ソオロオが筆を執つた池のほとりを逍遙（さまよ）ひ、去つてまたオルコットが教を青年子弟に授けた學堂の遺跡を尋ね、小山のほとりにホオソオンの墓に詣でて、私は樂しい夢のやうな半日を過した。市俄古や紐育や華盛頓はただ僅かに米國の一面を語るものに過ぎない。ボストン郊外の劍橋（ケインブリッヂ）、コンコオド、さこはまた淸敎徒に最も緣の深いセイレムの町などを訪うて、始めて米國文明の奥に潜める理想主義の面影を見る事が出來るのだ、と私は其時にしみじみと感じた。日本には桑港や沙港を見て直ぐ米國を批評する人さへあるが、これは今日の殺風景な東京市街を見て日本を評する米人よりも、更に一層亂暴な事だらうと思ふ。（大正六年九月下旬より十一月上旬まで、京都にて）

参考

一 米國研究に關する書籍

米國の産業、文學、宗教、歴史などの特殊研究でなく、ただ一般的に現代の米國を理解し、その國民性とか生活とか云ふ方面を研究するに參考資料となるべき書籍數種を、思出した儘ここに書き附ける。

1. Tocqueville, *De la Démocratie en Amérique.*

　これは米國の民本政治を研究した最初の名著で、第一版の出たのは千八百三十五年であるが、その英譯の如き今日なほ米國大學で教科書や參考書に用ゐられてゐる。

2. James Bryce, *The American Commonwealth*, 1888. (New Ed. 1910)
3. G. W. Steevens, *The Land of the Dollar.*
4. Max O'Rell, *A French Man in America.*
5. Henry James. *The American Scene.*

　ジェイムズの小説のうちには、米人の生活を歐洲のそれと比較對照し、二者の如何に異なり如何に不調和であるかを描いた作品が澤山ある。即ち A Passionate Pilgrim (1875), The American (1877),

The Europeans (1878), *Daisy Miller* (1878), *The Bostonians* (1886), *The Princess Casamassima* (1886). 等は皆近代英文學史上の大作ではあるが、文章が非常に讀み難いから一般の讀者に向くか奈何かは別問題だ。

6. H. G. Wells, *The Future in America.*
7. Hugo Münsterberg, *American Traits.*
8. Bliss Perry, *The American Mind.*
9. Brander Matthews, *The American of the Future and Other Essays.*
10. Muirhead, *America, the Land of Contrast.*
11. Henry Van Dyke, *The Spirit of America.*
12. Max O'Rell, *Jonathan and His Continent.*
13. J. C. Firth, *Our Kin across the Sea.*
14. Alexander Francis, *Americans, an Impression.*
15. Woodbridge Riley, *American Thought, from Puritanism to Pragmatism.*
16. Katherine G. Busbey, *Home Life in America.*
17. Stanton Coit, *The Soul of America.*
18. H. P. Robinson, *The Twentieth Century American.*
19. Georg von Skal, *Das amerikanische Volk.*

20. A. Bennett, *Your United States, Impressions of a First Visit.*
21. Edward A. Ross, *Changing America.*
22. Josiah Royce, *Race-Questions. Provincialism and Other American Problems.*
23. Émile Boutomy, *Eléments d'une Psychologie du Peuple américain.*
24. Albert J. Beveridge, *Americans of To-day and To-morrow.*

その他昔からよく知られた Martineau や Freeman や Dickens 等の筆になる北米印象記とも云ふべき物は略しておく。

二　英字新聞『ジャパン・クロニクル』所載批評

『北米印象記』の最初數項が神戸、横濱の英字新聞紙上に紹介せられたとき、下の興味ある批評が『ジャパン・クロニクル』に出てゐた。後にわたくしが本文の中に答へたのは此批評に對してである。讀者の參照に便せんがためにここに掲げる。

A JAPANESE VIEW OF AMERICAN LIFE.

To the Editor of the Chronicle.

SIR,—I have read the extracts from the article by Professor Kuriyagawa Hakuson, published in your issue of October 7th, with much interest. As far as I know the Ame-

ricans and their country, I think the Professor's impressions are in the main correct. He is evidently a close observer and a clever student of human nature, who understands how to relate his experiences. His philosophical placidity in recording facts enhances the value of his statements. Yet able as Mr. Kuriyagawa's articles are I venture to offer a few remarks.

I think there is nothing mysterious about the "influences of tyranny" he speaks of. They can be explained psychologically. Furthermore it seems to me that Mr. Kuriyagawa lays a little too much stress upon the influence of the American crowd taken as a whole. In fact, all things being equal, the psychology of crowds is in the main very much the same everywhere. Although Mr. Kuriyagawa acknowledges that "elsewhere" also crowds "are swayed by sentiment and are absolutely reason-proof"—which is undoubtedly true—he seems to overlook the fact that in other civilised countries too the crowds can be very tyrannical and unreasonable. But there is one thing pertaining to the crowd which the professor does not mention. I mean a certain subdivision of the American crowd which belongs to the *foules homogènes*, distinctive from the *foules heterogènes*, according to Gustave Le Bon's classification. It is the numerous sects of Moral Mongers flourishing in the Great Republic. The members of these sects, among which there are many women, may belong to the clergy or not; but tyrants they are all. Some of

them, comparatively harmless, might be called well-meaning cranks, while others are real fanatics. All these people are possessed by the intolerant spirit of the Pilgrim Fathers adapted to modern conditions. Of Anglo-Saxon origin, these religionists and others are a swaggering, meddlesome, and most unpleasant crowd, the like of which is never dreamt of on the continent of Europe. But one can meet specimens of the type in Great Britain and Australia, where, however, they are much less frequent and wield less power. The influence of these Moral Mongers, especially if they are clergymen, on politics, education, and social life in the United States is tremendous, well-nigh incredible. They constitute, as it were, a state in a state, and the majority of Americans, in the North-East and Middle West in particular, "remain tame and submissive" before their tyranny. This special homogeneous crowd is also "absolutely reason-proof." They are would-be reformers. If they had their full sway everywhere the world would ere long be inhabited by whimpering, hymning, and teasipping masses of men and women. The individual and personal tastes do not count with these moralists and educators. The joys of life and everything connected with it are sins in the eyes of these despots. It is they who have made flirting punishable and condemn kissing. It is they who are making America "dry" from ocean to ocean. It is they who would imprison and fine a men who dares to smoke or chew tobacco, or spits on the platform of a railway depot. They would

put in jail a Western Indian who is not legally married to his squaw. They are killing the soul year after year of thousands of Indian boys and girls by the cheerless and rigid system in their schools. They try to meddle with the private affairs of others by fair means or foul. The influence of these fanatical cranks is even felt outside the States. In the South Seas their missionaries are ruling the docile natives with a rod of iron. As a proof of their æsthetic taste they have imposed the ugly "Mother Hubbard" on the pretty *vahines*. Several years ago, when the American battleship fleet was coming to Japan, some of these moralists had the impudence to propose to the Japanese authorities how the bluejackets should be entertained in port. In no circumstances were these pure and virtuous young men to be allowed to approach the native fair sex. Geisha-dances, if unavoidable, had to be viewed from a safe distance, etc. How all this ended I don't know, as I had left Japan.

I now turn to another thing which Mr. Kuriyagawa has not mentioned, and yet it is typically American. Latin peoples and Orientals feel nothing for it but ridicule and contempt. I mean the perpetual rush and hurry in everyday life for no apparent reason. Hundreds of thousands of men and women seem to labour under an obsession that they have no time. Many of them work with a sort of frenzy a sif their last hour had come. It is a curious nervous monomania which is highly infectious and has ruined the health

of many men and women. As regards her American Majesty Woman and her meek submissive slaves—the men folk—I could comment at length on Mr. Kuriyagawa's impressions, but space forbids. Only this: to my mind American woman worship is nothing but misunderstood and misplaced chivalry. And if the old saying is true that woman is largely what man has made of her, then forsooth, the American men are very poor educators, whom the Japanese might teach a useful lesson—Yours, etc.

A NEUTRAL

KOBE: Oct. 9th, 1917.

左脚切斷

一

三月の末であつた、私ほ海のかなたへの旅に發たうとした。家族を東京に移さうと思つて色々の準備に忙しかつた時である、ふと左足に、ほんのかりそめの傷をしたのが原になつて、ひどく腫れ上つて痛み出した。發熱も甚だしくなり、我慢にも歩行などは出來なくなつた。醫者のところへ行つて切開をして貰ふその途中も、駕籠の中にさながら病める獸の如くに氣息奄々として横たはつてゐるといふ、至極慘な有樣となつた。折角おもひ立つて遠い旅へ出掛けようといふその矢先にこの次第だ。豫定の船の出る日は日一日と迫つて來る、ぢつと養生なぞしてゐる氣にはとても成れない。殊に家財なぞは既う東京へ送り出したあとなので、まるで空屋同然の處に病人が轉がつてゐるのである。子供らはもういくつ寢たら東京へ行くのかと言つて樂しんで待つてゐる。早く發たうと思つて氣ばかりは焦るが、痛む足は思ふやうに動かない。自分の足とはいひながらかうなつては既う仇も同前である、惡魔がそこへ巣くつてゐるのだ。一層ひと思ひに切り棄てて呉れようかと、床上に呻吟きながら僕は獨

りで考へた。むかし大燈國師は、足が不具であつて坐禪をするのにうまく坐れないといふので、或時遂に『この足めが』と言つて無理にそれをへし折つて、その儘結跏して死んで了つたさうである。痛快な坊主もあつたものだと感服して、僕はこの話を何かの本で讀んだ時から面白いと思つて今に記憶し　ゐる。これしきの傷で弱つては、大燈國師にも恥づかしいと僕は考へた。

片足切り棄てて二本の脇杖にすがつたらば、せめて東京までは行けるだらう、乃公(おれ)の行く手を遮る惡魔の所業におめおめ降參してなるものか、と我慢をして滿身の力をこめて奮起しては見るが、矢張り駄目だ、一歩も動けない。一歩どころか匍ふ事も出來ない。かうして煩悶してゐると、或夜どうした拍子か患部から非常に澤山出血した。繃帶は血みどろになつて、夜具の上には一面に血が流れてゐる。かういふ風では何の設備もない自宅でとても養生は出來ない、と人もさう言ひ自分も成程と思つた。成程と思ふのはもう體力が弱つて我慢が鈍つて來た證據である。熱はこのとき四十度の邊を昇降してゐた。

先輩や友人の切なる勸告もあり、且神戸から來て吳れたK醫學士の取計らひで、僕はその翌日遂に京都大學の病院の一室に身を橫たへる事になつた。生れてはじめて、病院のベットに圓(まど)かならぬ夢を結ぶ身となつたのである。

熱の高い所爲(せい)であらう、からだはベットを離れて何だか中空に浮いてゐるやうな心持だ。患部は痛

むし食慾なぞは全く無い。たださへ痩せてゐる身體は憔悴し衰弱し切つて、自分には見えないが容貌の如き僅かに數日の間に、十年二十年ほども老けた老衰者のそれのやうに變つてゐたさうだ。あとで聞くと、この時は既に命旦夕に迫つてゐたので、醫員室では助手の人たちが氣の毒な事であると言つてゐたさうだ。もうとても助かるまいと云ふ意味なのだ。看護してゐる妻や友人は嚴かにそれを私に祕してゐた。いよいよ切斷しなければならぬといふ事も、その手術の前日までは私に告げなかつた。何も知らない私は愚にも、矢張り一週間か十日もすれば退院して遠い外國へ出掛けるつもりで、船なぞ次の便船を心待ちにしてゐた位だ。あとで心やすい醫者の話では、若しあの時入院もせずに我慢を張り通して横濱を出たならば、みごと太平洋上の鬼となつてゐたであらう。もう四五日も手術が後れ、熱が下らなければ無論生命は助からないのであつたさうだ。

　忘れもしない、四月四日の未明である。宿直の醫員が僕の病室へ來て何百グラムとやらの食鹽注射をした。前日から既に絶食を命じられてゐる。いよいよ手術をして足を切斷するといふのだ。朝になつて助教授のTさんが來て、生命には代へられませんから切斷します、ときつぱり申渡した。足を切つても幸ひあなたの仕事には差支が無いので、とまで言葉を足した。私は素直に、何分宜しく願ひます、お任せしますからと答へた。頗る平氣であつた。あまりに平氣なので、わきで見てゐる私の友人や妻は甚だ意外に思つたさうだが、私自らも考へて見て、どうしてさう平氣で返答が出來たのか我な

から不思議に思つてゐる。かうして達者にしてゐる時、若し誰かから――たとひそれが自分の充分に信頼してゐる醫者であらうとも、――あなたの足を切りますよと言はれたら、とてもあんな平氣な挨拶は出來ない筈である。少くとも私のやうな人間としては、多少の懊惱と苦痛となくしてはあの申渡しを受取る事は出來ない筈である。考へて見ると、もう其時は體力の衰退と共に、我慢もなければ我意もない、ただ他人の言ふ儘になるといふ眞に憐むべき弱者になつてゐたのである。實際、病勢の甚だしく募つてゐた頃は自分の周圍に動いてゐる人たちの、やさしい美しい方面ばかりが目についた。シニックなミサンスロピックな心持なぞは微塵もなくつて、他人の心の情とか愛とかいふ側ばかりを見つけ出しては、それにたよらう縋らうとのみしてゐたのである。痼癖を起さうにも、その癖なるものがどこへ行つて了つたのか、影も形もなく屏息して居るところは、私の生活史の上に於て特筆大書すべき不可思議な一頁であつたと思ふと、寧ろ滑稽の感がある。

いよいよ死にかけてゐる時に、私の先輩も友人も妻も皆心から私のために盡くして呉れた。私が危く失ひかけた生命を取り止めたのは全くこれらの人々のお蔭である事は言ふまでもないが、それと共に忘れられないのは外科教室の人たちの厚意であつた。一體、世間の醫者と云ふ者のうちには、物慾に驅られ虚榮にあこがれる言語道斷の俗輩が多い。私なぞは死んでもあんな者の世話になりたくないと思ふのがいくらも居るやうだ。ところが此大學の外科教室の人たちに接して、私は未だ曾て一たび

もさうした不快な感を抱く機會がなかつた。貧寒な一個の讀書生である私に對して、主任教授を始めとして看護婦に至るまでも、實に丁寧懇切を極めたものであつた。主任のI N（アイエヌ）博士が日本に於ける外科學の泰斗である事は世人の知る通りだが、私ははじめて診察を受けて、更にその清節の士であり、また温情の人である事をもよく知る事を得た。當代稀に見る高節の士であるのに自分は深く敬服すると共に、かういふ人の診察を受ける自分は心から幸福だとも思つた。七旬にあまる入院中の隨分長い間を、自分は一度も癇癪も起さず我儘も言はずに、ただもう喜んで快く治療を受けてゐた。既に主任教授がかういふ立派な人であるから、その下にゐた醫員はもとより看護婦の末に至るまでも、實に丁寧で親切で廉潔で、私はこれらの人たちから受けた温い同情を今もなほ涙を以て感謝してゐる。

四月の三日と四日とは大祭日と日曜日であつた。しかし今は一日の猶豫もなり難いと言ふので、閉ぢてある手術室をわざわざ開かせて、教授、助教授、その他すべての人々が出て呉れられた。三日には病室から運搬車に載せられて長い廊下を手術室に引出された。教授が先づ一度とくと患部を『點檢（ウンタズ）』するのであつた。その際に手術臺の上に仰臥してゐて、自分は女々しくも『痛い』といふ聲を思はず洩らした。忽ちエエテルを嗅がされた。半醒半睡の狀態に入つてから私は何でも大きな聲で喋舌つてゐたらしい。何を喋舌つたかは全く記憶してゐないが喋舌つたと云ふ事だけは漠然と覺えてゐる。あとで妻の話によると其聲は手術場の外までも聞えて、何だか演説のやうであつたさうだ。手術

場から病室へ歸される時も、運搬車の上でまだ囈語を續けてゐるのを妻が制した。いかになかば知覺を失つて居たとは言へ、自分がさういふ取亂した態(さま)をしたと云ふ事を後に聞いた時には、我ながらに恥かしくてならなかつた。

四日の午後、私の infernal leg は遂に切り棄てられた。何とかコッケンと云ふくだらぬ黴菌を、門戸を開いて歡迎しやがつた揚句、私の總身を苦しめ、生命(いのち)の源をさへ絶たうとした惡むべき呪ふべき私の片足は、みごと切り放たれて手術場の一隅に轉んだのである。生れてこのかた三十幾年わが身にくつ附いてゐた物ではあらうとも、今では更に懷かしとも惜しとも思はぬ。二度とわが目には觸れぬやう、腐つた足よ、奈落の底に落ちよ、惡魔の國へ失せよ、と私は呪つた。

二

手術臺の上に身を横たへた時、助手から『大きい呼吸(いき)をなさい』と言はれる儘に思ひ切つて痲醉劑を吸ひ込んだ、お蔭で其時のみならず、手術の後にも何の苦痛も知らなかつた。仰臥した儘では自分の足もとは見えないから、切られた後の感覺も矢張り足があるのと同じであつた。繃帶がしてある所爲(せい)か、切られて無くなつてゐる足が重かつたり、ありもしない指さきに何か物の觸れるやうな氣持もした。足は旣う無いのだと云ふ事を眞に意識し得たのは、少し快くなつて自分の眼で足もとを屢見る

やうになつてから後の事であつた。

食慾が全く無くなつて、唯僅かにアイスクリイムと少量の粥とで危い命をつないでゐる頃、私は獨りで色々淋しい果敢ないことばかりを考へた。天は私に生來弱いこの身體を與へておきながら、この上まだ左脚をまで奪うて迫害を加へようとするのであるか。あらゆる不幸になやまされた舊約書の約百の話にあるやうに、何の罪あつて天はかくまでも此身を苦しめるのだらうか、とうらめしく思つた。今にして思へば如何にも意氣地のない話ではあるが、意氣の衰へた頃は實際さう云つた女々しい物思ひにのみ耽るのであつた。生れ落ちてからさまざまな不思議の運命に飜弄されて、餘り幸福でもなかつた我が身の過去を思ひ返しては眠をなさぬ夜も多かつた。系統を立てて物を考へるだけの精力が無くなり、痩我慢を突張る體力も失せて了ふと、かうも人はセンティメンタルになるものかとわれながら愛想が盡きた。

入院したのは三月の二十五日、春とは言ひながらまだ寒い日であつた。それから殆ど十日ばかりといふもの、自分は殆ど瀕死の狀態にあつたから戶外のことを全く知らなかつたが、或日、手術場からの歸途に運搬車に仰臥しながら廊下の窓から外を眺めた。入院した頃の冬景色とは打つて變つた春の美しさに、私は思はず驚嘆の聲を洩らすと、車を曳いてゐた看護婦も暫く步をとどめて吳れた。私はこの時ほど鮮やかにまた强く、春といふものの印象を受入れた事は未だ曾てなかつた。三春の行樂を

瞬時に縮めたとでも言はうか、私はその短い數十秒の間に春と云ふものの清新潑剌の氣を十分に吸ひ込んで、はじめて蘇生したやうに思つた。

春も漸く老いて病院の青々した芝草の上に櫻の花の散るころから、青葉のかげ懷かしい初夏の候にかけて二月あまりの長い間を、私は淋しい病床に日を送つたのである。脇杖に縋つて少し散歩が出來るやうになつてからは、色々な書物を取り寄せて濫讀した。椅子を芝生へ持出して、日なたぼつこをしながら三四時間も讀書をする日があつた。平生あまり俗用がたて込んで忙しい時なぞは、一月位なら輕い病氣で入院して思ふままに臥轉(ねころ)んで本ばかり讀んでゐたいなぞと馬鹿な事を思つた事もあるが、實際からなつて見ると、いくら時間に餘裕はあつても病院では本當の讀書なぞ出來るものではないと思つた。讀書は何と言つても矢張り自分の書齋の机の上に限る。夏の避暑地や温泉場へ行くときに行李の中に重たい書物をうんと詰め込んで行つて、その半分はおろか、三分の一も役に立たなかつた經驗は今までにいくたびかある。況や病院なぞに於てをやである。

病院生活といふものは、どうしても詩にはなりさうもない殺風景ないやなものである。殊に私の受けたやうな外科手術を詩題にしたものは、自分の平素親しむ英文學のうちで考へて見てもその例は甚だ少い。誰にも第一に思ひ浮ばれる最も有名なものは、キリアム・アアネスト・ヘンレイ William Ernest Henley（一八四九年生―一九〇三年歿）が一代の傑作として數へられる『病院にて(イン・ホスピタル)』すべて

二十八篇である。よほど以前に讀んでおほかた忘れかけてゐたこの詩集を、私は自分の病苦と共にまた思出して、それを病院へ取り寄せた。每日手術場に引出されて繃帶を交換される苦しい病院生活の間に、この詩集を再び讀み直して味はつて見ようとした。

ヘンレイと云ふ人は詩人としても批評家としても、やはり journalist の肌あひの人であつた。彼の詩集にはロンドオとかヸラネルとか云ふ佛蘭西古詩の體を模した名作などもあるが、かれの特色はやはり在來の因襲に反抗して新傾向を創めた作品、たとへばこの病院の歌なぞに最もよく現はれてゐる。卽ち今までは詩歌とさへ言へば、みやびた優美な言葉で詩的な題目をのみ歌ふのが常であつたのを、ヘンレイは日常の平易通俗な言葉で、現在の事實や自分の直接經驗を極めて寫實的に描かうと云ふ新しい試みをした。ちやうどキプリングが汽關車なぞを詩題に取つたり、平易な俗語を詩に用ゐたのと同樣で、二十世紀現代の英吉利の詩歌が、全體に於て甚だしく散文的に寫實的になつたのは、時勢の然らしむるところなりとはいへ、またキプリングとヘンレイと二人の感化もあづかつて大に力があつたらうと私は信じてゐる。この病院の歌なぞは、まさしく新傾向の曉鐘とも言ふべきものであつた。

ヘンレイは十八の歲に學校生活をやめたが、病氣のために遂に左脚を切斷しなければならない事になつた。當時エディンバラにリスタアと云ふ名高い外科醫が居て、この人が新療法を發見して近世の

醫界に一新時期を劃した。時は千八百七十三年のこと、當時貧と病とにやつれた、まだ名も無い一青年詩人のヘンレイは、はるばるとエディンバラに來て此國手を訪ねて手術を乞うた。かれは其時二十四歳であつた。ヘンレイは二十ケ月といふ長い間病院に居た。その間に得た自分の經驗を基として出來た製作が、即ちこの『病院にて』二十八篇であつた。

先づ開卷第一章に、患者が入院するところを歌つた一篇がある。その結句に、

A tragic meanness seems so to environ
These corridors and stairs of stone and iron,
Cold, naked, clean——half-workhouse and half-jail

悲痛なる惨(みじめ)さに包まれたりと見ゆる石と鐵との廊下階段、
冷やかに、赤裸々に、また清らなり——半ば救貧院、半ば牢獄。

この最後の一句の如きは最もよく印象的に、病院といふものの感じを言ひ現はしてゐるやうに思はれる。

その次には待合室を詠じた一章があつて、終に下の句がある。

One has a probe——it feels to me a crowbar.
A small boy sniffs and shudders after bluestone.

A poor old tramp explains his poor old ulcers.
Life is (I think) a blunder and a shame.

一人は探針を持てり、吾はそを鐵棒の如くに思へり。
小さきわらべは綠礬を嗅ぎて身ぶるひせり。
又みじめなる老漢のおのが潰瘍を説明せるあり。
われ思ふ、生はかくて大なる過にして、また恥辱ならずやと。

毎日手術場に出て繃帯の交換をして貰ふとき、探針——卽ち獨逸語でいふゾンデ——といふ奴が私にとつては何よりの苦手(にがて)であつた。醫師が看護婦にゾンデを持つて來いと命ずるのを聞いただけで、いつもぞつとした。あの探針を傷口に突込まれる痛さを思ふと、いかにも一本の太くもない針が鐵棒のやうに感じられる。朝起きても、けふはまたあのゾンデかと思ふと、思ふだけでも痛かつた。またあの手術場の慘憺たる光景を見ると、人はかくて猶生きなければならぬものか、と私は時々さうも思つた。いかにも此詩の句にあるやうに、生きると云ふことが何だか一つの過誤(あやまり)であり、また恥辱であるかのやうに思はれて、此一句の意が最も痛切に私の胸に響いたのを記憶してゐる。

私は前後三回ほど手術をうけたが、その度ごとに全身麻醉をされた。數をかぞへて大きい呼吸をしてゐる間に身體(からだ)は何だか眞暗な深い深い穴の底へ沈んで行くやうな心地がした。ヘンレイは『手術(オペレイション)』

と題した一篇のうちに、この痲酔をかけられた折の心もちを歌つてゐる。醫者は患者の面を布片(ナプキン)で蔽ふ、總身の感覺は段々に失はれて行く。その時だ、

And you gasp and reel and shudder
In a rushing, swaying rapture,
While the voices at your elbow
Fade——receding——fainter——farther.

Lights about you shower and tumble,
And your blood seems crystallising——
Edged and vibrant, yet within you
Racked and hurried back and forward.

Then the lights grow fast and furious,
And you hear anoise of waters,
And you wrestle, blind and dizzy,
In an agony of effort.

かくて汝は喘ぎ、よろめき、身は慄ふ。
突きくる動揺の恍惚のなかに。
その時、そばの物音は
かすれ――退き――かすかにも――遠ざかる。

そば近き光は雨と降り、轉び落ち、
汝が血は結晶するかとばかり覺ゆ――
微動し、震動し、されどまた五體のうちを
責め苛まれ、前後に激流す。

やがてまた光は、しかと烈しくも照らす。
耳もとに水聲を聞く。
かくて汝は努力の苦しみに、
目盲ひ、目くるめきてもがくなり。

肉體の苦痛をかくまで寫實的に描いた詩は、他にあまり多く例はないと思ふ。最後の第二十八篇は

『釋放された者』と題して、長い間の苦しい病院生活を免れて、いよいよ退院した時の心地を寫してゐる。牢獄の幽囚から釋放されたものでも、かうはあるまいと思ふほどの嬉しさ。いつも見なれてゐた街の景色さへ皆、新しい美しい別世界のやうに思はれる。あの心持は、自分で病院生活をした經驗のある人にしてはじめて知る事が出來るのであらう。いま最初の數行を引くと、

Carry me out
Into the wind and the sunshine,
Into the beautiful world.

O, the wonder, the spell of the streets!
The stature and strength of the horses,
The rustle and echo of footfalls,
The flat roar and rattle of wheels!
A swift tram floats huge on us……
It's a dream?
The smell of the mud in my nostrils
Blows brave——like a breath of the sea!

われを出でしめよ、
外氣と日光とへ、
美しき世界へ。

ああ街（まち）の不可思議、魔法！
馬のたけ高く、力つよき、
足音のがさがさと響くも、
低音のどよめき、車の轟きも（みな不思議！）。
快速の鐵道馬車は、形大きく、こなたへ來る……こは夢か？
泥土の香、鼻をつきて
強くにほふ――さながら一陣の海風の如く。

病院を出て、久し振で街上の景色を見たとき、耳目に觸れるもの一として不可思議の種ならざるはなく、すべてが何だか魔法をでもかけられた別天地のやうに感じられる。私のやうに僅か七十日位を病院に送つたものでも退院して電車を見たときは、何だか不思議なものを見るやうに、子供のやうな心もちで物珍らしく思はれた。況やこの詩人のやうに二十ケ月も病院にゐては、退院した折の心もちの

この叙述は決して虚僞でも誇張でもなからうと思はれる。馬が無闇に背が高く見えて、重い車なぞを曳いて行くその力の强さも、すべての市街の躁音も、皆悉くもの珍らしい。殊に長い月日を病院の藥くさい室にのみ閉ぢこもつて居たものが、はじめて戶外に出て久しく忘れてゐた懷かしい土の香を嗅いだその强い感じは、さながら一陣の海風に送られる潮の香のやうだといふ此最後の二行などは、最も巧妙に暗示的(サヂエスチイ)に出來た句だと思はれた。

病院生活の苦痛を細かく私の拙い筆で書き立てては、却つて讀者に迷惑だらうと思つて、かくはヘンレイの詩篇を借用した次第である。

三

『もうひと月、もう一週間、と氣休めばかりを言つて引つぱつて來たのが、今度はいよいよ癒りましたね』

助教授のTさんが笑ひながらから言つて、繃帶を取去つて吳れたのは八月の初であつた。それでも切斷部の近所の皮膚が直ぐに爛れたり何かするので、Tさんはその手當をしながら、

『實に弱い皮膚だなあ』

と、さも感に入つたやうに言ふ。僕が

『面の皮ばかり厚くなつて、他の所が薄いので』と言ふと、そばにゐた看護婦がくすくす笑つてゐた。

この頃からして、私の體力はすでに舊に復したのみか、初秋の頃になると肉つきは發病前よりも更によくなつて、體重もうんと増した。義足を附けて街上を横行濶歩するやうになると、健脚人を驚かすに足るものがある。『えらい勢だなあ』と褒めるのだか冷かすのだか分らぬ事を言ふものがある。『何だか肥つたやうだな腫れてゐるのぢやないか』なぞと失敬な事を言ふ奴もある。『馬鹿を言へ、君なぞは此義足で蹴飛ばしてやるぞ』と威張つて見せる。

死にかけたときは何故あんなに腑甲斐ない、女々しい人間になつてゐたらうと、今さら妻や友人に對してもらう恥づかしい。全快して見ると何だか強い仇敵にでも打勝つたやうな、大魔王を征服して凱歌を奏したやうな心持になる。英氣今は十倍して滿身にはち切れるやうだ。これからはどんなに勉強しても既う大丈夫だと思ふ。何の本を讀んで見ても實に面白い。ちやんと僕の頭に這入るやうに書いてあるやうな氣がする。天下また恐るべく憂ふべき無しと思ふ。生のよろこびが、しみしみと味はれたのは此時であつた。

世の中には凡て報償といふ事がある。得るところあれば失ふところあり、失ふところあれば得るところがある。私は左脚を切斷してから、不思議にも年來の痼疾であつた胃病といふものを知らな

くなつた、消化不良のために生ずる胃の苦痛といふものを忘れて了つたのだ。この頃では既う大抵の病氣は、誰でも足一本切り放てば治るものだと私は信じてゐる。この前人未發の新療法を以てしても、まだ治らないやうな頑固な病氣は、足を二本とも切つて了へばよからう。またかの愛錢病、虛榮病、怠惰病などいふ下等な痼疾に至つては、思ひ切つて首を切斷して了へば治ること疑なきものだと確信してゐる。

私が病院で左脚を切斷した時、いろいろの事を言つて慰めて吳れた人があつた。脚を切ると大隈さんのやうに口が達者になる、頭が良くなる、長生きをする。かういふ事を屢聞いた。しかし私自身では、明治初年の名優田之助の事ばかりを考へた。脫疽のために手も足も皆切つて了つた此女形は、終には胴體だけを竹籠の上に載せて花道を曳いて行つたさうだ。それで立派に振事を演じて見物をやんやと言はせたものだ。妙技神に入つては、手足を缺いてなほ立派に役者が勤まつたのである。大隈さんも偉からうが、僕は田之助に於て更に大なる不思議なる人間力の顯現を讃嘆せずには居られなかつた。人はすべて、根本の『生の力』をさへ失はなければ、肉體が受けた多少の損傷の如きは言ふに足らぬと私は信じてゐる。

友人久野法學士の令妹である音樂家は、自動車のためにあれだけのひどい負傷をされて、しかも今では全く健康を恢復して再び樂壇に立たれると聞いた。また私が入院中に病床で讀んだ二月二十六日

の倫敦タイムズには、佛蘭西のサラ・ベルナアルが私と同じやうに右脚切斷の手術をうけたといふ記事を見た。而も今ではこの老女優も再び盛んに活動してゐるらしい。私なぞもぐづぐづしてゐては、かういふ婦人に對しても恥づかしいわけだ。これからは今までの二倍三倍も奮勵努力する必要があると思つてゐる。

『はじめは四本の脚、なかごろ二本にたつて遂には三本になる。脚の數の少いほど強いものは何?』

これは讀者の知られる通り、希臘のスフィインクスの謎だ。この謎を解き得ないものは命を失つたのである。王イイディパスは、みごとに『人だ』と答へた。赤ん坊のときは四つ足で匍ふ、老年になれば二本足に杖を添へるから三本、中年の時は僅かに二本で、これが一番強いといふのだ。しかし私のやうな一本脚のことは少しも言つてない。若し脚の數が少いほど強いといふならば、一本脚は普通の人間以上に更に強いものだらう。それこそスフィインクスの謎にも無い強者である。人間といふものが更に一段進化すると脚は一本で濟むので、これを名づけて超人と云ふ。どうも私のやうな超人の目から見ると、二本脚の普通の平凡な人間なぞは、甚だしく不恰好で不體裁極まる弱者に見える。

一本の脚で立つと云ふと、私は直ぐに白鷺のことを思出す。あの長い嘴を前に突き出して、頸をあとへ引いて、哲學者が落着いて物を考へ込んでゐるやうにぢつと目をつぶつた儘、片足で水際に立つたあの姿はいかにも淸く、いかにも美しい。穢らはしい肉の生活を離れ、塵寰を超脱した仙骨の士と

までは行かなくても、あれを見ると何だか孤高清節の人を見るやうでゆかしい。動物園なぞで澤山の水鳥が群をなしてゐるところでも、白鷺だけはいつも獨り離れてゐる。例の片足で立つて、外の鴨や家鴨などががあがあいつて餌をあさるのを、さも五月蠅(うるさい)と言はぬばかりに白眼で見下してゐる。人は何でも一口に禽獸と言つて侮つて了ふが、あの白鷺の美しさ清らかさを見ては、名利をのみ追へる、脂ぎつたる俗惡の人間どもは、自ら顧みて少しく恥づる所あるべきだらう。鷺のやうに瘦せた細いからだを、これからは片脚で支へなければならぬ私なぞは、先づこの美しい鳥にあやかりたいものだと思つてゐる。

私は世に平凡とか普通(ひとなみ)とか云ふこと位、つまらぬものはないと思つてゐる。若し自分がよい方で他人に勝れて居なければ、わるい方ででも構はないから他人とは變つてゐたいと思ふ。ところがつくづく考へて見ると、自分は頗る平々凡々たる男に出來あがつてゐるのだから仕方がない。外のことは兎に角、容貌からして先づ頗る平凡だ。美男でもなければ、さりとて別に醜男(ぶをとこ)でもない。横目竪鼻の何の奇もない面(つら)をさげてゐる。勿論その目たるや、學生時代に或男が八方睨みの掏模だと評した位に多少ぎよろついて、異彩を放つてはゐる。鼻なるものも亦日本人には珍らしいほど高くて、氣障(きざ)な鼻眼鏡(パンス・ネー)が安全にかかる位のものだ。然し共に未だ以て大に天下に誇るに足るほどのものではない。ところが今度脚が一本になつたので、ここにはじめて僕の肉體は流俗の平凡界を超脫し得て、かの二本脚で

無ければ歩き得ないなぞと云ふ凡庸の徒を、眼下に見くだすに至つたのは自らの大なる喜びであり、また誇とする所である。自分がたとひ人間としてのあらゆる點に於て平凡であらうとも、この隻脚であると云ふ一事が俗衆と異なつてゐることを感ずるだけでも、禁じがたき一種の愉快を覺えるのである。世の常識萬能の俗輩には到底かういふ心もちは解るまいが、この愉快を思ふと、多少の不便の如き固より言ふに足らないのである。（大正四年十二月、東京にて）

太平洋上より

『長き旅路のつれづれなるままに』

から書き出しては見たものの、文句が如何にも月並でいやになる。この一枚の原稿紙を引き破つて更に出直さうかとも考へる。考へて見ても、やはりうまくは行かない。一層書くことを止めようかと思つた。

讀む事でも書くことでも、私は今まで書齋の外では餘りした事がなかつた。しかしこれから一年半も二年もの長い旅をするのに、いつまでもそんな贅澤は言つて居られない。これも習慣だからと思つて東京に滯在する二月ほどの間に、電車のなかや停車場の待合室や珈琲店の卓上などで讀み書きする事をだいぶ稽古した。そして船に乘つて見たのであるが、やはり駄目だ。讀む方はとにかく、書く氣にはとても成れない。これではならぬと思つて見ても、矢張り物にはならぬ。

みづから太平洋の女王だと誇る二萬餘噸の巨船も、こなひだから二三日の風雨で些からず動搖した。食堂に出る人の數も益々少くなる。殊に私なぞははじめての船旅で、謂はば人間の處女航海だから、たとひ船には醉はないまでも、生活の模樣が急變したので全く仕事が手につかない。同乘の海軍

士官のAさんでさへ、船を家にしてゐる人でありながら、どうもから商船にお客さんで乘つてゐると呑氣になつて、勉强は出來ませんな、と言つてゐる。況や僕の如き陸上動物をや。

すうとけいすに入れて持つて來た、ハッガアドの『クレオパトラ』も讀んで了つた。中央公論や太陽その他いろいろの雜誌の新年號もおほかた讀み盡くした。今から小むづかしい本をとらんくの底から引張り出すのも面倒だ。しかたが無いから何か書かうと思つて客室（ドロオイン・ルウム）へ來ると、わかい女がひとりぴあのを彈いてゐる。あちこちの長椅子（ソオフア）には小說や雜誌を讀んでゐる人が三四人ある。少しく離れた物書き机に行つて、私は原稿紙を出してペンを取り上げた。

珍らしくもない太平洋の航路だ。書くべきことは旣に多くの人が書きふるした。强ひて物めづらしさうに書き立てれば、何だあの赤毛布めがと讀者から笑はれよう。ままよ、雜談でもする積りで、見聞や感想の斷片を書きつけて置きさへすれば、やがて懷かしい故國の讀者の目にも觸れるわけ、また多くの未見の友に自分の消息を語ることにもならう。むかしの雙が岡のすね者のそれとは違つても、これもやはり徒然草のたぐひか。

西洋へ行くことは、十年ほど前に一度機會があつたのを我から振りすてたので、さて今度出掛けようとなると戰爭は始まる、片足は切つて了ふ、碌な事はない。一層もう行く事を思ひ切つたらばと言つた友人もあつた。

しかし私は行く、矢張り行くんだ。多年書物を通してのみ見てゐる異邦の文明に自分は禁じがたきあこがれを持つてゐる。ラフカディオ・ヘルン先生が東海のはてに詩美の郷を求めて、はては身も心も打ち込んで此國を慕はれたあの心持を、たとひわが師の君にはあらずとも、貴いゆかしいものだと自分は平生から思つてゐる。國語を異にし歴史を異にした萬里の異郷に、自分が未だ嘗て味はなかつた新しい空氣を、心ゆくばかり呼吸して見たいと思ふのである。異邦の情趣に深くも身をひたして、それを自分の血にもし肉にもして歸りたいと思ふのである。私の旅は名所の見物に行くのではない、また實業家の『視察』でもなければ、人のすなる『洋行』といふもの吾もして見んとて行くのでは、決してない。むかし歐洲の學徒がボロオニャやサラマンカの大學に笈を負うて、學藝と文化の中心を慕うて集まつたあの心持で、私はいま海のあなたへと赴くのである。

出發前東京に暫くゐる間、この頃は準備でお忙しいでせうと他人（ひと）からよく言はれたが、私には別にさしたる準備といふものがないので、一本足の案山子の化物が、謂はば義足行脚に出かけるのである。一笠一枚、ふらりと家を出ればそれで濟むのである。

* * * * *

船室旅客（キャビン・パッセンジャアズ）の數だけでも二百人以上はあるが、その大多數は白人で、日本人船客は僅かに二十幾人とかに過ぎない。どうもいささか心細いと一人が言へば、なあに二等三等の方へ行けば日本人の方が

多數で大に國威を發揚してゐるから安心だとわきから言ふ。横濱を出た翌晩か、晩餐の卓上に配られた船客名簿を見ると、いかにも米國人の名ばかりが多い。しかしあの獨逸種の所謂 hyphenated American はさう澤山居ないやうであつた。

船中の生活は實に單調無味なもの。とにかく最新の最も贅澤な設案をした此船の事だから、唯もう食うて寢て煙草を吹かしてさへ居れば、ひとりで太平洋の彼岸へ着くのである。安逸無爲なること恰も亡國の民の生活である。かういふ事ばかりやつて日を送つてゐると、人生觀もおのづから變るよと誰かが言つた。

食後の珈琲はいつも喫煙室ときまつて居るので、そこには日本人が一團をなしていろいろ勝手な氣焔を揚げてゐる。この中には軍人もあれば會社員も新聞記者もある、技師もあれば醫者もある。話がはずむと話題は政治宗教文藝工業軍備のすべてにわたつて、天下の大問題は大抵ここで解決がつくやうだから偉い。さうかと思へば、皆が銘々に自分の職業はつまらぬと言つて泣言を言つてゐる時もある。

文學好きのZさんが私にかういふ話をしてゐた。

『私が以前英吉利から紐育へ渡る時、ある會社の課長と同船したのです。バアに行つてヰスキイばかりよく飮む五十恰好の男でしたがね、或時しきりに今の青年の風紀がわるいの、意氣が銷沈してゐ

るのと言つた揚句、これは近頃の文學が惡影響を與へるからだといふ例の名論を出したですな。理窟を言つて爭ふのも大人げないと思つたから私は默つてゐました。それから今度紐育へ行つてしばらく同宿してゐる間に、この課長なるものの品行は殆ど成つてゐないのです。或時あまり癪に觸つたから、あなたがたがさういふ行狀をなさる事は、文學などよりも遙かに恐るべき惡感化を後進の子弟に與へるぢやありませんかと言つたら、なあに僕なぞは自分の努力によつてするので、親のすねをかじつてするのとは違ふ、と言つて澄ましてゐましたよ。』

今の新しい文學や青年は、絶えず此種の不良老年によつて迫害されつつあるのだ、とZさんは今更の事のやうに憤慨してゐた。

無線電信といふものは面白いものである。電波磁波の小むつかしい理論なぞは別として、實際やつて見ると如何にも奇蹟としきや思へない。横濱を出てから二日も三日も經つてのち、遠く海を隔てた故國の友からまだ『ボン、ヲアヤアジュ』の電報がいくつも來るのである。こちらからも面白半分に返電を出す。東京の親戚から、『今何をしてゐるか』なぞといふ奇拔なのをよこしたから、こちらも負けてはゐず、『太平洋上一痕の月、うたた遊子が胸の思を增さしむ』と、洒落たやうな洒落ないやうな馬鹿々々しい文句を返してやつた。實際その晩は二三日來の雨が晴れて、雲間を洩れる弦月の光の何となう悲しい夜であつた。毎晩の食卓の上には、船内で發行する無線電報新聞といふのが置いて

ある。露國太公の來朝とか、大隈伯の爆彈事件とかいふやうな報知が話題になつて、いつも食卓を賑はした。

しかし航海の幾日めかには、日米いづれからも此無線電信の全く到達し得ない距離のところに來る。ここそは眞の浮世ばなれをした別天地で、あの相場とか取引とか云ふ事ばかりを氣にする先生たちでさへ、この間ばかりは身を仙境に置くの外は無いんだから、一寸おもしろいと思ふ。

甲板の椅子に凭れて皆何かしら讀んでゐる。白人はどんな物を讀んでゐるのかと氣をつけて見ると、新聞雜誌の類は別としてその他は大抵小説であること言ふまでもない。それも先づ Baroness Orczy の作と云つたやうなものが多い。なかには H. G. Wells の科學小説や Galsworthy の近業 "The Freelands" などに讀み耽つてゐる人もあつた。Evryman's Library の本をいつも讀んでゐる老人があつたが、それは Ainsworth の『倫敦塔』とラスキンの論集とであつた。思ひなしか此人は品のよい老人のやうであつたが、その娘さんらしい若い婦人は、いつもドロオイング・ルウムにショパンの樂譜を持つて來て、ぴあのを彈いてゐる。

* * * * * *

日本に居れば暖爐に尻をあぶつてゐる頃だのに、ここ熱帶の海ではこの二三日來の蒸暑さと云つたらない。船室の煽風機を動かした位ではとても追付かない。すべて夏服に着かへて、扇子まで使ふと

いふ有様。それに天氣がわるいのでじとじとして、ちやうど日本の梅雨時分のやうだ。桑港へ着くまでに食べようと樂しみにして行李に入れて置いた日本菓子を出して見ると、すつかりかびてゐる。癪に觸つたから箱ごと窓から海中へ投げつけた。

浪にゆられゆられた十日あまりの單調な生活に飽いたものには、陸地が戀しくてならぬ。毎日甲板をよろけてゐた私には、たとひ一本足なりとも、しかと踏みしめて terra firma をあるける事かと思ふと、布哇へ着くことが無上にうれしいのである。ちやうどその夜は滿月に當るから、椰子の林の逍遥に別莊の明るい窓を洩れて聞えるぴあのや、ワイキキの濱に打ちよせる波の音に耳を澄ますのも面白からうと一人が言へば、いや乃公は浴衣がけでびいるだ、しるこも喰ひに行く、いや蕎麥を喰ふのだ、と今から既う日本趣味に渇してゐた男もあつた。

食堂でいつも私と卓子(テイブル)を同じうする汽關長(チイフ・エンジニア)から、十七日の朝十一時には布哇へ着きますと聞いてゐた。

いよいよ十七日の朝だ。いつも寢坊をして朝飯だけはボオイに命じて船室(キヤビン)に取寄せる私が、この日は勢よく食堂に出かけて行つて、オオトミイルともう一皿何やらを平らげた。

が、天氣は駄目だ。暴風雨で波は高く、船體の動搖も烈しい。水先案内(パイロット)の小蒸氣は大波に木の葉の如く弄ばれながらやつて來た。さあ上陸するんだよと皆が勇む。

ところが十一時が十二時になつても船は入港しない。晝飯を食つてから喫煙室で話をしたり甲板を散歩したりして、待てど暮らせど船は港に這入らうともせぬ。餘りのじれつたさに訊いて見ると、かう船體が波に揉まれては、あぶなくてとてもあの狹い港口を通ることが出來ないのだといふ。

船客はみな甲板に出て、さも恨めしげに布哇の島をながめてゐる。そして色々のことを言つてゐる。

『何でも布哇では四五月以來この風雨ださうだ。十五六年ぶりの大雨だといふぜ。』

『いくら冬でも、この邊でこんなに荒れたためしは無いさうだ。』

『ホノルルの港に船が這入れないなぞいふ事は、はじめてですと船員も言つてゐたよ。』

『これは誰か餘程どうも精進のわるい奴が乘つたので、海神の怒に觸れたのだよ。まさか船のなかでわるい事も爲まいが、橫濱で乘船するまでに、神の怒に觸れるやうな事をやつて居たものだね』と一人が言へば、

『先づ第一、君のやうな男が乘るからいけないんだ』とわきから言ふ。

『誰か一人犧牲にして海へ投げ込むんだね。そして神の怒を解くんだ。』

『それならあのXを投げ込んだらよからう。』

『馬鹿言へ。あんな者を投げ込んだら、それこそ益々海神の怒を增さあね』と惡口屋がまぜかへす。

みなが自棄になつてからいふ無駄口を利いてゐる間に、船は全く進行をとどめてゐるのである。今夜は港外でこのまま漂泊して、上陸は明朝のことだ、ときまつて了つた。天なり、命なり、嗚呼何と言つても仕方がない。

滿月の夜に、布哇で名高い月夜の虹を見ようといふ望も絶えて了つた。しかたが無いから今夜は早くからベットにもぐり込む。

* * * * *

きのふ夕かた、ほんのしばらく晴れてゐた間に、夕陽を浴びた布哇の島やまを港外はるかな甲板の上から望んだ時は、いかにも美しいと思つた。あれがワイキキの濱、これがダイヤモンドの岬、と他人から聞きながら双眼鏡で眺め入つてゐる心もちは實によかつた。冬を知らぬ常夏の國と言つて了へば別に怪しむべき事でもなからうが、故國に居たならば今ごろ京の底冷えに惱まされる、寒がりの私は春霞の棚引くやうなこの『太平洋上の樂土』を眺めながらうつとりして、いつか自分は夢の國に來てゐるのではないかと思つた。

はじめて見る南國の景色をいろいろに想像しながら、その夜は早く寢に就いた。翌朝起きて見ると雨風は止まないどころか、きのふよりも更に烈しくなつた。廊下で行きあふ誰彼の顏には、如何にも困つたなといふ色が見える。これでは上陸しても仕方があるまいと皆が悄げてゐる。

船へ訪ねて來られた布哇の三つの新聞の記者と喫煙室でしばらく話してから、とにかく雨を冒して上陸することにした。棧橋を出ると、そこには布哇で文筆の人として知られてゐるTさんが迎ひに來て居られた。本願寺のIさんが病氣なのでその代りにわざわざ來て吳れられたのださうだ。同道して先づ本願寺の別院を訪ねて暫らく休憩してから、今度は自動車を驅つて學校を見に行つた。寄宿舍や敎室の淸楚な建物が、綠樹靑草の色あざやかな、ひろびろとした庭に散在してゐる所は、何と言つても日本では見られない景色である。

新聞社のFさんも一緒に案內の勞を執られた。篠つく雨のなかを主人は自動車で走りながら、私は色々と布哇の話を聞かせて貰つた。はるかむかうの濱邊に寄せては碎ける白い波をながめて、椰子の並木の間を驅け拔ける折には、白砂靑松といふ月並をはなれた南國の海岸を、車の幌の間から私は飽かずながめた。たださへ鮮やかな濃厚な色合を持つた熱帶の樹木は、連日の雨に洗はれて塵一つ止めない。木槿のやうな Hibiscus の花の雨になやむ風情や、日本の柳によく似た何とかいふ木の新綠などに、殊に美しいゆかしいものであつた。これが若し四五月の頃であるならば、紅紫咲き亂れた百花繚亂のながめに、毒々しいほど濃艶な、刺戟の强い色彩の色にも醉ふことが出來るのであらうに、惜しいことをしたと私は獨りでさう思つた。

最[illegible]は博物館を見に行つた。今は亡國の民であるこの國の土人の神話や、古俗に關する色々の面白

い遺物を見ることが出來た。人類學や考古學や土俗學に何等の知識をも持たない私にさへ、興味ある物は決して尠くなかつた。たとへば『歌の瓢(ひさご)』とも云ひ『戀人の口笛』とも云ふ、日本の木魚のやうな又西班牙のカスタネットのやうな小さい瓢がある。南歐アンダルシアの月夜に戀人が彈くマンドリンの音よりもかすかに、セレネイドの歌にもましてあはれな悲調が、原始的なるこの樂器にもありはしないかと思ふと、土人の歌なぞも一度は聽いて見たいものだと思つた。

今度は世界に名高いといふ水族館に行つて見る。そのまま圖案の材料にしたらばと思ふやうな、色の極めて派手やかな珍らしい魚が水槽を泳いでゐる。薄暗い入口の所にしよんぼり獨りで椅子にもたれてゐる年よりの西洋人が、何故(なぜ)だか私の注意を惹いた。前に置いてある魚の繪本を一冊買はないかと私たちに勸めてゐた。

望月倶樂部といふので日本の刺身を食つたこと、近頃布哇の島で出來るやうになつたといふ甘い麥酒を飲んだこと、いかにも植民地らしくて而も立派なホノルルの町の大通のさまなどは、今更私が書き立てるまでも無からう。

私は布哇の島へ寄つて思ひがけない事をFさんから聞いた。それは昨年からジヤック・ロンドン氏がここへ來て創作に從事してゐると云ふ話である。どこに居るのかと聞くと、シイサイド・ホテルの貸別莊だといふ。それならばちやうど途中だから何よりの好都合といふので、早速Fさんに案内して

貰つて訪問した。

ロンドン氏が『野性の聲（コオル・オヴ・ザ・ワイルド）』の作で文名を轟かし、英文小說の人氣作者になつてから旣（も）う十幾年になる。毎年少くとも一つは新作を公にしてゐるから、著作の數は隨分と多い。私は此作家の書いた動物譚の外に、いろいろな詩的な短篇集をも面白いと思つて讀んだ事がある。さういふ人が今この絕海の孤島に來て居ようとは夢にも思はなかつた。迂濶な私は全くそれを知らなかつたので、思ひ掛けない儲け物でもしたやうに此作者の假寓を訪うた。

快く出て私を迎へたロンドン氏は六尺ゆたかな巨漢、身には日本の浴衣のやうな所謂キモノを着て、使用人なぞも日本人を使つてゐる。以前とは違つてだいぶ日本びいきになつてゐるやうだ。私は先づ來意を語り、全く豫期しなかつたこの奇遇を喜ぶ事を告げた。私の事は、一昨日とか此地の英字新聞『アドヴタイザァ』にあつた記事を見て氏は知つてゐたのださうだ。私は、あなたの作物は隨分以前から日本で英文を讀む人の間に知られてゐて、現に私の大學の圖書館にも四五冊はそなへてあると語つた。日露戰爭のとき軍事通信員として下關まで來たでせうと言ふと、いや日本へはそれより十年も以前に行つて知つてゐましたと言ふ。ヘルン先生の著作の話も出た。こんな南海の孤島に來て筆を執るのは、何だかスティイヴンソンがサモアの島で創作に從事したやうだと私が言ふと、いや白グはあんな肺病患者ではなく、この通り達者だと言つて大きな胸を前に突き出して見せる。布哇の話の

序に何か近作でこの島を材料にしたものがあるかと訊いたら、"The House of Pride" といふ短篇集に布哇のことを書いたと言つてゐた。ことしの七月までこの海岸に滯在するのださうだ。

朝夕この美しいワイキキの景色をながめて、氏は毎日幾枚かの原稿を日課のやうにして書いてゐるのだと聞いたから、長座をして邪魔をするのも氣の毒と思つて、わづか十五分ばかり話して私は辭し去つた。かへる時に氏はかたく私の手を握つて、いつかまた必ず再會の機あることを望んで別れを告げた。

私は以前から作品を通して見たロンドン氏を、どこか露西亞のゴルキイに似たところのある人だと思つてゐた。共に幼い時から冒險的な放浪生活を送つた人で、常に因襲的な虛僞に反抗しようとする思想上の態度に於ても、この二人は甚だ相近いものだと竊かに思つた事がある。恐らく二作家の性情にも共通な點があるのだらうと想像してゐたが、今會つて見ると容貌までどこか寫眞で見たゴルキイに似た感じがある事を知つた。荒削のやうで而も詩情ゆたかな、此二人の筆致にも無論相似た點があるのである。

この日の夜、新聞社の階上に集まつた同好の士に招かれて、私は文藝に關する一場の講話をした。故國を離れて遠い遠い南海のはてに、かくも多い末見の友と相會し、共に詩を語るしめやかな雨の一夜こそ、忘れがたく嬉しいものであつた。（大正五年一月十九日夜、春洋丸にて）

ジャック・ロンドンの小說

　横濱を出てから十幾日めかに、太平洋上の樂土と呼ばれる布哇の島に春洋丸が着いた日である。雨ををかし、上陸すると、私を案内して吳れられた某氏の話に、ジャック・ロンドン氏が此間からここに滯在して創作に從事してゐるといふ事だ。今の米國文壇に第一流の作家として知られ、また英文小說界に特異の地位を占めてゐる此作者の小說は、私も以前から二三種は讀んで面白いものだと思つた事がある。犬と狼の生活を、此作者一流の筆で人間の話のやうにして描いた『野性の聲（コオルオヴジワイルド）』『白牙（ホワイト・ファング）』などの名作は、私の『狂犬』のなかにも引合に出した覺えがある。そのロンドン氏が、いま思ひがけなくこの絕海の孤島に逗留してゐると聞いて、私は是非一度會つて見たいと思つた。訊いて見ると、シイサイド・ホテルの貸別莊（コッテイジ）を借りて夫人と一緒に居るのださうだ。幸ひそこは博物館から水族館や望月倶樂部の方に行く途中になるといふので、布哇には珍らしいといはれる程の烈しい風雨のなかを自動車を走らして訪問することにした。

　直ぐ出て來て私を迎へたロンドン氏は、豫て雜誌などにある寫眞で見た通りの木强漢であつた。六尺ゆたかの偉丈夫、額には亞米利加でよく商店や銀行の事務員なぞが用ゐる靑いセルロイドの eye-

shade をかけてゐる。無帽の人で、その血色のよい顔附といひ、頑丈な骨格といひ、世にいふ所謂文士肌の人ではなくて、さすがは長く下級勞働者などの仲間に出入し、一葉の小舟に大洋の大浪を乘り切つた程の人である事を思はせる。雨に洗はれた靑々した熱帶樹の葉かげが窓の硝子に美しく映じてゐる清楚な一室に机を据ゑて、二三十冊の小說雜著の類を無雜作に積み上げた棚をそばにして、氏は創作の筆を執つてゐるのであつた。

私は先づ來意を告げてから談は氏の舊作に及び、また氏が日露戰爭の頃新聞通信員として下之關に來たことを聞いてゐたと言へば、否なそれよりも以前から日本の海岸は知つてゐると語る。何かこの布哇を材料にした作物があるかと訊けば、『誇の家（ハウスオヴプライド）』といふ短篇集に此島の話を書いたと答へる。肺を病んだスティイヴンソンが南洋のサモアの島に行つて筆を執つてゐたやうに、かういふ美しい南國の濱邊に靜かに詩思を養へば、さぞ創作の業（わざ）も捗取ることであらうと語ると、自分ばスティイヴンソンとちがつてこの通りに達者であるが、まだことしの六月まではここに滯在するつもりだと言つて、その大きい胸廓を前に突き出して健康を誇つてゐる。私は同行の人が門に待つて呉れてゐるので急いでもゐたし、また殊に長座（ながゐ）をして仕事の妨をするのも心なきわざと思つたから、十五分間ばかり世間話をして立去らうとした。氏は『今度は必ずカリフォオニアの家を訪（たづ）ねて來給へ、それは非常に景色のよい所だから』と言つて、その家の寫眞を持つて來て說明してゐた。歸るとき氏は更にかたく

私の手を握つて再會を期して別れた。

それからまた一週間ほど太平洋の浪にゆられて、いよいよ桑港に上陸して一泊したとき、私は早速その晩に本屋へ行つて、ロンドン氏の作で私のまだ讀まない物を五六冊買つた。それを大陸横斷の四日間の汽車中の讀物とし、紐育（ニユウヨオク）の宿に着いてからも讀んだ。ここに少しく讀後の印象と氏の略歴とを語つて、故國の讀者に紹介したいと思ふ。

米國のカリフォオニアといふと、誰しも皆殺風景な移住民ばかりの耕作地かと思ふが、これが實はなかなか新しい文學に緣の深い土地なので、近代の大詩人だと言はれた故 Joaquin Miller （ホアキン・ミラア）も、ここのヨセミテの絶景に自然と親しんだ人である。つい此頃も Ina Coolbirth （アイナ・クウルバアス）といふ女詩人や、George Sterling （ジョオヂ・スタアリング）といふ詩人が此州から出て、頻りに批評家の注目を惹いてゐる。ジャック・ロンドン氏も實にまたこの州の桑港で生れて、今は米國の誇とせられる作家の一人である。

ロンドン氏の生れたのは千八百七十六年だから、今ちやうど四十歳の男ざかりである。十一歳の時から耕地の勞働者のなかに這入つて、規則正しい敎育なぞは餘り受けてゐない。大抵は公立圖書館で獨學でやり上げたのらしい。青年時代にはクックの旅行記や、アアギングとかキイグ女史の小說などを讀んで、いろいろ浪漫的（ロマンテイク）な空想に耽つては、まだ見ぬ廣い世界のはてに美しい詩美の鄉を夢みてゐた

のである。

やがて氏は父母の家を去つて桑港近海の牡蠣の密獵者の仲間に這入つたが、漸くその興味も盡きる頃には今度はあべこべに漁業巡邏（フイシュパトロオル）になつて、さきの同類の奴どもを捕縛する役人に早變りした。これは隨分、時々はピストルなぞを向けられて、本當の命がけの仕事であつたさうだ。後にこの當時の經驗を材料にして書いたのが、即ち『巡邏物語』"Tales of the Fish Patrol" である。浪漫的（ロマンテイク）な話を極めて面白く寫實風の筆で描いたのが評判になつた。

此頃からロンドン氏の冒險的な海上生活は始まつてゐるので、ベエリング海や日本の沿岸で漁獵をやつた經驗は、皆巧みに戯曲化されてその作品の材料となつてゐる。由來英語英文學は海上生活と甚だ縁が深いので、遠い昔のアングロ・サクソン時代から近代の大詩人スヰンバアンに至るまで、その豐富な詩文には浪の音や潮の香がつねに跡を絶たないのである。現存の詩人で言つても、ジョン・メイスフィイルドの海洋描寫はいま天下一品の名を轟かし、小説の方ではコンラッドが、これも自分の若い時の船乘生活の實歴をかいた幾篇の名作によつて、現代文學に第一流の作家たる盛名を博してゐる。米國のこのロンドン氏も海上冒險の描寫に於て、まさに英吉利のコンラッドと相對すべきものであらう。

勞働は神聖であるとカライルは言つたが、ロンドン氏も、勞働と云へばいかなるみじめな苦役をも

厭はすに從事した人である。ヴォルガ河畔の勞働者の仲間にゐた露西亞のゴルキイのやうに、蓬頭垢面の一青年はやがて文筆の人として世界に名を成すに至つた。しばらく放浪生活を送つてから十九歲の時にまた學校に這入つたが、洗濯屋に奉公して所謂苦學生をやつたのである。のちにはそれも面白くないといふので、北國の寒い寒いクロンダイクへ砂金取りにまで出掛けた。私がずつと以前に讀んだ『野性の聲』や『白牙』などに犬の話を書いた小說は、此時の實景を描いたものであつた。

氏は更に、今度は英國の倫敦へ行つてその貧民窟に這入り、つぶさにその慘狀を目擊して、之を材料にして『奈落の人』"The People of the Abyss" を書いた。到底想像も及ばないやうな悲慘な窮民の生活を、純粹に寫實的に描いたものださうだ。氏が社會問題に注目し、階級の爭、貧富の懸隔といふ事に就いては一家の見を持してゐるのは、全く此時の觀察に基づくのである。

かういふ多年の苦勞をして來て人間社會のあらゆる方面を觀察し、足跡世界にあまねき人だけあつて、周圍のあらゆるものに對して氏は同情の筆を有つてゐる。だからその著作目錄にあらはれた殆ど四十餘種の作品も、決して單調な同種類のものではなく、眞に千種萬態と言つて可い。殊に短篇小說の方が得意なやうで、この點から言ふと何だかキプリングのやうな感じのする作も多いやうに思はれる。文章の簡勁で齒ぎれのよい所も、二者の間にはたしかに類似の點があるやうだ。

おもふにロンドン氏は本來極めて浪漫的(ロマンテイク)な詩人肌の人であつたのが、周圍の境遇に壓せられて、ま

のあたり慘憺たる人生の暗黑面を見るに至つて、ここに遂に一種の寫實家になつたのであらう。だから若し氏をして純然たる書齋裡の文人たらしめたらば、決してあのやうな作は出來なかつたらうと思はれる。聞くところによると、氏の血統には父祖四代の間に英吉利、和蘭、ヱイルズ、瑞西、佛蘭西、獨逸の六ケ國人の血統が混淆してゐるといふが、之を思ふと、氏が二十年の放浪生活中に、世界の各地で見たあらゆる事物に同情を寄せる事の出來たのも、決して怪しむに足らない。

氏はかつて Ketch といふ一葉の小舟に、夫人と料理人と日本人のボオイを一人連れて世界周遊を企てたが、之に就いて氏は自ら下のやうに言つてゐる。その言葉には氏の人生觀の一端が窺はれるから、ここに抄譯して引用する。

『難事を成し遂げる事は、刻薄無殘な外圍にうまく適應して行く事である。その事が難ければ難いほど之を成就したときの滿足は大きい。茲に我あり。人間と呼ばれたる一小動物、生物の一片である。肉、血、神經、筋、骨、腦髓、合せて一百六十五封度（ポンド）、みな柔かいもの、いつ何時損傷をうけるかも知れない脆弱なものである。脈搏のある危げなこの一片の生命、これが自己の全部である。ところが、私の周圍には偉大なる自然力がある。巨大なる威嚇力を以て迫る破壞の巨人、無情の怪物であつて、この自然力が私に對して無頓着なことは、ちやうど私が足下に一片の砂利を踏みつぶすのと同じだ。自然力は無意識であり無慈悲であり無道徳である。旋風、颶風、雷霆、海嘯、地震、火山、渦

浪、渦卷、――すべてこれら非情の怪物は、ここに人間が名づけてジャック・ロンドンと呼ぶ一個の弱小なる生物ある事を全く眼中に置いてゐない。この大動搖大混亂の間に身を處して、あぶない道を切り開いて行くのが私の任だ。我といふ一片の生物は今これらの外敵に勝ち誇らうとするのである。』

周圍に對する奮鬪努力の生活、自然力の壓迫に對する反撥と抵抗、これが即ち氏の『冒險生活の本意であつて、そこに氏は人生の眞味を見出さうとするのであつた。

聞くところによると、氏は平生からわざわざ生の肉ばかりを食つて野獸の生活をさへ學ばうとしてゐるといふ話だが、その作物を讀むと、いかにも文明と因襲の虚僞を嘲つて、自然の儘な單純な原始生活をなつかしむ跡が歴然として現はれてゐる。これはさきにも言つた北極の動物生活を書いた『野性の聲』にも著しく現はれてゐるが、有史以前の人類を極めて科學的に精細に叙述した『アダム以前』"Before Adam"の作は、最もよく此特色を代表してゐる物だと思ふ。

この點に於て氏は同じ米國の詩人ホヰットマンと、たしかに一脈の相通ずる所があるやうに思はれる。今日の人間社會の虚僞を厭うて、むしろ原始人類の時代に立ちかへり、自由な偉大な新社會を創造したいといふ一種の理想家ではなからうと私は考へる。氏は狼や犬の話を書いても人間と同じやうに觀てゐるし、人間を描くのにも之を野獸として見てゐるものらしい。少し極端に言ふと、氏の眼中には野獸と人類との間に何等の牆壁を設けないのであらう。

しかしながら氏はまた一面に於て、美しい人情の機微を穿つて之を解剖するのに非凡な手腕を有つてゐる。そして此方面は、特に氏の短篇集を讀んで見るとよく解ると思ふ。いかにも詩情のゆたかな作で、青春の戀を描くところなどは確かに近代の名文であると信ずる。例へば『神の笑ふとき』"When God Laughs" といふ短篇集の卷頭の一篇の如きは、眞にすぐれたる抒情詩を誦するが如く、あのむくつけき作者がこんな美しい物を書くのかと思つて、私は繰返し讀んだ。貧民の窮狀を細敍し、原始生活を憧憬する此作者の他の半面が、最もよくかういふ短篇小說にあらはれてゐる。

『神の笑ふとき』の主題は寧ろ陳腐な材料を取つたもので、この作者の詩筆によつてはじめて面白く讀まれる性質のものである。結婚は戀愛の墳墓である、といふ古い言葉の示す眞理を繰返して、戀愛の眞味は求むる所の心持にある、得るといふ事、飽滿するといふ事は滅亡であるといふ意味をかいたものである。カアキイネといふ男が、ある他の結婚した男女の戀の最後を物語るのだ。書き出しの第一頁のところに、

カアキイネは遂に寛いだ。がたがたいふ窓を彼はそつと見上げて、烈しく家に吹きつける東南風の荒々しい轟きに、しばらく耳を傾けた。酒盃を擧げて火影にそれを透しながら、黃金の美酒を見てうれしさうに笑つた。彼は言つた。『美しい酒だ。甘い甘い酒だ。女の酒だ。また鼠色の衣を着た聖者が飮むやうに出來た酒だ。』

カアキイネは藝術の人である。南國の氣分を有つた黑い眼で、長く延ばした髮の毛の蔭から人を見る時はメフィストフエレスのやうに見える男だ。此男が話すのは、結婚してから死別れた果敢ない或男女の戀物語であつた。

戀は願望である、甘い苦痛だ、と二人は思つた。男はいつも求めてゐた。そして求めてゐたものを得た時に彼は死んだ。斥けられたる戀は生きた戀である。得られたる戀は滅びた戀である。食つてなほ飢ゑてゐるといふ藝當は人間には出來ない。滿腹といふことが問題だ。わがものにして而もなほ鋭い欲求を有つこと、これがふたりの問題であつた。かれらは戀を戀したのであつたからだ。得た、遂げた、と思つて我も人も喜んで爲るのは、實は神の惡戲に過ぎない。これが此一篇の要旨である。

ロンドン氏が、布哇のことを書いた物だと言つて私に語つてゐた『誇の家』も、極めて詩的な短篇の物語集である。各篇みな此島の風俗を材として、地方色を鮮明にあらはした作である。今その二三をここに紹介しよう。

『誇の家』の主人公フオオドといふのは所謂道心堅固な、酒と女が何より嫌ひな男である。結婚といふ事すら夢にも考へない程の極端な男である。或夜のこと、南國の常として海濱には月光を浴びて在留の軍人どもが踊り狂つて歡樂に我を忘れてゐるさまを、彼は獨り離れていかにも苦々しげに眺め

てゐる。中でも特に彼が憎惡の目を以て凝視してゐたのは、今しきりに音樂に合はせて布哇の歌を歌つてゐる、ジョオ・ガアランドといふ道樂者のかなか（土人）である。彼はこの青年が自分の異母弟だとは夢にも知らず、以前から色々と迫害を加へてゐたのである。

そこへ一人の友人が來て、フォオドに向つて『どうして君はそんなにガアランドをいぢめるのか。君とあの男とは人生の見方が根本から違つてゐるんだ。あいつにはなかば土人(カナカ)の血がある。君は堅苦しい一方の新英洲種(ニユウイングランド)だ。君の血は稀薄(うす)いがあの男の血は熱してゐる。君には愛といふ事が解らないんだらう。』友はかう言つて遂に事情を明(あか)した。卽ち宣敎師として新英洲(ニユウイングランド)から來たフォオドの父が、嘗て土人の女(むすめ)に生ませた子がガアランドなのだから、いくらその放埒淫蕩を惡(にく)んでも、兄弟たることは爭はれない事實だとわかる。そこで友はまた更にかう言つた。『それは誰にでも知れ渡つてゐる話で、知らないのは君ばかりだ。またさういふ類の事は此島で決して珍らしくもない話だ。そこが人生の面白いところで、君のお父さんの身内にあつた放埒の血をすつかりジョオ・ガアランドが受けつぎ、禁慾苦行の方面の血統を君が又すつかり承け繼いだ。それだけの話だ。君のお父さんには此二方面があつたのだから、君はお父さんの右手であり、ガアランドは左手であるのだ。左手が惡いからつて右手でそれを打ち落すわけにも行くまいぢやないか。』

友はかう言つて立去つた。無言でそれを聞いてゐたフォオドは、今度は四十年來この島にゐるホテ

ルの下男に向つて更にガアランドの身の上を訊くと、矢張りさきの友の話の通り自分とは異母弟の間柄だとわかつた。彼は獨り思に沈んだ。

それからそれへと考へ込む。自分はアイザック・フォオド（父の名）の子だ。父の身に起つた事はこのわが身にも起るかも知れない。思ふだに頬が紅くなるやうな氣がして、彼は鋭く羞恥の感を覺えた。自分の血のなかにあるものを恐ろしいと思つた。恰も父が癲病患者であつて、自分の血のなかにもその恐るべき病毒があるかも知れないといふことを、突如として聞いたやうな感じがした。神の嚴肅なる兵士——古狸の僞善者なるアイザック・フォオドよ。あの波止場人足と自分とどれだけの差異があるか。フォオドが以前から造り上げてゐた『誇の家』が、いま耳もとで崩れ落ちてゐるのである。

フォオドはガアランドを呼んで金錢を與へ、米國大陸へ追ひ拂ふことにした。

ガアランドは歩み去つた。しかし別れの言葉は口にしなかつた。フォオトは手をたたいて、ボオイ、れも、ね、え、ど、を、と日本人に言つた。れいもねえどを飲みながら、長くまた如何にも滿足げにフォオドは獨り微笑んでゐた。

これが一篇の結語である。

またこの一卷のなかで最も抒情詩風なのは『アロオハ・オオエ』と題した短篇で、父と共に此島に

來て、はじめて戀といふものを知つた亞米利加のわかい娘が、ホノルルの港を去る時、混血の青年に後髪を引かれる思をして切ない別を惜しむ所を書いたもので、いかにも此布哇にはありさうな話である。私の乘つてゐた春洋丸があの港を出るときにも、白衣の金髪婦人が誰から贈られたのか、美しい花飾(ガアランド)を頸からかけて甲板(デツキ)を行きつ戻りつしてゐる、其折の光景を思ひ浮べて私はこの一篇を殊に面白いと思つて讀んだ。

いよいよ船の出るといふまぎはに、娘が頸にかけてゐた花飾(ガアランド)をぷツつり切ると、花は眞珠の雨のやうに戀人の上へ降りかかつた。うつとりとして唯戀人を見つめてゐた此女の目は涙に曇つた。青年は混血兒であるといふので結婚は思ひも寄らぬ。再會は期するを得ない。女は泣いた。船が港を出る時に皆の歌ふ布哇の歌がある、

Aloha oe, Aloha œ, e ke onaona no ho ika lipo,

A fond embrace, ahoi ae au, until we meet again.

わが思は君に、またの逢瀨を――といふ歌の言葉は、それが自分にかなはぬ戀であるだけに、强い酸のやうに女の胸を刺すのであつた。

この書の或他の篇のなかにロンドン氏は、米國近來の詩客として知られた故ストッダアト氏の"Hawaii Noi" の、

"Thy life is music—— Fate the notes prolong!
Each isle a stanza, and the whole a song."

といふ句を引いて、『布哇の生活は歌である。この國で「肉」は黄金である。土着の女は日光に熱したジュウノオであり、男は青銅(ブロンズ)のアポロオである。かれらは歌ひ舞ひ、すべては花をちりばめ花を冠するのである。やかましい宣教師といふものの圏外に、白人は南國の風土に化せられて、いかに忙しくとも舞ひつ歌ひつ、耳のうしろにまた髪のなかに花を飾る』、と書いてゐる。私は、此『歌の國』に杖をとどめて今しきりに筆を進ませてゐるロンドン氏が、更にまた此島を材とした新作を文壇に貢献する日の一日も早からん事を祈るものである。(大正五年二月紐育にて)

(ジャック・ロンドンに就いて附記)

私が布哇に立寄つた時にその健康を誇つてゐた氏は、思ひがけなくも其年の暮ちかく、カリフォオニア洲で病死した。氏は米國作家のうち、歐洲各國に最も多くの愛讀者を有する人であつた。以前から獨逸では氏の作を英語教科書として用ゐた程で、殊に北歐の諸國では氏の小説は最も多く歡迎せられてゐた。最近には英米でも教科書として出版せられ、死後の名聲は更に高く、社會經濟問題に關するその論著も亦廣く世に行はれてゐる。

文藝通信

一　杜伯の日記

歳月の經つのは早いもの、ヤスナヤ・ポリヤナの老伯が逝いてから既うかれこれ六年になる。說に於ては私なぞ必ずしも全然かれに同意する事は出來ないと思ふが、何にもせよ近世最大の思想家の一人として、全世界の尊敬を得たのは、今もなほその斷簡零墨に伯の人生觀の片影をでも窺ひたいと思ふ人の多いので知られる。思ひがけないバルカンの問題から、遂に歐洲を戰塵の巷と化して了つた今度の大騷ぎを、杜伯は今果して地下で何と見てゐるだらう。

斷簡零墨といへば、つい近頃のこと、露西亞では杜伯の日記といふものが新に發見せられて、かの國の文壇の耳目を聳動してゐると聞いた。それが一部分だけ、前週はじめて米國に傳へられて英譯された。固より人に示す積りもなく、杜伯がこんな日記を記けてゐたと云ふ事さへ多くの人は知らなかつたので、殊に世人の注意を惹いたのである。これは杜伯の遺言によつて一切の著書遺文を保管してゐる、伯生前の親友チェルトコフ氏の手から發表せられたのであるから、出處は十分確かな物だと信

ぜられる。

このたび公にせられた日記の第一卷は一八九五年から一八九九年までの分で、以下數卷に分つて順次刊行されるさうだ。日記と云つても其日々の出來事を書いたのではなく、ただ感想の斷片を折に觸れて錄したものである。さすがに世界を動かしたる一世の一大思想家の語錄だけあつて、たとひ咳唾成珠といふ程の趣はなくとも、不用意の筆の跡にもおのづから其處にトルストイズムの特色が現はれてゐるから面白い。ただ近頃の英吉利文壇などによく流行る警句（アフォリズム）と云つたやうな寸鐵殺人の言葉でもなければ、鋭い皮肉で人の肺腑をゑぐるやうな類のものでもない。それよりは寧ろ深みのある、悠揚として迫らざる大思想家の面影をここに窺ふべきであらう。通讀の際、私は筆に任せて以下その數節を抄錄する事にした。

（一八九五年十一月九日の條に）、『すべてを理解するはすべて許す所以』、理性はおのづから人の心に潜める正義の愛を導き出すといふ事實が、此言葉によつて確かめられる。若し人を許すならば爾はまた人を愛する事をはじめるのだ。許すことは非難し憎惡する事を止めるの意だ。

（一八九六年一月二十三日の條に）、眞正の藝術品は傳染的のもので、藝術家が求め、あこがれる時にのみ始めて製作せられる。＊＊＊藝術の道を踏み外すものが二つある。それは猥褻と技巧とだ。この二者の間には極めて狹い一條の道があつて、そこに衝動あり目的ある時にのみ此一條の道は思出さ

れる。また此時にのみさきの二つの横道――そのうちでも技巧の方は一層惡いが――に入るの危險を免れ得るのだ。

心情(ハート)の要求しないものを、强ひて理知(マインド)の力で分析し試驗しようとしても、それは無理な話だ。

（一八九六年五月十七日の條に）、段々に發育する種子が、はじめ種子の時代から萠芽の時代へと經過して行くのを自分では無意識でゐるのと同じやうなことを、ぢりぢり歲を取つて行く人は經驗するものだ。自分ではそれは衰へて行くのだと思つてゐる。そして更に別の生涯といふ新境地に自分が發育しつゝある事には、全く氣附かない。

さういふ事を今私も感じはじめた。動物的生活が自己の全部であつて、精神生活は動物的生活の所産である、と人は思つてゐる。これはちやうど動いてゐる舟に乘つてゐる人が、自分は動かないで岸や堤が動くのだと思ふのも同然だ。

自己の思想を抱いて殆ど絕望的に寂寞孤獨を感ずる時、他人から誤解されるといふ事は、爾の生活に於ける最も痛ましい精神的苦惱の一つである。これが慰藉となるものは、人々若し爾を解せずとも神之を解し給ふといふ事を知るに在る。

（一八九六年七月十九日の條に）、美とは何ぞや、美とは吾々が愛するものである。＊＊＊何故に愛するか。美であるが故に愛する、といふのは空氣は快きが故に呼吸するといふのと同じだ。呼吸しな

ければならぬが故に吾々は空氣を快しと思ふのである。それと同じく、吾々は愛しなければならぬが故に美を見出すのである。何人でも精神的の美を見る事の出來ない人は、肉體と愛とに美を見出す事が出來るのだ。

（一八九六年七月十九日の條に）、夕暮、そこには美と幸福と祝福とが立てこめてゐる。しかし人間の世界はどうだ。貪婪、憤怒、羨望、殘忍、情慾、姦淫あるのみだ。人間が自然のやうになるのは何時の事であらう。自然にも爭はあるが、しかしそれは正直な單純な美しい爭だ。そして人間界のは——卑しくもまた忌はしきもの。

（一八九六年十月三十日の條に）、私は自分の信仰の宣言を終へた。けふは小西からの手紙を持つて來た或日本人がここへ來た。日本人は我が國の教會の基督教徒よりは、疑もなく基督教にもつと近い者である。私は日本人が非常に好きだ。

（一八九六年十月三十日の條に）、藝術品に於て主要なものは作家の精神だ。平凡の作品では、女性作家の物の方が好くもあり面白くもあるのはこれがためだ。女といふものは、何とかして自分の精神の祕奧を暴露し表明するものだ。——女は匿すといふことの出來ないものである。

（一八九七年一月五日の條に）、結晶物を如何に壓搾し破壞し溶解させても、機會さへあれば早速また舊の形に復するだらう。社會の組織もこれと同樣で、たとひどんな試驗にかけて見ても結局依然と

して同じものである。結晶物は化學的の内部的な變化を受けてここに始めてその形を變ずるに至るので、社會もこれと全く同じである。

（一八九六年十二月十七日の條に）、權威を認めること位、藝術の理解を混亂させるものはない。ホオマア、ダンテ、沙翁、ベエトホオヹン、バッハ、ラファエル、マイケル・アンゼロ等の作物が果して眞の藝術の中に入れられるべきものか又それは如何にしてかといふ事を、或明確な藝術觀を通して定めることをせずに、今日では藝術は、單に偉大だと認められた作家の或作品を通して定義されてゐるのである。批評する價値もない名家の作が隨分と多くもあれば、また偶然の事で有名になつたものも甚だ多い。ダンテや沙翁はそれだ。

權威を信ずることとは、それらの權威のやつた過誤を手本にして了ふのだ。

民衆樂（フオオク・ミュウジック）、音樂、また一般に藝術が墮落するのは、天分のある人たちが皆金持や貴族の慰み者になつて買取られるからだ。

（一八九七年一月二十四日の條に）、輿論は法律や軍隊よりも強い、そして輿論は婦人の掌中にあるものだ。――その證據には下の事實がある。婦人は家屋食物の一切を司り富を消費する。從つて男子の勞働を支配し、書籍や藝術品の相場までがそれで定められる。＊＊＊男子は婦人からの解放をこそ求めるべきで、婦人が男子から求めるべきものではないと言つたのは至言だ。

（一八九七年八月九日の條に）、審美と倫理とは一つの槓杆の兩端だ。一方が長くなり輕くなるに從つて他方は短くなり重くなる。人が道德心を失ふや否や、美的方面に應ずるやうになる。

（一八九七年十一月十七日の條に）、科學は宗教的基礎を失ふに至つて無意義の研究に轉じた。そして主として重要なるものを研究する事を止めた。その時からして實驗科學といふものが出來た。ベイコンが出た。

（一八九七年十一月二十八日の條に）、諸君が他人と話をしてゐる際、突然その人の顏附がやさしく成り、嬉しさうに成ることが時々ある。何か諸君にとつて非常に好い報知をでも傳へて呉れさうだわい、と思はせるやうな風で何か其人が話し出すその時は、――なに其人は自分の事を話すのだ。

（一八九八年一月十三日の條に）、團體といふものは、如何なる團體でも、何等人情的な、人格的な、道德心といふものを心から有つてゐない。世界に於けるあらゆる害惡はこれから生ずるのだ。

（一八九八年一月三日の條に）、人間を善人惡人、愚人賢人と分けるのは誰もよくする誤だ。人間といふ者は絶えず變化してゐて多くの可能性を具へてゐる。愚かな者が賢くなれば惡人が善人にも變る、またその反對もある。そこに人間の偉大なところもあれば、また人を判斷することの不可能な所以もここに在る。諸君が判斷を下してゐると、その人はもう變化して了つてゐる。『彼奴は好かぬ』と言つてゐると、其男はもう別な人間になつてゐる。（大正五年八月『時事新報』所載）

二　英獨の學風

一

このあひだ英國からギルバト・マレイ教授が紐育のコランビア大學に講演に來た。この老教授はいま盛名かくれなき英國學界の耆宿で、その專門の希臘文學では、獨逸の學者、たとへば先達伯林大學の總長になつたギラモヸッツ・メエレンドルフなぞよりは以上の人であらう。その希臘劇の英譯などを見ても、この老教授が單に一個の學究でない事が知られる。

紐育に來て老教授は先づ英獨學風の差に就いて語つた。それがちやうど私の平生考へてゐる事とぴつたり合つてゐるので、嬉しいとも面白いとも思つた。別に珍らしい說ではないが、私も同感だからここに紹介する。

『私どもは乾燥無味な學究ではなくて人間である』、と先づ老教授は言つた。さらに微笑を含んで白髯を撫しつつ、英國の學者と獨逸の學者とは全然その型を異にしてゐる事を述べた。然らばその相異の點は何處に在る。

最も簡單にこの相異を言ひ現はせば、獨逸の學者は黑人らしく、英國のは素人風だ。黑人風にも長所があれば素人風には亦大なる長所がある。

獨逸といふ國は元來が專門家の國である。銘々皆極めて狹い自分の專門の範圍に首を突込んで、他を顧ずにこつこつやつてゐるところは實に偉い。蚤の睾丸の研究に五年の歳月を費し、蚯蚓の何やらを調べるのに十年を惜しまぬ人たちの國だ。その調べてゐる事柄は、ぢつと傍から考へて見ると、そこに何の美もなければイルミネイションもない。ところが英國の學者にはもつと人間味がある。人生そのものに對する興味が深い、もつと常識的である。獨逸學者の深遠は見られない代りに、またその偏僻も無い。そこが素人風と黑人風との相異だ。血もなければ涙もないやうな腐儒は、だから英國には餘り居ないやうである。ちとこちらの花をも見やしやんせ、と言つて遣りたいやうな人は獨逸の學徒に多からう。

二

だから深遠にして細心精緻な研究の方面に於ては、獨逸は實に世界學界の覇を稱するのである。この點に於ては何から何まで行屆いた研究法が備はつてゐる。マレイ教授は自分の專攻の古典學に就いて、しきりにこの點を頌めて言つてゐる。獨逸は羅甸語彙及び希臘語彙の大規模のものを計畫し、希臘文法でも、キユウネル・ブラスとキユウネル・ゲルトの四卷の右に出づるものは、今のところ他に無いのである。パウリ・ウイソウワの通典（エンチクロペディ）は古典學の最大權威であり、ロシエルの辭典はいま神話辭書の最も偉大なるものであらう。殊に編纂ものの大著述に至つては何と言つても獨逸が偉い。そ

の他、専門學會の研究報告論文といふやうなものだけでも、量に於て獨逸は英國の十倍も十五倍を出してゐるのは、何人も熟知せる通りの事實である。

獨逸學風の長所はそこにあるとして、更にまた英國の學風もあながち淺薄の譏のもとに蔑視せらるべきものではなく、ここにもまた大に學ぶべきところがある事を知らねばならぬ。

マレイ教授の說は、——私の考もほぼ同じだが、——主として古代語學とか文學とかに就いて言つたものであるが、獨逸の學風は、古文學に對してどこまでも訓詁の學であるか、さもなくば非常に凝り固まつた煩瑣な哲學論のやうになつて了ふ。一つの作品に對しても語源語法を論じたり或は歷史的に研究し、また作者の閱歷との關係を究めたり、ぎごちない解剖的批評を試みたりする事は如何にも巧いが、それを一つの藝術品として生きた儘で鑑賞し翫味して行かうと云ふ態度が全く缺如してゐる。たとへば希臘文法では、何と言つても今では獨逸のキュウネル・ブラス・ゲルトのが最上のものであるが、さて希臘語の極めてデリケイトな點だとか、或は希臘語の『にほひ』、感じと云ふやうな事になると、これは英米の學者の著書を以て遙かに獨逸のものに勝れりとせねばならぬ。だから一つの事柄を確かめる段になると私は獨逸の著書を重んずるが、感じの問題になるとこれはどうしても獨逸人の書いたものでは物足らない。たとへば希臘語で詩を作らせて見ると、英國の大學生ですら獨逸第一流の希臘學者よりも遙かにすぐれたものを書くのがある。古代語で詩作をしようがしまいが、そ

んな事はどちらでもよいが、とにかく英國の學風は感じとか理解とかを主にし、獨逸は『知る事』それ自らが本意なのである。獨逸人は、だから希臘の韻律法を詳論はするが、自分で希臘の詩を作つたりする事は殆ど出來ない。知ると味はふとの差だともいふべきだらう。英國のは『科學(サイエンス)』といふよりは『藝(リベラル・アアツ)』に近く（固より科學的根據はあるにしても）、どこかから昔の支那で言つた『士』の學ぶべき『六藝』と云つたやうな趣がある。

三

同じく昔の典籍を學ぶにしても、それが單に考證とか訓詁とか云ふ事に終始せずして、直ちに其人の肺腑に入つて血となり肉となり、人物のインテグラル・パアトとなる所に英國學風の長所はある。『學者にしてまた紳士(ゼントルマン)たる者』を養成するのは、今も昔も英國高等教育の本意だ。英人の貴ぶ『學者』と云ふのは單に物識りではない、美を解しデリカシイズを感じ得る士人の謂ひだ。

英國の此『素人風』の學風は、獨逸に於ては殆ど見られぬ一種の人物を產み出してゐる。かの虞翁(グラドストン)や前の首相アスクヰス、又ながく駐米大使であつて日本にも來た憲法史の名家ブライス卿、その他、クロオマア卿にしてもモオレイ卿にしても、これら政界の傑物が等しく古典學者であつて、ホオマアを誦んじ、プレイトオを味はひ、ルウクリイシアスを誦する人たちである。獨逸でならば、これは所謂專門の學究が群書堆裡に頭を埋めてやる仕事である。英國のは、ベルンハアディの言つた意味でな

くてアアノルドの言つた意味のカルチュアが目的だ。人物養成本位だ。獨逸のは、研究と例のアルバイトとやらが身上である。

老教授は更に趣味ある一語を以てその説を結んだ。曰く『素人の精神は結局これ藝術家の精神である』と。

四

以上マレイ教授の説を紹介する積りで書き出したのが、よい氣になつて筆を滑らしてゐる間にいつか私の自分勝手の事を言つて了つたのは、まことに相濟まないが、この碩儒が言つた希臘羅馬の古典以外に、私なぞの學科から言つても、中世文學に於けるケア教授の如き學風の人は獨逸の學徒には極めて少い。沙翁研究に於てもダウデンやヲルタア・ロオリイ教授のやうな本を書く人は英國に限る。その他ゴッスとか、或は此人たちよりは遥かに後進ではあるが、オリヴア・エルトン教授の著書の如きは、英國に於ける文學研究の態度を代表したもので、獨逸學者の企及すべからざる『藝術家の精神』を失はないものである。極端な例を言へば、ペイタアの『文藝復興』一卷の著は、これと同じ題目を論じた獨逸學者が萬卷の書にまさるものがあるではないか。

序に英國の古典教育に就いては、在來もこの保守的學風に就いて屢異論があつたが、今度の戰爭で一段とやかましい議論がもちあがつて、學制改革でどさくさのある所は一寸日本に似てゐる。かのホ

ルデエン卿が上院で英國教育の根本改革を叫んでから、クルウ侯を國民教育改良委員として政府は任命したが、この騷ぎでつい此間も文部大臣が更迭した位である。要するに在來の古典本位の『紳士』教育を棄てて、近世科學本位の、また近代語學に重きを置く教育にしなければ、國力に於て將來獨逸と對抗する事が出來ない、と云ふ論が力を得てゐるのである。從來何事にも飽くまで傳統を重んじた英吉利が今度の戰爭あつて以來、急に徵兵制度を實施したり、教育制度に變更を加へようとしたり、少しどうかしてゐるわいと思つて、私なぞは興味を以て見てゐるのである。かういふ色々の變革の可否は、國家生活の上からは兎に角としても、個人生活の上から見れば疑問の餘地はなほ十分にあらうと思はれる。

新進國たる米國なぞを見ると、學風に於ても教育に於ても、すべてこの英佛の中間を行つてゐるやうである。殊に大學教育がさうだ。わが日本なぞも此點に於て大に考慮すべきものがあるだらうと私は思ふ。（大正五年十月『時事新報』所載）

三　エエチェエガァライを憶ふ

西班牙のエエチェエガアライが死んだ。歐洲の文壇は、近世の最も浪漫的なる一大戲曲家を失つたのである。

奇才縱橫のこの作家は、筆の人であつたと共に手の人であつた。思想家であると共に實行の世界にも活動し努力した人であつた。その晩年は稍振はなかつた感はあるにしても、かつて政界に入つては國務大臣となり、また科學者としても社會改良家としても、到るところに凡ならざる天禀の才を發揮した人であつた。農商務大臣かと思へば經濟學の著者であり、マドリッドの工藝學校に教鞭を執つた日もあれば、數學物理の學者として斯界に重きをなした事もあつた。かういふ多方面な閱歷は、現代の文人としては餘り他に例を見ない位であつた。

文藝にあらはれたる西班牙といふ國は、どこまでも浪漫的な國である。私に若し金錢（かね）と時間との餘裕があるならば、人の貴ぶ普魯西などへ行くよりは、今もなほ昔ながらに浪漫的な西班牙の人情風俗をこそ見たいと思ふ。歐洲戰亂の巷をよそにして幾世紀の榮華の夢の跡をたづね、衣帽の末にも毒々しい頽廢した南國の色を誇る此國の俗を見れば、遠い昔のセルヷンテスやロオペエ・デェ・ヹエガの作も偲ばれ、ヹラスケズやゴヤの藝術も味はれよう。軍國主義と『メトドロギイ』との榮える恐ろしい國なぞは、先づ後廻はしにして置きたいと思ふ。

北方の人の夢想だも及ばぬ濃厚な色彩を喜び、刺戟の強いあくどい、常軌を逸した趣味をのみよろこぶ西班牙の國風は、今もなほ鬪牛の技に若い女たちまでが騷ぎ立てると云ふのでも知られよう。自然主義や問題文藝の固苦しい作品が時を得顏に榮えた歐洲近時の文壇に、西班牙のみは獨り美しい浪

漫的な藝術を生んだのである。北歐のイプセンが社會劇問題劇思想劇を書いて天下を風靡してゐた間に、西班牙のエエチェエガアライは美しい浪漫的な戯曲を作つてゐた。これといふのも西班牙には、北歐諸國に見るやうな精神生活の苦痛煩悶が尠く、不安動搖が烈しくなかつたからである。イプセンやショオやブリュウの作を生んだやうな社會問題宗教問題婦人問題が、さまで痛烈に人の心をかき亂さなかつたからである。のんびりした理想主義（アイディアリズム）や、因果應報と云つたやうな所謂『古い』思想が、矢張り此國の近代文學の基調をなしてゐるのもその結果であらう。せち辛い『近代（モダアニティ）』の風潮をよそにして、遠く南歐のかたほとりに、いつまでも浪漫的な夢を樂しむ西班牙人こそ、思へば幸福な人たちである。

戯曲家としてのエエチェエガアライは何といつても矢張り、昔のカルデロンやロオペエ・デエ・ヱエガの流れを傳へた人であつた。評家が之をギクトル・ユゴオに比するのも無理はないと思ふ。今から約三十五年ほど前に出た傑作『ガレオト』は世界戯曲（ワアルド・ドラマ）と銘打つて、表題からしてダンテの大作にある戀のなかだちの名を取つてゐる。夫婦のなかへ水をさす讒言がもとをなして出來た悲劇には、此表題に既に無限の意味が含まれてゐる。また『ドオン・ホワアアンの子』はイプセンの『幽靈』と同じく病的遺傳を材料にしたものではあるが、後者のやうな沈痛暗澹の趣はなくて、どこかに明るい所がある。殊に昔から名高い西班牙の蕩兒の傳說を材としただけに、その浪漫的な所がイプセンの作とは

全然異なつてゐるから面白い。

英譯になつてゐるエエチェエガアライの作中で、併しながら私の一番面白いと思つて讀んだのは『マリヤナ』である。戀愛といふものを唯一の契機として出來てゐる戲曲では、沙翁の『ロオミオとジュリエット』を最大なりとすれば、近代に於てはダンヌンチオの『パオロとフランチェスカ』と、此エエチェエガアライの『マリアナ』を雙璧とすべきだらうと私は思ふ。何だかあまり血なまぐさい場面が目だつて、メロドラマ的な趣のあるのは缺點といへば缺點であらうが、面白く讀ませる上から言へば、イブセンのやうな固苦しい物ばかりを珍重するでもあるまいと思ふ。

名譽とか意氣とか云ふ事を重んずるのは昔からの浪漫的な思想で、殊にこれは西班牙趣味の中樞である。昔のカルデロンの作にはこれがよく出てゐる。英國でもボオモント・フレッチャアに描かれ、佛蘭西のコルネイユの作には殊に屢これが中心思想になつてゐる。實利物質主義萬能の近代に、こんな思想を劇の骨子とするのはエエチェエガアライのエエチェエガアライたる所以であつた。右に述べた『ガレオト』にも『マリアナ』にも此名譽といふ思想が重きをなしてゐるが、特に際だつてそれが出てゐるのは『聖か狂か』の一篇である。これは主人公がどこか頓機翁に似てゐると云ふので名高い作であるが、私は寧ろイブセンの『人民の敵』に仕組が似てゐると思ふ。主人公は不正をあばいて之を天下に發表しようとする。これが發表されれば周圍の人たちの破滅になるのである。そこで友人が

取計らつて彼を狂人といふことにして了つた。さういふところがイブセンほどに峻烈でなく、また全く趣を異にしてゐる所以である。

國運甚だ振はざる西班牙にとつて、戯曲家としてのエチェエガアライを有してゐた事は實に國としての誇であつた。しかし彼の死は單に西班牙のためにのみ悲しむべきではない。文學藝術の發達が今や前古未曾有の『砲火の洗禮』によつて阻害されつつあるの時、この一大天才を文壇から失つたことは實に世界文明の大なる損失である。（大正五年九月）

ナイアガラを見物せざる記

一

有名だの著名だのといふ事に寸毫の價値を認めず、名所名物はもとより、名士名家などといふものにも碌な人間のない事を腹の底から確信してゐる僕は、天下の名所ナイアガラの瀧を見るに至つて全く愛想をつかした。

この數行を讀んだわが故國の友は、杖と義足とに縋つて いま異郷を漂浪せる黄色ん坊の小男が一人、懸崖を流れ落ちる千丈の瀑布をまへにして、ふふん、とせせら笑つてゐる妙な顔つきを、はやくも眼前に髣髴し得給ふや如何に。

工場の技師や測量師の使ふものさしと云ふ道具で測つて見ると、ナイアガラは成るほど、田舍者おどしの案内記や名所圖繪にある通り、數字の上では何百尺何千尺の大瀑布であらうが、雄大崇高の感じから言へば、斷じて日光華嚴の瀧の足もとにだも寄れるものではない。

幽趣を解し風韻を貴び得るまでに發達したる、東洋人の自然詩觀は西人の遠く及ばざるところであ

るが、その日本人のあたまには、瀧と言へば必ず先づ背景として幽邃なる山嶽の美を聯想する。ところが、ナイアガラには肝腎の此背景が一つもない。唯もう茫々漠々たる大平原のまんなかに、大きな水の流が二股になつて落ちてゐるといふ頗る藝のないものだ。天を摩する緑樹欝蒼の山かげ、靑嵐衣袂を染むるところに垂れたる百尺の素絹、その鞳鞺の音は谷に響き山に轟いてこそ、瀧の美しさも貴さもある。一分間に幾萬尺立方の水を落したとて、僕が水力電氣の職人でない以上、一向おもしろくも可笑しくもない。苔むしたる岩のはざまをちよろちよろと流れ落ちる『瀧の白糸』こそ、ここへ來て見てひとしほ懐かしいものだと思つた。

何事にも先づ大小によつて價値を論じ、でりけいとな趣味よりは大味なものばかりを貴ばうとする、感性の粗硬な俗物には、一種の見せ物としてナイアガラも結構であらう。世界の四方から例の名所見物といふ事をしにくる田舎者が、黒ん坊、白ん坊はもとよりのこと、黄色ん坊までが千里を遠しとせずしてこんな所へ集まつてくるのは、いかにも尤も千萬な次第である。

瀧の生命は涼味にある。大きくても小さくてもそれは問題にならぬ。緑のこかげを見えがくれに落ちてはたぎつ水の音の、遠くかすかにこだまに響くを聞いただけで、早くも所謂涼風腋下に生ずるの感あつてこそ瀧は有難いのだ。一掬の涼味だになきナイアガラは、此點に於て遙かに京の清水の音羽の瀧に劣れるものである。

また幽邃に作ふ神祕の趣味も瀧の生命の一半だ。殊に日本の瀧には宗教味の色彩(いろどり)があるから嬉しい。名からして華嚴、般若のゆかしきは言はずもがな、那智の文覺上人を引合に出さずとも、善男善女が祈願をこめての修行は南禪寺の皷が瀧にでも見られるではないか。ナイアガラに至つては、水力電氣の車がまはつてゐて、そこを兵隊が立番してゐるといふ始末。

京見物にくる田舍者がよく清水の音羽の瀧の小なるを笑ふが、小さくてもあれにはどこか趣がある、風情もないではない。ナイアガラを雲突く大男に譬ふれば、音羽の瀧は可愛らしいお姫さまのやうだ。燈をささげ香をたいて、合掌しながらあの美しい水をいただいてゐる若い女たちを見ると、何だかゾラが書いた佛蘭西のルウルドのやうな有難味も偲ばれる、

西人の自然美感は甚だ幼稚なもので、異常の天才を除いて一般に言へば、まだなかなか東洋人ほどの delicacy の域には達してゐない。何だか理窟めいて可笑しいが、これは東西文藝の著しい相異の點だと思ふ。希臘の昔から歐洲の文藝は人間に卽する興味を以て中心としたもので、此方面には著しい發達をした。その代り自然美に對しては到底支那や日本の文藝に現はれたやうな幽遠深邃の趣を求めがたい。つまり希臘以來、西洋の文藝には人間が主で自然は從であつた。東洋の文藝には常に自然が主で、人間は從たるの位置にあつた。西人が自然の美に目ざめて眞に天地山川そのものを解するに至つたのは、十八世紀末浪漫主義(ロマンテイシズム)勃興以後僅かに一世紀あまりの事ではないか。西人はゲインズボロ

コンスタブル出ではじめて山水畫の美を解し、ワアヅワスなど湖畔詩人の『抒情詩集（リリカル・バラッヅ）』出でてはじめて親しく自然の靈興に觸れたのである。わが萬葉詩人が二千年の昔から山川草木花鳥風月の美を歌つて、よく幾百篇の抒情詩の珠玉を後代に傳へたのとは固より同日の談ではない。

自然美を感得すること深く、これを愛すること強き日本人は、人爲を加へざる自然の儘を樂しまうとする、西人は人工を加へて後はじめて自然を享樂し得るのである。これは東西庭園の造り方を比較しても明らかだ。日本のは純然たる自然風景の模倣であり、西洋の庭園は極力自然を破壞して幾何學的に噴水や樹木を排列し、人工の美を喜ばうとするもので、自然本位と人間本位との差だ（自然を模するといふ所謂英國式庭園（イングリッシュガアドン）だけは稍趣を異にした除外例である）。

僕がここへ着いた晩は、十三夜の月がむかうの山の端（は）──と言ひたいが山はないので、瀧の向うの低い森の上に出てゐた。何萬燭光かの電燈をちやうど探照燈（サアチライト）のやうに、大瀑布の一方の崖の上と他方の崖の下と、兩方から對角線の方向に斜に瀧の面を照らすやうに仕掛けた具合は、僕の大嫌ひな活動寫眞その儘の光景である。一風呂あびてからほてるのぽおちへ出て凉みながら、月かげを宿した水の流を見ようと思つた僕は、先づこの米國式淺草式でがつかりさせられた。そして電燈の光にけおされて茫乎（ぼんやり）してゐるお月さまを氣の毒だとも思つた。

月といへば、紐育の街をあるきながら僕はいくたびか、本當に月を見たいと思つても果さなかつ

た。人力の限りを盡くして拵へ上げたあの大都の、四角な摩天樓(スカイスクレイパア)の間から見る月と、嵯峨野の奥にすだく蟲の音を聞いて軒端(のきば)にながめる月とは、似ても似つかぬ別ものであるとは知りながらも、今更のやうに呆れ果てた。

よそごとではない、日本も今にかうなるのだ。僕が大阪の中學の生徒であつた頃に屢遠足に出かけて行つたあの箕面の瀧を、いつか家族を連れて二十年ぶりに行つて見たら、人間力と黄金力とが猛烈に暴威を振つてゐるのに恐れ入つて歸つて來た。

瀧といへば僕は先づ華嚴の瀧をおもふ。オンタリオやイイリのやうな平原の湖水とちがつて、山のみどりに深く包まれた幽邃な中禪寺湖の水が、千尺の懸崖を一息に落ちるあの水の姿には、雄大もあれば莊嚴もある。山々をゆり轟かして落ちたぎつ水の音には神祕の靈感がこもつてゐる。僕があすこへ行つたのは旣う(も)十二三年ほど昔の、忘れもしない七月一日だ。殊に其頃は、藤村操の死といふ『神話(ミス)』で此瀧が殊に名高かつた頃である。僕はあの話を、明治の或時期に於て若い人たちの思想を支配してゐた一種の浪漫主義(ロマンテイシズム)が、日光山巓の自然美と相結んで産み出した近頃の唯一の『神話(ミス)』だと今も思つてゐる。

その時の一行はたしか五人であつた。犢牛の弟で今は故人になつた齋藤（野の人）君もゐた。いつも浪漫的な夢の國に住んでゐるやうな齋藤君は、何だかにやにや笑つてゐる人であつた。詩人にして

哲人のおもかげのある、今は代議士のO君も其時ゐた。僕はあの人と歌が濱の湖上に舟を泛べて、バイロンの集を誦した事を思出す。そばには白馬銀鞍の貴公子を想はせるやうなA君もゐた。關羽のやうな美髯を振りたてて一喝すれば山賊も逃げ出しさうなS君が、僕を見あげてゐる顔つきが今も目の前にちらつく、瀧壺まで降りて行つた一行は、仰いで華厳の壯麗を見てしばらく言葉もなかつた。今まで物凄い暗い色をしてゐた空は、此時俄に沛然たる雨を下して、天地も碎けよと雷鳴が頭の上で轟く。これには元氣のいい一行も膽をつぶして、谷底からづぶ濡れになつて山上の茶店へ驅け込んだ事を、いまだに記憶してゐる。

ああ其頃――おもへば其頃の僕はまだ浪漫的な美しい戀を夢みてゐた青年であつた。いま天外萬里の異郷に、瀧を見れば故國の華厳をおもひ、華厳をおもへば古き友を懐ふ。そして十年まへのおのれを顧み……ゐるとき

これではナイアガラが妙なところへ落ちて行きさうだ。更に逆戻らう。

二

さういふ自分もナイアガラ見物に來てゐるではないか、とよくこんな事を人は言ひたがるものだから、ここに一言ことわつて置くが、僕は斷じて見物などには來やしないよ。名所などと名のつく所

は、三尺てまへまで行つたつて横を向いてゐる。僕は故あつて此夏休みの二月(ふたつき)を、ナイアガラの正面の加奈陀の側にあるほてるで暮してゐる。いやでも應でも、朝に夕にこの細からぬ瀧と睨みくらをせざるを得ないではないか。桑港に着いた時、紐育へ行くなら途中ナイアガラを見物して行くのが順だと勸めた男があつたから、一喝に附した。

『故あつて』といふのは他(ほか)でもない、この瀧に近いイイリの湖畔に別荘を有つてゐるF夫人の著作を助けるために、夏おひまならば來て貰ひたいと豫(かね)て頼まれてゐたからだ。

ほてるの前の川一つ隔てて向うは米國、こちらは英領加奈陀。その間に大きい鐵橋が一つある。橋の上からこはごは下を見ると、神經衰弱にあらずとも目がぐらぐらしさうな矢鱈に高い物である。ところが、此橋ぐらゐ渡るのに手數のかかる厄介な橋は、天下他にあまり類はなからうと思ふ。

橋のたもとには兩岸に役所がある。稅關や移民官の取調べの外に、ここで橋錢(トル)を十仙(セント)づつ貪るのである。此橋は官有でなくて私設鐵道會社が營利的にやつてゐるといふ。日本でならば先づよほど片田舍にでもありさうな話だ。最初、停車場からここへ來ると金ぼたんの役人がのこのこ僕の自動車のそばへ來て旅券をしらべる。職業は何かと訊(き)くから、そこに書いてあるぢやないかと言ふ。金錢(かね)はいくら持つてゐるかと聞くから、懷(ふところ)には二千弗あると吹いてやつた。まだいろんな事を訊いて、やつとAll right と來た。今度はまた外の男がすうとけいすを調べようとするから、おい待つて呉れたま

へ、ここで檢査をされてはあとの荷造りに困るから宿の方で調べて貰はう、と今度は頗る丁寧に、ちよと哀願の氣味で言ふと、宜しいと承知した。更にまた二十五仙(セント)出せといふ、これは自動車の橋錢(トル)だ。それも濟んで漸く無難でほてるに着く。三個の荷物はほてるのぽおたあがどこへか片附けて、稅關吏の來るまで開ける譯に行かないのだ。待てど暮らせど役人なる者は遣つて來ない。いめいめしいから給仕(ボオイ)を呼びつけて訊くと、明朝でなければ檢査は濟みませんと言ふ。仕方がないからその晩は汗じんだ襯衣(しやつ)も代へずに食堂へ出た。

その翌々日かに今度は電車に乘つて亞米利加側の町へ行くと、前のとはまた別人の見知らない老人の役人が車內へ遣入つて來て一々調べる。異人種の僕のところ來てまた旅劵をと言ひをる。旅劵の調べは既う前日に濟んだから宿に置いて來たと答へる。それなら一寸こちらの上役の處まで來いと言ふ。そんな必要はない筈だと僕が頑張る。いや來いと言ふ、行かぬと頑張る。實際ここで電車を降りて了へば、それから二三丁あるかなければならぬ。そこで "I don't like to step off the car; I'm a citizen." と、まるで僕は不具者である事の大なる特權を有するかの如くに、頑として動かずにゐる。すると、むかうから此樣子を見てゐた役人が、其人は可いんだ、わかつてゐると言ふ。それで事は濟んだ。

から初から二度も苦(にが)い經驗をした僕は、成るべくこの面倒な橋は渡らぬ事にきめてゐる。石川丈山

の蟬の小川ではないが、亞米利加側の町へは一週間に一度も行かない。それでも郵便局なんかに用があつたり、紐育の新聞を買ひに行つたり、己むを得ぬ時は出掛けて行く。役人も此頃は、この界隈に唯一の日本人として既う僕の顏を覺えてゐるらしい、面倒な事は言はない。こつちから先づ "How do you do?" とやつてやると、笑つて其儘に濟む。こなひだも新聞紙に包んだ罎を持つて知らぬ顏をして僕が行き過ぎようとすると、それは何かと咎める。わきに銃劍をつけた兵隊さんが番をしてゐる、これはうまい葡萄酒だよと答へる。爆裂彈（ボムシエル）では無いよと附け加へる。この頃は戰爭で非常に警戒が嚴重なのださうだ。バファロから僕の處へ筆記にくるたいぴすとの亞米利加人でさへ、半時間ばかりも取調べにかかつたと言つてこぼしてゐた。

河一つ隔てて米國と英領とであるが、何だか兩方の氣分が異（ちが）つてゐて面白い。ほてるの屋上高く飜るのは、何時見ても氣持の好い英國旗（ユニオン・ジヤック）である。階下のほおるには先帝エドワアド七世陛下や、今のジヨオヂ五世陛下の肖像が掛かつてゐるのも目新しい。ほてるに隣して女王（クヰイン）ヸクトオリア公園（パアク）がある。

名からして氣に入つたこの美しい公園は、朝な夕なに僕が唯一の散歩の場所である。西洋の芝生（ロオン）は如何（どう）してかう綺麗なだらう。青い毛氈を敷きつめたと言へば少し月並だが、全くその文字通りである。奈良の嫩草山（わかくさ）の春を美しと飽かずながめた事はあつたが、日本でかういふ水々しい、そして柔か

い感じのする青の色を餘り見た事はないやうに思ふ。その青々とした中に女の白い着物や赤い帽子のちらつくのは、色の配合が如何にも夏らしくて好い。紐育あたりのもさうだが、ここの公園にも常盤木が少いために、すべての綠の色が淺くて晴やかである。新綠の頃の美しさが思ひ遣られてゆかしい。しなやかな枝を地上に垂れた大樹のかげに腰を卸して、讀書に疲れた目を休ませてゐると、名も知らぬ小鳥や栗鼠のとんでゐるのに、いつとは知らず心を奪はれる。蟬の聲も久し振で聞いた。

この公園を行き盡した果ての所に一軒料理屋がある。自然石をそのまま積み上げた雅味のある建物で、二階の食堂で飯を食つてゐると、瀧のしぶきが凄じく吹きつけるのも面白い。階下は曹達水やアイスクリイムを賣るところで、土曜や日曜には辨當をさげて家族連れで出てくるぴくにつくの仲間が、この邊に大勢集まつて皆がさんどゐつちを頰張つてゐる。青いぺんき塗の食卓づきのロハ臺といふものも、私ははじめてここで見た。

三

黃金慾と名譽心との化合物のやうな俗物の俗腸のなかにも、ぢつと辛抱して交際つて見てゐると、どこか一つ位は人間らしい取得の出てくるものだ。それと同じやうにナイアガラもから每日、五十日六十日と面を突き合はせて睨みくらをしてゐると、なかなか愛すべきものもあれば親しむべきものも

ある。大に僕を感動せしめたものの一つは馬蹄瀧(ホオス・シユウ・フオオル)である。奔湍激流一たび千丈の巖に臨んで落下するや、碧潭忽ち雲を起し霧をなして高く天に沖す、と言ふと何だか昔の小學生の作文のやうだが、全くその通りなのだから仕方がない。飛沫濛々たる雲霧をなして殆ど大河の全面を蔽ふと、これに午後の日ざかりの太陽が直射する。七つの色もあざやかな虹が河の一方から他の方へと橋渡しになるのを見たとき、斷じて褒めない積りで齒を喰ひしばつてゐた僕も、思はず知らず『ああ美しい』と口に出た。嘗てラスキンの『近代畫家論』を讀んで、水蒸氣の美を論じ、iridescence（虹彩）の壯觀を說いた一節にひどく感服した事があつたが、あの大なる自然美の批評家をしてこの光景を描かせたならば……と、如何な負惜しみの僕も少々怪しくなつた。

この雲霧の下をくぐつて、名もゆかしい『霧の乙女(メイド・オブ・ザ・ミスト)』といふ小蒸氣が、見物客を載せてしづしづと、如何にも處女の臆するが如く恥ぢらふが如くに瀧の下まで近づいて行く。偉大なる自然力の前に、さかしらなる人間力の如何に憫むべく小なるかを象徴(シンボライズ)するもののやうに見えて、これにもなかなかすてがたい趣がある。

紐育で同じ宿にゐたM君が日本へ歸る途中、此地へも寄るといふので、前月ここへ來る時もシラキユウスまで同行して、そこで別れた。氣の利かない無器用な無性者の、おまけに一本足の僕のために、出發の時はM君が荷造りまでしてくれた。そのM君が、僕がここへ來てから十日目位に、向ひの

亞米利加側の町の或宿へ着いたと言つて、僕の部屋に電話をかけて來た。日本語で大きな聲を出して電話で話をしてゐる僕の聲を聞いて、ほてるの女中が笑つてゐやがる。どうだ、日本語といふものをはじめて聞いたかいと言つてやる。あした日本人の友人がここへ訪ねて來るのだ、とさも嬉しさうに僕は餘計な事をまで吹聽する。

かねて、M君が來たらば夕涼みには一緒に湖水のふちをドライヴしようと思つたゐたので、翌日ほてるで共に食事をしながら早速その事を話す。ここには僕の自動車――實はF夫人のをいつも借りてゐるので――があるから、それに乘せてあげようと言ふと、なあに昨日停車場に着くが早速、見物自動車の切符を買はされましたとM君が言ふ。六弗とか七弗とかを奮發すべく餘儀なくされたのださうだ。それがまた大きい五人乘りで、一人ぼつちも可笑しいから僕にも一緒に來いとM君が誘ふ。折角の厚意だから有難うと言つて承知したが最後、翌日はみんごと赤毛布のナイアガラ見物と出かけて、僕も苦笑しながらその名所なるものを一周するの光榮を有した。

運轉手(ショオファア)は先づ僕等二人を瀧の下流七八丁ばかりの峽谷(ゴオヂ)へと引張つて行く。此邊一帶には、幾十軒とある貝細工だの瀧の寫眞だの土産物だのを賣る店が、ちやうど二見とか日光とかいふ所でと同じやうに、見物といふ事をする田舍者を呼ぶのである。峽谷(ゴオヂ)の入口にもそれが一軒あつて、店を奧へ突き拔けると階段がある。それを上つて觀覽切符を賣る帳場のそばから下を見ると、約四五十間もあらうと

云ふ、まるで地獄の底へでも降りて行くやうなケイブル・カアの軌道が一直線についてゐる。それを見ただけでうんざりした僕は『もう、よさうや』と言つてる間に、氣早やなM君はちやんと一人前一弗といふ切符を二枚買つてゐる、そしてそんな事を言はないでまあ行きませうと言ふ。そこで僕も、のそのそしりから隨いて行つて床几のやうな物に二人が腰を卸した。ごろごろと車が運轉し　下の方に向つて動き出す。何だか薄氣味のわるい道を遠く奈落の底までも降りて行くやうで、尻の下がこそばゆい。いよいよ降り盡くすと、そこの出口がちやうど保津川の急流のやうな所で、瀧の水がこの峽谷で巖にせかれて激してゐるのである。長さ三尺ばかりの赤硝子と青硝子とを二枚ならべてある。これを透かして奔流を見ると全く活動寫眞の通りだ。俗惡趣味はここに至つて遺憾なくその極致を盡くしてゐる。そばに老爺が一人ゐて記念にここで寫眞を寫せと言ふ。相手にせずに横を向いてゐてやると、今度は一枚寫眞を持つてきてこれを見よと言ふ。何かと見れば、日本の何とかいふ中將だか大將だかの顏がまんなかに在つて、同じ日本人が二十人ばかりぞろりと列んでゐる。そして老爺の言ひ草が好い、『私は日本人が好きです』と來た。癪に障つたから『お前がそんな物を見せたり餘計な事を言つたりしなければ、一枚ぐらゐは寫してやるが』と言つて、さつさと引上げた。

　待たせてある自動車に乘ると、今度は Table Rock と稱する處へ引張つて行く。一度もう峽谷で懲り懲りした僕は、M君に『今度は君だけ行つて見て來たまへ』と言つて、そこの床几でぽかんと休

んでゐる。二三十分してから、そこの番人が僕を呼ぶから行つて見ると、頭のさきから足の爪先まで眞黑の雨合羽で包んだ、づぶ濡れの、今海底から引上げたばかりの潜水夫のやうなM君が立つてゐる。その姿は宛として一個の怪物である。わきにゐる大勢の『田舍者』の白人も、矮小なる日本人のこの異樣なるいでたちを見て皆くすくす笑つてゐる。僕はちよと尻目でM君を見て、『そりや何だ』と言つたきり忽ち横を向いた。『あなたに見せようと思つて』とM君いささか不平である。そこで由來を聞くと、この裝束をして隧道を降りて行つて瀧壺に近い穴から覗くのださうだ。瀧のしぶきでこの通りびしよ濡れになるといふ。僕も感心した。

　また自動車に乘つて次はどこ、次はどこと色んな處を五六ヶ處も引廻はされた。M君が車をおりて見物に行つてゐる間、僕はいつも車上で主人の置き忘れた遺失品のやうな顏をして、悠々たる行雲流水をながめて待つてゐる。いそいそと車に歸つて來るM君が其度ごとに、見て來た話を面白く聞かせて呉れる。ふんふんと言つて聞く。

　次の日の夕かた、今度は所謂『僕の自動車』に乘つてM君と一緒に出掛ける。

　いつも來るF夫人の家の運轉手（ショオファ）に、けふは友人と一緒だから、一時間あまり景色の好（よ）ささうな涼しい處をドライヴして呉れといふと、例によつてにこにこして首肯（うなづ）く。

　僕はこの運轉手（ショオファ）が無闇に氣に入つた。おほかた加奈陀人か英吉利人だらうが、いつも主人のお仕着

せのきちんとした運轉手服を着て、愛想もなければ追從もない無口な大男、こちらから何か言へば溫顏に笑を湛へて簡潔に返事をするだけだ。こなひだも夫人の山莊から僕が歸りがけに書物を二三十冊ほてるへ持つて歸るので、さきへ車の中に入れさせて置いた。いつも僕一人乘るのだから、本は汚れないやうに座席の上に置いてあつた。ところがけふは夫人も町まで行くと言ふので途中まで同じ車に乘られる。乘るとき見ると、書物が一杯置いてあるので坐るところがない。そんな所へ置けば坐る所が無いぢやないかと言つて彼は叱られてゐる。わるい顏もせずに大きな身體(からだ)をまた車の中へ入れて、丁寧に本を一冊づつ下の方へ列べた。一體日本人にはかう言つた型(タイプ)の人間が甚だ少い。車夫馬丁の徒に至るまで猪口才子風の、こまつちやくれた、利(き)いた風な、所謂『サイシ』風の、顏を見ただけでも嘔吐を催すやうな奴が甚だ多い。倫敦や紐育の巡査なぞによくゐる、おそろしく大きくて、恐(こは)いやうな懷かしいやうな、どこか鈍重な所のある型は殊にアングロ・サクソン人種に多いと思ふ。かかるconnection に引合に出しては、先師に對してまことに禮を失して相濟まぬ次第であるが、昔僕に英語を教へて下すつたL先生が、あの四斗樽みたやうな大きなお腹(なか)を前に突き出して、のそのそと教壇へあがつて、布袋さまのやうな可愛い、そして何だか恐ろしいやうな下膨(したぶく)れの顏をして文學の話をされると、僕は言ふに言はれぬ懷かしさを感じて、筆記する事も忘れて先生の顏に見とれてゐたものだ。

またもや話が脱線した。

ちよと用事があつたので僕がF夫人の山莊に立寄る間、今度はM君が『主人の遺失品』の如くに車上で待つてゐて呉れた。幾萬坪あるか知れない綠樹青草に蔽はれた小山を庭にして、その中に古い英吉利風の石造の家が、ゑらんだから木の間がくれにナイアガラの奔流を見渡し得る位置に建てられてゐる。いつも私が許して宗教と音樂と繪畫との部屋だといふ一室で、十分間ほど用談をする。日本の佛像の据ゑてある傍らに、みごとな『フレミッシュ・タペストリ』と、グヴィイドオ・レニイの眞筆『大天使』の一幅が懸つてゐて、よく佛蘭西語を話す家庭教師の婦人が、四つばかりになる令息と時々ぴあのを弾いて歌つてゐる部屋である。

ここを出て今度はナイアガラ河畔を十哩ばかりドライヴした。その邊の牧場にゐた四五匹の牛が、水際の柳のかげに水を飲まうとして、自動車の響に驚かされて駈け出した。車は道はたにのりすてて男女幾人かが草原で辨當をひろげてゐるのも、のどかであつた。夕ばえの茜の色を水にうつした湖上のながめ、そこを吹き渡る夕風の涼しさも、日本へ歸つたらこれもまた思出の種にもならうか、とM君と語つた。

M君はその翌日かに、加奈陀を經て日本へ歸るべく出立した。僕はまだ『主人の遺失品』の如くにほてるにぼんやり殘つてゐる。（大正五年十月『中央公論』所載）

無言劇の復興

一

　このあたり大西洋岸の北米では、いつも四季のうつりかはりの急激なのに驚かされる。雪が解けてまだ間もないのに、早くも青葉のかげに晩春初夏の色を見るので、彌生の花どきは故國の春のやうに長くはない。殊に夏から秋へのかはり目は、それこそまた一足飛びの慌ただしさで、もみぢの美しさを賞づる暇とてもない位である。きのふまで茂つてゐたと思ふ梢に、今朝は早くも一葉をとどめぬ果敢なさ。昔から羈旅の歌などによく出てゐるあの淋しい心もち、これを今の言葉でいへば郷愁（ノスタルヂイ）とでもいふのであらうか、遙かに天外を望んでは獨り涙ぐまれるやうな痛ましさ悲しさが、強くも遊子の胸に迫るのはかういふ折であらう。人のよく使ふホオムシックネスとか云ふ俗な言葉で、この心持は言ひ現はしたくないと思ふ。

　色も香もないやうな古書堆裡に沒頭して、こちたき古文の寫本の誤に悩まされながらも、ふと研究室の窓の外にすがれた庭の草木を眺めてゐると、しばらく遠ざかつてゐた花やかな藝術とか歡樂とか

いふ事も、さすがに思出されてなつかしい。英吉利の大詩人は、文藝復興期の學徒が『生きる』よりも『知る』を貴しとしたのを讃嘆したが、今のやうな時代に生れたばかりか、殊にまた私のやうな凡骨では、さてさうばかりも行かないのは如何したものだらう。

こんな事を思つてゐる矢先、ちやうど十一月のなかば過ぎ、據ないところから講演を依頼されたのを好い機會に二三日の暇を拵へて紐育へ出かけた。いつ見ても花やかなのは四十幾丁目あたりのブロオドヱイの夜の町、少し東へ折れた稍靜かなところに、名ばかりは東邦の帝都を思はせるトオキヤウと云ふかいばれえがある。晩餐のあとに『美人のほくろ（ビユウテイ・スポット）』のかつくてる、盃のふちに櫻の實の赤々と色も鮮やかなのを添へたるを酌みかはしながら、異郷の友と四方山の話に時を過すのも、萬里漂零の孤客がここにしばしは旅愁を忘れんがためである。

チヤアチル、レクタアなどの旗亭は言ふまでもなく、日本人にはよく縁のあるホテル・アスタア、その他旅館や寄席芝居などの多く軒をならべてゐるブロオドヱイは四十四五丁目邊の此さかり場。大阪の道頓堀、東京の木挽町、京の四條を一つにしたやうな賑はひは、いま豪華を誇れる世界の中心地である。

紐育に出た序にこの邊で一つ芝居を見て行かうと思つてさて考へて見ると、どうしたものか此頃の季節に碌な物がない。新聞の劇案内で見ると、ブウス座で演つてゐるショオの『結婚（ゲテイング・マリッド）』があるが、

今更あの皮肉な離婚論を舞臺の上からまで拜聽させられるでもあるまいと思つて氣が進まぬ。も一つサッカレイの『ペンデニス』が好評を博してゐるが、小説を作りかへた芝居は、とかく原作の眞意を沒して了つて面白くない。といつて他は多くはめろどらま式か際物か、さもなくば米國一流の下品な喜劇の俗な物ばかりで、這入つて見る氣にもならない。佛蘭西から來てゐるサラ・ベルナアルが、紐育ではエムパイア座で演(や)る筈なのがまだ始まらない。或點に於ては眞に英雄のおもかげのある此老女優が、隻脚を切斷してから果してどれだけの藝をするか、同じ頃に一本足になつた私はそれを見たいと思つたが駄目だ。そこで、どの芝居を見ようかと思案の結果、一つ思ひ附いたのは久しく噂だけを耳にしてゐた無言劇(パントマイム)の『蕩兒ピエロオ』(もとの巴里では "L'Enfant Prodigue," 今度のキンスロプ・エイムズの演出では "Pierrot the Prodigal" となつてゐる)だ。これが小劇場(リットル・シアタア)に演ぜられて、いま好劇家の間に評判ものである。

小劇場(リットル・シアタア)と云へば、倫敦の同じ名の座もその通りだが、小ぢんまりした極めて上品な小屋である。いつも凝つた物か、少し澁いやうな物ばかりを出すところで、矢鱈に大入を占めて客足を引かうとばかりする俗氣がない。座の位置からして既にブロオドヱイの表通の騷がしさを避けた四十四丁目のホテル・アスタアの横町、あまり電燈の光の明るくない所に小さく出來た、極めて清楚な建物である。觀客は無論男も女も、大もかたは夜の正裝(ドレス)をして行く。幕間に煙草や珈琲を客に饗する階下の室へ行つ

て見ても、騒々しい亞米利加風のところがなくて如何にも落着いた、しんみりした氣分が全體に漲つてゐるのが何より快い。出し物はとにかくとしても、先づかうした氣持になつて靜かに藝術を鑑賞し得るだけの設備が、早く日本にも、一つ位は出來ればよいと直ぐそんな事が思出される。

二

堅苦しい思想劇や社會劇に、所謂人生の『問題』を取扱つた、見るからに、また見てから後（あと）までも肩の凝るやうな近代劇が、近頃は漸く一般から飽かれて稍下火にならうとしてゐる。そして何かもつと純藝術的な（遊戯的だと云つてそれをわるく言ふ人もあらうが）詩的感興の醇なる物を迎へようとするのが最近の傾向だ。所作事としては少し目先を變へたディアギレフ、ニジンスキイ等の露西亞舞踊（バレエ・リユス）は去年から米國各地を巡業してゐるが、これなどが歐米藝苑の耳目を聳動したのは確かに此氣運に乘じたからである。劇の上にも色々の新しい試みをする人が多く、舞臺藝術の上に輓近の進歩は著しきものがあるが、それと同時に昔の古い物を復活して之に新意を加へる事も近頃の流行だ。英米の劇壇に今頃古い古い無言劇（パントマイム）を喜ぶ人の多いのも、確かにかかる新氣運を示すものではなからうか。

無言劇（パントマイム）のピエロオと云へば、私は先づポオル・マルゲリトの美しい散文詩の句を思出す。

『月の庭、色なき薔薇は葉かげに眠る。冷やかな月は青き池の水に影を宿して、夜告鳥（よつげどり）の歌地上

に悲し。白衣を着たるピエロオと、淡紅色なる薄絹の裳裾つけたるコロンビイヌとは、月光を浴びて互の腕に相抱けり。石の床に言葉もなくて坐したる相思の二人が、朱唇もつれては長き抱擁に脈搏てり。物狂ほしきはふたりが戀なりけり、……』

同じく聖書にある蕩兒（プロディガル・サン）の話から思ひ付いたものであつても、この佛蘭西の文人の美しい言葉で描かれたのは、二十年ほど前に巴里で、昔十六七世紀ごろ伊太利から傳へられた同じ狂言を復活して、それを作りかへた無言劇（パントマイム）ピエロオであつた。そして今度私の觀たものとは稍趣向を異にしたものであつた。

劇の發達史から見て無言劇（パントマイム）の由來は甚だ古い。遠く羅馬の昔に溯つて先づ紀元前三世紀の、詩人であり名優でもあつたリヸアス・アンドロニカスの面白い話を思ひ浮べよう。或日のこと、アンドロニカスが舞臺で演技の最中に、如何（どう）したものかまるで聲が出なくなつて了つた。さりとて芝居を中止するわけにも行かずとあつて、彼はここに一策を案じた。ある年若き奴隷を笛の名手と一緒に坐らせて置いて、それに臺詞だけをやらせ、自分はただ無言で一生懸命に身振をやつた。その技實に神に入つたのを見ては、平生からただださへ最負の客はこれこそと言つて心から感服した。かうした機（はずみ）から出來た無言劇（パントマイム）が、遂には羅馬時代の流行となつて了つたのである。殊にあの無闇に大きい羅馬の圓形劇場（アムフイシアタア）では、役者の聲を隅々まで達（とど）かせるには隨分骨が折れるといふので、遂に劇としては一番大切な要素

たる對話を、全く拔きにして了つた無言劇が大流行（おほはやり）になつたのは面白い。疫病や飢饉のために國中に死人が多くて皆悲觀してゐた時にでも、呑氣な羅馬人は唯一の慰みとして爭うて大劇場に集まつた。わざわざタスカニアから役者を呼んで此無言劇をやらせたものである。また言葉の全く通じなかつた異國人には、萬國共通の『沈默』といふ言語を用ゐる此無言劇こそ何よりだとあつて、皇帝ネロに求めてわざわざ之を見せて貰つた外國の君主もあつたさうだ。殊にゴス人などはひどく之を好んだといふ話が物の本にも出てゐる。この時代に文獻研究の道をひらいたカシオドラスも、無言劇の役者を見てから書いてゐる、『彼等は手を以て語り、指はよく思想を表現する。その沈默は絶叫であつて、沈默は能く說明をすらも爲し得るのだ。これこそ人間が言葉の力を借らずに、如何なる程度までその意志を發表し得るかを示すに足るものだ』と褒めてゐる。

その後、中世になつても隨分無言劇は行はれ、文藝復興期にはよく王侯の祝言の席などで演ぜられ、それが遂に伊太利の道化役者（ハアリツキン）から佛蘭西へ輸入せられた。最初のころはモリエエルが佛蘭西座（テアトル・フランセイ）へ出したが、やがて新趣向を加へて變化し、十八世紀には *ballet d'action* の所作事となり、遂にはピエロオが出來上つた。近代になつて、例の羅甸街（カルテイエ・ラタン）の畫家文人或は音樂家などの仲間では盛んにこれが持囃されて、佛蘭西近代の詩文にはピエロオの名が屢散見するまでになつた。思へばこれも羅馬藝術の正統を傳へた佛蘭西趣味の醇なるものであらうか。イリザベス朝以來ながく行はれてゐて、例のショオ

なぞがわるく言つた英國式の無言劇とは、全く異なつたものである。

三

『蕩兒ピエロオ』三幕、筋は極めて簡單なもの、蓮葉な女に欺される道樂息子の平凡な劇だが、懺悔してから罪滅ぼしに國のため軍に出て行くといふ趣向が時節柄ちよつと面白い。登場人物の數は端役まで加へて僅かに六人。

第一幕　おとなしいしんみりした音樂で幕があく。ピエロオの宅。何の裝飾もない極めて質素な舞臺面で、如何にも佛蘭西の中流の住居といふ見え、一家親子三人で食卓を圍んでゐる。ピエロオ父子はすつかり顏を眞白に塗つて了つて眉には黛を使つてゐる。この眞白に塗つた顏こそ無言劇の意味のあるところで、矢張りそれが古代の假面劇や近代の人形芝居と異曲同巧な性質の物である事を示してゐる。一人息子のピエロオがひどく打沈んで、食事もせず、ふさぎ込んでゐるのを見て兩親は一方ならず心配する。何とかして食べさせよう、笑はせようとしても駄目だ。息子は戀のわづらひに罹つて、村の洗濯屋の娘で髮の毛の美しい目元の冴えたフリネットといふ女に懸想して、親の言ふことなどは上の空。ちやうどそこへ洗濯女が外から這入つて來る。女の姿を見るや否や、今まで萎れてゐた息子は忽ち一變して浮々した氣分になつて女に媚びる、そして思ふに餘る戀を語る。用事を濟まして

から洗濯女が出て行つたあとを、息子はまたぢつと考へ込む。フリネットはお轉婆娘の、氏なくして玉の輿を夢みてゐるので、ピエロオのやうな田舍の若者に嫁ぐ氣は固より無いのである。のぼせ上つたピエロオの方では、何としてでも娘の歡心を得ようとして、ちやうど『フィガロ』の新聞を讀んでゐた父親と、縫物をしてゐた老母とが一脚の机を中にして、洋燈(ランプ)のかげでうとうとと座睡(ゐねむり)をした隙を見すまして、拔き足差し足、そつと簞笥の前へ行つて抽斗から貯金を盜み出す。そしてフリネットと駈落をして了ふ。兩親は後から目をさまして急に驚きかつ嘆く。

息子のピエロオを演(や)つたのは、マアジョリ・バタアソンといふ女優で、顏面の表情にいま一息といふ憾みはあつても、藝は確かなもの。洗濯女の這入つて來るとき急に興奮するあたりの變化は、とかく不自然になりがちな所を見ごとに演(や)つてのけた。殊にアンドレ・ヲムサアの作曲の詩が之と相俟つて、無言によつて却つて千言萬語以上の效果(エフェクト)を出したのは偉い。

第二幕 今度はすつかり場面をかへて、前とは打つて變つて派手やかな巴里のあぱあとめんと、フリネットの部屋(ブウドワアル)である。奧の方に女の美しい寢所があつて、そこにフリネットが寢てゐる。五分間休憩の後に幕が上つて、前の第一幕とは全く趣を異にしたこの上品な巴里好みの舞臺面を見ると、ちよつと誰でも感心する。私の隣に坐つてゐた婦人が小さい聲で『見事だわ(エクスクイジット・シング)』と獨語つてゐた。

ピエロオが女に欺されて樂しい夢を見たのも束の間で、身分不相應な贅澤をした揚句が遂には借金

に首も廻はらぬ始末。フリネットは、自分が戀の爲にかうして一緒になつてゐるのではなく、唯贅澤がしたいばかりにピエロオと一緒になつた、金の切目は緣の切目、とあからさまに男に覺らせる。それでもピエロオの方はまだ迷が醒めない。そこで窮餘の一策として遂に贋札を使つて博奕(バシカラ)をやり、更に一歩深く墮落の淵に身を沈めるに至る。さうして得た金で一日でも長く女の歡心をつなぎたいと思つて出かけて行く。

その留守に、女は別に旣う金持の老男爵(ムシウ・ル・バロン)をたらし込んで家に引き入れてゐる。この男爵は如何にも佛蘭西の喜劇にありさうな女ずきの老人に出來てゐる。かうした滑稽の趣味もたしかに無言劇(パントマイム)の特徴だと思ふ。老人が金を撒くのに惚れ込んで、フリネットは遂にまた此老男爵と駈落して了ふ。ピエロオはやつと不正な金を手に入れて歸つて見ると、女は旣う居ないといふ始末。愁傷落膽するところはパタアソンの藝が實に好かつた。

第三幕　もとの田舍のピエロオの家。兩親は一人息子の家出を嘆いて、朝な夕なに祈禱を捧げて、いつかは改心して家へ歸つて吳れるやうにと唯それのみ涙ながらに祈つてゐる。すると或時、食を求める若い乞食が家へ來る。母親が麵麭を持つて行つて與(や)らうとすると、それはわが子が家へ歸つたのであつた。女優ガブリエル・ベリエの演るこの母親は如何にもおつとりした、人の好ささうな老婦人で、悔い改めた自分の子と相抱いて罪を許してやる。父親の方は初はなほ儼として聽かなかつた。こ

の不幸の子に對して、さう容易くは罪を許さうともしないで苦悶してゐる。すると急に軍樂の音がきこえて、一聯隊の兵士が行進して來る。それを耳にしたピエロオの目は俄にかがやいた。太鼓の音に合はせて舞臺を歩く。自分もこれから軍隊に這入つて國のために盡くし、これによつて罪を贖はうと思ひ附いたのだ。母親は涙のうちにも喜び、父親も遂に子の罪を許して、ピエロオはここに別れを告げて再び親の家を出て行くのである。開けた窓のところで、一人息子が告別して行つたあとに、兩親はまだぢつと考へ込むところで幕。この最後の幕は最も面白く、見事な出來であつた。

四

父ピエロオを演つたクレルゼといふのは白耳義の役者ださうだ。その白い衣服が、第一幕と第三幕の舞臺面全體の色調に對して甚だしく快い感じを與へ、また引立つて見える。極めて落着いたその藝が、好人物の母親の方とうまく調和して行つて、少しも危かしい所の無いのもよかつた。フリネットを演つたマルゴオ・ケリといふ小柄な女優は英吉利人だが、その美醜はとにかく、此役によくはまつた輕快な身振こそ何よりの生命だと思はれた。どの役者も皆、生きた血の通つてゐる人形、としての十分の成功を示してゐるので、此無言劇がいま劇壇の呼び物となつてゐるのは、單に珍らしい試みとして好奇の眼を喜ばすものだとのみは思はれない。

初幕などは動作が割合に少い、そして肝腎な對話といふものが無いのだから、舞臺全體の色の感じといふやうな事が普通の芝居とは異つて非常に重くなる。此色彩感が音樂や表情の方とも、ぴつたり合つて行かなければ、藝術として統一した感興をよび起す事が出來なくなる。此點でも確かにピエロオ劇は成功してゐると思はれた。また無言劇と云つても種類は甚だ多く、倫敦のドルリ・レインで以前よく演つたやうな衣裳と裝飾の色鮮やかな、人目を喜ばせるやうな類もあれば、また日本の壬生狂言のやうなお伽芝居式のや dumb show のたぐひもあらうが、いづれも寫實を遠ざかつてゐる事がその特徴だ。それを今度のこのピエロオのやうに、普通の世話物として出來るだけ新しく寫實的にやつた事も確かに偉い。ことにあちこち一寸した仕草などに、昔ながらの道化芝居の趣味を匂はせる所なども、すて難い趣がある。此芝居を見ると人は誰しも皆、『沈默』といふ無言の言葉が人を動かす力の如何に大なるかを今更のやうに感じさせられる。人類の原始時代、まだ言語の十分發達しなかつた時分には、身振の方が言葉よりも重きをなしたので、今日でもアリュウシアン群島の土人などには唯一の演劇としてただ無言劇あるばかりだ（コラムビア大學の劇文學教授ブランダア・マシュウズ氏の近著『演劇雜攷』のうち、『無言劇の原理』と題する論文參照）と云ふ事實さへ思ひ合はされるのである。

無言劇は、劇として最大要素の一たる對話を全然取去つたのだから、芝居としては固より一種の變態だ。近頃ではラインハルトも之に似た試みをし、また氣分や動作を音樂と合はせる一種の所作事の

類としてはパヴロワとイサドラ・ダンカンの踊があり、露西亞舞踊(バレエ・リユス)に至つて遂にその極致を盡くしたが、これらは皆或程度まで共通の性質のものだと見て可からう。ところがここに面白いのは、活動寫眞の流行とこの無言劇との間にも何等かの關係がありはしないかと思はれる。といふのは、西洋の活動寫眞は日本のとちがつて、辯士といふもののないのが普通だ。無言の役者が全く動作と表情とだけを主にして(簡單な筋書は無論映出されるにしても)筋を運んで行くのだから、寫實的な無言劇ならば結局活動寫眞も同じではないかと言ふ人もあらう。しかし實際を觀れば二者は無論同一の談ではないので、長唄を蓄音機で聽くのと、肉聲で聽くのとの差よりも以上の懸隔があるのは言ふまでもない。

最後に私は倫敦タイムズの劇評家ヲオクレイが此劇に就いて述べた、例によつて巧みなる言葉を引用して此一篇を終らう。『私もピエロオ式の批評家になつて、言葉で書かずに身振で此劇評が書けるものならと思ふ。どれ位短く、どれ位鮮明(はつきり)することだらう。私の顏をお白粉で塗り、眉ずみをつけ、口紅をつけて、黑い頭巾のやうな帽をかぶり、大きい鈕(ぼたん)のついた胴衣を着る。ぢつと目を据ゑて固くなつて立つ。だんだん私の顏には微笑が浮ぶ。拍手をする。唇をまん圓いO(オオ)の字の形に突き出して、それを右手で蔽ふ。ちゆつといふ音をさして手に接吻(キス)して、それを宙に振る。かうした身振をすれば讀者は、私が『蕩兒ピエロオ』の狂言を見てひどく面白く思つてるといふ事がおわかりにならう。今

度はまた半ば目をつぶつて手を額にあてる、ちやうどレスタア・スクヱアにある沙翁（シエイクスピア）の像のやうに。之を見れば忽ち讀者は、私が此劇から得た印象を解剖して、何故（なぜ）さう面白いのかといふことを知らうとしてゐるのだと氣附かれるだらう。そこでまた私の顏は一段と眞面目になる。甓（しか）め面（つら）をする。あたまを掻く。兩手で顏を抑へてそれを搖る。かうしたならば讀者は、無數の哲學上審美上の問題か此狂言によつて暗示せられて、私には手に餘つてゐる事がおわかりになるだらう。併し、ああ駄目だ、私の身振は直ぐに行詰つて了ふ。結局致方がないから、言語の無用を證するこの芝居を說明するために、私は已むを得ず言語を用ゐるの他ないのである。』

外國の劇團は行詰りさうに見えても、またかうして段々と新しい試みをして行く。顧みて日本の劇界を見ると、舊劇は既に新時代の要求と知識とに合せず、新派劇の如きは發達の初期にだも及ばずして既に躓き、西劇の模倣またその成功の日のいづれにあるやを疑はれる有樣ではないか。之を思ふと、私は政治と實業と共に民族活動の最も意義ある問題として、藝術の事をも今少しく眞面目に考へ、また理解し得る人の我が國に多からん事を切に望まざるを得ない。

（大正六年二月『太陽』所載）

愛蘭文學の新星

（ダンセイニ卿の作品）

一

いつもは華やかな巴里も倫敦も伯林も、今は皆濛々たる戰雲に蔽はれて藝術の都ではない。巴里の劇場などは大小となくみな鎖されて、なかには軍事その他の事務所のやうなものに用ゐられてゐるのさへ尠くないと聞く。唯太西洋のこなたに世界の富を集めて豪華を誇れる米國紐育の大都のみは、いま時を得顏に獨り詩神の寵を恣(ほしいまま)にして、劇に音樂に舞踏に彫刻に繪畫に、歐洲藝苑のすべてのよきものを集めてゐるのは確かに偉觀とすべきである。

米國は群衆の國である、從つて藝術のなかでも最も群衆的な性質を有する劇が此國に榮えるのは當然だらう。先づ最近非常な成功をしたものに『經驗(エクスピイリエンス)』がある。これは昔の教訓劇(モラリテイ)を全く今樣で行つたもので、或村の青年が戀人に暫しの別れを告げて都へ出かけ、色々の人生の行路難に遭遇し、暗黒界に身を投じて辛苦した揚句、またもとの戀人のふところへ歸るまでの有樣を九つの場面に作つたもので、紐育、費府(フイラデルフイヤ)、ボストン、到る處で非常な人氣を博してゐる。またずつと凝つたものでは、曩

に紹介した無言劇『ピエロオ』の如きもある（本卷所載『無言劇の復興』參照）。殊に最近には少數者の高級趣味に訴へようとして、殆ど收益の問題を眼中に置かない劇團が意外の成功をしてゐるのは、藝術のため眞に人意を强うするに足るものがある。このあひだ『武士道』と題して松王丸をやつたヲシントン・スクエア一座の如きは、卽ちその最も著しきものであつた。

ステユアト・ヲオカア氏が率ゐるボオトマントオ一座も、また純藝術的なる新劇團の最も成功したものである。そしてその功績の一つは、愛蘭劇の最もすぐれた新作家を廣く世に紹介したといふ點にある。一幕物の作家として、最近に於て旣にイエイツやシングの名をさへ壓してゐるダンセイニ卿の作品が、近頃この一座の興行によつてはじめて米國の藝苑にその眞價を認められたからである。

二

本國の愛蘭の方でも、ダンセイニ卿の作品がはじめてダブリンのアベイ座で演ぜられたのは千九百〇九年のことであろから、眞に文壇にその名の知られたのは最近七八年のことに過ぎない。イエイツ等が千八百九十九年に愛蘭文藝座を起した頃に、ダンセイニ卿は南亞戰爭でトランスヴアルに行つてゐた位であるから、文壇の人としての閱歷はまだ甚だ新しいのである。

卿の本名を皆書けば Edward John Moreton Drax Plunkett, 十八代目の Baron Dunsany で、實

に立派な名門の出たる貴公子である。生れは千八百七十八年とあるから、今漸く四十歳、たしか陸軍大尉の職にある。作者自ら戰地に在る位だから、その作は歐洲に於てよりも却つて米國の方で持囃されてゐるのである。イエイツやA. E. とは以前から親密な關係があつたのだが、他の愛蘭の作家とちがつて卿の血統には丁抹の血がある。愛蘭では第三番目の舊家ださうだが、ノオマン征服（コンクエスト）の時に祖先が丁抹から愛蘭へ移住したので、卿の作品には北歐神話にあるやうな神祕の趣があつて、それが愛蘭固有の神祕趣味といくらか趣を異にしてゐるところのあるのは、全くこのためだらうと人は言ふ。子供の時分にはダンセイニ城内で決して新聞などは讀む事を許されなかつたさうで、これは粗雜な言葉遣ひを覺えさせないやうにといふ周圍の人たちの注意からであつた。卿の文體がすぐれて美しく、文字の使ひかたにそつがなくて、その高調に達した美は全く韻文のやうに出來てゐるのも、幼い頃からかういふ嚴重な訓練があつたからであらう。聖書の外には、グリムやアンデルゼンのお伽噺ばかりを讀んでゐたといふだけでも、その感化の程が知られる。

　ダンセイニ卿がはじめて戲曲に筆を染めたのは、イエイツの依頼によつて例のアベイ座のために『きらめく門』"The Glittering Gate" を書いたのであつた。その時イエイツが詩壇の先輩としてこの新作家に與へた助言の中に、劇には「人の意表に出る事、それが何よりも大切である」といふ言葉があつた。巧みに人を驚かせる奇想湧くが如き此少壯作家のために、イエイツの助言の決して空しく

なかつた事は、今日かれの作物を讀む者の何人も首肯するところである。

三

私は先づ卿の作品の世に現はれた順序に就いて語らう。

ダンセイニ卿の劇で一番最初に愛蘭で上場されたのは、前述の『きらめく門』である。次に同じアベイ座で千九百十一年二月に『王アアギミイニイズと武士』"King Argimenes and the Unknown Warrior" が演ぜられ、同じ年の六月には倫敦のヘイマアケット座で『山の神々』"The Gods of the Mountain" が上場された。翌千九百十二年の十一月に倫敦の同座で『金文字の宣告』"The Golden Doom" が上場されて非常な人氣であつた。次には千九百十三年の八月マンチエスタアで『失くなつたシルクハット』"The Lost Silk Hat" が演ぜられた。戰爭が始まつてから世界藝術の中心が紐育に移ると共に、この英文學の新星もまた故國に於てよりも米國で持囃されるに至つた。

卿の作物が米國で非常な好評を博し、殊に紐育劇壇の呼物となつたのは昨千九百十六年のことである。まだ英國では上場されたことのない二つの作、『宿の一夜』"A Night at an Inn" と『女王の敵』"The Queen's Enemies" も、昨年はじめて紐育で演ぜられた。

四

劇や小說の筋だけを聞かされる事は、よその御馳走のお話だけを聞くよりも有難からぬものであることを私は知つてゐる。殊に舞臺面の效果と巧妙な對話とで、一種神祕的な思想と感じとを現はさうとするダンセイニ卿の作の如きは、たとひ實演を見ないまでも、せめて脚本だけは讀まねば眞の面白味はないのである。作は多くは一幕物、もとより筋といふほどのものがあるではなく、その象徵的な點に於てはマァテルリンクが初期の作、たとへば『盲人』や『家內』の諸篇とほぼ同じ性質のもの、謂はばFantasy playsの類であるから、梗概だけではなほさら興味がない。唯順序としてここには簡單に一二の作のみに就いて筋を述べよう。

昨年紐育でポオトマントオ一座が演じて、滿都の評判物になつた『山の神々』といふのは三幕物になつてゐるが、實は長さから言へば普通の一幕物よりも短い位で、脚本は三十頁ばかりのものに過ぎない。それでもダンセイニ卿の作中では長い物の一つである。

第一幕は城外の場、乞食が六人とそれに盜人が一人附いてゐる。總大將は極めて賢明なAgmar(アグマア)と云ふ男で、此役をスチュアト・ヲオカアが演るのである。この仲間が自ら山上の神樣だと僞つて、町の人達を巧みに欺いて御供物(おくもつ)を取り上げては腹を肥やしてゐる。當分のうちはアグマァのいかにも

神々しい態度が巧く成功して、誰も之を地上の人とは思はなかつた。正體を疑ふ者があつても巧みに胡魔化して了ふ。町の人の見てゐる所では、アグマァ一人だけは澄まし込んで肉も喰はず酒も飲まず、市民が去つて了ふと戸口に番人を立たせて置いて、大急ぎで牛飲馬食すると云つた風の男である。乞食の親方ではあるが、奇才縱横眞に一大天才、一大豫言者たるに恥ぢない風があるが、この男全く物質的で少しも精神的な所がない。手下の一人の Ulf と云ふのが、『かうやつて暮らすのはまことに結構。ただ一つ恐ろしい事は本當の神樣の怒を招く事である』と云つても、アグマァは平氣でゐる。

以上で第二幕が濟んで第三幕に入ると、岩の上に列んだ地藏尊のやうに、乞食の神樣たちが揃つて足座をかいてゐる。そして皆よい氣になつて鱈腹食つたり飲んだりしてゐる。親方は實に巧い計略を考へて與れたものだと皆が悅に入つて、いつもは決して口に這入らないやうな御馳走を食つてゐる。だまされて禮拜に來る市民を見ては馬鹿な奴だなと嘲る。

そこへ盜人の男が這入つて來て、さあ大變な事が出來たと言ふ。三日ほど前に駱駝騎者が二人で Mama へ行つて、本當の神樣の居所を見に行つたさうだ。さすれば勿論『神々はちやんと舊の通りマアマに居なさるではないか』と奴が言ふに相違ない。既うこれでは俺たちも化の皮があらはれて助からぬと。之を聞いた一同は急に悲觀する。『靜かにせよ。俺に考がある』と言つゝ落着き拂つた

のは、親方のアグマァだけであつた。

見に行つた駱駝騎者の二人が這入つて來る。『七つの神々はマァマのお社に御座つたか』と訊かれて、不思議や『お社はみな空であつた』と答へる。そこで今まで此神々の眞僞を疑つてゐた市人も、今は最早半點の疑ふ餘地もなく、これはいよいよ本當の神々がマアマからそこへお出でになつてゐるに相違ない事を確かめて非常に喜ぶ。乞食どもも先づはこれで正體を見屆けられずに濟んだ。

獨り腑に落ちぬはアグマァ。これは何だか變だと思つた。アグマァが先日マアマを通つた時、確かに七つの神々を見たのである。その姿が今見えないとはどうも合點が行かない。アグマァの智慧の及ばない事が何か起つてゐるに違ひないと思ふ。

さうかうしてゐるうちに、不思議な足音がこちらの方へ聞えて來ると思ふと、一列になつて頭から手から衣物から悉く綠色の七人の大男、雲つくばかりなるが舞臺に現はれて來る。ちやうどいつも端坐する日本人の脚のやうに曲つて了つて、膝と膝との間が離れてゐる。何をいふにも石の上に幾百年といふ長い間足座をかいて坐つてゐた、これが本當の神樣たちであつたからだ。乞食どもは恐をなして逃げようとはするが、不可思議な力に制せられて逃げようにも逃げられない。

神樣の中の頭の一人は乞食の僞りを怒つて、人差指で乞食を片端から一人づつ指ざす。すると乞食は足座をかき右腕を上げて、食指は上の方を指した儘、皆悉く硬く石になつて了ふ。綠色の光がその

顏の上に落ちる。本當の神さまはその儘去つて了ふ。

（やがて町の人たちが御馳走を持つて這入つて來る。一人の乞食の腕に觸つて見て、また次のにも觸つて見る。）

（市人）　皆冷たいよ。石になつちまつたんだ。（皆皆低頭平身して禮拜する）

（一人）　おれたちは神樣の眞僞を疑つた。疑つたばかりに神樣は石になられたのだ。

（他の一人）　これは本當の神樣であつたのだ。

（皆　々）　本當の神樣だつたのだ。（幕）

こんな筋書だけでも大體の作風と構想とは知られるであらう。アグマァは物慾の化身で、智慧もあり才能もあるが、一たび靈の力に向へば脆くも敗滅するのである。人間は人間を欺く事が出來ても神を欺く事は出來ない。私は殊に右に引用した此作の結末の所を、非常にうまいものだと思つて感心した。象徴や寓意を離れて唯一つの芝居として見ても、藝術的價値のすぐれたものである事を何人も疑はないのである。

五

劇にせよ小說にせよ、あまり詩的で、そしてまた餘り多くの『思想』を寓したものは、とかく不自

然になり現實味を遠ざかるものだが、ダンセイニ卿の作には此病弊がない。マアテルリンクの初期の作などは確かに神祕思想の象徴として話を拵へた氣味があるが、ダンセイニ卿のは話がおのづから象徴になつて自然に出來てゐる。寫實派と理想派との中間を行かうとする新浪漫主義の作品としては、遙かに渾然たる圓熟の境に入つた感がある。殊にちよつとした對話のはしばしにも巧みに人物性格の特徴を現はし、一言一句少しもそつのないやうにして、性格を描くと共に筋を運んで行く技倆は、イエイツの『砂時計』やシングの『海への騎者』の如き名作にも見られない長所を有してゐる。前にも言つた『人の意表に出る』と云ふ事なども、それが惡い落ちになつたりする弊がなく、これあるがために作全體を緊張せしめる著しき效果を示してゐる。私はかういふ作の他の一例として、茲に一幕物『きらめく門』を卿が傑作の一つとして紹介しよう。

寂寞たる荒地のかなたこなたには大きな黑い岩が轉がつてゐて、無數の麥酒壜のまだ口を切らないのが岩の後に撒き散らされてゐる。後は背の高い花崗石の壁になつてゐて、そこには天國の門がある。そして戸は黃金で出來てゐる。

幕が開くとジム(もとは泥棒で、遂に絞罪に處せられてここへ落ちて來た)と云ふ男が、麥酒壜を根氣よく一つづつ拾つては塞子を拔いては見るが、どれも皆空虛なので、がつかりしてそれを投げ出す。その度ごとに何處からともなく、絕えずかすかな無氣味な笑ひ聲が聞える(神々の嘲笑である)。

そこへ、もと同じ泥棒仲間で、これはまた銃殺されてここへやつて來たビルと云ふのが、鼻歌で『ルウル、ブリタニア』を歌ひながら舞臺に出て來る。『はゝあ、ここに天國の門があるな』と言つて門を敲く。『俺たちには、そこは這入られないよ』と傍からジムが言ふ。

そこでビルは、以前泥棒をするのに金庫をこぢ開ける時使つた、胡桃割器を持てゐる事を思出し、天國の戶もそれで開けようとする。ジムの方は初は冷淡でゐたが、やがて戶が少し開いて來た。『ここには希望はないのだ』と言つてジムは悲觀してゐた。しかしこの鎖された戶のかなたの天國にこそは、美しきものや戀しきものの數々があるだらう、と兩人は稍勇んで語る。そこには死んだ母上が行つて居られようとビルが言へば、あの酒屋の別嬪の娘にも天國では會はれるだらうとジムが言ふ。

ビルは懸命に天國の戶に穴をあけてそれを開かうとする。ジムは相變らず麥酒壜を開けてゐると。無氣味な笑ひ聲はどこからともなく聞える。ぎいぎいと音がして重い重い天國の黃金の戶は少しづつ開く。

突如として穴は通つた、大きな戶は徐々に開いた。あけて見てビルは驚いた。そこにはただ大虛あるのみ。燦として星のみ輝く夜の虛空である。天國はない。聖書に書いてあるやうな美しい樂土はなくてただ空あるのみ。

例の殘忍な笑ひ聲は益々烈しく、益々聲高く響くところで幕。

ここでもダンセイニはまたその得意の surprise と皮肉をやつてゐる。金庫をあける鐵挺では天國の門は開けられない。たとひ開けたつてそこには虛空があるばかりだ、冷やかな嘲笑の聲を聞くばかりだ。物慾に驅られてゐる俗衆も不思議に天國だけは信じてゐるが、そんな奴にはどうして天國があらうぞ。絕望と空虛と、そして嘲笑があるばかりである。かうした意味を作者は此象徵劇に現はしたのであらう。麥酒壜なぞを使つたところは奇拔で、實に面白い趣向だと思ふ。

これはダンセイニ卿の最初の作で、評家はみなイエイツの影響があると言ふが、いかにも『砂時計』の如き作とは、着想に一脈の相通ずるものあるは疑はれないと思ふ。一幕物としても甚だ短いものである。

前に述べた『山の神々』で本當の神樣たちがあとで舞臺へ現はれて來るのは、暗示を生命とする此種の作としては少しく不味いかと思ふ。之に較べると『きらめく門』の方では、笑の聲だけで少しも姿を見せない或者として、神——或は全能の不可抗力を現はしたのは、確かに藝術としてすぐれた表現法だと思はれる。この笑ひ聲あるがために、絕大なる暗示の力によつて超自然の或威力を現はすと共に、終始舞臺上の効果を強める事を得たのは十分の成功である。

劇の梗概を語ることはこれ位にとどめて置いて、次に私は卿の短篇集七卷に就いて一言しよう。殊に『五十一篇集』"Fifty-One Tales,"『夢物語』"A Dreamer's Tales" などは卿の散文を知るには最も都合よい本であらう。

六

此短篇集は漫錄と云はうか隨筆と云はうか、時々の感想の斷片を記したるもあれば散文詩の類もあり、纏まつた物語のやうなものもある。どれも皆極めて詩想に富んだ美しい短篇で、そこには作者の人生觀も哲學も窺はれるのである。住みふるした此世界を去つて、別の遠い遠い詩美の鄕に讀者を誘はふといふのが、いつも此作者の態度だ。その短篇集の一つを作者は名づけて "A Chronicle of Little Adventures at the Edge of the World" と云つたのは、卽ちかういふ意味から考へて面白いと思ふ。描かれたる世界は現實のものではなくて、皆此作者の富贍なる想像力が產み出した神話の世界である。この世のはてのまだ見ぬ遠い國の話ばかりである。千九百十二年にイェイツは卿の作の撰集(セレクシヨンズ)を作つて、その序文にかう言つてゐる、『かういふ短篇の妙味はどこにあるのか、私にもそれを解剖し說明する事は出來ない。或ものは古い愛蘭の寶石細工を見るやうでもあり、印度の唐草模樣で蔽はれた古劍を見るやうでもある。が、何れも皆見知らぬ靈の世界を想はせるもので、十日ほどの

間も深い眠のうちに見てゐた世界をその後見失つて、しきりと悲しみまた思ひこがれてゐるその靈の國を想はせられるやうなものばかりだ』。

物語は多くは象徴的な寓意的なもののみで、矢張り劇の方と同じ性質のものである。散文の物語であるだけに劇の方よりももつと深く、もつと哲學的なところが見える。謂はば大人に讀ませるべき美しいお伽噺とも見られよう。物質主義の現代を見て烈しくそれを呪つたり、反語的に嘲るところなどは、劇の方よりも寧ろ散文集の方が痛快に出來てゐる。

七

ダンセイニ卿は新しい浪漫主義者である。現代を超越し現世を離脱したる、美しい『象牙の塔』のなかに生きようとする『耽美の人』である。彼は千九百十一年、倫敦の『國民評論』に『ロマンスと近代劇場』といふ一文を寄せて、自己の藝術觀と人生觀を語つてゐるが、彼が先づ嘆いてゐるのはロマンスの影を見失つたる現代の風潮である。廣告と商賣と金錢とのほか、何事をも顧みない今の劇場に何の『詩』があらうぞと嘆じ、『劇はとにかく人生の鏡だ。虛僞の時代は、虛僞の人に喜ばれ迎へられさうな劇ばかりを出すだらう』と言ひ、また

『美しい時代には詩人は目につかない。時代の美が產み出した自然の產物であるからだ、ちやうど

春の日に紫丁香花（ライラック）の咲いてゐるのと同じである。唯惡い時代には詩人が如何にも間（ま）が拔けて見える、鋪石の上にただ一本ある百合の花が何だか馬鹿げて見えるやうに』。いかにも物慾と虛僞とで固まつてゐる現代ほど、詩人といふものの間（ま）がぬけて見える時代は無いであらう。卿は更に筆を進めて最高の寫實主義（リアリズム）、即ち人生の旅路の全圓を見る詩人の寫實主義（リアリズム）が、下等な寫實主義（リアリズム）の向うを張つて起るべきだと說いてゐる。

かういふ主張であるだけに、卿の作物は殆ど現在の世界を超越したもので、ほかの愛蘭の作家が皆その國特有の神話や傳說を材とし、またその風物を歌つてゐるに拘はらず、ダンセイニは殆ど愛蘭そのものを詩材としてゐない。その作中の傳說も神話も、皆多くは彼が空想の奔逸にまかせて作り出した物ばかりである。此點が全く他のグレゴリ夫人や又シング、イエイツなどと異なるところである。彼の詩境がどこまでも夢の國であり、驚異（ワンダア）の世界である點に於ては、彼も亦固よりケルトの天才の特質を具へてゐる事は言ふまでもないが、その作品には例の愛蘭文學に特有な、發音のむつかしい固有名詞は出ずに、却つて東洋風の亞刺比亞とか波斯とかを模した名前が澤山に見えるのも面白い。不思議な神さまの話を書き集めたる、『ペガナの神々』"The Gods of Pegana" の一卷の如きを繙けば、人は誰しも二十世紀の世の中とは全くかけ離れた、遠い遠い靈怪不可思議な神仙の國へと我知らず導かれて行くのである。

愛蘭の文學、殊に劇に於て旗頭のイェイツの後繼者たるべき人を求むれば、恐らくそはダンセイニ卿であらうとは、一部の聰明なる批評家が今既に認むるところである。

（大正六年八月『太陽』所載）

歐洲戰亂と海外文學

一

埃まみれの群書のなかに隱れて、閑人の閑事業と人のいふ文藝の研鑽に沒頭する讀書生でさへ、ふと目をあげて世界の騷亂をながめると、さすがに色々な感想が胸に浮ぶと共に、卷を蔽うて憮然たらざるを得ないものがある。

去年の末に突如として現はれた獨逸の講和提議の如きは誰も之を眞面目には受取らなかつたが、其頃米國にゐた私などは、それでもまたこんな事が近き將來の平和の曙光ともならうかと望んだのはほんの空頼み、英吉利の宰相ロイド・ジョオヂが新任早々議會での烈しい一喝に葬られてそれ切りになつた。最近にもまた羅馬法王の提議は固より何の效も奏しない。かうして漠々たる戰雲はいつまでも歐洲の天地を暗くして、鳩を使の女神『平和』の姿はまだ人間の目のとどかない彼方に在る。戰亂の巷を遠く離れた東海のはてに獨り漁夫の利を貪れる市井の銅臭兒のみが、此慘劇の長く續けよかしと祈れるほかは、惡魔にあらずんばかかる屍山血河の慘狀を見てほほゑむ者はあるまい。

歴史の頁のここかしこにぼとぼとと血の痕を印して來た、戰爭といふものあつてこそ人類は進歩したのだと唱へる奇怪至極の論は、現代の文明を理解せずしてただ遠い過去の時代をのみ見る人の謬見に過ぎない。世紀末よりこのかた精神主義、民本主義、新理想主義の方面に進まうとしてゐた歐洲の思想と文明とは、現下の大亂のために一時全くその進運を阻止せられたるのみか、更に幾十年幾百年の昔に立ち歸り、退歩し逆轉しつつ我を忘れて蠻人の蠻劇を演じてゐるのではないか。今度の戰爭は眞に歐羅巴の自殺である。學術商工業の破壞は言ふまでもないとして、先づ之を政治上に見ても、英吉利の自由黨内閣が多年の努力によつて貴族國の因襲を打破して進まうとした民本主義、個人自由主義の政策も、此大亂の一時的必要に迫られては、擧國一致の名のもとに、遂に聯立内閣の成立となり、徴兵制度の實行とまでなつて、折角時代思潮の大勢に乘じて眞面目な發達をしてゐた英國の新政治はめちやめちやに崩れて了つた。むかし南亞戰爭の折には激烈なる非戰論を唱へたる『無冠の王ジヨオヂ』が、今や『鐵血宰相』の假面（?）をかぶるに至つては、英國の議院政治も遂に思潮の進運と逆行せざるを得ざるに至つた。由來自由の國を以て誇とせる米國ですら、宣戰以來その政府の態度は甚だしく專制獨裁（オオトクラシイ）の色を帶ぶるの非難を免れないではないか。民本主義と戰爭とは到底調和の道なきものである以上、かくの如きは免るべからざる當然の結果であらう。思想と文化の發達のため戰爭の忌むべき所以は、この點に在るのだ。

二

今度の戰亂は西洋の文學藝術に何ものを齎したかと問ふ人がある。私は之に對して勿論今のところでは絕無だと答へるに躊躇しない。戰爭が旣に現代文明の大勢に逆行し、政治產業學術の進運を妨げてゐる以上、それが獨り藝苑にのみ幸ひする理由がどこにあらう。如何にも過去の歷史には戰爭が文藝の上に直接間接の好影響を與へ、殊に戰勝國國運の隆昌に釀成せられたる藝術上の大作が出た事も屢であつた。しかしそれは國際關係が今の如くに複雜ならず、また個人思想が今の如くに發達しなかつた昔の話である。世界人類の幸福といふ點から見れば勿論のこと、單に民族發展の上から見ても戰勝が國利民福をはかる最上の手段でなくなつた今の時代に於て、文藝が獨り之によつて雄篇大作を得る事は殆ど期待しがたい事である。今度の戰爭あつて以來、歐洲の文壇は實に冬枯れの野よりも淋しい。くだらない際物ばかりは山ほど出ても、戰爭文學として不朽の價値ありと目すべき大作は一として現はれてゐない。白耳義のマアテルリンクが戰亂に關する感想を書いた『嵐の破片』の如きも、之を往年の『貧者寶』の作者の筆としては甚だしく物足らないではないか。ダンヌンチオが文筆を棄てて飛行機の舵をとり、天空から愛國の詩篇を撒き散らしたとて、それが何程の事であらう。彼の祖國と世界文明のためには、『死の勝利』や『快樂兒』の一頁にだも値する貢献にはならないではないか。

佛蘭西の新詩人ペギイは戰死し、ロマン・ロランの如きは今甚だしい迫害を受けてゐると聞いた。戰爭中も例によつて皮肉冷罵を逞しうし、敵國の味方であるとまで言はれた英吉利のバアナアド・ショオでさへ、世の中がかうなつては徒らに『物を茶化す悪魔(モッキング・デボル)』の名を博するばかり。最も滑稽なのは獨逸の前外相ヤゴオは英國を罵る時に、ショオの作『運命の人』の中の文句を屢引用してゐる。自國を罵る好い文句を敵國の外相に教へてやつたとて、それは別に文人の手柄でもあるまい。ショオは曩に戰爭劇として『ヸクトオリア十字勳章佩用者オオフレアテイ』の一曲を、愛蘭劇のアベイ座のために書きおろしたが、これは興行發賣を禁止せられて遂に世に行はれず。またかれが最近の作である『オオガスタスその微力を致す(ダズ・ヒズ・ビット)』の如き、英國の募兵事業を諷した純粹の際物(きはもの)であるが、例の辛辣な皮肉もなく甚だ不評判で、戰爭の際物芝居では到底バリイの新作ほどに持囃されないのである。また英國の詩人は皆聲を揃へて戰爭を歌ひ、去年征途に上つて希臘で客死した少壯詩人ルウパト・ブルックの遺篇のごときは殊に持囃されてはゐるが、今更あれ程のものを珍重しなければならぬまでに英文學は元來貧弱なものでは無いのである。ただ僅かに注目すべき作品は、國破れて山河ありと云ふ白耳義の慘狀を材としたもの、たとへば露西亞のアンドレイエフの『白耳義の悲しみ』、英國の新詩人アルフレイド・ノイズの戲曲『ラダ』の類に過ぎないであらう。いつも花やかな佛蘭西の藝苑が、昨年一ケ年の間に産した眞の藝術的價値ある作物といへば、ボオル・クロオデルが戰爭詩集一卷と、ルネ・

ベンジャマンの戰爭小說『ガスパアル』の二つあるのみだとは、何といふ心細い事だらう。開戰以來佛蘭西文壇で最も多く注意を惹いた永久的價値ある作品は、恐らくアンリ・バルビユスの『火（ル・フユ）』であらう。作者が自ら戰場に出陣してつぶさにその慘劇を描いただけに、尋常一樣の際物とは全く選を異にしてゐるが、然しこれとても、果して後世の批判が佛蘭西近代文學の一大光榮と考へるか奈何かは疑問だと思ふ。

更にまた偶然の運命とはいひながら、時も時、文星の隕つること昨年ほどに多かつた年は珍らしい位であつた。日本の文壇が漱石、柳村の二先輩を失つた年に、西洋ではヘンリ・ジエエイムスが死んだ。誰が目にも世界的の文豪と見られた西班牙のエエチエ エガアライや波蘭のシエンキツツも、相前後して世を去つた。米國では、つい此間私があちらへ行く途中に布哇で會つた時まで、人なみ以上に壯健に見えてゐたジヤツク・ロンドンが突如として逝き、また巧みに俗語を驅使して小兒を歌ふので人氣作者の隨一であつた詩人リレイも死んだ。殊に最も悲しむべきは、歐州で最大の詩人と目されてゐた白耳義のヱルハアレンが長逝した事だ。獨逸兵の鐵蹄に蹂躪せられたるおのが祖國のために叫んで、『血まみれの白耳義（ラ・ベルジツク・サングラント）』の歌を殘し、去年の暮ちかく佛蘭西のルウアンで、ふとした鐵道事故のために變死したのは、恰も大詩人の死が祖國の悲運を象徴するかのやうにも見れば見られるではないか。佛蘭西では最も大膽なる新思想家であつたレミ・ドウ・グウルモンが、戰時の日記『嵐の間に（パンダン・ロラアジユ）』

一卷を最後の作として世を去り、また今年になつてオクタアヴ・ミルボオが死んだために、前世紀後半からの自然主義は遂にその最後の代表者を失つて、西歐の文壇から全く影を沒するに至つた。

三

獨逸の事は知らないが、今日の英國は勿論、佛國でも、露國でも、政治と文藝とは日本に於けるよりも遙かに密接の關係がある。兩者が共に人間の眞面目なる思想活動であり文化活動であるとすればこれは固より當然な現象で、日本のやうに政治外交と文壇との距離の遠いことは、そこに何等かの不眞面目な分子が附纏つてゐるからではなからうか。兩者の直接關係としては、――間接の交渉は勿論あることだが――ただ或種の爲政者が文壇の新思潮に抑壓や反對を試みようとする位のもの。文壇の人人からもまた直接に政治外交に關する言議を聞くこと極めて稀なのである。これは文學とジャアナリズムとが今日の如く接近したる時代に於て、寧ろ不可解とすべき現象ではなからうか。文章は經國の大業と云ふ昔の言葉を無意味にしてゐるのは、あながち無學にして無理解なるわが日本の政治家をのみ咎めるべきではないと思ふ。

平生から政治外交に興味を有つ文人の多い英佛では、今や此文明の一大危機に際しては僞吏のこと文壇は殆ど武裝したるが如き觀がある。たとひその產物の藝術的價値は大ならざるにもせよ、國運の

危機に當つて、そが人心に及ぼす影響と力とは決して侮るべからざるものがある。佛蘭西のロマン・ロランが戰爭の初に發表した獨逸に對する公開書の如き、今では少しも珍らしくない。翰林院(アカデミイ)に列してゐる老大家までが、殆ど皆擧つて戰爭熱政治熱にうかされてゐる事は眞に偉觀とすべきである。殊にいつも政界と文壇との緣の深い英吉利では、ヱルズの豫言小說、ベロックの戰爭史、チェスタトンの時局論などは、之を他の滔々たる際物と同一視すべからざるものがある。作家としてはながらく文壇一方の重鎭であつたホオル・ケインの如き、今や旣に純然たる政論家として重きをなしてゐるではないか。純藝術の立場から見れば開戰以來冬枯れの野のやうにさびれた西歐の文壇にも、此現象のみは特に私どもの注目に値するのである。

ことに英佛露の間に於ては、これら文人の筆を通して國際間の理解が增進せられ、双方國民の意志が完全に疏通せられてゐる事は非常なものである。私は先頃、英國のエドマンド・ゴスが『兩世界評論(ルヴュ・ド・ドゥ・モンド)』の誌上に於て、獨逸の『クルトゥウル』を排して英佛系統の新文明の勝利を高調し、英佛二國の『精神的協商』を說ける一文を讀むに及んで、轉た此感を深くした。私は昔から人の言ふペンは劍よりも力强いと云ふ古い言葉に、飽くまで十分の意義あらしめたいと思ふのである。

四

トロイの戰がホオマアの大詩篇の題目であり、また『われは功業と英雄とを歌ふ（アルマ・ポルムケ・カノ）』の句が維馬の大叙事詩の卷頭を飾れることを思へば、戰爭が古代文學に於て常に最も重要な題目であつた事は今更言ふまでもなからう。戀愛を除けば、古代人の生活にとつて戰爭ほど重大な意義あるものはなかつた。勇者强者が戰塵の巷に馳驅して功名を樹てる事は、いまだ原始時代を去ること遠からざる過去に於ては、彼等が詩歌的生涯を飾る唯一最大の事業であつたからだ。

文化の程度が進むに從つて、人間生活に於ける戰爭の意義は古代ほどに重大でなくなつた。勿論戰爭を題目とした詩歌小說の類はいつの代にも絕えたことの無いのは勿論だが、近代に至るほどそれが益々少くなつたのは事實たらうと思ふ。試に近代歐洲での最も大なる戰爭であつた普佛戰爭に就いて見ても、文學の上には肝腎の佛蘭西でモオパッサンの作品の他、まづゾラの『沒落（ラ・デバアクル）』に描かれたものを以て、十九世紀最大の戰爭小說と見なければならぬ位だ。文藝進化の歷史の上に古代の叙事詩時代が過ぎ去つたと共に、戰爭文學の時代も亦既に過去のものとなつたのである。

しかし一口に戰爭に關係した文學と云つても、戰爭の外的現象そのものを描いたものの場合と、戰爭が人間の內部生活に與へる影響を對象としたものとは、おのづから趣を異にしてゐる。そして近代の如く文學が單なる外面的の叙述描寫よりは、寧ろ深く人間の內部生活を洞察し心理を解剖し、思潮の推移に密接してゐる時代に於ては、勿論後者の種類に屬するものが重要な位置を占めるのである。

しかしかくの如き作品はいま戰爭の眞最中、唯外部の動搖と騷擾とに心をかき亂されてゐる際に到底望むことの出來ないもので、それには先づ落着いた、冷靜な觀照的態度とも云ふべきものが何よりも必要なのである。ところが、すべての觀照には常に、時間的にか或は空間的にか或距離を隔てる事が何よりも必要なので、かくの如きは今現に前古未曾有の大擾亂の渦中に身を投じてゐる歐洲人にとつては、到底不可能の事である。恐らくは戰後十年二十年或は世紀のなかばを閲して後に、今度の戰爭ははじめて優秀なる文藝の作品に影を投ずる事だらうと思ふ。

五

すべての文藝上の製作には何等かの意味に於て餘裕を必要條件とする。ぢつと心を鎭めて過去を靜觀するとか、身を第三者の位置に置いて冷靜に洞察するとか、或はまた自己の經驗そのものをも客觀化して見るとか、すべてさう云ふ態度は皆この餘裕があつてはじめて出來ることである。歐洲全體の人心が、今度の大戰に於けるほど動搖し興奮し熱狂し激昻して些の餘裕をとどめない事は、近代の史上殆ど前例なきところである。人は動もすれば、現代の歐洲文壇に大なる天才がないために戰爭文學の傑出した物が出ないのだらうと速斷するが、それは大なる誤解である。たとへば英吉利のトマス・ハアディの如き、今より約一百年前の那破翁（ナポレオン）戰爭を題目としては、彼の大作の一つたる戲曲體の叙事

詩『主權者(ダイナスツ)』を書いたが、さて今度の歐洲戰亂に就いて彼の公にしたる作品と云へば、到底この大天才をして英文學の史上に重きをなさしむるものは一つもないのである。百年前の大戰を描けば一世を驚かす程の大作を仕上げる天才ですら、眼前大戰の渦中に身を置てゐては筆のつけやうが無いのである。昔デ・クヰンシィは火災を見て詩的感興を得ると言つたが、所謂對岸の火災ならばいざ知らず、まさか自分の家が焼け落ちようとする際には詩作も何もあつたものではなからう。いま歐洲の文壇にいかほどの天才ありとも、此火事場騷ぎの眞最中に大作を出せよと望むのは、望む者の無理であらう。ただ今後少くとも十年二十年或は一世紀位の間は、歐洲の人心は必ずや此大戰亂とその影響とを中軸として回轉する事だらうと思ふ。さういふ時になつて人心に觀照靜觀の餘裕を生ずるとき、ここにはじめて世界戰爭の一大悲劇は藝術として取扱はれるに至るであらう。那破翁戰爭も約半世紀を經て杜翁(トルストイ)の傑作『戰爭と平和』に描かれ、一世紀を隔ててハアディの『主權者(ダイナスツ)』の題目となつたのだ。杜翁がクリミア戰爭の時に從軍して書いた『セバストポオル』位の物ならば、今度の歐洲戰爭中にも之に匹敵する程の作は出てゐるのである。

　殊に戰後に興味を以て期待せらるべきものは露西亞の文學である。前世紀の後半から、ながらく悲愁の暗雲にとざされて鬱積してゐた新思想、また夙にトゥルゲニフやドストエフスキイ等の作品にあらはれて、露西亞人の内部生命に深くも潜流浸潤してゐた一大思潮は、今度はからずも世界戰亂とい

ふ外部からの衝動をうけて、突如大革命となつて爆發した。恰も爛熟し切つて僅かに枝にとまつてゐた果物が、ふとしたはずみに地上に墜ちて崩れはてたやうに、總べての古きものを破壞し盡くしたのである。俗惡なる利害の打算を外にしていつも豐かな感情生活の美を享樂せる露國民族が、この大騷ぎの鎭まつた後に、フレッシュな潑剌たる新生活新精神の勃興に乘じ、天才の筆を通して如何なる作品を吾々に示すかは、最も深き興味を以て見らるべき問題であらう。今日までのところ、既に露國文壇にも今度の戰亂を材とした作品は出てゐるやうだ。たとへば日露戰爭の時にも『赤き笑』を公にしたアンドリエフには、今度も『白耳義の悲哀』などの新作がある。しかし眞にすぐれた作物は、露國に於ても矢張り戰後少くとも半世紀の間に生れる事だらうと思はれる。

またかの獰惡なる獨逸兵の鐵蹄に蹂躪(ふみにじ)られて、殆ど亡國の悲運に遭つた白耳義は、ヹルハアレンやマアテルリンクの如き近世の大天才を生んだ國である。若し協商側の勝利によつて戰後に此國が國勢を回復するならば、そこに如何なる新しき文學を生ずるであらうかは、これまた十分吾人の深き興味をそそるに足る問題ではないか。

六

今度の歐洲戰亂にも、月並な愛國の歌や、戰爭の慘劇の一部分を材としたやうなものは澤山に出て

ゐるが、戰爭の全局に目を注いで、そが一代民衆の生活に及ぼせる影響を觀察して筆を執つたものは甚だ尠い。此間にあつて英國現存の最大作家を以て目せらるるハアバアト・ジョオヂ・ヱルズの新作は、確かに出色の文字として吾人の注目に値するもので、最近英米兩國に於て著しく讀書界の耳目を聳動してゐるものは先づ此人の作品であらう。

ヱルズの近時の作品は、以前のやうに濃厚なソオシャリズムの色彩を帶びてゐない。自分の社會觀の宣傳者と云ふよりは、むしろ現代の社會生活に對して眞摯なる傍觀者の態度を執つて、僞らざる精細の描寫を試みようとする風がある。殊にこの作者の特色たる科學的知識を土臺にして一種の豫言小說のごときものを書く段になると、殆ど現代の歐洲に於ける他の作家の追隨を許さない特殊の技倆を有つてゐる。たとへば空中戰爭の如き、また英國社會狀態の變遷の如き、今まで彼の小說にあらはれた現象が、此頃は既に着々として實際界にあらはれてゐる。もと科學的知識を經とし想像を緯として出來上つた、その小說中の豫言が不思議にも歷々として事實に當つてゐるのは、誰しも皆驚嘆を禁じ得ない點である。

健筆縱橫の多作家であるヱルズは、開闢以來すでに數種の論文小說の類を公にしたが、最近に最も世の注意を惹いたのは『ブリトリング氏の洞觀』『戰爭と未來』『見えざる王、神』などの數卷である。最初のものの如きは昨年出版以來、英米の知識階級で最も廣く讀まれた小說である。

『ブリトリング氏の洞觀』は、著者が思想家であり文筆の士である主人公ブリトリングの口を藉りて、現下の大戰が英人の生活に與へた影響に就いての感想を書いたもので、別に複雜な筋といふ程のものがあるでは無い。主人公は英國の田舍にゐて、息子は出征し、戰死して了ふ。一種の理想主義者である主人公は極めて趣味の廣い男で、政治宗教社會教育等の問題は勿論、園藝から自働車の事にまで趣味を有つと云ふ風の人。時勢を達觀し、獨逸氣質を批評し、英國政府の施設を非難し、米國の態度を論じて極めて大膽な忌憚なき、又往々にして皮肉な觀察を下すのである。たとへば開戰の當初、英國政府の募兵の措置緩慢にして軍器の不足、將校の無能のために益々時局を危地に陷らしめた有様を叙して、激烈なる攻撃を加へた。固よりこれらはすべて著者自らの經驗や觀察を、巧妙な對話と背景描寫の中に配したもので、固苦しい議論の肩の凝るやうなものでは無い。

しかし此小說中で、最も世の注意を惹いたのは宗教上の問題であつた。ブリトリングの息子が戰死した後間もなく、以前その家庭にゐた獨逸人の青年も矢張り敵軍で戰死した。ブリトリングは自分の愛兒を失つた事と共に、彼方の獨逸の方でも其青年の兩親が矢張り悲嘆に暮れてゐるだらうといふ事に、強くも心を動かされる。かういふ事が動機となつて思索の結果、やがて色々と宗教信仰の問題に這入る。神の愛はかかる事を決して無意味に爲されるわけは無い。これは何等か人類のために幸ひする結果となつて現はれるに相違ないと考へる。そこで政治上に各々國を樹てて互に相爭ひ、相鬩ぐの

用なき事にも想ひ及ぶのである。かくして主人公は遂に新しき神を發見し、新しき信仰に到達して、『宗教は最初にしてまた最後のもの。人が神を發見し神によつて發見せらるゝまでは、彼の爲すところは毫も緒に就かず、また何等の目的に向ふものにもあらず』と云ふ確信に達するのである。

そこでブリトリングがまだ未解決のままで措いてゐた此問題に關して、エルズ氏自らは次の著述『見えざる王、神』の一篇に、未來の新信仰を論じてゐるのである。その發見したる神とは即ち世界を統治せる目に見えざる王で、今までのやうな偶像(アイドル)や獨斷(ドグマ)の破壞せられたるあとから現はれたる眞の神であつて、著者が「戰爭と未來」の書中に、『人類が覺醒すべき時は來た。やがては人類といふ一團の外には、世界には何等の國別も無くなるであらう。帝王もなく將帥もなく、唯そこに人類の一つの神あるのみとなるだらう』と言つたのは即ちこの意味だ。戰亂のため荒れに荒れたる廢墟からに、やがて新しき神――『有限な努力的な必要な神』の出現を見る事であらう。一切の歷史的因襲を離れた新しき基督教は、やがてここから生れるだらうと云ふのがエルズ氏の豫言だ。そしてこの復活(リナッセント)の宗教(レリジョン)は決して自分の獨創の說ではなく、現代の精神をその儘に叙述したまでのものだと著者は斷言し、それがまた友人であつた故キリアム・ジェイムズの所說に負ふところ多き事をも明言してゐる。なほ少しくエルズ自らの言を引用すると、

『この新信仰と、在來の一切の基督教との最も根本的な相異は、一つの有限の神を拜するの點にあ

る。……此神は全知全能の者ではない。天地の創造者でもない。基督教で『父』となつてゐる猶太人の傳來的な神とは同一の者ではない。この神は救の神であり、一つの靈であり、人であり、はつきりした知られ得べき一つの人格である。愛を加へ靈感を與へ、愛し得べき人格であつて、一切の人間の靈のうちに存在し、また存在せん事を努むる人格である』（『見えざる王、神』第一章第二節）。

七

ヱルズのこれらの新著は、いま太西洋の兩岸で英語國民の間に非常な注意を喚起して、毀譽褒貶の聲が甚だ喧しい。現にプラグマティズムでは故ジェイムズの後繼者を以て目せられてゐるコラムビヤ大學のデュイ教授の如き、雜誌『七藝術（セヴン・アアツ）』の近刊號にこれに對する峻嚴なる批評を公にした。由來ヱルズの思想にはプラグマティズムの傾向が著しいだけに、デュイ教授の此批評は特に世間の注目を惹く事だらうと思ふ。

閑話休題、私はヱルズのかかる豫言が果して今までのやうに的中するかどうかは知らないが、とにかく戰後の歐洲に於て宗教信仰精神生活の新しい現象が現はれて、それがやがて思想界に一新時期を劃する事の遠からざるを思ふものである。

今度の戰亂は之を思想上より見れば、前世紀の中葉よりこのかた、極めて偏頗な急激な進步をして來た自然主義物質主義の行きつまつた當然の歸結に他ならない。物質主義の一つの變態とも云ふべき軍國主義の如き、到底現代に於てその目的を達する事の出來ない事は、今度の戰亂が最もよく之を明示したのである。その本家本元たる獨逸が既に當初の目的を達し得ないのみならず、之に對抗してゐる協商側も遂に多く得るところなくして終るのであらう。雙方ともやり出した事は今さら後へも引けずと云ふので、戰爭だけはとにかく繼續してはゐるものの、結局は疲弊困憊の結果、歐羅巴の自殺的行爲たるのほかは無いのである。此大擾亂によつて軍國主義萬能の迷妄より覺めたる戰後の歐洲には、必ずやその反動として平和主義が起り、物質主義に對して精神主義理想主義が盛んとなり、利己主義個人主義に對して愛他主義共存主義の思想が重きをなすに至るだらうと思ふ。物質萬能の思想に誤られたる一代の人心を覺醒すべく、天は遂に此大斧鉞を下して最後の荒療治を試みたのだとも見られるだらう。

人間の生活には、靈と肉との完全なる合一調和がなければならぬ。之を國家の上より見、民族の上より見るも、靈にのみ傾くものは遂に印度の如くに自ら滅び、肉にのみ傾くものは今の歐洲列國の如くに大なる禍を招くの他はない。物質萬能の誤れるは心靈萬能の危きと同じく、破壞と滅亡とは共にその窮極の運命たるを免れないのだ。眞の大なる文明は、偉大なる物質文明の基礎の上に建てられ

たる精神文明であらねばならぬ。歐洲の列國が、過去半世紀の間殆どその全力を傾け盡くして建設したる物質文明の上に、更に新しき精神文明を建つるの日ありとすれば、そは恐らくはこの度の大戰の後にあるだらうと思ふ。幾千萬の人命と幾百億の財を犧牲としたる此慘劇も、思想上にかくの如き一大進轉の氣運を生ずるを得てこそ、はじめて世界文明のために重大なる意義を有する事となるのである。

いつの世にも一般思想界の先驅者である文學や藝術の上には、戰前はやくも既に前世紀末からして、自然主義物質主義は亡びて之に代るべき精神主義理想主義が現はれてゐたのである。かの新ロマンティシズムと呼ばれたるものの如きは、即ち此方向に流れてゐた一つの思潮に名づけられたる名稱であつた。醒むる事の遲い一般の民衆は、この前古未曾有の大悲劇に驚かされてはじめて、さきに既に藝苑の天才が行かうとしてゐた道を踏んで進むことであらう。戰後新思想の曉の色は、戰前はやくも既に藝苑のうへに現はれてゐた事を思はねばならぬ。

八

近頃リンカアン・コルコオドと云ふ新詩人が、『戰亂の幻影』と題した作を公にして俄に世の注意を惹いた。ちやうどホヰットマンのやうな詩形を用ゐたる、この頃の米國あたりで流行する自由詩の

體である。今まで長い間物質上の繋縛を離れ得なかつた心靈の解放を歌つたもので、今度の大戰爭こそ實に世の因襲を破壞し去つて、人をしてその本來の面目に歸らしむると共に、精神生活の歷史に重大なる一轉機を生ずるものであることを歌つてゐる。

見よ、戰の時。
生命は新奇の流を走る。
世界は覺醒せられ、靜默は劈かれ、平和は破滅し顚覆せり。
整然たりし因襲は今や破壞せられ、幻惑は四散し、突如として眞意は明らかにせられぬ。
人々は自然と死と苦痛とに面して、本來の面目は明らかにせられたり。かなた遠くかすかに眞は現はれぬ。
空に舞へる夢よ、遠きかなたの聖なる思よ。

漠々たる戰雲のかなたに、新文明の曙光を認めた此詩人は更に言ふ。

さながら、死の間際に、苦痛と悲哀のうちに、また鋭き問罪の折に、荒々しくも覆面の劈かるる時、人は生の眞と僞とを見、靈と愛と、その眞意義を見る如くに、
今や戰に臨み一諸國の民は覺醒しぬ。
苦痛、悲哀、逆境、いたましき損害のうちより、人の最善なる努力が生ずると同じく、

世界のこの最大苦艱のうちよりこそ、最高なる夢想は來れるなれ。

戰爭は實に、人間が有する一切の破壞力を使用して演出する大悲劇である。虚僞と迷妄とによつて建設せられたる總べての物を一掃する最後の手段として、又めざむること遅き一般の俗衆を警醒する非常の手段として、この鐵火の洗禮は蓋し避くべからざるものであつたらう。ただ思潮の流のみはおのづからその往かんと欲するところに往くのである。戰前はやくも既に藝苑や思想界に兆してゐた、新理想主義や精神主義のために新なる道を開くべく、その障碍を取除き、新思想の跳躍に一の好機を與へたるものは、即ちこのたびの世界戰亂である。(大正六年十月『中央公論』所載)

米國の新劇團

一

英吉利のアアノルド・ベネットが數年前、米國の事を書いたものの中に、芝居に就いてこんな事を言つてゐる。

『或少數の場合を除いて、演劇はいま世界到るところで藝術としては度外視されてゐる。若し或特別の國で、將來に多大の望を囑すべきものありとすれば、それは米國だ。大劇場の流行、作者の急激な增加、その收益の莫大なこと、かういふ事情のある外に、また一般敎育の進步が非常に急速でありとすれば、勢ひ米國にこれから眞面目な一流の創作家が澤山に出るだらう。名と利とを得る宏大な機關があるのは、一流の藝術家を育成するに何よりも都合の好い事である。倫敦に較べると紐育には第一流の劇場の數が約二倍あつて、紐育の當り狂言は一週一萬八千弗だが、倫敦の方は餘程大きいところで一萬弗を出ない。そして米國の公衆はどうしても自國の作者を好むのだから、將來の演劇が藝術上重要のものとなる事は殆ど疑を容れないと思ふ。……』

大勢の見物が無くては芝居は打てぬ。この意味に於て演劇は確かに群衆の藝術であつて、これは繪畫彫刻或は詩歌小說とは稍趣を異にする點であらう。從つて群衆の國たる米國に於て、演劇が他の藝術よりも盛んであるのは、極めて自然な現象だ。殊に歐洲の大都が戰塵の巷となつてからは、紐育は最近に於て世界演劇の中心地たるの感がある。

演劇は群衆の藝術であるが故に、動もすれば卑俗低級の趣味に媚びんとする。また舊習と舊型に囚はれ易く、これを打破して革新の氣運を喚び起すにも常に最も多くの困難が見出される。しかし此點に於ては他國とちがつて、米人が何事にも新奇を喜び、またその徹底的なるを好む性質が幸ひしてゐる事は甚だ多い。

だから米國では、所謂近代劇とか新劇とかいふ方面に於ても常に新しい試みをして、世界のあらゆる好きものを集め、これを綜合し大成しようとする氣運が旺んだ。また費用を厭はずに大規模の計畫を立てる事も、他の事業に於けると少しも變りはない。いま首府華盛頓に設けられんとする露天劇場の如きもその一例だ。單に歐洲の作品ばかりでなく、俳優も英佛獨伊の第一流どころでは皆、巨額の報酬を受けて米國で旅興行をするといふ有樣。かくて他の藝術とちがつて演劇には、黃金と群衆との力侮り難きもののある事を思はせられる。

また單に歐洲作家の物を演ずるばかりでなく、ベネットが言つたやうに、米國土着の作者にも傑出

した者が尠からず出る。『まこと(トルウス)』の作者クライド・フィッチの如き、『大差別(グレイト・ディヴァイド)』の作者リチャアド・ヴオン・ムウディの如き、今はふたりとも故人となつたが、日本にこそ傳はらざれ、歐洲殊に英佛の劇界には餘程以前から持囃されたものだ。イブセン張りの思想劇問題劇の類で面白い作を書く人も、イエイツやグレゴリ夫人のやうな一幕物を作る人も、米國の劇界にはかなり多い。

　また從つてこれらの新作を演ずる劇場劇團の數も多く、藝術上また經濟上に十分の成功を收めてゐる。なかには獨佛の外國語の儘を演ずるのさへある。紐育のアアギング・プレイスの劇場などは獨逸役者が演る獨逸物專門で、ここで上場されたヹデキントの『春のめざめ』は、私の滯米中に大評判であつた事を記憶してゐる。ブロオドヱイの名高い大劇場の外に、『リットル・シアタア』の類も甚だ多い。近頃ダンセイニ卿の新作を上場して以來、殊に名高くなつたポオトマントオ座の如きもこの類だ。そのほか好劇家が集まつて會員組織、倶樂部組織で、色々の新しい試みをしてゐるものは澤山あると思ふ。なかで最も珍らしいのは二三年前に、俳優としても作者としても米國の劇界には、かなり名を知られたバドラ・グヹンポオトと云ふ人が創めた、ブラムホオル座である。紐育市の二十七丁目はレクシントン街(アヹニュ)に近い所で、もとは普通の一私人の住宅であつた小意氣な家を、更に造作して、芝居小屋に直したのだ。内部の構造も薄墨色の石壁に佛蘭西がたの窓、それに山吹色の窓かけ、籐の椅子と云つた風の澁い好み。見物席の數僅かに二百三十五。これが紐育で一番小さい、そしてまた一

番風變りた『小劇場』として知られてゐる。
　藝術の上から見て新劇團のうち最も注目に値するものは、紐育のヲシントン・スクヱア・プレイヤアズの一座である。

二

　此劇團は自由劇場として色々の意味に於て最も成功したものだ。作者としてまた舞臺監督として經驗も素養もあるエドワアド・グッドマンが、千九百十五年の春に此一座の旗上げをした。どこの國にもある藝人の臭味(くさみ)と云ふものを全く離れた、眞にこの道を愛する素人(しろうと)ばかりで組織された此一座は、最初から收益の問題を度外に措いて掛かつた。男女幾十人みな心から新劇のために盡くさうといふ熱心で、すべての仕事に一致協力してゐた。この劇團が創立以來僅かに兩三年にして既に今日の成功を致し衆目を聳てしめたのは、全くこの純なる藝術の愛と一致協力とがあつたからだと言はれてゐる。唯此頃ではだいぶ經濟上にも有福になつたがため、却つて商賣本位(コマアシヤリズム)に墮落し俗化しはせぬかと憂ふる人も無いではない。
　藝術品としては立派な作物で、而も算盤勘定の上からは到底普通(なみ)の劇場が上場し得ないやうな物ばかりを選んで演(や)るのが、此一座の主意であつた。主として一幕物ばかりを演じゝゐる。最初二年間バ

ンドボックス座を借りての興行には一幕物三十種を上場し、うち二十種は米國新作家の書き下ろしたもの、他の十種は歐洲の作者のもので、この方にはアンドレイエフ、チェエホフ、シュニツラア、ヹデキント、ミュッセ、マアテルリンク等の脚本が出てゐる。なほこれら一幕物のほかに、長いものではマアテルリンクの『アグラヹエスとセリセット』、チェエホフの『かもめ(シイ・ガル)』が上場された。

次いで更に四十一丁目の喜劇(コメディ・シアタア)座に移つてから演じたのが十八種、歐米の新作のほかに、日本劇『武士道』を上場して滿都の喝采を博したのもこの間であつた。参考のため私はここに三年間所演の總目錄を擧げる。ここに在る竹田出雲の名は特に私共の興味を惹く。

Plays Produced by The Washington Square Players

1915, 1916, 1917.

AMERICAN

Akins, Zoë .... The Magical City
Anonymous .... Another Interior
Beach, Lewis .... The Clod
Bolton, Guy and Carlton, Tom .... Children
Brown, Alice .... The Sugar House
Crocker, Bosworth .... The Last Straw

Do ian, Cecil........................The Age of Reason

Gerstenberg, Alice........................Overtones

Glaspell, Susan........................Trifles

Goodman, Edward........................Eugenically Speaking, Saviors

Goodman, Kenneth and Ben, Hecht........................The Hero of Santa Maria

Hudson, Holland........................The Shepherd in the Distance

Langner, Lawrence........................Another Way Out

Lawrence, Basil........................Licensed

Mackaye, Percy........................The Antick

Massey, Edward........................Plots and Playwrights

Meyer, Josephine A. and Lawrence Langner........................The Red Cloak

Moeller, Philip........................Two Blind Beggars and One Less Blind, Helena's Husbands, The Roadhouse in Arden, Sisters of Susanna

Pemberton, Murdock........................My Lady's Honor

Reed, John........................Moondown

Smith, George Jay........................Forbidden Fruit

Stokes. Rose Pastor........................In April

White, Hervey........................Fire and Water

AUSTRIAN

BELGIAN

FRENCH

GERMAN

ITALIAN

Bracco, Roberto……………The Honorable Lover, Night of Snow

JAPANESE

Izumo, Takeda……………Bushido

RUSSIAN

Andreyev, Leonid……………Life of Man, Love of One's Neighbor.
Evreinov, Nicholas……………The Merry Death
Tchekhov, Anton……………A Bear, The Sea Gull

なほこの外に時々演劇に關する講演を有名な劇評家や學者に依頼して、これによつて劇に對する公衆の趣味と知識とを啓發するに努めてゐるなども面白い。今までの講演者のうちには、エイル大學の英文學教授フエルプス氏や、演劇に關する二三の有益な著書を公にしたクレイトン・ハミルトン氏、その他ノオマン・キルキンソン氏、ステユアト・ラオカア氏等の名が見えてゐる。

根本は會員組織で、維持員（サステイニング・メンバアズ）と稱する者は一期（シイズン）に百弗の會費を納める。その他普通會員には會費二十弗、十弗、五弗の別があつて、一期五回の興行に豫約する座席の種類で差等がある。また一

回一弗五十仙の場代を拂へば、誰でも切符は得られる。一興行は一週間で切り上げ、毎日晝（マテイナイ）と夜の二回である。

これらの收入は一切を擧げて悉く劇團の發展と改良とに捧げられる。もともと好劇家の道樂（金儲仕事で無いと云ふ意味に於て）であるから、俳優のなかにも隨分變つた人物もある。アンドレイエフの『人の一生』を上場したとき、その主人公を演（や）つたエリオットと云ふ人は、かの米國學界に泰斗と仰がれた前のハアヴアド大學總長エリオット氏の令孫であると聞いた。その他役者のなかには、素人の劇通や作者なども澤山にゐた。

今まで上演された脚本のうち米國新作家の一幕物四篇は、すでに紐育の Doubleday, Page & Co. の演劇叢書 The Drama League Series of Plays の第二十卷に收められ、

"Washington Square Plays" By Four Authors

として最近に上梓された。このなかの『ヘレナの夫』と題した一幕物は、新作家フイリップ・メイラアの筆でなかなかに面白い物であつた。

三

西洋人の演る日本劇と云ふものは馬鹿々々しい物である。フジヤマとキモノとムスメとゲイシヤと

で胡魔化したる眞の國辱物で、日本人が見に行くと慚汗背を濕す類のが頗る多い。歌劇の『バタフライ』でも『アイリズ』でも、一向感心しない。最近には紐育で大評判を取つた、コオハン・エンド・ハリス座の三十三間堂『柳の木(キロオ・トリイ)』などは餘程工夫を凝らしたものらしく、幕の代りに日本の屛風を使つたりなどして人氣を集めてゐたが、日本の芝居を見慣れた目には俗惡でとても見られた物ではなかつた。殊に近頃は紐育の劇壇で日本物を歡迎する風潮が益々盛んなやうに見受けるが、徒らに奇を追ふと言ふほか、餘り意味のないものが多いのは遺憾である。

この間にあつて獨りこのヲシントン・スクエア劇團の演つた『武士道』ばかりは、眞に藝術的良心ある者の眞面目な試みとして好評を博した。これはさきの番附にある通り、竹田出雲の『菅原傳授手習鑑』寺子屋の段を改作したもの、道具立から衣裳から皆純然たる日本芝居の通りで、『へのへのもへの』から『南無阿彌陀佛』の旗まで、忠實に演つたものださうだ。ただ臺詞はすべて英語で、『女房よろこべ、悴はお役に立つたぞ』を "Rejoice, beloved wife, our son has died the noble death" といふ流儀で行くのだから、緩急やめりはりに多少をかしな所もあつたと聞く。

私は恰もこの出し物のあつた時に、仕事の都合で紐育に居なかつたため見に行かなかつたが、その頃『タイムズ』『トリビュウン』の劇評や、演劇雜誌の類の所説を詳しく讀んで、この狂言が非常に上出來であつた事を知つて喜んだ。寺子屋は十年ほど前にも、歐洲でマクス・ラインハルトが上演して

好評を得たさうだから、日本悲劇の精神を西人に理解させるのには頗る適した物であらう。

首實檢の場は衆口一致みな 'one of the greatest dramatic moments ever conceived' と激賞してゐたが、松王を演つたのはジョオゼ・ルウバンと云ふ佛蘭西の俳優だ。以前巴里のオデォン座でかのアントアヌの自由劇場（テアトル・リイブル）にゐたのが、五六年前女優サラ・ベルナアルの一座に加はつて米國に來て、その儘とどまつた。米國の劇壇が活氣あり、自由の空氣に富めるを見て、年わかき彼は心から喜んだのである。私は後このヲシントン・スクヱア劇團がイブセンの『亡靈』を上場したとき、ルウバンがオスワルドの役を演じたのを見て、ひどく感服した。そしてあの技倆でならば、首實檢の場もさぞかし見事に演（や）つて退（の）けたらうと想像した。

四

もとはスカンディネイヸアに起つて露佛にさかえた一幕物が、英語國民の間にも行はれるやうになつたのは、まだ新しい事である。英國では最初之を普通の芝居のお添物のやうにして、curtain-raiser として演じたに過ぎなかつたが、近頃は愛蘭文學の一派が盛んに好い作を出すため、一般の劇界に重きをなすに至つたのである。そして米國の方では僅かにここ三四年來の流行で、紐育に於ては、ネイバアフッド一座（プレイヤアズ）と此ヲシントン・スクヱア一座とか、殆ど一幕物を專門にしてゐる事が俄に世人の

注意を惹いたのであつた。劇通や或は素人の好劇家が色々の新しい試（エクスペリメント）みをするためには、一幕物を四つ宛位演る事が最も都合よいのである。日本では先年森鷗外氏の飜譯集『一幕物』が刺戟となつて、一時だいぶん流行（はや）つたやうだが、例のまた、あれも一時これも一時で終るのであらうか。

一幕物は多くの點に於て短篇小說と相似た長所を有つてゐる。後者が現代小說の大部分を成してゐる如くに、前者も亦いつかは劇壇の流行物となるであらう。單刀直入先づその描かんとする對象の中樞を捉へ、毫も讀者觀客を倦ましめざる簡潔直截なる表現法を用ゐる點に於て、また或情調や氣分を暗示せんとする詩的印象法（ポエテイク・インプレシヨニズム）に於て、二者は共に長篇の企て及ばざる特色を具へた、昔の文學に例の無い近代の特産物だと言つて可い。革新の氣運旺んなる米國の劇界に、先づ此一幕物の大なる流行を見るに至つたのは、當然の結果だと思ふ。

最初はワシントン・スクエア劇團の素人じみた藝風を嘲り、その全く商賣氣を離れた興行振りを笑つてゐた梨園の人たちですら、僅か兩三年後の今日、既に驚嘆のまなこを以てその成功を見るに至つた。これは一座の人たちが協力一致して藝術のために身を捧げんとする熱意の致すところであると共に、また新しき時代の要求に迫られ、時運の順調に棹さしたからでもあつた。

演劇は文學のうちで最もデモクラティックな性質のものである。米國の劇界が羨ましきまでいつも潑剌たる生氣に滿たされてゐるのは、一つはその國柄が然らしめるのであらう。米國演劇協會（ドラマ・リイグ・オヴ・アメリカ）と稱

するもののほか、全國到る所に劇の研究團體が組織せられ、その多くは素人の好劇家がする『道樂』仕事である。紐育、ボストン、費府、市俄古などの大都會は言ふまでもなく、ミルヲキ、マディソンあたりの地にまでも、皆それぞれ土地の演劇會が設けられ、これがまた屢大學と聯絡して研究と實驗(エクスペリメント)との歩を進めてゐる。東西古今いつも賤劣卑俗なる藝人によつて藝術の尊嚴を瀆されがちなる劇界に、一道の清新の氣を導くものこそは實に此 amateur spirit に外ならぬ。なほ米國には紐育の演藝學校、ピッツバアグのカアネギイ演劇研究所の如きがあつて、絶えず新しき俳優の養成を怠らざるのみか、また高給を支拂つて歐洲の劇界からも前途有望の新進者を呼び集めるのだ。かくて他の種種の民族活動に於けると同じく、演劇に於ても米國の將來には刮目して見るに足るべき多くのものがあると思ふ。(大正七年一月『藝文』所載)

米國の大學

一

未來を思ひ理想を抱く者は先づ敎育に力を致す。米國淸敎徒は建國の初からして、物質方面の開拓に努力する傍ら、自らの後繼者を造らんがため常に思を宗敎敎育に潜めた。通俗敎育の普及に於て、米國は既に十九世紀の前半に歐洲の先進國をさへ凌駕してゐたのは、全く昔の淸敎徒にあの高遠の理想があつたからだ。

しかし私は專門として敎育事業を調査すべく米國に行つたのではない。從つて米國の敎育の全般にわたつてこれを批評しこれを說く事は、固よりその道の人を俟たねばならぬ。言ふまでもなく敎育は『人』をつくる技術である。器具器械を造る技術ですら專門技師にあらずんばこれを解すべからずとすれば、『人』を造る敎育の事は、尙さら門外漢の容喙を許すべからざるものだ。然るに日本では新しき敎育に關する何等の知識もなく、況や經驗もなき無學無理想の俗輩、或は現代の新思潮に何等の理解同情なき老人輩をして、盛んに敎育の方法に容喙せしめてゐる。世人も亦好んで彼等の言に耳を

傾くるに至つては實に奇怪至極の沙汰だと思ふ。戰術は軍人が心得てゐる、機械の事は技師が知つてゐると同じく、教育の事は無論學校教師とその關係者とのみが、知つてゐるのである。單に社會上に有力なる地位を占むといふ故を以て、かの門外漢をして猥りに育英の事に容喙せしめ、若し國家百年の大計を誤るが如き事あらば、それは畢竟今の教育家に意氣地がないからである。無學無經驗の俗輩をして自己の事業に容喙するを許したる現代教育家の罪である。

米國の教育そのものを論ずるだけの研究をして來なかつた私は、門外漢の癖に臆面もなくこれに向つて批評がましい事を言つて見る資格ありとは思はぬ。唯自分の仕事のため東部諸州の三四の有名な大學を歴遊したゝ、その間の僅かなる見聞を基として、唯米國の大學教育に就いて二三の感想を語らうとするに過ぎない。

日本の學界では獨逸にのみ學問の光が輝くもののやうに思つて、英佛はもとより米國の大學の事を少しも注意してゐないが、米國は今では例のその强大なる黄金の力を擁して、英佛獨の學風の長所を折衷し綜合して、新世界に新學風を起さうとする氣運に向つてゐる事は注意せねばならぬ。

廣い米國の事だから大學と稱するものは幾百あるか知れないが、眞に最高學府の名に背かないものは恐らく二十校位のものかと思ふ。なかでも世界第一流の大學と認めらるるものの多くは私立大學で、これらは獨逸の官僚大學とちがつて飽くまで自由獨立の精神を以て立つてゐる。デモクラシイの

思想は單に社會上政治上のみならずして、大學の學風の上にも著しく現はれてゐる。カイゼルの治下にあつてプラシアニズムを擁護し謳歌するが如き、御用學者の少いのは米國大學が誇るべき長所の一つである。

米國では到る處に純然たる私立大學が州立公立の諸大學を壓して學界に覇を稱してゐるのは、富豪の寄附と云ふ黄金力の後援があるからだ。その宏壯なる建築物の如きは到底歐洲諸大學の及ぶところではないが、教授職員の待遇、研究設備の完全に於ても、苟も物質力を以て成し得べき限りのものは十分に盡くされてゐる。單に大學のみならず、華盛頓に在るカアネギイ研究所（學術研究資金八千四百萬圓）の如き、また紐育のロックフェラア醫學研究所の如き、富豪が一個人の財力を以て大規模のものを設立し、世界の學界に貢獻する事最も大なる例である。

或皮肉屋がかう言つた。中世のむかし歐洲の諸侯が都市を攻略するに、虐殺を行ひ掠奪を恣にしてこれをおのが所領としたあとには、必ずその町に寺院の建立をする。自分の犯した罪業の恐ろしさに、かうして神樣と仲直りをしようとするのだ。米國富豪の寄附も矢張り此類で、盛んに私利私慾を逞うした揚句、病院や大學を立てて神樣の御機嫌を取るのだらうと。しかし盛んに惡辣手段を用ゐて私腹を肥しながら、飽くまでも獨占主義を固持して神樣の御機嫌をさへ取らうとしない橫着者に比すれば、勝ること實に數等である。

人は言ふ、米國富豪が惜し氣もなく巨萬の財を公共事業に投ずるのは、父祖の代から傳へられた財産ではなくて、きのふけふ儲けた所謂成金だから、金錢に對する執着が少いのだと。如何にもこれには一理ある。しかし今分限者と云ふ點から言へば、日本の富豪も米國のも全く同樣ではないか。今日我が國で富豪と稱して大きな面をしてゐる者の大部分は、僅かに二三十年來、産を積み上げた者どもに過ぎないので、徳川時代からの富豪は極めて少數である。近頃出來る成金をばかり攻撃してやるのは少し可愛相な位のものだ。而も彼等が金錢に對する執着心の强烈なる事は驚くべきもので、到底米人などの夢想だも及ばざるものである。公共事業或は救濟事業などに日本の富豪と稱する者の寄附金は、先づ私共が二錢か三錢出すのに相當する金額がその大多數を占めてゐるから滑稽だ。現在日本の教育界の最大缺陷は言ふまでもなく學校數の不足であるが、私は米國の如く富豪が獨力を以て創設し經營せる一個の大學、一個の專門學校さへ我が國にある事を聞かないが、しかも彼等の或者は口先だけでは盛んに教育問題にも容喙してゐるから有難い。

米國の黄金力の恐るべきは、その富豪が如何にして金を使ふべきかを知つてゐるからである。別莊の建築よりも蓄妾よりも、更に賢明なる正當なる金錢の使ひ途を心得てゐるからである。私はこの一例として歐洲にも未だ類例なき教育家養老資金のことを語らう。

しも小學校から、かみ大學に至るまで、學校にはとかく老朽者がたまり易い。學者や教育家の老朽

は、他の官吏の古手のやうに右から左へと使ひ途がない。さりとて米國でも日本でも、恩給位の金では到底衣食が出來るものではないから、勢ひ後進の路を塞いでいつまでも老朽がしがみ附くことになる。これは決して無理からぬ次第で、それを一概に側から彼此と非難するのは餘りに同情なき言であらう。しかし研究や教授の實績を擧げるには、何と云つても少壯有爲の人物を得る事が大切だ。學校が養老院のやうになつては、いくら設備が立派でも實績は擧げ難い。そこで此點に着目したのがアンドルウ・カアネギイで、勤續二十五年、年齡六十五歳以上の老教育家の養老金として毎年三千萬圓の金を分配する事にした。各專門學校、大學から支拂はれる恩給の外に、これだけの金が別に附加されるのである。學者の多年の功勞に報ゆると云ふ外に、これによつて學界人物の新陳代謝を容易ならしめようとした事は、さすがカアネギイだけあつて確かに卓見であつた。

二

米國の主なる大學は、同じく私立でもその發達の歴史から考へて二樣の別がある。即ち第一は獨立戰爭以前からあつたカレッヂが漸次發達して今日に至つたもので、此種のものは先づ第一にハアヴアド大學で、これは創立が一六三六年だから清教徒がはじめて移住してから十八年目、ボストンには農家が三十戸しきやなかつた頃に開校したる、米國で歴史の最も長い大學だ。これと同種のものにはな

ほエイル、コラムビア、プリンストン、ペンシルヹイニアなどの諸大學がある。これらは古くから在る英國大學の傳統（トラディション）を承けてゐる。即ち紳士（ゼントルマン）養成本位の純英國式であつたのが、後になつて時勢の要求に應じて學藝研究本位の獨逸式をこれに加へた、謂はば英獨折衷式のものである。第二は南北戰爭以後、米國國勢の伸張に伴うて新に起れる純獨逸風の大學で、これは專門學藝の研究と教授とを本位としてゐる。今から四十年ほど前に出來たジョンズ・ホプキンズ大學（首府華盛頓の附近ボオルティモア市に在る）の如き即ちその最も代表的なるもので、ここの醫科の如きは米國醫學の中心地のやうに見做されて、日本の留學生なぞも大勢ここで研究してゐる。圖書館の入口には獨逸皇帝寄贈のシルレルの半身像を飾つてある位で、組織から設備まで實に獨臭紛々たるものである。唯コラムビアやハアヴアドほどには資金が豐富でないと聞いた。元來創立の當初に他の大學と異（ちが）つて建築物に金を掛けず、人物本位にするために高俸を以て各方面から有爲の學者を迎へた。これは大學創立の企畫者としては確かに一頭地を拔いた見識で、創業以來僅かに十五年を出でずして既に此大學から出た研究報告は歐洲の學界を驚かした。ここには人文學科の方面にも多くの世界的學者がゐるが、唯餘りに獨逸學風の人ばかりを集めてゐるのが私には慊らなかつた。しかし此學校で一つ面白いと思つた事は、大學院の研究が中心になつてゐて、本科の方は寧ろ附屬物の如き觀があることだ。學生の數も本科は甚だ少く、其方は頗る振はないが、大學院の方は他の諸大學の卒業生や、或は既に多年他校で教鞭を

執つてゐた人が笈を負うてここに研鑽を續けようとする事だ。動もすれば淺薄なる實用向きの職業教育に墮し去らんとする大學教育に、眞の學藝の愛慕と尊重との精神を與ふるものは大學院であらねばならぬ。ジョンズ・ホプキンズが本科の專門教育よりも、大學院の研究の方で世界に雄視してゐる事は、私共の十分注意すべき點だらうと思ふ。(かの工科の如きは、とかく純學術の研究よりは應用實用一點張りに流れ易いので、歐米では在來之を大學の中には加へないが普通であつたが、近年此のジョンズ・ホプキンズ大學の如き、率先して工科大學を起すに至つた。)

なほ此第二種に屬すべきものには理科工科の方面で特に名高いコオネル大學の外に、クラアク大學(ボストン附近の地ウスタアに在る)がある。これはかの『靑年期の研究』で世界に名を知られたスタンレイ・ホオル氏の主宰せるものだけに、敎育學に重きを置き、地方の專門學校の敎師を養成し訓練してゐる。また資金の豐富と規模の大なるを以て名高い市俄古大學の如きも、此第二種の中の最も著名なもので、もと個人の寄附による八千萬圓を以て創立せられ、創業日なほ淺きに拘はらず今すでに學界の重鎭を以て目せられてゐる。此大學の醫科にロックフェラアが寄附した金額は實に驚くべき巨額である。

以上のほか、中部と西部の諸州には州立大學で有爲の學者を集め、近時校運の隆盛を致したものが甚だ多いが、此等の諸大學を訪ふ機會を有たなかつた事を遺憾とする。

三

米國大學の學風は今や英獨佛諸大學の長所を折衷し、更に新しき米國獨得の學風を樹てんとするの氣運に向つてゐる。即ち品性の陶冶、人物の養成を第一とせる英國風に加ふるに、獨逸式の科學教育の精神を加味したる外に、更に佛蘭西の高等教育に重きを爲せる文學的方面或は古典の趣味養成の上に十分の力を致さうとしてゐる事だ。これは日本の高等教育に於て、醫工理農の各科に赴く者のためには、事實上殆ど國語漢文の教養(カルチュア)を無視してゐる現狀に對比して、一顧に値すべき事實だと思ふ。

實用の科學教育に重きを置けば、勢ひ人物養成のために重んずべき文學教育、古典教育を閑却するの弊がある。從來多年の因襲を固持して、後者をのみ重しとして前者を顧みなかつた英國教育は、今次の獨逸との戰爭によつてその短所を暴露せられ、英國の教育界には今や革新の聲が高いのみか、開戰以來屢文部大臣の更迭を見たのも直接間接この問題に關聯してゐる。もともと英國の學風を傳承した米國の大學の當事者は夙に此點を看破して、二者の折衷を根本方針としたのであつた。

私の滯米中に――それは昨年の六月の初であつた――プリンストン大學で此問題に關する興味ある大會議が開かれて、世間の注意を惹いた。それは近年米國の教育界で頻りに功利主義の科學教育をのみ高調するの傾向甚だしく、希臘羅甸の古文(日本で言へば國語漢文)を輕んずる結果、ロックフェ

ラア教育局（ゼネラル・エヂュケイション・ボオド）とコラムビア大學の師範部が、リンカン學校と云ふ純科學教育の學校を近いうちに開校するほどまでになつた其風潮に反抗して、古典教育の主義を主張するためであつた。この科學萬能教育の首唱學は、病理學の方で世界的盛名あるフレクスナア（猶太人でロックフェラア研究所の大立物）であつた。プリンストンの大會議には、大統領ヰルソン氏を始め各方面の有力者は皆その意見を發表し、米國全體の主なる大學も亦固より皆その代表者を參列せしめた。

會議の席上で述べられたる前大統領タフト、國務卿ランシング、ルウスヴェルト、エリュウ・ルウトなど諸家の意見を、一々玆に紹介する事はその煩に堪へないが、要するに古典教育は思想の訓練、品性の陶冶、國語教育の基礎、文明の根本知識を青年に與ふる上に於て絶對に尊重せらるべきのみならず、寧ろ科學教育より先んずべきものなりとする點に於て、諸家の説は一致したのであつた。殊に私の興味を惹いた事は、多くの鐵道會社、製造會社、銀行の頭取、或は經濟界醫學界の諸名士が、古典教育の主張に對する熱烈な贊成者であつた。

さて米國高等教育の根本方針は、右の如く依然として人文（ヒュウマニズム）の學藝に重きを置くのであるが、別に時代の要求に應ずべく高級なる科學的知識を有する技術家を社會に供給するため、普通の大學以外に多くの農工業大學が設けられてゐる。かのボストンの工業學校（インスティテュト・オヴ・テクノロジ）の如きはその最も有名なるものであるが、この外にもリイハイ大學、コラムビア鑛山學校、スティイヴンズ專門學校等の如

き、純科學本位の大學が設けられてゐる。

　米國の大學で私の感心した事の一つは、それが常に社會と密接なる關係を保つてゐる事であつた。教授が講演に論文に或は調査報告によつて、一般社會を指導し啓發する事は言ふまでもないが、學生も亦會社の事業などに關する研究調査をして、重役に獻策する如き例をも屢耳にした。何がさて日本のやうに老人の跋扈する國柄ではないから、所謂青二才の言ふ事にも耳を傾け易いので、またかかる點に於ては私立大學である事が多くの便宜を持つてゐるのである。殊に米國大學の教授は政治界にも極めて密接なる關係を有するもので、最近タフト大統領がエイルの教授、ヰルソンがプリンストンの教授總長であつた事は世人の知らるゝ通り、その他代議士、政治顧問、市長、州知事等のうちには大學教授であつた人の非常に多い事は、確かに米國の特色とすべき點だらう。教授の人柄を見ても、獨逸大學に見る如き超世間的な迂儒若くは腐儒の類は少く、社交に長じ實務に明らかたる紳士の多い事も、畢竟大學と實社會との間に密接なる關係ある原因であり、また結果であらうと思はれる。

　大學と社會とが共同に仕事をしてゐる顯著な例は、ヰスコンシン大學である。これはマディソンと云ふ町に在るのだが、事實上ヰスコンシン州全體が此大學の境内（カンパス）だと言つても可い位で、ここの教授の一人が發案したバブコック牛乳試驗場（ミルクテスタア）の如き、州全體の牧畜業を補導してゐるものだ。かく一般産業界も大學を利用し、大學もこれによつて豐富なる研究材料と便宜とを得てゐる例は甚だ多い。

また研究、教授の上に於ても、常に實際界の社會的活動と云ふ事を眼中に置いて、たとへば頗る非實用的なるべき文科方面の學科に於てもこれを轉化して、卒業後直ちに操觚者たるべき者の養成に意を注ぎ、かの新聞科（スクウル・オヴ・ジヤアナリズム）なるものを設けたのも恐らく米國大學が率先者であり、また最も成功したものだらうと思ふ。現にコラムビア、ペンシルヱイニア、ヰスコンシン等の諸大學には、此新聞科は十分の實績を擧げてゐる。またハアヴアド大學でベイカアア教授の主宰せる劇文學科では、直ちに劇作家の養成をなして、既に紐育の劇界に名を成せるマッセイの如き新進の作者を出してゐる例は甚だ多いのである。

研究法に思ひ切つて新しい試みをする事も、米國大學の長所の一つである。たとへば私の專攻科目に就いて言つても在來、文學の研究と言へば大抵は考證訓詁か或は言語學的歴史的研究の外には一歩も出ないものであつたが、最近の比較文學の研究法を最も盛んに行つてゐる所は先づ米國の大學だ。此點に於ては先進の獨逸大學をすらも遙かに凌駕してゐる有樣で、英佛の如きはとてもお話にならない。市俄古大學のモオルトンは最も有名だが、ハアヴアド大學のショッフイイルド、プリス・ペリイ、アアギング・バビット、コラムビア大學のブランダア・マシュウズ、プリンストン大學のレイモンド、ケンタッキイ州立大學のマッケンジイ等諸教授が此方面に致したる貢獻は、文藝の研究に新なる道を開鑿したる點に於て、眞に學徒の尊敬に値すると思ふ。

米國の大學が詰込教育でなく、飽くまでも自由な啓發誘導の方法を執つてゐる事も亦大に學ぶべき點であらう。一學科内に於て科目の選擇が全く學生の隨意に任されてゐる事は獨逸大學も同樣であるが、教授法に於ても徒らに多くの理論を授けるよりは、少しの事を十分に咀嚼せしめると云ふ方を主眼としてゐる、かくして得た知識は實社會に出て十分に應用が利くからである。詰込式で得たる十の知識は實際上には三だけも活用(はたら)かないが、米國式では、學校で得た三の知識を十にも活用かすやうな方針である。私は科學の事には全然不案内であるから、米獨兩方に留學した東京大學の三宅(驥一)教授の所説を茲に引用しよう。

『(米國大學では)實驗を要する學問に對しては講義よりは寧ろ實驗に重きを置き、講義一時間に對して五時間乃至八時間の實驗を試みる。教授もまた學生の理解を主として親切叮嚀に反覆應答すると云ふ有樣で、科學教育に於ては米國は獨逸を凌駕してゐる、云々。』(『中外新論』大正六年十一月號)

しかし私立大學として、米國のには長所もあればまた短所もある。各大學が各その特異の學風を樹てて互に競爭し、有爲の教授を集めて實績を擧げんとするは、官立の劃一主義に於て見られざる長所であるが、その代りまた大學總長は恰も天下御免(ライセンスド)の乞食(ベッガア)のやうに、所々から寄附金を集める事にのみ忙殺せられ、學校も亦成るべく多くの學生を收容して、他校とその規模の大を競はんとするに汲々た

る有様は、私どもの感服できない點である。

四

デモクラシイは思想上に於に個人主義に立脚したものである。個人が自己の自由と個性とを尊重して他人の支配を受けないと云ふ、自立の精神がその根柢を爲してゐる事は言ふまでもない。此傾向は米國大學の學生々活の上にも著しく現はれて、先づ學資を他に仰がざらんとする獨立自營の氣風となり、また學習の上に於て徒らに教師の講義にのみ依頼せざる、自由なる自發的研究心ともなつてゐるのである。

米國の大學生には相當の家の子弟でありながら、或はまた往々にして富豪の息子でも、暑中休暇には電車の車掌をしたり、田舍の農場に雇はれたりして學資を得てゐる人が甚だ多い。これは溫泉場や海水浴場に遊惰の日を送つて女の尻を追ひ廻はしてゐる連中とは固より同日の談ではない 單に學資を得ると云ふ事の外に身體の鍛錬ともなり、また精神上には勞働の神聖を解し、社會觀察の知識、實務の經驗を得、將來の活動のために資するところは甚だ多い。社會も亦喜んでこれら學生の就業を迎へるのである。また平生學校の方でも種々自活給費の途を設け、寄宿舍舍監室の事務とか、或は食事時間だけ揃ひの服を著て給仕をさせるとか、種々の方法によつて學資の補助或は支給をする。また銘

銘外國學生に英語を敎へたり、傳道の加勢をしたりして獨立自營の法を講じてゐるものは、ハアヴアドの如き貴族的な學校ですら珍らしくない。

また學習の上に於ても、日本の學校の點取主義、ノオト萬能主義を離れて、學校以外に種々な讀書研究をする學生の多いのを私は極めて面白いと思つた。これは前述の如く學校の方針が既に日本の如く劃一的、强制的、注入一點張りの形式教育でないために自然に生ずる美風ではあるが、學生の方でもまた自立獨行の氣魄が旺んなからであらうと思ふ。

日本の學校の大講堂で授業中に耳を澄まして聞いてゐると、幾百幾十の學生がペンを走らす音はさながら戸外の雨聲を聽くやうである。教師の唇を洩れる片言隻句をも書き落さじとする努力は非常なものであるが、ボオルドに教師が文字や圖表を書きながら説明をしてゐると、その文字や圖表を一生懸命に寫し取つて、肝腎の説明は聞く遑のない學生さへ尠くない。眞に聽講のためと云ふよりは、ノオトを造り、それを棒暗記し、鵜呑みにして卒業證書を獲得することを主眼としてゐる如き觀がある。自分で參考書を讀んで研究する學生は極めて少數者で、現に私が大學生であつた時代、或學生はまだ生れてから論文なぞを書いて見た經驗は一度も無いから、卒業論文が苦しいと言つて泣き言を言つた男さへあつた。これは今から十五年ばかり以前の話で、全く當時の高等學校、大學に於ける教授法の罪で、今日では總べてがよほど進んでゐるから大學生でそんな事を言ふ者も少からうが、とにか

く試驗萬能、ノート萬能の點取根性で、眞に消化された知識も得られず、況や學藝の愛をも生じないのは事新らしく私が述べるまでもなからう。米國の大學生は殆ど筆記らしい筆記をして居ない。敎室の机も日本の學校のやうに筆記に便にした、書記の机やうなものを銘々が控へ込んではない、唯腰掛ばかりが列べてある。そしてその左の肱掛の一端に小さい板が附けてあつて、僅かに手帳に覺え書をするに便する位のものだ。大部分は敎科書と參考書とによつて學生自ら研究するので、敎師の講義は極めて簡單明瞭、唯暗示を與へ、指導をなし、質疑に答ふるに過ぎない。從つて授業時間數は甚だ少いが、學生が自宅や圖書館で讀む事を命ぜられる書籍の分量、種々の演習文(ペイパアズ)の數などは、到底我が國學生の經驗したることなき多量のものである。

日本の敎育は試驗敎育である。古本屋の店頭に立つて一瞥すると、何とか問答、何とか詳解といふ受驗參考書の多い事、世界中恐らく日本に及ぶ國は無からうと思ふが、これなぞは最もよく我が國敎育の時弊と弱點とを示してゐる。一にも試驗、二にも試驗、小學から大學まで十幾年間を點數でいぢめつける一種の人物虐待である。私の知つて居る或醫者は——その人は既う四十幾歳かの半白の老人だが、今でも惡夢に魘はれる時は屢學生時代の試驗の夢を見ると語つてゐる。元來試驗準備のためなどに勉强して得た知識は、後年になつて少しも其人の血となり肉となつてゐるのではなく、唯眼前の難關を通過し、點數を得るといふ目的の外には全く勞して益なきものである。學生間で『あたまが好

い』とか優等生だとか云ふ者の中には、ただ此得點術に一種の天禀の才を具へてゐると言ふほか、殆ど取得の無い人間が往々にして見られる。現にかの特待生だの優等卒業生だのと云ふ者の中にも、頗る怪しい者が澤山ある。これは私自らも中學から大學卒業までの十數年間、親しく見聞し經驗して知つてゐる事實だが、自分がいかほど好きな學科でも、それが學校で試驗や點數のための仕事になるのかと思へば面白くないのみか、苦しみの種になつたものだ、呪ふべきものでもあつた。殊に中學なぞは、試驗のため人を二度も三度も落第させて、頗る怪しからぬものだと今でも思つてゐる。

規則づくめの試驗教育を以て終始一貫してゐるがために、大學を卒業するに至るまで未だ學問の趣味を解しないと云ふ不幸な人が、日本には大多數を占めてゐる。これは確かに制度の罪で、此缺陷を何とかしない以上は、學校系統や年限短縮なぞは畢竟枝葉の小問題に過ぎないと思ふ。少しく極端に言へば、今の日本の學校教育は試驗萬能主義のために、折角發達すべき筈の知識慾を滅殺し、學藝の趣味を驅除するための教育たるやの感がある。此點に於て日本は確かに米國の自由主義の教育に學ぶべき多くのものを持つてゐるだらう。

これは大學教育の事ではないが、私は嘗て十幾年間、高等學校の入學試驗と云ふものに關係したが、中學卒業生の答案には實に驚くべきものがある。英文解釋、和文英譯の類はとにかく歷史の試驗答案に、維新前の勤王家のうちに高山林次郎を擧げたり、ダンテを飛行機の發明者なりと書き立てる

類は、年々歳々試驗官のために睡魔を撃退して呉れる好笑柄である。學問に對する何の興味をも感ぜしめざる五ヶ年間の中學試驗教育の結果は、かの高等學校試驗委員が年々提出する調査報告書のうちに、極めて露骨にその失敗の慘狀を語つてゐるではないか。

興味のない仕事に心身を勞する位、健康に害あるものは無い、日本の試驗教育の弊害は、米國の如き自由の空氣に滿たされた學校に例の少い、一個の學生病となつて現はれてゐる。それは卽ち神經衰弱症だ。

米國の大學生には神經衰弱が少い。日本の學生のに比較すれば殆ど無いと言つても可いほどに少い。元來神經衰弱には、青年時代の性慾問題なぞも關係してゐるので、固より原因は複雜だらうが、私はかの試驗勉強と云ふ馬鹿々々しい不自然な勉學法をも確かにその原因の一つに數ふべきものだと思ふ。生氣潑剌たるべき青年學生が顏色蒼白形容枯槁せるは、民族の將來のため眞に憂ふべき現象ではないか。ここに至つて私は遂に試驗亡國論を唱へたくなる。

米國の大學は獨逸あたりと違つて、試驗制は確かに嚴重である。每學期、每學年の終には必ず試驗がある。しかしそれは日本のやうに詰込一方の知識を考査するのでは無いがために、記憶力、棒暗記力の試驗にはならない、如何にも試驗らしい試驗である。たとひ試驗勉強をしても、日本の學生ほどには不自然に腦力を苦しませないのである。

神經衰弱は日本では學生病であるが、米國では老人病だ。米人は四十歳五十歳になると此病のために廢物同樣になる人が甚だ多い。これは日本と正反對で民族全體の活動力を表示せる極めて興味ある現象だと思ふ。卽ち日本では學生時代は神經衰弱でも社會に出てからの活動が極めて緩漫なるために、四十歳位になるとそれが恢復して、小金なぞを貯めてから所謂『四十ぶとり』と稱して、でぶでぶしてゐる。米人のは學生時代には實に霸氣横溢せる猛烈なる精力旺盛の青年であるが、一たび社會へ出るとその繁劇多忙、とても悠々閑々たる日本の社會の比ではない。既に一日の劇務に疲れ果てたる後、家に歸れば『女王』殿下のために靴をまで脫がせ、芝居のお供もせねばならぬ。五十歳位になれば大抵凹垂れざるを得ざる次第となるのだ。活動準備の學生時代に既に困憊してゐた者が、却つて社會へ出てから圍棊謠曲の片手間に仕事をして、健康を回復する呑氣さ加減と比較すれば、民族全體の活動力の上には既に非常な相違があるわけだ。同じく三十臺の日本人と米人とを比較すれば前者の生活は、まるで遊び半分か、眠つてゐるやうなものだと思ふ。（大正七年一月『日本及日本人』所載）

印象記 終

昭和四年七月八日印刷
昭和四年七月十日發行



厨川白村全集
第四卷

著者　厨川白村

發行者　山本三生
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發兌　改造社
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
振替口座東京八四〇二四番
電話芝(43) [illegible]

（長谷部製本）

株式會社秀英舍印刷